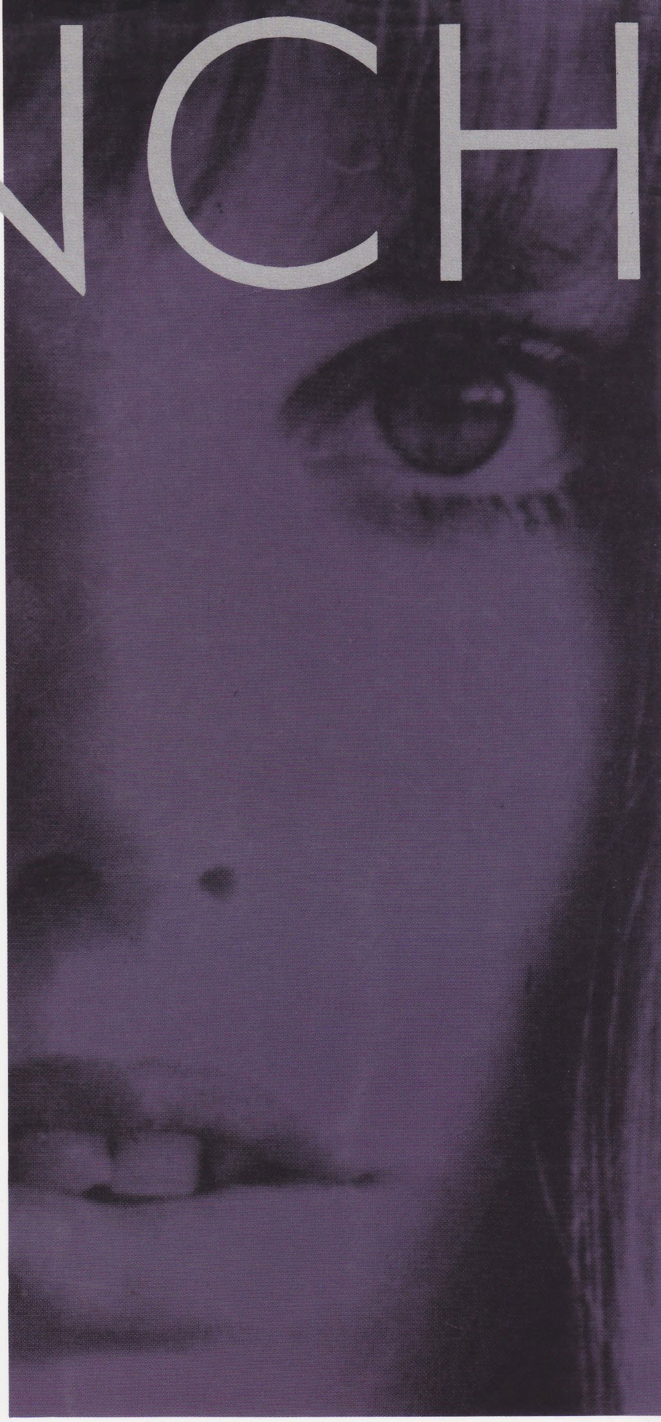
FRENCH ROCK

フレンチ・ロック集成





フレンチ・ロック集成

マーキームーン社刊

FRENCH

フレンチ・ロック集成





フレンチ・ロック集成

ROCK

マーキームーン社刊

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA OF EUROPEAN-ROCK

3

- FRANCE -

Erik Satie - 1994



序

◉

フランスのロック(フレンチ・ロック)というものを意識したのはいつ頃のことであろうか。思い起こすに、各種音楽雑誌に掲載された3つの文章が印象に残っている。

筆者の知る限り、フレンチ・ロックについて書かれた最初の文章はニュー・ミュージック・マガジン(現在のミュージック・マガジン)誌'72年12月号に掲載されたクロード岡本氏の「注目したいフランスのロック」である。氏はその中でジョニ・アリディ、アントワーヌ、ジャック・デュトロン、ミッシェル・ポルナレフの4人のシンガーの他、ズー、マグマ、マルタン・サーカス、ゴング(これらのアーティストはいずれも日本盤がリリースされた)を紹介しており、更にトリアングル、トータル・イシュー、ディナスティ・クライシスらの名前を挙げている。個人的にはこれを読んで「フランスにもロック・シーンがあるんだ。」と思った程度で、特にレコードを聴いてみたいとは思わなかった。当時まだ英米に数多くの未知のアーティストがおり、そこまで気が回らなかったためであろう。

次にフレンチ・ロックに関する本格的文章を見たのはロッカダム誌VOL.2においてである。そこでは、たかみひろし氏が「ぼくのヨーロッパ・メモリアル・第一回フランス編」と題して、かなり詳しくフランスのロックについて書いている。タイ・フォン、ヴィジターズ、ラード・フリー、マジューン、カトリーヌ・リベロ&アルプらが紹介されており、特にタイ・フォンに関しては、伊藤政則氏も他に3ページに渡る大絶賛の文章を書いている。こうしたこともあってか、彼らのレコードは日本でも発売されそれなりのセールスを記録した(ヴィジターズに関しても日本発売の予定があると書かれていたがそれは実現せず、結局、彼らのレコードはフレンチ・ロックの中でも最も入手困難なものの一つとなってしまった)。しかし、ここで紹介された他の多くのレコードは日本発売されることなく、また、輸入盤としてもほとんど入荷しなかった。当時、輸入盤店で比較的容易に入手できたのはアンジュとマグマ(主に英盤あるいは米盤)の作品ぐらいであった。

もう一つが音楽専科誌に3回('76年11月号〜'77年1月号)に渡って掲載された、やはり、たかみひろし氏の「いまプログレに何かが起こっている」(フランス編は'77年1月号)とそれに付随した佐藤斗司夫氏の「第3世界の実力グループ探訪〜ヨーロッパ大陸のプログレ必聴盤ベスト10〜」('76年12月号)である。そこでたかみ氏はアトール、タイ・フォン、トランジット・エクスプレス、エルドン等を紹介している。また、佐藤氏はアルティ・エ・メスティエリ、アレア、コルテ・デイ・ミラコリ、マクソフォーネ、フィンチらのレコードとともにピュルサーの「Pollen」、アトールの「L'Araignée-Mal」、アンジュの「Au-Déla Du Délire」を取り上げている。アンジュ以外はほとんど知られておらず、数ヵ月後、ピュルサーとアトールのレコード(両グループとも1stと2nd)が一部の輸入盤店に入荷した時は、作品の出来が良いこともあって、ファンの間で大きな話題となった。

この頃からフレンチ・ロックに対するファンの関心も徐々に高まり、それと並行してレコードもレーベル単位で相当数が入荷するようになった。ディスジャンクタ=ウラスのエルドン、ザオ、コブラのエルドン、アーバン・サックス、ラード・フリー、イサドラのZNR、ママ・ベア・テキエルスキー、アルカン=クリプトのパンタクル、モナ・リザ、ワパス、カルプ・ディアン、RCAのザオ、トランジット・エクスプレス等が次々にレコード店に並び始めた。これらのレコードを買い続けていくうちに筆者はフレンチ・ロックの虜となっていった。そこには当時既に人気の高かったイタリアン・ロックとは全く異質のサウンドがあった。ロック的感覚を失うことなく緊張感に富んだテクニカルな演奏を展開するジャズ・ロック、繊細で音にきらめきのあるシンフォニック・ロック、アーバン・サックス、ラード・フリーらのやや実験的(少なくとも当時はそう思った)サウンド、プログレッシヴな演奏をバックに唄う個性的シンガー達、更に、その後しばらくして登場してきたアール・ゾイ、ユニヴェル・ゼロ(ベルギーのグループであるが、フランスで活動し1stアルバムも仏アテム・レーベルからリリースされた)のチェンバー・ロック。今、振り返ってみてもそれらは本当に素晴らしいものであった。

そして現在。イタリア、ドイツ、イギリスのプログレッシヴ・ロック・シーンがほぼ完全に世代交替し、新世代による発展途上状態にあるのに対して、フランスでは一部ながらも流れに継続した部分がある。それ故に、フランスには今なお知られざるとてつもない作品が眠っている可能性や驚異の新作が登場する可能性が残っていると言えるだろう。

賀川雅彦

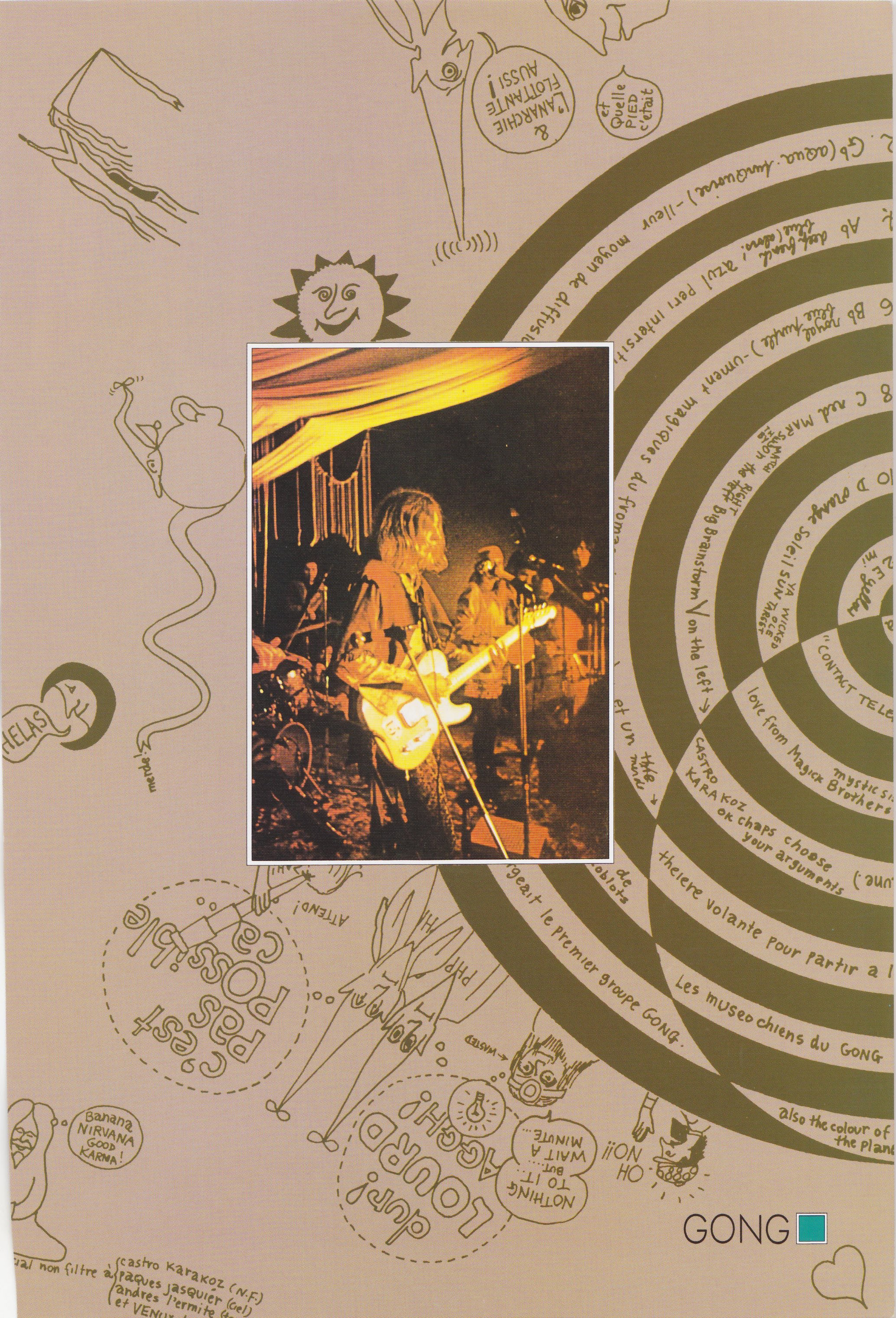




Brigitte Fontaine

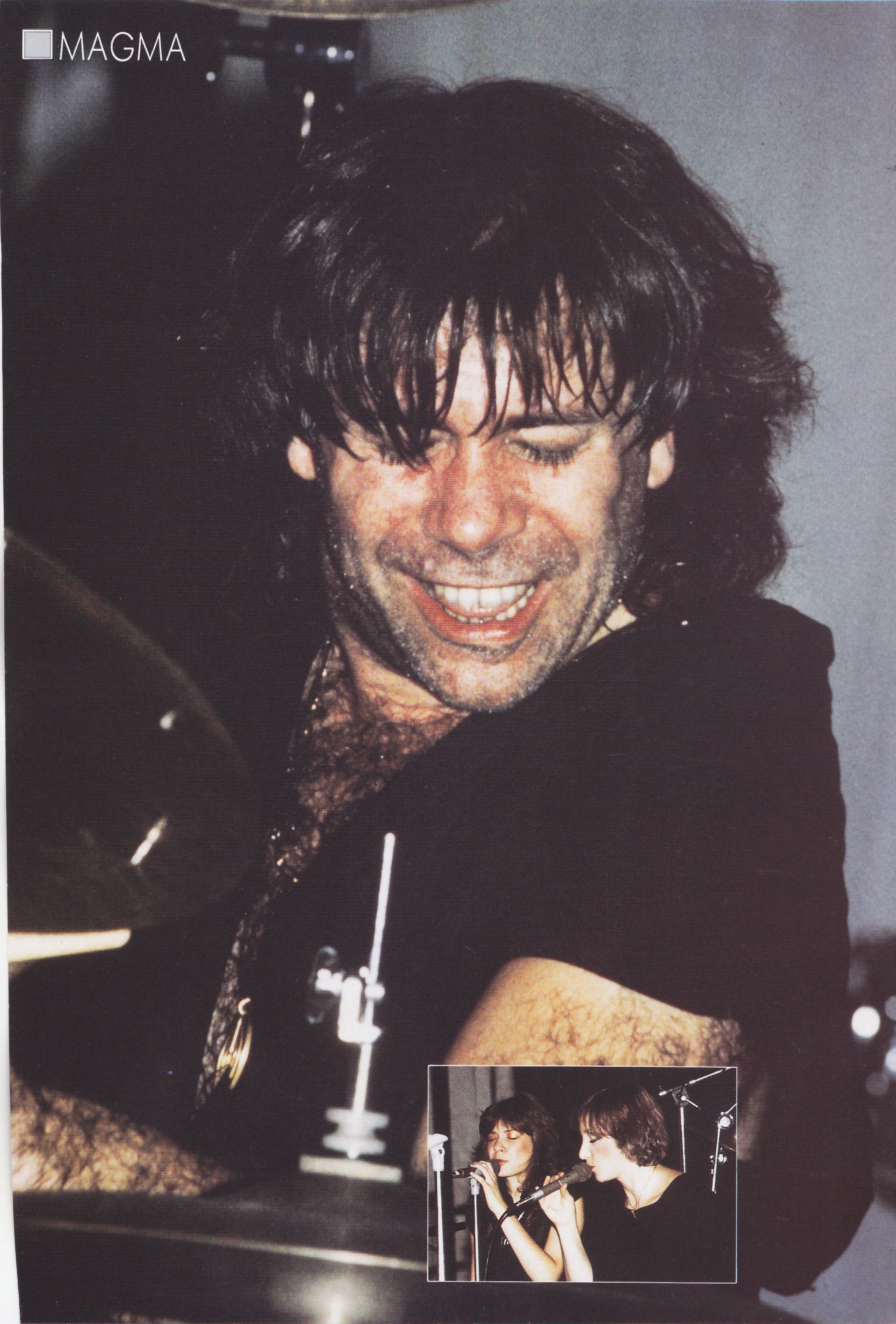




& L'ANARCHIE FLOTTANTE AUSSI!
et Quelle PIED c'était
moyen de diffusi
azul peri intersiti
-ument magiques du froma
Big Brainstorm V on the left
love from Magick Brothers
CASTRO KARAKOZ
ok chaps choose your arguments
theiere volante pour partir a l
Les museo chiens du GONG
geait le premier groupe GONG.
also the colour of the plan
HELAS
ATTEND!
C'est pas possible ça
Banana NIRVANA GOOD KARMA!
LOURD AGGH!
NOTHING TO IT... BUT... WAIT A MINUTE...
castro Karakoz (N.F.)
jaques jasquier (cel)
andres l'ermite
GONG



CLEARLIGHT

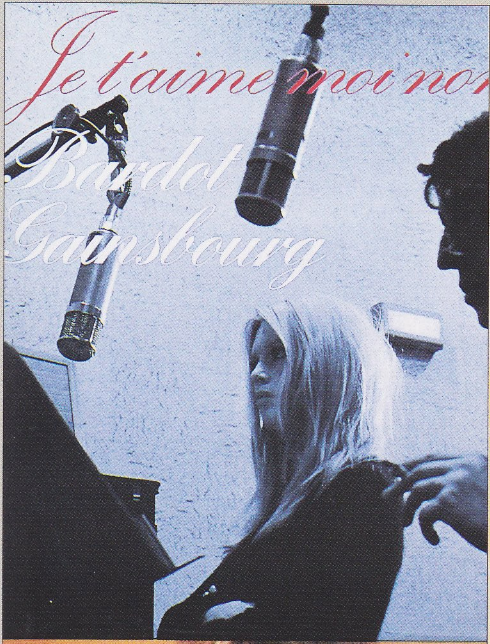




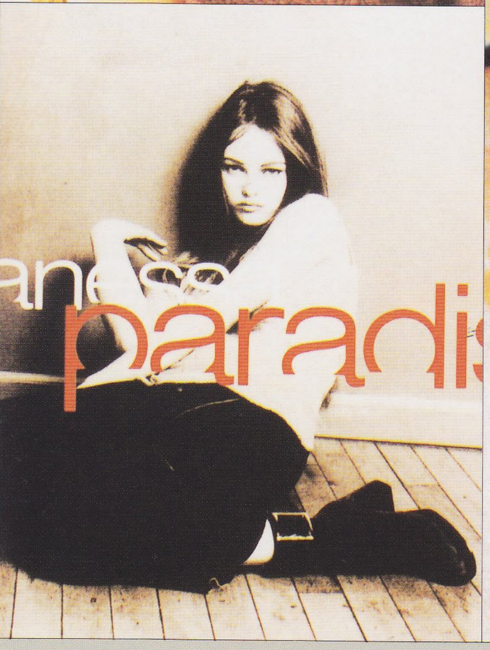
Carole Laure



Mylene Farmer




Jane Birkin




France Gall


.517
PURPLE
POP BUMPERS
GAINSBOURG

フレンチ・ロック
シングルの世界

□中島洋一

フランスについては、イギリス、イタリア程シングルは探求されていない様だが、LPよりのカット、プロモ等も含めると600枚以上のプログレ関係のアイテムが存在する。以下年代順にその一端を紹介したい。

1968年以前のYe-Ye時代には、プログレッシヴな作品は見当らないが、Catherine Ribeiro、Stellaらがアイドル・ポップ調のシングルを数枚リリースしており、その後の活動を考えると興味深いものがある。

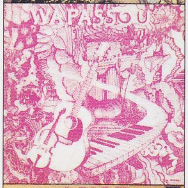
1968年のパリ5月革命以降、本格的なロック・ムーヴメントが起こり、多くのグループが登場した。当時はまだポップスとロックが未分化で、シングル主体のポップス・シーンと同様にシングル中心にリリースがされていた。MARTIN CIRCUS、TRIANGLE、CATHARSIS、TOTAL ISSUEらが多数のシングルをリリースしている。ALEPH、ROTOMAGUS、VOYAGE等シングルのみのグループも多い。この傾向は1974年迄続くが、ここではまず1971年迄のフレンチ・ロック草創期の作品について紹介したい。

1968～71年の作品は、今聴くと古めかしさを感じさるをえないが、ジャンル未分化の時期だけに意欲的な音作りが目立つ。William Sheller「She Opened The Door」、ANGE(Philipsからの初期3枚のシングルはいずれも良質、Best誌の人気投票でも揃ってベスト20入りするヒットとなった)、ALICE、Jean Musy「Le Cœur D'Une Femme」、CRUCIFERIUS、Boozの1st・4th、Lenis Chorea、MAMMOUTH「Je Peux Mourir」等が良質な作品として印象に残る。自主制作に近い形でリリースされたINTRO-VERSION、ANGE、WAPASSOU等の作品もルーツを知る上で興味深い。

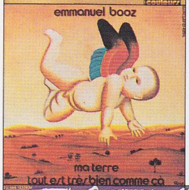
1972年5月5日、ANGEのLP「Caricatures」がリリースされた。シングル・カットを意識しないプログレッシヴなアルバムの登場である。これ以降ANGEは、1981年迄プロモ盤を除くとシングルを殆んどリリースしなくなる。アルバム中心のプログレ黄金時代の幕開けである。しかしながら、1974年頃迄はまだシングルも比較的多く、良質な作品がこの時期には多い。シンフォニック系ではVISITORS、ATOLL「Je Fais Un Rêve」、D. D. Daugherty Dawn「Did'nt Work Out」、ERGO SUM、IRIS等、ジャズ・ロック系では(筆者は未聴だが)MAGMA「Mekanik Machine」の評価が高い。シンガー系では、Wertheimer「Pour Un Peu～」、Gilles Janeyrand「Je Suis Un Passant」、ROCHE「Comme Ça Sans Rien Dire」「Un Matin Tu Reviendras」、François Bernheim「La Fontaine」(LPよりのカット、Boozの2ndと同一メンバーで製作されている)等、トラッド系ではAlan Stivell「Pop Plinn」、MOR等が印象に残っている。

1975年、TAÏ PHONGが「Sister Jane」の大ヒットと共に登場し





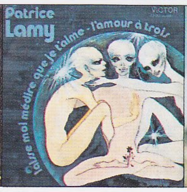






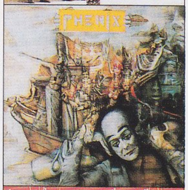


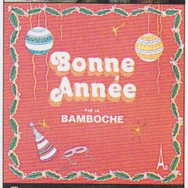


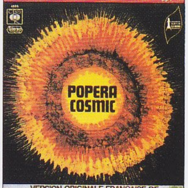




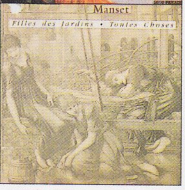




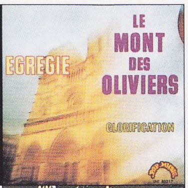


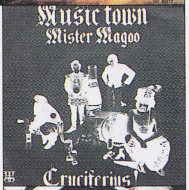


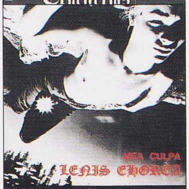


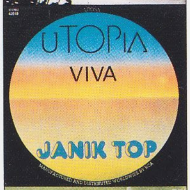


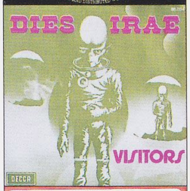
SINGLE



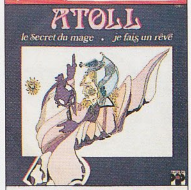


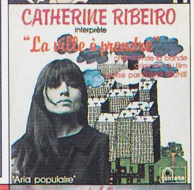




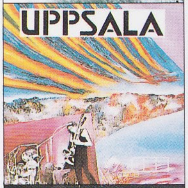


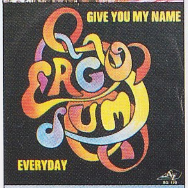


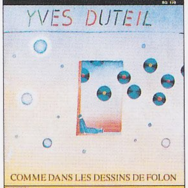


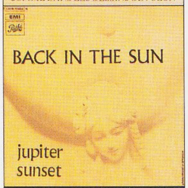


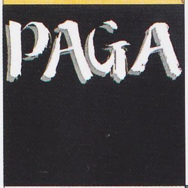












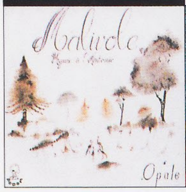
た。プログレッシヴなアルバム作りとシングル・ヒットを両立させた彼らの登場は新鮮であった。グループはその後も「North For Winter」「Games」と良質な作品をリリースするが成功せず、Goldman、Gardetの脱退、新メンバーとゲスト・キーボーディスト達によるコンサート、Goldmanの再加入を経てリリースされた「Follow Me/Dance」では、商業ベースとプログレ指向の間に揺らぐ姿が浮き彫りとなっている。以後Taïが脱退し商業ベースに引き込まれて行くが、こうした苦悩に、多くのグループがやがて落ち入る事になる。

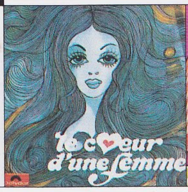
しかしながら1978年頃迄は、依然としてアルバム中心のセールスが成され、ATOLL「Paris C'est Fini」等ヒット曲も有るが、プロモ盤を除くとシングルは少ない。Janik Top「Utopia Viva」、Booz「Chanson Liberte」、Christian Gaubert「Tom」、Patrice Lamy「L'amour Á Trois」等非常に良質な作品が見られ、少数精鋭の感がある。

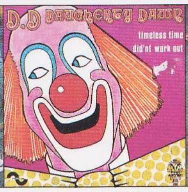
1978年以降、急速にプログレは衰退の道をたどり、商業ベースに転向してメジャー・シーンに留まるか、自主製作レベルで作品を発表するか、さも無くば解散と言った状況になって行った。商業ベースに転向したMEMORIANCE、TANGERINE、Christian Boule、Manu(Boozの変名、彼は少なくとも1984年末迄は音楽活動を続けている)、B3 Sud(André Balzer)らはいずれも成功せず、シングル1～2枚で終わっている。J. J.Goldman、MAHJUN、Rose Laurens(SANDROSE)等成功例も見られるが、Goldmanの場合には、商業ベースへの迎合とは言えないものがある。自主製作でプログレ作品を発表したのは主に地方の若手グループで、経済的な問題もあってかシングルの数は比較的多い。SOLSTICE、ATOME、ESKATON等が印象に残る程度で、全体的にレベルは低い。やがてANGI-PATCH、ANUBIS等ポップな方向へ転向して行くグループが現われ先細りとなる。

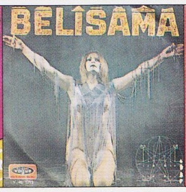
1986年にMuseaレーベルが始動して以降は、プログレは完全にメインストリームな音楽の流れとは離れ、シングルの必要性は薄れて行く。主に経済的な理由から、新人グループの処女作としてのリリースが目立つ程度で、量・質共に低調となる。LPからカットのANGE、PAGA等ベテラン勢を別にすると、ANOXIEあたりが印象に残る程度で、むしろASIA路線のOCEAN「Juste Au Bout Du Désert」の様に、メジャー指向のある方が良い出来だったりする。

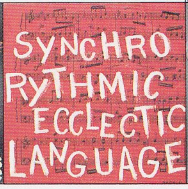
以上、フレンチ・ロックのシングルについて概観して来たが、紹介した作品は極々一部であり、他にも良質な作品は多い。又、筆者の好みからシンフォニック系に話が片寄ってしまった点についてもお詫びしたい。探求の旅はまだまだ続く…

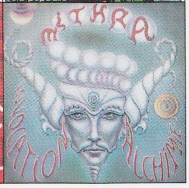




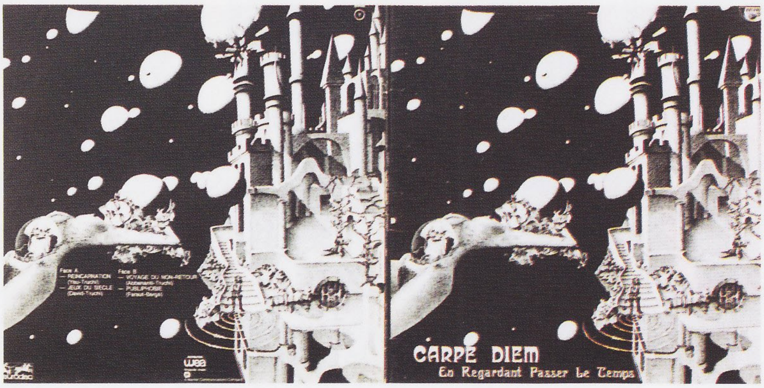




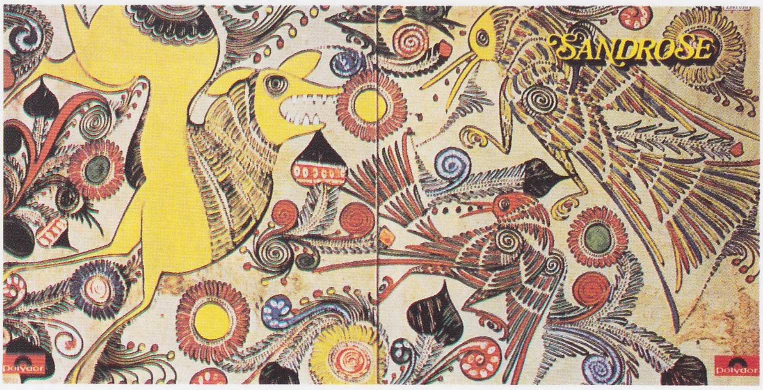




CARPE DIEM
En Regardant Passer Le Temps



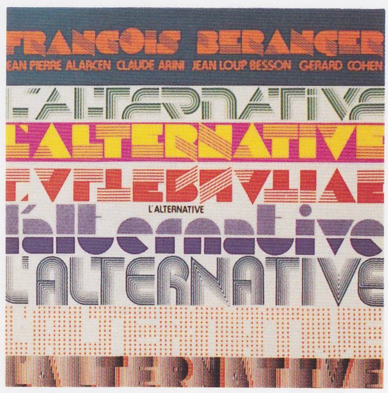
SANDROSE
Sandrose



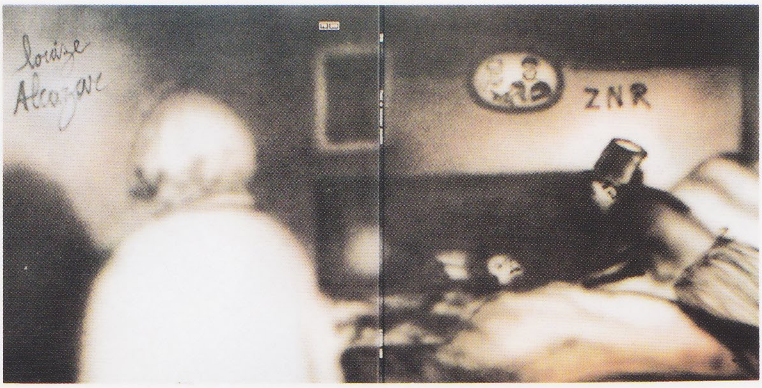
MARIPOL
Maripol

FRANCOIS BERANGER
L'alternative





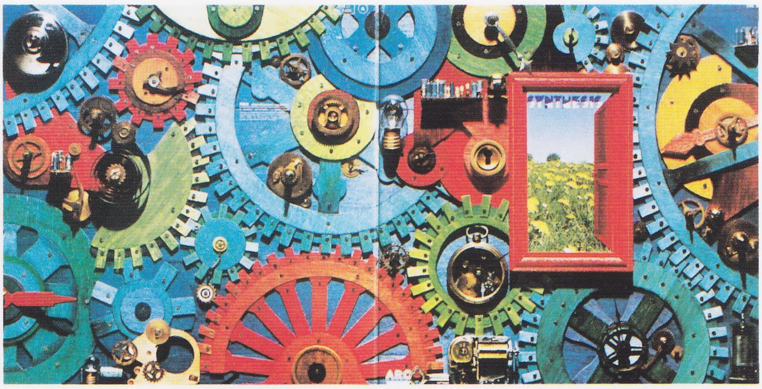
jacket art



ZNR
Traité De Mécanique Populaire



GONG
Flying Teapot



SYNTHESIS
Synthesis

MAHJUN
Mahjun

ASGARD
Tradition & Renouveau

IRIS
Litanies

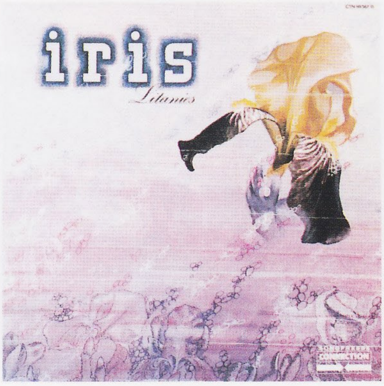
PÔLE
Inside The Dream

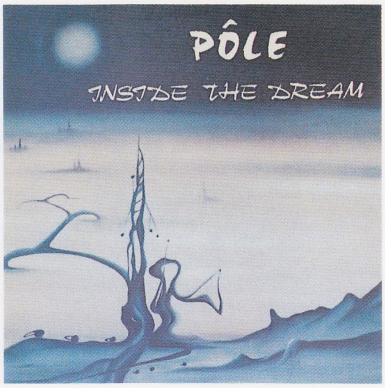
EMMANUELLE PARRENIN
Maison Rose

ANN KRIST
Cendre Et Ma Muit...

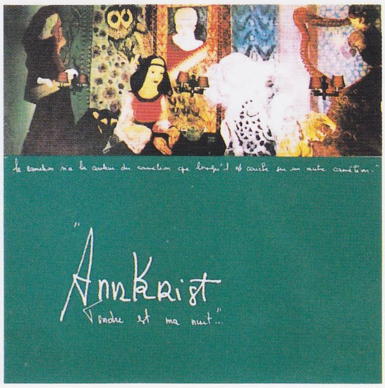












jacket art

CONTENTS

ユーロ・ロック集成③　フランス編
フレンチ・ロック集成

税込定価3600円
1994年12月20日第1刷発行

発行所●マーキームーン社
〒161 東京都新宿区下落合
3-15-18 SYビル 404
Tel：03-3954-2055
Fax：03-3954-9563
編集人●松本昌幸
発行人●賀川雅彦/山崎尚洋
編　集●古田　賢
川上史郎
中島俊也
協　力●中西暢久
坂本　理
福島恵一
松元昭徳
中島洋一
レイアウト●古田　賢
写　植●木下隆由（TKルーム）
有井康雄（アドコープ）

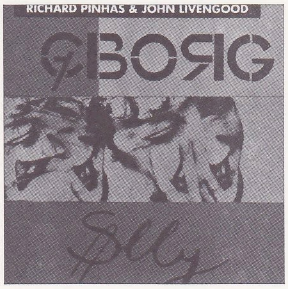
協力者（50音順/敬称略）
雨宮敏宏
五十嵐　玄
伊藤直継
いわねあつみ
宇田川岳夫
内田哲雄
江田和宏
大関善行
斎藤隆之
佐々木惇
沢田守秀
G.S.M.
島村昌樹
清水明宏
城元隆志
関口武也
高森秀幸
高山直之
武田浩一
Chihiro S.
津田幸一
東野明広
中野愛渇
中藤正邦
難波弘之
Numero Ueno
野呂利治
平野　剛
松本修一
松山晋也
宮沢幸一
三輪岳志
村本隆文
森下　忠
山田泰三
吉瀬孝行
渡部　暁
渡邊宏次

EUROPEAN ROCK COLLECTION

フランスからの美しき衝撃!!

フレンチ・プログレッシヴ・ロック・シーンにおいて最重要作ばかりを厳選したアルバム絶賛発売中!!

Now On Sale!! ●5:1特典盤プレゼント(詳細は商品または「マーキー」のバックナンバー当社広告ページをご覧下さい)



リシャール・ピナス/サイボーグ・サリー

●KICP-423・税込¥2,800

彼は復活した。本作品は「Ice land」以来の会心作だと断言出来る。全10曲、テーマを持ったトータル作品であり、「East West」以降の3作で見られたポップな側面が完全になくなっている。彼が方向性を変えたことは明白である。全体の流れは非常にドラマチックかつバランスが良い。エレクトロニクス系の作品に間々見られる偏った音作りはされておらず、一気に聴くことが出来る。●賀川雅彦(ライナー・ノーツより)



エルドン/スタンバイ

●KICP-2713・税込¥2,200

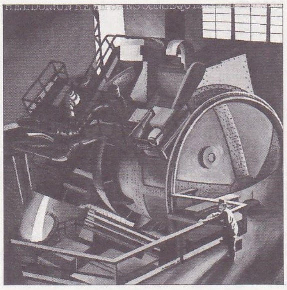
当時キングが仏から獲得したEGGレーベルで、一番評判となったアルバム。リーダーのリシャール・ピナスは、クリムズンのR.フリップと並んで語られることの多い"進歩派"ギタリスト。「組曲:ボレロ」とクリムズンの「スターレス&バイブルブラック」を思わせる名曲「スタンバイ」はフレンチ・ロック・ファンだけでなく、広くプログレ・ファンの間で話題となった。ワン・アルバムたったの3曲というのも異例!?



エルドン/インターフェイス

●KICP-2714・税込¥2,200

エルドンの数あるアルバムの中でも特に評価の高い一枚だ。エルドンは単にプログレ・ファンだけでなく、ギター・ファン、シンセ・プレイヤー等に高く認められており、いわゆるニューウェーヴ、オルタネイティヴな方向のバンドとも共通するサムシングを持ったプログレ・ユニットだ。なんといってもリシャール・ピナスのセンスがCDのすべてを支配している!



エルドン/終わりのない夢

●KICP-2724・税込¥2,200

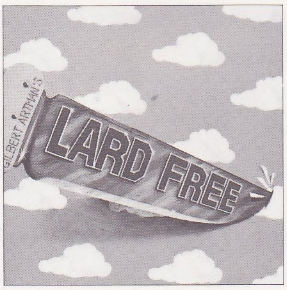
世界中に数多いキング・クリムゾン・フリーク的バンドの中でも、(美狂乱と並んで?)トップを独走中のエルドンの5枚目のアルバム。クリムゾン同様心地良いドラミングをバックに、リシャール"フリップ"ピナスのギターがここでも冴え渡っている。パターン化されたシーケンスが延々と続くうち、ピナスのマジカル・ワールドに誘われていく…。



リシャール・ピナス/クロノライズ

●KICP-2725・税込¥2,200

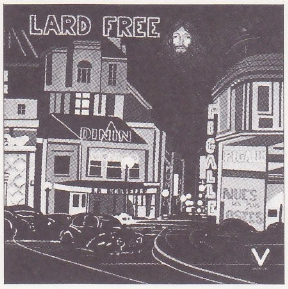
フランスの鬼才リシャール・ピナス2枚目のソロ・アルバム。エルドンのリーダー(というよりワン・マン・バンド?)として知られているピナスの本アルバムは、そのジャケットが示すモノクロームな世界そのままの無機質なサウンドが、混沌としたうねりを創りあげていく…といった当時としては、正にプログレッシヴな世界。今ならさしずめAMBIENTというのかMINIMALというのか、知らず知らずのうちに魔性のうねりに巻き込まれていく…。



ラード・フリー/ファースト

●KICP-2733・税込¥2,200

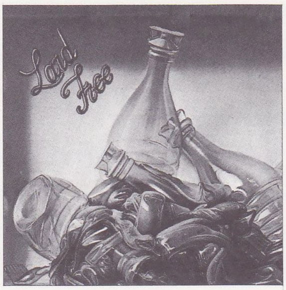
ラード・フリーはフランスのコンポーザー、ジルベール・アルマンが70年代前半から中頃にかけて主宰していた即興ユニット名である。彼は以後も音楽に止まらず様々な表現分野を踏破して、社会意識をテーマにした創作を試る。それだけに彼をミュージシャンの枠におさめきれない。これはデビュー作で、ブルースやシャンソン、実験色のあるサウンドなどが混在して、当時のフレンチ・アンダーグラウンド・シーンの息吹を感じとれる。



ラード・フリー/アイム・アラウンド・アバウト・ミッドナイト

●KICP-2737・税込¥2,200

デビュー作の延長線上にある2作目。'75年のリリース。エルドンのリシャール・ピナス(g)も参加しており、また初期のエルドンにも通じるかのようなアヴァンギャルドな空気を感じとれるアルバムだ。ラード・フリーは数人のサックス奏者から成る特異な編成で、エレクトロニックな音響効果を狙ったようなサウンドが特徴だが、やがてそれはジルベール・アルマンの次なるユニット、アーバン・サックスで本格化する。



ラード・フリー/サード

●KICP-2747・税込¥2,200

鬼才、ジルベール・アルマンの、というよりも'70年代フレンチ・アヴァンギャルド・ミュージックの傑作として、ながく記憶されるべき1作。1,2作目とは水をあけ、むしろ次なるユニット、アーバン・サックスのサウンドに近い。もはやサックスとは思えない電気処理された轟音が何重にもなって反復し、ら線状に渦巻く様は圧巻。異様にテンションが高く、時に瞑想ふうにも聴こえる。純粋に音 音響を追求した意欲作。



アトール/組曲「夢魔」

●KICP-2712・税込¥2,200

シリーズ中最高のセールスを続行中の超名盤。発売当時フランスのイエスというコピーに対して賛否両論があった。しかしいずれにしてもこのバンドのこのセカンド・アルバムがヨーロッパの頂点的な位置にあることは確かで、本シリーズ中でも、もし持ってないファンは一番最初に買うべき一枚。ギター、シンセ、ヴァイオリン、バカテク集団の空前絶後のインター・プレイとジョン・アンダースンばりのクリスタル・ヴォイスが美しい!



アトール/サード

●KICP-2723・税込¥2,200

本シリーズ中でも人気、セールス両面でトップを行くアトールのサード・アルバム。一般的にはセカンドの「夢魔」が彼らの最高作ということになっているが、むしろ完成度ではこちらの方が上とするプログレ・ファンも多い。驚異的なテクニック以上に曲の長さが光るこのアルバム特に一曲目の「パリは燃えているか?」は、間違いなく彼らの代表曲。2つのパートに分かれた「トンネル」等聴きどころいっぱいだ。

発売元:キングレコード株式会社☎03-3945-2114

WORLD DISQUE

営業時間13：00～19：30
火曜定休

404 SY Bldg. 3-15-18 Shimo-Ochiai,
Shinjuku-ku, Tokyo 161 JAPAN
Tel ：03-3954-5348
Fax：03-3954-9563



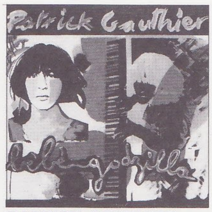
恒例年末セール 今年は2発！

12月2(土)3(日)
24(土)25(日)(時間は平常通り)
LP、CD、廃盤・貴重盤から
㊕サービス盤まで、爆発！
※12月は無休、新年は4日から営業（福袋セールやります）



← そんなこんなの'94年でした ←

ワールド・ディスク11～12月特選レギュラー・ディスク（入荷の極々一部です）



PATRICK GAUTHIER (France)

マグマ/エルドン・ファン待望の1stソロCD化が実現。C.ヴァンデ、R.ピナス、B.パガノッティら信じられない超豪華ゲストを迎えてゴーティエ節全開の快作。良質のフレンチ・メタ・ミュージックが今ここに。



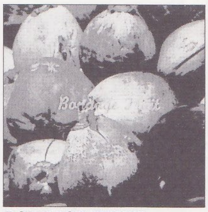
IL BERLIONE (Japan)

超絶面白楽団イル・ベルリオーネ、遂にセカンド発表。ジャズ・ロック/チェンバーといったワクに収まらない自在の音楽性と驚異の演奏力に独特のユーモアが加わって、痛快。1stを上回るハイパーな充実ぶりは凄いぞ／



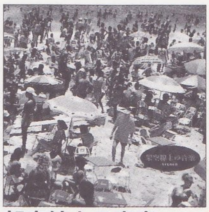
KAIPA (Sweden)

1st、2ndと再発され大好評を博した北欧シンフォニックの雄、遂に3rdも登場。若干のメンバー・チェンジを経て、初期3作中最も洗練されたサウンドを誇ります。現在も気を吐くロイネ・ストルトの輝かしい成果です。



BONDAGE FRUIT (Japan)

東京ライヴ・シーンを支える鬼怒無月(g)率いる驚異のグループ、待望の1stCD。民族色からジャズ・ロック等様々な要素を融合したパワフルな傑作。勝井祐二(vln)、高良久美子(per)、安紀(vo)ら参加メンバーにも注目／



架空線上の音楽 (Japan)

コントラバス奏者/作曲家、沢田穣治によるプロジェクト。弦の響きを主軸に自在に変化してゆく曲想は、いわゆるチェンバー・ロック的質感を有した極めてユニークなもの。EPO、ホッピー神山ら豪華演奏陣。鋭い、深い。



BRIDGET ST. JOHN (U.K.)

'71年の2nd「Ask Me～」が1stと2in1でCD化。まさに英国ならではのフォーク・シンガーの彼女、ロン・ギーシンの弦楽アレンジも手伝って最もプログレ・ファンにアピールする最高傑作がこれ。ああ、英国の幻想…



ITOIZ (Spain)

'82年にリリースされた3作目もCD化です／
あの歌心を大切にした繊細な叙情美が、よりシンプルに開花した実に味わい深い名品。1st,2ndと比べて多少地味とはいえ、そこにこそ彼らの本質を知るカギが。泣かせます。



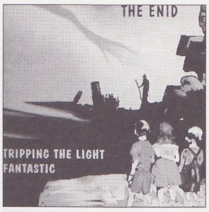
IL TRONO DEI RICORDI (Italy)

大型新人、上陸／ エマーソン/ウェイクマン直伝(?)のテクニカルかつセンシティヴなキーボード・プレイをフィーチャーした本格派シンフォニック。ウィリアム・ブレイクをモチーフに、技巧と幻想が見事に調和。力作。



MARCO ANTONIO ARAUJO (Brazil)

ブラジルのプログレッシヴ・ロックを語るに欠かせない今は亡き孤高のアーティスト。'83年発表の3rdアルバムがCD化。ロマンティックなムードの室内楽が展開されてゆく様は、彼の音楽家としての豊かさを伝えるに充分。



THE ENID (U.K.)

不屈の男、ロバート・ジョン・ゴドフリー復活／なんと新作が堂々リリース。'90年代テクノロジーとの共存を試みつつ、内容といえばこれがエニド以外の何者でもない。壮麗なるクラシカル絵巻、あの甘美な夢の世界再び。

その他の入荷

輸入CD、LP

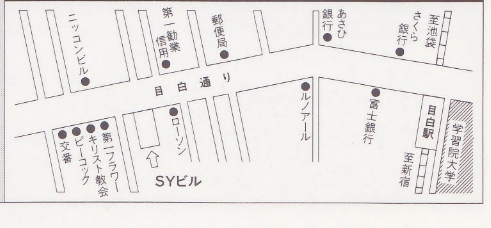
JEAN LUC CHEVALLIER/Km 5 A Bangui(New／)
POPOL VUH/City Raga(New)
新月/(タイトル未定)未発ライヴ第2弾／
DADA /城壁(仮題)幻の2nd、発売／
MIKE OLDFIELD/The Songs Of Distant Earth
ANNIE HASLAM'S RENAISSANCE/Blessing In Disguise
DAN AR BRAZ/Heritage Des Celtes(New／)
FAIRPORT CONVENTION/Jewel In The Crown
THE ENID/Alternative History Vol.1, Vol.2(未発集)
LOCOMOTIVE/We Are Everything You See
CZAR/same
CAEDMON/same
KEEF HARTLEY/Overdog, Little Big Band, Seventy～
BANCO DEL MUTUO SOCCORSO/II 13(New)
LARS HOLLMER/XII Sibiriska～&Vill Du Hora Mer
EULENSPYGEL/Ausschuss
NEU/Neu／, 2, 75
VEGO VENEGONI&CO./Rumare Rosso
IN SPE/same(旧ソ連、再発)
MONA LISA/Grimaees
VISITORS/same
WHEN/Prefab Wreckage(New／)
ALBERT MARCOEUR/Sports Et Percossions
FRED FRIH&MARC RIBOORT/same
ZARAGON/No Return
BLAKULLA/same(+3 Bunus)
NEW TROLLS/FS
FABIO CELI E GU INFERMIERI/Follia
SCARAMOUSCHE/same(80's German Sympho)
CITIZEN CAIN/Somewhere But Yesterday(2nd)
COLLAGE/Moonshine(From Polland, New)
HAIL-SNAIL/How To Live With A Tiger
FRED FRITH/Quartets
MACHIAVEL/Urban Games
RAW MATERIAL/Time Is...(From Repertoire)
LOL COXHILL/Ear Of Beholder
PRINCIPAL EDWARDS MAGIC THEATER/Soundtrack&Asmoto Running Band
ARGENT/BBC Radio 1 In Concert
MAGMA/Retrospektiw I-II
DEMETRIO STRATOS&LUCIO FABBRI/Recitarcantand
AKTUALA/Tappeto Volante(3rd)
FAUST/Morpheus In Wonderland(New!?)
STACK WADDY/same, Bugger Off／(2in1)
THE WAY WE LIVE/Tractor/A Candle For Judith
CHRIS CUTLER&FRED FRITH/vol.2 Live In Trondheim, Berlin, And Limoge
CLEARLIGHT MOSAIQUE/In Your Hands
ANYONE'S DAUGHTER/Very Last Tracks
GROBSCHNITT/same, Jumbo
KAOS MOON/After The Storm(New Band)
CANZONIERE DEL LAZIO/Miradas
JEAN-PHILLIPPE GOUDE/Ainsi De Nous(New)
V.A./Angelica '93
MUSICANOVA/Quando Turnammo A Nascere
HALLOWEEN/same, Laz
FLAIRCK/Kamers(New)
OPTICAL-8/Gender(New／)



WORLD DISQUE SET SALE LIST Vol.117
12月25日発行!!

遠方の方、忙しくて店に来られない方の為に毎月お送りしている通信販売のリストです。この中には、自信を持って推薦する推薦盤コーナー、主として在庫残りの貴少盤を安価に供給するサービス・コーナー、世界中から集めたLP/CDをストックするスペシャル・ストック・コーナー、そして入手困難な貴少盤/中古盤を扱う貴少盤コーナーがあり、充実したストックからご希望のアイテムを購入できる便利なシステムです。ユーロ/プログレッシヴはもちろん、ブリティッシュ、トラッド等のストックも扱っています。マーキーとこのリストさえあれば鬼に金棒!! お申込は簡単。200円分の切手を同封の上、最新リスト希望と明記してマーキー内ワールド・ディスク通販係までお送り下さい。最新リストをお送りします。
（通信販売のお問合せは従来通り03-3954-2055までお願いします。3954-5348はお店専用電話です。）

WORLD DISQUE：〒161 東京都新宿区下落合3-15-18
SYビル403(駐車場に挟まれた白いビル)



disk union 新宿店6F *MAGMA MAGMA MAGMA*



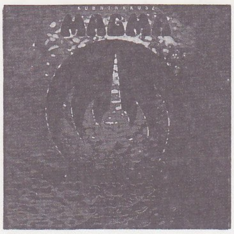
MAGMA
1stアルバム。暗黒のマグマ伝説は全てここから始まった。



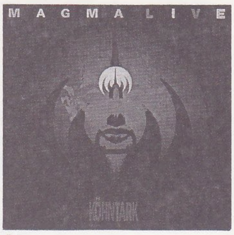
1001° Centigrades
ヨシコ・セファーの加入によりスケールアップした2ndアルバム。



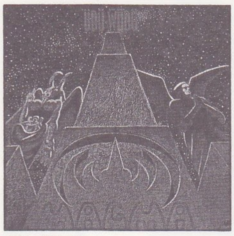
M. D. K.
至高の1曲。最高傑作。



Kohntarkosz
「MDK」と並ぶ大作。'74年の4作目。



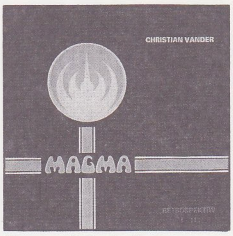
Live
史上最強のライヴ・アルバム。だまって聴け。



Udu Wudu
名曲「De Futura」を収録した6作目。



Attahk
タイトル通りアタックしてくるような1曲目が凄まじい7作目。



Retrospektiw I - II
'80年に行われた結成10周年記念ライヴ。凄い。



Theatre Du Taur Concert 1975
マグマ・ライヴと並ぶ強力な1枚。MDK、コンタルコス収録。



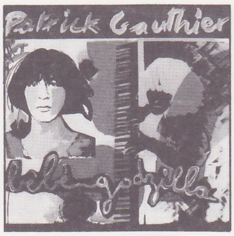
Mekanik Komandoh
「MDK」以前に録音された「MDK」。



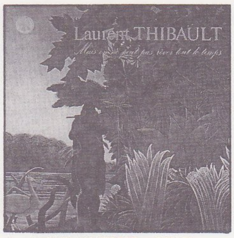
WEIDORJE
バガノッティ、ゴーティエが中心となって結成された、'78年の名作。



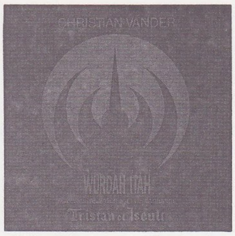
JEAN PHILLIPPE GOUDE
マグマ周辺の中でもトップクラスの完成度を誇る名作。'80年のソロ。



PATRICK GAUTHIER
物凄い豪華メンバーで制作された'81年のソロ。本当に凄い。

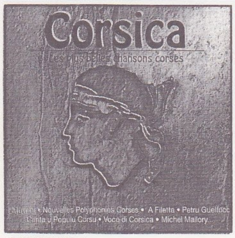


LAURENT THIBAULT
マグマ周辺作のプロデューサーとして知られるローラン・ティボの'79年作品。フランシス・モーズ参加。

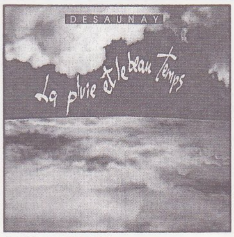


CHRISTIAN VANDER
映画音楽として使用されたソロ・アルバム。「MDK」タイプの大曲。

disk union 新宿店4F *辺境としてのフランス*



CORSICA
エクトル・ザズーも魅了されたコルシカ島のポリフォニー音楽の編集盤。



DESAUNAY
南仏の陽光あふれるアコースティック音楽。



SKOLVAN
ブルターニュの強力トラッド・ダンス・バンド。



ALAN STIVELL
ブルターニュの巨人。旧譜もほぼ全てCD化。



TOUFIC FARROUKH
同時代無国籍都市としてのパリ。アラビアン・ジャズ・フュージョン。

多民族、文化融合の場所としてのフランスという視点で、ブルターニュ、オクシタンのトラッド、フランス在住のいろんな人種の音楽を扱っています。

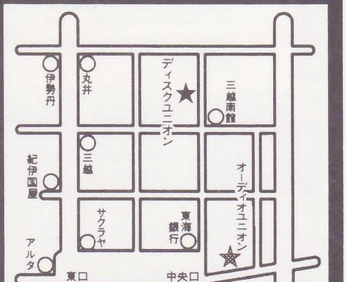
disk union ディスクユニオン新宿店

6F：プログレッシヴロック専門フロア

Phone:03-3352-2691
Open : 11:00AM ~ 8:00PM
(Holiday ~7:00PM)

Progressive Rock Shop
Vinyl & CD　Used & Import
diskunion Shinjuku
3-31-4 SHINJUKU,SHINJUKU-KU
TOKYO 160, JAPAN
Phone:03-3352-2691

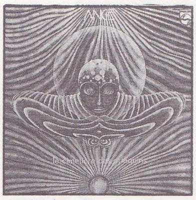
1994.12.31
11:00AM ~7:00PM
ラストデイバーゲン
&
オールナイトバーゲン
10:00PM ~
5:00AM (予定) 1995.1.1



disk union 新宿店・横浜店

フレンチ・ロック不滅の名盤群

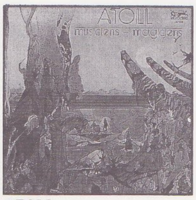
～フレンチ・ロック集成　発刊記念の大特集～



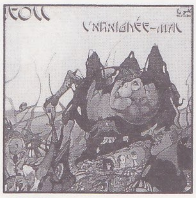
ANGE / Le Cimetiere Des Arlequins



ART ZOYD / Phase IV



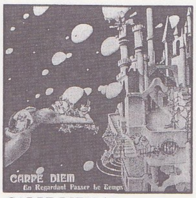
ATOLL / Musiciens Magiciens



ATOLL / L'araignee - MAL



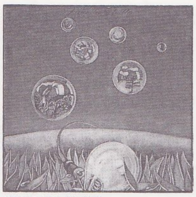
ATOLL / Tertio



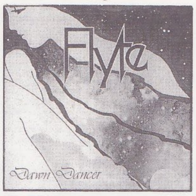
CARPE DIEM / En Regardant Passer Le Temps



CATHERINE RIBEIRO + ALPES / Libertes



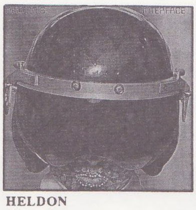
CLEARLIGHT / Forever Blowing Bubbles



FLYTE / Dawn Dancer



MONA LISA / Le Petit Violon De Mr. Gregoire



HELDON / Interface



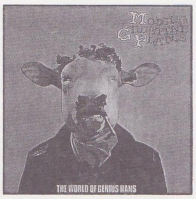
HELDON / Stand By



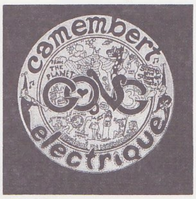
LARD FREE / I'm Around About Midnight



LARD FREE / III



MOVING GELATINE PLATES / The World Of Genius Hans



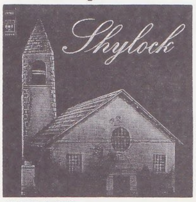
GONG / Camembert Electrique



GONG / Continental Circus



DASHIELL HEDAYAT / Obsolete



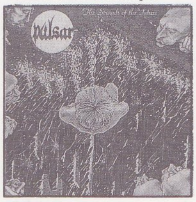
SHYLOCK



STEPS AHEAD



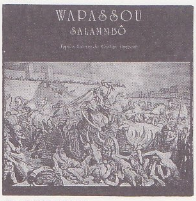
PULSAR / Pollen



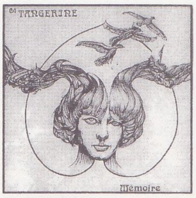
PULSAR / The Strands Of The Future



PULSER / Haloween



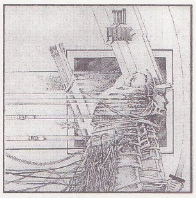
TAI PHONG



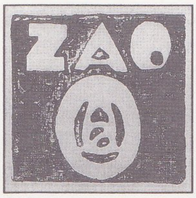
TANGERINE / Memoire



VISITORS



WAPASSOU / Salammbo



ZAO / Z=7L



ZAO / SHEKINA



ZNR / Traite De Mecanique Populaire

プログレッシヴ・ロック LP・CD・雑誌・パンフ

高価買取中

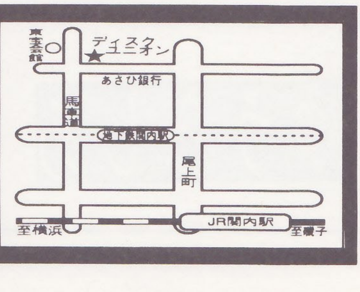
プログレッシヴ・ロックのLP・CD・雑誌・パンフをご処分の際は、
ディスクユニオン新宿店(担当：竹川)、横浜店(担当：高野)をご利用ください。
廃盤、貴重盤は特に高額にて買取りいたします。
遠距離の方もご利用いただける出張買取のシステムもございます。詳しくはお問い合わせください。

disk union
ディスクユニオン 横浜店

Phone : 045-661-1541

営業時間：午前11時～午後8時
横浜関内馬車道「アート・ビル」2F・3F

横浜地区
トップクラスの
ハード&ヘヴィ
プログレ
専門コーナー
品揃え充実!!



FRENCH ROCK

GONG

□坂本 理

1967年9月、イギリスへの再入国を拒否されたオーストラリア生まれのギタリスト、デヴィッド・アレンは、やむなくSOFT MACHINEを抜け、パリに戻ることになる。そこで彼はエコー・チェンバーのオペレーターを引き連れ、クラブでギターの演奏を始めた。やがてスペイス・ウィスパー(過剰なエコー処理を施した即興的ヴォーカリゼイション、或いは一種の読経)のジリ・スミスとジスカ・バウム、及びフルートのローラン・スタンドレイが加わり、バンドの体裁をなして行った。

1968年、学生達によるパリ革命が起こると、アレンとスミスは警察当局に追われスペインに逃亡する。スペインのマヨルカ島のデヤで、ふたりはBANANAMOONというバンドを率いて活動したと言う。

1969年、パリに戻ったふたりはBYGレコードと契約し、GONGを結成する。9人編成で発足したGONGは、同年9〜10月、「Magick Brother Mystic Sister」をレコーディングし、翌年発表する。SOFT MACHINE時代には殆ど表面化していなかったアレンの音楽性がここでは既にハッキリと打ち出されている。とは言っても、バール・フィリップスのような先鋭的なジャズ・ミュージシャンまで参加している割には微笑ましい稚拙な演奏を繰り広げており、まだサイケデリック・ミュージックの域にとどまっている。

メンバーはその後縮小して行ったらしいが、BANANAMOONでの活動も並行しており(この辺の事情は煩雑でよく判らない)、1971年にはアレン名義で「Bananamoon」を発表する。GONGのメンバー達に混じって、ロバート・ワイアットやピプ・パイル等カンタベリーのミュージシャンも参加しており、ライヴではヒュー・ホッパーも加わっていたらしい。カンタベリー系の人脈によるセッション的な性格の強いバンドであり、音楽的にもちょっととりとめのない印象がある。GONG独特のスペイシーなイメージも少なく、ケヴィン・エアーズの音楽に似た雰囲気を持っている。今から見ると脇道にそれたような内容だが、しかし当時アレンがGONGとBANANAMOONのどちらにウェイトを置いていたかは俄には判断しかねる。

とは言ってもBANANAMOONのようなバンドが長続きする筈もなく、1971年、GONGとして「Continental Circus」、「Camembert Electrique」の2枚のアルバムが発表される。この時点で漸くGONGはバンドとしてのまとまりを見せ、その特異な音楽性を確立する。前者は映画のサウンドトラックであり、全4曲、しかも内2曲は同じ曲のヴァージョン違いという長尺の演奏ばかりであり、必然的にインストゥルメンタル・パートを重視したジャズ・ロック色の強い内容になっている。演奏力の向上には目を見張るものがある。後者は最もGONGらしい内容の最初の録音と言えよう。スペイシーで、昂揚感と興奮を煽りながらも、決して深刻にならず、優しさと遊び心に満ちている。非常に充実したアルバムだ。


●「Camembert Electrique」期

1973年5月、イギリスの新興レーベル、Virginレコードより発表された「Flying Teapot」は3つの意味で重要なアルバムだ。まず、初めて彼らが本格的にイギリスに紹介されたということ。既に1971年冬にはイギリス・ツアーを行っており、またピプ・パイルやローリー・アラン、チャールズ・ヘイワード、或いはケヴィン・エアーズといった多くのカンタベリーのミュージシャン達が入れ代わり立ち代わりバンドを去来していたが、これを機に彼らは本格的にフランスとイギリスの両国に股がった活動を展開して行くことになる。そして、このアルバムが彼らの代表作である"Radio Gnome Invisible"3部作の第1作目であるということ。以後彼らは自らの特異な音楽性を活かし、童話的なSFファンタジーの世界を表現して行く。3部作の中では一番おとなしいアルバムであり(特にB面が散漫に聞こえる)、今一つ物足りない気もしないではないが、自らの表現に一つの指標を与えたことによる余裕に満ちた求心性、ある種の深さが聴き取れる。そしてもうひとつ、このアルバムよりギタリストのスティーヴ・ヒレッジが加わったということ。KHANを率いていたヒレッジは、GONGに加わるとアレンのギター演奏及び彼の音楽性を見事に自家薬籠中の物とし、演奏面でのリーダーシップを握って行くことになる。まだこのアルバムでは頭角を現していないが、明らかにアレンよりも遥かに巧いギタリストであるヒレッジの起用はやがてアレンの思惑以上のテクニック指向をバンドにもたらして行く。

波に乗りかけていたバンドを1973年春、アレンとスミスは2ヵ月間離れてしまう。ドラッグと手を切るための期間だったらしい。残されたメンバー達はストラスブール音楽学校で打楽器を学んでい

たピエール・モエルラン(ds)らを迎えてPARAGONGを結成し、ケヴィン・エアーズの曲などを演奏してボスの帰りを待つことになる。

結局このメンバーの殆どが6月のGONG再開に参加したが、まさしくこのメンバー達がGONGの全盛期を築き上げた。特にモエルランとイギリス人ベーシスト、マイク・ハウレットのリズム・セクションが強力であり、スペイシーで昂揚感溢れる、それでいて軽妙で優しさに満ちたGONG本来のエキゾティックな音楽世界はそのままに、バンドはより高度な音楽性を打ち出した一流のジャズ・ロック・グループへと成長を遂げてしまった。

1973年11月に発表された「Angel's Egg」、1974年11月に発表された「You」はそれぞれ"Radio Gnome Invisible"3部作の2作目と3作目に当たるが、「Flying Teapot」に比べても一段と演奏力がアップしており、また、メンバー各人の個性が作曲にも反映され、聴き答えのあるものになっている。飽くまでもアレンとスミスが全体のサウンドをコントロールしているのだが、それにもかかわらずメンバー各人の音楽性が無理なく盛り込まれ、バランスよく一つに纏め上げられている。この時期の彼らがいかに充実していたかはライヴを聴くともっとよく判る。1977年に発表された2枚組ライヴ・アルバム「Live etc.」には1973年8月、9月、1974年1月に行われた彼らの演奏が収められている。また、4グループによるオムニバス・ライヴ・アルバム「Greasy Truckers Live At Dingwalls Dance Hall」には1973年6月、10月の演奏が収められている。また、近年、当時の未発表ライヴが2枚も発売されている。いずれも見事な熱演であり、これらを聴いた後ではスタジオ盤に物足りなさを覚えてしまう程だ。基本的に彼らはライヴ・バンドだったと言っていい。緻密さと奔放さを兼ね備えた彼らのプレイは本来ライヴでこそ最も効果的に実力を発揮される筈だからだ。


●"Radio Gnome Invisible"3部作期

1975年4月、いよいよ絶頂期を迎えたバンドをアレンとスミスは抜けてしまう。スミスはふたりの息子の面倒を見るためだったようだが、アレンはどうやら肉体的精神的にバンドに付いて行けなくなったらしい。メンバー達が巧くなり過ぎたといった発言も残している。

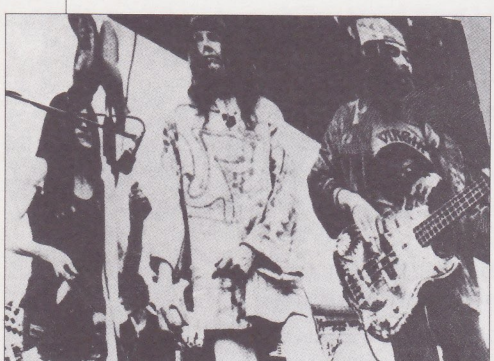
とうとうリーダー達に逃げられてしまったGONGはこれ以降複雑な展開をして行くことになる。

あまりにも個性的な音楽性を身に付けたメンバー達は、創始者がいなくなったからといってすぐに音楽性を変えることも出来ず、取り敢えず音楽的なリーダーシップをスティーヴ・ヒレッジに一任し、ちょうど4月に初のソロ・アルバム「Fish Rising」を発表したばかりのヒレッジのバック・バンドを兼ねたようなライヴ活動を続ける。ヒレッジは最も正統的なGONGサウンドの継承者であり、このアルバムには当時のGONGのメンバーのほぼ全員が参加。デイヴ・スチュワート(kbd)とリンゼイ・クーパー(bsn)も参加しており、非常に充実した内容の傑作が出来上がった。複雑さと判り易さ、変拍子とノリのよさ、繊細さと豪快さ、主役としてのギター演奏と見事なバンド・アンサンブルが両立した抜群のバランス感覚を持った作品だ。

若干のメンバー・チェンジを経てGONGは1976年2月、アルバム「Shamal」を発表するが、これまでに比べると妙に落着き払った心地好いサウンドになっており、最早自分がいる必要はないと感じたヒレッジは1975年12月、バンドを去ってしまう。ヒレッジは既に自らの音楽の展開に自信を持っていたのだろう。自分のバンドを率いて次々と素晴らしいアルバムを作って行くことになる。

残されたGONGを今度はピエール・モエルランが率いて行った。そもそもモエルランはあまりGONGというバンドを居心地よく思っていなかったのではないかと思われる節が見られ、実際何度となくバンドを離れては戻って来ている。そんな彼がGONGを率いて行くのは彼自身も抵抗があったようだ。バンド名を変えることも考えたらしい。新たにギタリスト、アラン・ホールズワースを迎えたGONGは、向かう所敵なしのテクニック集団となり、以後フュージョン街道をまっしぐらに突き進んで行くことになる。と言っても、ホールズワースは「Gazeuse!」一作で抜け、その後はアルバム毎にミック・テイラーや、マイク・オールドフィールド、ダリル・ウェイ、ディディエ・ロックウッドといった一流のミュージシャンをゲストに迎え、バンド自身パーカッションを全面的にフィーチュアした非常にユニークなサウンドを探究して行く。1979年からはバンド名をPIERRE MOERLEN'S GONGに改めており、かつてのGONGとは違うバンドなのだということを明確にしている。モエルランはマイク・オールドフィールドやスウェーデンのグループ、TRIBUTE等との対外的な活動も盛んだが、その所為か一時自分のバンドの方の音沙汰がなくなっていた。しかし、1989年、久しぶりのアルバム「Second Wind」が発表され、彼らの健在ぶりが明らかになった。







一方、1975年4月にGONGを離れたデヴィッド・アレンとジリ・スミスは再びスペインのマヨルカ島、デヤに落ち着き、地元のEUTERPEというバンドと手作業による録音を行う。こうして出来上がった1976年5月に発表されたアレンのソロ・アルバム「Good Morning」はGONGに比べるとずっとアコースティックで、フォーク的なサウンドを打ち出しており、非常に優しさに満ちた美しい音楽が胸を打つ。とても4チャンネル・レコーディングとは思えない深みのある音も特筆していい。続いて発表された「Now Is The Happiest Time Of Your Life」も既に解散してしまったEUTERPEの元メンバーを中心としたスペインのミュージシャン達を迎えての録音であり、やはり同傾向の素晴らしい作品だ。

こうした内省的なアルバムを作りながらも、アレンは次なる飛躍の機を窺っていた。1977年5月28日、パリに於いてファン達の企画で途轍もないコンサートが開催された。全盛期のGONGを1日だけ再結成させ、しかもGONGの派生バンドも一堂に会して演奏を披露するというもので、スティーヴ・ヒレッジのバンドやSTRONTIUM 90なども参加して延々12時間に渡って様々なGONGが演奏を繰り広げた。この時の再結成バンドの演奏は2枚組ライヴ・アルバム「Gong Est Mort」として発表されている。このコンサートをきっかけにアレンは再びバンド活動を再開することにする。偶々知り合ったパンク・バンド、HERE AND NOWにジリ・スミスともども加わって、PLANET GONGとしてイギリス及びフランスでライヴ活動を行う。彼らのまさにパンク版GONGサウンドはライヴ・アルバム「Floating Anarchy 1977」で聴くことができる。

翌年アレンは10年連れ添った伴侶、ジリ・スミスと別れ、アメリカに渡る。この混乱期にソロ・アルバム「N'existe pas.!」が録音されている。これはクリス・カトラー(ds)やジョージ・ビショップ(sax,clr)、ペプシ・ミラン(g)らを迎えて制作されており、様々な音楽が渾然一体となって他に例のない均衡を生み出している。過渡期の作品ではあるが、個人的には最も気に入っているアルバムだ。

アメリカに渡ったアレンはZU BANDの連中と組んでNEW YORK GONGを結成する。これはPLANET GONGのニューヨーク版といった性格のバンドであり、1980年にはアルバム「About Time」を発表する。NEW YORK GONGはある意味で極めて重要な役割を果たした。それまで潜在していたアメリカのアンダーグラウンドなカンタベリー・ミュージック信奉者達を目覚めさせたのだ。期せずして元HENRY COWの連中も同じシーンに触媒として働きかけており、ここから生まれた新しいムーヴメントは以後信じられない程の広がりを見せて行くことになる。このNEW YORK GONGがMATERIALへと成長を遂げて行ったことを指摘するだけでも充分にその意味が判るだろう。


●「Shamal」期


●「Gazeuse!」

NEW YORK GONGのアルバムに用いた録音のリズム・トラックだけを取り出し、それを再編集したテープをバックに、アレンは〈The Divided Alien Playbax Performances〉のタイトルでアメリカ及びカナダに於いて28回に及ぶ一連のソロ・コンサートを開く。これは音楽だけではなく、ヴィデオ映像も使った総合芸術としてのパフォーマンスだったらしい。その音楽部分のスタジオ・レコーディングが「Divided Alien Playbax 80」として発表されている。なるほど、一見陳腐なアイディアではあるが、殆ど原型をとどめぬ再構築の効果は予想以上のものだと言えよう。

1981年、アレンは21年振りにオーストラリアへ帰国する。翌年には殆どひとりで多重録音して作り上げた「The Death Of Rock And Other Entrances」、パフォーマンス・アーティスト、デヴィッド・トリーとの共作「Ex;Stop/Don't」を発表。1983年にはアメリカ時代に行ったレコーディングをもとにしたと思われるミニ・アルバム「Alien In New York」を発表した後、なんと音楽を廃業してしまう。以後ニューサウスウェールズ州北部の森林地帯で隠遁生活を送りながら、音楽治療の研究などを行っていたと言う。

1978年、アレンと別れたジリ・スミスの方は、まずアレンのプロデュースで初のソロ・アルバム「Mother」を発表しているが、これはスペインで録音したものを中心に、1972年頃の録音も取り混ぜて構成されているようだ。このアルバムのプロモーションのためスミスは新たにMOTHER GONGを結成し、元HAWKWINDのニック・ターナーが元GONGのミュージシャン達と結成したSPHYNXと合同でイギリス・ツアーを行った。当初MOTHER GONGはセッション的性格が強く、メンバーが殆ど固定しておらず、HERE AND NOWのメンバーや、クリス・カトラー、元GURU GURUのアックス・ゲンリッヒ、あるいはヒュー・ホッパー、ローリー・アラン、ピプ・パイル等々のミュージシャン達が参加した。また、デヴィッド・アレンもツアーによっては参加していた。

1978年10月には、NEW YORK GONGと並んでNEW YORK MOTHER GONGというバンドもステージに立ったらしい。この年の暮にはSPHYNXのハリー・ウィリアムソンが加わり、以後MOTHER GONGはジリ・スミスとウィリアムソンの双頭バンドの性格を帯びて行く。ニック・ターナーやデイヴ・アンダーソンまで巻き込んで制作された彼らのファースト・アルバム「Fairy Tales」は1980年に発表されたが、これは非常にフォーク色の強い内容であり、GONGファミリーの作品としては異質な印象も受ける。アレンの手が一切加わっていないスミスの音楽がここで初めて披露された。このアルバムのプロモーションで今度はアメリカ・ツアーが行われた。

1980年スミスはウィリアムソンと結婚している。そしてこの年よりMOTHER GONGは新たな局面を見せて行く。レギュラー・バンドとしてメンバーを固定し、"Robot Woman"の3部作にとりかかったのだ。これはSF仕立てのコミカルなドラマだが、"Radio Gnome Invisible"とは大分趣が異なり、ファンタジー色はまったくない。コミカルではあるが、平和やヒューマニズム、反軍事力、反性差別といった非常にシリアスなテーマを採り上げた極めてメッセージ色の濃いストーリーだ。こういったメッセージ性は1980年代後半に入って再び市民権を得るに至っていることから考えれば、あながち古臭いとも言えない訳だが、表現方法としてはやはりあまり洗練されているとは言えまい。1982年、「Robot Woman」、「Robot Woman 2」の2枚のアルバムを発表し、スミスとウィリアムソンはふたりでオーストラリアへ移住してしまう。

オーストラリアへの移住は迫り来る核戦争への恐怖が理由だったと言う。メルボルンでウィリアムソンはレコーディング・プロデューサー兼エンジニアとして活動を始め、今もオーストラリアの民族音楽や地元のバンド、あるいは吟遊詩人達の録音を数多く紹介している。そうした中にはジリ・スミスやデヴィッド・アレンのゲスト参加したものも含まれている。

これらの活動はあまりにもローカルなものだったので、彼らの活動は実質的には地下に潜行してしまった。音沙汰のないまま月日を重ねていたのだが、1989年、突然様相が一変する。GONGという名前が使えなかったのか、まず「The Mystery And The History Of The Planet Gong」という2枚組の貴重な未発表録音集が発表されたのに続いて、既にバンド形態ではなくなっているがアレンまでゲスト参加しているMOTHER GONGの「Robot Woman 3」、アレンとスミス、ウィリアムソンが共同で作り上げた「The Owl And The Tree」が発表されたのだ。アレンは1988年にイギリスに戻り、ワンダナ・ブルースという女性ヴォーカリスト兼ハーモニウム奏者と知り合い、共同生活を始めていた。従ってこれらの活動はイギリスとオーストラリアの両国に股がってのものということになる。その上、極め付けはGONG MAISONなるバンドの登場だ。これはアレンを中心に、ハリー・ウィリアムソン、ディディエ・マレエブ、グラハム・クラーク（写真から見るとグラハム・スミスの変名の可能性がある）、それにワンダナ・ブルースといった連中が集まったバンドであり、1989年夏の録音が「Gongmaison」のタイトルで発表された。このバンドはライヴ活動も行っている様子であり、これからの展開が非常に気になる。ちょうど「Camenbert Electrique」の頃のGONGに通ずるバンドとしてのポテンシャルを持っているので、アレンの意欲次第では相当の活躍が期待できる。

煩雑さを避けるため文中ではあまり触れなかったが、スティーヴ・ヒレッジ、マイク・ハウレット、ディディエ・マレエブ、ティム・ブレイクらのその後の活躍もそれぞれ特筆すべきものがある。それらも全部含めた上でGONGファミリーの全体像が見えて来る。

このようにGONGの周辺だけでファミリー・トゥリーが形成される程その人脈は広がりと共通の音楽性を兼ね備えているが、と同時にGONGファミリー自体が人脈的にも音楽的にもカンタベリー・ファミリーに帰属している。しかし、GONGをそうした面だけで捉えるのはやはり間違いであり、何と言ってもある時期フランスのプログレッシヴ・ロック・シーンの一つの中枢であったという厳然たる事実があるし、また、HAWKWINDとの奇妙な繋りや、マイク・オールドフィールドとの関係で見て行くと違った側面が見えて来る。このバンドを正確に把握しようとするなら、そういった多角的な視野が欠かせない。

この摩訶不思議な音楽集団を語るには、まだまだこれだけのスペースではどうにもならないのだということは確かだ。



●'90年代、再結成ゴング



SOFT MACHINE
Face And Place Vol. 7

LP/BYG 529 907
'71年('68年録音)

'68年4月、ロバート・ワイアット(vo, ds)、デイヴィッド・アレン(g)、マイク・ラトリッジ(p, org)、ケヴィン・エアーズ(b, vo)のオリジナル・メンバーによって録音された唯一の作品。何故かすぐには発表されず、'70年代になってフランスBYGからリリースされた。ワイアットを中心としたヴォーカル・パートとキーボード、ギターのソロをフィーチャーしたインスト・パートから成るが、ジャズ・ロック的な部分は全くなく、ブルース・ロック、サイケデリック・ミュージック、ポップス等の要素が入り混じった所謂アート・ロックである。後の姿を予想させるワイアットのヴォーカル、まとまりの良い演奏など、制作年度を考えると極めて質の高い作品と言える。

(賀川)



GONG
Magick Brother

LP/BYG 529305 '70年
CD/Splax Music 14812

ゴングとしての初めてのアルバムとされているが正式にはデイヴィッド・アレンズ・ゴングの唯一のアルバムと見た方が正しい。メンバーは9人編成だが実際にはもっと居てスタジオ内は当時15～6人位出入りしていたらしい。その中には現在ECMで活動しているアール・フリーマン、バートン・グリーン、バール・フィリップスらもいた。アレン、スミスの他にはディディエ・マレルブ、ラシッド・ハウリ、タスマン・スミス、等で全曲ジリ・スミスのペンによるものでこれは特筆に値する。音の方はミスティック、ギミック、サイケデリックの類で正当なテクニックは全くないがこれこそがゴングの真の魅力と言えるだろう。

(いわね)



GONG
Continentel Circus

LP/Philips 6362 330 '71年
CD/Mantra 089/642089

この作品は'71年に「Camembert Electrique」を発表してから〝ラジオ・ノウム・インヴィジブル3部作〟に至る空白の時期にリリースされたものである。一応、ゴング名儀となっているが、デイヴィッド・アレンが制作したオートバイ・レースのドキュメント映画のサウンド・トラックスであり、他のゴングの作品とはイメージの異なる作品となっている。テープ・コラージュを多用したような、ヴォイスとオートバイのエグゾースト・ノートをループ状に配したアルバムで、純粋にサウンド・トラックスとしての発想で制作されたものだと思う。アレンの様々な側面を知ることのできる興味深いアルバムだ。

(山崎)



GONG
Camembert Electrique

LP/BYG 529 353 '71年
CD/Decal CD LIK 64

'60年代からアレンが表現しようと試行錯誤してきたものはこのアルバムに一応の完成をみたといっていいだろう。フランスでアム・ソンのメンバー達と活動したりしながら築きあげてきたスタイルはグループ、BANANA MOONを経てここに集結するのである。グループ内での個々の役割りが明確になり、アレンのセンスとグループのテクノロジーが均衡を保つようになってくる。この時代に創られたゴング神話を次作からの〝ラジオ・ノウム・インヴィジブル3部作〟で整理していくことになる。後の作品と較べると、やや荒削りな印象はあるが、アレンの思想が最もストレートに伝わってくる作品で、アレン対グループということを考えるなら、最も両者のバランスが良かった時代の作品といえると思う。

(山崎)



GONG
Flying Teapot

LP/BYG 529 027 '73年

〝ラジオ・ノーム・インヴィジブル〟3部作の幕開け。SFとお伽話とドラッグの混交したこのスペース・オペラは、メンバーの各人も登場人物の一角を担い、物語世界を生きて行く。GONGが即興的なヒッピー集団から卓越したテクニック集団に移行する過程で、本作ではまだアレン色が強く、歌の比重が高いが、そのバックでは既に切れの良い演奏が聴ける(当時のリズム隊はF・モーズとL・アラン)。音は回を追うごとに厚みを増し、めくるめく探索の果ての結論は〝Gong is and one is you〟。自らの内にユートピアを見出す思想は、RUSH「2112」の個の可能性やオリジナル・パンクの〝自分自身であれ〟とも通底するロックの核ではないか。アレンの軽々とした歌同様、ジャケットも眺めるだけで楽しい。

(高山)



GONG
Angel's Egg

LP/Virgin V 2007 '73年
CD/Virgin CDV 2007
Decal CD LIK 75
東芝EMI VJD-5017

〝ゴング神話〟の中枢である〝ラジオ・ノーム・インヴィジブル〟三部作の第2作目。前作「Flying Teapot」が濃密なサウンド・イメージであったのに対しどことなく透明度を感じる作品。この時代になると演奏面ではスティーヴ・ヒレッジ、ピエール・ムーラン、ミレイユ・ボーエル等の秀れたミュージシャンが円熟した演奏をくりひろげ、アレンはコンセプトをまとめあげる中心ではあるが、少しずつ他のミュージシャンの意向が投影される割り合いが増してきている。この頃、〝ゴング神話〟をアレンは整理したようで、この作品のオリジナルはブックレットが付されており、「ラジオ・ノーム～」のストーリーを知ることができる。

(山崎)



GONG
You
ＬＰ/Virgin V 2019　'74年
CD/Virgin CDV 2019

〝Radio Gnome Invisible〟最終作はまたAllen&Smith在籍最後の作品ともなった。名前こそ残るが、その後のGONGは実質的に別のバンドと看做される。サイケデリックかつスペイシーという独創的GONGワールド、それがメンバー各人の優れたプレイによりテクニカルに展開される様はリスナーを魅了する。彼らの集大成的作品というだけでなく、ここでの各要素がその後の各メンバーの活動にあたっての基本フォーマットとなっている点にも注目したい。GONGの功績とは音楽的な魅力と初期ジャーマンにも通じる精神性の両立にあると考えるが、後者はより楽天的でアナーキーな反面、哲学的、霊的な示唆という多面性をも垣間見せる。OZRIC TENTACLESの様な優れたフォロワーの出現も宜なるかな。（山田）



GONG
Shamal
ＬＰ/Virgin V 2046　'75年
CD/Virgin CDV 2046
東芝EMI VJD-5017

D・アレン、G・スミスが去ってGONGは文字通り演奏集団となり、S・ヒレッジもゲスト扱いで２曲のみの参加。メンバーはP・ムーラン、D・マレルブ、M・ハウレットの３人に女性パーカッショニストのM・ボウエル、元ALPESのP・ルモワーヌ（Key）を加えた布陣でハウレットがヴォーカルを兼任している。FLOYDのN・メイスンをプロデューサーに迎えた本作では、従来の不可視的な面影も残り、その意味でクロスオーヴァー／フュージョン扱いは次作まで待つべきだろう。ヴィブラフォーンの響きと、マレルブのフルート、尺八、決して上手くはないハウレットのヴォーカルが織り成す世界は、オリエント幻想を喚起し、無窮の、しかし刻一刻と変化する砂立の姿にも似て、優しく、心安らぐ愛すら感じさせる。（高山）



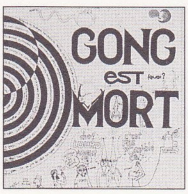
GONG
Gazeuse !
ＬＰ/Virgin V 2074　'77年
CD/Virgin CDV 2074
東芝EMI VJD-5018

Benoît Moerlenが加入、２人のMoerlen & Bauerのフォーメーションはここに確立した。キーボードレスのドラマー＋２人(時に３人)のチューン・パーカッショニスト、加えてM・Cinélu(Conga, etc)と、ロック史上例を見ない様なベーシック・アンサンブルのテクニカルでドライヴ感溢れるサウンドがもたらす眩惑は聴き手にとって快感そのもの。抜群の存在感を見せつける新参のA・Holdsworth(UK以前の彼のプレイとしてはベストの部類では？)、元MAGMAのバイ・プレイヤーF・Moze(b)、古参Malherbe(sax, fl)らが一体となったA①や先述する３人の名演A③、④などは、このユニットのオリジナリティの高さを証明する。「You」後の彼らとしては最高作の呼び声高く、米で商業的成功も収めた。（山田）



GONG
Live Etc
ＬＰ/Virgin VGD 3501　'77年
CD/Virgin CDVM 3501

アレンズ・ゴングが解散した後、'77年にヴァージン側が制作した２枚組ライヴ。アレン側はこのアルバムの発売には不本意であったようで、ヴァージン・オフィスへ抗議したり、又、再編コンサートを１度だけ開き「Gong Est Mort」と題したライヴを発表したりした。しかし、三部作当時のライヴを知ることのできるこの作品はファンにとっては貴重なものとなっている。'73年〜'75年の演奏が収められているが、ＬＰでは第４面にあたる部分はアレンが脱退直後の演奏である。この時点ではまだグループに大きな変化はなく、従来のゴングのスタイルでの演奏が聴ける。音楽的に最も充実していた時期の演奏が聴ける為、当時のステージの熱気のようなものも知ることができる。（山崎）



GONG
Gong Est Mort
LP/Tapioca TP 10002〜3　'77年
CD/Célluloïd 66915-2

'74年６th「You」発表後デイヴィッド・アレン、ジリ・スミスの脱退により有名無実となったゴングであるが'77年当時、個々独自の活動へと散在していた全盛期のメンバー、前述の両者、ティム・ブレイク、ディディエ・マレルブ、ピエール・ムーラン、マイク・ハウレット等が一時的にパリで行ったギグの、そしてゴング精神を極める「Camembert Electrique」ラジオ・ノーム・インヴィジブル３部作の真の集大成が本作である。同年ヴァージン・レーベルが一方的に発売した「Live Etc」に対しアレンが抗議を行った事は本作製作の要因であろう。ここにはアレンの精神を反映したお祭り要素を感じさせる自由な彼等の姿がある。彼等のライヴを収録したものとしては他に「Electric Score」「Greasy Truckers」他がある。（松本）



GONG
Expresso Ⅱ
ＬＰ/Virgin V 2099　'78年
CD/Virgin CDV 2099
東芝EMI VJD-5019

当時はと言えば、GONG関連の作品が様々なルートからリリースされ、時ならぬGONG神話の復興に何かと周囲は騒がしかった。そんな中、「Gazeuse！」の次作と言えるのが本作。この時点のメンバーはMoerlen兄弟とBauet、それに新加入のH・Rowe(b)、つまり従来言う所のメロディ奏者が一人もいない事態となったのだが、その事が逆にこのユニットならではの可能性の追求とまとまりという好結果を生んだ。M・Taylor、Holdsworth、D・Wayらゲストのソロもそれぞれ見事で、前作に勝るとも劣らぬ出来。〝GONG〟を名乗り活動する事への内外のプレッシャーは相当なものだったと推察するが、こうして前人未踏の地平を開拓した彼らのポテンシャルとミュージシャンシップの高さには敬服する他ない。（山田）



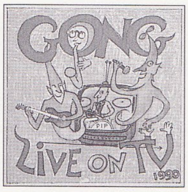
GONG
Live In Paris, Bataclan 1973
LP/Mantra 025 '89年
CD/Mantra

ドラッグ抜きのため一時バンドを離れていたアレンとスミスが合流。「Angel's Egg」という「Flying Teapot」以上にインヴィジブルなアルバムを製作し精力的に活動もしたようだ。その頃のパリでのステージを完全収録。ベーシストにはマイク・ハウレットが迎えられており、この布陣で「You」も製作する。ゴング渦中のライヴらしく「Live Etc」「Est Mort」で慣らされていた耳には不定形かつ新鮮な選曲だ。〝You Can't Kill Me〞から始まらない。ダアイナマイト、タ、タ、タ、タ、タ、タ、とか長いのだ。クリムゾンの即興曲どころではない。ライヴごと即興か。で、スミスが危ない。スペース・ウィスパーは悶絶。とにかく頭の柔かいステージである。多くの公演の或る一夜という感じで臨場感ある。（松本）



GONG
Live At Sheffield 74
LP/Mantra 042 '90年
CD/Mantra 042

タイトル通り'74年のライヴ。トリップ状態の快感原則が楽曲を支配している（平たく言えば、キメているためヘロヘロのエフェクトが3割り増し）というだらしない状態なのだが、このタイプのバンドの場合、その方が演奏内容が良くなるのは言うまでもない。D.Allen、G.Smyth、S.Hillage、T.Blake、P.Moerlen、M.Howlett、D.Malherbeというラインナップからなるこの黄金期は、ジャズ・ロックのドラッグ・ミュージックへの転用に最も成功した時期だったと思う。Allen、Malherbe、H.Williamson等による'89年のライヴが同時収録されているが、ここには元ジャンキー／ヒッピー・ミュージシャンの晩年に時折認められる、ドラッグや混沌から解き放たれたすがすがしい姿がある。（Chihiro S.）



GONG
Live On TV 1990
CD/Code 90 NINETY 1 '93年
MSI MSIF 3029

これは'90年にオン・エアーされた（日本でもWOWOWで放映された）新生ゴングのライヴからのCDヴァージョンである。アレンとジリ・スミスはもちろん、ディディエ・マレーブ、ピップ・パイルという往年のメンバーが参加していて、「You」以降、本当に久しぶりのアレンズ・ゴングが再編されたわけである。過去の名曲を披露してくれるが、演奏のイメージは「Camembert～」時代に近く、年老いた（失礼！）アレンが昔と同じように、ファンタジックなゴング・ストーリーを演じているのを聴いていると、僕のような古いファンには深い感慨を感じる。（山崎）



GONG
Shapeshifter
CD/Celluloid 66914-2 '92年

復活ゴングというよりも最新型ゴング、これ明らか。アレンの中身は変わらずとも次々と時代を吸収していく柔軟ぶり、そこにはアレンさえいれば、どうにでも形を変えるゴングがいる。とりわけ、バブルの盆踊りと云われたジュリアナ東京音頭（ハウスのリズムのことネ）にカット・インするグ・グウォ～ングは、世界を転覆させる程で、未だにカマンベールの威力は失われていない。メンツを見るとP・Pyle、D・Malherbe、Graham Clark、Keith Bailey、Shyamal Maitra、アレンと、ゴングメゾンが成熟したかのように見えるが、単なる最近の仲良しとも言える。しかし中身は非常に前向きなので、'70年代前半を想定していると面喰う。（松本）



V. A.
The Electric Score
LP/Revolution REV1～3 '73年

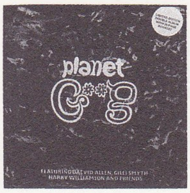
元祖ほぼおもいっきり自主制作。よしゃあ！バンコ・デル・ムットゥオ・ソッコルソ！こりゃあ、のっけから日がええ。とニセ江戸っ子ふうに決めた所で、話だー。ハイド・パークのフリー・コンサートに並ぶグラストンベリー・フェスこそ今で言うレイ〇・パ〇ティだったわけで、MIGHTY BABYにHAWKWIND,PINK FAIRIESその筋に元じめG.DEAD,これにGONGとくりゃあ、鬼に金捧ヨオ、あた棒ヨオ、べらんメイ！（えっ？ブライアン・メイ？）。だがしかし、結構よその所で録られた録音をかき集めてうさん臭いしろ物でエエ。まあ、全盛期のゴングがまた一つ聴ける貴重品なんだけどオ、今となるとオ、むしろ号外みたいなもんでエ、コッとお一品。（時代よなぁ…）、ってーヨっぱらいっ。しかもOLの。（松本）



V. A.
Greasy Truckers
LP/A Greasy Truckers Production
G.T. 4997 '73年

CAMEL, HENRY COW, GLOBAL VILLAGE TRUCKING CO.、GONGのライヴを各々片面づつに収録した自主製作盤。ゴングは'73年6月のチュニジア、Festival Of Tabarkaでの録音と'73年10月のシェフィールド、シティ・ホールでの録音が収録されている。両日とも満月の日と記されている。メンバーはBloomdido Bad De Grass, Stevie Hillside-Village, Pierre De Strasbourg, Mr T Being, Hi T Moonweed, Dingo Virgin, Shankti Yoniということで全盛期のラインナップ。F/I、F/0が多くこま切れだが、〝Inner Temple〞や〝Can't Kill Me〞等、曲も聴ける。また所々にラジオ・ノームが混線したか会話らしきものも入る。チュニジア・テイクは即興部が多く整理立ってないだけに面白い。（松本）

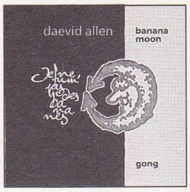
GONG, DAEVID ALLEN, MOTHER GONG
The Mystery And History Of Planet Gong



LP/Demi Monde DMLP 1018　'89年
CD/Demi Monde CDTL 010

'89年に降って湧いたこのアルバムがゴングの支援団体G.A.Sの始まり。そして今日への一派の活況を促すことになる。アレンの'64年から'88年までの足跡が未発表ライヴや会話、テープ作品等で整理立てられることなく綴られたもの。LPでは２枚組の分量。貴重な'68年ソフト・マシーン時代のちんけなライヴをはじめ「Camembert〜」時ジョン・ピールの解説もバッチリ'73年BBCでのゴング・ライヴも。「月に撃つ」収録の〝Clarence In Wonderland〟ではゴング総動員でK.エアーズをバック・アップ。インタビュー中、突如アレンがラジオ・ノームに交信してしまう場面には、バックにG. DEADの〝Dark Star〟(Live Deadテイク) やティム・ブレイクの出番〝Sprinkling Of Clauds〟まで流れる。楽しい１作だ。　(松本)

DAEVID ALLEN/BANANA MOON/GONG
Je Ne Fum' Pas Des Bananas



CD/Legend Music KZLM 1505 1　'94年

'63年のアレン・トリオという極め付け音源が陽の目を見たのはついこの間のことだが、今度は幻のBANANA MOONがその姿を現わした。レコーディング・データはないが、時期としてはGONG結成前のことであり、既に「Magick Brother」の曲をやっていたり、SOFT MACHINE時代のリフが出て来たりと、実に楽しい。それにしてもどうしてこんなに音がいいのだ？　メンバーはアレン(g, vo)、パトリック・フォンテーヌ(b)、マルク・ブラン(d)の３人で、ジリ・スマイスも客演。既にアレンの音楽は大体完成していて、聴いていてそれほど古さを感じない。ほかにもかなり年季の入っていそうなアレンのホーム・レコーディング（これは音が悪い）や最初期のGONGの未発表音源も収録されていて、貴重極まりない。　(坂本)

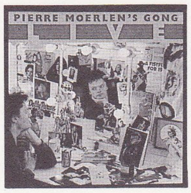
PIERRE MOERLEN'S GONG
Downwind



LP/Arista SPART1080　'79年
CD/Great Expectations PIPICD 025

嘗ての不可視的世界から、肉体性を持った可視的な音楽への変貌を遂げた本家GONGだが、ヴァージンを離れアリスタに移っての第一弾たる本作では、ピエール自身の名を頭に冠し、商業的な意味合いからGONGの名を残しつつも、過去との繋がりを断ち切ろうとする姿勢が見える。前作同様名手ムーラン兄弟のパーカッションを軸に、ゲストが彩り添えるコンセプトで、今回もM・オールドフィールド、S・ウインウッド、D・ロックウッド、継続参加のM・テイラーという錚々たる名前が並ぶ。「Tubular Bells」を想わせるヴィブラフォーンを受けて、マイクのギターが響くタイトル曲は、マイクのアルバムに入っていてもおかしくはないが、名曲だろう。ピエールも同行したマイクの来日公演を思い出す。愛着ある一枚。　(高山)

PIERRE MOERLEN'S GONG
Live



LP/Arista SPART1130　'79年

1979年２月のパリと３月のロンドン公演を収めたライヴで、メンバーはピエール、ブノワのムーラン兄弟、H・ロウ(B)、B・ロザガ(G)、F・コース(Perc)の５人だが、いきなり一曲めの〝Downwind〟からゲストのM・オールドフィールドとD・マレルブのバトルに圧倒される。基本的にトリプル・パーカッション(ドラム含む)＋ベース、ギターという編成で、２曲ほどピエールがキーボードも弾いている。この編成での面白味が発揮されるのは、やはり「ExpressoⅡ」に収められていた〝Golden Dilemma〟や〝Soli〟といったナンバーだろう。ピエールのドラム・ソロを除き、「Shamal」「Gazeuse」「ExpressoⅡ」「Downwind」からの選曲。ライヴならではの乗りはMOERLEN'S GONGの真骨頂だ。　(高山)

PIERRE MOERLEN'S GONG
Time Is The Key



LP/Arista SPART 1105　'79年

前作「Downwind」の延長線上にあって、整理されたアルバムだ。バンドはピエール・ムーランを中心にして、Hansford Rowe(b)、Bon Lozaga(g)、Peter Lemer(kbd)の4人、ここに曲によってアラン・ホールズワースやダリル・ウェイらが参加している。ムーランのヴィブラフォーン・プレイとレマーのストリングス・シンセサイザーのバッキングが目立つ。「Downwind」で見せたシンプルな曲調がこのアルバムにも見られ、分かりやすいとは言えるが、もう一つ特徴がない。役者不足ともリラックスがあまりいい方向に出ていない気もする。後半はホールズワースがリードを取るので、少しはひっかかりがある。　(松本)

PIERRE MOERLEN'S GONG
Leave It Open



LP/Arista 202 955　'81年

このアルバムから、以前のアルバムのセールス・ポイントだった大物ゲストの参加が無くなっている。グループとしての音を確立したという自信か、それともセールスが厳しいので予算を削られたのか……。内容は地味ながらも好作品で、特に16分に及ぶタイトル曲は、大河の流れのようにゆったりとした展開が非常に心地よい。他の短い曲もそれぞれの特質を生かした佳曲ばかり。"It's About Time"というタイトルの曲は、同時期にNEW YORK GONGとして同名のアルバムを発表したアレンへの当てつけか？　このバンドはこの後、Aristaとの契約を切られ、MoerlenはスウェーデンのTRIBUTEに参加し「Breaking Barrier」('86年)「Live!」('87年)の2枚のアルバムを制作している。　(武田)



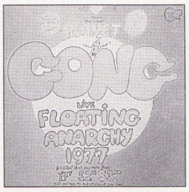
PIERRE MOERLEN'S GONG
Breakthrough
LP/ARC Music EULP 1053　'86年
CD/ARC Music EUCD 1053

日本への入荷が少なかったせいか、ブリティッシュ集成やカンタベリー・ファミリー・ツリーからも漏れてしまった幻の？アルバム。メンバーにH.Roweに加え、Gideon Anderssonを除くTRIBUTEの全員が参加している。演奏は、以前のGONGの作品と大きく変わってはいないが、女声コーラスが入ったことにより幾分柔らかめになったという印象がある。ヴィブラフォンのソロをフイーチュアしたタイトル曲と大陸的な広がりのあるラスト曲の〝Far East〞が6分台で、残る8曲は2～4分のコンパクトな曲が多い。うち3曲はMoerlenのヴォーカルをフィーチュアしたもので、残り5曲のインストは割とシンプルな構成になっている。〝the Read Out〞はL.R.Hubbardの同名の詩に曲を付けたものだそうだ。（武田）



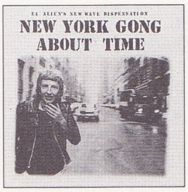
PIERRE MOERLEN'S GONG
Second Wind
CD/Line LICD9. 00698 0　'88年

Moerlenは'86年に、在籍していたTRIBUTEのメンバーの協力を得て、GONG名義で「Breakthrough」(CD:ARC Music EUCD 1053)というアルバム制作しているが、本アルバムはTRIBUTE脱退後に制作されたものである。曲は長いものでタイトル曲の6分で、比較的コンパクトにまとまったものばかり。シリコンマレット(シンセのヴィブラフォン版)を使用しているようで、キーボードでは弾きこなせないようなフレーズでシンセを鳴らしているのが面白い。メンバーはTRIBUTEから加わったギタリストのAke Ziedenの他に、Hansford Rowe、Benoït Moerlenなど、お馴染みのメンバーも健在である。後半にはMoerlenとAlex Sanguinettiの2人よる3パートにわたるドラムデュオが収録されてる。LPは2枚組。（武田）



PLANET GONG
Live Floating Anarchy
LP/Charly CRM 200　'78年

アレン日く〝進化したパンク〞として復活したフランスはトゥールーズでのライヴ。演奏はアレン、スミス＋HERE AND NOWバンド。ジャケットも含めた遊び心ある軽々としたセンス、昇天しまくるスペース・ウィスパーはそのままに、粗削りな、ロックン・ロールと言っても良い勢い。混沌の中のオプティミズムが時代とバックのせいもあってか、ここではよりストレートなものに転化している。バンドやロック産業に失望した筈なのに。何事もないように余裕溢れる表情を見せるアレンは老荘思想的な賢人なのか、それとも本当の……？でも深刻な顔や、苦労・努力を表す位なら、筆者もそうありたいと思う。これはテクニック集団となった本家GONGに対する、元祖からのアンチテーゼでもあるのだろうか。（高山）



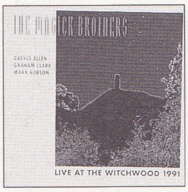
NEW YORK GONG
About Time
LP/Charly Records CRL 5021　'80年

PLANET GONGで復活したデイヴィッド・アレンはそのままの勢いでアメリカに乗り込み、NEW YORK GONGを結成した。アレンにとってはひとつの過程だったが、このバンドがやがて広大なNYアヴァンギャルド・シーンを生み出して行く歴史的な起点となった。ビル・ラズウェル(b)、ビル・ベーコン(d)、フレッド・マハー(d)、クリフ・カルトレーリ(g)、マイケル・バインホーン(syn)ら、当時無名の錚々たるミュージシャンが並び、マーク・クレイマー(org)まで顔を出す。そこに今は亡きゲイリー・ウィンド(ts)も余裕のプレイで参加しているのが嬉しい。ワイルドなパワーに溢れた豪快なジャズ・ロック・サウンドとアレンの音楽が不思議なマッチングを見せる。アレンの足跡にはいつもムーヴメントが花開く。（坂本）



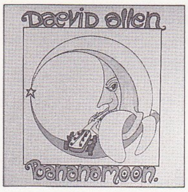
INVISIBLE OPERA COMPANY OF TIBET
Invisible Opera Company Of Tibet
CD/Voiceprint VP 106 CD
'91年('87年録音)

本誌044号のD・アレンのインタヴューを読んでもこの辺の活動実態は今一つよく判らない。様々なバンドの総称がこのINVISIBLE OPERA COMPANY OF TIBETであり（かつてGONGはC.O.I.T.即ちCOMPAGNIE D'OPERA INVISBLE DE THIBETの別称を持っていた)、ややこしいことに、アレンは組織者であっても必ずしも音楽的リーダーと断定できなかったりする。本作を聴く限りではアレン、ウィリアムソン、R・ヒプス、N・ケアニーがその中心だろうか。オーストラリア録音の筈だが、R・カルヴァートの参加はオーヴァーダブか。（坂本）



THE MAGICK BROTHER
Live At The Witchwood 1991
CD/Voiceprint VP 107 CD　'92年

突如登場したこのアルバムにも結構驚かされた。GONG MAISONで邁進して行くのかと思っていたら、D・アレンのアコースティック・トリオのライヴと来た。これはアレンのスペイン時代のこよなく美しいスピリチュアル・ミュージックの見事な再演だ。G・クラークはGONG MAISONの主要メンバー。初お目見えのM・ロブソンは、イギリス人ながらオーストラリアで音楽活動を行い、INVISIBLE OPERA COMPANYにも参加した。'90年に帰英し、ソロ活動の傍ら、再びアレンと共演することになった。相当に才能のあるミュージシャンであることは本作を聴けば明らかであり、カセット作「Celtic Dreaming」のCD化が楽しみだ。Voiceprintのアレン作品の中では今の所ダントツの推薦盤。（坂本）



DAEVID ALLEN
Banana Moon

LP/BYG 529345 '71年
CD/Decal CD LIK 63

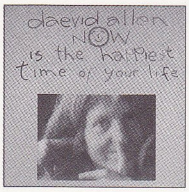
この時期、アレンはBANANA MOONというグループ名で活動していたが、本作はソロとして制作されたもの。R・ワイアット(vo、ds、g)、マギー・ベル（back-vo)、SPOOKY TOOTHのG・ライト（p)、A・レジェット（b)、P・パイル（ds）等、ブリティッシュ・ロックの渋い所がサポートしている。ワイアットの歌唱が光る〝Memories〞(作曲はH・ホッパー）はSOFT MACHINEの初期のナンバーで、ワイアット自身もシングルで取り上げている。既にGONG神話のキャラクターも登場しているが、音楽的には旧Ｂ面にGONGの素地が指摘出来るもののＡ面は初期SOFT MACHINEやK・エアーズも想わせ、アレンの素が出た、両者の橋渡し的なアルバムと言えるかも知れない。尚、仏盤と英再発盤はジャケットが違う。（高山）



DAEVID ALLEN & EUTERPE
Good Mornig

LP/Vikgin V2054 '76年
CD/Virgin CDV 2054

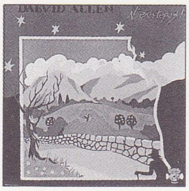
アレンがゴングを脱退した直後、マヨルカ島へと渡り、エウテルペというスペインのグループと一緒に録音したソロ・アルバムである。「ラディオ・ノウム〜」三部作の頃、演奏面の充実と引き換えに失いつつあったものを原点に帰って見つめ直そうとしたアルバムなのではないかと思う。ジリ・スミスと２人、マヨルカ島で制作したであろう個人的な作品。全体に肩の荷が下りたような安堵感と優しさに満ちた作品で、その背後には彼のしっかりとした哲学、人生観というものを感じることができる。ドラッグをともなう幻想性というよりは、そのむこうにある人間的なものを強く感じることができるソロ・アルバムだ。マヨルカ島に住むアレンからファンに向けた音楽による私信とみれば良い。素敵なアルバムだ。（山崎）



DAEVID ALLEN
Now Is The Happiest Time Of Your Life

LP/Affinity AFF3 '77年
CD/Decal CD LIK 69

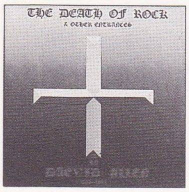
アルバム「Good Morning」以来、アレンは大がかりなコンサート等を望まず、ゆったりとした時間の中で自己をみつめ直していたのだと思う。そういった時間の中から生まれたのが「Good Morning」であり、この作品であった。アレンが子供達の前で〝ゴング三部作〞を語りながら、最後にフライング・ティーポットが飛来してくるという、なんともユーモラスな曲を始め、極めてプライベートなイメージの曲が収録されている。アルバム・タイトルからもわかるように、ゴング脱退後、マヨルカ島へ渡ってからの数年は、アレンにとって最も平穏な生活を送れた充実の時であったのだろう。全編から感じとれるものは、生き生きとしたアレン自身であり、あたたかさである。（山崎）



DAEVID ALLEN
N'Existe Pas !

LP/Charly Records CRI 5015 '79年

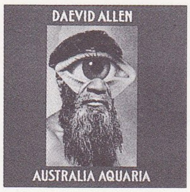
ヨーロッパからアメリカへと活動の拠点を移そうとしていたちょうど過渡期のアルバム。スペインで意気投合したペペ・ミラン(g)がいる一方で、アメリカから後にヨーロッパに渡るジョージ・ビショップ(sax, cl)がいて、さらにドラマーがクリス・カトラーだったりする。そこにアレンがいつもの気ままなヴォーカルとグリッサンド・ギターを重ねる。スペイン時代のあの切ないほどの抒情的な音楽とカトラーの歯切れのいいドラミングが得も言われぬ好対照を見せ、アレンのソロとして最も多彩な表情を聴かせてくれる。何故か従来のGONGファンにはあまり評価されて来なかった(と言うより聴かれていなかった）が、こんなに面白いアルバムはそうそうあるものではない。個人的に一番好きなアレンのソロ・アルバム。（坂本）



DAEVID ALLEN
The Death Of Rock&Other Entrances

CD/Voiceprint VP 114 CD
'92年（'65〜'82年録音）

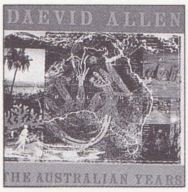
本作は'82年に発表されたEPをCD化したものだ。細かいレコーディング・データはないが、当時オーストラリアとアメリカで録音されたソースだと思われる。「おやすみ、ジム・モリソン。おやすみ、ジョン・レノン。おやすみ、シド・ヴィシャス…」というレクイエム①、M・クレイマーとのデュオ・ライヴ②、「おまえは全く存在しなかった」とバロウズの声が呟く④、等々、ミュージシャンと言うよりも、詩人あるいは現象としてのアレンの精神の在処が表明された重要作だ。追加されたボーナス・トラック３曲、計40分がまた凄い。未発表の最初期のテープ・ループ、コラージュ作品が並ぶ。ファンなら揃えておくべきアルバムだ。（坂本）



DAEVID ALLEN
Australia Aquaria・she

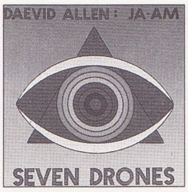
LP/Demi Moncle DMLP 1025 '90年

これは1989年にイギリスでレコーディングされた作品であり、久々のアレンの個人名義によるソロ・アルバムだ。プロデュース、エンジニア、キーボード演奏、プログラムとハリー・ウィリアムソンが大活躍しているほか、GONGMAISONのメンバーも大半が参加している。このアルバムでアレンは世界各地で知り合った女性達との体験を赤裸々に告白し、それぞれの女性達に愛の歌を捧げている。アレンにとって女性は救いの神なのだ。オーストラリアで消息を絶っていた頃の彼の生活が少しずつ解き明かされて行くが、とにかく女性なしでは生きられない人間なのだなあ、とアレンの人間的な弱さを知ると同時に、したたかに立ち直ってしまう不屈の魂に感心してしまう。しみじみと感動の伝わる音楽だ。（坂本）



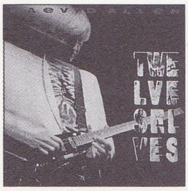
DEAVID ALLEN
The Australian Years
CD/Voiceprint VP 101 CD
'90年('82年～'88年録音)

Voiceprintの記念すべき１作目は、G.A.S.を母体とするレーベルだけに、当然の如くデイヴィッド・アレンの未発表作品集、「The Australian Years」となった。1988年にイギリスに舞い戻ったアレンは、以後新作、未発表作を次々と発表し、現在に至る。本作は初めて謎めいたオーストラリア時代の彼の足跡を明らかにした貴重な録音で構成されているが、殆どスケッチ状態のプライベート・レコーディングであり、完全にマニア向けの内容だ。また、ボーナス・トラックとして、オーストラリアに帰国した最初期の録音に当たる'82年発表のデヴィッド・トリーとの共作ミニ・アルバム「EX-; Stop/Don't」も併せて収録されている。ファンだけ納得の73分。 (坂本)



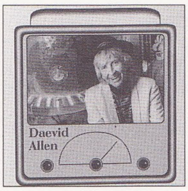
DAEVID ALLEN
Seven Drones
CD/Voiceprint VP 102 CD '90年

第２弾も同じくアレン。基本的にはやはりオーストラリアでのレコーディングではないかと思われるが、一部D・マレーブも参加しており、それは多分オーバーダブなのだろうが、詳細は不明。不思議な音楽だ。音楽治療のための瞑想音楽の一種でありながら、アレンの音楽の本質を抽出しており、それでいてアボリジニの音楽も平気で吸収している。音楽の見せかけの縄張りがまるで意味を持たない、音楽の越境地帯。こういう音楽の聴き方を僕らはブライアン・イーノに学んだことがある。素直な感性の方にはお勧め品。 (坂本)



DAEVID ALLEN
Twelve Selves
CD/Voiceprint VP 111 CD '93年

'93年１月、メルボルンでのレコーディング。老いて盛んなデイヴィッド・アレンの創作力はますます磨きをかけ、さらに世界を股にかける。これは'89年からソロ・ステージのために用意されたショーのアルバム化作品で、12の人格に扮したアレンが彼の精神を語り、歌い、演じる。多くのゲストも参加しているが(一部は古い録音のコラージュ)、今までに増して優しく、また痛烈なメッセージを投げかける姿勢が実に誠実で、何よりアレン自身の音楽の豊かさと力強さで聴く者を惹きつける。アレン・ミュージックの集大成とも言える内容であり、何曲かお馴染みの曲も演奏されているものの、ショーとしての必然を感じる。数あるアレンのソロ作品の中でも、近年では群を抜いてよくできた作品だ。 (坂本)



DAEVID ALLEN
Radio Session
CD/Voiceprint VPRO 012 CD '94年

デイヴィッド・アレンのラジオ・セッション・アルバム。全２曲20分。'88年１月にオーストラリアで録音され、この年、イギリスに舞い戻る前夜にミックスされたもの。ロブ・ジョージ(d)やワンダナ(harmonium)らが参加している。オーストラリア時代の録音も随分発掘が進んで来たが、これほどのクオリティーのものがまだ出て来るのだから、これから先も何が登場するか予断を許さない。これは彼の音楽としてはかなりタイト&ハードな内容で、例の「ほにゃらら・スペーシー・サウンド」とは大分様相が違う。復帰に向けた気合いが満ちている。 (坂本)



DAEVID ALLEN AND KRAMER
Who's Afraid?
CD/Shimmy 060 '93年

モニュメンタルかつ心安まる１枚。遂にカンタベリー・シーンとジャンク・シーンが手を結んだ。史上最大の人脈図ができあがったも同然。クレイマーはアメリカの最も先鋭的なシーンの中心、シミー・ディスクの親玉だが、そのいい加減さと繁殖力は、考えてみればアレンのノリにぴったりが、このアルバムは二人のふやけた関係が、とてもプライベートな形で音になっていて、初期のアレンのソロやワイアットのソロに通じる柔かさがある。いいうだり具合だ。その型に定まらない活動は、きっと近いうちに日本の先鋭シーンとも関係してくるだろう。 (松本)



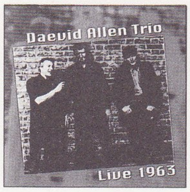
MOTHER GONG with DAEVID ALLEN
The Owl And The Tree
CD/MMG CDTB 118 '89年

スミス組とアレン組、このまるで火消し組を思わせる二組が仲良く1枚のアルバムにおさまっている３Ｐ物。全８曲中６曲がスミス組なので、名義もそうなったのだろう。スミはこれまでもプッシーになったりファンタジーになってきたが、今回はいきなり木になってしまう。1曲目の〝I Am A Tree〟はジャケットに及び、葉っぱがたくさんの手になって3曲目の〝Hands〟なのか。よく分からない。スミス組ではロバート・カルバートのサックスとハリー・ウィリアムソンのシンセがサウンドの色づけをしている。もちろん中心はスペース・ジリ・ウィスパー・スミスである。共に空気の流れのように軽やかだ。一方のアレン組はフォーク・ソングと小鳥の囀り入りアコースティック音楽を提供。二組とも深呼吸調。 (松本)



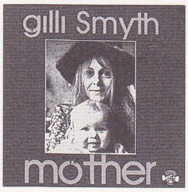
DAEVID ALLEN/GILLI SMYTH/ HARRY WILLIAMSON
Stroking The Tail Of The Bird
CD/AMP Records AMP CD 011　'92年

デイヴィッド・アレン、ジリ・スマイス、ハリー・ウィリアムソンの３人の共同作業は「The Owl & The Tree」とは別の形となっても現われた。これはアレンのグリッサンド・ギターをメインにしたお得意のメディテーション・ミュージックで、スマイスのスペース・ウィスパーはフィーチャーされるが歌詞は一切ない。「Seven Drones」に比較しても非常に静かな佇まいをした美しい音楽で、聴いているとどんどん心が澄んで来るのが判る。'87年のレコーディング３曲に、'76年スペイン、マヨルカでのホーム・レコーディング１曲から成る。エグゼクティヴ・プロデューサーとしてロビン・アイリングが関わっているにもかかわらず、何故かVoiceprintではない。３人の結束は以後更に深まって現在に至る。　（坂本）



DAEVID ALLEN TRIO
Live 1963
CD/Voiceprint VP　122CD
'93年('63年録音)

物凄いものが登場した。伝説上の、カンタベリー・ミュージック・シーンの最初の第１歩。よもやこのバンドの録音が残っていようとは。これはブリティッシュ・ロックの歴史を実証する大事件だ。'63年、ロンドン・マーキー・クラブでのライヴ・レコーディング（１曲スタジオ録音）。この時代だから当然モノラルだが、結構音もいい。メンバーはD・アレン（g,vo）、H・ホッパー（b）、R・ワイアット（ds）で、途中からM・ラトリッジ（pf）が加わる。アレンのポエム・リーディングをフィーチャーしたジャズ・セッション。ファンは傾聴すべし。　（坂本）



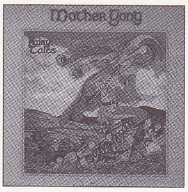
GILLI SMYTH
Mother
LP/Charly CRL 5007　'78年
CD/(Kor.)Si-Wan SCP-025

「Mother」はマザー・ゴングの原点で、「You」までのゴングをそのまま引き継いで、スペース・ウィスパーが飛び交っていて、ジリ・スミスの会作である。ゴングの音楽は母系だと思うのだが、その、宇宙とか大地とか自然といった器の概念が、とうとうこのアルバムで全開されたようで、それまで封じられていた不思議がとめどもなく溢れ出すような潤いがある。ゴングの魅力というのは、音楽という約束の周囲に実は無限に未音楽域があって、普段の私達は極く狭い、やけに整理された部分を指して音楽と言っていること、それを理解しない所では伝わらない。歌である前に声だし、それは音なので喋りや響きも音楽の構成要素で、それはドレミファという要素と同等のもの、という感性がないときつい。　（松本）



GILLI SMYTH
Every Witches Way
CD/Voiceprint VP 139 CD　'93年

MOTHER GONGの新作が出たばかりなのに、今度はジリ・スミス（ジリ・スマイスと発音してるなあ、どうしよう）の２ndソロ・アルバムの登場だ。本作の聴き所は、初お目見えになるSTILLBORN FROG BANDおよびKANGAROO MOONの起用だろうか。STILLBORNFROGにはニール・ケアニー(d)が参加しており、どうやら彼もオーストラリアからイギリスにやって来たらしい。KANGAROO MOONは'92年結成されたマーク・ロブソンのバンドだ。予想通りのスペース・ミュージックが展開する中で、１曲だけメンバー・クレジットのない⑤ではまるでCAMELみたいなジャズ・ロックが繰り広げられびっくり。　（坂本）



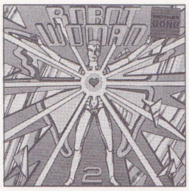
MOTHER GONG
Fairy Tales
LP/(U.K.)Charly CRL 5018　'80年
CD/Spalax Music 14813

前作「Mother」でゴングのありかを見せたジリ・スミスは、アルバムの要でもあったラスト・チューン〝Taliesin〟を発展させるかのように、この２作目を作った。ハリー・ウィリアムソンの共作もMOTHER GONGのカラー確立を促したようで、前作のおもちゃ箱的ばらけ方は〝お伽噺〟に集約され、分かりやすくなっている。自作のお伽噺を音楽的に使い１枚にしてしまうあたりなど、アレンがラジオ・ノーム・インヴィジブルを３枚にしてしまった事と同じ発想だが、お伽噺だったところがジリ・スミスで、現実として母になる彼女の自己証明のようにも思えて興味深い。アレンは人々に向けたが、スミスは子供達に向けたその違いのようなこと。音の方はギミック・タッチが退き随分と整理されている。　（松本）



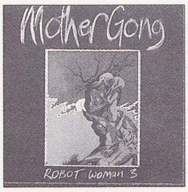
MOTHER GONG
Robot Woman
LP/BUTT 003　'82年

ジリ・スマイス率いるMOTHER GONGはこのアルバムで漸くレギュラー・バンドへと発展した（「Fairy Tales」は実態としてはまだレコーディング・セッションだった）。３部作となったRobot Womanシリーズの第１作であり、ジャケットさながらのコミック調ＳＦストーリーが幕を開ける。とは言えこの内容は決して軽くない。テーマは平和／ヒューマニズム／フェミニズム／反暴力。あまりにも重いテーマなので逆にコミック調にせざるを得なかったのではないだろうか。既にスマイスはハリー・ウィリアムソンと結婚しており、音楽的にはウィリアムソンのカラーが強く出ている。D・マレルブや元VDGGのガイ・エヴァンスが全面参加しているほか、ライヴ音源にはヒュー・ホッパーも参加。　（坂本）



MOTHER GONG
Robot Woman 2
L P/Shanghai HAI 100 '82年

前作から矢継ぎ早にリリースされたRobot Woman 3部作第2弾。大きなポスターが付いて、前作の内容を含めての粗筋が本物のコミックになってしまった。何とも目まぐるしい壮大なストーリーで、GONGのことを忘れて聴けば「Tommy」にも匹敵するロック・オペラのひとつということもできそうだ。あるいはPINK FLOYDすら引き合いに出してもいいパノラミック・サウンド（それにしてはちょっとチープかな）。これまで誰一人まじめに採り上げて来なかったが、誰か本気でこの3部作の再評価を試みた方がいいのではないだろうか。バンドのメンバーはほぼ前作と同じ。前作で「オーストラリアへ行こう」と歌っていたスマイスとウィリアムソンはそのままオーストラリアへ渡り、長く消息を絶ってしまうのであった。　（坂本）



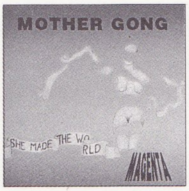
MOTHER GONG
Robot Woman 3
L P/Shanghai HAI 109 '89年

突如復活したMOTHER GONGには大いに驚かされた。しかもてっきり袂を分かっていたのかと思っていたデイヴィッド・アレンまでゲスト参加とあって、事実関係の再認識を余儀なくされたのだった。メルボルンでのレコーディングであり、当然バンドの実態はなくなっているが、ハリー・ウィリアムソンの才能が存分に発揮され、これまでの作品と何ら遜色のない派手な音楽になっている。7年の歳月を経て、前作までの陽気さの裏側にある重苦しさが吹っ切れたような、とても清々しい世界だ。イギリスに戻ってからも共演の続いる「詩人トム」が参加しているほか、アレンとスマイスの子供であるオーランド・アレンもあどけない歌を披露。何ともなごやかだ。そしてここからMOTHER GONGは新たな旅立ちを迎えた。　（坂本）



MOTHER GONG
Live 1991
CD/Mothermusic MM 101 CD '92年

GONG周辺の動きはますます加速して留まる所を知らない。そして遂に出たMOTHER GONGのライヴ！　彼らがイギリスで活動を再開しているとの情報は伝わっていたが、ライヴ・アルバムが拝めるなんて……。現在彼らは5人編成で活動をしているが、'91年秋に行われたツアーにはリズム・セクションが不参加(つまりG・スミス、R・カルヴァート、H・ウィリアムソンの3人編成)。その分をウィリアムソンが打ち込みで補っている。ほかに詩人、トムがゲスト参加。殆ど新曲なのでスリリングな新作として楽しめる。この世界はスミスの独壇場。　（坂本）



MOTHER GONG
She Made The World Magenta
CD/Voiceprint VP 134 CD '93年

何とまあ、早くもMOTHER GONGの新作が登場だ。アレンの創作意欲は凄まじいが、勢いづいているのは彼だけではない。誰か彼らを止めてくれい。こんなに次から次へと繰り出されたら、財布も痛いが、収拾がつかなくなってしまう。これじゃHAWKWINDの二の舞だあ。MOTHER GONGと言えば、ライヴ・ヴィデオが出回っているが、あれは一体誰が出してるのだろう。本作はMOTHER GONGと言いながら、いきなりアレン、ウィリアムソンを従えての32分のスミスのポエム・リーディングで始まる。残り42分がバンドの演奏で、前作でお休みのリズム・セクションも参加している。インプロヴィゼーション主体のバンド・プレイにも勢いを感じる。本当にノっているんだなあ。　（坂本）



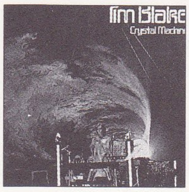
MOTHER GONG
Voiceprint Radio Sessions
CD/Voiceprint VPR 007CD '94年

ジリ・スミスはゴングの台所とも言えて、台所でスペース・ウィスパーを発している姿を想像すれば、いかにゴングというバンドは自由自在だったかもわかりそうなものだ。その点マザー・ゴングは一つのバンドとしておさまっている。ゴングの曲は結構スミスが書いていたが、そう思うと彼女はアレンのひき立て役なのではなく、相当自主的な人なのだと思う。未だ歌を歌わず、声と喋りだけで通している。それを見ても確固とした音楽像を持っていそうだ。ゴング一派の中でこの人ほど身持ちの固い人はいないのではないか。このアルバムは4曲の収録であっという間に終わってしまうが、最近のスタジオ盤よりもかつてのゴングに近い。今や当り前になっているが、歌唱スタイルがあえぎ声というのも特異だ。そんな人どこにもいない。　（松本）



MOTHER GONG
Eye
CD/Voiceprint VP 176 CD '94年

'78年にジリ・スミスが結成したMOTHER GONGもこれで6作目(ソロも実質的にこのバンドのもの)。スペース・ウィスパーは音がクリアーになってもスペース・ウイスパーということで、そのいかがわしさはGONGの「Magick Brother」導入部でも有名。例によってpussy pussyと語っていたり、遠くでささやいていたり、と何一つ変わりない。ロバート・カルバートやハリー・ウィリアムソンらがギミックふうにプレイし、魔女扱いもハウス文脈もOKなふわふわした形のない音楽は健在。ヒッピー系の超少女趣味とも言えそうな彼女の世界も相変わらず。　（松本）



TIM BLAKE
Cristal Machine

LP/Egg 900545 '77年
CD/Mantra 067/64067

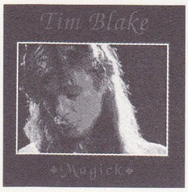
ゴングを脱退したティム・ブレイクが制作したソロ・アルバム。ミュージシャンはブレイク1人で、使用楽器もEMS2台とミニ・ムーグ1台、ELKA1台の、計4台のシンセサイザーだけである。しかもこれはLPのB面最後の1曲以外はライヴ録音だ(A面は76年のSeasalter Free Festival、B面は77年のパリのPalace Théâtreでの演奏)。サウンドはまさにゴングからあのスペイシーなシンセ・パートを純粋に取り出したようなものだが、意外とリズミックな感じの曲が多いのが面白い。ブレイクは当時、Patrice Warrenerいうレーザー・エフェクトのオペレーターと組んでライヴ・パフォーマンスを行っており、その幻想的なステージングはアルバムのジャケットからもうかがうことが出来る。　(武田)



TIM BLAKE
New Jerusalem

LP/Egg 90288 '79年
CD/Mantra 068/642068

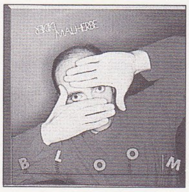
アレンやスミスを除けば、GONGという善人集団の中で培って来たものを現在に至るまで守っているのはこのティム・ブレイクではないだろうか。前作がライヴだったので、スタジオ録音としてはこれがソロ第一作となる。あのヴォーカルとゆらめくシンセの波。本作ではEMS、ローランド、ムーグ、アープ、コルグと各社のシンセの他にアコースティック・ギターも導入。２曲でJ・Pリキエルがミニ・ムーグを弾いている（彼はヒレッジの「Open」にもゲスト参加)。〝Lighthouse〞などソフィスティケイトされてはいるが殆どGONGだ。W・ブレイクの詩をモチーフとしたタイトル曲は旧Ｂ面を占める叙事詩。本作に伴い、レーザー・ショウを含むデモンストレーションの為の来日も果たす。翌年HAWKWINDに一時加入。　(高山)



TIM BLAKE
Magik

CD/Voiceprint VP 105 CD '91年

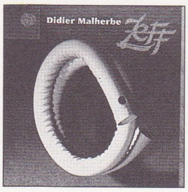
ティム・ブレイクの復活には大いに驚かされた。全盛期のGONGにこの人ありと神秘の名を轟かせたシンセサイザー奏者であり、本当はキーボードが弾けないんじゃないかと陰口をたたかれながら、実際は結構フレーズを弾いていたことが後に判明している。独立後フランスEggレーベルから２枚のソロ・アルバムを発表した後、HAWKWINDに参加。その後全くなりを潜めていたが、このアルバムで突然復活を遂げた。フランスにある自宅の水車小屋でのライヴ録音であり、シンセはたったの１台。昔と変わらぬミニマル・ミュージックを繰り広げ、更にあのだみ声で歌われると、一挙にタイム・スリップ。ノスタルジックなトリップ感覚に胸が締め付けられる。　(坂本)



DIDIER MALHERBE
Bloom

LP/　' 年

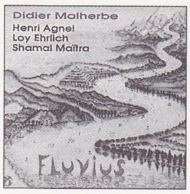
ゴングのオリジナル・メンバーの一人であるBloomdido Bad(Glad) De GrassことDidier Malherbeのファースト・ソロ・アルバム。妙に明るい色彩にとぼけたオジさんが写っているジャケットからは想像も付かないかもしれないが、実は非常に質の高いジャズ・ロックの名盤である。マレルブのプレイは勿論、バックのメンバーも突出したプレイは無いが、安定した演奏で良質なアンサンブルによるジャズ・ロックを聴かせる。3曲目ではゴングでもお馴染みの味のあるヴォーカルも聴かれる。とにかくマレルブは非常に多芸な人で、このアルバムはSHORT WAVEのような本格的なジャズ・ロック、FLUVIUSなどの民族音楽寄りのバンドに加わり、さらにゴングでも活動を続けているのだから、驚嘆せざるを得ない。　(武田)



DIDIER MALHERBE
Zeff

CD/Tangram Music 842620 '92年

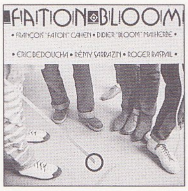
デイヴィッド・アレンがイギリスに戻って来て以来、マレルブは再びGONG人脈のミュージシャンへと返り咲いた一方で、それをきっかけに自らの音楽の探求を開始する。ボスの復帰を待つ間は取り敢えずセッション・ワークで日銭を稼ぎ、その時が来てからはじっくりと新しい研究にも精を出す姿が実にマレルブらしい（いや、もしかするとやっと自分にも再び光が当たって日頃の成果を発表する機会がやって来たということなのかも知れないが)。フランスのスラングで「風」を意味するこのアルバムで彼が取り組むのはジャケットにある異様なフルートを駆使してのチベット風疑似フォークロア。シャマール・マイトラ(perc)のバッキングが見事。J-P・リキエルやB・ルトールの参加がちょっと目を惹く。　(坂本)



DIDIER MALHERBE
Fluvius

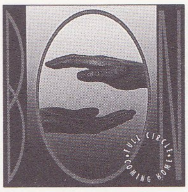
CD/Tangram New Series 852 492
'94年

GONGMAISON以来、マレルブの健在ぶりがコンスタントに伝わって来るようになったが、GONG不在中も彼はＰ・ベンスーザン、Ｂ・フォンテーヌ、Ｐ・パイルらのもとでずっと現役で頑張っていた。立派なGONG信奉者である彼がほかのプロジェクトでは全然そんな素振りも見せなかったので、無節操だという批判も受けたが、こうして「Zeff」に続くアルバムが出て来るに至って、マレルブ本人の音楽性がきちんと評価されて然るべきだという認識に到達する。編成こそワールド・ミュージック乗りだが、とても詩情豊かな美しい音楽だ。　(坂本)



FATON BLOOM
Faton Bloom
CD/Cryonic Inc. mad 3029 CD
'87年

FATON BLOOMはそのグループ名から判る通り、フランソワ・カーン(kb)とディディエ・マレルブ(sax, fl, perc)のふたりをリーダーに擁するバンドで、リズム・セクションとしてRemy Sarrazin(b)、Eric Bedoucha(d)、Roger Raspail(perc)の３人が参加している。カーンとマレルブではもうこうなるしかないという行きまくりフュージョン大会となっており、とにかくメンバー全員がムチャクチャに巧いので、何やかやと批判する隙がない。ゲストで参加のドゥニ・ヴァン・エック(vc)には正直言って驚くが、マレルブの持っているエスニック・サウンドと違和感なく溶け込んでいる。ほかにジャン＝フィリップ・リキエルも参加。結局みんなフランスのジャズ・ロック・シーンにもちゃんと居場所を持っている訳だ。　(坂本)



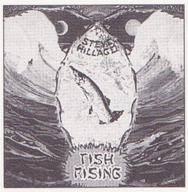
BON
Full Circle・Coming Home
CD/Lolo Records AVL 93050　'93年

ボンと言っても何だか判らないかも知れない。これはあのボン・ロザガのことなのだ。そう、懐かしいPIERRE MOERLEN'S GONGのギタリストだ。本家GONG周辺が未だに活況を呈しているのに対し、こちらの方はムーラン兄弟が時たま意外な所でジャズ系の活動を行っているくらいで、ちょっと寂しい現状だが、そんな中で登場したこのアルバムは一服の清涼剤になる。元同僚のハンスフォード・ロウ（b）及び多分新人のヴィック・スティーヴンス（d）（彼のドラミングは切れ味抜群）を中心にしたフュージョン・プレイは素直に心地よい。　(坂本)



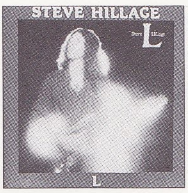
FRANCIS MOZE
Naissance
LP/FM 1082　'82年

マグマ、ゴングへの参加の他、様々なセッションで名演を残してきたフランシス・モーズ唯一のソロ・アルバム。ハービー・ハンコックに謝辞が送られていることからも想像できるように、割とハッタリの少ない正統派のジャズ・フュージョン・アルバムに仕上がっている。元々安定したプレイには定評のある人だけに（キーボードも上手い)、この手の音としては非常に質が高いことは確かだが、マグマ周辺の音楽としてはややジャンル外れの感もある。ドラムのマルク・アゾンは後にジョエル・デュグルノの「Boomerang」に参加する。　(内田)



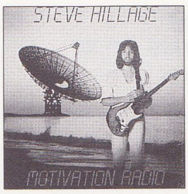
STEVE HILLAGE
Fish Rising
LP/Virgin V 2031　'75年
CD/Virgin CDV 2031
東芝EMI VJCP-2529

アレン、スミス脱退後に、残ったゴングのメンバーらと制作されたヒレッジのファースト・ソロは、そのままSTEVE HILLAGE'S GONGと呼んでもいい程の代物となった。「You」での充実ぶりをそのまま引き継いだ演奏は、ゴングの創始者2人の不在を感じさせないほどの素晴らしさである。ヒレッジ独特のエコロジカルなコンセプトは、既にこのアルバムから表出している。特筆すべきは旧友デイヴ・スチュワートの参加で、〝Hiram After-glid Meets TheDervish〞での、ゴングの最強リズム・セクションをバックにしたヒレッジとのソロの応酬は、手に汗をにぎるほどである。ヒレッジはその後、残ったメンバーと共にゴング名義で、本アルバムの曲とゴング後期の曲を中心としたライヴを行っている。　(武田)



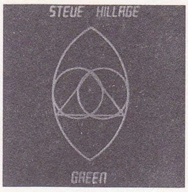
STEVE HILLAGE
L
LP/Virgin V 2066　'76年
CD/Virgin CDV 2066

アメリカに渡り、トッド・ラングレンのプロデュースとトッドのバンドUTOPIAのバッキングを得て制作された、２作めにしてGONG脱退後初のソロ・アルバム。GONG神話を継承しつつ、自らのパーソナリティを打ち立てるための旅の始まり。ドノヴァンやG・ハリスンのカヴァーを含むキャッチーなヴォーカルとギター・シンセ等、当時の先端テクノロジー/エレクトロニクスの合体は、古代エジプト趣味(オカルティズム)、60年代ヒッピー思想と未来志向、過去と未来、自然と人工の融合の試みでもある。バックが噛み合わない部分もあるが、インドの聖歌を基にしたギター・ソロや、文字通り錬金術的な対立物の統一を謳う〝Lunar Musick Suite〞でのドン・チェリーのソロは素晴らしい。これもまた上質の月の音楽。　(高山)



STEVE HILLAGE
Motivation Radio
LP/Virgin V 2777　'77年
CD/Virgin CDV 2777

この明るさとふっ切れ。GONG在籍時に制作したファースト・ソロ「Fish Risng」は確かに優れた作品だが、GONGのギタリストという枠に収まるものだった。ソロ・アーティストとしてのヒレッジのスタンスは本作で一応固まったと見て良いだろう。プロデューサーはアメリカ人のマルコム・セシル。同年のツアー・メンバーにはC・ブーレや現CAMELのC・バースも名を連ねていた。昔、TVで此の頃のプロモーション・フィルムを観たことがあるが、やはりヒレッジだった。ファンキーでスペイシーなポップス。終曲はストーンズのカヴァー。だが裏ジャケットにはタロットの「戦車」やエジプトの護符スカラベがあしらわれている。頭３曲の勢いに比べて、中盤がややメロウでそれが物足りないと言えば物足りない。　(高山)



STEVE HILLAGE
Green

L P/Virgin V 2098 '78年
CD//Virgin CDV 2098

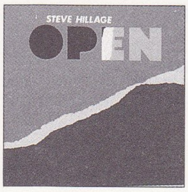
前作で結実したポップの錬金術から、N・メイスンをプロデュースに迎え音宇宙/時空間の広がりと奥行きを増した。「L」といい余りひねりは感じられないが、その辺が彼の人の良さの表われなのだろう。しかしこの心地良さ。ディレイの効果的使用等音の位相も含め、ドラッグを通して得られた大脳生理学的な配慮も生かされているのではないか。彼はここで海や木々との一体化、対話を歌う。重さや暗さの欠如が逆に日本では仇となってしまったようだが、ファンキーなフリーク野郎の笑顔の下には、K・エアーズ・バンドの先任者M・オールドフィールドとも通じるアルカイックな夢想が息づいている。ラストはGONG〝Master Builder〟の再演。代表作だが詩にはこうある「未確認。僕にラベルを貼らないでくれ」。 (高山)



STEVE HILLAGE
Live Herald

L P/Virgin VGD 3502 '79年
CD/Virgin CDVM 3502
東芝EMI VJCP-2533

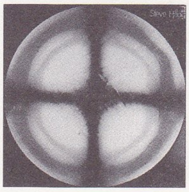
'77年、'78年のライヴを収録した、唯一の公式ライヴ・アルバム(アナログ時にはD面のみスタジオ・テイクが収録されていたが、このスタジオ部はCD化にあたり、「Open」の方に収録された)。このタイプのミュージシャンはスタジオよりもライヴの方が楽しめる。ただし、幾つかの時代のライヴのため、スペーシーな世界に没頭したままでいる、というわけにはいかない。できれば、1箇所のライヴでノン・ストップ収録して欲しかった。とはいうものの、「Green」の最強リズム・セクションによるテイク、元J・タルのClive Bunker(ds)、キャメル／3ムスタファ3のColin Bass(b)を含む編成等が1CDで楽しめてしまうのは、確かに楽しい。バックのChristian Boulé の影武者ぶりにも注目したい。 (Chihiro S.)



STEVE HILLAGE
Open

L P/Virgin V2135 '79年
CD/Virgin CDV 2135

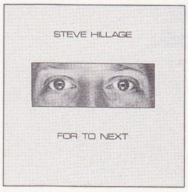
全体的にリズム・セクションやコード進行がアメリカ的だったり、散漫な印象があるためか、「Green」あたりに較べると格段に人気がないアルバム。だが、これはこれで彼特有の気楽でC調のノリを満喫できる。中華風／インド風／ドヴォルザーク風がごった煮になったような〝Earthrise〟(注：本当はアラブ音楽に影響を受けたようだ)なんか、すごいぞ。格調が高いような、間抜けなような(笑)。例によってスペーシーな部分はちゃんと押さえているし。だが、トラック・ダウン時に、リズム・セクションの処理が少し甘かったのは事実だと思う。このあたりメリハリがあれば、アルバムの評価も変わったのではないか。CD化にあたり、アルバム未収のシングル曲が収録され、曲順が大幅に変更されている。 (Chihiro S.)



STEVE HILLAGE
Rainbow Dome Music

L P/Virgin VR1 '79年
CD/Virgin CDVR 1

リラクゼーション・ミュージックとしては世界中で5指に入るアルバムだと思う。多少奏けるミュージシャンがこの手のものを制作すると、リラックスできない上、楽曲としては物足りない、という代物になりやすい。頭ではわかっていても、『俺はうまい』的な部分を出したい、という欲望を押さえ切れないからだ。そこはいつもニコニコ、スペーシー男、Hillage。見事なまでに虚栄心を押さえ込んでいる。Miquette Giraudyにゲタを預け切っているというか、シンセ奏者化しているというか。とにかくこれ1枚あれば眠れぬ夜も、穏やかなトリップ空間の演出もOK、という優れもの。現在のアンビエント・ハウスものとしても通用するでしょう。SYSTEM 7より良いぞ。がんばれ、Hillage、世界のJunkieのために。(Chihiro S.)



STEVE HILLAGE
For To Next/And Not Or

L P/Virgin Records V 2244 '82年

GONGの音楽をもっと明快なロック・サウンドに仕立ててとどまることを知らぬ快進撃を続けていたスティーヴ・ヒレッジが、バンドを解体して制作したこのアルバムは、現在までの所、最終ソロ・アルバムとなっている。当時漸く定着しつつあった打ち込みの手法を採用し、すべてをヒレッジとミケット・ジロディのふたりで演奏している。やや落ち着きのあるリズムが中心となっているものの、音楽的には前作の延長であり、良質のポップ・ソングが並ぶ。12″シングルでヒットした曲もあり、当時のVirginの戦略と何の違和感もない。「And Not Or」は初回プレスにのみ付いていたボーナス・アルバムでインストゥルメンタル・ナンバーが収録されている。現在は両アルバムを1枚に纏めてCD化されている。 (坂本)



STEVE HILLAGE
BBC Radio I Live In Concert

CD/Windsong WIN CD 014 '92年
MSI MSIF 3092

'76年と'79年のBBC音源を1枚に編集したライヴ盤。異様に音質もよく音が響いたり流れたりする空気波動までしっかり聴きとれる。随分とシェイプアップされた音と演奏内容だが、同時期のライヴ音源を含むはずのブートレッグCDを聴くと、実際はここまでタイトな曲の形をしたものばかりが並ぶわけでもないようだ。「Live Herald」をギュッと凝縮したような質のミキシングがされている。それにしてもヒレッジのギターとジロディのシンセは元気がよく、堅実なバックに不協和しながら協和するという、いつもたえず右へ左へとゆれて移動する感触が鮮やか。ジロディのどうでもいいヴォーカルも、どうでもよさの極致で最高。コンパクトな出来映えだけにうさん臭さは足りないが、お茶の間へのアピールは大きい。 (松本)

CATHERINE RIBEIRO + ALPES

POEME NON EPIQUE

□Nigel Harris　　訳●中西暢久

ポルトガル移民の娘、カトリーヌがジャン・リュック・ゴダールの4本目の長編映画「Les Carabiniers」(戦争に対するアイロニカルな寓話)に出演し、軍隊の約束にだまされる若者の一人を演じたのは22歳の時だった。この時、彼女はPatrice Moulletと出会ったのだ。が、彼女達がアルバムをリリースするに至るまでにはその後7年もかかった。それまでの間カトリーヌはソロとして唄ったりしていたが1968年の4月、五月革命の前月に彼女は自殺未遂をする。パトリスは毎日病院へ彼女を訪ね、彼女の言葉にふさわしい音楽を感じていると話しかけた。1969年の終りに彼女達に完全な表現上の自由を与えたフェスティヴァル・レーベルからファースト・アルバム「Catherine Ribeiro＋2Bis」がリリースされた。その格別な音楽はフランスから登場した最初の真にプログレッシヴなアルバムの一枚だった。そこには強い地中海風の感覚ときらめくアコースティック・ギター、喜びに満ちたコスモフォン(エレクトリック・リール)が含まれ、軍隊風のドラムとインディアン・パーカッションにより飾られていた。そこにカトリーヌの扇情的で極めて情熱的なヴォーカルが加えられていた。

1970年の8月、彼女達はAixにおけるフェスティヴァルで演奏した。彼女達の出番が来る頃には既に早朝になったいたが、目醒めさせられた観衆の反応は素晴らしく、それにより彼女達の評価は高まり始める事になる。

2作目の「Nr.2」に際しアルプの名が採用された。2BISのアルバムと違いこれには明るさは含まれていなかった。暗く、ゴシック調で時に美しくも哀しく、時に攻撃的だった。1曲のみメランコリックなアコースティック・ギターをフィーチャーするポルトガルのトラッド曲が収録されているが、アルバムの主体はパワフルなオルガン、コスモフォン、そしてカトリーヌの絶望、ある曲の歌詞を引用するならば「病んだ獣の様に息をする」うめき、叫びに支配されている。サイド2はほとんど〝Poeme Non Epique〟—— 徐々にヴァイオレントになる演奏に乗せられた不穏なモノローグ。パトリスは様々な脅迫的な音をあの多彩なコスモフォンより導き出す——ほとんど〝インダストリアル〟である—— 一方Denis Cohenは強健では反復されるパーカッションを打ち出す。

本作の直後カトリーヌは娘のIoanaを出産した。彼女の〝喜びの特別な源泉〟はカトリーヌにIoanaに関する曲を造らせた。〝Petite Fille Aux Fraises〟(リトル・ストロベリー・ガール)が「Le Rat Debile…」に収録され、〝Ioana Melodie〟は「Passions」に収録されている。この喜ばしき出来事の結果、1972年になるまで彼女達の3作目「Ame Debout」は出されなかった。この作品ではオルガンにPatrice Lemoine(ゴングにいた事もある)とベルキュフォンにClaude Thiebautが加えられた。今までの中で最も多彩なアルバムであり、攻撃的で変調されたアコースティック楽器が上手くミックスされている。インスト曲の〝Alpes 1〟は本作中の傑作だろう。カトリーヌの詞の幾つかは無気味な魅惑を見せる——「昨日、階段の上で隣人が、自らをガラスの破片で傷つけた。そこいら中へ噴き出た—— 血まみれ。私は彼女の紅い目を絆創膏でふさいであげた。」

4枚目のアルバム「Paix」は1973年の1月にリリースされた。これは彼女達の作品中、最も強固で凝集力のある一枚である。二人のPatriceに加えベルキュフォンとベースのJean Sebastian Lemoineが名を連らね、インスト曲〝Roc Alpin〟ではMichel Santangelliがドラムを担当した。タイトル曲が最初の面の大半を占める。この曲には急速度のベルキュフォン、オルガン、そしてコスモフォニックな振動との間でのインタープレイが含まれ、テーマは極度に高揚し、沈み込む。詞は痛切で見事に唄われる。——「叫ぶ者に平穏を、なぜなら彼は物事をはっきりと見通す者だから。探究する者に平穏を、コンクリート壁に頭を打ちつける者に。」〝Un Jour…La Mort〟はサイド2を占め20分を越える。それは音楽的に入り組んでおり、穏やかでコスモフォニックな部分から狂熱的な至福に至る彼女達のスタイル全てを含む。鳴り続けるオルガン



は黙示的な詞とは対称的に畏敬の念を呼び起すものだ。この超現実的物語において死は邪悪な妖婦として描かれる――世界は戦争の凶行に満たされた物として描かれ、生の素晴らしさを称える事のみが、「死という名の美しき女」からその囚人を解放させる――とある。

1974年の6月には5作目、「Le Rat Debile Et L'homme Des Champs」が発表された。この時からアルプの音はより洗練され、3人のミュージシャンが新たにかかわった。多くの意味でこれは彼女達の最も冒険的な作品で、全体を通してメランコリックだが、カタルシスを得る事に失敗している訳ではない。サイド2にはLP「N°2」からのテーマ的継続である"Poeme Non Epique(Suite)"が25分25秒にわたって収められており、その「N°2」同様カトリーヌのモノローグが大きくクリアーに情熱を込めて語られ、最後に至ってようやく唄われる。「私は同時に悪魔的、華麗、甘く、やさしく、そして暴力的でなければならないと考えた――常に征服される事なく――真実にも偽りにも――必要に応じて――」本作は彼女達の最も雄弁な宣言に違いない。それに付け加えられたドラムス、ベルキュフォン、そして永続的なコスモフォンのほとんど絶える事なく続く響きは魅惑的だ。しかしエンディングはこれまでの何よりも暴力的だ。最もドラマティックで人を引き込む曲を含む真の傑作。

1975年の10月、6作目の「(Libertes?)」発表。PatriceとDanielに加わる二人の新しいメンバー、ベースのHenri Texierとパーカッションの Carroll Reyn。非常に力強くパワフルなアルバムではドラムスがベルキュフォンに取って替っている。雰囲気ははっきりとして、ダイナミックな物だ。「(Libertes?)」は全ての作品中最も政治的な作品でサイド1の最後に入っている恋愛詞以外は熱情に貫かれている。サイド2はまたもや"Poeme Non Epique No.3"と言うこのシリーズの最終作であり三部構成の大曲一曲で占められている。第一部の"Prelude No.3"でのゴシック・インストゥルメンタル、続く"Concerto Alpin"中ではカトリーヌが鈍感な政府の元での人々の苦難、受難を表現している。そして断末魔のごときフィナーレ"Tombe"では無調のカオスへと落ち込む。凍り付くような叫び、無秩序な音の波、狂躁的なドラム。感情の渦に呑み込まれるようなフィナーレである。

7作目のアルバム「Le Temps De L'autre」は1977年の10月にリリースされ、今回PatriceとDanielに加わったのはベースのJean Daniel Couturierとドラムの Jean Louis Doだった。今作は熟成され、5曲の長く丁寧に書かれた曲を含む好作品だ。インスト曲の"Kel Epik Epok Opak！"(何と異常に不透明な時代！)はその楽曲中に見られる多くの微妙な点から特に注目の的となるだろう。シンフォニックなキーボード・サウンドは本作にクラシカルな特色を与えているが依然としてゴシック的で、シリアスだ。3年後の「Passions」と並んで最も整合感にたけたアルバムの一つだろう。

その後、3年間のバンドの沈黙の間、カトリーヌはソロ・アルバム「Le Blues De Piaf」('77)と「Jacqueries」('78)を発表し、'80年代以後のソロ活動の布石を築くこととなる。

「Passions」は1979年に登場し、それは様々な点で驚かされるアルバムだった。第一にコスモフォンが使用されていない事。Patrice Moulletはギターのみを担当している。キーボードとシンセにPatrice Lemoineが復帰している他は皆、新顔だった。とりわけMireille Bauer(perc)とDavid Rose(vln)のプレイが大きくフィーチャーされ全体をひきしめている。インスト2曲を含む全8曲はきらめくようで高揚感を持ち、これまでになく明確なメロディを持つのも特徴である。パッションとは勿論カトリーヌのそれであり、各曲の詞はそれぞれの感情を知的に表現している。――人権、第三世界の解放、失業、彼女の娘Ioana、ジェーン・フォンダへの賛辞、そして彼女の唄への愛。11分に及ぶ"L'oiseau Devant La Porte"は仕事が得られない16才の少年の物語を冬場の幼鳥の悲劇的な運命と巧みに並置している。

1980年には最終作「La Deboussole」がリリースされた。二人のPatriceとFrancis CampelloにヴァイオリンのRene Verneer、パーカッションにPierre Gasquetが加わりコスモフォンが復活した！ 作品の出来栄えはパワフルで判り易く、良くプロデュースされており、ロック色が強い。サイド2の後半は彼女達の白鳥の唄であるかのようだ。そこには"Paix"が再録音されている。よりリズミックにエネルギッシュで新曲と言うにふさわしい。それはカトリーヌの持つユニークなプロテスト・シンギングと詩才を全くもって革新的な音楽と結び付けたグループの墓碑銘として確かにふさわしい物だった。再度"Paix"から引用しよう。「今は亡き男、一生の間、より良き明日の為に辛苦し続けた男に今こそ安寧を。」

歌手カトリーヌ・リベロの歩み

文●賀川雅彦

カトリーヌ・リベロの名前がプログレッシヴ・ロック・ファン以外にほとんど知られていないことからも分かるように、現在までのところ、彼女の歌手、ミュージシャンとしての評価、業績はアルプを抜きにして語ることは出来ない。そんな彼女であるが、ここではあえてアルプを離れたソロ・シンガー、カトリーヌ・リベロの軌跡を残された作品をもとに追ってみたい。

ゴダールの映画に出るなど、元々は女優として芸能界にデビュウしたリベロであるが、カトリーヌ・リベロ＋2ビスとして'69年にLPをリリースする以前の音楽活動についてはほとんど語られることがない。以前本誌にも少し書いたが、2枚の4曲入りEPが確認されている以外、これといった資料が見当らない。2枚のEPのうち古いと思われる方には1966の文字を見ることが出来る(ただし手許にあるのはスペイン盤)。'60年代中頃から歌手としても活動を始めたのであろう。これらEPの曲を聴くかぎり、彼女の意志がどうかはともかく、この頃はフレンチ・ポップスのアイドル歌手としての成功を目差していたものと思われる。ボブ・ディラン、ピート・シーガーらのカヴァーを含む、短かく分かり易い曲をアルプ時代と比べるとかなり高いトーンで、また、若い女性ならではのセクシーな感じを少し出して歌っている。しかし、彼女の本来の声域でないため、かなり不安定で、へたなアイドル歌手といった感は否めない。雰囲気で聴かせるタイプでもないので、この路線に固執していたら、歌手カトリーヌ・リベロは消えていた可能性が高い。恐らく、本人にとってこの頃のこと(歌手としての活動)はどうでもいいことであり、また、作品としても価値のあるものとは言えないが、ファンにとっては興味深い。この後、彼女はどのように変身していったのであろうか。これらEPとカトリーヌ・リベロ＋2ビスとのギャップは凄まじく、その変化は衝撃的ですらある。

'69年にファースト・アルバム「Catherine Ribeiro＋2Bis」を発表、その後、グループ名をアルプに改めて、'77年に「Le Temps De L'Autre」をリリースするまでの8年間は正にカトリーヌ・リベロ＋アルプの全盛時代である。フレンチ・プログレッシヴ・ロックの黎明期から円熟期まで、常にシーンのトップを走っていたと言っても過言ではない。当然のごとく、活動のほとんど全てがアルプとのものであり、「La Ville Á Prendre」(サントラ曲)のような個人名義のシングルもあるが、それらもPatrice Moulletとの共作で、実質的にはリベロ・エ・アルプの作品と言える。そうした中、唯一例外的に彼女のソロ(名義はCatherine Ribeiro





Et Les Choeurs De L'Armee Sovietique)と言ってもよい作品がシングル「Les Partisans/La Varsovienne」である。アンサンブル・ドゥ・モスクワ(コーラスと楽団から成る)との共演盤で、A面がシベリアの民衆の歌であり、B面がポーランドの革命歌である。当時のリベロの政治的姿勢及び音楽家としてのポリシーが顕われたものと言える。人々を鼓舞することを目的とする革命歌、民衆歌とリベロの太く低い声はよく合い、シンプルながらも力強いサウンドになっている。リベロの本領が発揮された作品であり、仲々の出来である。

「Le Temps De L'Autre」をアルプと発表した'77年、リベロはそのアルバム・タイトルのように、突如ソロ活動を開始する。同年、エディット・ピアフをテーマにした本格的シャンソン・アルバム「Le Blues De Piaf」がリリースされた。オーケストラをバックにピアフの代表曲「愛の讃歌」他、シャンソンの名曲を熱唱している。シャンソンらしく情感を込めて歌っているが、基本的表現方法はアルプ時代のものとあまり変わらない。歌唱力があることが分かる力作であるが、表現方法がやや均一的で変化に乏しく、面白味に欠けることも事実である。シャンソンには精通していない筆者にも先達の域には及ばないことがすぐに分ってしまう。翌'78年には詩人ジャック・プレヴェールの作品にクラシック・ギタリストのSébastian Marotoが曲を付けたものを、彼及びオーケストラと共演して歌った「Jacqueries」を発表した。かなりの難曲揃いであるが、作り及びアレンジがリベロ向きになっており、彼女はそれらを歌いこなしている。前作より楽しめる内容であるが、アルプとの作品のような説得力は感じられない。今考えると、シャンソンとしての評価は別にしても、リベロがこの時代にこれらの作品を発表したことは意義あることだったと言えるだろう。彼女は1つの可能性を感じ取ったに違いない。

'79年にアルプとの活動を再開し、その後、2枚のアルバムを発表する。そして、'82年、彼女は大転機を迎える。アルプ、そして、実質的にはアルプの別名とも言えるPatrice Moulletと別れ、ソロ・アルバム「Soleil Dans L'Ombre」を発表したのである。全9曲、ピーター・ガブリエル作の1曲を除いて、全てをThierry Matiaszekが作曲し、アレンジも彼が担当している。



演奏はFrançois Auger、Didier Batardらがスタジオ・ミュージシャンとして行ない、ポップで乗りの良いロック・ミュージックに仕上がっている。しかし、リベロの本領はほとんど発揮されておらず、彼女の歌手としての力量が感じられるのみに留まっている。時代に合わせたヒット指向のサウンドは彼女に向いていない。本人もそのことを感じたらしく、'83年発表のシングル「Jour De Fete/Carrefour De La Solitude」は伝統的なシャンソンとポップなロックな中間に位置している。その後も試行錯誤の時代が続き、'86年には自らのレーベルIoana Melodiesを設立、その第一弾として「Percuphonante」をリリースした。再度のPatrice Moulletとのコラボレーションであり、お互いの力が十分に発揮されており、リベロが望んだ作品かどうかは別にして、作品自体の出来はとても良い。Moulletのプログレッシヴな音作りが特に印象的である。しかし、この作品はやはりリベロが目差すものとは違っていたのであろう。以後、ベスト・アルバム以外は'88年まで彼女の作品は発表されていない。

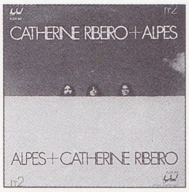
'88年にアルバム「1989....Déjà!」が発表されるが、その間、彼女はどんな活動をしていたのであろう。シャンソン歌手として多くのライヴを行なっていたのではないだろうか。そんな想像をさせるほどにこのアルバムで聴くことの出来る彼女の歌はシャンソン歌手として著しく成長している。力まず切々と歌いかける姿はかつてのフランスを代表するロック歌手とは一味違う。情感に富んだ繊細な表現は人生の喜怒哀楽を巧みに歌い上げるシャンソン歌手のものである。フランス国歌"La Marseillaise"を堂々と歌うリベロにもう迷いはない。そんな彼女のライヴを聴くことが出来るCDが'92年にリリースされた。「L'Amour Aux Nus」と題されたこのアルバムで、リベロは、アンリ・ロジェ(ポール・レーベルの「Image」がプログレッシヴ・ロック・ファンには知られている)のピアノのみをバックに、ジャック・ブレル、ジャック・プレヴェール、レオ・フェレ、ジェラール・マンス等の曲を延び延びと、そして、表情豊かに歌い上げている。多少なりともヒット指向を持った歌手が多いヌーヴェル・シャンソンとは違う本格的シャンソン歌手を目差して歩むリベロの姿を見ることができる。フレンチ・プログレッシヴ・ロック・シーンの頂点を極め、その名を永遠に残すであろうカトリーヌ・リベロ。プログレッシヴ・ロックよりも幅広い音楽性を要求されるシャンソンの世界でも成功を納めることが出来るのであろうか。挑戦は始まったばかりである。





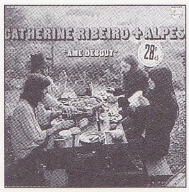
CATHERINE RIBEIRO＋2BIS
Catherine Ribeiro＋2Bis
LP/Festival FLDX 487　'69年

MAGMAの１stすら世に出ていない'69年、フレンチ・プログレッシヴ・ロックのパイオニアとなった作品。五月革命～De Gaulle退陣という激動期のフランス（フレンチ黎明期のバンドにはポリティカルなものが多いのもこうした理由だろう）、彼女自身の絶望と死との対峙、そしてP・Moulletという片腕を得た事が一介のシャンソン歌手を劇的に変貌させた。トラディショナルなac-g、タブラを含む効果的なper等、シンプルながら見事に曲を盛り上げるバックを従えた彼女はまさに「爆発している」という形容が相応しく、その後の大地を揺るがす様な重厚さとは違う、彼女自身にも制御不能な内的衝動と若さと大器の予感が本作には封印されており、その本質は古いどころか新鮮さを増しているとすら思える。（山田）



CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
Catherine Ribeiro＋Alpes
LP/Festival FLDX 531　'70年

カトリーヌ・リベロの２作目。デビュー作の２BISからALPESへと改名している。リベロはこのパトリス・ムーレを中心とするアルプを率い、実質的には彼女自身を含めた一つのバンドとして７作目に至るまでに「Ame Debout」（'72）「Paix」（'73）「Le Rat Débile Et L'homme Des Champs」（'75）「Libertés ?」（'75）を、それ以後「Passions」（'79）「La Déboussole」（'80）を発表している。本作はa-g.に乗せたシャンソンの小曲とアルプのやや混沌とした演奏に彼女のうなるようなヴォイスや語り、叫びを乗せた大曲から成る。どちらの傾向も彼等のサウンドの原型と言うべきものである。またリベロのヴォーカルに関すれば円熟しきっていない初々しさと荒々しさを秘めている。以後の動向を占った初期の代表作と言える。（松本）



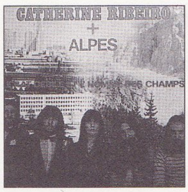
CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
Âme Débout
LP/Philips 6332 017　'72年

霧の様に包まれた気、体の中をどくどくと流れる濃い血が、プリミティヴな野性へと向かって叫び交わす様にカトリーヌ・リベロの声と姿は印象的だった。蒼白い瑞々しさが張りつめた1st、その延長にありながらジャーマン・ロックの様に混沌とした2nd、情念の煮えたぎる「Liberté ?」、真髄とも言うべき「Paix」、円熟期の「Passions」、そして「Paix」同様、奥深い山の中からこだまする如く「Âme Debout」の悲しげな響き、それは過ぎ去った遠くから来て、過ぎ去った遠くへと回帰するうなされた幻影として、脳裏に焼きつけられたのだ。どうしようもない何かが在る。彼女のヴォーカルの魅力が存分に発揮された、しかも素晴らしいアルプの演奏が聴ける粒揃いの作品集として本作の価値は未だ褪せずに在る。（平野）



CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
Paix
LP/Philips 6325 019　'72年
CD/Mantra 642078

カトリーヌ・リベロ＋アルプの音楽活動は、'68年５月のパリをピークにする学生運動が背景になっている。４作目の「Paix」の真赤な内ジャケットには、たる風呂で泡にまみれ受話器を片手に愛想をふりまく女優らしき人物と、子供を抱え苦汁に歯をくいしばる東洋人の母親とがコラージュされているが、これが当時のベトナム戦争への反戦であることは一目瞭然だ。リベロは'70年代後半にピアフの〝愛の讃歌〟を歌うまでメッセージ・シンガーの色が濃い。前半の比較的ポップな小曲は古臭さも込みで愛くるしいが、旧Ｂ面の大曲に進むと、独白からにじみ出るような重味を感じ取れる。感情の揺らぐ様をどこまでも続くオルガンの響きと共に聴くようで切迫感があり、それでいて詩的な静寂感もある。傑作の一つ。（松本）



CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
Le Rat Débile Et L'homme Des Champs
LP/Philips 9101 003　'74年
CD/Mantra 642084

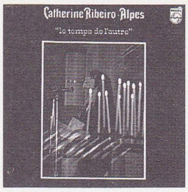
このアルバムには〝Poème Non Épique〟という大曲が入っている。それも二つも。次作「（Libertés ?）」にも。これまでも大曲を入れてはいたが、アルバムを渡って程の大曲は、この曲だけだ。そう思うと、この曲は当時の彼女達のコンセプトだったと見ていい。「Le Rat～」はこの為に用意されたパッケージだった気さえする。アルプ・サウンドの特徴でもある手製楽器ペルキュフォーンとコスモフォーンの不安定なトーンと、前作来のオルガンとで作り出される情緒の揺らぎのような背景の中に、リベロの声が時には詩の朗読とも歌ともつかず響く。それはどこまでもからまりながら流れていくようで形を成さない。歌や声になって来る向こうでうごめいている、そのうごめきを感じ取れる。全然ポピュラーじゃない。（松本）



CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
(Libertés ?)

LP/Philips 9101 501　'75年
CD/Mantra 642083

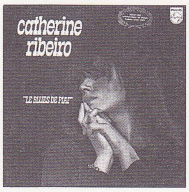
前作のテーマ〝Poème Non Épique〞の大曲〝N°III〞を収録した6作目。前作がアルプの作品中、最も脚色を除いたある意味でベーシックな部分で展開したアルバムだったとすれば、このアルバムは感情の起伏が激しいぶんだけ聴きやすいかもしれない。前作での絡まり合いながらの流れは、このアルバムで曲ごとにわけられ、各々の特色を出すよう煮詰められたような感じだ。1曲目のドラマチックなロック調、2曲目の演劇色、4曲目の耳元で呟やかれる詩、そして5曲目、とどれも性格がある。「Ame Debout」から「Paix」へ未分化なまま実り、そのまま形を眼中にとめず没入した前作、そしてこれを曲単位に整理し始めた本作へ。まさに渦中。登り詰めた最後に絶叫混りに混沌のまま破綻する〝N°III〞が圧巻。　(松本)



CATHERINE RIBEIRO
Le Temps De L'autre

LP/Philips 9101 155　'77年

カトリーヌ・リベロの7thアルバム。現在までに、彼女は2ピスと1枚、アルプと8枚、ソロ名義で6枚、計15枚のアルバムをリリースしているが、本作はヴォーカリストとしての実力を十二分に発揮した代表作の一つである。女性らしからぬ重厚さを持った太く延びのある声に一層磨きがかかり、そのうら悲しさを感じさせる表現力豊かな歌唱は、リズムを強調したドラマチックな演奏やギターとキーボードを中心にした控え目ではあるが的を得た演奏と一体となって聴く者を圧倒する。B②はアルプのみによるインスト・ナンバーであり、メロディアスなキーボードと力強いリズムが印象に残る。以後、グループは活動を2年間休止、リベロは2枚のソロ（ピアフとプレヴェールの作品を唄ったもの他）を発表する。　(賀川)



CATHERINE RIBEIRO
Le Blues De Piaf

LP/Philips 9101 156　'77年

リベロがシャンソン・シンガーとしての実力を発揮したアルバム。ピアフ集を出すことで、多くの人がリベロを認めた。このアルバムは当時国内盤も出たほどでフランスでも賞をとっている。本当にいいかげんなものだ。〝シャンソン〞スタンダードという枠がついた途端に注目を浴びるというのは、いかにフランスがこれを囲っているかを示している。リベロはこれ以前から歌う事に関して充分な程の事をアルプとのアルバムで示してきていると思うのだが。リベロがこうしたアルバムを出したということは、彼女の歌う事が必ずしもアヴァンギャルドを目指したわけではなく、歌う事を彼女の個人的な部分でとらえてきたからだと思う。そこに例えばピアフの〝愛の讃歌〞があったとしても何の矛盾もない。オマージュでさえある。　(松本)



CATHERINE RIBEIRO
Jacqueries

LP/Philips 9101 201　'78年

〝カトリーヌ・リベロ、ジャック・プレヴェールを歌う〞というサブ・タイトルのアルバム。前作のピアフ物に続く、シャンソン作の第2弾。最近のリベロの原点になった2作でもある。'70年代が結息していくようにも思える。リベロの歌はこれら2作でアルプとの作風から離れてオーソドックスだ。落ち着いた物哀しげな曲が目立つ。その点では、前作よりも感情の起伏のおさえられた作風だ。こうした歴代のシンガーにオマージュを向けることで、リベロはいわゆるシャンソン・ポピュレール、アイドル・シャンソンとは別路線の歌い手であることを証明した結果ともなったはずだ。この後、アルプを復活させるものの再び解消したところを見ても、この時期に彼女の大きな転期があったことは確かだろう。　(松本)



CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
Passions

LP/Philips 9101 270　'79年

リベロのシャンソン集を挟んで、彼女とPatrice MoulletはALPESを再編する。中でも新加入のDavid Rose(vln, ex TRANSIT EXPRESS)とMireille Bauer(perc, vib,GONG)がこのアルバムに新風をもたらせている面は大きい。これまでの大曲や壮大な曲想は後退しているが、よくまとまった佳曲が多く、代表作の一つに数えたい。インスト・ナンバーを2曲収録していることから想像できるように演奏面での充実も見れる。その一方でリベロの歌は幾分パッケージされた気がするとしても、相変わらずの肺活量で迫る。1曲目の〝Ioana Mélodie〞での声の延びなんかは、リベロ以外の何者でもない。深い所から吐き出される際の声が、これまでの絶叫よりも歌の形をとって伝わる。そうした傾向のアルバムだ。　(松本)



CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
La Déboussole

LP/Philips 6313 096　'80年
CD/Mantra 642088

リベロとアルプの最後のアルバム。前作「Passions」での整合感と晴れやかさは、更にこのアルバムに延長されている。特に新加入のベーシストが持ち込んだ当時流行のトーンは、これまでの音楽性から少し異和感を感じさせもする。やけに元気に明るく上滑りしそうな〝健全さ〞だ。楽器編成は前作に変わっていないがメンバーはP.Moullet,P.Lemoineの中核を除いてまたも変わっており、バンドとしての不安定さも感じさせる。②⑤⑥曲目等の従来のアルプらしい小曲はあっても、もう一つ魅力を欠く曲も少なくない。アルバムは「Paix」のタイトル曲をリアレンジした〝Paix 1980〞で幕を閉じるが、メッセージ色を持ったアルプ、フランスの'70年代をしめくくるようでもあり、この曲で終止符を打ったのも納得できる。　(松本)



CATHERINE RIBEIRO
Soleil Dans L'ombre
LP/Philips 6313 354 '82年

前作を最後にリベロはアルプとのバンドを解消してソロ活動に入った。バックもセッション・ミュージシャンを使って、前作での同時代アプローチを更に延長したようなアレンジの中で歌っている。リベロの冒険ではあるが、おそろしく俗っぽい。こうした没個性的な平均化したアレンジや演奏をバックにしては、リベロの唱法が生かされるはずはない。しかし、これは多分リベロが望んだことなのだろう。リベロとアルプのイメージは強いものだけに、それを振り切りたかったような垢抜けた内容だ。それにしても、どれといって印象に残る曲がない。ピアフ物やプレヴェール物の時のリベロも感じられず、ひたすら時代に合わせようとした迷うリベロとして映ってしまうのだが。 (松本)



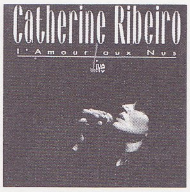
CATHERINE RIBEIRO
Tapages Nocturnes
LP/Ioana Melodies 8526 '87年
CD/Ioana Melodies 8528

カトリーヌ・リベロのオムニバス盤。未発表曲1曲、自主製作盤として発表された「Percuphonante(IM001)」('86)から5曲、シングルの曲3曲('82、'83)、「La Deboussole」から1曲の計10曲が収録されている。最大の興味は「Percuphonante」の曲であろう。共演者はPatrice Moulletとキーボード・プレイヤー1人。2BISから15年、Moulletとの最後のコラボレーションである。リベロのヴォーカルは相変わらずの迫力があるが、以前よりも余裕を感じさせるもので、荒々しさが後退している。表現力がより豊かになったことを示している。一方、Moulletらの演奏は、彼のファースト・ソロにも通じるリズムを重視したもので、これまた以前とはちょっと雰囲気が違っている。両方が何とか調和しているが、その限界も感じられる内容。 (賀川)



CATHERINE RIBEIRO
1989 ... Déjà!
LP/EPM FDD 1057 '88年

前作はあやうく自主製作に終ってしまうところだったが、アルプとの活動を解消した途端の「Soleil〜」の迷いぶり、そして前作のベスト物と、この頃の彼女は苦しかったのだと思う。アルバム・リリースのインターバルもあいてきている。'70年代の空気を象徴的に体現したからこそ、その'70年代の空気が終息すると共にリベロも忘れられていったのかもしれない。そうした彼女の流れの中で、やはり彼女は歌を出してきた。それも等身大の。このアルバムは'70年代のアルプとの各作よりも「Soleil〜」からかけ離れた内容だ。余分な脚色がない。地味ではあるが素直に歌っている。既に'80年代も後半。ここから今の作風にそのままつながっているが、それにしても'80年代のリベロ、'70年代の人にとってなんと'80年代とは不遇なことか。(松本)



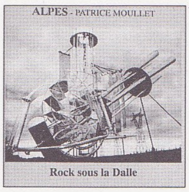
CATHERINE RIBEIRO
L'amour Aux Nus
CD/Mantra 073 '92年

アンリ・ロジェ（Pôle等のレーベルから数枚のアルバムを発表しているキーボード奏者）のピアノのみをバックにしたライヴ・アルバム。ジャック・ブレル、ジャック・プレヴェール、レオ・フェレらの曲を歌う彼女はもう本格的シャンソン歌手である。フレンチ・ポップスのアイドルとしてデビュウ（数枚のＥＰがある）したものの成功せずロックに転向、ALPES（2Bis）を率いてプログレッシヴ・ロック・シーンで大活躍したのは昔話。新たなる視点で彼女を捉えなければならない。ALPESとともに活動していた時代にも、ソロ・アルバムとして、この種の作品を発表しているが、表現力の視点では大きく進歩したと言える。しかし、多くの先達のような存在感はまだない。彼女はシャンソンの世界でも成功するだろう。 (賀川)



CATHERINE RIBEIRO
Fenêtre Ardente
CD/Mantra 081-642081 '93年

全９曲、作詩は全てリベロで、大部分の曲をかつての盟友Patrice Moulletが作っている。バックの演奏はアルプのメンバーではなく、フランシス・モーズらがスタジオ・ミュージシャン的プレイをしている。しかし、これが非常に的を射たもので、決して前面に出ることはないが、リベロの歌を大いに盛り上げている。ピアニストとしても参加しているMichel Précastelliのアレンジも素晴らしく、歌手として幅が出て、表現力の増したリベロの持ち味をうまく引き出している。ファン必聴の１枚。 (賀川)



ALPES-PATRICE MOULLET
Rock SOUS La Dalle
CD/MSI 14809 '93年

カトリーヌ・リベロ＆アルプはフランスで最も早く活動を開始した、最大のプログレッシヴ・ロック・グループの一つである。リベロの迫力ある個性的なヴォーカルとアルプのプログレッシヴな演奏が一体となったサウンドは本当に素晴らしいものであった。本アルバムはアルプの中心的メンバーだったパトリス・ムーＶの初のソロであり、グループ解散後の彼の活動の成果を知ることが出来る。キーボード、ギター、打楽器等を駆使して彼が作り出したサウンドは非常に実験的であるが、決して難解ではない、音の構築物と言うに相応しいものである。 (賀川)

FRENCH ROCK



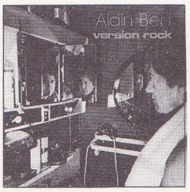
ワパスー

A to Z



ADA LE FOL
Les Années D'Errance
LP/Elia Disques 2230093

1970年代のフレンチ・シンフォニック・シーンにおいては、終始ANGEがシーンをリードしており、メジャー、マイナーを問わずその影響を受けたグループは極めて多い。ここに紹介するADA LE FOLもそうしたグループの１つである。しかしながら本作はあまたある同系統のグループとは一線を画す完成度の高さが見られる。Side Aは多少散漫な印象を与えるが、Side Aのラスト〜Side Bにかけての緊張感と密度の濃さは、全盛期のMONA LISAを思わせる素晴らしいものである。特にヴォーカリストAda Le Fol（彼の名前がグループ名にもなっている）の説得力と表現力には目を見張るものがあり、本作以外の作品があるのか気になる所である。マイナー・シンフォニックの名作として高く評価したい。（中島洋一）



ALAIN BERT
Version Rock
LP/SRP 2022 '81年

アラン・ベールなるシンガーが、ジ・アクターズと名乗るベース、ドラムス、ギター２人から成るグループのややハードな演奏をバックに唄う、普通のロック・アルバムである。音作りにそれなりの工夫が為されており、出来としては悪いものではない。ただし、プログレッシヴ・ロック的要素は全くない。とは言うものの、Ａ⑤に収められた曲〝La Mémoire Du Souvenir〞は多少なりとも注目に値する。アレンジ及び演奏がVictor Bosch(ds)、Jacques Roman(key)、Gilbert Gandil(g)、Roland Richard(sax, fl)、Michel Masson(b)の５人、そうピュルサーなのである。サウンドのほうはプログレッシヴ・ロックではないが、アルバムの中で最も出来の良い曲の１つになっている。（賀川）



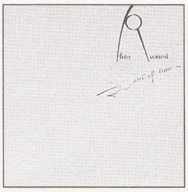
ALAIN GORAGUER
La Planète Sauvage
LP/Pathé Marconi 2C 066-12698 '73年

「野蛮な惑星」と題されたアニメーション・フィルムのサウンド・トラック・アルバム。このフィルムは20年程前、日本でも公開したとかしないとか(数年前にも再度一般上映された)、残念ながらあらすじは不明である。サウンドはテーマとなるべき印象的なフレーズがフルートやピアノ等で変奏されながら淡々と進行するものである。とりとめのない雰囲気が全体を支配している為に多少物足りなさを感じる人もあろうが、ＳＦ的なフィルムのバック・ミュージックとしてはかなりな高水準なものと確信する。時として現れる女性スキャットも魅力的である。基本は同パターンのリズム・セクションで、ドラッグ・ミュージック的な役割りもかね備えている。かくれた名盤といえる。（山崎）



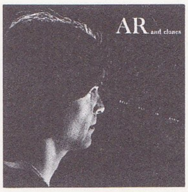
ALAIN MARKUSFELD
Le Son Tombé Du Ciel
LP/Barclay XBLY 920 327 '71年

「Le Monde En Étages (Barclay XBLY 980.179)」('70年)に続くアラン・マルクスフェルのセカンド。前作同様、正にロック・ギターリストのソロという相応しい内容である。ベース、ドラムス、キーボード、パーカッション等のサポートを受けながら、マルクスフェルは、ロック的手法に基づいた、変化に富んだプレイを展開している。一部ヴォーカルを交えた、ゆったりとしたサウンドは、シンフォニック・ロックでも、ジャズ・ロックでも、ハード・ロックでもない、彼独自のものである。メロディアスかつ凝ったアレンジの曲は、当時としてはかなり斬新なものと言える。本作発表後、6年間沈黙したが、'77年、エッグ・レーベルから「Le Désert Noir」(Egg 990,528)を発表、以後も２枚のアルバムをリリースしている。（賀川）



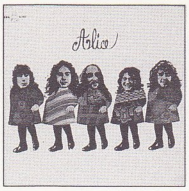
ALAIN RENAUD
Out Of Time
LP/Urus 000 010 '76年

元トリアングルのギターリスト、アラン・ルノーの２枚目のソロ・アルバム。トリアングルのサウンドとは全く異なる前作同様、ジャンルに捕われない音作りがされている。ジャズ・ロック、ブルース・ロック、一般的なロック、更にはエルドンのようなエレクトロニクス・ロック等の要素を自由に組合せた曲が次々に登場する。曲自体はゆったりかつシンプルなものが多いが、いずれも一風変わっており、彼ならではの曖昧模糊とした白日夢のような印象がある。そうした中、度々登場するアラン・ルノーのギター・ソロはどこか'60年代末から'70年代初めのイギリスのブルース・ロックあるいはハード・ロックの影響を感じさせるもので、彼のロック・ミュージシャンとしてのルーツが窺える。（賀川）



ALAIN RENAUD
Back And In Again
LP/Carrère 67836 '78年

Disjuncta-Urusレーベルに２枚のアルバムを残したアラン・ルノーのサード・アルバム。何故かほとんど話題にならず、すぐに廃盤になってしまった。全８曲、ヴォーカル曲が２曲あり、曲ごとにパトリック・ゴーティエ、ブノワ・ヴィドマン、リシャール・ピナスらがサポートしている。アラン・ルノーのギターを中心に、ロック色の濃い演奏であるが、度々、はっとさせられる素晴らしいプレイが登場し、さすがに並のロック・アルバムとは一味も二味も違うと納得させられる。かつての作品に見られた強い個性こそなくなったが、十分に面白味のある作品であり、英語の歌詞のややポップなヴォーカルもそれなりに楽しめる。（賀川）



ALICE
Alice
LP/BYG 101 '70年

アリスのデビュー作。５人編成中の楽器構成はギター、ベース、ドラム、キーボード、管弦楽器である。曲はどれもアレンジされたもので、傾向のばらつきや演奏のあまさがあるものの、'60年代以来というべきポップ感覚を下地にしていて、メロディアス、かつ、ほのぼのとした雰囲気をもっている。アップ・テンポな部分でのポップ感覚は少々露骨だが、フルート、オルガン、ヴァイオリン、サックス、アコースティック・ギターの柔かな音色による静の部分でのそれは、'70年代初頭の淡い感覚に満ちている。後年には２作目「Arrêtez Le Monde」(Polydor 2393 043) を発表し解散に至るが、キーボードのアラン・スーザンはソロ製作外にドラムのアラン・ヴェスと共にエマニュエル・ブーズの２作目へ参加している。 (松本)



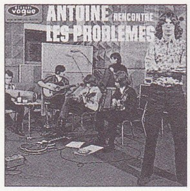
ALICE
Arrêtez Le Monde
LP/Polydor 2393043 '72年

アリスのセカンド。グループは前作と同じ５人編成であるが、アラン・スーザン、ドゥドゥ・ヴェス以外のメンバーが一新されている。また全ての曲の作詩、作曲をスーザンが一人で担当している。こうしたこともあってか、前作よりもアルバムとしてのトータル性が感じられる。メロディアスな音作りは不変であるが、ポップ色はやや後退し、よりシンフォニック・ロック的要素が増えている。フルート、リコーダー、アコースティック・ギター、ピアノ等によるリリカルでファンタジックな演奏部分のフランス語の特質を活かしたほのぼのとしたヴォーカル、コーラスが最大の聴き所である。ヴォーカルを英語に差し替えたドイツ盤「All Ice」もあるが、ジャケットはかなり醜悪なものに変わっている。 (賀川)



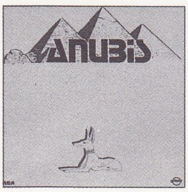
ÂME SON
Catalyse
LP/BYG 529・324 '70年

マルク・ブランクとパトリック・フォンテーヌ（後にNYLへ）が初期ゴングへ参加し、そこで結成された４人組、アム・ソン。デビューはアムージでのコンサートで、それは67年末〜70年前半のことである。本作はライヴ活動中心の彼等が残した唯一の作品である。何曲かはイギリスで録音され解散後、録音されてから２年後にリリースされた。内容はゴングの1st等に共通する、ポップスから脱し始めた当時のニュアンスを満載したものである。フリーな部分、ポップなメロディーを持つ部分、何れもフルートを多用し、かつサイケな雰囲気に包まれている。政治意識と実験的試みをその音楽の理念とし社会への働きかけを試みること。彼等のこの姿勢は音楽の分野で68年の５月革命に前後する時代背景を如実に物語る。 (松本)



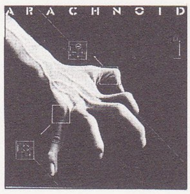
ANTOINE ET LES PROBLÈMES
Antoine Rencontre Les Problèmes
LP/Vogue VF-47026 '65〜67年？

仏ガレージ・シーンは数々の名作シングルを残したが、飛び抜けて出来の良いLPとなると、殆ど思い浮かばない。PROBLÈMESもやはり初期のシングル盤の評価が非常に高く有名なグループだが、実はLPの出来も良い。粋でセンスの良さカッコ良さに泣かされるRonnie Birdに比べ、こちらはプリミティヴでラフな演奏、でこぼこした感じが垢抜けなく対照的な作風。それは初期ストーンズの様なワイルドさなのだ。実に魅力的。２〜３曲オールディーズ的曲調があるが、後は全面パンキッシュな演奏。LPではAntoineが参加しており、彼のソロも聴いてみたのだが、こちらは単なるオールディーズ。とにかく欧米ではこうした'60'sガレージ・パンクの人気が高くて、日本の音楽ファンとの間に格差を感じる。 (平野)



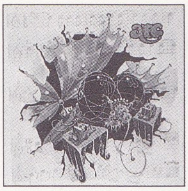
ANUBIS
Anubis
LP/RCA ZL 37781 '83年

大手RCAからリリースされたものの、すぐに廃盤になってしまったアヌビスのデビュウ・アルバム。メジャー・レーベルから出たことからも分かるように、演奏技術、曲作り等は、自主製作のシンフォニック・ロックよりも一枚上手である。ハイ・トーンの男性ヴォーカルとリリカルなコーラスが印象的な、どことなくタイ・フォンを思わす曲もあるが、大部分はアンジュ、アトールをよりハードにして、ややシンプルにしたかのような演奏である。フランスならではの線の細い（繊細な）サウンドはそれなりに魅力的であるが、全体として今一つの盛り上がりに欠ける感がないわけでもない。'88年にはシングル「Monaïkas/Femina Hord(M.S.R.54049)」を発表、アルバムの延長線に位置するややハードなインスト曲が聴ける。 (賀川)



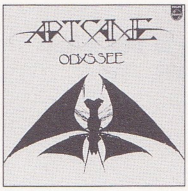
ARACHNOÏD
Arachnoïd
LP/Divox A 3304 '79年

かつては本誌で名前のみ挙げていたフランスの幻のグループ〝アラクノイド〟はフランスにありがちの２流メロディアス・ロック・グループ等とは一線を画する確固たるサウンドを持っており、キング・クリムゾンのコンセプトに基づいたサウンドがその主体。フリップ奏法を用いたギターワークとリズム陣が一体となった重厚かつ、スリリングな演奏をさらに演出する陰翳多彩なキーボードと多くのアイデアを含むヴォーカル・スタイルが加わり、圧倒的な迫力を持つ聞き応えの多いアルバムに仕上っている。このアルバムはクリムゾンのコンセプトに基づき、さらにフランス色を強く押し出しオリジナリティーを築き上げた超一級品に属するプログレッシヴ＆シンフォニック・ロックの〝幻の名盤〟である。 (Numero Ueno)



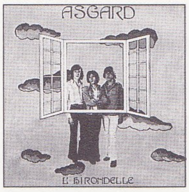
ARC
Maquette
ＬP/KO 80.0413　'80年

フランスのシンフォニック・ロックがメジャーなシーンから姿を消しつつあった'70年代末から'80年代初めにかけて、いくつかの作品が自主製作盤として作られているが、本アルバムもそうしたものの１つ。ややハイ・トーンのシアトリカルなヴォーカル、キーボードを中心とした線が細く透明感のある演奏、多少弱体のリズム・セクション、正にフランスのシンフォニック・ロックである。それなりに考えられた曲作り、構成であり、シンフォニック・ロックとしての面白味は感じられるが、やや変化に乏しく、小さくまとまってしまった感は否めない。どちらかと言うと、一般向けではなく、フレンチ・シンフォニック・ロックに興味を持っている人に適した作品と言える。500枚限定、ナンバー入り。（賀川）



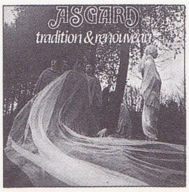
ARTCANE
Odyssée
ＬP/Philips 9101 141　'77年

アールカン唯一のアルバム。編成はg. key. b. dr.の４人で、vo.はドラマーを除く３人がとっている。彼らの場合、グループとしての個性は作曲によってではなく、むしろメンバー個々の楽器演奏スタイルと曲のアレンジによって形作られている。したがって表面的には硬質で少々暗いというイメージがあるが、全体のサウンドは今一つ摑み所がない。収められている６曲はいずれも佳曲ぞろいで、中でもＢ①は16分以上に及ぶ大曲であり、ミニマル・ミュージックの要素を取り入れた意欲作だ。一曲、そしてアルバム一枚を通しての構成力という点で少々物足りない感もあるが、曲の部分部分はいずれも閃きを感じさせる。ところで表ジャケの図を見て察するに、アールカンとは「精巧に作られたあひる」といった所か。（城元）



ASGARD
L'hirondelle
ＬP/WEA N 56 288-Y　'76年

ASGARDの魅力を説明するのは難しい。マイナー・キイ主体の素朴なメロディを、意表を突くアレンジで聴かせるところ。ヴァイオリン、プサルテリオン、フルートを配した侘びしさ漂う編曲。それとも中心人物の一人であるP.Grfsdpierronが得意とするマカロニ・ウエスタン的（と言うか「インディアン（おっと、ネイティヴ・アメリカンか）の逆襲」と言うべきか）なリズム・ワークか。このアルバムのレパートリーの大半はトラディショナル・ナンバーなのだが、上記の要素が楽曲を非常に新鮮に見せている。特にプサルテリオンの音色による、壊れたおもちゃのような美しさは白眉。2ndと共にＣＤ化が待たれる作品である。（Chihiro S.）



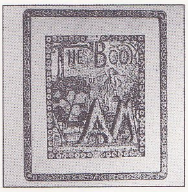
ASGARD
Tradition & Renouveau
ＬP/WEA 56508　'78年

アスガールはパトリック・グランピエロン(v, fl. dulcimar, psalterion)、ダニエル・モンヴァニ（g）、ドミニク・ウルティ（b）ドミニク・ラバル（key）の四人からなる。ヨーロッパのトラッドや南米のフォルクローレのメロディを活かして、新しいタイプのプログレッシヴ・フォークともいうべき音楽を創造している。一枚目のアルバム「L'hirondelle」（WEA 56288）に比して、この二枚目では、土臭さがなくなって、メロディ・ラインも非常に洗練されている。Ａ面はフォルクローレやトラッドを新しい解釈とエレクトリックな楽器等により再生させている。Ｂ面は中世の詩人フランソワ・ヴィヨン等をモチーフにしたオリジナル曲中心で、叙情味豊かなヴォーカルとメロトロンがからみあってクライマックスに至る。（宇田川）



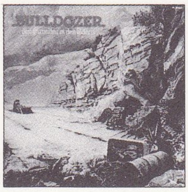
BABEL
Babel
ＬP/Philips 9101 060　'76年

フランスは東南アジア、アフリカにたくさんの植民地を持っていた。これが最近はやったパリ発ワールド・ミュージックの原因でもある。フランスは人種が混在する。特にパリ。多分このバンドは生粋のフランス人によるバンドではない。中近東だろうか北アフリカだろうか。サード・イアー・バンドがそのままコーランを唱えたような即興がずうっと続く。様々な民族楽器の音が入り混る。女性ヴォーカルも中東近調。結構大編成かもしれない。未だ面は割れていない。ただし内容は相当おもしろい。本腰の民族音楽でこれが儀式のように延々と続き熱気をおびてインプロヴァイズしていくのだ。中ばミニマル化する部分も。複数の集団をクロスさせているのか別々の音群が右へ左へと動き混り混沌としている。（松本）



BOOK OF AM
Part One-Dawn And Morning
ＬP/LTM 1016　'78年

彼等の唯一の作品と思われる。５人のメンバーについては不詳であるがゴングのデイヴィッド・アレンとジリ・スミスに謝辞が送られている事、ゲストの３人フィル・シェパード、バット・メドウズ、ステファニー・シェパードはジリ・スミスの1stソロ「Mother」に参加している事、サウンドが初期ゴング特有の例えば3rd中〝I'm your fantasy〞の様な夢幻的な響きで満たされている事等からアレン周辺の人脈が推察される。全曲英語で歌われ詩は詩人W・ブレイクやR・タゴール、ギリシャ神話に登場するヘルメスやピラミッドのテキスト等から多く引用されている。ac.ギターを背後に女性ヴォーカル、シタール、柔かなフルートが奏でる東洋色の濃い繊細で夢見る様な響きは美しいジャケットの示すところのものである。（松本）



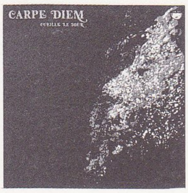
BULLDOZER
Des Gamelles Et Des Bidons
LP/RCA PL 37283 '79年

「Bulldozer」(RCA PL37161、'78年)に続くブルドーザーのセカンド(ラスト)・アルバム。前作同様、ファンキーなリズムをベースに、ややユーモラスなヴォーカル、リラックスした雰囲気のサックス等が絡むという展開が中心になっている。歌詞がフランス語であることを除けば、フランスらしさはほとんどない。ディスコ・ミュージックとしてはやや力強さが足りないし、バック・グラウンド・ミュージックとしては叙情性に欠けている。勿論、ステレオの前でかしこまって聴く音楽でもない。多少騒々しいカフェで聴くならば無理がないかもしれない。各メンバーのミュージシャンとしての力量はまずまずであるが、ほとんどのリスナーに聴き流されてしまうタイプのサウンドである。 (賀川)



CARPE DIEM
En Regardant Passer Le Temps
LP/Arcane 913051 '75年
CD/Musea FGBG 4122

カルプ・ディアンの創り出す宇宙は独特である。当時のイギリス産の有名グループのどれにも影響を受けていない。リズム感にしても作曲法にしても、そしてプレイにしても、である。サックスをリード楽器に配し、甘美なトーンのメロディーが全体を支配する、キーボードのトーンもフランス的といいたくなるようなものである。比類なき幻想性をたたえたサウンドであり、ジャケットに描かれたモノトーンの宇宙を想像すれば、それがそのままこのアルバムのサウンドになる。今のレヴェルで聴くと、所々に甘さも目立つかもしれないが、トータルとしてこれ程のアイデンティティーと幻想性を持ったアルバムも少ない。 (山崎)



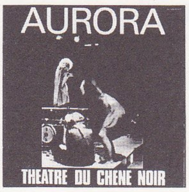
CARPE DIEM
Cueille Le Jour
LP/Crypto ZAL 6403 '76年

CARPE DIEMの2ndアルバム。あくまで1stアルバムの延長線上にある音であるが、一部で普通のプログレになるなど、変化が感じられる部分もある。時々はっとさせられる曲の構成の巧みさなど、なるほど前作の方が代表作だけあって上だと思う。が、本作ではLPのB面全体を費やした大曲が聞き所となっている。叙情的な導入部から徐々に盛り上げていく展開は気持ち良い。特にテーマが変奏されて何度か出てくるなど、ツボを押さえたアレンジであるし、静と動の対比もなかなか良くできていると思う。しかし、あともう一歩の感動的なクライマックスが欲しかった。逆にそれがフランスのバンドらしいという感じもするが…。1stアルバムを聞いて気に入った人には薦められる。 (野呂)



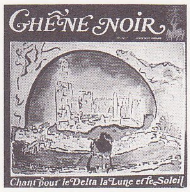
CATHARSIS
Le Boléro Du Veau Des Dames
LP/Festival FLD 676 '76年
CD/Spalax Music 14203

カタルシスは'70年代頭から中ば過ぎまでに計9枚のアルバムを残している。中心人物はキーボード奏者のRoland Bocquet。ピンク・フロイドの「神秘」〜「ウマグマ」の頃の影響が強く、初期のアルバムほど雰囲気で流す傾向がある。一重にBocquetの弾くハモンド・オルガンのつくり出す流れが、'70年代前半のフレンチ・アンダーグラウンドの空気とまじり合う所にバンド・カラーを負っていたと言っていいだろう。前作の「Illumination」はそうした曲調がファンタスティックにも響いていたが、このアルバムになると結構曲の輪郭がついて、かっちりした曲調が目立つ。演奏力で聴かせる部分もある。どちらにしても、そのままのハモンド・オルガンのトーンが耳に残る。それは懐しいような音だ。 (松本)



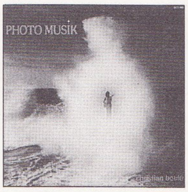
(THÉÂTRE DU) CHÊNE NOIR
Aurora
LP/Futura VOIX 01 '71年

フレンチ・ロック・シーンの超異端派シェン・ノワール。同じフランスのグランド・マジック・サーカスと並び称されることの多いシェン・ノワールであるが、彼らははるかに音楽的であり、その強烈なオリジナリティは比類ない。本1stアルバムでは、近時活動を再開した彼らの最初期の姿を窺い知ることができる。穏やかに、そして時には激しく響き渡るフルート、バンブー・フルート、不気味に鳴り響くゴング、ボンゴ、ドラムスのパーカッション群、力強いトランペット、虚ろでフリーキーなサックス等に、ニコル・オビアのあたかも呪術師のようなヴォイスが加わり狂乱の世界を描き出している。そのプリミティヴなサウンドは聴く者全てに衝撃を与えるに違いない。 (賀川)



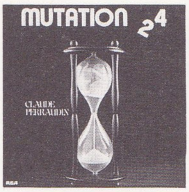
CHÊNE NOIR
Chant Pour Le Delta Lune Et Le Soleil
LP/Chêne Noir Disques CN 001 '76年

シェン・ノワールはアヴィニョンの演劇ロック集団である。彼らは活動の中心をレコード製作よりもステージに置いており、'69年に「La Paillasse Aux Seins Nus」でデビューして以来、数多くの創作音楽劇を上演している。本アルバムは'70年にフュートゥーラ・レーベルからリリースされた「Aurora」に続く第2弾であり自主製作盤として発表された。そのサウンドは女性ヴォーカリスト、ニコル・オビアの感情を内に秘めた語りを中心に、サックス、ピアノ、各種パーカッション等が淡々としたリフを繰り返す構成になっている。曲は徐々にではあるが確実に変化し遂には静かなるクライマックスを迎える。派手さは無いがロック・テアトルを代表する一枚と言える。同年「Orphée 2000」を発表した後、彼らは消息を断つ。 (賀川)



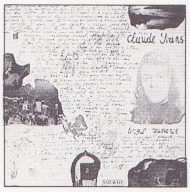
CHRISTIAN BOULÉ
Photo Musik
LP/Polydor 2473 086　'78年

クリアライトのギターリストとして知られる（1st、2nd、4thの3枚のアルバムに参加している）クリスチャン・ブーレがシリル・ヴェルドー（key, per）らの協力を得て作り上げた1stソロ・アルバム。クリアライトのサウンドをややポップにしたかのようなスペース・ロックの傑作で、ヴェルドーの上昇感に富んだシンセ、ウィスパー・ヴォイス、ポップなサックス等を交え、ブーレがスティーヴ・ヒレッジを思わす乗りの良いプレイを展開している。翌年、2nd「Non-Fiction」（Polydor 2393 227）を発表。これも1stと同系統のサウンドを有する力作である。以後も、シングル（未確認）をリリースするなど、活動を続けている模様であるが、目立ったニュースはなく地味なものとなっている。（賀川）



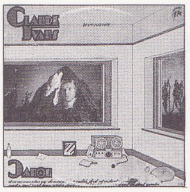
CLAUDE PERRAUDIN
Mutation 24
LP/RCA PL 37070　'77年

テディ・ラスリー、ジャン・ルイ・ビュキなどと同様、サウンド・イラストレーションと言われる、テレビ等のバックグラウンド・ミュージックの仕事が多いクロード・ペローダン。本アルバムは、そんな彼の、一般販売を目的とした唯一の作品である。キーボード、ギター、パーカッションを駆使して、ほぼ一人で作り上げたサウンドは、ジャケットの砂時計の中で砂と化し崩れていく女性の合成写真のイメージとは異なり、穏やかでメロディアスなものである。やや音色の変化に乏しく、良質のシンフォニック・ロックのようなドラマチックな展開こそないが、よく考えられためりはりのあるサウンドで、耳に心地良い。イージーリスニング的に聴くのがよいかもしれない。（賀川）



CLAUDE YVANS
Longue Naissance
LP/Saravah SH 10052　'75年

クロード・イヴァンのファースト・アルバム。イヴァンには3枚のアルバムがあり、この作品のみ彼の個人名義になっているが、実質的にはダヌーとの共同作業であり、Claude Yvans＆Danouのデビュウ作と言える。ヴォーカルを主とするイヴァン、ハープ、ギターを演奏するダノーの他に管楽器奏者が１人いるだけであるが、サウンドは非常に変化に富んでいる。イヴァンの情感に富んだヴォーカルとシンプルではあるが目まぐるしく変化する穏やかな演奏が聴く者をファンタジックな夢の世界に引き込んで行く幻想的な音空間である。ZNRをかなりロマンチックにしたとも言える曖昧模糊としたサウンドはやはりフランスならではのものと言える。（賀川）



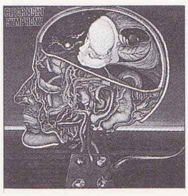
CLAUDE YVANS ET DANOU
Revenance
LP/Isadora ISA 9008　'76年

SaravahからIsadoraに移籍して発表されたクロード・イヴァン・エ・ダヌーの第２弾。ZNRのファースト、クリアライトのサード、ママ・ベア・テキエルスキーの２枚組といった作品の影に隠れて、あまり話題にならなかったが、個性的かつ良質な作品である。手法的には前作の延長線上にあり、イヴァンのトークを含めた表現力豊かなヴォーカルにギター、各種パーカッション、サックス等のシンプルかつ変幻自在な演奏を組合わせて独特の音空間を作り出している。ただ、前作で顕著だった、霧のかかったファンタジックな世界を彷徨い歩くといった雰囲気は後退しており、やや明るめの、具体的な情景がイメージされるサウンドが多くなっている。聴き終えた時には、面白い夢を見たかのような気分になる。（賀川）



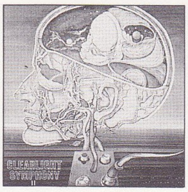
CLAUDE YVANS & DANOU
Concept
LP/Oxygène OXY 059　'79年

自主製作盤に近い形でリリースされたクロード・イヴァン・エ・ダヌーのサード。今回は全ての演奏を２人だけでやっている。基本的な音作りは前2作と同じであるが、従来の作品に比べてヴォーカルに重点が置かれてふわふわとした感じの線の細い男女ヴォーカルの絡みがほぼ全ての曲で聴ける。元々演奏はシンプルなものであったが、本作ではよりシンプルになり、やや面白味に欠ける感がある。〝日々のサイエンス・フィクション〟と書かれた、フィルム風のジャケットからも分かるように、ストーリー性を持った映像的なサウンドであり、彼らならではの持ち味が感じられるが、イメージの広がり、幻想性という点では今までの作品に一歩譲ることは否定出来ない。ラスト・アルバム。（賀川）



CLEARLIGHT
Clearlight Symphony
LP/Virgin V-2029　'75年
CD/東芝EMI VJD-5024

「Delired Cameleon Family」やソロ名儀でも数種の作品を製作し、ウインダム・ヒルのピアノ作品集にも名を連ねていた才人シリル・ウェルドー。その活動の拠点となった彼の率いるプロジェクトの処女作は、名が示す通り旧アナログ片面ずつの２パートに分かれた大作で、各々S・ヒレッジ、T・ブレイク、D・マレルブのGONG勢、C・ブーレ、LARD FREE～URBAN SAXのG・アルマンらフレンチ・ロック・シーンの強力ミュージシャンが参加している。ヒレッジや後にそのバックを務めたブーレのコズミック・ギターはGONGを想起させるが、より知的な抑制が加えられ、連綿と流れるピアノの大河は西洋のボキャブラリーによる東洋的精神の表現、人間意識の創生と遍歴の叙事詩とさえ言えるのではないだろうか。（高山）



CLEARLIGHT
Clearlight Symphony II
CD/Mantra 044　**録音年度不明**

シリル・ヴェルドーはアメリカへ渡った後はローカルな流通でカセット作品をリリースしていたり、忘れた頃にLPを発表したりとメジャーな展開をしていなかったが、その間、彼はどんな生活をしていたのであろうか。最近、CD化されたこのアルバムは単にCD化だと思っていたら(ジャケットも同じで、少さくIIとプリントされているだけなのだ)、中身は全く新しい内容で、Iよりもひきしまった印象である。「Visions」もCDは新内容であったし、ここへきてシリル・ヴェルドーが再び新しい作品をひっさげて我々の前に現れるのではないかという期待がある。作風は昔とそれ程変わらず、ピアノをメインにしたキーボード群にインド的な効果音がからんでくる。

（山崎）



CLEARLIGHT
Forever Blowing Bubbles
LP/Virgin 2039　'75年
CD/東芝EMI VJD 5025

前作での成果に示唆を得たVerdeauxは、パーマネントなユニットとしてのCLEARLIGHTを始動させた。しかしF.Jeanneau、J.C.D'Agostini、J.Dugrenot、更に G.Artman、D.Cross、Northetts の Amannda & Ann etc…、今考えても俄には信じられない程の豪華な顔ぶれだ。GONG人脈からの影響も少なくなかったであろう、東洋思想に根ざしたスペイシーなトリップ・サウンドに、Verdeauxを始めとするメンバーの抒情性、更にタイトル通りのイメージが絶妙にブレンドされ、内省的で儚い世界が広がって行く。A③などまさにその好例。しかしロックとしての力強さやアヴァンギャルドな隠し味等、優れた抒情派作品がまたそうである様に、本作も決して抒情のみではない事は強調しておきたい。

（山田）



CLEARLIGHT
Les Contes Du Singe Fou
LP/Isadra ISA 9009　'76年

中心人物のシリル・ヴェルドーが何者なのかは、最近改変されて出された「Visions」を聴いて明らかだ。メディテーションへ向かうあの傾向は、'70年代の一連のクリアライト作でも感じられていた。クリアライトの音楽がシンフォニー風になろうが、美しく響こうが、はたまたジャズ、ポップな色を滞びようが、そこには必ず〝流れ〟が変わりなくある。どこか形が定まらず水が流れるような潤い豊かな色のとりあわせ。それは、このアルバムで最も華やかだ。ジャズ・サイドのミュージシャンが参加したこともあって、前2作に較べて多彩になった。構築的な面もあればポップなまでにメロディの強い部分もある。その点では異色さもあるが、まぎれもなくシリル・ヴェルドーの局面の一つには違いない。

（松本）



CLEARLIGHT
Visions
LP/Polydor 2393 185　'78年

クリアライトの4枚目、最後のアルバムである。オリジナルのLPは仏ポリドールからリリースされたがあまり出回らず、あっという間に廃盤となり、その後すぐにLTMレーベルから再発された。クリアライトそのものと言うべきシリル・ヴェルドー（key）他、ディディエ・ロックウッド（vln）、ディディエ・マレルブ（fl, sax）、クリスチャン・ブーレ（g）らお馴染みのメンバーが参加している。スペイシーなシンセと徐々に変化して次第に盛り上っていくピアノを中心にした上昇感に富んだ演奏はファースト以来の彼らならではのものであるが、クラシカルでメロディアスなピアノ・ソロやシタール、タブラも前面に押し出したオリエンタル調の演奏、ヴェルドーとロックウッドのインタープレイなども聴くことが出来る。

（賀川）



CYRILLE VERDEAUX
Messenger Of The Son
LP/(U.S.)Catero CAT008　'85年

どことなくウィーン幻想派を想わすジャケットに包まれて発表されたアルバム。参加メンバーは、フレデリック・ルソー、ジャン・フィリップ・リキエル(以上キーボード)、ピエロ・ペリエ(ベース)、ジャン・ミシェル・リス(ドラムス)、レックス・ハウストン(ベース)である。大体がクリアライト以来つちかってきた壮麗なシンフォニック/ジャズ・ロックの曲想を持っており、それはさらに洗練の度合いを増していると思う。多彩なソロはおそらくゲストのキーボード・プレーヤーによるもので、バッキングを務めるピアノの凡庸さを聴くかぎり、この人の音楽は本質的には昔のままである。感覚的にこれだけの深化を遂げてきた人でも、音楽だけを聴く時はもうひとつ食い足りない感を認めざるを得ないのはなんとも残念だ。

（古田）



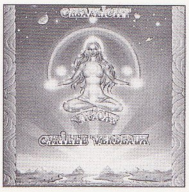
CYRILLE VERDEAUX
Rhapsodies Pour La Planete Blèue
CD/Eman 195182　'89年

約4年間の沈黙の後、このアルバムが誕生した。長い旅を続けてきたヴェルドーの音楽は、ソロ活動の時期を経て、彼の出発点であるクリアライトへと回帰したかのようだ。ここに聴くことのできるものは、その繊細さ、ナイーヴな演奏、SF的でありながら、たえずヒューマンな感覚を漂わす曲想と、あらゆる点で、クリアライトの初期の2作あたりを想起させる。長い年月の後、たとえそれが自己模倣であろうと、初々しい躍動と、まるで若者が創ったような音熱を袋楽に吹き込むことができたのは、いったいいかなる精神の神秘に依ってだろう。信じられないことだが、この作品は、クリアライトに匹敵する、シリル・ヴェルドーの最高作の一つだと言わざるをえない。

（山崎）

CLEARLIGHT/CYRILLE VERDEAUX
Visions

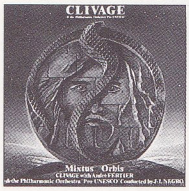
CD/Legend Music LM 9001
'94年('78、? 年録音)



4曲も多い。それどころか、LPの中の〝Messe Caline〟〝Songe De Cristal〟がリミックス、〝Fullmoon Raga〟は曲名を〝Raganesh〟にかえてテイク違い。〝Au Royaume Des Mutants〟〝Paix Profonde〟の2曲は削除、唯一LPからそのままの収録は〝Spiral D'amour〟1曲のみ。つまり「Visions」でも、このCDはクリアライトのそれではなくシリル・ヴェルドーの「Visions」と言った方が正しい。メディテーション/ニュー・エイジの脈流が'70年代にクリアライトを経て中心人物ヴェルドーの音楽として開花したというべきもので、音楽の背後に彼の思想をうかがいしれる。虫の鳴き声や鳥の囀りがSEに頻繁に使われ、決して形に定まらない水流のようなピアノやヴァイオリン他がクリアーでカラフルに色づいた天上的なイメージを描く。 (松本)

CLIVAGE
Mixtus Orbis

LP/Gratte-Ciel CIEL 2009 '78年



3枚のアルバムが知られているアンドレ・フェルティエ率いたクリヴァージュ。ジャズ、クラシック、中近東民族音楽を溶け合わせたフローティング・サウンドが、サード・イヤー・バンドふうだが、もう少しクリアーか。これは2枚目に当たりオーケストラとの共演作になっている。このアルバムにはコンフリュアンスを脱けたジャン・クーリエ(flute, sax, oboe)とアルマン・ルマル(perc)が参加し一役買っていて、またコンフリュアンスの「Arkham」との共通点も見い出せる。知名度がない割には好作だと思うが。 (松本)

COEUR MAGIQUE
Wakan Tenka

LP/BYG 529.018 '71年



ALAN JACK CIVILIZATION、ALICEを経て、'73年初旬から'74年中旬にかけてマグマのギタリストとなるクロード・オルモが、マグマの前に結成していたバンド。これが唯一のアルバム。かなり弾いてはいるが、マグマとは無縁な当時のロック・スタイルで、切れはいいが音楽が古臭い。またアフロ・ロック色も強く、これは当時の流行と移民の坩堝フランスならではの産物だろう。時代を考えれば彼のプレイは結構なものだ。そこは押さえておきたい。ジャズ・センスを感じさせる英米のハード・ロック・スタイルのギターが存分に聴ける。 (松本)

CRUCIFERIUS
A Nice Way Of Life

LP/Egg 940 001 '70年



70年に来日、ムゲンでライヴを行ったクルシフェリウス。ベルナール・パガノッティ(b)、フランソワ・ブレアン(key)、マルク・ペリュ(g)にドラマー(クリスチャン・ヴァンデールではない。ユーロ・ロック集成の記述は訂正します)の4人編成でアルバムとシングルを1枚ずつ残している。フランスでは数少ない変形ジャケットの本アルバム、製作年度と考えると中々斬新な内容であり、当時のブリティシュ・ロックの影響下にあるややポップで軽快な演奏が楽しめる。マグマやブレアンのソロを意識しないで聴くべきサウンドと言える。 (賀川)

DASHIELL HEDAYAT
Obsolete

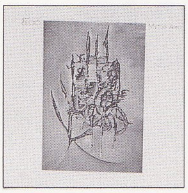
LP/Shandar SR 10009 '71年
CD/Mantra 075



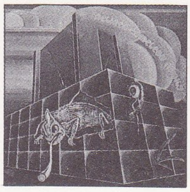
ダシエル・エダヤは元メルモス「La Devanture Des Ivresses」(Arion 30T079, 69年)の人物である。これは彼のソロ作でニーノ・ロータ作曲フェリーニ監督の「魂のジュリエッタ」のサントラを引用したものを含めて69年秋から書かれた曲のバックをゴングのデイヴィッド・アレン(g)ディディエ・マレルブ(sax, fl)ピップ・パイル(dr, g)ジリ・スミス(vo)クリスチャアン・トリッチ(b, g)サム・ワイアット(vo、ロバート・ワイアットの息子)小説家ウイリアム・バローズ(vo)が担当したもの。本作はゴングの3rd「Camenbert Electrique」(BYG 529 353)を録音する1カ月前の'71年5月に完成しており演奏もそれに近いものでエダヤの語り、ソロ・ギターと共にエコー・サウンド、スペース・ウィスパーは健在である。(松本)

DECKO
Mythe Xero

LP/Mxoi FLVM 2011 '81年



1981年の夏に発表されたデッコの恐らくファースト・アルバムと思われる作品は、フランスのマイナー・レーベル界における最高傑作ー少なくとも81年までのーとの評価を受けるにちがいない。パーカッション以外の全ての楽器を一人で操作し、壮厳な宮殿を思わせるような音宇宙を創造している。当時のインダストリアル・ミュージック全盛の状況下にあって、デッコの作品は古風なまでにオーソドックスである。「リコシェ」あたりのタンジェリン・ドリームや、'74年頃のアシュラ・テンペルを彷彿させるが、彼らほどシンセサイザー・リズムを主体にした音ではない。むしろこのアルバムのところどころに出てくるクラシカルなキーボード・プレイが、彼の本音ではなかろうか。 (宇田川)



DELIRED CAMELEON FAMILY
Delired Cameleon Family
LP/Pathé Marconi 2C 066 13087 '75年

クリアライトの創設者、シリル・ヴェルドーのプロジェクトの一つである本アルバムは、クリアライトの延長線上にあるという解釈と同時に「トリップ」サウンドとしての要素もかなり色濃く打ち出されている。クリスチャアン・プーレ、ジルベール・アールマン、ティム・ブレイク、ジョエル・デュグルノ、アリエル・カルマ等々、当時のドラッグ・ミュージック的色彩を多少なりとも有した連中の一大セッション・アルバムということができるだろう。サウンド的にはクリアライトの1stをよりフリーキーにしたようなもので好き嫌いのはっきり分かれる一枚といえそうだ。「Visa De Censure N°X」という映画のサウンド・トラックスとして発売されたものである。（山崎）



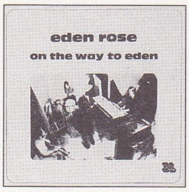
DÜN
Eros
LP/Quest Atlantique SAB 001 '81年

デュンはパリの南西に位置するナントのバンドである。「エロス」と題された本作品は自主製作による彼らのデビュー・アルバムであり、ギター、ベース、ドラムス、キーボード、フルート、パーカッションの6人が参加している。その演奏は随所にジャズの影響を感じさせるものの、あくまでも本質はロックであり彼らの熱い息吹きがストレートに伝わってくる。メンバー全員がなかなかのテクニシャンであるが、取分けアラン・テルモのマリンバを中心にしたパーカッション・プレイはこのグループの演奏を一段と個性的なものにしている。また、変拍子とテンポの遅速を巧みに用いた曲構成は素晴らしく、時としてジェントル・ジャイアントを彷彿させる。グループはその後も活動を続け、新作のリリースも予定されたが、未だリリースされていない。（賀川）



DYNASTIE CRISIS
Dynastie Crisis
LP/Harvest 2C062-12363 '72年

ミッシェル・ポルナレフのバック・バンドとして来日したこともあるディナスティ・クライシス。本作は「Sad Libera Nos A Malo」(Somethin' Else 849522) に続く彼らのセカンド・アルバムである。ディープ・パープルを思わすハード・ロック、ホワイト・ブルースと呼ばれた所謂ブルース・ロック、オルガンを主体にした暗い感じのキーボード・ロック等、曲調は変化に富んでいるが、そのいずれにも当時のブリティッシュ・ロックの影響が見られる。演奏の面では、キーボード奏者のセンスの良いプレイとドラマーの自作の楽器を用いた風変わりなサウンドが印象に残る。アルバムとしての統一性はなく完成度も高くないが、70年代初期のフレンチ・ロックの平均的水準を示す作品として資料性は高い。（賀川）



EDEN ROSE
On The Way To Eden
LP/Katema KA 33 507 '69年

サンドローズの前身エデン・ローズの唯一のアルバムである。ジャケットにメンバーの記載はないが裏側の写真からジャン・ピエール・アラルセン、アンリ・ガルラが参加していることが分かる（サンドローズのヴォーカリスト、ローズはいない）。レコードに収録されたすべての曲がガルラ作のインスト・ナンバーであり、そのサウンドは彼のオルガンを中心にしたポップなジャズ・ロックである。軽い感じの流れるような曲が多くアルバム全体としての完成度は決して高くないが、個々の演奏においてはかなり聴かせる部分もある。サンドローズがアラルセンのギターとローズのヴォーカルを中心にしたグループであるのに対して、エデン・ローズは正にガルラの音楽性を反映したバンドである。（賀川）



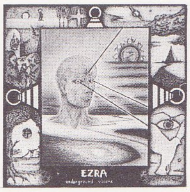
EMMANUELLE PARRENIN
Maison Rose
LP/Ballon Noir BAL 13001 '78年

エマニュエル・パールナンは、本アルバムの他に、エマニュエル・フィル・クロード名義で、「Château Dans Les Nuages」(Cézame CEZ 1016) をリリースしている女性である。彼女はまた、コンフレリー・デ・フーにも参加している。彼女の美しいヴォーカルを全面的にフィーチャーしたこのアルバムは、フランスやカナダのトラッドや、彼女自身のトラッド調の曲などが収録されている。どの曲も、印象的な歌詩とヴォーカルにテンションに満ちた弦楽器が伴う、美しくも透明な曲ばかりである。また、シタールをはじめとするインド系の楽器や、ダルシマーなども効果的に使われていて、催眠的な効果をも得ている。（宇田川）

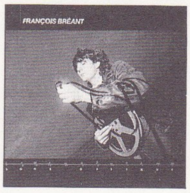


ERGO SUM
Mexico
LP/Thélème 6332 500 '72年
CD/Musea FGBG 4066

エクス・アン・プロヴァンス出身のエルゴ・サムはvo, key & fl, vln & g, b, ds, gから成る6人組である。本作は彼らの唯一のアルバム（他にシングルが2枚ある）で、上記のレギュラー・メンバーに加えて、一部の曲にvo, syn, ac-gがゲスト参加している（プロデュースはローラン・ティボー）。リオネル・レディセのロジャー・チャップマンを思わす太く力強いヴォーカル、リリカルなフルート、クラシカルなヴァイオリン、ややブルーズィなギター、巧みなバッキングを見せるピアノ等が一体となった演奏は見事に構成されており、高い完成度を誇っている。彼らの強いオリジナリティを感じさせるサウンドは'70年代初期のフレンチ・プログレッシヴ・ロックを代表するものとして本国でも極めて高く評価されている。（賀川）

 **EXPÉRIENCE** **Expérience** LP/Vogue SLVLX 575 '71年 かつて国内発売されたこともあるエクスペリアンスの唯一の作品。国内盤は作品の一部を抜粋したものであったが、オリジナルはLP2枚組、60分を越える大作である。エクスペリアンスは、フレンチ・ロックの黎明期、当時人気の高かったトリアングル、マルタン・サーカス等のメンバーを集めて作られた、スーパー・セッション的グループで、本アルバムではメンバーであるFrançois Jeanneau、Alain Pewzner、René Guerinらの曲に加えて、〝Gimme Some Lovin'〞〝Louie Louie〞〝Let's Be More〞といった米英のロック・グループの曲も演奏している。トリアングルのメンバーを中心にした当時のロック・グループとしてはテクニカルかつ迫力あるインスト・パートは良い出来であるが、全体として時代を感じさせる音と言える。(賀川)	 **EZRA** **Underground Visions** LP/74023 '85年 エツラのデビュー作。グループはヴォーカル、ギター、シンセ&ピアノ、ベース、ドラムスの5人から成る。作品の中心となるハードで乗りのよいギターを前面に押し出した部分では、ストレートなヴォーカルも加わり、フランスのシンフォニック・ロックとしては力強い音作りがされている。一方、シンセサイザー、エレクトリック・ピアノが主体となった部分ではいかにもフランス的な軽やかでメロディアスな演奏が展開されており、ヴォーカルもより情感を込めたものとなっている。シンプルな作品であるがこなれており、まとまりのある聴き易いものに仕上がっている。(賀川)
 **FERNAND PENA ET PUZZLE** **Fernand Pena Et Puzzle** LP/Centaur Records CR 20698 '77年 1960年代末〜70年代初頭にかけて3枚のシングルを残したROTOMAGUS、そのメンバーであったFernand Penaが1977年にリリースしたのが本作である。ROTOMAGUS時代の面影もある程度残っているが、ここではアコースティック・ギターとフランス的な色彩のキーボードを効果的にフィーチャーして、地味ながらもプログレッシヴな指向を持つ佳作に仕上げている。この後Penaは、本作に参加したB.Coutelanと共にE.T.Cと言うグループを結成。1979年にLP1枚をリリースしている。更にその後の1982年にはBIGOUDEと言うグループでもLP1枚を製作している。(中島洋一)	 **FILLE QUI MOUSSE** **Fille Qui Mousse** LP/Futura RED 04(未発売) '94年('72年録音) CD/(Ita.)Mellow MMP197 前衛(アヴァンギャルド)の発祥、フランスの'70年アンダーグラウンド、幻のレーベル、フトゥーラで未発売に終ったと云われる極めつけがこの1枚。納得も納得、怪しくてムンムンとするこの雰囲気。フランスのアングラというのは、薄暗くて大衆演劇の汗臭さと情念の揺らめきと血の色が混じり合ったような動物的な熱気を帯びているように常々思うのだが、これなどその典型という気がする。実験と言う程の高尚な作為よりも、もっと動物的な皮膚感覚とでも言うか、ただ嗅ぎ分けるだけのギミックのようなもの。ロック崩れの下手くそやノイズ、詩の朗読、それこそギミック等、至ってどれもシリアスなだけに重苦しい。コラージュにさえ至っていないA・デュール並みのむき出し感覚は、むしろ説得力がある。(松本)
 **FLAMEN DIALIS** **Symptome-Dei** LP/FLVM 3006 '79年 '71年にシングル「Have You Ever Cried/Nauthere」をリリースしたYEHTA PLUS BANDの流れを汲むフラマン・ディアリ。'78年にシングル「Découverte/Autre」(FLVM 4504)でレコード・デビューし、翌年、本ファースト・アルバムを発表した。その内容はオリジナリティ溢れるもので、ほぼ全編に渡って流れるメロトロンを中心に、コーラス、各種パーカッション、シンセサイザー、フルート等が一体となって波がうねるようなサウンドを作り出している。やや実験的で力強い音作りは聴く者に迫力を持って迫ってくる。シンフォニック・ロックとは異なった観点でメロトロンを巧みに利用した意欲作と言える。本作発表後、グループは解散したものと思われる。(賀川)	 **(LES) FLEURS DE PAVOT** **Les Fleurs De Pavot** LP/Mercury 125.603MDL '60年代後期〜'70年代前期 フランスのサイケデリック・シーンは未だ謎に包まれている。今までにNADA(フランスのグループではない)、DICKENSといった高価なアイテムが再発されてはいるが、騒ぐ程の物ではない。しかしMORMOS、BOOK OF AM、初期Michel Zacha辺りの水準の高さ、更にスイスのMIGHT OF COINCIDENCE、NOMADIA、仏の中堅ではD.B.Francard、J.F.Papin等がいたことを考えると、まだまだ在る筈なのだ。カナダ盤が多少知られているOCTOPUS Ⅳ(トータル・アルバム的フラワー・サイケ)も仏原盤がWジャケで存在するらしいし、とにかくそんな中で明確にヒッピー・サイケ路線を打ち出した唯一?とも言えるグループがこれ。オルガン、フルートを中心に温かな印象を残す古き良き作風が味わい深い。(平野)

FRANÇOIS BRÉANT
Sons Optiques
LP/EGG 900.553　'78年



「視覚的音響」という邦題が示す通り、聴き手は各曲に付けられたタイトルと演奏から様々な情景を思い浮かべ、物語を織ることが出来る。一例を挙げてみよう。時は1914年、第一次大戦の始まりを告げる新聞を街頭で手にしたフランス人ブレアンは、目眩いを起こし、ふと気が付くと時空を超えた土地を巡る旅に出ていた。戦争を逃れ旅人/異邦人となった彼がパリに帰還すると時はシュルレアリスムの咲き誇る'20年代。そして今度はリオへと……。イマジネイティヴな作風であり、レーベル・カラーによる誤解もあるようだが、これは所謂シンセ・ミュージックではない。優れたセンスによる血肉を備えた音楽。D・ロックウッドや元NEMOの仲間達も好演している。次作「千里眼」もジャズ・ロック色を増した佳品だ。　(高山)

FRANÇOIS BRÉANT
Voyeur Extra-Lucide
LP/Egg 900 584　'79年



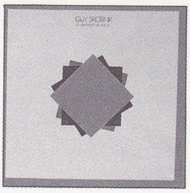
フランソワ・ブレアンは長い活動歴を持つミュージシャンである。クルシフェリウス（本カタログ参照)、ネモ（フランス独特の毒のあるポップス・グループで「Nemo」(Agave AG35702)「Doin' Nothin'」(同AG35703) の2枚のアルバムを残している)、ベルナール・ラヴィリエ（本号の彼の項参照）のバンドと種々の活動を展開しているが、やはり2枚のソロ・アルバムの出来が素晴らしい。「Sons Optique」(Egg900553) に続いてリリースされた本アルバムはディディエ・ロックウッド (vln)、クロース・ブラスキス (vo) らのゲスト・ミュージシャンを迎えて、ブレアンがコンポーザー及びキーボード・プレーヤーとしての実力を遺憾なく発揮した内容となっている。曲調もサントラ風のものからジャズ・ロックまで多岐に渡る。　(賀川)

GLAZ
Glaz
CD/Escalibur CD848　'93年



フランス・ブルターニュ地方のトラッド・ロック・グループで、これがデビュー作と思われる。ウーリアン・パイプやホイッスルといったトラッド楽器は味つけ程度で、キーボード群やよく歌うエレクトリック・ギターなどはむしろ叙情派のシンフォニック・ロックとの共通点が多く見い出せるのではないだろうか。全編をリードするキュートな女性ヴォーカルがまた魅力的で、そのストレートなシンギング・スタイル（非クラナド型）はバンドのカラーによく合っている。そこそこポップであり、ややテンションに欠けるキライがないわけでもないが、ロック・サウンドとケルト楽器がぶつかり合うインスト・パートは全盛時のD.A.ブラを思わせたりもする。スリーブには曲をイメージした美しいイラストが付されている。　(内田)

GUY SKORNIK
Ils Viennent Du Futur!
LP/RCA PL 37371　'80年



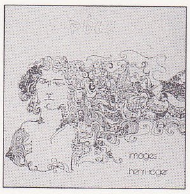
フランソワ・ヴェルテーメとの共作ロック・オペラ「Popera Cosmic」(CBS S7 63981)(アレンジはウイリアム・シェラー)で知られ、Igor Wakhevitchとも交流があったギ・スコルニック。知名度こそ高くないが、フレンチ・ロック黎明期から活動を続けているベテランのシンガー、キーボード・プレイヤーである。本アルバムではシンセサイザーで、分厚くドラマチックなサウンドを、エレクトリック・ピアノでメロディアスかつリリカルなサウンドを作り出し、その甘いヴォーカルと一体化させている。更に、ギター、ヴォーカル、フルート等のゲスト・ミュージシャンも巧みに使いこなし、彼ならではのダイナミックかつ変化に富んだ作品に仕上げている。実力派ミュージシャンならではの力作。　(賀川)

HAÏKU
Le Cycle De La Séquence Du Holter
LP/Age 175　'82年

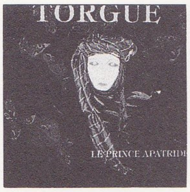


Gille Peyretが数台のシンセサイザーを使って作ったシンセサイザー・ミュージック。シンセ・リズムと単音のシンセサイザーの組合せを中心とした演奏は、極めて単調である。'60年代ならばともかく、'80年代にこのような作品を作り、発表したPeyretの意図が全く分からない。一部の極限られたもののバックグラウンド・ミュージックとしてならば使えるかもしれないが。真剣に聴くような音楽(?)とは言えない。プロジェクト名HAÏKUが日本の俳句を意味するかどうかは分からないが、もしそうだとしたら、大きな勘違いをしている可能性が高い。　(賀川)

HENRI ROGER
Images...
LP/Pôle 0005　'75年

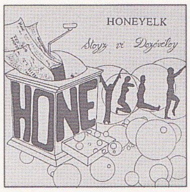


キーボード奏者、アンリ・ロジェのデビュー作。初期のエルドン等に通じるエレクトロニクス・ミュージックで、反復音の上でディレイをかけたエレクトリック・ピアノがパラパラと弾かれるといったもの。どちらかというと浮遊感のあるサウンドだ。B面ではミニ・ムーグが多用されて、もう少しリード・ソロ主体になる。いずれにしてもあまり演奏力を問えるタイプのものではなく、また音響面を追求したものでもない。録音の悪さも妨げになっているのかもしれないが、ロジェの音楽が見えづらい。他には「Energies Douces」(Muriel Roger 8206、'82年)、「Rythmigration」(同8306、'83年)、「V.O」(Alibi Productions 8410、'84年)が出ている。　(松本)



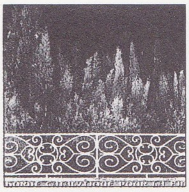
HENRY TORGUE
Le Prince Apatride
ＬＰ/Spalax SPX 6855　'80年
CD/MSI 14256

'70年代の後半からアルバムをリリースし始めたトォルグもすでに10枚弱ぐらいの作品を発表しているようだ。このシンセシストは音楽的には水準を越えるものを持ってはいないが感覚的には非凡な才能を感じる。音楽をファッション感覚のようなセンスでうまくまとめあげることが得意だ。スタイリッシュなエレクトロニクス作品といえるだろう。僕はこの作品を始め、'80年頃の作品しか聴いたことがないのだが、比較的最近の作品もリリースされているようなのでぜひ一聴してみたいと思う。（山埼）



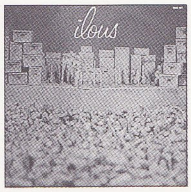
HONEYELK
Stoyz Vi Dozeveloy
ＬＰ/Oxygene OXY 047　'79年

フレンチ・ジャズ・ロックと言うと日本では敬遠されがちであるが、ここに紹介するHONEYELKは、軟弱ジャズ・ロックとは一線を画す、ハイ・テクニックなグループである。しかしながら、テクニック志向だけに走ることはなく、CARPE DIEMを思わせるサックスをフィーチャーした叙情的なヴォーカル・パートの占める比重も大きい。一部でMAGMAクローンなどと言った無責任な紹介をされたが、MAGMA的な要素はほとんど感じられない。全体的に地味なアルバムだが、繊細で、それでいてしっかりとしたテクニックに支えられた好作品に仕上がっている。唯一欠点があるとすれば、それは収録時間が短いこと位であろう。（中島洋一）



HORDE CATALYTIQUE POUR LA FIN
Horde Catalytique Pour La Fin
ＬＰ/Futura SON 03　'71年

Futura レーベルがエクスペリメンタル・ミュージックを紹介するために作ったSONシリーズの1枚としてリリースされたHORDE CATALYTIQUE POUR LA FIN。サックス、ハープ、ウッド・ベース、ドラムスをそれぞれメイン楽器とする４人が各種パーカッション、ギター、フルートなども使ってフリー・フォームな演奏を繰り広げている。フリー・ジャズよりも現代音楽に近いサウンドは、フリー・ミュージックにありがちな拡散した感じがなく、変化に富んでおり、聴く者のイメージを刺激する。聴き手を選ぶ音楽であり、万人向けとは言えないが、この種のものとしては良い出来である。この後もメンバーの一部はロックの世界で活動を続けている。（賀川）



ILOUS
Ilous
ＬＰ/Flamophone 2933-101　'74年

ベルナール・イルーのセンスを前面に押し出した。光輝くポップ・アルバムである。同じフラモフォンという事もあって、バックにはシステム・クラプティクのメンバーが参加しており、他にもベルナール・リュバ、パトリック・ゴーティエ、ジャン・ルー・ベソン達が注目をひく。ビートルズ・エイジという印象が強い音作りであるが、レーベルのオーナーでもあるクロード・ピュテルフラムの方針が貫かれているようである。勿論、フランス的で明るいポップ・チューンはイルーの才能を示すものである。このアルバムは、イルー、ピュテルフラム、そして時代の要求、の３要素がうまくマッチした作品であろう。'72年に、ギタリストのパトリス・デキュペルと組んだ双頭アルバム（フラモフォンFLAM-33.03)、を発表。（中藤）



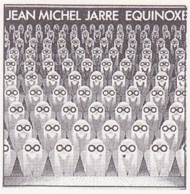
IRIS
Litanie
ＬＰ/Sonopresse Connection CTN 69 561　'72年

「70年代初期の優れたグループのほとんどは、アンジュ、ポニャンの影響下、または何らかの関係を持っていたが、彼等はそれに属さないにもかかわらず優れた素質と独自性を持っていた」(仏ＭＳ誌より）演奏形態はカタルシスをよりロック化して、モナ・リザをたしたと言うべきもの。バロック調のオルガンは彼等独特のもので、かなりのテクニックを持っている。そしてあくまで優しいヴォーカル。年代から考えるとはやり優れている。本作以外にシングルを発表しているが、アルバムとしては唯一のものと思われる。恐らく数多くのグループに影響を与えたグループであろう。IRIS＝鳶尾、LITANIE＝連禱。（山田　悟）



JEAN MICHEL JARRE
Oxygène
ＬＰ/Polydor　'76年
CD/Polydor 8000152

フランスで数多くの映画音楽を手掛けてきたモーリス・ジャールの息子として脚光を浴びながらデビューした彼は、当初は作詩家として活動していた。クリストフ、フランソワーズ・アルディの詩を手掛け、ＣＭの仕事を経て本作でデビューしたが、なぜか本国でも日本でもオーディオ・マニアに支持され、オーディオ雑誌で様々な賞を獲得している。事実、スーパーツィーターを装備したスピーカーでは音がまるで違って聞こえる。ちなみにフランスではヒットチャートの１位になった事もある。フランスのシンセサイザー・ミュージックというと他にはエッグ・レーベルあたりを想い出すが、彼らほど個性はなく、むしろ日本でいうトミタや喜多郎の様な割とイージーリスニングに近い音だが後年の中国でのライヴ盤は聞きもの。（いわね）



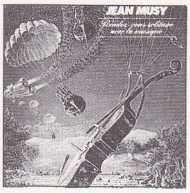
JEAN-MICHEL JARRE
Equinoxe
CD/Polydor 800 025-2　'78年

嘗てK・シュルツェやM・オールドフィールドから自らのエピゴーネンとして一蹴されたこともあるJ・M・ジャールだが、シュルツェのドイツ的な彼岸への意志、マイクのケルトに根差したアルカイックな夢想の替わりに、彼にはいかにもシャンソンの国フランスらしい優雅な歌ごころがある。同種のスタイルを執りながら、前二者の全盛期に垣間見えた自閉性とは一線を画す開かれた音楽性は、やはり独立した評価を与えるに相応しいだろう。「彼岸の中日」(邦題は「軌跡」)と題されたこのセカンドでも軽やかな音の舞踊を〝視る〟ことが出来る。シンセシストの風貌が大別してヴァンゲリスやフローゼ等峻厳な親父顔と、彼やシュルツェ、バウマン、ブレイク等のナルシスティックな美形に分かれるもの興味深い。　(高山)



JEAN-MICHEL JARRE
In Concert
CD/Polydor 833170-2　'87年

合唱隊やオーケストラを従えたヒューストン、リヨンでのステージを収めたライヴ・アルバム。前半（アナログA面）には旧作から１曲ずつ、後半（B面）は当時の新作「Rendez-vous」よりという構成で、それまでの総まとめとなっている。花火、レーザーを駆使し、ビルをスクリーンにするという街ぐるみの、街をそのままホールに見立てたスケールの大きなショウだったが、反面、その大きさ故にアルバムの性格がともすればイヴェントの記録となった感も否めない。ケンゾーのコスチュームに身を包み、それを仕切るジャールは、ミュージシャンであると同時にマジシャンでもあるようだ。全体としての聴き処はやはり後半、オーケストラやリズムセクションをバックに乗りと荘大さを併せ持った音宇宙が広がる。　(高山)



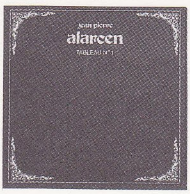
JEAN MUSY
Rendez-Vous Solitaire Avec La Musique
LP/Riviera LM 91. 031　'79年

「Le Mal D'Aimer(Atlantic 40557)」「Few And Far Between(Atlantic K 50081)」に続くジャン・ミュズィ3枚目のアルバム。リリカルでクラシカルなピアノと広がりを感じさせるシンセサイザーを中心に作り出されたサウンドは非常にメロディアスで耳に心地好い。各曲のアレンジは巧みであり、全体の流れも実にスムーズかつドラマチックである。ただ、リズム・セクションのない部分もあり、また、あってもシンプルな場合が多いため、プログレッシヴ・ロックというよりも、映画のサントラ風の印象を与えることも事実である。元々プログレッシヴ・ロックの範疇に属するミュージシャンではなく、'85年にはYves Duteil(イヴ・デュテイユ)の曲のみのアルバムを発表するなど、広いジャンルで活動している。　(賀川)



JEAN PIERRE ALARCEN
Jean Pierre Alarcen
LP/L'Escargot ESC 371　'78年
CD/Baille Mont CD 884

サンドローズのギタリストとして有名なジャン・ピエール・アラルセンのファースト・ソロ作品。彼のギター・プレイはエモーショナルで緻密、すなわち、メロディ・メイカーとしてのプレイもアドリヴも、さらにはバッキングにまわっても全て一流のものを持っている。それが最も良く表現されているのがサンドローズでのプレイであろう。しかし、このアルバムは作曲者としての挑戦であり、その点からみると荒削りな出来ということになろう。しかし、ナイーヴな感性によって支配される寂漠とした空間は人の心を打つ。このスタイルは次回で大きく進歩し完成に至る。尚、現在流布しているCDは、彼のファーストとセカンドが2in1として収録されている。　(山崎)



JEAN PIERRE ALARCEN
Tableau N°1
LP/Scoppuzzle ZZ　001　'79年
CD/Baille Mont CD884

ジャン・ピエール・アラルセンの第2作である。絵画、光景、描写などの意味の「タブロ」は、そのサウンド内容とを考え合わせれば、実に適切なタイトルのように思われる。ベランジェのバック・バンドから、ジェラール・コーエン、ジャン・ルー・ベソンを得、さらにダニエル・ゴヨンヌ(key)ともう一人のパーカッション、フィリップ・ルルーの5人が演奏している。気心の知れた仲間達と創造されたこの「タブロ」、勿論アラルセンの曲、構成である。内容は、まさに芸術と呼べるものであり、アラルセンはこの時、作曲家としての力量をいかんなく発揮した。この作品が「N° 1」とされているので、もしかすると「N° 2」も作っているかも知れない。　(中藤)



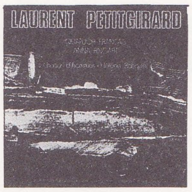
JUPITER SUNSET
Jupiter Sunset
LP/Pathé 2C 064-11238　？年

ファンタジックな内容のストーリーをテーマにしたトータル・アルバムである。ジャケットの内側には4枚の挿絵があり、収録された10曲に簡単な説明が付いている(曲名、歌詞は英語だが、説明はフランス語)。ジャケット裏側のイラストから、グループは4人編成と思われるが、ヴォーカルは別として、実際に彼らが演奏しているかどうかは分らない。サウンド的にはかなりプログレッシヴ・ロック色の濃いポップスと言える。ストリングとピアノを中心とするキーボードがリリカルな雰囲気を醸し出している。フランスのポップ・シーンにおいて、イギリスにおける後期のビートルズ(サウンドの完成度では大きく異なるが)や初期のプロコル・ハルムのような位置にあったバンドである。　(賀川)



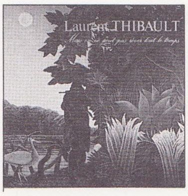
KOMINTERN
Le Bal Du Rat Mort
LP/Harvest 2C 062 11774　'71年

コミンテルンはフレンチ・ロック黎明期を代表するグループの一つである。彼らの作り出すサウンドは一聴したところコミカルな印象を与えるが、その実、ウィットに富んだ奥深いものである。中でもヴァイオリンやサックスを中心にしたノスタルジックな部分は特筆に値する素晴らしい出来と言える。また、アール・ゾイやユニヴェル・ゼロ、更にはZ.N.R.に通じる曲展開も見られ、彼らの蒔いた種は'70年代後半に見事に花開いたことになる。コミンテルンはこのアルバム１枚をリリースして解散、ヴァイオリニストのリシャール・オベールはアトールのセカンド・アルバム「L'araignée-Mal」に参加し、オリビエ・ズドルザリクも「Le Jardinier Du Couvent」以降のマリコルヌのアルバムでベースを担当している。　(賀川)



LAURENT PETITGIRARD
Laurent Petitgirard
LP/Instac STY 75048　'72年

ALEPH、POP INSTURMENTAL DE FRANCEで中心的役割を果たしてきたローラン・プティジラールの「Laurent Petitgirard(Discodis 140500)」('72)に続くセカンド・アルバム。前作ではテディ・ラスリー、ベルナール・リュバらと共演していたが、本作品に参加したミュージシャンは全てクラシック畑の人で、内容もシリアス・ミュージックの範疇に属するものとなっている。Ａ面は２作品、弦楽四重奏団とプティジラールのピアノ及びピアノ・ソロが収録されており、メロディアスながらも暗く重々しい弦楽器とややパーカッシヴなピアノの絡み、コンテンポラリーなピアノ・ソロが聴ける。一方、Ｂ面はメゾ・ソプラノ、男性合唱、チェロの共演。徐々に変化するゆったりとしたメロディが印象的なスケールの大きな曲である。　(賀川)



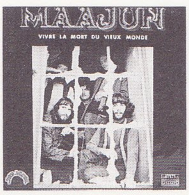
LAURENT THIBAULT
Mais On Ne Peut Pas Rêver Tout Le Temps
LP/Ballon Noir BAL 13009　'78年
CD/Musea FGBG 4054

マグマ等数多くのアーティストのプロデュースを手掛けてきたローラン・ティボーの唯一のソロ名義作。アマンダ・パーソンズ、ダヴィッド・ローズ、リシャール・ロー、フランシス・モーズ等多くの協力者を得て製作されている。サウンドは透明感のある女性ヴォーカル、主に自然音である効果音、フルート、ヴァイオリン等の使用、マグマ風のプレイ等を部分的に折り込んだ変化に富むものであり、それらを包むように繊細な音色のアコースティック・ギターとメロディアスで柔かな音色のベースを全体に配すことによって無理のない流れとまとまりを生んでいるものである。加えて柔かな音色の統一感と穏やかに溢れ出す抑揚感の演出は、まさに彼の力量を示すところのものである。ジャケットはアンリ・ルソーの作品。　(松本)



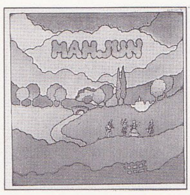
LBC TRIO
Baoba
LP/Cybélia CY 333　'84年

A.ギター、フルート、ヴァイオリンのトリオで地味ながらチェンバー・サウンドの真髄を極めた一枚。近代音楽にロックを融合した様な派手なチェンバー・ロックばかりもてはやされる傾向の為か、この優れた一枚は日本でレギュラー入荷されながら未紹介に終ってしまった。内容的には室内楽的な小品集で、うっすらと淡い色彩を想わせる、空気か風の様な音だ。シルクの様な肌ざわりは非常にデリケートで、さり気なさの中にフランス人らしいセンスを感じる。ついでに最近の隠れた作品を紹介しておこう。伊のDOUBLING RIDERSのBoxセットはミステリアスにふやけた名盤！　(平野)



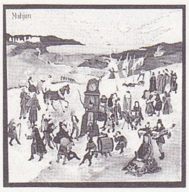
MAAJUN
Vivre La Mort Du Vieux Monde
LP/Vogue Collection Loisirs SLVLX 545　'71年

マジューンのファースト・アルバム。このアルバムのみグループ名がMAAJUNとつづられている。ジャン＝ルイ・ルフェーヴル、ロジェ・スカグリ、アラン・ロー、シリル・ルフェーヴル、ジャン＝ピエール・アルノーの５人が作り出すサウンドは正に彼ら独自のものである。東洋志向の呪術的雰囲気を持った曲、フルートとヴォーカルを主体に叙情性溢れる曲、サイケデリック・サウンドの影響を感じさせる曲、単純なリズムとフリーキーなサックスをバックにトーキング・ボーカルが延々と続く曲等、アルバムとしての整合性に欠けることも事実であるが、個々の曲はいずれも捻りの利いた彼らのオリジナリティを強く感じさせる内容となっている。　(賀川)



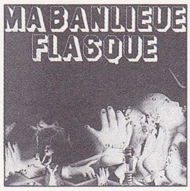
MAHJUN
Mahjun
LP/Saravah SH 10040　'73年
CD/Mantra 037

マジューンのセカンド・アルバム。このアルバムからつづりがMAHJUNに変わる。ジャン＝ルイ・ルフェーヴル(vln, fl, g, vo)、ジャン＝ピエール・アルノー(ds, per)以外はメンバーが一新されており、新たに女性サックス奏者ピエール・リゴー、フィリップ・ボボワ(b, p, per)が参加している。サックスとヴァイオリンを中心にしたジャズィな演奏が繰り広げられるなか、通常のジャズ・ロックとは異なった彼ら独自の曲展開を見せる。テクニックの面では問題を抱えているものの魅力的な内容を持った作品と言える。以後「Mahjun(Saravah SH 10047)」「Happy French Band(Gratte Ciel ZL 37049)」「Un Homme Sur Deux(CBS 85655)」と３枚のアルバムをリリース、次第にポップ色を強めていく。　(賀川)



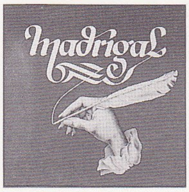
MAHJUN
Mahjun
LP/Saravah SH 10047　'74年

MAAJUN、MAHJUNの計５枚のアルバムを通じて一番雰囲気のあるアルバムだという気がする。オープニングの物静かなヴォーカルとヴァイオリンにイメージするなにやら暗いムードは、ボッシュの絵を俗っぽくしたようなジャケットに通じるところがある。MAHJUNはある程度ホップでおどけるような物語ふうの曲調が得意だという点で、いかにもフランスのバンドという気がする。このアルバムの各曲は、ヴァイオリンやサックス、ヴォーカル等がメロディックな味つけをして、しかも一本調子に済まない。それは構築的な作風というよりも、アンジュなんかが持っていた作風に近いものだ。時々ヴォーカル・パート等がふざけるが、それもうまく曲の流れに沿っていて、実は力量を感じさせたりする。　（松本）



MA BANLIEUE FLASQUE
Ma Banlieue Flasque
LP/Celluloid LTM 1021　'79年

マ・バンリュウ・フラスクはフィリップ・ボッタ(sax)を中心とした５人組のフリーキーなジャズ・ロック・グループで、音的には、フランク・ザッパや初期のゴングに近いものを持っている。アルバムはこの他には見つかっておらず、メンバーも無名の者ばかりである。サウンドの中心は、フィリップ・ボッタのフリーキーなサックスとチョポのけたたましく気狂いじみたヴォーカルにある。しかし、それを支えているダブル・リード・ギターとバッキング・ヴォーカル、そしてパーカッションも非常にセンスのあるプレイをしている。随所に用いられる効果音もドラマチックでシアトリカルである。特にA①からA②までの展開は聞く者の想像を絶しており、このアルバムのハイライトである。　（宇田川）



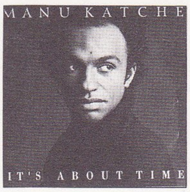
MADRIGAL
School Of Time
LP/Mad 001　'77年

オリジナリティこそあまり感じられないもののMADRIGALも平均以上の内容を持ったアルバムを１枚残している。全員がそれぞれリード・ヴォーカルが取れるということもあり、歌が中心となっている（歌詩は英語である）。アルバム・タイトルから推測できる通り、かなりポップ性が強く、演奏で押しまくるタイプではない。それでも、演奏自体はしっかりしており、フランスの音楽層の深さに感心させられる。クィーンの〝キラー・クイーン〟風のメロディに乗せて10CC並の美しいコーラスが聴けるA③、泣きのメロディを奏でるキーボードがその手のファンを喜ばすだろうA④、珍しくもチェロの美しいイントロで始まるB②（後半10CC風になってしまうが）こんな具合にブリティッシュ・ロックの影響が時にはプラスへ、時にはマイナスへと作用している。　（吉瀬）



MAHOGANY BRAIN
With When
LP/Futura RED 02　'71年

Futuraレーベルのロック・シリーズREDの第２弾として、レッド・ノイズに続いてリリースされたマホガニー・ブレインのファースト・アルバム。見開きジャケット表側は真黒で何の記載もない。ギターを中心にベース、パーカッション等がフリー・フォームな演奏を展開し、うつろな感じのヴォーカルがそれに絡む。かなりフリーなサウンドであるが、ロック色は濃い。やや拡散した感があり、完成度の高いものとは言えないが、この時代にこうした試みをしたことは意義があったと言えるだろう。'72年にリード・ヴォーカリストのMichel Bulteauがメンバーを一新して録音したものが、５年後の77年、ポール・レーベルからセカンドとしてリリースされたが、これも同系統のサウンドであり時代を感じさせる。　（賀川）



MANU KATCHÉ
It's About Time
CD/BMGビクター BVCP-190　'92年

今では誰もが知っている世界的な人気ドラマー、マヌ・カッチェの初のソロ・アルバムは、何とカッチェが初めて披露するヴォーカルを全面にフィーチャーしたポップ・アルバムだった。それもピーター・ゲイブリエルをバック・ヴォーカルに従える度胸の良さ。カッチェの歌は一見頼りなげだが、そのハスキー・ヴォイスはかつてのジョン・マークを思わせ、歌っている本人が実に気持ちよさそうだし、実際素直に心に染みる。文句のつけようがない一級品の味わいだ。何故だか殆どの曲がトム・ロビンソンとの共作となっている。そもそもカッチェがドラマーとしてスタートしたのはZAOとNEFFESH MUSICからで、そこから今の彼を想像したリスナーは一人もいなかったろう。巡り合わせというのはあるものだ。　（坂本）



MARTIN CIRCUS
En Direct Du Rock'n Roll Circus
LP/Vogue Popmusic SLVLX 428
'69年

このレコードは仏ロックを語る上でとても重要なものだ。デビュー・アルバムにも拘わらず、卓越した才能をフルに活かしており、充分な実力を見せつけている。特に〝人生は夢だ〟は仏ロック独特の美しい翳りのある代表的な曲ではないだろうか？そして〝スープじゃないよ〟はフランスの大道芸的なものを感じる事ができる曲。この様に仏ロックシーンに欠かす事のできない要素を全て持ち合わせた最もフランスらしさを感じさせるアルバムの１枚ではないだろうか？このアルバム発表ののちに、大幅なメンバー・チェンジがあり、アラン・ジャック・シヴィリザシオン(BYG)、バルタザール(Vogue)のメンバーを加えた。マルタン・サーカスは、エマニュエル・ブーズと共演した事もある。　（山田美雪）



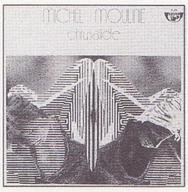
MELMOTH
La Devanture Des Ivresses
LP/Arion 30TO 79　'69年
CD/Mantra 076

'69年にクラシック畑のフランスの名門、アリオン・レーベルよりリリースされたメルモスの1stアルバム。メルモスとは後にゴングとの共作をシャンダール・レーベルよりリリースするダシェル・エダヤその人のことで、彼は70年頃には雑誌ROCK&FOLKに現代音楽関係のレビュウを寄稿するなどは幅広い活動を行っていた。このアルバムに聴くことのできるサウンドは当時、ソフト・マシーンやゴング達が行っていた方法論によって創られ、すなわち現代音楽、フリーミュージック等の斬新な音楽性を取り入れ、ロック・フィールドの中で開花されるといったもので、'69年のフランスとを考えるととてつもない高水準のアルバムといえる。バックはリシャール・ロー(Sax)を含む４人のミュージシャン達が起用されている。　(山崎)



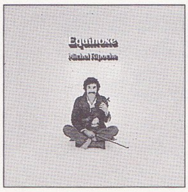
MICHEL MAGNE
ElementsN°2 L'Eau
LP/EGG LP 91039　'80年

フランスの哲学者ガストン・バシュラール(1884-1962)は著書「水と夢」の序文で「夢は四つの根本的元素の支配下にある」と語り、同書を含む四部作で夢想と想像力をエンペドクレスの唱えた地・水・火・空の四大元素の象徴に基づき分類・考察した。同じフランスのM・マーニュはそれを音楽で表現しようとしたのかも知れない。先に出た第一部「地」に続く第二部は「水」。明るい水、流れる水、深い水、優しい水、荒れる水。クラシックや民族音楽の要素を散りばめながら、マーニュは多様な「水と夢」の諸相を描き出す。水はしかし主に女性／母性的なものと結び付けられて来た。その意味で兄フランシスと共に参加したD・ロックウッドのヴァイオリンは効果的だ。残る「火」と「空」はどうなったのだろう。　(高山)



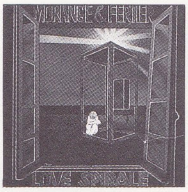
MICHEL MOULINIE
Chrysalide
LP/Crypto ZAL 6441　'78年

ミシェル・ムリニーのおそらく１枚だけであろうと思われるアルバム、「クリザリード」は全編、彼のソロ・ワークである。ギター、ベース、ヴァイオリン、シンセサイザーをたくみにこなす彼のセンスは、例えば、チューブラー・ベルズ期のマイク・オールドフィールドに近い音だ。アコースティック・ギターの心休まる音色、流れをつくるエレクトリック・ギター。ドイツのポポル・ブーあたりが好きた人には好まれるかも知れないが、あくまでフランスの音である。アンジュのフランス・デカンのプロデュースによって作られており、派手さはないが、いぶし銀のような名作である。なお、フランシスのソロ・アルバム「イストワール・ド・フー」(フィリップス9101-212)にも参加している。　(中藤)



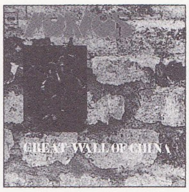
MICHEL RIPOCHE
Equinox
LP/Atlantic 50 194　'75年

元ズーのヴァイオリニスト、ミシェル・リポーシュの1stアルバム。ズー自体がそうだったように、決してプログレではないし、いわゆるジャズ・ロックとも一味違う。ごく普通のロックをヴァイオリンをメインにして演っている、という印象を受ける。この作品(以後の作品もそうだが)では、フランス独特の渋みというものはなくて、ラテン民族の脳天気な明るさがある。パリ・コンセルバトワールの出身。スタジオ・ミュージシャンとして、あるいはヴァンゲリスへの参加などマイナーなレベルでの活動が多い。他の作品としては、「コントゥ・ミュジコ(Atlantic50350)」、「ヴォリュプタ——なんと、肉欲という意味——(加Cadence CAD-1009、又は仏Spalax8.6832)」他がある。　(中藤)



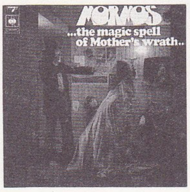
MORANGE & FERTIER
Love Spirale
LP/Gratte-Ciel CIEL 2008　'78年

Jean-François Morange(ac&el-g)とAndré Fertier(g, kbd, perc)とのデュオ。他にゲストでヴァイオリニスト、ドラマー、サックス奏者、タブラ奏者他が参加している。フェルティエはCLIVAGEのリーダー。このデュオの唯一のアルバムは、モランジュ作の詩と構想を基にしたトータル作で、スペイシーなムードにCLIVAGE流サード・イアー・バンド系民族音楽色が混り、ヴァイオリンやサックス他がソロを取り、そしてヴォーカルが入っているといった内容だ。ちょっと異色なカラーがある。これでアルバム・ストーリーはSFタッチ。しかもナレーションも入る。一種の企画物だが、広がりのあるまとまり方で、クオリティがある。　(松本)



MORMOS
Great Wall of China
LP/CBS S 64430　'71年

フランスで活動していたアメリカ人のプログレッシヴ・フォーク・ロック・グループ、モルモスのファースト・アルバム。ともにハイ・トーンの男女ヴォーカルと重厚なチェロ、リズミカルなギター、メロディアスなフルート、軽やかなリコーダーが絡んだ演奏は決して複雑なものではないが、非常に聴き応えがあり、各メンバーのプレイヤーとしての並々ならぬ力量を示している。ユーモラスな箇所もあるが、全体のイメージとしてどこか影を感じさせるサウンドはとてもアメリカ人のグループとは思えない。フォーク、トラッドの手法をベースにしているものの、曲は全てオリジナルであり、ロック的味付けも程良くされているので、フォーク・ロックのファン以外も十分に楽しめるだろう。　(賀川)



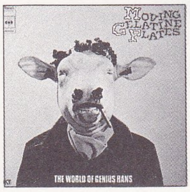
MORMOS
The Magic Spell Of Mother's Wrath
LP/CBS 64979 '72年

「Great Wall Of China」(CBS S 64430、'71年)に続くモルモスの2ndアルバム。前作発表後、多少のメンバー・チェンジがあり、グループはヴォーカル、フルート、ギター、ウッドウインド、チェロをメインとする5人プラス作詩担当の6人編成となっている。そのサウンドは1stの延長線上にあり、極めて完成度の高いプログレッシヴ・フォーク・ロックに仕上がっている。各メンバーのプレイヤーとしての技量は素晴らしく音楽的教養の深さを感じさせる。メンバーは全員アメリカ人とのことであるが、作品から受ける印象は正にヨーロッパである。ヨーロッパ各国のファンの間ではメロウ・キャンドル、チューダー・ロッジ、スパイロジャイラ等と並んで最も高く評価されているフォーク・ロック・グループの一つである。(賀川)



MOVING GELATINE PLATES
Moving Gelatine Plates
LP/CBS 64399 '71年
CD/Musea FGBG 4062

'71年に「The World Of Genius Hans」(CBS 64164)を発表したM.G.P.の同名アルバム。1stアルバムと思われる。ユーモラスなジャズ・ロックとでも言うべきサウンドである。3、4、5あたりのソフト・マシーンをフランス風味で演っている、という印象を受ける。ジェラール・ベルトラム(g, vo)、モーリス・アルマンジュ(kb, fl, sax)、ディディエ・ティボ(b, vo)、ジェラール・ポン(ds)の4人である。「天才〜」の方には、トロンボーン、バスーン、ヴァイブ等が加えられている。ジャズのサックスとドラムに、ロックのギターとベースを足した音楽性は、ともするとフュージョンになりがちだが、リズムの詰めの甘さがこのバンドをフランス風ジャズ・ロックに押さえている。(中藤)



MOVING GELATINE PLATES
The World Of Genius Hans
LP/CBS 64146 '71年
CD/Musea FGBG 4101

MGPはマグマ、ゴング等と並びフランスのプログレッシヴ・ロック最初期のバンドの一つだが、2枚のアルバムが出ているだけなので、あまり知名度はない。でも音楽の方は有名所にひけをとらないと思う。マシーンとゴングの中間を行きフレンチ・ソフト・フォーカス気味にどことなく耳ざわりもいい。これは'71年末に録音された2作目に当るもので、彼等の実力が盛り込まれた14分の大曲が収録されている。バンドはその後解散し、ベース奏者のディディエ・ティボがマグマ、ゴングの交友を経て、'78年にMOVINGとしてバンドを再編した。その'80年の録音、5曲も今回、CDに収録されている。もともと変拍子ロールの小刻みな展開が得意で、サックスやフルートも軽やかなトーンだから聴きやすいと思う。(松本)



MOVING
Moving
LP/Amo CA641 '80年

フレンチ・プログレッシヴ・ロックの黎明期を代表するグループの1つであるムーヴィング・ゼラチン・プレイツ(MGP)のベーシスト、Didier Thibaultが結成した、その名もムーヴィングの唯一のアルバム。Thibault以外にギター、パーカッション、サックス、キーボードがグループに参加している。MGP解散から8年近い月日が流れているが、曲展開、サックスのプレイ等に確かに残り香が感じられる。残念なことにムーヴィングの聴き所はそうした部分であり、新たな試みはあまり魅力的ではない。しかし、かつてのグループに通じる部分も懐かしさあってのものである。「今、自分はシーンの最先端にいるのだ」という意識のもとで作られたものと同レヴェルのものを8年後に作り出すのは不可能である。(賀川)



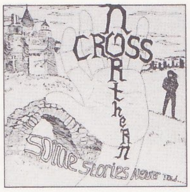
NEMO
Nemo
LP/Agave AG35702 '73年

スタジオ・ミュージシャンとして、また、ライヴのバック・バンドとして非常に多くの演奏をしている5人のミュージシャン――Pascal Arroyo(b, p)、François Bréant(vo, e-p, org)、Clément Bailly(ds)、Emmanuel Lacordaire(per, g)、Marc Perru(g, vo)から成るネモのファースト・アルバム。比較的ポップな内容で、グループとしての強い個性は感じられない。メロディアスかつ流れるような演奏はともするとイーズィな印象を与えかねない。確かに軽く、ドラマチックなサウンドではないが、よく聴けば、それなりに凝った構成になっており、演奏も無駄なく洗練されたものであることが分かる。良質のロックではあるが、プログレッシヴ・ロックの要素は少ない。(賀川)



NEMO
Doin' Nuthin'
LP/Agave AG35703 '74年

ネモのセカンド・アルバム。前作と同じ5人のメンバーに加えて、一部の曲にAlbert Morcoeur(as, b-cl)らのゲストが参加している。サウンドは前作よりも遙かに凝ったものになっており、スタジオ・ミュージシャンとして多くの仕事をした各メンバーの実力が遺憾なく発揮された演奏が展開されている。所謂シンフォニック・ロックのドラマチックな演奏やジャズ・ロックのドライヴ感のある演奏とは異なり派手さこそないが、非常にテクニカルかつ安定したプレイであり、細かい部分にも気配りがされている。一般のプログレッシヴ・ロックとは音作りの手法が多少異なるが、そのサウンドは、文字どおり、プログレッシヴなものと言える。ジャケット内側のポップなイラストとレイアウトが時代を感じさせる。(賀川)



NORTHERN CROSS
Some Stories Never Told
LP/59190　？年

一時フランスで多く見られたシンフォニック・ロックの自主製作盤の一つ。７人のメンバーによる演奏は、サックスを加えるなどそれなりの工夫が見られるが、シンプルで素人臭いものである。また、ヴォーカルが英語のため、フレンチ・ロックならではの味わいも感じられない。曲も変化に乏しく、全体の流れも平坦である。演奏している本人は楽しいかもしれないが、聴く者も楽しますレヴェルにまでは達していない。ジャケットの稚拙なイラストが内容を象徴していると言える。フレンチ・シンフォニック・ロックならば何でもというマニア向けの作品。（賀川）



NYL
Nyl
LP/Urus 000.013　'76年
CD/Legend Music LM 9003

Michel Peteau(g)とStéphane Rossini(ds)を中心にする意欲的なロック・バンド。他のミュージシャンは全員ゲスト。このゲスト陣と中心人物二人の出す音楽とのミス・マッチが、時に斬新にアナクロにも聴こえる。CDはNYLからNILへ綴りを変えジャケを変え曲順を変え、35分強７曲のデモを追加して、ほとんど原型をとどめていない。LPの方の音源もスタジオ・ライヴで、全体に勢いのある音だ。参加陣にはジャニック・トップやアリエル・カルマ、LARD FREEのアントワーヌ・デュヴェルネ他がおり、NYLをおもしろくしている。特にバンドのテーマ曲とも言うべきタイトル曲ではトップのベースがマグマ張りにうめく。これら妙な顔合わせにより一向に整合感はないが、その崩れ具合が結構いい。（松本）



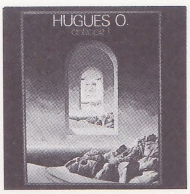
OMEGA PLUS
How To Kiss The Sky
LP/Pitch 3001　'69年

オメガ・プラスはマグマの初代ギターリストとして知られるクロード・アンジェル(g, vo, fl, s-recorder, t-recorder)がGérard Levy(b)、Marcel Engel(ds, vo)と結成していたトリオである。A面にはクロードのブルーズィで乗りの良いギターとヴォーカルを中心にしたクリームの影響下にある作品、フルート、アコースティック・ギターをバックにクロードが感情を込めて歌い上げる叙情的な作品、リコーダーによるユーモラスな小作品等が収められている。一方、B面は16分を越える大作で、キング・クリムゾン、アモン・デュール、ファウスト、ジミ・ヘンドリックスを融合させたかのような斬新かつ力強い演奏が展開されている。'60年代のフレンチ・ロック・シーンが生んだ最もクリエイティヴな作品の一つと言える。（賀川）



OMÉ'TAXALIA ET BUCCHI
Lettre D'Ocre
LP/Uniteledis Uni 19.776　'77年

ヴォーカリスト、オメタクサリアの事実上の1stアルバム。フレンチ・ロック界では優能なセッション・マンとして知られるジャン・ルイ・ビュキとの共作という形式をとっている。ここでのビュキはジャズ的要素は余り感じられなく、クラシカルなピアノを全編弾きまくっており、時として印象派からの影響のあるみずみずしさを感じさせてくれる。一方オメタクサリアのほうも重みのある素晴らしい歌を披露してくれていて、２枚組という大作を中だるみなしに歌い切っている。バックを彩るアーティスト達も緊張感のある見事な演奏である。尚、オメタクサリアは79年に２nd「Antilope1」をやはりビュキの協力の基に創るが、若干パワーは落ちてしまったのが残念である。（山崎）



HUGUES OMÉTAXALIA
Antilope 1
LP/Spalax FP86812　'79年

ユーグ・オメタクサリアのアルバムは、'79年にジャン・ルイ・ビュキの協力のもと製作された。〝永遠の歌〟と名付けられたこの作品は４部作の第１部にあたる。ジャケットにセンスの良さを感じさせるのだが、肝心の音の方は、ビュキのピアノとベルナール・パガノッティのベースなどの入ったバックの方は十分魅力的なのだが、ユーグのヴォーカルが、従来のシャンソン風の歌い方から抜けきらないところも多く、曲によっては平凡なヴォーカル・ナンバーになってしまっていて感心しない。それでも三曲ぐらいは淡々とした中にも古代の儀式を連想させるような曲がある。要するにアルバム全体の印象が希薄なのだが、中には良い曲もあると断を下すことができよう。（宇田川）



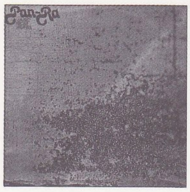
OPALE
La Dernière Toile Du Maître
LP/Podom POD 02　'81年

'81年に自主制作されたオパールのアルバム。acギター、ピアノを中心に非常に洗練された美しい旋律が楽しめる。フランス語独特のヴォーカルが何とも耳に心地よい。それを控え目ながらも温かなシンセ音がそっと包み込む。華麗なキーボードプレイ等は一切盛り込まれておらず、純正のシンフォニック・ロックとは言えないかも知れないが、丁寧な手作りの音を積み重ねることにより驚く程みずみずしい世界を築き上げている。作品の完成度、演奏技量とも同年代にリリースされたアルバム群の中ではハイレベルの部類に属していると言える。なお、同レーベルからは本作よりカットされたシングルが出ているが、今のところ新作が発表されたというニュースは聞かれない。（江田）



OPÉRATION RHINO
Fête De Politique Hebdo Lyon 76
LP/ES 42 '76年

Jacques Berrocal、Raymond Boni、Richard Raux、François Tusques、Gilbert Artman、沖至ら、18人のミュージシャンから成る即興演奏集団、オペレーション・リノ。各メンバーの発する音が一点に集まり、徐々に大きくなり、遂には巨大な音塊となって襲いかかってくるかのような演奏、どこかユーモラスで万華鏡のように変化する演奏、音がモダン・バレーを踊っているような演奏、木々のうっそうとしたジャングルをイメージさせる演奏、更には、ジャズとしてオーソドックスな演奏等が次々に即興で展開される。非常にイメージがふくらむサウンドで、フリー・フォームながらも聴きづらくない。18人のメンバーによる即興演奏としては、そのバランスの良さは特筆に値する。（賀川）



PAN-RA MUSIC FROM ATLANTIS
Pan-Ra Music From Atlantis
LP/Pan Ra 110 278 '78年

正体不明。PANは楽器のパイプとギリシャの羊飼いの神をかけ合わせたもの、RAは古代エジプトの太陽神、そしてATLANTISは……と裏ジャケットに解説がある。ところでバンド名はPAN-RAなのか、Music From Atlantisは何なのか、これもよく分からない。メンバーはChaba Koncz(rec, bagpipe, cornet)、Fredi Alberti(cal, vln-cel, ukulele)、Michel Poiteau(g, jawharp, darbouka)の3人。順にハンガリー、ドイツ、フランス、の混合チーム。これにゲストでCatherine Hourcq(vo)が参加。もう1枚に較べると、こちらの方がアグレッシヴな演奏が多い。ジャズのようだがトラッドのようで、要するに様々な要素を入れた少しオリエンタル・ムードの即興演奏が続く。（松本）



PAN-RA MUSIC FROM ATLANTIS
Chobo-Michel
LP/Spalax 6. 6806 ?年

正体不明、2作目か？　こちらはC.KonczとM.Poiteauのデュオになって、ゲストが3名いる。小曲が多い。もう1枚の即興調のアグレッシヴさはあまりなく、かわって落ち着いた曲調が主流。あちらが狩猟民族ならこちらは農耕民族か？　どちらにしても、トラッドやジャズ等をベースにしてどこか物語ふうなアコースティック・ミュージックではある。むしろ古楽のイメージに近いか？　バンド名やジャケットから思い浮かべそうなメディテイション色はなく、もっと素朴さの伝わる音楽である。ノリはヒッピーっぽいが鳴っている音の方は、ヒップでもシリアスでもない。他にアルバムがあるか、メンバー絡みがあるか、よく分からない。（松本）



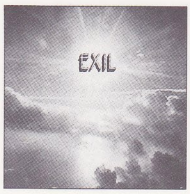
PATAPHONIE
Pataphonie
LP/Pôle 0003 '75年

ピアノ&オルガン、ベース、パーカッション、ギターの4人から成るパタフォニーのファースト。クリムゾン、ナショナル・ヘルス的な雰囲気もあり、一方でフランスしさも十分に感じさせるプログレッシヴ・ロックが聴けるセカンド・アルバムとは大きく異なり、完全にフリー・フォームな演奏が展開されている。サウンドはかなり暗めであり、その種のものとしてはやや変化に乏しく、小粒な感じがする。全員が力強くフリー・フォームなプレイを見せる部分からは、それなりの熱気とやる気が伝わってくるが、型にはまった感は否めない。また、キーボードを中心にしたサウンド・スカルプチャー的演奏は凡庸。彼らの本領が発揮されたとは言い難い、マニア向けの作品である。（賀川）



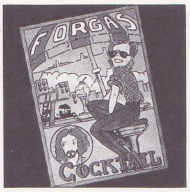
PATAPHONIE
Le Matin Blanc
LP/Feeri Music FEERI 178 '78年

1st「Pathaphonie」(Pôle0003)より遅れる事3年、ようやく発表されたパタフォニの2作目。アンドレ・ヴィオー(g)、ジル・ルソー(d)、ピエール・ドゥムロン(b)の編成になり、サウンドもフリー・フォームで雰囲気の押し流しの様であった前作から飛躍的に緊張度を増した。それは技量と計算の上に立った変則的な曲進行、フリー音との絡みによるもので後期クリムゾンを意識したような部分も聴かれる。この「白い朝」と名付けられたアルバム同じフリップに影響を受けたリシャール・ピナスのエルドンとは異なった方法論で作られている。ジャズの要素を発散させたヴィオーとコンテンポラリーの要素を押し進めたピナスの差だ。本作発表後しばらくしてグループは解散した。（中藤）



PATRICK BERNARD
Exil
LP/Gopal R.P.110 '81年

「Montre-Moi Ton Visage」(Gopal 2212、'78、'79年)に続くパトリック・ベルナールのセカンド・アルバム。前作を遥かに凌ぐ出来を誇っている。フランスにはエマニュエル・ブーズを始めとして、シンガーとバックを務めるミュージシャンとが一体となった好作品が少なくないが、本アルバムもそうした1枚である。ベルナールはブーズ、リベロ等の先人に匹敵するほどの強い個性こそ持ち合わせていないものの、繊細な感性の持ち主であり、リリカルなキーボード（メロトロンを全編にフィーチャー）を中心とする演奏をバックに情感に富んだヴォーカルを披露している。地味ながらもフランスならではの1枚である。なおカナダ盤はジャケットを変えて収録曲が1曲違い、また曲順も違う。（賀川）



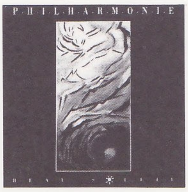
PATRICK FORGAS
Cocktail
ＬＰ/Gratte Ciel CIEL 2006　'77年

　ドラマー、パトリック・フォルガスのファースト・アルバム。ジェラール・プレヴォー(ザオ)、パトリック・ティルマン(テルパンドル、ザオ)ら、実力派ミュージシャンが彼をサポートしている。Ａ面には小品９曲が収められており、フォルガスの切れの良いドラムスを基礎に、曲ごとに、フルート、サックス、ギター、ヴァイオリン等が、短いながらも力の籠ったソロを披露している。一方、Ｂ面は18分の大曲一曲。ヴァイオリン、サックス、エレクトリック・ピアノ、ギター、ベースにフォルガスのややハスキーなヴォーカルも加わって、それぞれのソロをちりばめながら、緩急自在でドライヴ感のある演奏が展開されている。やや小粒な感もないではないが、良質のジャズ・ロックである。　(賀川)



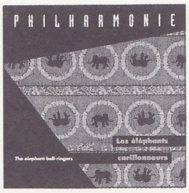
PATRICK VIAN
Bruits Et Temps Analogues
ＬＰ/Egg 900 541　'76年

　フレンチ・ロック黎明期に活動した伝説的グループ、レッド・ノイズの中心的メンバーだったパトリック・ヴィアン。グループ解散後はその名前を見ることもなかったが、７年の年月を経て、突如ソロ・アルバムを発表した。レッド・ノイズ時代はギターとヴォーカルを担当していたが、本作品ではシンセサイザー奏者としてプレイしている(１曲だけピアノを弾いている)。シンセサイザーの変化に富んだ音とリズムを基礎に、フリーキーなギターや効果音等を組合わせて独特の音空間を作り出すという手法は使用している楽器こそ違うがレッド・ノイズに通じるものがある。音が洗練され、まとまりも良くなっているが、レッド・ノイズの持っていた圧倒的存在感は感じられない。　(賀川)



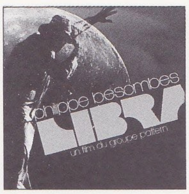
PHILHARMONIE
Beau Soleil
CD/φ Productions CD 012290　'　年

　フィルハーモニィは元シャイロックのギタリストFrédéric L'ÉPéeを中心にBernard Ros,Laurent Chalefの計３人のギタリストから成るユニットで'87年以来活動を続けている。メンバーはインプロヴィゼイションを主体とした自己の音楽を自らインプッシオニスト・ロック(Impressionist Rock)と呼び、20世紀初頭のフランス近代音楽の他、ブライアン・イーノ、スティーヴ・ライヒ、ロバート・フリップの作品に影響を受けたと語っている。本ＣＤは彼らのファースト・リリースであり、ライヴ・レコーディングである。そのサウンドは浮遊感に富んだゆったりしたもので耳に心地好い。「New Age of Earth」時代のアシュラや'70年代のスティーヴ・ライヒの作品に通じる響きがある。　(賀川)



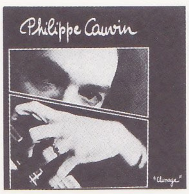
PHILHARMONIE
Les Éléphants Carillonneurs
CD/Cuneiform　'93年

　Cuneiformのということで私が紹介することになった。PHILHARMONIEは元SHYLOCKのギタリスト、フレデリック・レペーの率いるギタリスト３人組だ。これが２ndアルバムになる。Ｒ・フリップの影響も勿論あるのだろう、THE CALIFORNIA GUITAR TRIOや初期のHELDONのサウンドを連想するのは容易だ。全体にとてもゆったりとしてなだらかな表情の音楽だが、ほのかに狂気じみた色彩があって、どこかマイク・オールドフィールドの音楽にも通じるものがある。ニュー・エイジ・ミュージックの仮面を被った、爽やかな偏執狂音楽。　(坂本)



PHILIPPE BESOMBES
Libra
ＬＰ/Pôle 0004　'75年

　フィリップ・ブソンブのファースト・アルバム。GROUPE PATTERNなる集団によって作られた映画「Libra」のサウンド・トラックである。シンセサイザー、キーボード、シタールを演奏するブソンブ他複数のヴォーカリスト、ギターリスト、ベーシスト、オルガニスト、ドラマーら、多くのミュージシャンが参加している。シンセサイザーとヴォイスによるミュージック・コンクレート風の演奏、シンセサイザーとシタールによるメディテイショナルな演奏、ミニマル・ミュージックのような演奏、サイケデリック・ロック調の演奏等が次々に登場する。サウンド・トラックであることを考慮しても、やや場当り的で、ミュージシャンとしての明確なポリシーを感じさせないが、サウンド自体はそれなりに楽しめるだろう。　(賀川)



PHILIPPE CAUVIN
Climage
ＬＰ/KC-1111　'82年

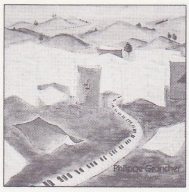
　Philippe CauvinはUppsalaのギタリストであったと同時に、ソロ・アーティストとしても個性的な成果を上げた才人。Uppsala(既に７'シングルは世に出ていたが)に先駆ける事２年前、彼の１stアルバムはリリースされた。アコーステイック・ギターから奏でられる近代～初期現代音楽を彷彿とさせる不思議な和声と、ロック的なダイナミズムが調和したモダンで美しいサウンドは、彼の音楽的素養の幅広さと深さ、ギタリストとしての技量の高さを如実に物語る。加えて彼のもう一つのトレード・マークと言うべき(MAGMAと言うよりSefferのそれに近い)なめらかなファルセット・ヴォイスが決定的なオリジナリティを本作に付与している。今の耳に広く届けばもっと評価は高まると思うのだが。隠れた名盤。　(山田)



PHILIPPE CAUVIN
Memento

LP/Komono Records/Kl Records Del 168 '84年

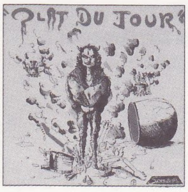
Uppsalaを率いるP.Cauvinのソロ2作目。繊細且つダイナミズムも持ち合わせた特異なスタイルのクラシック・ギターを中心に、リスナーの心の中に強引に割り込むほどの説得力を持ったファルセットヴォイス。他の楽器や少数のゲストを人えてもあくまでも装飾品。きりきりとした感性（嫌いな言葉だがここまで高みに昇った人に対しては褒め言葉として使わざるを得ない）が完璧なまでの技術の上になり立っている数少ない実例。前作と同傾向だが2作いっぺいに聞き倒してしまうのが正しい楽しみ方ではないだろうか。B面全体を使った大曲もギター＋ヴォーカルの多重ながら全く飽きさせず。外見だけならコード進行と和声が唯一無二の前作と共に必聴の'80年代の隠れた名作。（伊藤）



PHILIPPE GRANCHER
3000 Miles Away

LP/Pôle 0014 '77年

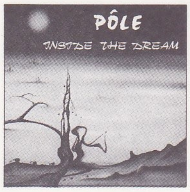
キーボード・プレイヤー、フリップ・グランシュの唯一のアルバム。グランシュはアコースティック・ピアノ、エレクトリック・ピアノ、シンセサイザー、メロトロン、オルガン、ストリングス・アンサンブル、エフェクトと多くの楽器を演奏しており、一部の曲にはギター、ベース、ドラムスなども参加しているが、いずれの曲もオーケストラ的厚みを持ったものではなく、シンプルかつメロディアスな音（アコースティク・ピアノによる演奏はシリル・ヴェルドーを思わす部分もある）で聴く者のイメージに訴えかけてくる作りになっている。曲作り、演奏技術は凡庸であり、グランシュと波長の合う人以外にはあまりお薦め出来ない内容と言える。Tapiocaレーベルの再発盤もある。（賀川）



PLAT DU JOUR
Plat Du Jour

LP/Speedball 1002 '77年

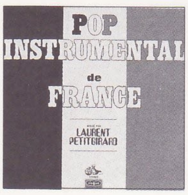
ギター、ベース、ドラムス、サックス、キーボードの5人をコア・メンバーとするプラ・ドゥ・ジュールの唯一のアルバム。フリー・フォームなギターの奔放なプレイは初期のゴングや時としてエトロン・フー・ルルーブランを思わすが、リズム・セクションが非常に安定しており、バンドとしてのまとまりが良く聴き易い。繰り返しを効果的に使った呪術的な音作りはフランスのグループならではのもので、彼らなりの個性も感じられる。知名度こそ低いが、中々の出来と言える。彼らの持ち味をうまく引き出し、よりめりはりの利いた音作りが出来るようなプロデューサーに巡り会えたならばグループは大成していたかもしれない。資質として良い物を持っていただけに残念である。（賀川）



PÔLE
Inside The Dream

LP/Pôle 0002 '75年

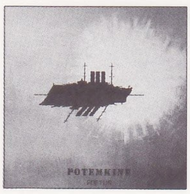
PÔLEにはもう1枚「Kotrill」というアルバムがある。それ以外に、このグループは同名のレーベルを始めた事、むしろこちらの方が意味深かったかもしれない。Pôleレーベルはアンダーグラウンドな空気を持っていて、エレクトロニクス・ミュージックから更に実験的な方向性の音楽までを扱っていた。このアルバムはA面とB面でミュージシャンも違えば、音の方も違う。どちらもメディテイショナルなムードを持っている点では共通してはいるが。A面はアコ・ギのアルペジオに効果音ふうのギター・プレイを重ねたもので、ほとんどギミック。25分1曲を終始〝神秘〟でのギルモアのプレイで通したようなもの。一方のB面はシンセサイザー・サウンド。どちらも散漫な印象はぬぐえない。A面はまだ雰囲気だけはある。（松本）



POP INSTRUMENTAL DE FRANCE
Pop Instrumental De France

LP/Vogue LOXV 17002 '71年

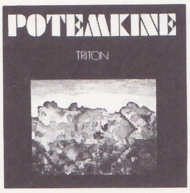
ALEPHのメンバーとしてクラシカルな雰囲気のロックを演奏、2枚のシングルを残したローラン・プティジラール。その後ヴァイオリン2人、チェロ、サックス＆フルート、ドラムス、ベース、ギターとともにポップ・アンストゥリュマンタル・ドゥ・フランスを結成、1枚のアルバムを発表している。曲作り、演奏技術ともに当時としてはかなりハイ・レヴェルであるが、ストリングスを中心にクラシカルな演奏が度々ムード・ミュージック的なものになってしまう。その奇妙なところが彼らの魅力とも言えるが、時代を感じさせる音である。そうした中、プティジラールのクラシカルなピアノ、正統的な流れを汲むジャズィなオルガンは最大の聴き所と言える。（賀川）



POTEMKINE
Foetus

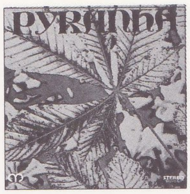
LP/Pôle 0010 '76年

POTEMKINEのファースト。多重録音によって作られたセカンドとは異なり、グループはギター、ヴァイオリン、ピアノ、ベース、ドラムスの5人編成である。クリアーでメロディアスなエレクトリック・ピアノ、ゆったりとしたヴァイオリン、鳴りのよいギター、ハイ・トーンのスキャット等が次々に登場する演奏は軽快であり、ジャズ・ロックとしての魅力がある。しかし、リズム・セクションがやや弱体で、ドライヴ感に欠ける面は否定出来ない。曲はめりはりがあり変化に富んでいるので聴き易い。演奏技術、曲作り、オリジナリティ等、いずれも傑出したものとは言い難いが、それなりのレヴェルにあり、中堅のジャズ・ロック作品として楽しめる。後にTopiocaレーベルから再発されたものはプレスが悪い。（賀川）



POTEMKINE
Triton
LP/Tartempion V30/ST7162 '77年

ポテムキンは、グバン三兄弟を中心としたグループである。これは彼らのセカンド・アルバムである。この他に彼らは1st「Foetus」(Pôle 0010-再発はTapioca 0010)、3rd「Nicolas II」(Phaeton 7801) をリリースしている。本作までは完璧なスタジオ・グループだったようで、ピアノ&ドラムというクレジットもあったが、サードではドラマーを加えて、ライヴが行えるようになっている。70年代後半のフレンチ・ジャズ・ロックのグループの多くがマグマやザオの流れをくんでいるのに対して、彼らは全く独立した位置にあるグループとして存在した。クールでインテリジェンスあふれるプレイは、ハットフィールド&ザ・ノースを連想させる。 (宇田川)



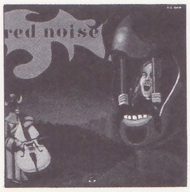
PYRANHA
Pyranha
LP/Epsilon EPSI-001 ?年

ピラーナが自主製作した唯一のアルバム。ヴォーカル、ギター、オルガン、パーカッション、ベース、サックスが作り出すサウンドはフリー・フォームなもので、どことなくARCHAÏAに通じる雰囲気もある。演奏自体はテクニックとは無縁のシンプルなものであるが、それがモザイクのように集まって、彼らならではの音になっている。初期のジャーマン・ロックのように、演奏技術、アレンジ、曲作りといった純音楽的視点を離れて、彼らの思想、試み、音の持つイメージ等に重点を置いて聴く音楽であるフランスにはあまり見られないタイプのグループであり、そのサウンドはこの種のものとしては個性的が強く、悪い出来ではない。しかし、聴き手を選ぶ作品であることは否定出来ない。 (賀川)



RAMON PIPIN'S ODEURS
1980: NO Sex!
LP/Polydor 2473 106 '80年

シャワー室で手首を切って自殺したダッチ・ワイフのジャケット、パガノッティ、ゴーティエ、ブラスキス、ステラ・ヴァンデール、ダヴィッド・ローズ、フランシス・ロックウッドら50人を超えるミュージシャンのクレジット、いったいこのアルバムはどんな音なんだろう。だれもが興味を持つに違いない。この時点で既にラモン・ピパンの術中にはまっている。ピパンは冗談、皮肉、下品さ等を売り物にした一筋縄では行かないシンガーである。そのサウンドは変幻自在であるが常にポップ。参加メンバーはバック・ミュージシャンに徹している。 (賀川)



RED NOISE
Sarcelles-Lochères
LP/Futura RED 01 '70年

'68年5月、バリケードに囲まれたソルボンヌ大学内でコンサートを開き一躍有名になったレッド・ノイズ。このアルバムは、オリジナル・メンバーのフランシス・レモンニエらがコミンテルンに参加するために脱退するなど若干のメンバー・チェンジを経た後発表された唯一の作品である。パトリック・ヴィアン(g, vo)、ダニエル・ジョフロワ(b, vo)、ジャン=クロード・サンスィ(sax, fl, vo)、フィル・バリー(ds, g, vo)に加えて、ジョン・リヴァンゴー(org)、オースチン・ブルー(per)の2人がゲスト参加している。A面ではロック、ジャズ、ポップス、効果音等が次々に飛び出すコラージュ的曲展開がみられる一方、B面はフリー・ジャズの要素を巧みに取り入れた実験的ロック作品に仕上がっており、中々の力作といえる。 (賀川)



RICHARD VIMAL
Migrations
LP/Polydor 2393 209 '78年

'70年に発表した自主製作シングル、'73年にバークレイ傘下のZapaレーベルからリリースしたシングル「Je Vous Salue Leur France」(Zapa BLY 81898)、LP「Transparences」(Polydor 2473 059 77年)に続く作品である。ヴィマルの話では「ファースト・アルバムは全くプロモートをしなかったため800枚程度しか売れなかったが、本アルバムはフランスのみならずヨーロッパ各国で積極的プロモートを行った結果、7000枚弱の売上があった。」とのことである。ヴィマルのシンセサイザーとルネ・ルバールのアコースティック・ギターを中心に展開されるメロディアスな演奏はジャケットの絵に象徴される甘くロマンチックなものである。本作品に続いて'80年には「Aquarythmies」(Polydor 2417 345) を発表している。 (賀川)



ROCHE
La Valise De Rêve
LP/Pathe Marconi 2C 064-12932 '74年

EMI傘下レーベルから本作をリリースしたこのバンド、メジャー・デビュウを果しただけあって安定した演奏が聞ける。部分的にはMORSE CORDとの類似性を指摘できるが、全体的にはメロトロンの導入からもMOODY BLUES的万人向けを狙った昇華されたポップ・サウンド。最近多い1〜2度針を落とすと聞く気が無くなる低レベルのシンフォニック・ロックとは違い、聞く度にその良さが滲み出る滋味豊かな作品。なお後にベースのBatardはHELDON最盛期の5thからラスト作迄やPinhasの1stソロに参加。 (吉野)



ROCK CRITICS
T. V.Show
L P/Upon Tyne 282　'80年

T.V.ショウと名付けられたレコード・タイトルといい、ダンスする若者を映し出すテレビのジャケット・デザインといい、一見バブルガム・ミュージック風であるが、何とこれがロック・クリティクスのセカンド・アルバム。A面はリズム・ボックスから発せられる定形リズムの上に、ギター、ピアノ、シンセサイザー等のあまり変化のないフレーズが重なるといったシンプルな構成になっているが、彼らの卓越した構成力は聴く者を決して飽きさせることなく、徐々に自分達の音楽の中に引き込んでいく。B面の出来がまた白眉である。けだるく、夢幻の、曖昧模糊とした世界が完璧に描き出されており、彼らが一つの頂点を極めたように感じられる。　(賀川)



ROLAND BOCQUET
Paradia
L P/Cobra COB 37008　'77年

日本では考えられないほどに、フランスでは人気があったカタルシス。本アルバムはそのリーダー的存在であったローラン・ボックの唯一のソロである。サウンドはカタルシスに近く、ボックのピアノ、シンセサイザーがゆったりとメロディアスな演奏を展開し、それにギター、フルート、パーカッション等の穏やかな演奏が加わって、上昇感のある、ややメディテイショナルなサウンドになっている。フランスにはあまり見られない、ジャーマン・ロック的な音であるが、どこか弱々しく、あまりあくのないところがフランス的と言える。ジャケットの色鉛筆で描かれた絵のように、リラックスして聴くと楽しめるだろう。全10曲ながら、演奏時間は30分と短い。

(賀川)



ROLAND HOLLINGER
Bardo Thodol
L P/Scorpios SC 109. 407　'78年

ギター及びシンセサイザーをプレイするローラン・オランジェのソロ・アルバム。オーボエ、ピアノ、パーカッションが彼をサポートしている。そのサウンドは、エルドン、リシャール・ピナス、そして、フリップ・アンド・イーノの影響下にあるエレクトロニクス・ロックである。それは必ずしも手法的に新しいものとは言えないが、演奏自体は穏やかながらも繊細で、聴き手のイメージを強く刺激する。また、彼ならではのオリジナリティを感じさせる部分も少なくなく、この種の作品としては中々の出来と言える。オランジュの作品としては本作のみが有名で、知られているが、他にも同傾向のものがリリースされているらしい。　(賀川)



RONNIE BIRD
Ronnie Bird
L P/London MLP 10062　'65～'66年?

優れた60'sガレージ・パンクのリイシューで知られる仏Evaレーベルが唯一出した仏ガレージのレコードと言えば、Ronnie Birdの編集盤(?)「En Public」だろう。そのことからも分かるようにR.Birdの評価は内外で非常に高い。しかし残念ながら日本では情報が余りに少なく、'65～'69年当時に彼が何枚のLPを出していたかは良く分らない。音から察するに本作が彼の絶頂期に於ける録音であることは間違いない。A①からいきなりしびれるようにかっこ良いR&B、YARDBIRDSスタイルのパンク・ナンバーが続く名盤。現在他に60's仏ガレージ・シーンを知る数少ない資料としては、'65～'66年物を集めたコンピレーション「Génération Perdue」が入手可能。そちらも一聴の価値あり。　(平野)



SAGA DE RAGNAR LODBROCK
Saga De Ragnar Lodbrock
L P/Solaris SOL 001　'79年

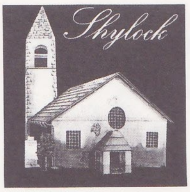
Jean Cohen Solal (fl)他、ギター、キーボード、ベース、ドラムス、トロンボーン等のメンバーから成るSAGA DE RAGNAR LODBROCKの唯一の作品と思われる本アルバムは今まで全く紹介されたことがないが、そうしたことが信じられないぐらいに充実した内容である。A面にはトラッドの香りをかすかに感じさせる繊細な作りのメロディアスな小曲が収められている。一方、B面は組曲でエマニュエル・ブーズを思わすドスの利いたトーキング・ヴォーカルを中心にダイナミックでドラマティックな演奏が展開されている。

(賀川)



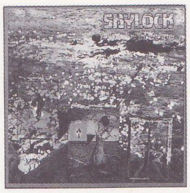
SEMOOL
Essais
L P/Futura SON 02　'71年

Raymond Boni(g)の「L'oiseau, L'arbre Le Béton」でスタートしたFuturaのSONシリーズの第二弾。2人のギターリストとパーカッショニストを擁するSEMOOLが残した唯一の作品である。ギターによるフリー・フォームな演奏を歪ませたサウンドは初期のフレッド・フリスに近い雰囲気がある。また、フリップ&イーノ時代のロバート・フリップのような奏法も見られる。全体に試行錯誤の感があり、グループ及びプレイヤーとして方向性が明確ではないが、'69年1月、'71年3月という録音時期を考えると、極めて斬新かつ意欲的な試みだったと言えるだろう。現代音楽、フリー・ジャズとはタイプの異なるフリー・ミュージックである。なお、本作以後のメンバーの動向は全く不明である。　(賀川)



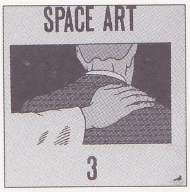
SHYLOCK
Gialorgues
LP/Gialorgues 8001　'77年
CD/Musea FGBG 4105

シャイロックの1stアルバム。厳密に言えばCBS盤はオリジナルではなく、前年の'76年にタイトルと同名のジアロルグ・レーベルから出た物が初回プレスである。編成はg. key. dr.の3人で、b.はギタリストが兼任している。全体的な音の印象は非常に攻撃的で、後期キング・クリムゾンからの影響を感じるが、それはギタリストがその奏法をR.フリップから多く学んでいることによる。が、同時にキーボーディストのセンスはクリムゾンのそれとは異なっており、彼の存在がバンドの単なる類似化を防いでいる。新たにベーシストを加えた2nd「Île De Fièvre」(78年、CBS82862)では本作の延長線にある大曲をメインにしつつ、即興の要素が強い曲も多く収められている。CD化の際、未発表だった五曲が追加された。　（城元）



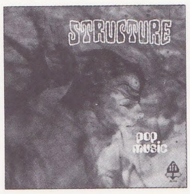
SHYLOCK
Île De Fievre
LP/CBS 82862　'78年

本作はSHYLOCKが'78年にリリースした2ndアルバムであり、また同時に彼らの最終作でもある。このアルバムでは1stレコーディング時のオリジナルメンバーである3人から新たにベーシスト兼ギタリストのSerge Summaを加えた4人編成により録音されておりその為か前作以上にKING CRIMSONの影響を色濃く感じさせるようなギターやパーカッション等を中心に展開するインプロヴィゼーション的な部分が増えてきている。しかしながらそれ以外の曲に関しては1st同様フリップナイズされたギターとテクニカルかつシンフォニックに曲を演出するキーボードがうまく融合した緊張感に富んだ高水準の大曲を聴かせてくれ、1stと並んで名盤と呼ぶのになんのためらいも要らない素晴らしい作品に仕上がっている。　（島村）



SPACE ART
3 (Play Back)
LP/Carrere 67 575　'?年

スペース・アートは'70年代後期に3枚のアルバム（1st「Space Art」Carrere2934101, 2nd「Trip In The Center Head」Carrere2934104）をリリースしたエレクトロニクス・ユニットであり、基本的にキーボードのドミニク・ペリエとドラムスのロジャー・リツィテッリの2人で構成されている。本作は彼等の3枚目のアルバムである。彼等のサウンド・イメージというものは、一言でいうとするならトリッキーなエレクトロニクス・ミュージックといえる。どれも水準以上の作品であるが、後期になる程、センスが洗練されており、かなりポップなイメージがあるものの、ヴィジュアルに自由自在にエレクトロニクスを操る本作を代表作としておく。ドイツ品とは全く違う、正にフランスの音だ。洗練された良質のトリップ・サウンド。ハイ・センスなジャンキーに。　（山崎）



STRUCTURE
Pop Music
LP/AFA N.E.C.20745　'70年

フルート、ヴァイオリン、ギター、ベース、キーボード、ドラムス、女性ヴォーカルによって作られた、ストラクチャーの唯一のアルバム。ロックとポップスがまだ完全に分離していない、ジャズ以外のものを全てポップと言った時代の作品である。ジャンル的には、エデン・ローズ、ポップ・インストゥリュマンタル・ドゥ・フランスなどと同じ範疇に属するサウンドである。曲作りの面で、'60年代のポップ・ジャズ風の古さを感じさせる部分もあるが、リーダーであるBeronaro Wystraeseのフルートを中心とする各メンバーの演奏は、非常に表現が豊かであり、メロディアスかつドラマチックな展開を見せる。今聴いても十分に楽しめる、フレンチ・プログレッシヴ・ロック黎明期の名作の一つ。　（賀川）



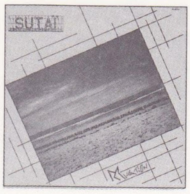
SUBVERSION
Subversion
LP/Pôle SVB 020　'76年

シュブヴェルスィオンの唯一のアルバム。自主制作盤をポールがディストリビュートしていたもの。サウンド的にはポール・レーベルの一連の作品群とは異なり、実験的なシンセサイザー・ミュージック的な面は少なく、メロディアスなプログレッシヴ・ジャズ・ロックという作風に仕上がっている。メンバーは全く無名で、現在の消息は不明である。A①はアコースティックなギターによるイントロではじまり、叙情的なヴォーカルと、シンフォニックというよりもジャジーなキーボードがからんでクライマックスに達する。その他の曲もカンタベリー系列やカルプ・ディアン風のジャズ・ロック調かつメロディアスな作風もかねそなえたものが多い。　（宇田川）



SUPER FREEGO
Pourquoi Es-Tu Si Méchant ?
LP/RCA PL 37657　'82年

Karakiなるベーシストをリーダーとするスーパー・フリーゴーの唯一のアルバム。ゲストとして元ヴェードルジュのギヤール兄弟が参加している。サウンドの要はベースとドラムスから成るリズム・セクションで、その力強く、重々しい演奏はマグマに通じるものがある。それに、軽い女性ヴォーカル、管楽器が絡む展開はマグマ、あるいは、エスカトンを思わす雰囲気であるが、突如ラップのような男性ヴォーカル等が加わって、ニュー・ウェイヴ調にも変化する。マグマ的アグレッシヴなサウンドにニュー・ウェイヴ的要素がうまく導入されており、他に類を見ない、非常に個性的な音を作り出すことに成功している。Karakiとは一体どのような人物なのであろうか。　（賀川）



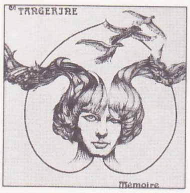
SUTAÏ
Mutation
LP/Vanessa VA 86002　'?年

　スタイのミニLP(A、B面、各2曲で、総演奏時間は25分程度)。ギター、キーボード、ドラムスのトリオによる演奏。メロディアスかつめりはりの利いた展開はシンフォニック・ロック的であるが、シンセサイザーのプレイの一部にシンセサイザー・ミュージック的な雰囲気が感じられ、また、リズムがニュー・ウェイヴ風の箇所もある。しかし、それらがうまく合わさった全体の流れには無理がなく、他では聴くことの出来ない個性的なサウンドが楽しめる。如何にも自主製作盤といった覇気のあるプレイであるが、曲作りにもう一工夫あったならば、もっと注目されたであろう。本ミニ・アルバムが唯一の作品と思われる。'80年代中頃の作？　(賀川)



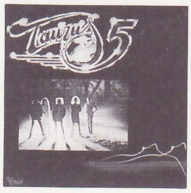
TANGERINE
De L'autre Côté De La Forêt
LP/Arcane 87.014　'75年
CD/Spalax Music 14856

　ジャン・クロード・ポニャンのアルカン・レーベルは後にクリプト・レーベルと改名された。これは改名前の同レーベルに残されたタンジェリーヌの初作であると思われる。彼等は続いて2nd「Mémoire」(Crypto ZAL6400)を、メンバーのヴァレリー・ブテッシュはポーレンというグループを率いて「Rêves Cristal」(Crypto ZAL6414)を発表している。アコースティック・ギターとフランス語の語感を活かしたヴァレリーの透明感あるヴォーカルを中心とするサウンドはフォーク・ロックと呼ぶにはやや叙情的でそれはギターのアルペジオ、フルートの絡み、時折聴かれるキーボードのためである。メロディーに古さを感じさせるがフォーク・ロックの持つ繊細さとシャンソンの持つ陰りを備えており瑞々しさを感じる。　(松本)



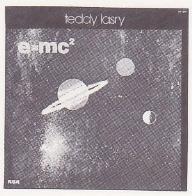
TANGERINE
Mémoire
LP/Crypto ZAC 6400　'78年
CD/Spalax Music 14855

　かつてクリプト・レーベルからリリースされたタンジェリーヌのセカンド・アルバムをCD化したもの。意味ありげなジャケット・デザインから想像されるサウンドとは異なり、アメリカン・ロックの強い影響下にある。フランス語のヴォーカルで歌われている曲がなければフランスのグループとは思えないだろう。ソフトでメロディアスな曲、のりの良い軽快な曲等、バックグラウンド・ミュージックには悪くないが、プログレッシヴ・ロック・ファン向きとは言えない。ファースト・アルバムをお薦めします。　(賀川)



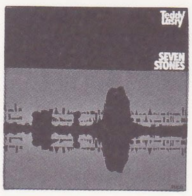
TAURUS 5
Taurus 5
LP/Vogue 508605　'80年

　キーボード＆ヴォーカル、ギター2人(うち1人はヴォーカルも担当)、ベース、ドラムスから成るトーラス・ファイヴ(サンク)が残した唯一のアルバム。そのサウンドはアトールをハードにしたかのようなシンフォニックでドラマチックなものとハード・ロック・グループとしての面が色濃く出たものがある。曲はシンプルではあるが、めりはりの利いたまとまりのよいもので、作品としての出来は悪くない。プログレッシヴ・ロックともハード・ロックとも言えない音作りのため、ファンを掴むことが出来なかったのかもしれない。グループのリーダー的存在だった、キーボード・プレイヤーのAlain Tristonは、'82年に、同傾向の作品「Maréchal Coeur De Rêve(Black Sward BLS 308192)」を出している。　(賀川)



TEDDY LASRY
e=mc²
LP/RCA FPL 10148　'76年

　テディ・ラスリーはマグマに在籍したことのあるミュージシャンであり、このアルバムの次に発表された「Seven Stones」(邦題「石晶幻想」)(RCA PL37257)を御存知の方も多いであろう。その他にも自主制作盤「Tutti Frutti」(砂糖菓子の名)他を発表している。本作はベースにジャニック・トップ、ドラムにアンドレ・セカレッリをむかえている他は、全ての楽器を彼が演奏している。スペイシーなキーボード・プレイが虚空にしみわたるように広がっていき、フルートの旋律が小鳥のように飛びかう様は秀逸である。単調なシンセ・ミュージックにおちいらずに、フレンチ・ジャズのエッセンスと、エスプリのきいた暖かみのある名作である。なお、日本盤LPは発売直前で回収され、市場には少数しか出ていない。　(宇田川)



TEDDY LASRY
Seven Stones
LP/RCA PL 37257　'79年

　初期MAGMAにおけるサキソフォーン奏者である彼のソロ。かなりの数のソロ作品をリリースしているようだが代表的なのは本作と「e=mc²」であろう。一部、若干名のゲストを使いながら全パートを演奏し、宝石の名前をタイトルにした7つの曲を築き上げている。中心となるのはシンセサイザーとシーケンサーで、あまりだらだらしない幻想的な世界となっている。全体の出来は「e=mc²」に一歩譲るが本作もなかなか良く練られている。因みに彼のMAGMA以外でのセッション活動は意外と少なく、Gilles Elbaz、Zabu、PERCEPTIONの2nd辺りにとどまりMAGMA脱退後はソロ活動に専念していることになる。　(伊藤)



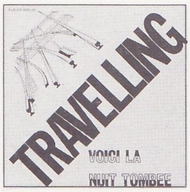
TEDDY LASRY
Power
LP/Sonimage SI 829　'82年

ＲＣＡレーベルからの２枚の公式レコード以外にも放送局用等、数多くの特殊レコードを作成しているテディ・ラスリー。しかし、それらの大部分は、その性格上、我々の興味を引くサウンドを有しているとは言い難い。こうした中で、本アルバム（ソニマージュ・レーベルには本作以外にも、「Action Printing 〈Sonimage SI820〉'75」「La Femme Qui Vanait D'Ailleurs〈同SI823〉'77」「Interpol〈同SI825〉'79」の３枚のアルバムがある）はそうした本来の目的を離れて、一枚のアルバムとして充実した作品と言える。各種キーボードとパーカッションを用いて１人で作り上げた12曲の中にはポップな作品もあるが、「$e=mc^2$」を思わすドラマチックな曲、多重録音を効果的に利用したメロディアスな曲等は印象的である。　（賀川）



TOTAL ISSUE
Total Issue
LP/United Artists UAS　29174　'71年

アンリ・テキシェ、アルド・ロマノ、ジョルジュ・ロカテリ等が結成したポップ・ロック・ユニット、トータル・イシューの唯一のアルバム。いわゆるフォーク・ロックに無理矢理突っ込んだジャズ風味が、何とも言えず楽しい。ロカテリはすでに安定したプレイを聞かせる。クリス・ヘイワードのギターが美しい。もう一人のギター、ミシュ・リブルティは、ロカテリに比べてよりロック的だが、今一歩である。このユニットがどういう経過をもって結成され、また解散していったのかは定かでないが、有数のジャズ・ミュージシャンが極度にポップなサウンドを展開した事にキ裂の原因があったのだろう。文頭にあげた３人は、今でも第一線の現役ジャズ・マンとして活躍している。　（中藤）



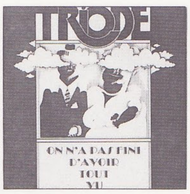
TRAVELLING
Voici La Nuit Tombée
LP/Futura RED 06　'73年

Yves Hasselmann(p, org, vo)、Jacques Goure(b)、Roger Gremillot(ds)から成る伝説のトリオ、トラヴェリング。彼らの唯一の作品である本アルバムは本作発表後活動を停止したフトゥーラ・レーベルの最後を飾るに相応しいジャズ・ロックの名作である。ソフト・マシーン、ナイスの影響を感じさせる彼らのサウンドはジャズ的要素を内包しているが、本質的にはロック的手法に基づくものである。アッセルマンのマイク・ラトリッジを彷彿させるオルガン、キース・エマーソンにも通じる力強くテクニカルなピアノが最大の聴き所となっている。本作発表後グループは解散、アッセルマンはクリプト・レーベル等から４枚のＬＰをリリースし、更にカセットによる作品を発表して、現在も活動を続けている。　（賀川）



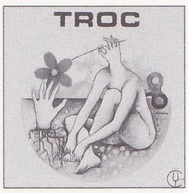
TRIANGLE
Triangle
LP/Pathé Marconi 2C 062 11147 '70年

トリアングルのファースト・アルバム。メンバーの正式なクレジットはないが、ジャン＝ピエール・プレヴォタ、パピロン、フランソワ・ジャノー、マリウス・ロランツィーニの４人が参加しているものと思われる。当時、既に一部ではかなり有名なジャズ・ミュージシャンだったジャノーの影響もあって、そのサウンドはジャズ的要素を取入れたポップなロックとなっている。以後、よりポップな「Viens Avec Nous(Pathé 2C06411)」、ステファン・グラッペリ(vln)をゲストに迎えた「Homonymie (Pathé2C06210873)」を発表してグループは解散する。後にロランツィーニはエディシオン・スペシアルを結成、パピロンもソロ・アルバムを発表する。またジャノーは現在もジャズ界の第一線で活躍している。　（賀川）



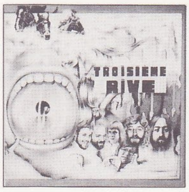
TRIODE
On N'a Pas Fini D'avoir Tout Vu
LP/Futura RED 03　'71年

フトゥーラといえば、フランス・ジャズ界では老舗といったようなレーベルだが、残念ながら既に無い。しかも意欲的に再発を行っていたムジカも倒産した。そのフトゥーラの中でも、ＲＥＤのシリーズは、レッド・ノイズ（01）、マホガニー・プレイン（02）等のロック色の強い作品を発表していたが、本作は、その系列中、最高の内容を誇っている。ドラマチックな構成、リリカルなフルート、ブルースを基本にしたジャズ・ロック・ギター。71年当時、これだけ本格的なバンドがフランスに存在していた、というのは驚き以外の何物でもない。加えて、日本では、マルタン・サーカスやズーぐらいしか紹介されていなかった頃、すでに彼等のような無名ではあるが実力ある人達が活動していたのである。　（中藤）



TROC
Troc
LP/CY 3002 U　'73年

Ｊ・トップがマグマ参加直前にＡ・セカレッリ等と組んでいたバンド唯一の作品。ソウルフルなヴォーカルと小刻みなリフ、更にはエレピの音等、'70年代初頭の英米のバンドの影響下にあるもので、二期Ｊ・ベック・グループを思わせる部分から、よりテクニカルなジャズ・ロック的な物まで多岐に渡る。フランスらしさは無いものの水準自体は仲々高く楽しめはする。トップのプレイ自体も早いテンポのジャズ的な刻み等珍しくオーソドックスなテクニシャン振りを見せたりする他、既に背後で重く響かせる独特の音色も見せている所も興味深い。　（中西）



TROISIÈME RÊVE
Banlieues
L P/Iris TR 1010　'78年

トロワジエム・レーヴの唯一の作品。ブザンソンを首都としたかつてのフランシュ・コンチ県出身の6人のミュージシャンと1人の詩人によって作られたものである。シャンソン、フォーク、シンフォニック・ロックの要素を巧みに融合し、斬新でメロディアスな音作りがされている。Alex Abouladzeの詩を切々と歌い込むヴォーカル、叙情的プレイを展開するエレクトリック・ギター、フォーク色の強いアコースティック・ギター、的を射たバッキングを端正に勤めるピアノ、きらめくような音色のシンセサイザー、シャンソンの香り漂うアコーディオン等による演奏は決して派手ではないが、非常に安定しており、聴き込むほどに味が出てくるものと言える。彼ら独自のサウンドを作り出すことに成功した名作である。　(賀川)



MAURICE BOGUET
Ballades Pour Vous…
L P/M.A.O 1011　'82年

トロワジエム・レーヴのヴォーカリスト&ギターリストのモーリス・ボゲのソロ・アルバム。彼をサポートしている9人のメンバーのうち、過半数がトロワジエム・レーヴのアルバムにも参加しており、実質的には、グループのセカンド・アルバムと言える。事実、サウンドもトラワジエム・レーヴの延長線上にあり、ボゲの表現力豊かなヴォーカルとメロディアスでタイトな演奏が見事に融合している。曲の展開、演奏ともに非常にスムーズなため、ちょっと聴きにはあっさりした印象を与えるが、よく聴くと凝った作りであることが分かる。フランスの地方の人々の人間性が反映されたかのような、派手さこそないが、力強く、ミュージシャンとしての自信を感じさせる作品である。　(賀川)



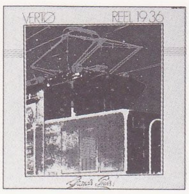
UPPSALA
Uppsala
L P/UPPS　1114　'84年

ジャズ・ロックという言葉はこのバンドの独特な雰囲気を伝えたいと思うときやや不適格だ。ギタリストでありヴォーカリストであるPhillipe Cauvinの持つ個性は色濃くこのグループを支配している。'84年に発表されたソロアルバム「Memento」を聴くとギターとヴォーカルを中心にすえた構成で、メロディアスで複雑な曲はセンシティヴなギター、そしてハイトーンのまるでギターの弦のつまびき、あるいは揺らぎのような繊細なヴォーカルによって成り立っている。これがグループへと還元されるとよりダイナミックかつ構築的なサウンドへと進化する。曲によってはマグマを連想させるが、彼らはそう言われることは好まないようだ。MAGMAの本質がプリミティブであるとすればUPPSALAはモダニスティックな知性、狂気を備えたバンドだと言えようか。　(松本修一)



VENT D'EST
Vent D'est
L P/Omega 67017　'80年

プログレ系のアルバムを多数リリースしているOmega studio(元々はジャズの練習スタジオで、レコード会社ではない。)よりリリースされたVENT D'EST唯一のアルバム。オープニングの軽快なナンバーを聴くと、思わずASIA MINORを連想してしまうが、聴き込むにつれて彼らの本質が、もっと女性的で愛くるしいものであることに気付くであろう。曲調はややポップであり、英語で歌われている曲もあったりするが、PENTACLEを思わせるナイーヴな感性は十分に魅力的である。本作一枚のみでグループは解散、キーボーダーのPatrice Wittはソロ活動に移り、アルバム「For DJs And Long High Ways」を発表。ポップな好アルバムがあるが、プログレ色は大幅に後退してしまっている。　(中島洋一)



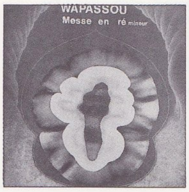
VERTO
Reel 1936
L P/Fleau 7004　'78年

「Krigl Volubilis」(Pôle 0009)に続くヴェルトのセカンド・アルバム。前作同様、ギターリストのJean-Pierre Grassetが、曲ごとにBenoît Widemann(key)ら多くのミュージシャンと共演し、7曲を演奏している。サウンドの方も無駄な部分が削られ、より聴き易くなっているが、基本的には前作の延長線上にあり、エルドン、リシャール・ピナスの影響が感じられる。実際、ピナスとFrançois Augerが演奏しているのではないかと思ってしまう部分もある。しかし、それだけに留まらず、自らのスタイルを保ちながら、よりポップな領域やより実験的な領域にも挑戦している。聴き応えのある意欲的な作品であり、次作への期待も高まったが、残念なことにラスト・アルバムとなってしまった。　(賀川)



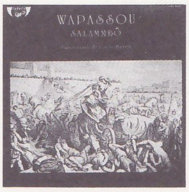
WAPASSOU
Wapassou
L P/Prodisc PS 37342　'74年

ワパスーといえばクリプト・レーベル以後の5枚のアルバムが広く知られるところだが、彼等はそれ以前にも1stシングル「Femmes Fleurs b/w Borgia」(Apgf AS 001) そして自主レーベルPRODISCより本アルバムを発表している。作詩・作曲、全てのキーボードを操るフレディ・ブルアを中心とする4人のレギュラー・メンバーの他に多彩なゲストを含んで製作されたものである。クリプトでの1stアルバムの原曲とでもいうべきA③を始め、未だ完成度は発展途上でありながら、彼等の独自なスタイルによる夢幻的なサウンドはすでに確立されている。クリスタルのような響きの「美」を創り出すワパスー。フランスの黎明に埋もれた貴重な一枚である。　(山崎)



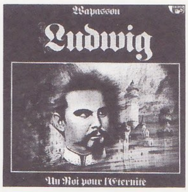
WAPASSOU
Messe En Ré Mineur
LP/Crypto 2AC 6401 '76年
CD/Musea FGBG 4111

クリプトへ移籍しての2nd。自主製作盤だった1stに目を付けた同レーベルのオーナーが援助した形で製作された。クリプト・レーベルは現在でこそ消滅してしまったが、アンジュのマネージメント会社の系列だったこともあり当時はそれなりに安定した活動を行っていた。「ミサ・二短調」というタイトル通り宗教曲を正面から扱ったものだが、イーラ・クレイグの3rd（本当は4th!）と共に現代版ロック宗教曲の2大傑作と呼ぶに相応しい内容となっている。フレディ・プリュアのオルガンとシンセに導かれ、独特の浮遊感溢れるヴァイオリンと女性ヴォーカル、ギターが織り成す聖なる響き。その響きは遥かなる天界からの啓示となって、我々を魂の煉獄から救い出す一つの光明であるかのようだ。 (東野明広)



WAPASSOU
Salammbô
LP/Crypto ZAL 6437 '77年
CD/Musea FGBG 4112

計6枚のアルバムを発表しているワパスーの3rdアルバム。ギュスターヴ・フロベールの文芸作を基に創られたトータル・アルバムである。編成はkey. violin.そしてg. & b..担当の女性の計3人で、さらにゲストの女性ヴォーカリストが参加している。この作品とその前後における彼らのサウンドの特徴は、いわゆるリズム・セクションが存在しない事と、各楽器に極度のエコー処理を施している点にある。こうして生み出された彼らの音楽は独特の浮遊感に満ち、また優美さと厳格さが混在しており、真にオリジナルな存在となり得ている。演奏技術が未熟な為、他のバンドでは到底プレイできまいと思われる女性ギタリストも、このワパスーにあっては重要な個性となっている事が、彼らの独自性を証明している。 (城元)



WAPASSOU
Ludwig
LP/Crypto ZAL 6477 '78年
CD/Musea FGBG 4113

ルートヴィヒII世ー1845年、映画『去年マリエンバードで』のロケ地として知られるニュンフェンブルグの城で生まれたこのバヴァリアの狂王に魅かれた芸術家は数知れない。ヴェルレーヌ、アポリネール、ダヌンツィオ、森鷗外。ワグナーのパトロンであり、生涯童貞であったと言われる時代錯誤王。ワパスーのクリプトにおける3部作の総決算でもある本作は、まさにこの人物の狂気の再現に向けられた凄まじい洗練度と緊張感の漂う傑作である。F・プリュアのシンセ、K・ニッケル（女性！）のギター、J・リクティのヴァイオリンの綴れ織りもここに極まれり。本作において、彼等はグループ名である北アフリカ辺境にあると言われる伝説の地、永遠の愛と平和の谷〝ワパスー〟に正に到達したのである。 (東野明広)



WAPASSOU
Génuine
LP/Sterne STE 26512 '81年

プログレッシヴ・ロック・シーンが壊滅状態にあった'81年、突然ワパスーの新作が現れた。最初は別のバンドかとも思ったが、クレジットを見るとF・プリュア、K・ニッケル、J・リクティの名が。しかもドラマーと専任の女性シンガーまでいる。愕然としてしまった。ここで聴かれるのは、クリプト時代とは全く趣きを異にした通常のポピュラー・ソング全7曲である。とは言ってもプリュアのキーボード群は往年の輝きを感じさせるし、リクティのヴァイオリンも健在である（ニッケル女史は殆どベースに専念している）。女性シンガーがママ・ベア・テキエルスキーを押し潰したような声質なので、この辺がプログレ・ファンには引っ掛からない要因だろうか。B③のインスト・ナンバーは良い。 (東野明広)



WAPSSOU
Orchestra 2001
LP/Omega 67060 '86年

5thアルバム「Genuine」を製作・発表して以来6年、ワパスーが復活しリリースした作品。全盛期（クリプト・レーベル時代）のメンバーに新たにドラマー（ドミニク・メッツ）が加わり、2人のヴォーカリストとギターリストがゲスト参加している。プリュアのシンセサイザーを中心にした限り無く甘美でメロディアスなサウンドは従来の延長線上にあるが、定型リズムのドラムと女性ヴォーカリストとスキャット（一部のみ）の相乗作用の所為か、多少なりともムード音楽を連想させる部分もある。「Salammbo」「Ludwig」といったかつてのトータル作品と比較してポップな感は否めないが、ワパスーのファンにとって興味深い作品であることも事実である。 (賀川)



WURTEMBERG
Rock Fantasia Opus 7
LP/Sterne STE 26511 '80年

元IRISのキーボーダーAlain Carbonareが、Alain Markusfeldとの活動、MACHIN（マシャン。プログレッシヴなトラッドグループ）を経て発表したのが本アルバムである。MACHIN時代から用いていたプサルテリオン（中世の弦楽器）に自らの手で改良を加え（彼は楽器製作者としても著名である。）この四重奏を全面的にフィーチャーして、透明で繊細かつ中世的気品漂う名作を創り上げた。ここではロック、ジャズ、トラッド、中世音楽が一体となって昇華され、至上の美となって結実しているのである。残念ながらフランスでの知名度は今一つの様だが、スイス、カナダでの評価は高く、本アルバムは、モントルーレコード大賞を受賞している。 (中島洋一)



YVES HASSELMANN
Mécanique Mentale
LP/Crypto ZAL 6497　'80年

トラヴェリングのメンバーとしてFuturaレーベルから「Voici La Nuit Tombee」を発表、その後、約5年間沈黙し、突如、元アンジュのベーシスト、ダニエル・アースとのデュオ・アルバムをリリースしたイヴ・アッセルマン。本作はソロ第一弾で、完全なピアノ・ソロ集である。トラヴェリング時代の演奏は、マイク・ラトリッジやキース・エマーソンに通じる雰囲気もあったが、本アルバムでのプレイは完全にジャズの手法にもとづいている。'70年代、ジャズ・シーンにおいて、ピアノ・ソロ・ブームが起こり、優れた作品が数多く生まれたが、ある意味では本作もその流れを組むものと言える。一部フリー・フォームな部分もあり、ダイナミックに展開する演奏はアッセルマンの並々ならぬ力量を示している。　　（賀川）



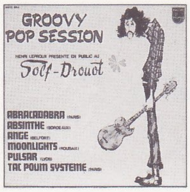
ZÖN ORCHESTRA UNLIMITED (Z.O.U)
Zön Orchestra Unlimited (z.o.u)
LP/Polydor 2393 103　'75年

4人いるHervé姓のメンバーを中心にしたZ.O.UはHervé兄弟がかって在籍したZOOの再編をもくろんだバンドです。先の4人に、女性VOを加えた5人組で、曲調は基本的にはポップスで、シールズ＆クロフツ(米メロウ・フォーク・デュオ)のカヴァーまでやっているのですが、まずソリーナ、そしてB面の組曲にはオルガンが結構入っているし、マリア・ポプキエヴィッツの歌声も、繊細とは言えませんがキレイですし、充分、平均以上の出来だと思います。歌詞は、ごく一部分のみフランス語で、大部分は英語です。　　（斎藤）



ZOO
I Shall Be Free
LP/Riviera 521 147　'70年

TRIANGLE, MARTIN CIRCUS, MAGMA, CATHERINE RIBEIRO＋ALPESなんかと並んでフレンチ・ロック初期のバンドの一つ。アルバムは3枚出た。これは2枚目に当るもので1枚目が「Zoo」(Barclay 521,118,'69年)、3枚目が「Hard Times, Good Times」(同521,200,'72年)となる。英米ロックに準ずるサウンドでシングル曲指向。バンドはソウルフルなヴォーカリストを中心にヴァイオリン奏者二人を含む7人編成でこのアルバムを録音している。一方のヴァイオリニストは、Michel Ripoche。ヴォーカル・ナンバーをヴァイオリンやトロンボーンがサポートしながらオーソドックスなロック・スタイルで聴かせる。　　（松本）



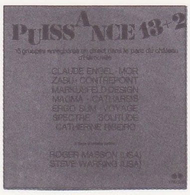
V.A.
Groovy Pop Session
LP/Philips 6332044　'72年

'72年にフランスのライヴ・ハウスの老舗「ゴルフ・ドルオー」に各地から新人バンドを集めて行われたコンサートのライヴ・アルバムである。B面に収められた3バンドはいずれもオリジナリティに欠けるありきたりのハード・ロック・グループであるが、特筆すべきはA面。シングルを2枚発表した後の、そしてデビュー作「Caricatures」('72年)発表当時のアンジュや結成2年後、アルバム・デビュー以前のピュルサーのライヴを聴くことができる。その演奏は素晴らしい出来となっている。更に、アブラカタブラの〝タイガー〟、これが名曲である。このグループにオルガニストとして参加しているフランシス・ロックウッドのプレイも興味深い。　　（山田　悟）



V.A.
Music Is My Honey
LP/Thélème 6 332 752　'73年

マグマを'70年8月末に脱退後、ローラン・ティボーはThelemeを起こす。このLPは同レーベルの紹介を兼ねたコンピレーション第2集に当たる。なんと言ってもマグマのシングル曲〝Mekanik Kommando〟の別テイク収録が大きいが、他にもZABU、U・ZEKT、ERGO SUM、C・RIBEIRO＋ALPESらを収録していて興味深い。こうして当時のロック・サウンドの中に〝Mekanik～〟を聴いてみると意外と異和感がない。それにはシングル用の演奏スタイルということも手伝っているが、ジャズやロックが混然とした当時の状況に負う部分もあるだろう。　　（松本）



V.A.
Puissance 13＋2
LP/Thélème 6641 037
CD/Musea FGBG 4087

こちらがThelemeの第1集。2枚組に15アーティストが収録され、内ジャケットにはそのメンバー達が一堂に写っている。マグマは「Music Is My Honey」と同テイクで、このテイクはこれら2種類のコンピレーションでしか聴けない。ZABU、ERGO SUMなどのほか収録されたSOLITUDEというバンドにはティボー自身も在籍していた。Thelemeは2年で潰れたが、マグマ関連では特にUNIWERIA ZEKTの録音を残した事が大きい。UNIWERIA ZEKTはブラスキス、モーズ、セファーをヴァンデールが、ザブ、アンジェルをティボーが各々別々に人選したユニットだった。　　（松本）

ANGE

□賀川雅彦

ロック・テアトルの祖　アンジュの歴史

我国のユーロ・ロック・ファンにフレンチ・プログレッシヴ・ロックを代表するグループを一つ挙げてほしいと尋ねたらどんな名前が出てくるであろうか。恐らく、マグマあるいはアトールという答が圧倒的なのではないだろうか。フレンチ・ジャズ・ロック系のグループの頂点に立ち、ジャズからポップスまで、フランスのポピュラー・ミュージック・シーンの至る所にその人脈を見ることが出来るマグマ、そして、「夢魔」というフレンチ・シンフォニック・ロックを代表する名作を発表し、その国内盤がユーロ・ロックとしては最大のベスト・セラーとなったアトール、非常に的を射た答である。しかし、25年に渡るフレンチ・プログレッシヴ・ロックを大局的に見て答えた場合は多少違ったものになる可能性が高い。その場合にマグマとともに名前が挙ってくるのはやはりアンジュではないだろうか。



仏「ロック＆フォーク」誌によると、アンジュはスイスのバーセルに近い、フランス東部の年ベルフォールで'69年9月に結成されたらしい。フランス最初の本格的シンフォニック・ロック・グループと言われるマルタン・サーカスの結成が'69年の初めであるから、時期的にはほとんど変わらない。ただ、マルタン・サーカスは同年7月にヴォーグ・レーベルからレコード・デビュウ、11月にはパリのオンピア劇場でライヴを行なっており、ややアンジュに先行していた。'70年にはマルタン・サーカスの方が人気があり、遥かに有名であったが、その後、徐々に立場は逆転していった。'71年にセカンド・アルバムを発表した後、マルタン・サーカスはよりポップな音楽を目指すようになった。こうしたことからも分かるように、フランス語のヴォーカルとドラマチックな曲展開を特徴とするフランスならではのシンフォニック・ロック＝ロック・テアトルの祖としてアンジュを捉えることに異論はないだろう。アンジュのオリジナル・メンバーはChristian Decanmps (org, vo)、Francis Decamps (org, tp, vo)、Jean-Claude Rio (g, vln, vo)、Gerard Jelsch (ds)、Jean-Michel Brezozar (g)、P. Kachanian (b, fl)の6人であった。'70年1月、彼らはクリスチャン・デカンがWHOの「Tommy」に刺激されて製作したロック・オペラ「La Fantastique Epopee Du Général Machin」を地元ベルフォールで上演した。'78年にRCAからリリースされた（後年CDにもなったが、何故かすぐに廃盤になってしまった）「Ange En Concert 1970/1971」でこの時の貴重な演奏を聴くことが出来る。正規盤としてはやや録音が悪く、演奏も多少粗削りではあるが、伸び盛りのミュージシャンならではの熱いものときらめきが到る所に感じられる。このアルバムの内ジャケットにはBest、Pop Music、Est Republicain、Extraの各誌に'70年から'71年に掲載されたアンジュ関係の記事がスクラップのように載っており、当時の状況を知るという意味でも興味深い。その頃、彼らがフレンチ・ロック・シーンのトップ・スターになっていく過程でマネージャーとして非常に重要な役割を果たしたジャン・クロード・ボニャンと知り合い、彼の超マイナー・レーベルCaepe Disques（アンジュのシングルと後にアンジュのメンバーとなるClaude DemetのグループINTRO-VERSIONのシングルを各1枚ずつ出して活動を停止した）からファースト・シングル「Israél/Cauchemar」を発表した。その内容は後の彼らのサウンドとは異なり、当時のブリティッシュ・ロックの影響下にあるややブルーズィな演奏やキース・エマーソン（ナイス）風のプレイが展開されている。ボニャンを正式のマネージャーとしたアンジュは、'70年3月、上京し、フランス各地から新人バンドを集めて行なわれたGolf Drouotのコンテストに参加、ピュルサーらとともに入賞し（当日の演奏の一部が「Groovy Pop Session」に収録されている）、成功への切っ掛けを掴んだ。この時、既にオリジナル・メンバーのRio、Kachanianは脱退しており、替ってDaniel Haas (b)が参加、グループは5人編成になっていた。その後、3月28日に開かれたFestival de Bourgeを皮切りに、4月から7月にかけてBesanson、Ferrand、Clermont等、フランス各地でライヴを行ない喝采を浴びた。

そして、'71年1月、彼らにとって記念すべき時がやって来た。フィリップス・レーベルと契約し、プロとして正式に活動することが決定したのである。その頃の意欲に満ちたライヴも「Ange En Concert 1970/1971」に収められている。同年7月、セカンド・シングル「Tout Feu、Tout Flamme/Dr. Mann」でメジャー・デビュウ、サード・シングル「Le Soleil Est Trop Vert

/Le Vieux De La Montagne」もリリースされた。その後、ファースト・アルバムのレコーディングに取り掛り、'72年の春には作品が完成した。当時、フィリップスは彼らの売り出しに非常に力を入れており、LPリリースに先立って、その内容は同じながらも、ジャケット及びレコード番号違い〈Philips 6830 099〉、ポスター付きのプロモーション盤を作っている。また、宣伝用にLPサイズの布のバッグなども作ったようである。6月5日、ファースト・アルバム「Cariatures」リリース、同月17日から、ジョニー・アリディ・サーカスと、全仏約50都市をまわるツアーを開始した。これはかなりハードなツアーであったが、彼らの努力及びフィリップスのバック・アップにより、アンジュの名前はフランス中に轟いた。

翌'73年から約5年間は正に彼らの黄金時代である。セカンド・アルバム「Le Cimetiére Des Arlequins」('73年)、サード・アルバム「Au-Delá Du Délire」('74年)は彼らの代表作と呼ぶに相応しい内容を有している。フランス語独特の発音とイントネーションを活かしたシアトリカル





なヴォーカルとこれまたフランス独特のきらびやかな音色のオルガンを中心としたメロディアスな演奏が見事に一体化してオリジナリティ溢れるサウンドを作り出している。それはアトール、モナ・リザ他、数多くの後進達に大きな影響を与え、今なお多くのファンにフレンチ・シンフォニック・ロックの一つの典型として認識されている。フォース・アルバム「Emile Jacotey」('75年)ではドラマーがGuénolé Bigerに、フィフス・アルバム「Par Les Fils De Mandrin」('76年)では同じくドラマーがJean Pierre Guichardに変わっているが、内容的には前2作と同傾向の好作品である。フィフス・アルバムにはヴォーカルを英語に差し替えたインターナショナル・ヴァージョン「By The Sons Of Mandrin」もあり、当時、彼らがより広い市場を意識していたことが分かる。その頃、彼らはフランス内外で数多くのコンサートを行なっており、その充実した演奏が2枚組のライヴ・アルバム(CDは2in1)「Tome VI」に収められている。



フィフス・アルバム発表後、グループにメンバー・チェンジがあり、ブルゾヴァール、アースが抜け、オリジナル・メンバーはデカン兄弟のみになってしまった。こうした状況下で製作された「Guet-Apens」('78年)は、メンバーこそ異なるものの今まで通りの方法論で作られており、従来の作品と同系統のサウンドが楽しめる。しかし、次作「Vu D'un Chien」('80年)にはメンバー・チェンジによる音の変化が顕われた。彼らはシンフォニック・ロックという枠を越え、よりポップな音楽を目指したのである。勿論、一般のロック・グループとは一味違う、アンジュならではのストーリー性を持った作品ではあるが、かつての作品に見られた叙情性とドラマチックな雰囲気は後退している。この作品を契機に彼らの試行錯誤が始まった。'82年にはジャック・ブレル、ジョルジュ・ブラッサンス、シャルル・アズナブールらシャンソン界の大御所の曲のみを収めたアルバム「A Propos De」を発表し、'85年には10年以上に渡って在籍したフィリップスを離れ、Tremaから新作「Fou」をリリースするなど、彼らは意欲的に活動した。しかし、そうした努力にもかかわらず、新たな分野で成功することは出来なかった。

マイナーな存在となった彼らの一つの転機になったのが、'87年、アルバム「Tout Feu Tout Flamme」の為にデカン兄弟、ブレゾヴァール、アース＋ドラマーで、1曲のみではあるが、アルバム・タイトルとなったかつての作品(フィリップスからのデビュウ・シングルとなった記念すべき曲)を録音したことである。2年後の'89年にはその4人とかつてのメンバー、ギシャールが中心になって「Seve Qui Peut」を製作、ややスケールは小さいが初期の作品に通じる音作りをしている。そして、アンジュは復活した。アルバム「Les Larmes Du Dalaï Lama」は彼らならではのトータル作品であり、そこでは初期の作品を思わすドラマチックかつファンタジックなサウンドを聴くことが出来る。

現在のアンジュは、かつてのように、シーンをリードしていく存在ではない。しかし、彼らは、今なお、フレンチ・シンフォニック・ロック・ファンを魅了するに十分な作品を作れるだけの力量を持った貴重なグループなのである。



ANGE
Caricatures
LP/Philips 6332 066 '72年
CD/Marianne 81703-2

どことなく不気味な音で幕を開ける、アンジュの記念すべきファースト・アルバム。ファースト・シングルやデビュウ前のライヴに比べると演奏がかなりこなれたものになっており、彼らの進歩が窺える。しかし、次作以降の作品に見られる彼ら独自のスタイルはまだ確立されておらず、ヴォーカルやオルガンのプレイの一部にその前兆が感じられる。クリスチャン・デカンのハモンドは多少なりともキース・エマーソンに通じる部分がある、ナイス風の展開を見せる曲もある。また、フルート、ピアノ、ギター、オルガン等のソロが次々に登場する、ややシンプルではあるがリリカルでメロディアスな演奏も聴ける。彼らの本領はやはり後者であろう。（賀川）



ANGE
Le Cimietière Des Arlequins
LP/Philips 6325 037 '73年
CD/Philips 842 238-2

僕が初めて聴いたアンジュのアルバムがこれだ。オルガンを主体とした曲の上にヴォーカルが乗るサウンドで、アンジュとしては未だ発展途中にある。しかし、英国のグループには聴くことができない独特なトーンのオルガン、ヴォーカルが演奏の中に埋没しているような変なミキシング、見たこともないような、セルロイドで固められたような世界を描くジャケット・ワーク。その底知れぬ、未知の世界の感触に溺れる幸福に浸った当時をなつかしく想い出す。渋いが味のある好アルバムだ。このとりとめのない浮遊感のあるサウンドは、今、聴いても新鮮で、彼等の創り出す形而上的な空間にトリップできることと思う。（山崎）



ANGE
Au-Delà Du Délire
LP/Philips 9101 004　'74年
CD/Philips 842 239-2
　日本フォノグラム PPD 3096

アンジュは、クリスチャンとフランシスの、デカン兄弟を中心にしたグループである。メンバーのソロもあわせると20枚にもおよぶレコードを発表している。フレンチ・ロック史上のビック・グループである。音の作り方は、ジェネシスやキング・クリムゾンに似ていて、重厚なキーボード・プレイ、叙情的なギター、哀愁をおびたヴォーカルが前面に押し出されている。このアルバムは日本でも発売された、彼らのサード・アルバムである。中世とも未来ともつかぬ世界に暮らす農夫ゴドヴァンが救済をもとめて、遍歴するというストーリーは、非常にドラマチックである。メロトロンが非常に効果的に使用されていて、暗黒の世界に救済の光が射し込むような情景を思いおこさせる。（宇田川）



ANGE
Émile Jacotey
LP/Philips 9101 012　'75年
CD/Philips 842 240-2

前作の充実振りを受け継ぐ代表作の一つ。旧A面を小曲がつなぎ、B面は大曲を中心に組まれ、その点でも楽しめる1枚だ。エミール・ジャコテーが話を聞かせる設定で曲は進み、アンジュの様々なスタイルを曲にあてはめるかのようにバラエティに富む。ハード・タッチな一曲目に始まり、遠く波打つようなキーボード・オーケストレーションが響く中、アコースティック・ギターが弾かれ始めて2曲目へと、アンジュの真骨頂が見え始める。様々な表現を見せるC.デカンのヴォーカルは、ジェネシス時代のP.ゲイブリエルを想わせる。曲に物哀しいような趣きがあり、夢想感が漂い、大きな渦がゆっくりと包み込むように、まさに彼等の語り口で音が紡がれる。（松本）



ANGE
Per Les Fils De Mandrin
LP/Philips 9101 090　'76年
CD/Philips 840 241-2

物語性を持つアンジュ特有のシアトリカルなサウンド・スタイルは本アルバムでも十二分に聴くことができる。「新ノア記」と較べると叙情的なメロデイー・ラインが少ない為か、ややロック的なリズムが強調されて聴こえるが、内容自体はやはり全盛期の作品だとうなずけるものだ。同傾向のスタイルを持つジェネシスあたりと較べても、全く違うサウンドで聴かせるあたりは、大物の風格であり、有無をいわせぬ説得力を持っている。我々にとって残念なことは、このグループの場合、歌詞の重要性が大きいことだ。この壁をクリアーできたなら、さらに楽しめるだろうに。このアルバムの場合、英語ヴァージョンもリリースされているので、好きな方は捜して下さい。（山崎）



ANGE
Tome Ⅵ^e
LP/Philips 6641 715　'77年
CD/Marianne CD 917

'70年代アンジュの集大成と言って余りあるライヴ・アルバム。LPでは2枚組だった。長短の代表曲がずらりと並らび、ジャケットに映し出されたステージ風景の数々も、イメージをかき立ててくれる。C・デカンのヴォーカルは、時に歌から語りになる程、力が入っており、物語仕立ての曲調を崩れるまでに増幅する箇所も多々ある。とても誇張が激しい。アンジュの持つ〝物語性〟を最大限に引き出すことにかけては、スタジオ録音をしのぐことを実証したとも言えるかもしれない。少なくともバンドの充実期を示すとは言えるだろう。各国で'77年頃に物語性を強調するバンドが、その第2ピーク期を示すライヴ・アルバムを出したこととも一致している。（松本）



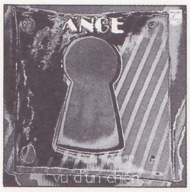
ANGE
Guet-Apens
LP/Philips 9101 184　'74年
CD/Marianne CD 976

'70年代最後のアルバムという以上に、それまでのアンジュの作風を受け継いだ最後のアルバム。「Tome Ⅵ^e」を挟んで2年振りの新作になったこのアルバムは、ドラマ性に富む曲想と演奏力がバランスを保った内容となった。ライヴ・アルバムは応々にしてバンドの転機になりがちだが、そのとおり総決算ともいえる「Tome Ⅵ^e」の後、本作を置いて次作「Vu D'un Chien」では傾向が変化した。このアルバムはそのなだらかな移行期に相当しながら、従来の特徴をいかんなく発揮できた秀作だと思う。フランシス・デカンのキーボードは、相変わらず曲に深味や陰影をもたらし、一曲の中に様々な表情を見せるアンジュ・サウンドは健在である。（松本）



ANGE
En Concert 1970/1971
LP/RCA　PL　37153　'78年('70、'71年録音)
CD/Spalax Music 14858

'70年1月のライヴと'71年3月のライヴを収めたLP2枚組(CDは2 in 1)。前者はクリスチャン・デカン作の伝説のロック・オペラ「La Fantastique Épopée Du Général Machin」の貴重なライヴ。六人のオリジナル・メンバーによる演奏である。'60年代のブリティッシュ・ロックの影響下にあるサウンドであるが、オルガンやフルートのプレイには工夫の後が見られる。その熱気は若いグループならではのもの。全体の印象はハードである。一方、後者はフィリップスからデビュウする直前のもので、メンバーもファースト・アルバムと同じである。音がシェイプ・アップされ、より凝ったものになっており、やる気に満ちた演奏が展開されている。（賀川）



ANGE
Vu D'Un Chien
LP/Philips 6313 023　'80年
CD/Baillemont CD 977

「犬から見ると」と題された1980年の作品。傑作である。前作より見られ始めたハード・ロック的色合いが前面に出て、かつての叙情的な側面は後退している。しかしながらANGEの持ち味である鋭い風刺とシアトリカルな幻想性は健在で、ハードな音作りと相まってドラマチックな新境地を開拓している。Christian Décamps自身も「Au-Delã DuDélire」「Egna」と共に自らの作品の中で最も気に入っていると語っており、出来ればこの路線であと1～2枚作品を製作して欲しかったと私などは思ってしまう。BelfortのCYBRIDE(FLVMよりLP 1枚をリリースしている)より新加入のRobert Deferのギターが仲々の健闘を見せており、音だけを取ればこの時期ギタリストの個性がバンドの方向性を左右していた様にも思う。　(中島洋一)



ANGE
Moteur !
LP/Philips 6313156　'81年
CD/Baillemont Productions CD 978

ロンドン録音。映画をコンセプトにしたアルバムで、リズム・セクションを核にした強力な演奏といつも通りのクリスチャン・デカンの歌はなかなかのものであり、個人的には発表当時に何十回と愛聴した。しかし、クリスチャンは本作のプロデュースに不満を持っていて、「曲は良いが精神がない」と語っている。確かに、傑作だった前作「Vu D'un Chien（犬から見ると）」には及ばないが、プログレ色の薄さをもって断罪するようなアルバムではなく、安易な商業的妥協に流れているわけでもないことは彼らの名誉のために言っておかなければならない。特に良いのは冒頭の〝インディアンさん、残念だね〞とジョン・レノンに捧げられた〝サーガ〞の2曲、そして5曲目の〝俺の映画にさわるな〞あたりか。　(松元)



ANGE
A Propos De...
LP/Philips 6313404　'82年
CD/Baillemont Productions CD 979

前作での失敗で苦しい時期を迎えたアンジュの次なるアルバムは、フランスの大物歌手のシャンソンのカヴァー集であった。巨匠の有名曲に挑むという火中の栗拾いは、原曲と比較されることが避けられない損な試みである。現にこのアルバムは成功を収められなかったが、アンジュの音楽的ルーツの重要な一面、つまりシャンソンの精神性がよく反映されたアルバムであることを忘れてはいけない。約11分のミッシェル・ポルナレフの〝ラース家の舞踏会〞が本作最大の宝であるが、その他の曲では、セカンド・アルバム「道化役者たちの墓場」の冒頭で〝あの人たち〞をカバーして長く歌い継いできたほどデビュー当時から強い影響を受けているジャック・ブレルの酔いどれブルース、〝A Jeun（素面）〞が聴かせる。　(松元)



ANGE
La Gare De Troyes
LP/Philips 812139-1　'83年
CD/Baillemont Productions CD 980

しばらく続いた苦しい時期の脱し始めに発表された久々のコンセプト・アルバム。アルバム・タイトルの「トロワの駅」は、アンジュの出身地ベルフォールからパリに列車で行く途中にある町「トロワ」の駅と古代ギリシャの「トロイ戦争」をかけたものだし、歌詞のそこここにクリスチャン・デカンお得意の言葉遊びが散りばめられていたり、1968年の5月革命のようなフランスのトピックが引用されたりと、アンジュの本領が戻った逞しい作品だ。音楽的には、前半のリズムのシンプルさがポップ化との誤解を生みやすいが、走る列車を舞台にした歌詞の内容からして必然である。後半はプログレ・バラード風の美しい曲調。最後の曲〝青一色！〞には、「私を愛する者はついてくるがよい」という一節がある。　(松元)



ANGE
Fou !
LP/Tréma 310182　'85年
CD/Tréma 710182

フィリップスからトレマに移籍したが、前作に続いて再びコンセプト・アルバムである。「馬鹿者！」と題された本作でもアンジュ的な演劇性、風刺性、反骨精神が十分に発揮されている。「裁判所にたった一人／怒りと喧騒と沈黙の間／選ばれて踊らされる愚か者の俺／俺は心のない奴らを憎む／俺は悲鳴や殴る蹴るが嫌い／俺は戦争をやる奴らを憎む」と思い切りストレートに迫る冒頭の〝愚か者の目〞がいい。後半を占める組曲〝愚か者〞は、1986年のフランスで偶然にコンピューター・チャイルドのメモリーに落ちてきた一人の愚か者の物語。本作発表後のコンサートは大成功し、ビデオ化もされたが、それを見ると、1980年代のアンジュが低迷していたという話は全くの誤りだったとわかる。　(松元)



ANGE
Egna
LP/Tréma 310126　'86年
CD/Tréma 710216

信じられないかもしれないが、クリスチャン・デカンは1986年のインタヴューで、「新ノア記」、「Vu D'un Chien（犬から見ると）」と本作をアンジュの最も成功した3枚のアルバムに挙げている。アンジュをプログレだとだけ思って聞くと彼らの魅力の本質を見逃してしまうことの証明だと思う。クリスチャンは本作を「精神的な意味で深く理解するのが難しい女性という存在についてのアルバム」だと語っている。「大きな赤ん坊」という男性の一面を歌ったバラードの4曲目〝漫画（動くおっぱい）〞には思わずうなずいてしまうし、エレクトロニック・ジャズ・ポップ(？)の7曲目〝ジャズるケツ〞のユーモアも彼ららしい。本作をポップだといって嫌うのなら、歌詞を読みながら10回聴いてからにしてほしいと願う。　(松元)

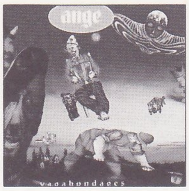
ANGE
Tout Feu, Tout Flamme



LP/Disques Marianne DM 1001 L '87年
CD/Disques Marianne 816032

1970年代のメンバーが戻ってデビュー曲を再録音したというのが本作の話題ではある。だが、亡くなったばかりの父親にクリスチャン・デカンが捧げた4曲目〝冗談だよ〟も聴いてほしい。「もしもし、パパ！　もう戻らないってどんな感じ？　白い？　黒い？　廊下みたいなの？　花を生けた青い部屋みたい？　公園みたいなのかな…庭…天使…愛…泣いている子ども…小鳥たち…あなたが逝ってしまったのは、人生がただのお笑いだと僕らに言う、ただそれだけのためだってこと…人生はバネみたいなもの。こわれたらおもちゃは動かなくなる…」また、アンジュの永遠のファンとファンクラブに捧げられた5曲目〝大きな青い空間で〟も、ファンでよかったと思う美しいバラード曲。彼らは1980年代を生きぬいたのだ。　（松元）

ANGE
Vagabondages



CD/Philips 838246-2 '89年

「放浪」と題された、初期のシングル曲など貴重な音源を4曲含むフィリップス時代のコンピレーションCDで、13曲が収められている。デビュー・シングル、〝Tout Feu, Tout Flamme(熱く燃えさかって)〟は1987年の新録音ヴァージョンよりやはりこちらに収録のオリジナルの方がいい。5枚目のアルバム、「Par Les Fils De Mandrin（マンドランの息子たち）」のアルバム・タイトル曲の英語版、〝By The Sons Of Mandrin〟は貴重品であるが、やはりオリジナルのフランス語版を越えていない。「やはりフランスに置けアンジュ」である。なお、どうせなら、CDの収録時間の限界まで曲を詰め込んでほしかった。美しいジャケットがアンジュの音楽によく合っている。
（松元）

ANGE
Sève Qui Peut



LP/Celluloid 66863-1 '89年
CD/Célluloïd 66863-2

15枚目のオリジナル・アルバムである本作品は久々の快心作となった。アンジュの全盛期はやはり「Par Les Fils De Mandrin」を発表した'76年までであろう。その後、デカン兄弟を残して、大幅なメンバー・チェンジがあり、新メンバーによる第一弾「Guet Apens」こそ従来の路線を継承した力作であったが、以後よりポップな音作りへと変わっていった。そして約10年、前作では、タイトル曲のみではあるが、何とデカン兄弟、D.Haas, J.M.Brézovarらによる演奏を聴くことができた。こうした中、本作品は上記4人にJ.P.Guichardを加えた全盛期のメンバーによって製作された。それはジャケットに象徴されるドラマチックなトータル・アルバムで、現代的なサウンドと初期のアンジュならではの持ち味が見事に融合している。
（賀川）

ANGE
Les Larmes Du Dalaï Lama



CD/Philips 512 934-2 '92年

暫くデカン兄弟で引っぱってきた感のあるアンジュだが、前作以来、往年のメンバーがそろっている。音楽の傾向も'80年代のポップな作風にかわって、'70年代に得意としたシアトリカルな曲想が戻った。しかも音の芯が太い。20年に渡る音楽変化の中から独自の方向性を確認するかのような堂々とした音だ。'70年代の繊細さこそ薄まったが、迷いのない図太さが、いい方向に出て大物バンドの風格を漂わせる。等身大のアルバムといっていいと思う。'70年代のロックを体現したバンドが、'80年代の世代交代に試行錯誤し、その後に目新しくはないが、ある部分で自身の歩みを客観視して歩み始めた時、そこにバンドの色つやが出る、そういった作だ。　（松本）

ANGE
...Mémo



CD/Philips 518987-2 '94年

初期のシングル曲や全くの未発表曲など5曲の貴重な音源を含む、やはりフィリップス時代のベスト盤CDで、16曲入り。1989年のコンピレーション盤「Vagabondages」とは1曲もダブらないのは良心的である。1992年のアルバム、「ダライ・ラマの涙」からも2曲選ばれている。最初の2曲の〝古本〟と〝カーニバル〟が1972年の、10曲目の〝本当のカルヴァリオの丘で手を釘付けにされたイエス〟が1978年のそれぞれ初公開曲だが、出来の良い曲であるのが嬉しい。4曲目は、デビュー・アルバムの4曲目に収録の〝Le soir du diable〟の何と英語版。「Vagabondages」と同様、ジャック・ブレルのカヴァーも1曲入っており、アンジュへのブレルの影響の強さが改めてわかる。
（松元）

CHRISTIAN DÉCAMPS ET FILS
Le Mal D'Adam



LP/Philips 9101233 '79年
CD/Baillemont Productions CD 981

アンジュの中心人物で、バンドでは作詞のほとんどを受け持つヴォーカルのクリスチャン・デカンの初めてのソロ・アルバム、「アダムの災難」。このアルバムは作詞、作曲、歌、キーボード、生ギター、パーカッションを担当して作っており、時に猥雑、時に詩的な歌詞を武骨なメロディーに乗せて力ずくで押しまくるように歌う。その意味でクリスチャンらしいアルバムではある。メンバーは、アンジュの「Guet-apens（邦題：異次元への罠）」に参加したクロード・ドゥメ（ギター、サックス）やジェラルド・ルナール（ベース）などで、ロックンロール色が強い。だが、メロディーにはもう少し向上の余地があるのではないだろうか。8曲目のバラードの〝Silence, On Tourne！（静粛に！撮影開始！）〟は美しいが。　（松元）



CHRISTIAN DÉCAMPS ET FILS
Juste Une Ligne Bleue
CD/Philips 848066-2　'90年

クリスチャン・デカンの2枚目のソロ・アルバム「青い線が1本だけ」。小品集で、プログレ的どころか、ロック的とも言い難い。彼自身でキーボードやリズム・プログラミングをやっているが、中心はあくまでも彼の語りであり、歌である。大人向けの童謡風の歌、といえば雰囲気は伝わると思う。4曲目の〝宇宙は僕達二人のために〟、7曲目の〝ここで今すぐはいやだ(君に言いたい)〟、8曲目の〝モーツァルト、ヘンドリックス、シューベルト〟、10曲目の〝僕の星〟、13曲目の〝ペプシの女〟、15曲目の〝動物園の日曜日〟、16曲目の〝オンボロ列車、機関車〟あたりが特に美しい歌だ。アンジュの仲間が5名参加。他人の曲が3曲あり、そのうちの1曲は息子のトリスタン・デカンの作品である。　(松元)



CHRISTIAN DÉCAMPS ET FILS
Nu
CD/Musea FGBG 4110　'94年

これは「アンジュのヴォーカリスト」という肩書きをひとまず忘れて聴くのがよいだろう。編曲、ギターなどでのジャン・パスカル・ボフォの全面的協力もあって部分的にはプログレっぽいが、前作同様、中心はクリスチャンの歌であることは銘記しよう。息子のトリスタンが書いた1曲を除いて全部クリスチャンの作詞作曲。7曲目の〝天使みたいだ〟、生ギターだけの伴奏の11曲目〝ムーランヴェール小路〟、12曲目〝誤解のように〟、13曲目〝ヴァントルブルーズの浮浪者〟、16曲目〝人間の魂〟が特に印象的だ。「裸」というアルバムタイトル通り、クリスチャンのヌード写真(?)がブックレットに載っているが、これは最終曲〝人間の魂〟で歌っている「人間の魂を再発見しよう」という主張のあらわれでもある。　(松元)



FRANCIS DÉCAMPS
Histoire De Fou
LP/Philips 9101212　'79年
CD/Baillemont Productions CD 982

アンジュの音楽面で中心的な役割を果たしているキーボードのフランシス・デカンの初めてのソロアルバム、「馬鹿物語」。ミシェル・ムリニー(ギター)、ジャン・ミュズィ(サポート・キーボードと編曲)、アンジュのジャン・ピエール・ギシャール(ドラムス)らを迎え、フランシス自身の歌声に合った暖かみのあるシンフォニック・ロックを演奏している。歌詞はファンタジー溢れる詩的なものだし、キーボードの音色もアンジュ的なので良いアルバムなのだが、兄のクリスチャン・デカンの猥雑な持ち味がないので、あくまでもアンジュの片割れ的なアルバム以上とまでは言えない。それでもアルバム中では、3曲目の〝Canicule(シリウス星)〟と5曲目の〝Apocalypse(黙示録)〟が単純に良い曲である。　(松元)



FRANCIS DÉCAMPS
Vie En Positif
CD/Disques Marianne 81604-2　'90年

フランシス・デカンは一時期アルコール依存症になったことがあり、本作はその苦しい経験をもとに作った告白私小説的アルバム。「このアルバムを、私の命を救ってくれた妻のミッシェルに永遠にわたって捧げる」という献辞がある。最初が〝流れるアルコール、危険〟というエレクトロニック・ブルース(?)で始まり、彼の経験の一端が垣間見られる。3曲目の〝風を静めて〟は静かな美しいインストゥルメンタル曲。7分に及ぶ6曲目の〝とても空がほしい〟は生への欲求をシンフォニックな曲に乗せて歌う。7曲目の〝あなたの痛みを止めてあげる〟ではアルコール依存症の危機を乗り越えた夫婦愛が歌われる。9分に及ぶ最後の曲、〝陽画の人生〟は壮大な曲で、人生への肯定的な姿勢を歌い上げて大団円。　(松元)



FRANCIS DÉCAMPS
Décamps Lajoie Epicier
Marchand D'rock
CD/Cèlluloïd 66920-2　'93年

これはまた人を食った作品である。曲自体もユーモラスなものが多いうえに、CDの機能を生かしたお遊びが付いている。まず、CDをプレイヤーにセットすると、99曲という表示が出る。これは、本編が終了した後、CDのどこかにおまけの1曲が隠されているのでリモコンサーチで探しだそう、という趣向だ。曲の方も、〝クール農業ロックンロール〟とか〝雌牛を保護せよ〟とか〝街のラップ、畑のラップ〟とか、彼が(アンジュが)地方出身であることを思い出させる農村的な(?)ものが並び、架空のラジオ局での寸劇も入っていて楽しい。アルコール依存症から復帰したフランシスの会心のユーモアか。くれぐれもプログレやシンフォニックで壮大なキーボードやアンジュ風の音を期待してはいけない。　(松元)



DANIEL HAAS,YVES HASSELMAN
Couleurs Du Temps
LP/Crypto ZAL 6468　'78年

アンジュのベーシスト、Daniel HaasとTRAVELLINGのキーボーディスト、Yves Hasselmanとの連名作。実際はJ.Louis Baverel(g), Christian Repiquet(ds)を加えたバンド編成でのアルバムになっている。中身はHasselmanのキーボードを中心にしたインストゥルメンタルが多く、作曲をHaasと4曲ずつ分け合っていると言え、実際の音のほうはHasselman色が強い。彼はこの後も「Mécanique Mentale」(Crypto ZAL 6497、'80年)、「To Jazz Or Not To Jazz」(Y.H.Impro 001、'83年)、「Soleil Noir」(Y.H. Impro 002、'84年)のソロ・アルバムをリリースした。それにしても、もう一つピリッとしないキーボード・プレイのせいでアルバムが薄味・散漫になっている感は否めない。　(松本)

ATOLL

□中島洋一

〝フランスのイエス〟と言う触れ込みで日本に紹介されて以来、ATOLLは最も日本で人気の高いフレンチ・シンフォニック・ロック・グループとして知られている。1989年の来日公演、近年のキング・レコード及びフランスMuséa等によるCD化で、若いプログレ・ファンの間でも高い人気を獲得している様で、嬉しい限りである。

彼らの歩みについては、MuséaよりのCDに大変詳しく書かれているので、詳細な点についてはそちらをお読み頂くこととして、ここでは当時の雑誌等に報道されたニュースを織り込みながら、ATOLLの歴史をまとめておくことにする。

ATOLLは、1972年1月にパリでLuc Serra(g)、Jean-Luc Thillet(g)、Alain Gozzo(ds)の3人が出会った事から始まった。彼らは意気投合し、やがてAndre Balzer(vo)、Francis Paul(b)を加えて、1972年6月23日にZOOの前座としてデビューを飾った。その後もシャンソン系アーティストの前座としてコンサートを続け、11月10日にはParisの有名なライヴ・ハウスであるGolf-DroutにNOVALIS(あのドイツのNOVALISとは別のフランスのグループ)と共に出演した。この時には〝Change La Vie〟等オリジナル曲の他、〝Stairway To Heaven〟〝Woodenship〟〝Down By The River〟等を演奏しており、後のRock En Stock誌のインタビュー(昔、Fools Mate誌に全訳が掲載されていた)でAndreが「ウェスト・コースト・サウンドに影響されていた」と語っている事が良く解る。この日のコンサートは好評で、Rock&Folk誌に取り上げられるなど徐々に注目を集める様になる。

1973年になるとそんな人気に目を付けたEurodiscが彼らと契約、9月にレコーディングが行なわれ、シングル「Je L'Aiwe Guaud Je Te Vois/Change Ta Vie」でレコード・デビューを果たした。又、このレコーディング以前のライヴの模様についても、近年Muséaよりリリースされた1stアルバムのCDにボーナス・トラックとして収録されている。

1974年に入りベースがPat Kifferに交代し、キーボードのMechel Tailleが加入した。2月には2ndシングル「La Secret Du Mage/Je Fais Un Réve」がリリースされ、ATOLLサウンドが形造られて行った。6月にはANGEとのツアーを行い大成功を収め、飛躍への確かな手応えを感じた彼らは、遂に1stアルバム「Musiciens Magiciens」をリリースする。ここではPat Kifferが脱退し、Jean-Lucがベースにまわっている。このアルバムは幾分未熟さが感じられるものの、新鮮な若さ溢れる力作となっている。Andreのシアトリカルなハイトーン・ヴォイスを中心としたテクニカルでスリリング、それでいてメロディアスなサウンドは、重さを引きずっている



様な他のフランスのグループとは一線を画す、ATOLLならではのものである。

1975年には早くも2ndアルバム「L'Araignée-Mal」がリリースされた。Luc Serraが脱退し、DIVODURUMよりChristian Beya（g：元Amon Düül II）、Richard Aubert（vln：元KOMINTERN）が加入して製作されたこのアルバムで、彼らは一気に頂点に登りつめた。DIVODURUMよりのアイデアを持ち込んだ複雑華麗でテクニカルなアンサンブル、変幻自在な曲構成、正にフレンチ・シンフォニックの金字塔的な名作である。このアルバムは、Best誌の人気投票で最高10位を記録するヒットとなり、ATOLLは一躍人気グループとなった。同誌の年間人気投票でも国内部門で前年の6位から4位へランク・アップ（尚、1位はANGEでATOLLの10倍、2位はMAGMAで2倍の票数を得ている。他ではTAÏ PHONGが6位にランク・インしている。）し、'76年に活躍が期待されるアーティストの部門でも4位（他では3位にTAÏ PHONG、7位にMONA LISAがランク・インしている。）にランキングされている。

2年後の1977年には3rdアルバム「Tertio」がリリースされた。ここではRichardが脱退しているが、前作に劣らない名作に仕上っている。カットされたシングル「Paris C'Est Fini/Tunnel」の大ヒットもあり、アルバムもBest誌の人気投票で最高23位を記録する成功を収めた。複雑なインスト・パートは少なくなったものの、彼らのルーツであるウェスト・コースト・サウンドに影響されたコーラス・ワークを生かしたシンフォニック・ロック・サウンドが楽しめる。

3rdの成功から2年、1979年に彼らは4thアルバム「Rock Puzzle」をリリースする。シーンがパンク/ニュー・ウェーヴに移行して行く中、レコード会社によるホーン・セクションとストリングスの導入の強要にもなげることなく、前作の延長線上に有る好作品を作り上げた。このアルバムではインターナショナルでも通用するハイ・レベルな音作りが成されており、前作～本作を単にポップ化と言うのは余りに了見が狭いのではないだろうか。本作はBest誌の人気投票で最高19位を記録する成功を収め、シングル「Smarto kitshy/L'ultime Rock」（B面が異なるプロモ・オンリーの12インチ・シングルもある）もリリースされた。

しかしながらこの後、1981年にGozzoとTaillet以外のメンバーが相次いで脱退、Jean-Jacques Flety（g）とJohn Wettonを迎えてリハーサルを行う（MuséaよりのＡthアルバムのCDのボーナス・トラックでデモ録音が聴ける）が上手く行かず、グループは解散する。ところが1987年になってBeyaを中心に再結成され、プロモ・シングルに次いで1989年には5thアルバム「L'Océan」をリリース。何と来日し、そのライヴを収録した「Tokyo C'Est Fini」もリリースされた。新生ATOLLは、かつての面影を残しながらも全体的にはハードな素晴らしいサウンドとなっている。

来日以降ニュースの少ない彼らだが、いつか再び素晴らしい新作が聴ける事を楽しみに、この辺でペンを置くことにしよう。







ATOLL
Musiciens-Magiciens

LP/Eurodisc 87 008 '74年
CD/Musea FGBG 4008
キング K32Y 2136

ATOLLの記念すべきデビュー・アルバム。ATOLLと言えばYESとしばしば比較されるが、このアルバムでも凝った構成の楽曲にそれを感じる。デビュー・アルバムということもあり一部に粗さや未完成さを感じるが、その反面、素性の良さもあり、バンドとして成長途上にあることを感じさせてくれる。個々の曲は光る部分もあるものの、アルバム全体を通して聞くと印象がやや薄いか。もちろんこれは2nd以降のアルバムと比較して、というレベルの話であり、十分水準は越えていると思う。また、アルバム・ラストの曲は2ndアルバムの組曲夢魔への布石というべき物で、聞き応えがある名曲。なお、このアルバムのムゼアのCDはなぜか音質が悪い、製作時のミスだろうか?。(野呂)



ATOLL
L'araignée-Mal

LP/Eurodisc 913-002 '75年
CD/Musea FGBG 4012
キング KICP 2712

彼らは6枚のアルバムがすべて日本発売されており、名実共にフレンチ・ロック界を代表するグループの一つである。1st「Musiciens-Magiciens」では多くの煌きを見せる一方多くの次落した要素を抱えていたが、名ギタリスト、クリスチャアン・ベアと元コミンテルンのヴァイオリニスト、リシャール・オベール(本作のみに参加)を得たこの2ndにおいて一気に頂点へと登り詰めたのである。高度な曲構成力と卓越した演奏能力によって、緊張感の塊とも言える音を終始生み出している。続く3rd「Tertio」と4th「Rock Puzzle」では若干ヴォーカルの比重が増え、全体的に柔軟な音創りへと変化を見せたが、彼らの特長である曲の流れの自然さと高い演奏技術は益々磨きがかかり、いずれも劣らぬ秀作である。(城元)



ATOLL
Tertio

LP/Eurodisc 913 132 '77年
CD/Musea FGBG 4019
キング KICP 2723

アルバム・タイトル通りのサード・アルバム。前作は複雑にからみあった楽曲の構成が魅力であったが、本作ではそれを解きほぐしたかのようなすっきりした音作りになっている。そのためかポップに感じる人もいるようだが、余分な音を削ぎ落としたシャープでソリッドな音作りが気持ち良く、アルバム全体にロックの持つスピード感・ドライヴ感があって、実に格好が良い。そして、このバンドのもともとの持ち味である楽曲や構成の良さは失われていない。バンドの代表曲でありリフが良いアルバム冒頭の〝パリは燃えているか〟や、ラストを飾る二部構成の大曲〝トンネル〟など聞き所も多い。アルバムとしての傾向は違うが2ndアルバムと共に代表作と言えよう。(野呂)



ATOLL
Rock Puzzle

LP/Eurodisc 913 300 '80年
CD/Musea FGBG 4024
キング 292E-2030

ATOLLの4thアルバム。前作の延長線上にあるサウンドであり、一見ポップだがATOLLらしさをよく表した佳作アルバムとなっている。'79年というプログレに厳しかった時代背景を考えると、よくこれだけのアルバムを残したと感心する。が、せっかく導入したブラス・セクションのアレンジがあまりにも凡庸な点や、ジャケットのデザインはちょっと残念なところ。それでもスピード感や叙情性なども健在であり、和声の使い方などは円熟の域に達している。前作が気に入った人は楽しめると思う。しかし、バンドはこのアルバムを最後に解散し、ATOLL名義のバンドはしばらく活動を停止してしまう。なお、ムゼアのCDではJohn Wettonが参加している3曲ほか計6曲をボーナス収録している。(野呂)



ATOLL
L'océan

CD/キング 292E 2056 '89年

ギタリストのクリスチャン・ベアを除く全員が新メンバーという〝新生ATOLL〟のアルバムは「大洋」と題され、YESの「海洋地形学の物語」を稚拙にしたようなジャケットに包まれて登場した。製作年を反映して、打ち込みの多用、ポップなメロディを導入したコンパクトな曲想が耳につき、嘗ての大曲志向は影を潜めたが、これはサード以降の漸進的な変化の流れで捉えれば充分に納得がいく。むしろきらびやかなキーボードやベアの達者なギター・プレイによるロマンティシズムと余裕が重なり合った演奏を楽しみたい。J・アンダーソン的な美しい小品〝Metamorphose〟は先に出たムゼアのコンピレーション「Enchantement」にも収録。一部メンバーの異動はあったが、彼等は本作を引っ提げて来日公演を果たす。(高山)



ATOLL
Tokyo C'est Fini Live In Japan

CD/キング 292E-2075 '89年

'89年、ATOLLの日本でのライヴアルバム。ニュー・アルバムの発表、そしてまさかの来日コンサートにファンは狂喜乱舞した。オリジナル・メンバーではリーダーのC.BéyAしか残ってなかったが、旧ナンバーもヴォーカルを含めて、さほど違和感なく聞ける。プレイは多少の粗さがあるものの、それよりも熱気あふれるものであり、ATOLLがライヴ・バンドであることを感じさせてくれる。ライヴ映えするサード・アルバム以降の曲はライヴでさらにストレートなアレンジとなっており、「夢魔」からの曲もドライヴ感のあるものになっている。しかし、このライヴ・アルバム発表後、ATOLLの活動は再び停止してしまったようだ。なお、同時にライヴ・ビデオも販売されていた。(野呂)

TAÏ PHONG

□清水明宏

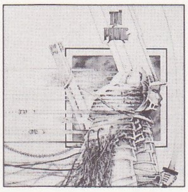
'70年代半ばのこと、アンジュもアトールもピュルサーも国内未紹介だった当時、"ロック不毛の国"から彗星のごとく現われたタイ・フォンは、そのフランス臭さを感じさせないサウンドに関係なく大きな注目を集めた。日本でアルバムに先行してシングル・リリースされた"Sister Jane"は一般の音楽ファンの間でも評判になったし、結果タイ・フォンは多くの熱狂的ファンを生み出した。その支持は今なお根強いように思える。スタイルに着目して典型的叙情派プログレという括り方で語られることが多い彼らだが、確たるオリジナリティーを持ち、フレンチ・ロック史上非常に特異な位置をしめる存在であったことをここで強調しておきたい。

タイ・フォンはフランス・ベトナム混血のKhanhとTaïを中心に結成され、'75年に「Taï Phong」、翌年に「Windows」をリリースしたが、この2作に彼らの特質が全て凝縮されている。親しみやすい歌メロを核にして、アレンジはもとよりミキシングやステレオ定位もきめ細やかに練り上げられ、繊細に構築された音のつづれ織りはあまりにもせつなく美しい。奥行きのある立体的な音作りに成功しているのだが、それが全体としてとても自然に、流れるようなハーモニーを紡ぎだしているのが素晴らしい。そして"人間メロトロン"と呼ばれたドラマチックなコーラス・ワーク。オブリガードやバッキングのフレーズひとつ取っても甘くメロディアスで、"「泣き」の金太郎飴""プログレ演歌"と揶揄されたのももっともな話。線が細いのは確かだが、3人のリード・ヴォーカルの使い分けも絶妙である(泣きのハイトーン・ヴォイスはJ.J.Goldmanのもの)。ある評論家は彼らの音楽を「観念的センチメンタリズム」と酷評したが、それもあながち的外れとは言えまい。ただし、タイ・フォンの真価はスタイルで規定されるものではなく、決して上手とは言えないその歌唱や演奏の背後からほのかに立ち上がるやわらかな情感、しめやかな詩情、豊かな感性、そこにこそ我々の魂を揺さぶるものがあるのだと筆者は思う。



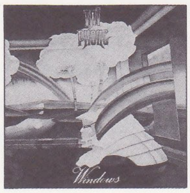
タイ・フォンはメンバー・チェンジ後、'79年に3rdアルバム「Last Flight」を発表。曲想に広がりを見せたが、前述の特質はかなり薄れてしまっている。その後'80年代に入って解散したと伝えられたが、'86年になって突然シングルを発表して我々を驚かせた。しかし予告されたアルバムは出されぬまま、現在まで音沙汰がない。

最後に極私的文章で恐縮だが、筆者にとってタイ・フォン、とりわけTaï Sinhの作る曲と彼の下手な歌は、18年間にわたってこの世で最も大切な、かけがえのない存在であった。〝好きだ〟〝ファンだ〟などという言葉で片付けられてしまうのが非常にもどかしくて悔しい程、想いは決定的だ。恥ずかしい話だが、途中で必ず泣いてしまうのでアルバム1枚聴き通せないでいる。男をそこまでさせるものがあるのだ、タイ・フォンには。



TAÏ PHONG
Taï Phong
LP/WB 56 124 '75年
CD/WEA 4509-96264-2
(Jap.)WEA WMC5-609

日本で最も知名度の高いユーロ・ロック・バンドの1つ「タイ・フーン」(と当時は呼ばれた)のデビュー作。かの代名詞的ナンバー〝Sister Jane〟は本国、そして我国でもシングル、カットされ話題を呼んだ。全編を通じて流れる物悲しいハイ・トーン・ヴォイスとコーラス、ツボを外さないピアノ、甘いスライド・ギター、プロとしての水準は保ちつつもどこか垢抜けないアンサンブル…、それら全てが「抒情派」と呼ぶに相応しい。泣きまくるメロディもさる事ながら、さりげない風情や聴き手をいつのまにか取り込んでしまう様な柔和で包容力のあるサウンドの妙こそ人気の秘密だろう。CD化に際し、シングル両面2曲の追加あり。近年ヘヴィ・メタル・ファンの間で再評価された事も付け加えておこう。 (山田)



TAÏ PHONG
Windows
LP/WB 56 264 '76年
CD/WEA 4509-96266-2
(Jap.)WEA WMC5-610

TAÏ PHONG 2ndである「Windows」は彼らの最高作と評されている。透明感溢れるハイ・トーン・ヴォーカル、優しく甘美なメロディで綴られたその叙情的な音楽はこの作品では完璧なまでに仕上がっており、1stに比べてアルバム全体としての構成に格段の進歩が見受けられる。(ただし、1stも〝Sister Jane〟という名作が光っていてこちらもはずしがたい。)アルバム・ジャケットに描かれている武将と桜の木は明らかに日本を意識したものであり〝The Gulf Of Knowledge〟(探求の淵)で描かれてる穏やかな東洋(日本)の心を表したものである。メンバーのKhanhとTaïの東洋的感性の表れというより彼らの(古代の)日本の心への強い憧れが表れたものと思われる。それは既に現代の日本人が失したものかも? (佐々木)



TAÏ PHONG
Last Flight
LP/WB 56 740 79年
CD/WEA 4509-96265-2

TaïとJ.A.Gardet脱退後、新メンバーを加えてリリースされたアルバムとしては最終作。〝タイ・フォンといえば1st、2ndである〟という見方が一般的で本3rdは無視された感が強い。確かにポップだ。しかし、ちょっと待って欲しい。ことメロディ、歌心という点に注目すれば、タイ・フォンらしさはいささかも失われていないし、流麗かつドラマチックな構成という面でも②及び⑤曲目がある！ この2曲など感動以外の何ものでもない。余りに過少評価されていると思う。多少の変化など問題としない強固な物が在る。1st、2nd以上とは言わないが…。 (中島)



ALPHA RALPHA
Alpha Ralpha
LP/Warner 56 330 '77年

タイ・フォンの親戚バンドとして知られるアルファ・ラルファ唯一の作品。グループは5人編成で、中心人物はミシェル(g)とクロード(g, Violin)の2人である。そしてキーボードにはジャン・アラン・ギャルデ(元タイ・フォン)、ベースにはシャルリー・シャリラ(後にBoozのアルバムに参加)といった、なかなかの強者バンドだ。音の方は基本的にヴォーカルレスでギターがメイン。明るさと哀愁を兼ねそなえた曲調が特徴である。全体の出来としては、タイ・フォンに比べれば分が悪いが、ジャンの哀愁のキーボード・ワークは変わっていない。さらにゲストとしてハーモニーを聞かせるのは、他ならぬタイ・フォン・コーラス隊。加えてフランソワ・ブレアン(key)の名前も見える。 (城元)

PULSAR

□野呂利治

このフランス集成に掲載されているバンドの多くは非常に強い個性を持っているが、個性の強さと言えば、このPULSARもひけを取らない。一般にはフランスを代表とする叙情派、という紹介がしばしばなされるが、単に叙情派という表現では納まりきれない強烈な個性を持っている。叙情派プログレでは幽玄さやはかなさ、美しさ、泣きといった、要素があるのだが、PULSARはむしろ「あても無くふらつく深夜の散歩」とでもいうべき、とりとめのつかない独特の浮遊感や、わびしくせつない寂寞感のある音世界である。ある意味では東洋的なのかもしれない。少なくとも、ドイツ的ロジック型音楽ではない。

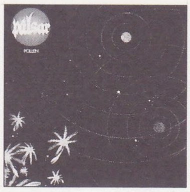
もともとバンドの活動は'66年からで、PULSAR名義の活動は'70年からであり、このあたりは英国のプログレ系大御所バンドとほぼ同時期にスタートしている。しかし、ファースト・アルバム「Pollen」が発売されるのは'74年である。このアルバムではまだPINK FLOYDの影響、それもちょうど"エコーズ"のころのPINK FLOYDからブルース色を抜いたような音で、これはこれで好む人も多いようだ。また、PULSARの世界とも言うべき独自の叙情性はすでに確立されている。続く'76年のセカンド「The Strand Of The Future」では本国ではセールス的にもある程度の成功を納める。また、わが国のユーロ・ロック紹介の初期にこのアルバムは松本零士氏のイラストを添えて日本盤が発売され、ファンを獲得する原動力となった。こちらは前作よりもより浮遊感、叙情性を増した作品である。

しかし、PULSARの最高作は次作「Halloween」'77年であろう。CBSから発売されたため、なかなか再発ができずにオリジナル・アルバムは高値を呼んだこのアルバム、内容は今までのPULSARミュージックの集大成とも呼べるもので、冒頭の頼りなげなスキャット、消え入りそうなメロトロン、アコースティック・ギターから万華鏡やミラー・ハウスを覗くような物憂げで不可思議な空間へリスナーは導かれる。ここまで順風満帆で来たかに見えたPULSARだが、このアルバムはセールスがふるわず、折りからのパンク、ニュー・ウェーヴの台頭によって、活動は沈滞化してしまう。'80年～'81年にかけては演劇用音楽を制作し、そのうちの一作が「Bienvenue Au Conseil D'administration」として'81年に発表されたが、演劇用の音楽ということで内容は今一歩積極的に評価できないものであった。一部分に往時のおもかげがあるものの、ファンキーなラッパも入っている。



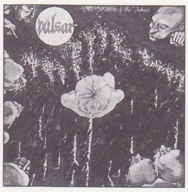
PULSARに転機が訪れたのは'80年後半であり、まずムゼア・レーベルの'87年のオムニバス・アルバムである「Enchantement」に一曲収録され、'89年にはトータル・コンセプト・アルバム「Gorlitz」を発表する。以前よりキーボードや打楽器の音色がモダンになったが、構成や曲調が相変わらずのPULSARの世界を見せてくれた。なお、現在PULSARの主要アルバムはすべてムゼアよりCD化されている。





PULSAR
Pollen
LP/Kingdom KY 28031　'75年
CD/Musea FGBG 4015

PULSARとは明るさや大きさを絶えず変えてる星（星の最後の形態）の事だそうで、まるで生き物のように脈を打ってるような事から由来してる。しかし考えてみれば星も人間も一つの大きな宇宙生命体（宇宙意思？）という組織の一部ではないだろうか？だから星も宇宙生命体という生き物と見ることもできる。PULSARの1st「Pollen」はそういった遠い異次元の星の世界に彷徨ったような独特の浮遊感と暗い美しさに包まれた作品である。それはそう、暗い夜空に冷たく流れる銀河の中を走るような心象風景の世界、童話「銀河鉄道の夜」の世界である。幻想の銀河鉄道に乗るともうあなたは空中を舞う花粉〝Pollen〟が青白く燐光を放っている。妖しく美しい幻想の銀河宇宙の中をさまよう事になる。　（佐々木）



PULSAR
The Strands Of The Future
LP/Kingdom KA 20226　'76年
CD/Musea FGBG 4018

1stで乗った銀河鉄道は実はあの銀河鉄道999号だった。この2ndでは国内盤LPのインナー・イラストを銀河鉄道999号の製作者松本零士氏が手掛けたそうである。そうした銀河鉄道999号に乗ってたどりついたその最終ホームは「The Strands Of The Future」（邦題「終着の浜辺」これはJG.バラードTerminal Beachの日本語訳をイメージに合致するという事でそのままつけたとの事。）という未来の光景だった。このタイトル曲でもある〝終着の浜辺〟はLPではA面全部を使った22分を越す大作だが、曲がよく練られているため実にスムーズに流れていく。そして知らず知らずのうちに、ブレイン・ストームのようにイマジネーションの波が次々と心の中に沸き立ち、あなたは幻想の海を浮遊する事になるのだ。　（佐々木）



PULSAR
Halloween
LP/CBS 82477　'77年
CD/Musea FGBG 4022

「Pollen」（75年）、「The Strands Of The Future」（76年）に続くピュルサーの3rdアルバム。北部アイルランド民謡の〝ダニー・ボーイ＝ロンドンデリーの歌〟を歌う少女の哀しげなスキャットに導かれてアルバムは幕をあける。そしてそれに続くフルートとフルート・メロトロンの合奏のリリカルな響き。さらにその後もヴォルテージは下がる事なく、クライマックスの連続のまま終末を迎える。自らのペンになるオリジナル・ストーリーを基に創られたこのトータル・アルバムは、実に高い完成度を有している。それは全編に渡って「美しさ」と「哀しみ」に満ちており、彼らがそれらを表現する事に掛けて、世界で最も才能あるグループの一つであった事を確信する。叙情派ロックの作品として正しく屈指の一枚。　（城元）



PULSAR
Bienvenue Au Conseil D'administration
LP/Théâtre De La Satire CS 811
'81年
CD/Musea FGBG 2020

傑作の誉れ高い3rdと、本格的に復活した5thに挟まれて非常に印象の薄いピュルサーの4作目。純粋なオリジナル・アルバムではなく、タイトルにもなっている演劇のための音楽なので本来であれば演劇と一体で評価すべきであろうが、それにしてもサントラ風の散漫な内容という感は否めない。その地味な内容から、オリジナル発売当時は流通した量も極端に少なかった様に記憶している。'88年にムゼアから再発されてようやく普通に聴けるようになった。全編を通じ、フランス語による朗読にシンセ、ピアノ、生楽器を中心とした曲が被さって行く構成となっており、フランス語の解からない私には通しで聴くのはチト辛いが、1stや2ndの淡いシンセの響きが好きな向きにはそれなりに楽しめる内容であると思う。　（東野明広）



PULSAR
Görlitz
LP/Musea FGBG 2031　'89年
CD/Musea FGBG 4108

ピュルサーとしては8年ぶりの、オリジナル・アルバムとしては「Halloween」以来12年ぶりの新作である。事前の予想ではかなりポップなものになると思われたが、その予想は見事に外れたと言ってよい。4人のオリジナル・メンバーはピュルサー・ファンの期待をもはるかに上回る傑作を作り上げたのである。A面は国境を越える列車をテーマとした組曲。独特のリズムを基礎にした暗く重々しい雰囲気の中、キーボード中心のサウンドがゆっくりと舞い上がっていくかのような展開は正に彼らならではのものであり、美と哀愁を強く感じさせる。一方、B面には5つの小品が収められており、一部多少ポップな部分もあるものの、いずれも味わいのある叙情的作品に仕上がっている。　（賀川）

FRENCH SYMPHONIC ROCK

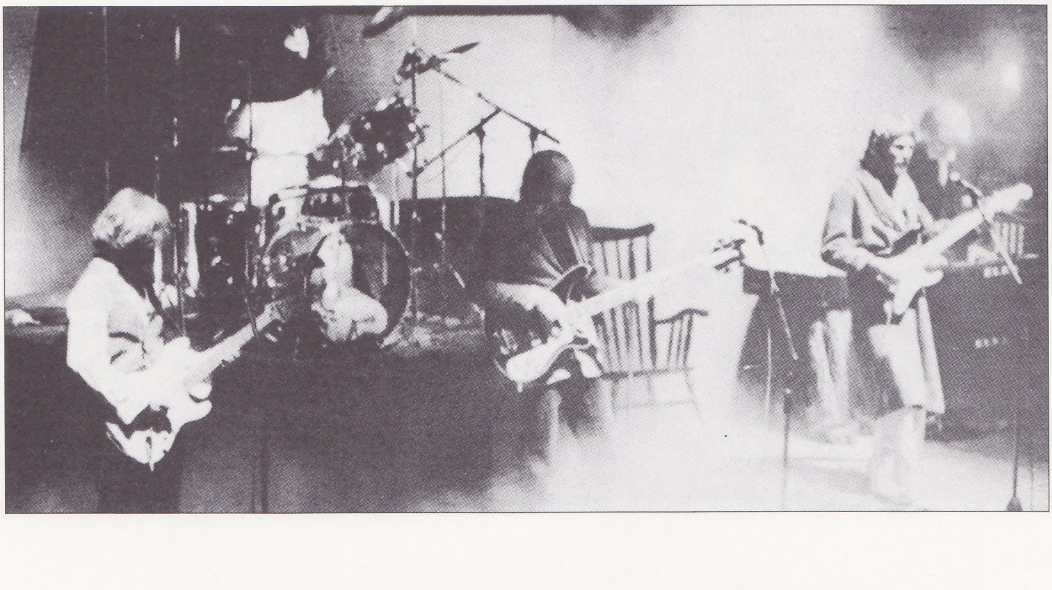
フレンチ・シンフォニック・ロックの流れ

□津田幸一

'94年、フランス議会に於て「外国語を使うのをやめよう」という法案が可決された。何もそこまでと思ったりもするが、フランスの特色は、やはりその言葉とプライド高いフランス人気質であり、この出来事がそれを証明するかのようである。フランス語については日本人である私から見てもとても魅力のある言葉だと思う。当然のことだが、そんな柔らかく流れるようなフランス語を中心にフランスの音楽シーンは形成されている。そして、その魅力を最大限に活かしているシャンソンの持つ音楽性をベースにプログレッシヴ・ロックとして進化、成立させたのがフランスのシンフォニック・ロックである。それはイギリスやイタリアのそれとは全く違う資質を持っていて、ゆえに好みの別れるところでもある。大きく違う点として、他国のシンフォニック・ロックがクラシカル・ロックと置き換えることが可能なのに対して、フランスではあまりクラシックの強い影響が見られず、ジャズ・ロックからの影響の方が強いと思われるアーティストが多い事があげられる。更にはシンフォニック・ロックにとどまらず、この集成に取り上げられている多くのアーティストが全くのオリジナルであり、唯一無比の孤高の存在であるということである。特に現在のシーンに於ては、他国には腐る程いる、いわゆるポンプ系といわれる「ジェネシス・フォロワー」がほとんど皆無なのには驚かされる。他国のアーティストの影響を顕著に受けない事は、鎖国しているわけではあるまいし、この情報化社会に於て希有なことのように思われるが、これこそ、先程のプライド高いフランス人気質ゆえに他ならないのだろう。

フランスのシンフォニック・ロックの息吹は'60年代末期のマルタン・サーカスに見ることが出来る。マルタン・サーカスは初期のゴングとも共通性があるフレンチ・ロックの創始期のグループ。感情表現に長けたシャンソンをベースに、演劇的要素を膨らませ、大道芸的でフリーキー、時としてサイケデリックな感覚までをも加味してフランス流のロック・オペラ、すなわち「ロック・テアトル」を形成した。そしてそこにナイスやフー等の手法を吸収し、優雅さや、きらびやかさだけでなく、その表現力豊かなヴォーカルにより人生の機微すら演出するシンフォニックな形態に到達したの

●メモリアンス



がアンジュである。やはりアンジュの完成されたスタイルはシンフォニック・ロックと言うよりは、まさしく「ロック・テアトル」と呼ぶにふさわしい。アンジュはフィリップスから'71年にデビューを飾り、見事に成功する。やや遅れてサンドローズ、ウィリアム・シェラーがデビュー。アンジュが「Au-Dela Du Delire」を発表する'74年頃には、アトールやヴィジターズ等も現れて、フランスにおけるシンフォニック・ロックは急速に頂点へと向かい、それまでゴング一族やマグマ一族とジャズ・ロックの独占市場だったフランスのプログレッシヴ・ロック・シーンに新たな勢力をもたらすことになった。そしてそんな中のアンダーグラウンドなシーンからアルカン・レーベルが出現するのである。アルカン(後にクリプトになる)からリリースされたカルプ・ディアン、パンタクル、モナ・リザ等はどれもが新鮮で、前記のメジャーなアーティストや同じ頃にデビューしたピュルサー、タイ・フォン、シャイロック、メモリアンスにひけを取らない逸品である。だが、この絶頂期は他国と同様に長くは続かなかった。早くも'78年頃にはシンフォニック・ロックだけではなくプログレッシヴ・ロックのシーン自体が冷え切ってしまうのである。クリプト・レーベルもワパスー、タンジェリーヌ等を最後に消滅してしまう。当時はあまり知ることが出来なかったのだが、冬の時代に頑張っているアーティストもいた。グリム、シノプシス、テルパンドル、オパル、ステップ・アヘッド等が自主制作レベルではあるが、良作を作っていたのである。そして何と言ってもアジア・ミノールの出現がファンを喜ばせてくれた。彼等の残した2枚のアルバムは当時の偉大な遺産と言える。ところが'84年ぐらいになると、シンフォニック・ロックについては全く音信不通になってしまう。もはやフランスにシンフォニック・ロックは無くなってしまったのかと誰もが思った。が、小さな種火ではあるが、僅かに残っており、燃え尽きることはなかった。冬の時代の作品を積極的に日本に紹介してくれた人物、Francis GrosseとBernard Gueffierである。当時、日本のシンフォニック・ロックに興味を持っていた彼等は、メイド・イン・ジャパン・レーベルと日本のプログレ市場に触発され、フランスでディストリビューションを主体とするレーベルを興す。それがムゼア・レーベル。'86年のことである。ムゼアの第1弾リリースはジャン・パスカル・ボフォであった。その後、エドルス、ミニマム・ヴィタル、ハロウィーンと佳作が続く。この辺はもうムゼアの独壇場である。特筆すべきは、ジャケットとブックレットの作りの丁寧さで、ジャケットが内容を明確に反映するそのセンスには本当に驚かされる。これらは商売に走らないゆえ出来る事で、まさにプログレッシヴ・ロック・マニアの手作りのレーベルといえよう。'90年代に入りティアンコ、ヴェルサイユ等のムゼア勢が健闘する中、追随するかのようにアラケーン、エクラ、ナオス等の新人が良質な作品をリリースし、再びシンフォニック・ロックが蘇ってきた。今のシンフォニック・ロックは昔の様式を模倣したもので、そこにあるのは抜け殻で有ると言われるが、フランスに限っては、B級「ジェネシス・フォロワー」は存在しないし、少なからず「ロック・テアトル」の精神性を受け継いだ後継者であることは間違いがない。

●モナ・リザ



●アラケーン





ACYNTYA
La Cité Des Dieux Oubiliés
LP/SRC 161754 '78年

'78年にリリースされたアシントヤ唯一のアルバム。演奏技量こそ極く標準的なレベルであるが、シンフォニック・ロックの愛聴者であれば全編を埋め尽くすキーボード群とヴァイオリンの大攻勢には圧倒されるであろう。あくまでも叙情的な展開が中心とはいえ、透明感ばかりが先行しがちなフレンチ・シンフォニックに対して聴く側が絶えず求め続けて来た迫力満点のプレイがそこにはある。メロトロンこそ使用していないが、シンセ音の大乱舞は若干薄めの音作りを補って余りがあろう。これだけではキーボード系の凄さばかりが目立ってしまう訳だが、ヴァイオリンにも互角の重責を課し、常に前面に位置させることによって非常にバランスの取れた曲作りを可能にしているのである。 （江田）



ALPHA CENTAURI
Alpha Centauri
LP/ATS 30171 '76年
CD/(Ita.)Mellow MMP 153

プログレッシヴ・ロックがまだメジャーなシーンでも見られた'70年代中頃に、自主製作盤として発表されたアルファ・サントーリの唯一の作品。３人のメンバーがドラムス、オルガン、シンセサイザー、ベース、ヴォーカルの多重録音で作り出したサウンドは、曲、アレンジ、演奏のいずれもが素人臭く、メジャーからは絶対にリリースされないタイプのものである。完成度では遠く及ばないものの、アンジュ、アトールの影響を感じさせる演奏は、シンプルながらも、フレンチ・シンフォニック・ロック独特の雰囲気を持っている。フレンチ・シンフォニック・ロックが好きで、細かい点にこだわらず、作品全体の雰囲気を楽しむ人には一聴の価値があると思われるマニアックな作品である。 （賀川）



ANGIPATCH
Vie
LP/TO 1531 '81年

'76年にシングル「Rêves/Terre Des Vilains(ABM 1023)」をリリース、メロディアスなキーボードを中心にややハードなギター、ポップなヴォーカル等が程良く(バランスした演奏を聴かせたアンジパッチ。以来５年の時を経て発表されたファースト・アルバムである。キーボード、ドラムス、ヴォーカル、ベース、ギターという編成は変わっておらず、メンバーもギタリストが変わっただけであるが、バンドとしてはかなり成長したことが分かる内容になっている。軽いリズムとメロディアスな演奏という基本的なパターンこそ同じであるが、音がリリカルかつしっとりしたものになっており、フランスのシンフォニック・ロックならではの色気があるシンプルではある。が、味わい深いサウンドと言える。 （賀川）



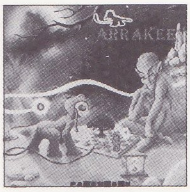
ANGIPATCH
Delirium
LP/TO 1550 '82年

詳細に関しては不明だが、ANGIPATCHは極一般的な５人編成バンドでリリース・アイテムは'76年にデビュー・シングルを、その数年後の'81年に1stアルバムである「Vie」、'82年に2ndである本作「Delirium」を自主制作にてリリースしている。このアルバムで聴かれるサウンドは典型的なフレンチ・シンフォニック・ロックで、シアトリカルかつメロディアスなものである。録音時期の関係か一部エレクトリック・ポップスからの影響を感じさせる部分がありそのせいか若干軽い感じもするのだが全体的にみるとこの時期の作品としてはなかなかの出来だと思う。聴きものはタイトルの組曲でこの曲では酒による錯乱や幻想をテーマとしているようでそれをよく練り上げジャケット・アートと共に表現したものとなっている。 （島村）



APRÈS LA PLUIE
La Célèbre Ascension Abyssale De Jaceph Celsius
LP/Temps 78. 33. 09 '79年

ギタリスト、作詩家、写真家、ヴォーカリスト、デザイナー、ミキサー、ベーシスト、キーボード・プレイヤーらが一体となったプロジェクト・チーム、APRÈS LA PLUIEの唯一の作品。アンジュに詩を提供したこともあるRoger Lombardotが全ての詩を書いたトータル・アルバムである。そのサウンドは、ヌーベル・シャンソンとロック・テアトルの要素が入り雑じったかのようなもので、非常に情感に富み、暗めである。派手さこそないが、フランス臭に満ち満ちた個性的な音作りと言える。歌詩がフランス語のため、その内容を理解することは容易でないが、それがかなりの重要性を持っていることは間違いなく、理解した時、作品はより面白いものとなるであろう。 （賀川）



ARRAKEEN
Patchwork
CD/2C Production 21873 '90年

フランスのニュー・バンド。本作以前、カセット作品が出回ったことで、多少の知名度はあった。そのカセット作品のタイトル曲が、本ＣＤではライヴで収録（マリリオンのギタリストが参加）されているが、他の曲は重複していない。マリリオン、イット・バイツなどのツアーに同行して相応の評価を受けているとも伝えられる通り、曲想としては、完全なポンプ系サウンド。イントロ、Ａメロ、Ｂメロ、サビ……といった、ユーロ系リスナーが嫌悪する形式優先の楽曲も含んではいるが、演奏は安定しており、メロディ・ラインも悪くはない。11分、９分もの大曲もある。ただ、聴き手の予想を全く裏切らない展開は、あらゆる曲想・音源を聴きなれたユーロ系リスナーに、ある程度の苦難を強いると思われる。 （ミワ）



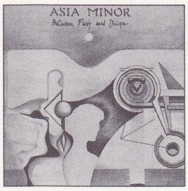
ARRAKEEN
Mosaïque
CD/2C Production AR 02 '92年

一聴して前作より格段の進歩をとげたと断言できる。変化に富む楽曲、細部まで練られたアレンジ。デジタル機材特有のスカスカした音の薄さをいかに克服すべきか、ある程度計算してのぞんだ作品といえるだろう。まず女性ヴォーカル＆コーラスが往年のフレンチ・ポップスのみずみずしさを想わせ、それがポンプ／シンフォニック・サウンドと融合、奇妙なオリジナリティを生んでいる。演奏部分でいえば、よりハード・エッジな感触が強く、ドラマチックな展開が目につく。これは新加入のギタリストの個性によるものと思われ、その奏法はいわゆるネオ・クラシカル・フュージョンの影響を露骨に感じさせるものである。そのあたりのＨＭ色を嫌うリスナーも多いだろうが、よく聴くと細かな音の工夫が随所に見られ、決して一本調子ではない。（ミワ）



ASIA MINOR
Crossing The Line
ＬＰ/WAM 001 '79年
CD/Musea FGBG 4082

かの輝かしいフレンチ・シンフォニック・ロック黄金時代も終焉を迎え過去の遺産の発掘が中心となっていた'70年代末、彗星のように我々の前に現れたのが、遅れてきたフレンチ・シンフォニック・ロックの雄ASIA MINORである。彼らの１stである本作はオリジナル・メンバーの３人とゲスト・キーボードにより制作されたものなのだが、複雑に変化、構築される変拍子の上を時に力強く、また時に繊細かつ叙情的に奏でるその演奏は名作として名高い２ndと同等のレベルを持つもので、彼らの造り上げたオリジナリティ溢れるシンフォニック・ロックはすでにこの時点で確立されていたと言っても過言ではないだろう。なにかと２ndの陰に隠れることが多い本作だがこれを機会に是非とも再評価をして欲しい作品である。（島村）



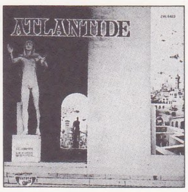
ASIA MINOR
Between Flesh And Divine
ＬＰ/WAM 101 '80年
CD/Musea FGBG 4035

「Crossing The Line」（'79年、WAM001）に続くエイジア・マイナーの２ndアルバム、編成はg. ds, ギターもプレイするフルート奏者、そして新加入のkey（１stのkeyはゲスト）の計４人で、b.はギタリストとキーボーディストが兼任している。またVo.は全て英語で歌われている。彼らの曲は奇数拍子を多用し、そしてその拍子は複雑に変化する。それを彼らは高水準の演奏力によって実にさりげなく聞かせてしまう。曲調は叙情的であり、時にミステリアスな雰囲気も漂わす。彼らのサウンドはシンフォニック・ロックの典型と言える物だが、特定のアーティストの影響下にある物ではない。２枚の作品は共に自主製作による物だが、非常に洗練されており、高いレベルを有している。（城元）



OZAN GARIP SAHIN-SETRAK BAKIREL
Musiques Pour Le Film “Le Mur”
ＬＰ/Saravah SHL 1100 '83年

Yilmaz Guney監督の映画のサントラ、Setrak(G、アルメニア人)もRobert Kempler(Key)も共に元ASIA MINOR。OzanはSaz奏者で、トルコのトラッドと覚しき曲や、それと同傾向の彼の曲が半分を占め、土の香りがする奥深い歌が染みる。Ney奏者の曲が２つ、残り６曲がSetrakの作だが、これはトラッド色は薄いものの全てアコギやマンドリンのアンサンブルなのはSazとの相性だけでもないだろう。②をはじめ抒情的な冴えを見せる曲が多い。Robertのシンセは音色にはASIA MINORの面影が追えるものの、簡単なバッキングに徹している。西洋音楽の枠内にあるAM組と伝統そのままのSaz-Ney組が別個に同じものの表現を指向している。AMファンには不向き。AMマニアか、シンフォとの無縁のトラッド好きに向くのでは。（村本）



ATLANTIDE
Atlantide
ＬＰ/Crypto ZAL 6423 '76年
CD/Musea FGBG 4114

クリプト・レーベルからリリースされたアトランティードゥの唯一の作品。ドラムス、ベース、ギター、ヴォーカル、パーカッションの５人の無名のミュージシャンから成るグループの演奏であるが作詞、作曲、プロデュースが、あのヴィジターズの仕掛人とも言えるJean-Pierre Massiéra。サウンドの方はギター、ベース、コーラス等、いずれもイエスの影響が色濃く出ており、〝ハート・オブ・ザ・サンライズ〞風のフレーズも飛び出す。オリジナリティという面ではやや問題があり、スケールもイエスに比べ遥かに小さいが．シンフォニック・ロックとしての出来は悪くなく、それなりに楽しめる。極一部ヴィジターズ調の部分もあり、Massiéraの意向が大きく反映した作品であることは間違いない。（賀川）



ATRIA
Boulevard Of Broken Dreams
CD/Musea FGBG 4071 '92年

J・P・Boffoが地方の有望グループとして名をあげ、自らエンジニアとして細心のレコーディングを行っていると語ったのが、このATRIAである。全体的に軽快でストレートなシンフォニック・サウンドといえ、Boffoからの音楽的影響は感じられない。常に厚めのキーボードがバックを埋めつくし、ハードなギターとヴォーカルがフロントに立つ。そつがないが、面白味も少ない。インスト曲の⑤⑧は非常にスピーディーで出来がよい。スネアと各種タムを引っ込め、ハイハットを前面に出すミキシングにBoffoの意地が見えて興味深い。（ミワ）

CAFEINE
La Citadelle
CD/MSI B27 Tiret6　'94年



専任ヴォーカリストを含む5人組。1曲目の途中、唐突に〝火星〟のフレーズが出てくるあたりで楽曲センスのよさに気づくリスナーも多かろう。2曲目以降は非常にアトラクティヴな楽曲が並び、3曲目や5曲目などの展開の面白味は、さして好き嫌いを分けないのではあるまいか。猫の目のように変わるテイスト、リズム・ヴァリエーションも豊富で、よく聴くと実にいろいろな音が鳴っている。ティアンコ風、エドルス風、リック・ウェイクマン風、エスニック風味もある。決して技巧的ではなく、重厚感に欠ける印象もあるが、逆にいえば曲の変化のわりに親しみやすい。一般的なロック・リズムにヴォーカルが乗る部分では'90年代型ライト・シンフォニック・サウンドの域を出ないため、マイナス点のようにも思われる。（ミワ）

CHANCE
Dunes
CD/MSI UGU 00293　'94年



知らずに聴かされれば、FONYAあたりに似て、アメリカの自主製作かと思ってしまいそうだが、ふとこのジャケがかのポール・レーベルの「Inside The Dream」に見えて、やはりフランスだなと妙な線から納得したり。FONYAに似て、のとおりこれまでのフランス物にあまりなかったニューエイジ色とその広がり方をともなったインスト作になっている。キーボードとギターを絡め壮大なイメージで押すアグレッシヴな部分も多いが、シンフォニックなベタつきよりも、やはりクリアーなイメージが先に立つ。難を言えばドラムの録音がラフな事、そして通して聴けばもう一つ曲、アルバムの中心になるようなポイントが欲しい事か。バンドは4人編成。作曲、アレンジ共にキーボードのLaurent Simonnet、彼のバンドのようだ。（松本）

DATURA
Mr Untel
ＬＰ/01JACDA　'82年



DATURAは、'73年より活動していたIMAGEのメンバーが中心となって'77年に結成された。当時はプログレッシヴ・ロック全盛期で、メジャー・シーンに触発されて結成されたグループが各地に存在した。DATURAもそうしたグループと思われる。その後シーンの衰退により、レコード・リリースは困難となり、本作は自主制作でリリースされた。ARC、LAURA、THALASSA等スタイリッシュで軽めの音作りへと移行しつつある中で、ベテランらしく'70年代の面影を色濃く残したシンフォニック・ロックとなっている。今一歩ツメが甘く、深味に欠ける点が残念だが、'83年に行なわれた次作の為のレコーディングでは、格段の進歩があった様で、オニムバス・カセット「Préludes」でその一部を聴く事が出来る。（中島洋一）

ECLAT DE VERS
Eclat De Vers
CD/Multipuce MP 04　'91年



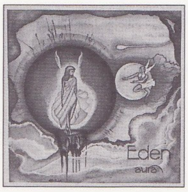
30分弱、全8曲収録のデビュー・アルバムで軽い顔見せと言った感じだろうか。メンバーは5人で主にマルセイユで活動。ギターのAlain Chiarazzoが中心で全ての曲を書いている。もちろんサウンド面に於てもギターがメインになっているのだが、実に多彩で表現力に富んでいる。サポートするキーボードも水準以上で、ヴォーカルもこれぞフランスと言った趣が有る。全体的には適度な明るさと表現力を持っていて、押しつけがましい所も無く、テクニックを含め全ての面でクォリティは高い。まさにアンジュ直系の'90年代シンフォニック・ロックの新星といえよう。欲を言えば、今作では短めの歌曲が多く、断片的な感があるのだが、次作での飛躍を予感させてくれる。（津田）

ECLAT
II
CD/Musea FGBG 4064 AR　'92年

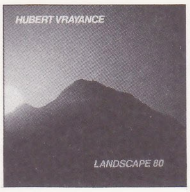


バンド名をECLATと短くした2作目。レーベルもMSIからムゼアへと変わっている。メンバーはナレーター/ヴォーカリストが脱退して4人になっている。音の傾向は変わらず、'80年代以降の典型的フレンチ・シンフォニック・サウンドである。軽快にしてメロディアス、静と動の対比も心地よく、一本調子には終わらない楽曲作りに好感が持てる。1曲目から曲中数度の場面転換があり、リスナーを引き込むことに成功している。最終曲はフェリーニの映画に材をとった秀曲で、「サーカス」の名の通り、めまぐるしい曲展開が聴き手の耳をとらえて離さない。全体として、多少音の薄さが気にはなるが、集中して聴けば実に細かな工夫や仕掛けが施されているとわかるだろう。（ミワ）

EDEN
Aura
ＬＰ/Oxygene OXY 045　'79年



これはウベール・ヴレヤンス（keys）、アラン・リス（ds）から成るデュオ・グループ、エデンのデビュー作である。内容はストリングス・シンセサイザーとハモンド・オルガンを中心とする均整のとれたクラシカル・ロックである。前者はバッキングを受け持ってサウンドに透明感を生み、後者のリック・ファン・デア・リンデン（元トレース）を想わせるフレーズは主に主旋律を奏でているが、取分けこれらが重奏される部分での音の広がりは、その哀愁を湛えたメロディーと共に近年、稀のものである。メンバーの経歴等一切不詳であるが、フランスよりもむしろオランダの所謂プログレの影響を強く感じさせる。音の切れの良さが軽やかさを生むと同時にサウンド全体を引き締めていると言えるだろう。（松本）



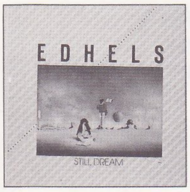
HUBERT VRAYANCE
Landscape 80
ＬＰ/FLVM　3090/3091　'86年

メロディアスなキーボード・ミュージックで我々を魅了したフランスのエデン。本作はドラムスのアラン・リスは参加しておらず、キーボーダー、ウベール・ヴリアンスのソロ・アルバムという形式でリリースされた実質上のセカンド。'80年から'86年まで、暖めたコンセプトを具体化したアルバムで、天地火水をテーマにした２枚組の大作である。ファーストよりもより洗練された曲創りで、テクニック、エンジニアリング全ての点で前作を上回る超大作ということができると思う。リリカルなメロディー、多才なキーボード群によるオーケストレイトされたそのサウンドはキーボーディストのソロ作品としては第一級の部類に属するものと思う。雄大な流れに身を委ねてみたい。　（今野）



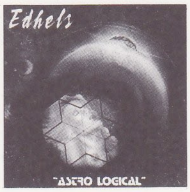
EDHELS
Oriental Christmas
ＬＰ/Cabana Music CA 94510　'85年
CD/Musea FGBG 4007

'90年代型プログレッシヴ・ロックを語る上で、エドルスは極めて重要且つ興味深い方向性を示している。'80年代初頭に勃興したポンプ・ロック勢の多くが、'70年代型プログレへの限りなきコンプレックスとラヴ・コールの上に成り立っていた中、彼等はどの過去とも繋がっていない。時系列上の特異点として存在している。ベース奏者不在、全員がキーボードやパーカッションを兼任する奇妙な編成、耳を突くデジタル機材の洪水。ギターのトーンに、僅かながらクリムゾンへのノスタルジーが感じられるものの、確固たる過去への決別と、強固な夢想への意志が表明されたファースト・アルバム。醜悪なジャケットとマイナーな発行元のせいか、リリース当時殆ど話題にならなかったのが惜しまれる。　（東野明広）



EDHELS
Still Dream
ＬＰ/Musea FGBG 2014　'88年
CD/Musea FGBG 4001

ムゼアに移籍しての第２作。楽曲のダイナミズム、交錯する静と動、デジタルとアコースティックのコントラスト、音色（＝機材）のヴァリエーション等、内容面でのスケール・アップは言うに及ばず、甘美なトーンに包まれたシュールなジャケット・ワーク、発行枚数と音質の飛躍的な向上等、移籍による単純な条件面での好転が見事に結実した希有な１枚。ボトムのスカスカを突いて出る叙情的なメロディーも、我々日本人の心の琴線に触れたのか、リリース当時外盤店では飛ぶように売れたと言う。バンドの代表作であるのは勿論だが、同時期に発売されたＪ・Ｐ・ボッフォの３rdと共に、ムゼアというレーベル・カラーを物語る１枚でもある。又、ＣＤ化に際し１曲追加されている。　（東野明広）



EDHELS
Astro Logical
CD/Musea FGBG 4031　'91年

このアルバムを極立たせている特徴は、ずばり〝はずし〟である。全篇インストゥルメンタルだが、各曲はさらに断片から成り、様々なアプローチがあって飽きさせない。いわゆるオーソドックスなプログレ（そんなもん、あるのか？）風展開のあとには必ずそれを裏切るような場面が襲ってくるし、リズム・アプローチが妙な割にはドラムの音がやけに今ふうであったり、シンフォニックな部分から突然ウェザー・リポート状態に突入したり、とにかくひと癖もふた癖もある連中と見た。人の事が言えた義理ではないが、神秘一辺倒で押していくような脳天気さがない分だけ、一般にはわかりにくいかもしれない。　（難波）



MARC CECCOTTI
M.A.S.C.
CD/(Ita)Mellow MMP 144　'93年

エドルスのリーダー、Marc Ceccottiのソロ。ムゼアではなくイタリアのメロウ・レコードからの発売。基本的に彼自身のギターと打ち込みで成り立っており、前作〈Astro-Logical〉の延長上にある訳だが、本作を事実上の4thと見るかバンド本体とは全く区別して見るかは、彼のリズム（ボトム）に対する考えをどう捉えるかに依るだろう。前作では、ボトムの弱点を隠すために人間のドラマーにわざと打ち込みのような叩き方をさせ、叙情的な部分を排除してしまった彼だが、本作では機械のボトムを採用することによって、より一層無機質な、一種現代音楽的なアプローチを採っている。プログレッシヴ・ロックの行き着く先は何処なのか、大袈裟な言い方だが、それは次作に込められているということだろうか。　（東野明広）



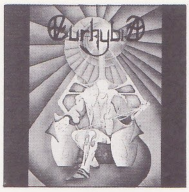
ÉLIXIR
Sabbat
ＬＰ/Musea FGBG 2003　'86年

フレンチ・シンフォニック・ロックは'80年代半ば過ぎ頃より再び活性化してきたのだが、残念ながらその初期にはシーンを盛り立て引っ張っていくような実力や水準を持ったグループが少なく正直なところいまいちと言わざるを得ない状況であった。そういった状況下、前身のPINK DREAM時代より注目を集め、その後もファンの期待がかかるなか、ムゼアより本作で待望のデビューを果たしたのがELIXIRである。このデビュー・アルバムで聴かれるサウンドもデビュー前から言われていた「アンジュ、モナ・リザの正統的後継者」の噂に違わぬ良質な典型的フレンチ・シンフォニック・ロックに仕上がっており、デビュー前５年間のライヴで鍛えたその実力は同時期の他の凡庸なバンド達と一線を画すしっかりしたものであった。　（島村）



ELOHIM
Le Mana Perdu
LP/ELO 666　'83年

本作は'80年代中頃になって再び活性化し始めたフレンチ・シンフォニック・ロックの初期の頃である'83年にリリースされた作品である。残念ながらELOHIMというバンド自体については編成がギター＆ベース、キーボード、ドラムス、ヴォーカルの４人（他にゲストで女性ヴォーカルも参加している）であることや、本作が唯一の作品であることぐらいしか情報が無く詳細は不明なのだが、内容に関してはANGE等に代表される往年の名バンドの影響下にありながらもいい意味でモダンな味付けがなされたもので、それをしっかりとした楽曲＆演奏で演出したものとなっている。当時制作された作品群はまさに玉石混淆といった感じなのだが、本作はその中でも地味ながらも良質のものであると言えよう。（島村）



EURHYBIA
Eurhybia
CD/Ugum Production UGU 00590
'90年

オーソドックスな５人編成のグループ。ギターが前面に出ている部分が多く、どちらかというとハードなタッチの演奏で、珍しく歌詞は英語である。楽曲自体はよくできておりメロディも良いし、アレンジも起伏に富み、適度な展開を見せている。渇いた感じもあり、あまりフランスっぽくなく、アメリカのシンフォ系のような趣が有る。ところどころ破綻しかける部分が有り（特にギター）、サウンド・プロダクション、演奏テクニック等、自主制作レベルの感は否めない。唯一、キーボードは例外で、音の選び方やフレーズ、その入り方等には高いセンスを感じる。テクニックが上達して、充分なプロデュースを受けることが出来れば化ける可能性は持っている。（津田）



FALSTAFF
Prononcez
LP/1981 001　'81年

白と黒の如何にも地味なカラーを基調にしたカヴァー・ワークに包まれた、ファルスタッフ。'81年製作の唯一の作品である。全８曲中、Ｂ②と④を除いた、ほとんどがキーボードで恐らくリーダーと思われるStépnane　Jolyのペンによるもので、残り２曲はギターのLaurent Labouretの作である。演奏並びにテクニックは決して派手ではなく、むしろカヴァーから象徴される穏かな印象そのものが、音に反映されている様だ。回数を繰り重ねて聴いていくうちに、持ち味の良さが徐々に浸透していく、そんな感じを受ける'80年代初期のフランスには例を見ない隠れた傑作と言える。何よりもテクニックのみにとらわれず、心の描写にも重点を置いているところがグループの身上。一作のみ残して消えるには、余りにも惜しい存在。（大関）



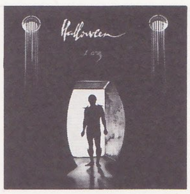
GRIME
Grime
LP/Grime D 5679　'79年
CD/Musea FGBG 4038

列車のドアを描いたカヴァーが印象的なグリム唯一のアルバムはヒステリックな喚き声で幕が開く。きれいなメロディー・ラインを柱にした内容ながら技術的には多少粗削りで、たどたどしいコーラスやどこか泥臭いサックスの音色等からは若干不器用との印象さえ受ける。しかし聴き進むに従って、素朴な中にも好感が持てるフレーズが顔を出す様になり、メロディアスな要素を前面に押し出したＢ面に入ると、澄み切った音色のacギターやフルート、バックに流れるキーボード等が俄然力を発揮し始め、ヴォーカルまでもが妙に説得力あるものに聴こえてくる。全体的に見て、曲により出来、不出来の差があり少々線が細い感じもするが、シンフォニック系の自主制作盤としては標準的なレベルと言える。（江田）



HALLOWEEN
Part One
LP/Musea FGBG 2021　'88年

フランスにおいてはそう多くない硬質なシンフォニック・ロックを展開するバンド。本作がデビュー・アルバムである。この時点ではメンバーは３人。ドラム、キーボード、ベース兼ヴァイオリンという変則的なトリオであった。ドラマーはアラン・スティーヴェルの関連人脈にその名を追うことができる。作品としては、次作、次々作の評価が高く、いささか忘れられがちであるが、完成度は決して低くない。たいへんメリハリのある曲想で、ところどころ顔を出すヴァイオリンやオカルティックなサウンド・エフェクトが非常にミステリアスかつスペクタル。その実力は、後にムゼアよりリリースされる世界７ヵ国のシンフォニック・バンド・オムニバス・アルバムに仏代表として曲を提供していることからもうかがえる。（ミワ）



HALLOWEEN
Laz
LP/Musea FGBG 2032　'90年
CD/Musea FGBG 4124

ジャケット・デザインこそ頂けなかったものの、デビュウ作が好評を博したハロウィーンのセカンド。参加メンバーは１人増えて、シンセ、ヴァイオリン＆ギター、ベース、ドラムの４人になっている。内容はラヴクラフトの詩をTexteにしたトータル性のあるもので、全ての面で前作より凝ったものになっている。曲は重々しくかつドラマチックであり、演奏は非常にバランスの取れたものとなっている。ソロ中心ではなく、グループとしてのアンサンブルを重視したところに彼らの自信と余裕が窺える。成長著しい彼らは'80年代にデビュウした他のフランスのシンフォニック・ロック・グループとは既に一線を画する存在になったと言えるだろう。'90年代の幕開けを飾る会心作である。（賀川）



HALLOWEEN
Merlin

CD/Musea FGBG 4084　'94年

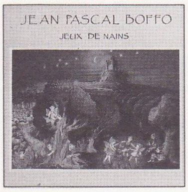
前作から４年ぶりの３枚目。期待に違わず大きくスケール・アップして帰ってきた。必要に応じて管楽器や弦楽器等を加えていて、しかもそれらの雰囲気に流されることも無くバンド自体のアンサンブルもしっかりしていて、シンフォニックな中にもダイナミックな作品になっている。今まではPULSAR等との類似点を指摘されたりしたのだが、このアルバムは全くオリジナルな感性を具現化しているといえ、完成度は高い。いつものことながらジャケットが音をよく表現していて頭が下がる。シンフォニック・ロックのファンにはお薦めの一枚。（津田）



ICARE
Aquarelle

ＬＰ/SRC 491 454　'80年

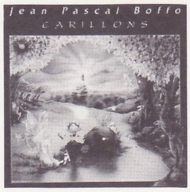
ギター３本にベースとドラムス、ドラマー以外の４人が全てヴォーカルを取るという一風変わった編成のイカールは「Aquarelle」と題されたアルバムでレコード・デビューしている。ギタリストが３人いるということから、ギター間のインター・プレイ主体とした演奏を想像しがちであるが、実際は、一部にユニゾンがあるだけで、ほとんどの部分でリード・ギターとバッキングといった形のメロディアスな演奏が展開されている。ややポップで明るく軽快な曲が多く、コーラスを多用したヴォーカルも大きな比重を占めている。（賀川）



JEAN PASCAL BOFFO
Jeux De Nains

ＬＰ/Musea FGBG 2001　'86年

フランスのジャズ・ロック系専門誌「Notes」関係者の手で設立されたMUSEAレーベルから、第一回作品として世に送り出された、トロルのギタリスト、ジャン・パスカル・ボフォのソロ作品。ジャケッ・トデザインを御伽話か挿絵を思わせるファンタジックなイラストであしらった、A・フィリップスやS・ハケットの創作する夢見心地な世界を強く意識した作りが成されており、曲によって各種ギターを上手く使い分け、ベースからシンセサイザー…etcを手掛けるボフォの他、数名のゲストを迎えて様々な効果音（鳥の囀り、子供のはしゃぎ声…等）を配したサウンドは、人間誰しもが幼年期に抱いていた夢や空想、不安などを再び思い起こさせてくれる、不思議な魅力を持った回想のかけらとでも言えるだろう。（大関）



JEAN PASCAL BOFFO
Carillons

ＬＰ/Musea FGBG 2004　'87年
CD/Musea FGBG 4104

デビュー作「Jeux De Nains」が好評を博したジャン・パスカル・ボフォの２nd。音作りはより洗練され、演奏、曲作り、録音等、全ての面でスケール・アップしている。今回もデニス・バティスのシンセによるバック・アップを受け、ボフォはテクニカルな演奏を披露している。エレクトリック、アコースティックの両ギターを使い分け、変化に富んだプレイが展開されているが、彼のギターは常に情感を込めたリリカルなものとなっている。作品全体の印象も前作と比較して、彼のオリジナリティを強く感じさせるもので、かつてのクラシックやジャズでの経験が隠し味として生かされている。なお、ジャケット・デザインも、よりファンタジックで色鮮やかになっており、特筆に値する。（賀川）



JEAN PASCAL BOFFO
Rituel

ＬＰ/Musea FGBG 2016　'88年
CD/Musea FGBG 4045

ジャズ・パスカル・ボフォの３作目。一本調子になりがちなシンフォニック・サウンドの中に混ったためか、内省的に響く音色が落ち着きと童話風のイメージを与えて新鮮ともてはやされた気もするが、ここへ来て彼のアプローチは急に飛躍している。予想では、そのままニュー・エイジ・ミュージックになるはずだったが、意欲的にも管弦楽の形をとって持ち味の繊細で内省的な響きを外に向けて放ってきた。だから曲自体に力強さもある。童話風のイメージをも損なっていない。稀に見る完成度の高い１枚だが、情緒に溺れないので退屈するリスナーも出そう。（松本）



JEAN PASCAL BOFFO
Nomades

CD/Musea FGBG 4100　'94年

前作から５年の沈黙を経てリリースされた第４作。その前作では華麗なシンフォニック・ロックを創りあげたボフォ。沈黙の期間が何を意味しているのかは判らないが、この作品で聴かれるのはエスニックな香りが強く、しかもジャージーな軽めのジャズ・ロック。今までの総決算と新たなる方向性の掲示といった二つの側面が見られる。中近東あるいは西アジア風のメロディ・ラインをベースに、音の粒と空間を活かしたアレンジが心地よい。割合リラックスした演奏で、もう少し緊張感が欲しい気もするのだが、彼の奏でる繊細で優しいギターの音色にはちょうど良い。ベテランの味わいの陰に新しい世界への洞察と好奇心を垣間見ることが出来る完成度の高い一作。（津田）



LA ROSSA
A Fury Of Glass
LP/AG Records AG 1013　'　?年
CD/Musea FGBG 4097

VDGGの名作「Still Life」に収録されていた曲から名前を取ったラ・ロッサのデビュー作。詞と曲を手掛けるKeyとVoを核に、bとds、2人のgを含めた6人編成で、フランス臭さを剝き出しにした叙情性豊かなアコースティックなナンバーと、ストレートかつヘヴィなナンバーの二つのパターンが程良く溶け合って、本アルバムを構成している。P・ハミルにも通じる内に秘めた激しい情熱と感傷的な心裏の高揚を感じさせるヴォーカル、端正でリリカルさと強力さが同居した、詩的なピアノやアコースティック・ギターの調べは、単にシンフォニックなだけでは飽き足らなくなったマニアにとって、心地良い刺激剤となるであろう。VDGGの持っていた前衛的精神を継承した非シンフォニック系の申し子と言えよう。　(大関)



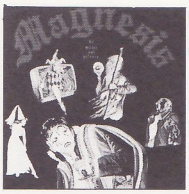
LIEVAUX-TRANSFO
Passage Public
LP/Trema 310 073　'79年

Jean-Yves Liévaux率いるLIEVAUX-TRANSFOのファースト・アルバム。Liévauxの非常にアクの強いヴォーカルを中心としたそのサウンドはあの3rd〜4th時のアトールをシンプルにしたようなフランス独特のタイトなシンフォニック・ロックだ。ただし，テクニック的にも，曲の構成力的にもこちらは1歩も2歩もレベルが落ちるのは否めない事実であり、それは当時('70年代後半〜'80年代前半)のフレンチ・ロックのレベルをそのまま示している。いわゆるアマチュア自主制作の平均レベルと言ったところか？2、3良い雰囲気の曲があるだけに，このまま埋もれさせるのは少し残念な気もする。　(渡部暁)



LIEVAUX-TRANSFO
Porte 50
LP/Trema 310 097　'81年

かなり、方向性の変わったセカンド・アルバム。Liévauxのヴォーカルのアクの強さはさらに強まっている上に、シンフォニックな部分がかなり後退している。一部ファースト・アルバムの延長線上にあるメロディアスな曲もあるが、いくつかの曲は完全に当時流行のニュー・ウェーブ系の音になっており、今聞くと時代遅れの極みと言った感じである。その中にあってB面の10分以上の大曲はかなり起伏に富んだ流れがあり、この曲だけでも聞く価値はある。ファースト・アルバム中の秀曲とこの大曲でコンピレーションを組めば、今でもCD化に充分耐えられるはずだ。捨て曲だらけとは言え、埋もれさせるには、あまりにも惜しい。当時のフランスにはそんなバンドが多々あった。　(渡部　暁)



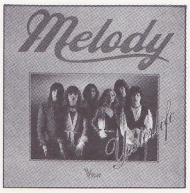
MAGNESIS
Le Miroir Aux Défauts
CD/Magnesis MAG 0594　'94年

「ミカドの旅」と題された作品が知られるフランスのバンドのおそらくは2nd。専任キーボード奏者が増えており、シアトリカルなライト・シンフォニック・サウンドを展開している。極一部で聴けるクラシカル・アンサンブル、ドラム仕立てのSE、ストリングス・シンセをバックにギターが泣く曲など、耳を引きつける部分もなくはない。だが、全体はヴォーカルとギターのリフを中心とした単調な展開が多く、チープでアマチュアくさい。なお、自主レーベルからのリリースであるが、ディストリビューションはMIS。ムゼア人脈の協力もある。　(ミワ)



MANDRAGORE
À Revivre Le Futur
LP/Musea FGBG 2033　'90年

マンドラゴールはミッシェル・アルトメールがトロル以前に同グループの一部メンバーと結成していたバンドであり、そのサウンドはアンジュ、モナ・リザの影響を受けたものと言われていた。マンドラゴール名義のアルバムがリリースされるにあたってはグループが再結成されているものと思われたが、驚くべきことに、作品は作曲、アレンジ、演奏の全てをアルトメールが一人でこなしたもので、実質的には彼のソロ・アルバムであった。アルトメールの多才さを見せつける内容であり、キーボードとドラムスを中心にして軽快なシンフォニック・サウンドを作り出している。メロディアスな演奏は心地良くドリーミィで完成度も高い。しかし、やはり彼の本領はジャズ・ロック＝トロルにあるのではないだろうか。　(賀川)



MELODY
Yesterlife
LP/Vogue LDA. 20. 278　'77年

3人のフランス人とカンボジア人、アメリカ人、ベルギー人で結成されたメロディは、男女ヴォーカル、ベース、キーボード、ギター、ドラムスという編成で、'76年にファースト・アルバム「Come Fly With Me(Pôle 0011)を発表した。そのサウンドは、未完成ながらも意欲を感じさせるジェネシスの影響を受けた暗めのシンフォニック・ロックだった。それから1年、同じ編成ながら、キーボードとドラムスが変わり、本セカンドが発表された。線は細いが透明感のあるソプラノ・ヴォーカル、甘い男性ヴォーカルとややシンプルではあるがリリカルな演奏が一体になったサウンドは前作と同傾向と言えるが、音が整理され、展開もよりドラマチックになっている。彼らならではの個性も感じられる。　(賀川)

MÉMORIANCE
Et Après…
LP/Eurodisc 913 084 '76年



アトールと同じアラベラ・プロダクション出身のメモリアンス、Golf DrouotクラブでのLe Tremplin D'Or（金の踏切板）受賞をひっさげてのデビュー作である。彼らのサウンドは典型的なフレンチ・シンフォニック・ロックで、アトール、パンタクルといった良き先人達に影響を受けている。特にメロディックな曲創りが魅力である。しかし類型的過ぎる点と演奏技術の不足のため、その先人達のレベルに達し得ていないのもまた事実であった。が、それらの欠点も次なる2nd「L'écume Des Jours」では大幅に修正されていた。完成度という点では明らかに2ndに軍配が上がるが、しかしそれでもフランス臭さむき出しのこの1stも捨て難い。どちらをより魅力的に感じるかは論の分かれる所であろう。（城元）

MÉMORIANCE
L'écume Des Jours
LP/Philips 9101 265 '79年



アトールの「Rock Puzzle」などとともに、メジャー・レーベルがリリースしたフレンチ・シンフォニック・ロック系の作品としては最後に位置する1枚。プログレッシヴ・ロックがメジャーなシーンから急速な勢いで姿を消しつつあった時代の作品である。フランス語のシアトリカルなヴォーカル、メロディアスできらめきのある演奏は前作同様であり、アンジュ以来のフレンチ・シンフォニック・ロックの伝統を受け継いでいる。前作と比べて、演奏力、構成力が増した分、サウンドがシェイプ・アップされており、グループとして成長した姿が窺える。フレンチ・シンフォニック・ロックのマスト・アイテムの一つと言える。この後、'81年にややポップなシングル「Sparadrap/Téléphone（Philips 6010 302）」を出している。（賀川）

MÉTABOLISME
Tempus Fugit
LP/Crypto ZAL 6413 '77年



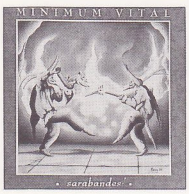
Menton出身のMÉTABOLISME唯一の作品。Cryptoらしいいかにもフランス然とした味わいのあるシンフォニック・ロックである。強力な個性は無いものの、MONA LISAを少しフォーク寄りにした様な良質なサウンドを聴くことが出来る。本作は「プログレッシヴ・ミュージックを演奏する才能ある強力なグループが登場した」とBest誌では好評で、1977年9月25日のCrypto Festival2日目のオープニングに登場して行ったデビュー・ライヴも成功に終り、その後が期待されたが、本作の売上げが1978年末で1005枚と振るわず、シーンから消えて行った。尚、蛇足だが同時点でMONA LISAの3rdが15282枚、TANGERINEの1stが6030枚、WAPASSOUの2ndが6026枚、Michel Moulineが1797枚の売上げを記録しているとのことである。（中島洋一）

MINIMUM VITAL
Les Saisons Marines
LP/Musea FGBG 2012 '87年
CD/Musea FGBG 4050



カセットによるデビュウ作「Envol Triangles」が好評だったミニマル・ヴィタル。待望のファースト・アルバムが遂にリリースされた。上記作品と多少メンバーが異なり、ギター、ドラムス、ベース、キーボードにゲストのシンガーを加えて録音されている。アルバム最大の聴き所はJean Luc Payssanのギター・プレイであろう。非常に繊細で歌心ある変化に富んだプレイを披露しており、彼がロック以外の音楽にも造詣が深いことを窺わせる。他のメンバーの演奏も安定しており、他の新人バンドとは一線を画する実力派グループと言える。全体として、仰々しい展開を避け、聴き込む程に味わいを感じさせる作品に仕上がっている。（賀川）

MINIMUM VITAL
Sarabandes
CD/Musea FGBG 4014 '90年



彼等はこれで2作目だが、前作の平均的なシンフォ系のイメージを完全に払拭する作品に仕上げられている。サラバンドと題された作品で全体が8曲から成るトータル色の強いもの。ゆるやかなサラバンドのメロディーが七色に変化し、緩急の差を付けて演奏される各曲の冴えは、キーボーディストのT.Payssanに依るところが大きい。彼はコンセプトから作曲、そしてカヴァー・アートまでを手がけている。エドルスのセカンドを、さらに緻密に、タイトにしたようなイメージのシンフォニック・ロックで、エドルス同様、'90年代の語法をすでに身につけた素晴らしい作品である。（山崎）

MINIMUM VITAL
La Source
CD/Musea FGBG 4075 '93年



冒頭から大幅な路線変更を思わせる軽快でダンサブルなコーラス・ワークが始まるが、これが一本調子には続かない。注意深く聴くと、極めて凝った音作りがなされているとわかる。代表的なのは⑤。いくぶんワイルドなパートから突然ムーディーに、一転してフュージョン・タッチへと、M・オールドフィールドをヘヴィーにしたごとき展開が9分以上も続く。④の頭や⑧の荘厳な感覚も耳に残る。また、彼らの中世古謡に対するこだわりも⑥において健在である。ギタリストのピッキングのもたりがやや不快で、気になるといえば気になる。（ミワ）



MONA LISA
L'escapade

LP/Arcane 87015 '74年
CD/Musea FGBG 4032

５枚のアルバムを残して解散したモナ・リザ。代表作として取り上げられることが多いのはサードとフォースであるが、本デビュウ作も彼らの原点を知るという意味で興味深い。演奏力、作曲力ともに非凡とは言えない彼らの売り物はストーリー性を持った曲作りとその独特の雰囲気であろう。そういった意味では趣味性が強く、万人向きのグループとは言い難い。同系統のサウンドを持つアンジュの全盛期の作品や彼ら自身の後の作品と比較して小粒な感は否めないが、その夢幻的サウンドは端々しく意欲的である。 （賀川）



MONA LISA
Grimaces

LP/Arcane 913050 '75年
CD/Musea FGBG 4119

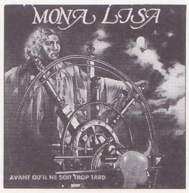
アルカンよりの2作目。この時期のモナ・リザは、アルカンの中心アーティストというだけでなく、アンジュの正統的後継者としてそのパフォーマンスが注目され始めた存在であった。本作にもステージにおける音響、照明、コスチュームなどの担当スタッフがクレジットされており、彼らの舞台演出込みの方向性はすでに確立されている。音楽面のみでいえば、代表作とされる４作目には完成度でおよばない。とはいうものの、非常によく練られた楽曲は変化に富み、めまぐるしい展開は決してリスナーを飽きさせない。プリミティヴなコーラス、唐突な行進曲、荒けずりなフルート、フレンチ・シアトリカル・ロックの王道を行くナレーション・ヴォーカル。演奏技術の稚拙さが致命傷にならない類の音楽である。 （ミワ）



MONA LISA
Le Petit Violon De Mr. Grégoire

LP/Crypto ZAC 6402 '77年
CD/Musea FGBG 4009

３作目。典型的なシアトリカル・ロックのスタイルを確立している。たおやかな演奏(特にギター)の比重が大きく、美しさとツヤを感じさせる本作を「月影」とするなら、ドミニクのヴォーカルが炸烈し緊張感の強い次作は「ブロードウェイ」ということになるかも。しかし彼のヴォーカルは、ガブリエルやC･デカンのようなコミカルな要素まで含む懐深い芸達者さより、むしろハミルやBoozにも通じるシリアスな表出が基調(安直に括ってゴメン)であり、生真面目で時に悲痛なトーンを帯びるものだ。そのアクの強いヴォーカルと無理なく流れる演奏バランスゆえに、本作は聴きやすく取ってつきやすいはず。あ、仏語の歌の他に、リズム・セクションにもフランスの香りが… （村本）



MONA LISA
Avant Qu'il Ne Soit Trop Tard

LP/Crypto ZAL 6440 '78年
CD/Musea FGBG 4107

モナ・リザは'72年に結成された。中心人物はフランシス・プーレ（ds）とジャン･ポール･ピールソン（key）である。彼らはマルチ･メディア・グループと呼ばれていた。それは、ドミニク・ルグネのシアトリカルなヴォーカルを中心として、ライト･ショーや大道具･小道具をうまく用いた彼らのステージが、ジェネシスの強い影響を受けていたことによる。アルカン時代のアルバムはトータルな印象に欠ける点があったが、メンバー・チェンジを経た後のサード・アルバムと本作（フォース・アルバム）では、アルバム全体を一つのコンセプトで統一して、トータルな印象を与えることに成功している。しかし、ドミニクが脱退した後のアルバムでは再び、全体としては散漫な印象を与えるものになってしまった。 （宇田川）



MONA LISA
Vers Demain

LP/Crypto ZAL 6483 '79年
CD/Musea FGBG 4120

かの最高傑作である４th「Avant Qu'il Ne Soit Trop Tard」リリース後、看板ヴォーカリストDominique Le Guennecを始め３人のメンバーが脱退してしまい、残されたJean-Paul Pierson とFrancis Pouletは各々キーボードからギター（Keyも兼任)、ドラムからヴォーカル（Percも兼任）というようにパートを変え、それ以外のパートに新たな３人のメンバーを補充し最終作であるこの５thを制作する。今までの看板であったDominiqueのヴォーカルが聞かれないことやトータルな作風になっていないことなどから、あまり話題に上ることのない本作だが、そのサウンドは若干モダンな色があるもののメンバー・チェンジによる効果でよりアンサンブルがまとまりテクニック的にもしっかりした好作として仕上がっている。 （島村）



NAOS
Roc Et Légendes

CD/Baillemont CD 921 '90年

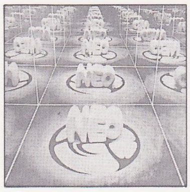
NAOSはギターのLucien Paganoとヴォーカルのphilippe Motteeを中心とした５人編成のバンド。歌の比重が強い作品で、ややポップなメロディと必要最小限のシンプルなアレンジによる軽めのアルバムである。キーボードの音が若干チープだったり、シモンズがちょっと耳につくものの演奏テクニックや構成は水準。哀感のあるギターの音色と個性的ではないが情感のあるヴォーカルが切々と訴えかけてくる。叙情性のあるメロディの出来がよいのと、あまりウェットな感じがないので聞きやすい。バックが歌をサポートするのに徹している面もあり、そこが物足りないとも言えるが、必然性のない壁のような演奏の多い昨今、余計な装飾のないアレンジが逆に新鮮に聴こえてしまう。 （津田）

NAOS
Naif Le Rêveur
LP/Baillmont CD 965 '92年



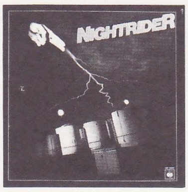
穴開きのジャケットに包まれたこの作品ではリズム・セクションがメンバー・チェンジしている。そんなこともあってか、前作で見られた弱点は大幅に改善されている。長めの曲が多くなっているものの、従来の叙情的なメロディの良さはそのまま。アレンジ面でも浮遊感のあるキーボードの音色、しっかりとサポートするリズム、哀愁のあるしっかりとしたメロディを奏でるギター、そして存在感を増したヴォーカルと、全てに余裕すら感じるようになってきている。まず歌をしっかりと聞かせた上で、効果的な装飾により表現を膨らませようというアプローチが感じられる。これで飛び抜けた楽曲が有ればと思うのだが、それは先のお楽しみなのかもしれない。軽めのシンフォニック・ロック。（津田）

NEO
Neo
LP/PS 380110 '81年



アルバムに針を落とした瞬間、ハード＆メロディアスかつ縦横無尽に弾きまくるギターとそれに張り合うかのように奏でられるサックスが耳に飛び込んでくるこのアルバムはNEOが'80年にオメガスタジオでレコーディングし、翌'81年にリリースした彼ら唯一の作品である。本作で聴かれるサウンドは、前述の通りギターとサックスが中心になって活躍し、それを控えめながらも欠かすことの出来ないキーボードとリズム隊が彩りを添えているジャジーな色合いを持ったハード・シンフォニック・ロックとでも呼べるものなのだが、非常にしっかりした個性を持ったものでその完成度はなかなかなものである。なお'85年にLP再発されているが、オリジナルLPとはジャケットのデザインが若干ではあるが変更されている。（島村）

NIGHTRIDER
Nightrider
LP/CBS 83886 '79年
CD/Musea FGBG 4059



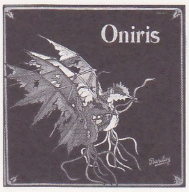
ナイトライダーというと、あのＴＶ番組か？それともマッド・マックスか？という事で、ジャケットのイメージもあって一聴するとハードな印象を受けるが、実際はアコ・ピのツボを押えたプレイが印象的な、静的な美しさも合わせ持った作品である。確かに、ブルースを引きずった様なVoの唄い廻しとエッジの利いたギター・サウンドではあるが、常にバックに流れるアコ・ピが全体の雰囲気を緩和していてそれがこのバンドの持ち味になっている。Voパートはイマイチ押しが弱いが、インスト・パートはかなりイケる。収録時間が短いのは残念。（宮沢）

NUANCE
Il est une Légende
LP/FLVM 3048 '83年



甘い歌メロと良く歌うギターで'80年代前半のフレンチ・シンフォニックのバンドの中では人気の高かった一枚。確かに，いかにもフランス然としたゆったりとした演奏とメロディアスなフレーズは、今聞いてもうっとりとしてしまえるぐらい良く出来ている。また、他のフランスのバンドが持っていたような、あのフランス独特の「アクの強さ」があまり感じられないのも、人気が高かった理由か？　ただし、バンド全体のアンサンブルや曲の構成などは、無惨な程破綻しており、所詮はＢ級かＣ級のバンドであったといえる。ただ、こんな事は今だから言える事であり、あの何も無かった'80年代前半には、この程度のバンドでさえも一条の光明であった。（渡部　暁）

ONIRIS
L'Homme-Voilier
LP/Barclay 900 583 '79年



冒頭のシャウト「ホイエー！　ホイエ〜ッ!!」に笑い転げた人も、聴き進むにつれ反省を余儀なくされるであろう。MONA LISA-4th風のシリアスでシアトリカルな展開なのに、ATOLLを思わすノーブルなカッコ良さがある。曲調のわりに演奏はジャジーな要素が見え隠れして女声コーラスも加わり、この手の音としては斬新、かつ力量も大曲を引っ張るに不足はない。CSN&Yやザッパetc. も出てくる歌詞は私には読めない(詫)が、スキゾフレニックの独白と対話を演じているらしいヴォーカルは美声かつ迫真のパフォーマンスで、融離されるべき禁忌の異端者から現世への異議申し立てのようにも感じられる。プロデュースはLaurent Thibault、この一作で終わったのだとしたら実に惜しい。（村本）

OPEN AIR
Open Air
LP/Chicago 2000 900155 '78年
CD/Musea FGBG 4021



OPEN AIRのおそらく唯一のアルバム。元ALICEのJ.P.Aufredoがメンバーとして名を連ねている。サウンドの方は、典型的なフレンチ・シンフォニックであるが、全編に渡って英語で歌われている為か、それ程フランス臭さは感じさせない。小曲ばかりであり、音がやや軽いこともあって、一聴しただけでは印象が薄いかも知れないが、聴き込むにつれて良さが伝わってくる仲々の佳作なのである。特に細部まで丹念に行きとどいたアレンジがアルバム全体を爽やかでかつ味わい深いものとしている。プログレ＝ドラマチックな大曲としか考えていない方には不必要なアルバムかも知れないが、フレンチ・シンフォニックをこよなく愛する方には、是非聴いて頂きたいのです。（中島洋一）



ORION
La Nature Vit, L'homme Lui, Critique

LP/Oxygen OXY 025　'79年
CD/Musea FGBG 4078

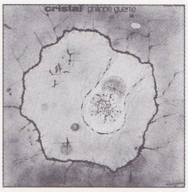
'79年リリースのオリオンのアルバム。ほとんどのパートはフレンチ・シンフォニック特有のクリスタルなイメージで統一されており、アトールあたりを少々小振りにした感じのサウンドと言える。シンセ系キーボードやフルートを多用した場面では実力が遺憾無く発揮されているものの、全体的にポップなフレーズが目立っており、もう少しアクの強い曲作りが欲しかったところだ。叙情的な展開に持って行こうとしても今一つ〝泣かせる〞ところまで行き切れないのがいかにもフランスのバンドらしいところでもある。だが、一部を除けば極く標準的な出来と言え、割と無難には聴きこなせそう。ただし、爆発的な盛り上がりを期待するイタリア系のファンには余り向かない作風だ。（江田）



PENTACLE
La Clef Des Songes

LP/Arcane 913 001　'75年

「夢の鍵」と題されたパンタクル唯一のアルバム。全編に渡り、美しくリリカルなメロディーを配したシンフォニックな作品である。彼らはメンバー個々も、またバンド全体としても決してハイ・テクニックの持ち主ではないが、リズム・セクションは実に堅実で、特にドラムは録音の適切さも手伝ってか非常に歯切れの良い音を聞かせてくれる。そしてその上に澄んだ音色のキーボード群と情感豊かなギター、そして叙情的なメロディー・ラインを持ったヴォーカルがちりばめられている。この地味ではあるが味わい深い作品が生まれた背景には、彼らを見い出し、またこのアルバムのプロデュースを務めた、アンジュのリーダーであるクリスチャン・デカンの存在と力があった事を忘れるわけにはいかない。（城元）



PHILIPPE GUERRE
Cristal

LP/NP 5258　'79年

このアルバムはフィリップ・ゲールのファースト・アルバムで'79年にリリースされたものである。基本的には次作「Concerto～」でのコンポジションに通じるもので、アレンジされたパートとノン・アレンジによる効果音が融合され、稚拙ではあるがロマン的な情感をたたえた、エレクトロニクス・ミュージックである。このアルバムは後（'85年）に再録されて、曲順も入れかわり、ジャケット・カヴァーも全く一新してリリースされることになる。すなわち、これは印象が大分かわっており、彼は事実上、3枚のアルバムをリリースしていると解釈しても良いように思う。全ての点で最も進化しているのは再録のほうのクリスタルであるが、不完全でこそあれ、若いひたむきな情熱の感じられるこのアルバムもすて難い。尚コンサート時にはレーザー等を使用していたようだ。（山崎）



RIPAILLE
La Vieille Que L'on Brûla

LP/Ballon Noir BAL 13003　'77年

とても素敵なジャケットにつつまれたリパイユ唯一の作品。彼らの音の部分部分からは時々、ジェネシス、ジェントル・ジャイアント、アンジュといったグループの影響が見え隠れするが、それはこの作品の内容を伝える上であまり重要ではない。彼らは様々なアコースティック楽器を多用し、それがエレクトリック楽器と実に程良く溶け合っている。そして伝統性を重視し、鮮明なる場面展開を聴かせる曲創り及び構成力も見事だ。しかし彼らのこの作品を語る上で特に忘れてならないのは、メンバー個々の表現能力が極めて高い、という点である。それは彼らが器用である、と評しているのではもちろんない。対して言うならば、彼らは音楽を知っている、という事だ。故に安定した内容の作品となっている。（城元）



SANDROSE
Sandrose

LP/Polydor 2393 030　'73年
CD/Musea FGBG 4003

ジャン・ピエール・アラーセンとkbのアンリ・ガルラの双頭グループと思しきサンドローズの唯一のアルバム。共に元エデン・ローズのメンバーであるが、そこではガルラの音楽性が強く反映されていた。しかし、このアルバムになると、ローズを前面に押し出そうとして、アラーセン本人が前面に出てしまったのである。シャウトするローズのヴォーカル（英語で歌ってる）と、ブレイクの後に出てくるメロトロンの嵐、さらにアラーセンのたくみなギターが絡み合う様は典型的なシンフォニック・ロックだ。多少古い感じは否めないが、時代を超越した素晴らしさがここにはある。この前後、アラーセンは幾つかのアルバムに参加しているが、このアルバムが第一絶頂期の頂点を極める作品であろう。（中藤）



SKRYVANIA
Skryvania

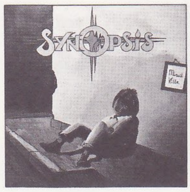
LP/DMR 001　'78年
CD/Musea FGBG 4011

'78年に自主制作の限定300枚でリリースされたこのSKRYVANIA唯一のアルバムは制作されたのがベルギーだった為、当初彼らもベルギーのグループだと思われていたがその後明白になった通りれっきとしたフランスのグループである。このアルバムで聴くことの出来る彼らのサウンドは、編成の特徴でもある多彩なダブル・キーボードと力強いギターを中心としその上にヴァイオリンも効果的に使用した多種多様に変化しながらグイグイと畳み掛けてくるもので、技術的には完璧とは言えないが我々を魅了するに充分なものを聴かせてくれている。本作はムゼアよりCD化もされておりその際ボーナス・トラックとして未発表曲などと共にTV局でのスタジオ・ライヴで演奏したイエス、ジェネシスのカヴァー（抜粋）も収録されている。（島村）



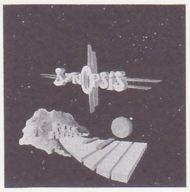
STEP AHEAD
Step Ahead
LP/RCA PL 37604　'82年
CD/Musea FGBG 4037

このステップ・アヘッドというグループはフランスのグループと言うには、良い意味に於いて、あまりにインターナショナルな音作りのアルバムだ。イエスのジョン・アンダーソンを意識するが如く歌われる英詞による美しいヴォーカル・ラインといい、縦横無尽に飛び交うセンス溢れるギター・ワークといい、流れる様なシンセ&ピアノのキラめくばかりの構成力といい、どれを取ってみても超一級品。これだけのセンスとテクニックの演奏を、抜群の作曲と構成によって全編に渡り聞かせてくれるのだから、もう。フランス臭さは無いが、このアルバムは、'80年代のプログレの中で、稀に見る大傑作アルバムである。なお、このLPからのカットのプロモーション用の12インチ・シングルがある。　(Numero Ueno)



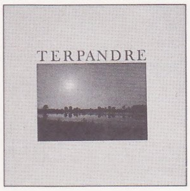
SYNOPSIS
Minuit Ville
LP/SRH 351 357　'79年

2nd LP「Gamme」が輸入され評判になってからもうすでにかなりの時間が経つ。'70年後半にかけてからのフレンチ・ロックが紹介される先がけともなったレコードだったとも記憶する。このデビュー作は、ついに輸入されることなく終ってしまい、入手も難しいらしい。メンバーは2ndとはヴォーカリストとベーシストがちがっており、演奏も粗削りなところが感じられる。まとまりすぎて少し個性に欠けていた2ndに比べると、その未完成なところが、却って、われわれには魅力的に聴えるから不思議だ。作曲は全曲、Christian Bolze, Hoff Christianによるもので曲の傾向は2nd LPとほとんど変わらないとはいえ、印象的なメロディが出現する。一番のいい例はクラシカルなイントロで始まるA②で、泣きのメロディを奏でるギターがひたすら美しい。　(吉瀬)



SYNOPSIS
Gamme
LP/FLVM 3026　'80年

'70年代末以降、フランスのシンフォニック・ロックはロックの表舞台から徐々に姿を消していった。しかし、その裏側では現在に至るまで数多くの作品が自主製作盤として、若しくは超マイナー・レーベルからリリースされている。アシントヤ、イカール、ダトゥラ、ネオ、ウリュドらの作品はそれらを代表するものである。シノプシスもこうしたグループの1つであり、注目に値する2枚のアルバムを発表している。本作は「Minuit Ville」に続く彼らの2ndアルバムで、そのサウンドは巧みに構成された繊細かつまとまりのあるものである。延びのある高音を活かしたヴォーカルとセンス溢れるキーボードが印象的である。シンプルなシンフォニック・ロックであるが味わいのある作品と言える。　(賀川)



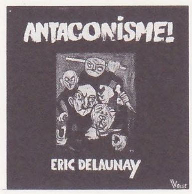
TERPANDRE
Terpandre
LP/Dionysos DI 3003　'80年

'80年代初期のフレンチ・ロック・シーンの中でもARACHNOIDと並び、ずばぬけた音楽性を持っているのはこのTEREPANDREをおいて他にあるまい。テクニック的には目新しくも、すごいというわけでもないにかかわらず、彼らの作り出す音楽は輝くばかりの叙情性であふれている。2人の織りなすピアノ、メロトロン、シンセサイザーのキーボード群がサウンドの中心でA面では静的要素が強く、特にA②のメロトロンが雄大に響き渡るところは、その手のマニアとならずとも涙ものであろう。B面は6人のメンバーが一体となったジャズ・ロック的傾向が強い、攻撃的な演奏も聴くことができる。その中にも、叙情的なところも忘れず取り入れ、曲を効果的に盛り上げている。VORTEXとの交流が深い事が知られている。　(吉瀬)



THALASSA
Suffer And Misery
LP/PS 5037　'82年

'78年頃から凋落の道をたどり始めたイタリア・プログレ界とは対照的に、フランスのシーンは'70年代終盤から'80年代にかけて多数の好作品を輩出した。'82年発表の本作もその中の一枚である。典型的なジェネシス・スタイル。タイトなパートはほとんど見受けられず、美しい音色のキーボード系を中心に、持ち前のセンスの良さで透明感溢れるシンフォニック・ワールドを構築している。若干新し目の音作りであるがシンフォニック・ファンには一聴の価値がある作品である。ただ、マリリオン以降のバンドに共通して言える強烈な個性の無さ、英語で歌われていることによる無国籍的な印象を嫌うリスナーにとっては少々不満が残るかも知れない。なお彼ら自身も作品内容が気に入らず市場からレコードを回収してしまっている。　(江田)



ERIC DELAUNAY
Antagonisme !
LP/Vogue 574021　'80年

デビュウ作が好評を博したTIEMKOのドラマー、エリック・ドゥロネイがグループ結成以前に発表したソロ・アルバム。TIEMKOのアルバムで聴くことのできたリズム・パターンは既に本作品で完成していたと言える。力強く躍動感溢れるリズムを受けてギター、キーボードが軽快なソロを展開している。4人のメンバーのアンサンブルも良く、グループが一丸となってのたたみかけるような演奏は聴く者を圧倒する。知名度こそ低いものの、高い完成度を誇る作品であり、フレンチ・プログレッシヴ・ロック・シーンの奥深さを痛感させる1枚である。　(賀川)



TIEMKO
Espace Fini
L P/FGBG 2025　'89年

Musca側が事前アナウンスに力を入れていた事もあり、TIEMKOの1stリリースはファン注目の中で行われた。成程、緻密に練られた展開といい、幅広い素養を感じさせる各メンバーの音楽性や演奏力といい、一朝一夕には出来上がらないクオリティの高さを誇っている。J.J.Toussaint（key)、E.Delaunay（ds）がディジタル楽器を、R. Chavidan(g)がモデュレーション系のエフェクターを重用している事と、ベースレスのトリオ編成が生む独特の質感は彼らの個性となっている反面、量感という点ではやや物足りないという事実をどう見るか。いずれにせよ高次元の話ではあり、「硬派系シンフォ」または「シンフォニック・チェンバー」というべき貴重な存在。全曲粒揃いというのもこの1stの魅力。（山田）



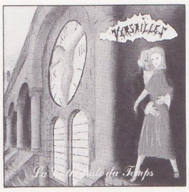
TIEMKO
Océan
CD/Musea FGBG 4013　'90年

ティアンコのセカンド。デビュウ作の完成度が高かったため、本作品に対する大きな期待とともに多少の不安もあったが、果たして、不安は杞憂にすぎなかった。前作の延長線上にある音作りであるが、曲作り、リズム、演奏等がより複雑になり高い完成度を誇っている。キーボード、ギター、各種パーカッションの３人とは思えない厚味のあるサウンドで、各人のソロを前面に出した演奏と三人が一体となった演奏を巧みに組合わせ、ゆったりとしたものからたたみかけるようなスピーディなものまで変化に富んだ展開となっている。時代の差もあり、知名度的には遠く及ばないものの、音楽自体のレヴェルでは'70年代の仏シーンの一流グループと肩を並べるところまで来ていることを感じさせる力作である。（賀川）



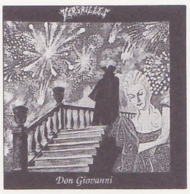
TIEMKO
Parade
CD/Musea FGBG 4057　'92年

３作目。楽曲の面白さなら前作を、音の厚み・荘厳さでは本作か。このバンドの特徴は、奇数・偶数拍の切りかえし、公倍数リズムなどにもあるが、決定的なのはそのスケール感覚である。明解な旋法的プログレッションでもなく、オクターブ12音11音だったり、主旋律（無理に設定したとして）だけ抽出すると意図的なデタラメに聴こえる類のものである。弦楽器奏者はロング・ヴィブラートをかけづらく、バックにもまわれない。にもかかわらず、尋常ならざる音の厚みから、ある種の叙情性すら生み出している。ドラマーはさすがにベテラン、スネアに依存することなくリズムをキープしており、エドルスなどより一枚も二枚上。⑧⑨の唐突な情感も捨てがたい。（ミワ）



VERSAILLES
La Cathédrale du Temps
CD/Musea FGBG 4025　'90年

ヴェルサイユの１作目。次作からの出来がよく、ほとんど注目を浴びなかった作品であるが、典形的なムゼア・タイプのシンフォニック・ロックを聴くことができる。メンバーは４人。ギターとフルートを兼任するヴォーカル、ドラム、ベース、キーボードという編成である。音色豊富なキーボードのバッキング、メロディアスなギター、多分にアンジュやモナ・リザの影響が見えるシアトリカル・ヴォーカル。１曲の中で細かな展開をつなぎあわせていく手法には好感が持てる。しかし、技術的には難を問われるべき点も多く、極立った印象的なメロディも不足しているように思われる。唯一、タイトル曲の後半は非常にドラマチックかつアトラクティヴで、このテイストが次作へ受け継がれていくことになる。（ミワ）



VERSAILLES
Don Giovanni
CD/Musea FGBG 4056　'92年

ムゼアの4000番台中25番目にラインナップされながら、さして耳目を集めなかったヴェルサイユ。本作は全編に渡り、'70年代の典型的フレンチ・シンフォニック・サウンドが横溢しており、アンジュからの影響は難なく指摘できる。一部にM・ローゼンバッハ、P・フロイドの旋律まで見え隠れし、彼らの音楽的背景は余人の言及を待たない。さまざまなアイディアを惜しみなく繰り出して大曲を構成する手法に、ある種の情熱も読み取れて小気味よい。中でもキーボードの音色の豊かさは、冒頭から最終曲のオーケストレーションに至るまで、往年の強者バンドのそれを見事に消化吸収していて頼もしい。ただ、バンド全体のリズム感の拙さ、ギタリストの技量不足などは、目を覆うべきものがあり、逆に楽曲の出来のよさがそれらを補って余りあるといえる。（ミワ）



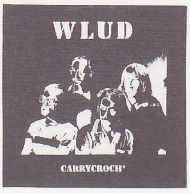
VERSAILLES
Le Trésor De Valliesres
CD/Musea FGBG 4103　'94年

前作と同レベルの内容に思う。リズムで骨をつくるというよりは、音の色彩感でモザイク風に曲を形造るあたり、フランスらしいバンドだ。しかも大道芸・大衆芸能ふうの雑っぽさを取り込むような所もあって、遂々アンジュあたりの影響もあるのかな、とも思う。一曲目など少し音を詰め込み過ぎに感じるが、それはロックのリズムが通っていないからだろう。２曲目以後の間を持った部分とヴォーカルのアクの強さ等は、確かにアンジュ張り。もう少し全体にテーマを明確にした構成力がつくといいのかもしれない。アイデアが豊富とは言えそう。（松本）



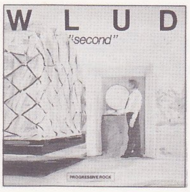
VISITORS
Visitors
ＬＰ/Decca 278.049 '74年
CD/Musea FGBG 4106

ヴィジターズという名前のグループは世界中に幾つかあるが、これはフランスの'74年に唯一のアルバムを残したグループ。ロックウッド兄弟の名前がクレジットされている他、アンドレ・チェカレリらしい顔写真もみることができる。おそらくロックウッドとしてはかなり初期の録音と思われる。フォルムラ・トレのファーストの１曲目、あるいはブリティッシュ・ロック・ファンにはグレイシャスのアレンジでも知られるミサ曲〝怒りの日〟で幕をあける本アルバムは、フランスの'74年という時期を考えるなら、かなり高水準のシンフォニック・ヘヴィ・ロックであるといえる。ロックウッドのヴァイオリンが光っている。宇宙からの探訪者を一大テーマにしたスケールの大きなトータル的処理がなされている。（山崎）



WLUD
Carrycroch
ＬＰ/Omega Studio OM 67005 '78年

'70年代末から'80年代前半のフレンチ・シンフォニック・ロックは、自主製作の時代だった。その代表格というと、ASIA MINOR,TERPANDRE,etcになるが、総じてシンフォニックと言っても熱のひいた音をしている。ANGEタイプの物語を描くある意味で熱血型の音楽は、ほとんど見当らない。たいていはインスト指向、しかも音はさっぱりしている。WLUDもASIA MINORあたりの、そうした傾向の中にあるものだ。シンフォニックというほど構成をち密に考え抜いたものではなく、もっと〝流す〟ムードが強い。が、これが仲々うまい。自主製作の弱さはあるものの、センスがあるのだろう。さっぱりしているが、それはただ単に流れるものでもなく、おしつけがましいメロディにベタ塗りされるものでもない。（松本）



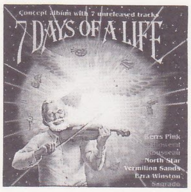
WLUD
"Second"
ＬＰ/Omega Studio OM 67010 '79年

ジャケ表に〝Progressive Rock〟とわざわざジャンルを標示してしまう彼等の素人意識と、そうせざるを得ない当時のフランスの（フランスに限らないが）そうした音楽への無関心。どちらも悲しい話だが、WLUDの方は前作よりもよくなっている。傾向は相変わらずだが、キーボード・ソロ等のフィーチャーや、曲展開等の一ひねり等、アクセントがたくさんついて変化がある。もともと印象に焼きつくようなメロディを書く（書ける？）バンドではなく、うっすらとそうした類の感触を漂わせ、それを比較的小刻みで細やかな演奏と音色でつくり出す、そういうバンドなのでインパクトはないが、なんとなくアピールするタイプだと思う。この時期のこの手では、良質の２作という気がする。（松本）



V. A.
Enchantement
CD/Musea FGBG 4006 '90年
/Baillemont CD 912

ムゼア周辺のシンフォニック・ロック系アーティスト12組を収録したコンピレーション・アルバム。このアルバムでしか聴けない貴重な音源ばかりで、収録曲のクォリティも非常に高く、ファン必携の作品である。ＣＤ化にあたってEDHELS、J.P.Boffo等が追加収録されている。特にBoffoの曲は沈黙期間の作品だけに資料的にも興味深い。ANGE、ATOLL、PULSAR等の大御所の充実した演奏は当然としても、並べて違和感のないRAISON DE PLUS、ANOXIE、SOMBRE REPTILEと言った全くの無名のグループの楽曲、高い実力には全く驚かされる。ブックレットに詳しい紹介もされており、とても親切。'80年代後半のムゼア・シンフォニック・ロックのサンプラー・カタログ的なアルバム。（津田）



V. A.
Seven Days Of A Life
CD/Musea FGBG 4073 '93年

Museaのアンソロジー。収録されているのは７バンド。すべてコンセプトに基づいた未発表曲であり、SAGRADOだけは本作のために作曲・録音したテイクを3rdに収録。どのバンドも総じて出来のよい曲を提供しており、ROUSSEAU, NORTH STAR、EZRA WINSTONあたりは、本作収録曲をベスト・チューンと見る向きもあろう。全篇、非常にバラエティ豊かな内容で現行のシンフォニック・シーンが決して類似型ポンプで飽和しているわけではないと認識できる。各バンドの出身国はノルウェー、仏、独、米、日、伊、そしてブラジル。すべて異なる言語圏のバンドなのである。巨大資本もマス・メディアも媒介とせず、シンフォニックという共通言語だけで集結した音楽家たちがここにいる。（ミワ）



V. A.
Ugum Part II
CD/MSI UGU 0019 '93年

UGUMプロダクションのオムニバスCD。CASTANARCやDEYSSの新曲が収録されているのでファンの関心を魅くと思う。他に夢幻、ÉCLAT、EURHYBIA、PENDRAGON等、計８アーティストを収録。どれもアルバム未収録、テイク違い、新曲となっている。CASTANARCは「Journey〜」とは違ってニュー・エイジ・ミュージック路線になり、変化が読める。DEYSSの方はと言うとギター・ソロをメインにした幾分ハードなメロディアス路線。こちらもジェネシスの亜流色は消えてやはり変わりつつあるようだ。夢幻はシングル曲〝Snow Dream〟を収録。（松本）

FRENCH AVANT-GARDE MUSIC

FRENCH AVANT-GARDE MUSIC

フレンチ・アヴァン・ミュージックの底流

□福島恵一

1.コンテクスト

この文章に続くカタログに掲げられた音楽が成立してくる基盤となったコンテクストについて語ろう。個々のアーティストの活動に先立つ「交通」のあり様と、それらをひとつに語り得る「場」の成立について。

●5月革命(カルチェ・ラタン)



例えばイギリスなら、ジャズ/ブルース/ロック・シーンの蜜月関係をはじめとして、実験音楽やライヴ・エレクトロニクス(ケージ)、さらにはテープ・ディレイやテープ・ループ(テリー・ライリー、バロウズ)とサイケデリック、フリー・ミュージックと初期電子音楽、トラッドと中世音楽(マンロウたち)、またカリブ海からの移民たちがもたらした異文化....と、様々な要素の混淆と相互影響から語り始めることとなるだろう。もしドイツならば、ウルトラ・ロマンティックなゲルマン神秘主義と、徹底して数学的な即物主義に両手をかけたシュトックハウゼンのお膝元(ケルン)で、フリー・ジャズと現代音楽が、電子音楽とポップが握手を交わした場面から、コミューン主義者が溢れ、ドゥチュケが逮捕されたベルリン(64年バークレ→67年ベルリン→68年ナンテール/ソルボンヌという線を引くことができる)を横目で眺めつつ、ブレヒト/アイスラーの方へと歩いていくことになるだろう。そしてフランスなら....。

まず、以前/以後を分かつひとつの切断/断層をもたらした〈五月〉の体験から始めることとしよう。

2.〈五月〉という季節

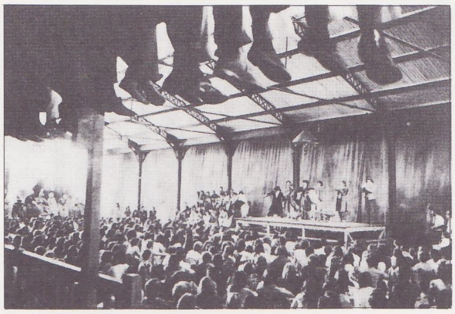
〈五月〉とは何であったのかをひとことで言うことはできない(いまだに、その評価を巡っては論争が続いている)。これに先立つ様々な事件はあるにせよ、ともかくも1968年5月3日のカルチェ・ラタンにおける学生蜂起に始まり、連日続いた数万人規模の抗議集会とデモ、警官隊との衝突を経て、ついには共感した労働者たちの一千万人規模のストライキによって、首相ポンピドーや大統領ド・ゴールを振り回し、西欧で最も強力なキリスト教中央集権国家をぎりぎりまで追い詰めながら、結局権力は奪えず(5月30日、国民議会の解散と総選挙を確約したド・ゴールのラジオ演説により、事態は確実に収拾へと向かった)、事後的に獲得した制度改革も〈五月〉の規模からすれば微々たるものにとどまった(政治的事件ではなく、社会学的事件だと言われるゆえんである)。

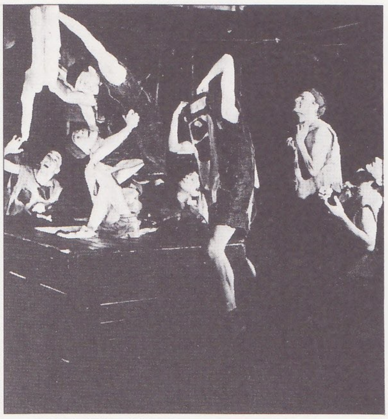


●ゴダール『中国女』

しかし〈五月〉は、彼らの掲げたパロールの解放、身体(とりわけ性の)の復権、欲望の肯定、直接的コミュニケーション、文化革命といった理念と実践、そして何よりも日常の厚い皮を食い破って噴出した凶々しい力による制度の侵犯、価値体系の転倒、秩序の崩壊といったカーニヴァル的体験を通じて、個々の表現ジャンルにおいて既に様々な実験(個と集団の新たな関係性の探求、ジャンルの越境、身体性の復権等)を進めていた探求者たちに対し、啓示的とも言える不可逆な体験を与えた。

例えば、当時実際にナンテールの女子学生だったアンヌ・ヴィアゼムスキーたちが繰り広げる


●太陽劇団「1789年」

●グロトフスキー『アクロポリス』


「マルクス・レーニンごっこ」をフィルムに収めた『中国女』によって、図らずも〈五月〉を予言することとなったゴダールは、J＝P・ゴランと「ジガ・ヴェルトフ集団」を結成する契機となった〈五月〉を、自らの不可逆な断層と認めている。

3.都市＝演劇

都市の中心に突如として噴出した非日常的時間。はがされた敷石（その下に広がる砂地）と築かれたバリケード（遠くよみがえる市街戦の記憶）。壁という壁を埋め尽くす落書き。パロールの沸騰。5月13日の示威行進の間、絞首台に吊された一体の人形のまわりの、白い、そして血塗られた能面。そして無数のプラカードや掲示.....。〈五月〉とは演劇的体験そのものにほかならなかった。それゆえ、〈五月〉に総体として最も敏感に反応した表現ジャンルが演劇だったことに何の不思議もなかろう。

その伏線として、66年のパリはオデオン座で催された諸国家演劇祭における、アメリカ出身のリヴィング・シアターと、ポーランド出身のグロトフスキー率いる演劇実験室という、もはや伝説的な2劇団の公演を挙げることができよう。前―古典的所作による近代演劇の枠組の解体、肉体言語の横溢.... 激烈な身体的強度が演劇シーンを刺し貫き、テクストを破り捨て（劇評家ベルナール・ドルトは、さらにアラバールらネオ・バロック派や演劇を舞踏と結びつけたモーリス・ベジャールをも踏まえて、67年をテクスト疲弊の年/「肉体のミサ」の開始された年と呼んでいる）、忘却の淵に沈んでいたアルトーの名を呼び覚ます（「演劇とその分身」のポケット版化は66年）。そして〈五月〉が走らせた断層が、アリアーヌ・ムヌシュキン率いる太陽劇団による革命劇『1789年』の登場を準備する。

4.祝祭/革命

「集団性としての共同生活の問題、「テクスト」と俳優たちの「パロール」との関係の問い直し、就中、この集団の演劇的原理の特性というべき俳優演技の「即興性」の徹底化を目指す方向。そして肝心の主題論領域でいうと、すぐれて60年代的な問題意識たる≪革命≫と民衆的な想像空間の祖型たる≪祝祭≫との融合形式としての演劇（括弧つきの「民衆演劇」）、もしくはわれわれのタームでいう「革命の演劇」の問題」（佐伯隆



ALBERT AYLER
Nuits De La Fondation Maeght（vol.1〜2）
LP/Shandar（U）83503〜4
録音'70年

彼の発するヴァイブレーションが、メンバーの共振／交感による乱反射と増幅を通じて、グループ・サウンドの大きなうねりを生み出していくという、『スピリッツ・リジョイス』や『グリニッチ・ヴィレッジ』における汎ヴィブラート主義的な音楽の在り方は既にない。アイラーは哀しい程に孤独であり、それがゆえに壊れそうに優しい。彼のヴァイブレーションはメンバーに共有されることなく、楽器を震わせた後すぐ、賛美歌のように天へと昇っていってしまう。祈りのかたちをした音楽。演奏の現場において創出すべき共同性と、内なる個人的なファンタジーを結び付ける方法論を、彼は共振以外についぞ持たなかった。このコンサートの５ヶ月後、彼はNYイースト・リヴァーに死体となって浮いていた。



SUN RA
Nuits De La Fondation Maeght（vol.1〜2）
LP/Shandar（U）83505〜6
録音'70年

RIOから再発されたvol.1はB面の空間を巨大な熊手で掻き取るような20分近いムーグ・ソロで知られていよう（ジャケットはvol.2の方）。古代エジプトの祭司のように飾り立てたサン・ラ（彼は異星から来たと自称していた）を中心に、歌手兼ダンサー３人を含む21人編成による圧倒的なライヴ。サン・ラの特徴である誇大妄想めいた神話的想像力や、時には現代音楽的でもあるスペイシーなサウンド・テクスチャーも、ヴォーカルなサウンドの爆発やノスタルジック・ジャズの香りとともに、黒人文化の基層に太く根差しており、サウンドのみならず、照明や舞台美術、衣装、ダンス、自主レーベルによるオルタナティヴなメディア戦略（レコードやペーパーの制作）を含めた文化の総体性を常に問うている。


●ドン・チェリー


●アンソニー・ブラクストン


●アート・アンサンブル・オヴ・シカゴ

幸『道化と革命 太陽劇団の日々』)

これらのモチーフは、〈五月〉と「コルトレーンの死」(67年7月)というシンボリックな切断の同時代性(気分としての革命/祝祭が色褪せてきた時にこそ、)を介して、そのまま当時のフリー・ジャズが直面していた課題へと変奏しうる。コルトレーンの死後、いよいよ明らかとなったフリー・ジャズ共同体の崩壊と個々の演奏者の析出に対し、個と集団の新たな関係性、ソロと集団即興の構造性をいかに構築していくか..と。そして、それこそは「グレート・ブラック・ミュージック」を標榜するアート・アンサンブル・オヴ・シカゴ(AEC)が、(歌ではない)声の活用及び楽器のヴォーカライズ、演劇/政治の導入、多楽器主義や様々なリトル・インストゥルメンツの使用によるサウンド・パレットの拡大、破壊的なユーモア、ソロ演奏の構造探求、カーニヴァル的な構成等を駆使して、トータルな探求を推し進めた方向性であった。



CECIL TAYLOR
Nuits De La Fondation Maeght(vol.1〜3)
LP/Shandar(U)83507〜9
録音'69年

『ユニット・ストラクチャーズ』『コンキスタドール』(66年)以降73年の来日公演まで録音が少なく、このライヴは貴重だ。2本のサックスが竜巻のような絡みによってアイラー的なヴァイブレーションを呼び込むのに対し、テイラーのピアノは巻き上げられた砂塵のようにきらきらと螺旋状に巡りながら、逆にその運動が引き起こす渦巻きによって2本のサックスをキリキリ舞いさせる。先に掲げた作品に聴ける揺るぎない構築性に比べ、より身体性が突出することによって(テイラーはヴォイスも使用している)、流体力学的な協動性が全面に出ている。録音の際に「互いに聴き合えるように」とメンバーを寄り添わせて配置していた頃とは、違った共同体性が芽生えているように感じられる。



DON CHERRY
"Mu"First Part
LP/BYG 529.301
録音'69年

オーネット・コールマンの元を離れて世界を巡り、代名詞となったポケット・トランペットのみならず、各種フルートの演奏を通じて民族音楽の探求を進めた成果を、ヨーロッパ・オールスター+ソニー・シャーロック(g)、チェリーの9人編成による『永遠のリズム』(68年)に導入されたガムランや、本作のインディアン・フルートやバンブー・フルートの音色、スウェーデンに居を移してからのコミューン的な「オーガニック・ソサエティ」(71〜72年)の民族音楽的セッションに聴き取ることができる。とりわけエド・ブラックウェル(dr)とのデュオによる本作は、簡素でスピリチュアルな明澄さをたたえながら、パントマイムの応酬のような豊饒な音の身振りを介した交感に満ち満ちている。

5.BYG/SHANDAR

(AACMの組織戦略の一環として)家財道具を売り払って渡仏したAECやアンソニー・ブラクストン・トリオをはじめ、パリ在住のジャズ・ミュージシャンをサラヴァ・スタジオに集めての集中録音を経てリリースされたBYGアクチュエル・シリーズは、シャンダールとともに、当時のフランスの文字通りアクチュエルなシーンの在り様を象徴していると言ってよい。最終的に50枚を超えることとなったラインナップは、米仏のフリー・ジャズを中心に、実験的なロック(ゴング、アムソン等)、現代音楽(ムジカ・エレットロニカ・ヴィヴァ、GERM、ミッシェル・ピュイグ等)に及んでおり、一方、後発のシャンダールのディスコグラフィも、米仏のフリー・ジャズとミニマル・ミュージック(例の4人組に加えヤング、ライリーの師匠であるインド古典声楽家パンディト・プラン・ナート、さらにシャルルマーニュ・パレスタン、ラグナー・グリッペほかフランス産反復音楽を含む)を中心としていた。

6.ミニマル・ミュージック

ミニマル・ミュージックは、旧来のロマン主義的/弁証法的な音楽モデルに対して、非表象的なプロセス、始まりも終わり=目的もない浮遊、原因も結果もない多方向的な音の動きと捉えることができる。これは完成された作品ではなく、聴者は自らの知覚によって能動的に体験の構築を行うことになる(と同

時に、想起と予測に基づく方向性を持った聴取はもはや不適当となり、無目的な弱い聴取や反復の魔術に陶酔を求める刹那的な聴取に席を譲ることにもなるのだが)。

「音楽は純粋なサウンド・イベントとして、劇的構造のないアクトとして聴かれなくてはならない」(フィリップ・グラス)

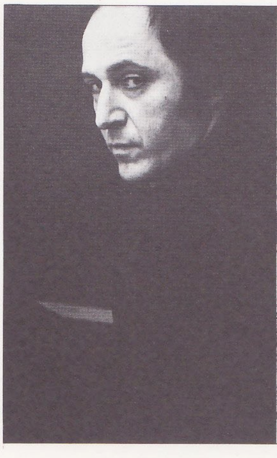
しかし、瞑想的なヤングやユートピックなライリーが、ここと は別の時間の知覚を目指したように(前者は永遠の静止のただ中にうごめく差異を、後者はミクロな運動の累積の彼方に振動する建築物を)、インド音楽に範を得たリズムの加算構造に基づく最もシステマティックなグラスの場合でも、『ノース・スター』(77年)以前のエレクトリック・オルガンの冷たく均質で無表情な音色を用いて、微細な差異の構築をコンセプチュアルに示した作品群においては、簡単な幾つかの初期条件の組み合わせから生み出された音が、時間的なズレや空間的な偏り(それらは実は同じ偏差なのだが)によって、思いがけない多様性を生みだし、またそれらの重ね合わせによって爆発的な流動性を獲得する時、果して聴者は、そこに開ける別世界を目撃しないだろうか。

7.フレンチ・フリー・ジャズ

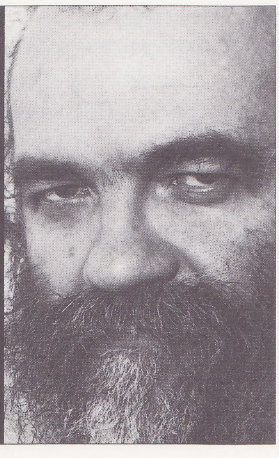
もちろんBYG以前から、フランスにフリー・ジャズは存在していた。フランソワ・テュスク(p)、J-F・ジェニー・クラーク(b)、アルド・ロマーノ(dr)、ベルナール・ヴィテ(tp)により、フランス最初のフリー・ジャズ・グループが結成されたのは65年のことであり、翌年にはシーン最初の成果である『フリー・ジャズ』(カタログ参照)が録音されることになる。

そして69年にはAECたちが渡仏し、仏ジャズ・シーンとの直接的な交通が始まる。また参考盤として掲げたように、69年から70年にかけて、セシル・テイラー、サン・ラ&アーケストラ、アルバート・アイラーが、マグー財団の招聘によりコンサートを行っている。AACMと同様の機能をもつミュージシャンによる自主組織ワークショップ・ド・リヨンの誕生等を除いて(これだって影響なんかじゃなく、単なる同時代現象かもしれない)、彼らが与えた直接的な影響について検証することはできないが、〈五月〉後のシーンに対し、先に述べたような個と集団性(共同体)の問題を鋭く提起したであろうことが推察される。

●スティーヴ・ライヒ



●ラモンテ・ヤング



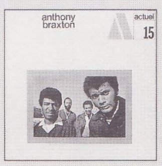
●フィリップ・グラス





ART ENSEMBLE OF CHICAGO
A.A.C.M., Great Black Music
A Jackson In Your House
LP/BYG 529.302
録音'69年

レスター・ボウイ(tp,per)、ロスコー・ミッチェル(reeds,per)、ジョセフ・ジャーマン(reeds,per)、マラカイ・フェイヴァース(b,per)によるAEC名義の初録音である本作は、黒い哄笑に満ち満ちている。むしろ中国的だったり、シャンソン風だったりと異化されたメロディが、声とデキシーランド・ジャズの集団演奏原理を通して、ほとんど動物的な野蛮な力の噴出により肉体化され、同時にパロディックな対象化によって突き放される。この突き放しと呼び戻しの揺さぶり(あるいは耳をつんざくフリーキーな咆吼の手前をリリカルなヴァイブが横切っていくといった極端な対比)によって、音楽は無理やりに息を吹き込まれる。音の身振りによる見えない演劇。一連のパリ録音では『苦悩の人々』も必聴/



ANTHONY BRAXTON
Anthony Braxton
LP/BYG 529.315
録音'69年

ここでのブラクストン(reeds)、リーオ・スミス(tp)、リロイ・ジェンキンス(vn)、スティーヴ・マッコール(dr)の4人による演奏は、ビートを意識的に排除し、ほとんど室内楽的と言うべき緻密さによって、AECの提示する喧噪に沸き立つ空間(沈黙すらざわめきと哄笑で満たされる)とは対極的な、広々とした空間の中に配置された多彩な音色による、注意深くそばだてられた耳のためのミクロな劇場を繰り広げる。この「理知的」な繊細さは、AECへの絶賛とは裏腹に賛否両論を巻き起こす。しかし、多楽器主義や重苦しいアンサンブルの手前/背後を横切っていく小さな音の軽やかな動きが、演奏にミステリアスな奥行きを与えているといった空間的な含みによる演劇的対比等、両者の共通点は多い。



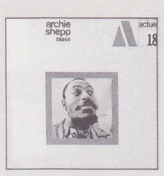
●サン・ラ



●アルバート・アイラー

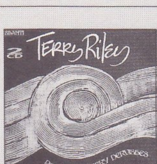
●サン・ラ&アーケストラ





ARCHIE SHEPP
Blase
LP/BYG 529.318
録音'69年

タイトル通りのブルース集。AECのメンバーやディヴ・バレル(p)、フィリー・ジョー・ジョーンズ(dr)/等が参加も目を引くが、何といっても本作の目玉は黒人女性ヴォーカリストのジーン・リーだろう。熱いハーモニカ・ソロとスキャットで絡むA①に続き、ベースとピアノの凍るように冷ややかな繰り返しを背景に、天啓を得たかのように静かに語りだし、予言者の崇高さを保ちながら、張り詰めた強度を秘めた詠唱へと至る声は、賛美歌を思わせるB①においてトランペットとテナー・サックスを従えて、ゆっくりと巡りながら空高く昇り詰め、B②の寛いだジャズで再び地上へと降り立つ。シェップは「60年代ジャズの闘士」というべきミュージシャンであり、さらにエナジー溢れる演奏も多い。



TERRY RILEY
Persian Surgery Dervishes
LP/Shandar(U)83501~2
CD/New Tone NT 6715
録音'71年

シャンダール優先ということで本作を掲げたが、彼を聴くならばむしろ先行の『In C』や『A Rainbow In Curved Air』ということになろう。本作や続く『シュリ・キャメル』では水平にずれていく感じが強くなるのに対し、前2作では細かなちらつきが次第に濃度を増しながら、震えながらも屹立する構造物を築いていく様子が見て取れ、ラモンテ・ヤングとの対称性がわかる。当初、ライリーはテープ・ディレイやテープ・ループの実験を重ねており、欧州旅行中にデヴィッド・アレン(ゴング)と知り合い、彼に影響を与えたのは有名な話である。なおCD再発盤の音質は、MantraよりもNew Toneの方がよいようだ。

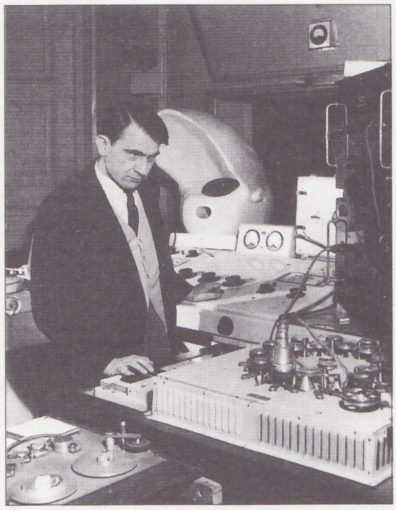
またアイラーは参考盤レヴューに述べたような状態であり、逆にそのことによって、彼の音楽を構成する諸要素と成り立たせている諸力が透けて見える。民族音楽と「アイラー的なもの」の結び付きの探求がフランスで積極的に進められたことと、このことはおそらく無関係ではない(「破壊者」アイラーのままでは、こうはいくまい)。

8.野生の耳(ミュージック・コンクレートとミュージック・ブリュット)

テープ・レコーダー発明以前の1948年、ピエール・シェフェールは様々な具体音をソノシートに刻んでは、その変形や重ね合わせに熱中していた。ミュージック・コンクレートは、この試行錯誤の中から「偶然に」(シェフェール自身の弁)生まれた。それは何よりも現実の文脈からデラシネされた音素材(オブジェ・ソノール)のブリコラージュから出発し、いきいきとした発見の驚きとともに進められる耳による探求であり、まさにこの点において、既に頭の中で(数学的に?)組み立てられた音響の実現である後発のドイツ電子音楽(アイメルトやシュトックハウゼン)と、シェフェール自身によって対比される。

自身を探求者として捉え、聴取により経験的にしか取り扱う術のないオブジェ・ソノールを分類・カタログ化する試みに取り組む彼をよそに、かつての協力者のうちピエール・アンリは、モーリス・ベジャールのバレー団との共同作業の中で専ら音の運動の探求に没頭し、一方リュック・フェラーリは、具体音にどうしても付随してしまう状況喚起的な性格を逆手に取った「逸話的音楽」のコンセプトにより、時にパロディックなメタ音楽の





●ピエール・シェフェール



●ピエール・アンリ



●リュク・フェラーリ

制作作業を続けた。

戦後も継続する12音音楽＝数学性の占領に対抗し、ドレミの外部に聴取にのみ基づく音楽を求め続けたシェフェールの同志は、むしろ精神病者や性格破綻者、囚人など、あらゆる種類の異端者と呼ばれるような人物たちによって制作された芸術的作品を「アール・ブリュット（生の芸術）」と名付けて称賛し、自ら収集し続けたアンフォルメルの画家ジャン・デュビュッフェではあるまいか（彼自身が各種楽器や雑多な非楽器を手当り次第に演奏し、コラージュした録音『ミュジーク・ブリュット（生の音楽）』が残っている。カタログ参照）。そこには共通して、未だ近代文明に去勢されず、人間の本性に潜む集合的創造力のざわめきを聴き取り得る「野生の耳」への憧憬が息づいているように思われる。

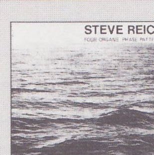
9.異教の空間/国家に抗する地域

ジョエル・レアンドルは自らのバックグラウンドを尋ねられて、こう答えている。「それは三つのフレーズに要約できます。南/労働者の家庭/ジプシーの子孫。あるいは地中海/労働の倫理/漂泊」すなわち彼女は抑圧/差別された周縁にあって、常に交通に身をさらす者だ。彼女は長い黒髪をなびかせながら、まるで魔女のように奥深い暗闇から凶々しい力を汲み上げる。またヴァランタン・クラストリエの『異端Heresie』と題された作品は、法皇とアルビジョア派/フランス中央政府とオクシタン文化の抗争を背景としながらも、「異端」を正統への反抗/ネガとしてではなく、抑圧されぬ交通/異種交配として描き出している。フランスという強力な中央集権国家に抗する地域ー



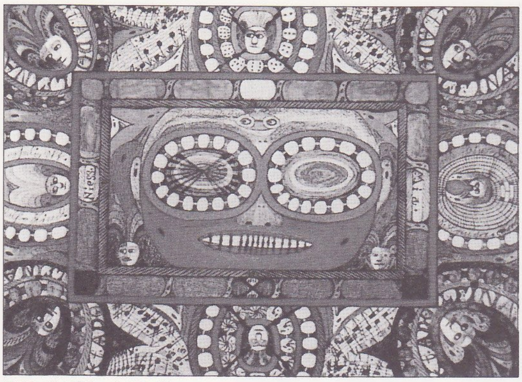
LA MONTE YOUNG
Theater Of Eternal Music
LP/Shandar(A)83510
録音'73年

自主盤『The Block Records』を別にすれば本作が初録音のはず。刻一刻の移り変わりの中に展開された永久革命論的なチューニングであるA面と、正弦波が延々と一本の線を描き続けるB面（共に40分弱）から成る。ヤングというと、すぐにドローン→瞑想→トリップと連想が進みがちだが、時間外構造たる周波数比率の設定として、普通は（演奏）時間の外に置かれるチューニングを、演奏時間の中に運動として置き直し、逆に永遠に続く一定波長の振動が満たす部屋の中を歩き回れば差音現象により音が変化して聞こえるという風に、彼の音楽では時間と空間の役割が入れ替わっていることに注目したい。なお彼のフルクサス参加や、彼のグループにジョン・ケイルとトニー・コンラッドがいたのは有名な事実。



STEVE REICH
Four Organs·Phase Patterns
LP/Shandar U83511 or SR10.005 '73年
CD/Robi Droli rdc5018 '94年

ライヒは、2本のテープの走行速度ズレから生じる位相の回転に着目した『イッツ・ゴナ・レイン』（65年）や『カム・アウト』（66年）から、『ピアノ・フェイズ』（67年）、『ドラミング』（70年）のように演奏者が漸次的にプロセスをずらしていく作品を経て、ユダヤ的な素材を扱い始める（『テヒリム』等）。本作（共に70年）は中期に属しながらも、マラカスの一定ビート上に、次第に引き伸ばされ長くなっていく4台の電気オルガンによる和音が堆積していく前者と、やはり4台の電気オルガンによる繰り返しが、互いを切り刻み、ズタズタに寸断された音の切端の集積と化しながらも、新たな結び付きを生み出していく後者が、鮮やかな対比を成している。なお前者の演奏にはP・グラスが参加している。


●「アール・ブリュット」の一例

ブルターニュ、バスク、コルシカ、カタロニア、オクシタニー。自らのアイデンティティを後生大事に抱えてうずくまる代わりに、むしろ交通の網の目（例えば地中海）へと解き放っていくこと。アラン・スティーベルやロジーナ・デ・ペイラ・エ・マルティナといった先鋭的なトラッド・ミュージシャンは、伝承文化に根差しながら、長い間そうした戦いを続けてきた。あるいは、ルイ・スクラヴィスやミシェル・ドネダをはじめ、南仏リヨンに集うARFI（想像的民族音楽探求協会）周辺のジャズ・ミュージシャンたち....「民衆」から離反したフリー・ジャズへの反省から、労働者のためのダンス音楽や革命歌をアジテーションや朗読を差し挟みながら演奏し、また地方の民俗音楽グループと共演したテュスクの試みは、ちょうど逆側（民俗音楽の側）からの試みというかたちで、より生産的にARFI周辺やSILEXレーベルの作品群に引き継がれているように思われる。

10.フレンチ・アヴァン・ミュージックの底流

ここまで紙幅を費やして私が述べ立ててきたことは、フレンチ・アヴァン・ミュジーク・シーンを構成するジャンルと、〈五月〉をはさんで、これらと熔融しあった関連・隣接ジャンル（演劇・映画等）は、先立つ諸力の交錯（その中には当然来訪者による影響も含まれる）を引き受けながら、卑語・雑言を含むパロールの解放、（とりわけ性に関する）身体性の復権、カーニヴァル的哄笑、グロテスク・リアリズム等を特徴とする野蛮で動物的な力の突然の噴出により、制度の侵犯、価値体系の転倒、秩序の崩壊をもたらし、都市の日常のただ中に革命／祝祭の時空間（それは逃れ難く〈五月〉の刻印を帯びている）を開く....という共通の方向性／同じ底流を有している点であった。

ミハイル・バフチンのラブレー分析にならって、それをカーニヴァル的な民衆文化の噴出とみなすこともできるだろう（様々な諸特徴はシンボリックに合致している）。とすれば、ここに採り挙げた音楽は、古典主義のリミットたるアヴァンギャルドなどではなく、より古い基層の間歇的な自己更新であるのかもしれない。これらが党派的な運動やエコールの形成に結びつかず（ミュジーク・セリエルは一大流派をつくりあげ、世界を席巻したのに）、挑発的な小グループ（グルプスキュール）の素早く身軽で突き刺すように鋭い運動と、それに刺激された大きな時代のうねりというかたちを取っているのも（それは〈五月〉と同じかたちだ）、それゆえだろうか。

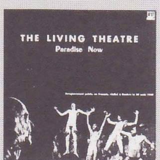
11.ブーレーズの不在

ここにはIRCAMの所長にしてコレージュ・ド・フランスの教授たるピエール・ブーレーズの名前が決定的に欠けている。彼の作曲家としての偉大な業績を知らぬ訳ではないが、あくまで先に述べた「こちら側」の観点に立った結果である（革命／祝祭うんぬんはともかく、彼をはずす点については、私と坂本理氏の意見は最初から一致した）。ブーレーズこそは、古典主義の極限としての前衛主義者（理論・実験の総合者かつ新しい美学の確立者にして、格式高い伝統の遺産相続人）であろう。その意味で、「こちら側」とは、言わば彼の不在によって区画される領域にほかならない。



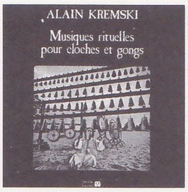
PHILIP GLASS
Solo Music
LP/Shandar(A)83515
録音'75年
CD/Elektra Nonesuch 7559-79326-2
'94年

現在では『コヤニスカッティ』や『サチャグラッハ』等、むしろ『ノース・スター』以降のポップな作品が人気のグラスだが、本文中にも述べたように、初期作品の核には「冷ややかな狂乱」とでも言うべきものが感じられ、いま聴いても充分にアヴァンギャルドな強度を堪能できる（少なくとも「反復」に関する限り、ピナスはグラスのエピゴーネンに過ぎない）。なおCDは、『Solo Music』と彼自身の設立したチャタム・スクエアからリリースされた『Music In Similar Motion／Music In Fifth』との2in1で、チャタム・スクエアから発表されたもうひとつの初期作品『Music With Changing Parts』も同時に再発されている（こちらも2LPが1CD）。



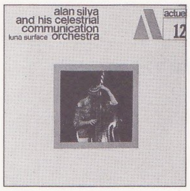
THE LIVING THEATRE
Paradise Now
LP/Nili N-201
録音'68年

リヴィング・シアターは47年に、画家ジュリアン・ベックとジュディス・マリナ夫妻によって結成された（当時彼は18歳、彼女は16歳だった）。文中に述べたように、66年にオデオン座で演じて話題となった『営倉』『アンチゴーヌ』に続く新作として、彼らは本作品を用意した。「われわれはパスポートなしで旅行することはできない／ われわれは金を使わずに生活することはできない／ われわれは服を着ないで町を歩くことはできない／....」と観客と並んで客席に座った俳優たちが耳元でささやき始め、ささやきは次第に大きな叫びとなり、ついには観客を交えての大合唱となる。68年アヴィニヨンの国際演劇祭では、本作品の路上無料公演を咎められ、上演を打ち切って退場してしまったという。



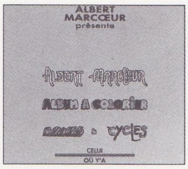
ALAIN KREMSKI
Musiques Rituelles Pour Cloches Et Gongs
LP/Auvidis　AV 4704　'79年

ナディア・ブーランジェ、ダリウス・ミヨー、オリヴィエ・メシアンに師事し、パリ国立音楽院を最優秀の成績で卒業したエリート作曲家による各種ゴングと鐘のみを用いたフランク・ペリー「ディープ・ピース」顔負けの瞑想音楽。打ち鳴らされた小鐘の、思いのほかまろやかな立ち上がりが、軽やかなさざ波となって眼前を通り過ぎていき、おぼろな残像からゆるやかな波紋がたちのぼるように同心円状に広がって、さざめき揺れ返しながら次第に解け合い、香るように空間を満たしていく(A面)。B面では、室内の気象をコントロールするかのような、低音ゴングのくぐもって長く尾をひく余韻を軸として、ところどころかがるように小鐘が配される。暗闇の中で空間にささやきかけるように行われる個人的儀式。（福島）



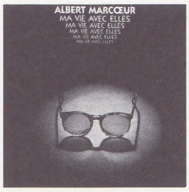
ALAN SILVA (AND HIS CELESTRIAL COMMUNICATION ORCHESTRA)
Luna Surface
LP/BYG 529.312　'69年

マルチ弦楽器奏者。NYにおける「ジャズの十月革命」('64年)に参加後、ビル・ディクソン(tp)との共同作業を継続しながら、セシル・テイラー、サン・ラ、サニー・マレイらのグループにベース奏者として参加する。ESPに吹き込んだ初リーダー作（録音'68年）にもうかがえたオーケストラ指向（7人編成）は、パリに活動拠点を移した後の本作において、弦楽器奏者4人を含む米仏混成の11人編成へと拡大を遂げている。弦の鋭い滑走音が、沸騰する集団即興に吹き上げられ、激しい対流を起こしたように乱高下する。この後、同じBYGに19人編成による伝説的なLP3枚組を録音。現在はI.A.C.P.で教鞭を執りながら、本オーケストラの指揮・運営に力を注いでいる（なおメンバーは全く異なる。別項参照)。（福島）



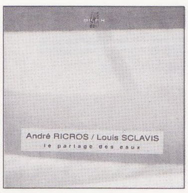
ALBERT MARCOEUR
Albert Marcoeur
Album À Colorier
Armes & Cycles
Celui Où Y'a Joseph
CD/Baillemont CD905
'74年、'76年、'79年、'84年

アルベール・マルクールが'74、'76、'79、'84年にリリースした4枚のアルバム（1st-4th）を4in2でCD化したもの。エトロン・フーとともにフレンチ・アヴァンギャルド・ロックの雄と言われ、フランスの「ザッパ」とも言われるマルクールであるが、彼のサウンドは決して難解ではない。変拍子主体の飛び跳ねるような演奏と早口の語りのようなヴォーカルに代表されるサウンドは確かにフリー・フォームで一風変わっているが、彼のとぼけた風貌のようにユーモラスであり、その奥に聴き所を秘めた知的なものである。ややあくの強さはあるものの、フランスならではエスプリを感じさせるポップなフリー・ミュージックである。（賀川）



ALBERT MARCOEUR
Ma Vie Avec Elles
CD/Baillemont CD 920　'90年

前作発表後の'85年から'89年にかけて録音された5枚目。今回もマルクールはヴォーカル他、サックス、キーボード、ベース、ドラム等、数多くの楽器を演奏している。内容的には従来の作品と同傾向にあり、曲ごとに録音時期、参加メンバーが異なるものの作品としての統一性が保たれている。女性ヴォーカル、今風のリズム等も使用されているが、シンプルかつキッチュ、ユーモラスでオリジナリティ溢れるサウンドの中に数多くの聴き所を持った音作りという基本姿勢は不変である。近時日本盤もリリースされて一部で注目を集めているパスカル・コムラードにも共通するポリシーを持ったフランスならではのサウンドであるが、マルクールの方が伝統的な意味でより音楽的とも言える。もつと注目されてよいミュージシャンである。（賀川）



ANDRÉ RICROS, LOUIS SCLAVIS
Le Partage Des Eaux
CD/Silex Y225003　'89年

アンドレ・リクロスはトラッド畑の人かと思われるが不明。むしろバックも含めて考えるとスクラヴィス・グループとの共作とも言えるが、もう一人正体不明のアラン・ジルベールもアレンジ面の中心を成すなど重要な役割を果している。ほぼ全曲がトラッド曲なのだが、単純に再現、もしくは現代楽器をあてはめたと言う感じはなく、メロディを借りた自作曲と言った趣きがある。まあ、スクラヴィスのグループは元からこう言った造りの曲もやって来ていた訳で、その意味では本作も別に鹿爪らしく冒険作と言ったとらえ方をするより、優れたシンガーを迎えて刺激を受けた結果の秀作と言った方が良いのかもしれない。レギュラー作よりもコンパクトな曲が多いが、各人のイマジネーションの豊かさは見事。（中西）



ANNICK NOZATI & FRED VAN HOVE
Uit
LP/Nato　Nato 994　'86年

ノザッティ（ノツァッティ？）は、イレーネ・シュヴァイツァーの主催する女性即興演奏者のプールであるカネイユにも参加しているヴォーカリスト。いささか太めの身体を震わせてのオペラティックな歌唱（のパロディ）と、コミカルな仕草（もちろん声の身振りを含む）をふんだんに盛り込んだ演劇性が、彼女のトレード・マークである。ここでは伝説のペーター・ブレッツマン・トリオのピアニストである百戦錬磨のファン・ホーフェ(p, acc, harmonium)を迎えたデュオにより、親密なコミュニケーションを深めている。彼は曲ごと用いるべき演奏領域をあらかじめ意図的に限定しており、この厳しい抑制が、結果としてノザッティの自由奔放な声の身振りの魅力を最大限に引き出している。（福島）



ARCHAÏA
Archaïa
L P/Choravox CC 77976　'77年

　アルカイア唯一の作品。フランスにはART ZOYD, ETRON FOU LELOUBLAN, ALBERT MARCOEUR等、混沌とした中にも知性と強いオリジナリティを感じさせるアーティストが少なくないが、アルカイアもそうしたものの１つである。ドラムレスのため重々しさこそないが、シンセサイザーを中心にベース、ヴォイス、ギター、パーカッションを独特の方法で組み合わせ呪術的で暗いサウンドを作り出している。かつてのジャーマン・ロックのように技術ではなく思想を基本としたグループであり、万人向けの作品とは言い難いが中々の力作であるのも事実である。　(賀川)



ARIEL KALMA
Ariel
L P/Astral Muse 9999　'75年

　限定1000枚、フレキシ・ディスク付き、自主製作で発表されたアリエル・カルマのデビュー作。ジャケットも手書きになっている。録音されているのは３曲。Ａ面とＢ面後半の２曲は、サックスの多重録音によるもので、特にＢ面後半での層状に響くサックスはジルベール・アルマンのURBAN SAXに近いものがある。残りのB面前半は、ギターやベース、パーカッション、サックスを使っての録音。他２曲が幾らか反復構造に近いことを思うと、こちらは同じフリー・フォームでもジャズのイディオムを感じさせる。カルマはこの後'77年ベルギー・リリースのコンピレーション「Noises」に曲を提供し、'77年にはRichard Tintiとの共作で「Osmose」を、そして「Interfréquence」(MP 2000 MP 120,'79年)を発表した。　(松本)



ARIEL KALMA & RICHARD TINTI
Osmose
L P/SFP 35021-5022　'80年

　アリエル・カルマはソノシート１枚、テープ２本、レコード３枚をリリースしているsax, kbdプレイヤーである。彼はエルドンのアルバムやデライアード・カメレオン・ファミリーのアルバムにも参加している。このアルバムは、リシャール・タンティとの共作であり、ボルネオのジャングルでの自然音の生録り（雨や風の音、鳥や虫の声）を中心にしたタンティの作品（Record R）と、自然音とキーボードをはじめとしたエレクトリックな楽器音とをコラージュし、ミックスしてつくりあげたカルマの作品（Record A）のダブル・アルバムである。両作品とも非常に長い録音時間になっている。クールなキーボード・プレイと、安らかでもあり時には活気にあふれた自然音の配合が巧みなアルバムである。　(宇田川)



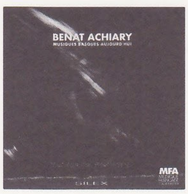
BASTA !
La Rouspéteur
CD/OP 9301　'93年

　デビル・メントールのdsにアンダー・コントロールのフルート。更にモモ・ロッセルの名も見えるからスイスのバンドかもしれない。とは言え、そんな縄張り意識でこれを落してしまっては犯罪になろう。変拍子やブレイクを多用した演奏だが、レコメン系バンドの多くがヘッド・アレンジを追求する余りに失いがちな押しの強さがある。勿論、皆、判っている人達だから勢いだけではない。前記両バンドにクリムズン辺りを加えてフランス語特有のトーキング・ヴォーカルを乗せたと言えば判り易いか。(前記両バンドがそれ程聴かれていないと言う問題はあるが）正直、どちらのバンドよりも出来は上。リーダーと思われるギターのアラン・ロシェについては、何も判らないが、前歴があるのなら相当に期待出来そう。　(中西)



BENAT ACHIARY
Arranoa
CD/Ocora C 559045　'88年

　バスク出身の男性トラッド・シンガーであるベニャ・アチアリは、ここでミッシェル・ドネダ(ss)、カン・レ・ニン(perc)、ドミニク・ルジュフ(vc)、グザヴィエ・ルガサ(b)ら、いずれもフリー・ジャズ／民族音楽の境界領域で活躍する強者どもを集め、彼らの控え目だが確実で細やかな心配りあふれるサポートを得て、しなやかな艶を帯び幾重にも折り畳まれた深みをたたえた彼の声の有する、しなやかな勁さを、また歌い継がれたトラッド・ソングの持つ重く垂れ込めた哀愁と垂直に切り立ったリリシズムを、余すことなく明らかにしている。この後も、ジョエル・レアンドゥル(b)の主催した「ヨーロッパ各国対抗即興大会」にも参加するなど、通常の歌手の領域を遙かに踏み越えた活動を続けている。　(福島)



BENAT ACHIARY
Ene Kantu Ferde Ta Urdinak
CD/Silex Y225006　'91年

　先のオコラ盤に比べ、ドネダとルガサの参加は同じながらも、ギター（フィリップ・デュシュペ／）の参加や録音傾向の変化（よりエコーが深くかかっている）もあって、さらにモダンなジャズ／ロック色を強めており、渋く地味な前作に比して、一般プログレ出身リスナーには本作の方が取っ付きやすかろう。一際華やかな芳香と鮮やかな色彩あふれた楽曲（今回は自作曲を含む）は、時にあざといまでにムーディで、観光地音楽的なきらきらしたエキゾティズムすら漂わすに至っており、越境への自信に溢れた確信犯ぶりがうかがえる。彼の録音としては、この２作のほかSilexにリーダー作がもう１作。さらにドネダ「テラ」(Nato)や、ウルリッヒ・グンペルト(p)らとの「カントゥズ」(Nimmbus)等がある。　(福島)

ZED
Visions Of Dune
LP/IRC 003　'79年



シンセサイザー奏者、コンポーザー、Bernard Szajnerが代表作と云われる「Some Deaths Take Forever」他ソロ・アルバムを作る以前に組んでいたグループ。ZEDのメンバーはSzajnerの他以下の通り。Colin Swinburne(g), Clément Bailly(ds), Klaus Blasquiz(vo), Anannka Raghel(syn-vo)。ただしSzajner以外の奏者は曲ごとの参加で、実質的にはSzajnerのソロ第1弾という内容。フランク・ハーバートの著作「Dune」に基づくコンセプト・アルバムである。スペイシーなイメージを持った少しインダストリアルふうのシンセサイザー・ワールドが広がる。リシャール・ピナスの音楽などに近いものだ。　　(松本)

BERNARD SZAJNER
Some Deaths Take Forever
LP/Pathé 2C 070, 14-863　'80年



バッハデンケル、ティム・ブレイクといったアーティストとの出会いがベルナール・スジャネールをエレクトロニクス奏者としての道を歩ませることになった。又、マグマのツアーに照明係として同行し、平行してライト・ショウを伴うエレクトロニクス・サウンドを創作していく。彼の最良の作品は'80年にリリースされた本作であり、マグマのブラスキスとパガノッティが参加して制作された。エレクトロニクスを先駆して創られた硬質なインダストリアル・ビートが収録されており、この種のサウンドとしてはエルドンの5th「Un Revo〜」と並ぶ秀作であると確信する。生き物のように躍動するエレクトロニクス・ビートは唯一無比のものである。尚、1stは「Visions Of Dune」(IRC 003)、3rd「Superficial Music」(IRC 008)、4th「Brute Reason」(Island 811329.1)、5th「The Big Scare」(New Rose New 34)-Maxi Single-である。　　(山崎)

BERNARD VITET
Mehr Licht !
LP/Grr... SGR 1003



階段を昇り、階下のエンジニアに声をかけ、続いてソプラノ・ソロ(吹き抜けの壁と壁の間で反射する音)、OK？　階段を降りていくまでの一部始終。周囲の話し声(「見てないもん私」と日本語らしき声も)や物音ごと収録されたオルゴールやバラフォン、小鐘の演奏。しきりに行き過ぎる自動車の騒音と長い残響をはらんだヴァイオリン・ソロ（音のこもり方が周囲の様子を知らせる)。手前で滴り続ける水音と遠く聞こえる小鳥の声にはさまれた管楽器ソロ。だが、これらの環境音に注意深く耳を傾ければ編集の跡が窺えよう。演奏は偽りの焦点に過ぎず、語りかけているのは編集により提示された情景の交替の方にほかならない。大学で映画学を専攻し、GRMでサウンド・コラージュを学んだ成果がここにある。　　(福島)

BIRGE GORGE SHIROC
Defense De
LP/Grr... SGR 1001　'75年



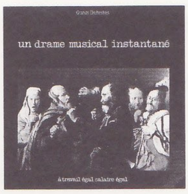
記念すべきGRRRレーベルの第一作。実質ビルジュ(key, tape, as, fl, perc)とゴルジュ(g, vc, perc)の多重デュオであり、シロック(perc)はゲストに過ぎない。冒頭から既にサックスのインプロヴィゼーションが電子音、走り回る足音、ガスの漏れる音、ギターのスクラッチと等価にミックスされており、この後ヴィテを加えてのUDMI(別項参照）への萌芽がうかがえる。いささか長めのギター・ソロ等、置かれた文脈に無自覚ないささか弛緩した瞬間も散見するものの、ざらざらしたノイジーなマチエールの強調や、空間的なミックス、複数の異なる速度の併置、発信音や機械の作動音のようなシンセの音色設定、テリー・ライリー的なリフレインの導入等は、既に自らが属する系譜を自覚している証左と言えるだろう。　　(福島)

HÉLÈNE SAGE
Comme Une Image
CD/GRRR 2014　'89年



UDMI(別項参照）オーケストラにも参加していた女性マルチ奏者(vo, key, fl, cb, perc..)による、主として舞台のために書かれた作品集（なんとデュパルクの歌曲で幕を開ける)。ベルナール・ヴィテとの共作「Supposons Le Problème Resolu」(GRRR 1008 '84年）に聴かれた、言葉や物音と環境音（ここで両者は残響や雑音、距離感を通じて分かち難く結び付いており、サウンドは総体としてひとつのシークェンスを指し示す。ワン・ショット＝ワン・シーン)、とりとめのない即興演奏のモンタージュを、全編強固に貫き通していた構築性／運動性は1曲の中にとどまり、それらを含め、様々な要素の組合せやイメージのデッサンだけが書き留められたスケッチ・ブックをパラパラとめくっていく趣がある。　　(福島)

UN DRAME MUSICAL INSTANTANÉ
À Travail Égal Salaire Égal
LP/GRRR 1005　'82年



'76年ビルジュとゴルジュのデュオにベルナール・ヴィテを迎えて結成されたUDMIは、その無景映画的コラージュの才を早くも第一作「アドレナリン過剰の夜」('77年)で示し、本作及び次作により初期のピークを迎える。オーケストラ演奏も一片のサウンド・ピースとして用いたテープ・コラージュが、珍しく視覚／物語を喚起せず、めくるめく音彩の饗宴を繰り広げるA面と、分割・配分されたオーケストラ・サウンドが組み上げた各音景を巧みに重ね合わせ、随所にエキゾティックな蟹しさや自堕落なまでのエロティシズム、さらには異物としてのエレクトロニクスを織り込んで、破綻・亀裂を軸にめまいと共に緩やかに巡り、総体としては極めて流麗かつノスタルジック・モダンな響きを編み上げたB面。傑作。　　(福島)



UN DRAME MUSICAL INSTANTANÉ
Les Bons Contes Font Les Bons Amis
LP/GRRR 1006　'83年

様々な音色が少しずつパレットの上に絞り出され混ぜ合わされるうちに、「森の悪魔」を巡る追跡劇（草を踏む足音、荒い呼吸、咳込みながら漏らされる言葉）が忍び込み、サウンドも次第に劇的な強度を増していく冒頭曲。ボードレール/デュパルクによる歌曲（ジャン・ケルリエ奏するコール・アングレの素晴らしさ）に続き、雄大なストリングスと鳥の声を従えて、バグパイプが空高く鳴り響きわたる２曲目。Ｂ面全部を占める大曲においては、オーケストラが３つの小グループに分割され、各グループの演奏は各々層を成し、スクリーン上でスライドをモンタージュするように自在に重ね合わされ、また話し声やテープと混ぜ合わされる。驚くばかりの複雑多様な音響を扱いながら、古典的明澄さを失わぬ快作。（福島）



UN DRAME MUSICAL INSTANTANÉ
Carnage
LP/GRRR 1010　'85年

緑色熱・顔面負傷者・株式市場と人生・車の列・13号船室・無言電話・実行への推移…曲のタイトルと、ジャケットに描かれた爆発する旅客機、さらに裏面に掲げられたメンバー写真の扮装（書類カバンをしっかりと抱えたエリート証券マン、銃を持ったテロリスト、爆破テロに巻き込まれた被害者）を見比べれば、パニック映画的なストーリーが浮かぶ。実際ここで彼らは「映像のない映画」を以前より遙かに細部まで突き詰めている。セリフ、効果音（バスタブの水音、電話の呼び出し音）、環境ノイズ（靴音や交通騒音）、情景描写的な標題音楽（③におけるオーケストラ・アレンジの見事さ）、ミュジーク・コンクレート的な音響の運動、そして所謂「映画音楽」によって。３人＋ゲストの編成による中期の代表作。（福島）



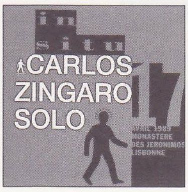
UN DRAME MUSICAL INSTANTANÉ
Sous Les Mers
CD/GRRR 2012　'88年

前掲作以降CDにメディアを移行したUDMIは、30分以上に及ぶオペラ・ブッファを含む「L'hallali」（'87年）、ヴェルヌ「海底２万マイル」を題材とするサブライムな強度に満ちた音響スペクタクルと、ソープ・オペラのクリップ集を思わせる家庭内の雑音と皮肉な眼差し、あざといまでのユーモアに溢れたバレー音楽、１分半に凝縮されたワン・シーン音響ドラマ６篇の３幕から成る本作、映像をザッピングできる大スクリーンの前で繰り広げられるダンスとアクションによるTVスペクタルのための「Qui Vive？」（'89年）と、舞台や映像領域中心に活動を続け、次いで「Le K」（'90年）及び「Jcune Fille Qui Tombe…Tombe」（'91年）により、歌い語るソロ・パフォーマーとの共同作業を深めていく。（福島）



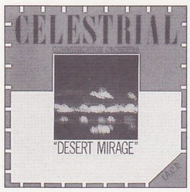
UN DRAME MUSICAL INSTANTANÉ
Urgent Meeting
CD/No Man's Land nml/GRRR2018cd '91年

久々にトータルなサウンド・ドラマ（ストーリーは世界滅亡を描いたジュヴナイル寓意SF）を手掛けた「Kind Lieder」（'91年）に続く、御大Colette Magnyはじめ、François Tusques、Vinko Globokar、Raymond Boni、Louis Sclavis、Michel Godard、Michael Riessler（全て別項参照）ほか、老若男女取り混ぜてフレンチ・フリー重要人物を迎えた超豪華作。ここでゲストはUDMIがいつも行っている集団作業に自らも参加することが求められており、選ばれた曲素材がグループごと検討にされされる。その結果、同じ素材も全く異なった構成/編曲を施され、似ても似つかぬ作品へと仕上げられる。なかでも貫録のMagny、多彩な音色とユーモアがほとばしるSclavis&Globokarは出色の出来。（福島）



CARLOS ZINGARO
Solo
CD/ADDA 590076　'91年

ひたすらに艶やかな滑行音が、鷲ペンを走らせるような滑らかさで連ねられ、ゆるゆると空間を横切っていく。彼の音色は〝尺八〟なる曲で箏のフレーズをなぞり、また〝手裏剣〟なる曲で何倍にも加速された活劇音楽を奏する時でさえ、ヴァイオリンの取り澄ました気品を失わない。あるいはリチャード・タイテルバウムとの共演〝ザ・シー・ビトウィーン〟において、タイテルバウムの操るコンピューターがつくりあげた音場（それは勝手に動き回ろうとする者に対し、タルコフスキー「ストーカー」に描かれるゾーンにも似た草の牢獄として機能する）のうちに、イソギンチャクと共生するクマノミのように棲みついて、ふわふわと身をくねらせて泳ぎ回る。ポルトガル出身。レアンドゥルとのデュオにも注目。（福島）



CELESTRIAL COMMUNICATION ORCHESTRA
Désert Mirage
LP/IACP 7004～5　'83年

アラン・シルヴァ率いるCCOは、米仏混成で集団即興を追及した'69年当時とは演奏方針もメンバーも異なり、現在はフランスで活動する演奏者を主とし、よりビック・バンド的なコンポジションの演奏を行っている。ここではUDMIのメンバー全員や、ジャン・ケリエ（oboe）、沖至（tp）、アーサー・ドイル（ts）！らを含む30人（弦楽器奏者だけで７人！）の大編成で、シルヴァの作曲を彼自身の指揮により演奏している。現代音楽風の硬質な音色のアンサンブルと、自由な発想による自在なソロ（時には、演奏途中で指揮者から突然にソロ奏者に指名されることもあるいう）が緊密に織り成していく音響は、決してフリーク・トーンの応酬となることなく、刻々と移り変わる映像的な魅力に溢れている。（福島）



COLETTE MAGNY
Feu Et Rythme
LP/Le Chant Du Monde LDX 74800-01 '70年
CD/Scalen Disc CMPCD 04

ルイス・キャロルからパブロ・ネルーダを経て、リロイ・ジョーンズに至る歌詞の振幅の異様な大きさ（辞典の一項目をそのまま歌った曲すらある）。一曲、いやワン・フレーズ、いや一単語の中ですら度々繰り返される、叫びと語りの間の気違いじみた往復。本作「火とリズム」は、メーターの針を常にレッド・ゾーンへと振り切りながら、一方の極端からもう一方の極端へと、声の振幅を揺さぶりたて、千々に引きちぎらんばかりの苛烈な強度に満ちている。伴奏は専らバール・フィリップス及びベブ・ゲランによる２ベースのみで、深々とたゆたうアルコから打楽器オーケストラ的なサウンドまで、こちらも計り知れない広がりを見せる。なお、ジャケット/LP番号は次作「抑圧」とカップリングした２枚組再発盤のもの。　（福島）



COLETTE MAGNY
Transit
LP/Le Chant Du Monde LDX 74570 '75年

本作及び次掲作において、マニーはひとつの頂点を迎える。ここでの共演は南仏リヨンを拠点とする仏のAECとも言うべきワークショップ・ド・リヨン（フリー・ジャズ・ワークショップ）。当時一員であった、今をときめくルイ・スクラヴィス（別項参照）の初録音でもある。硬質な輪郭を際立たせた緊密なアンサンブルから、洒脱なワルツ、映画音楽的な弦楽アンサンブルに至るまで、スクラヴィスを軸としたうねるような躍動により音を息づかせ、鮮やかに情景を推移させていく彼らの演奏を得たことによって、彼女の声はさらに自在なしなやかさを増し、やはり叫びと語りを往復しながらも、より軽やかな速度と運動性を獲得するに至っている。　（福島）



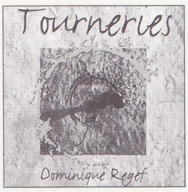
COLETTE MAGNY
Visage-Village
LP/Le Chant Du Monde LDX 74619 '76年
CD/Scalen Disc CMPCD 02

ジェラール・マレ(g)、ジャン・ケルリエ(as, ss, oboe, fl)ら、シーンのキー・マンを含むダーマとの共演。アコーディオンの参加等により、一見、通常のシャンソンの守備範囲へと撤退したかに見えて、前作にも窺えた映画的な運動／持続の感覚がさらに前面に押し出されている。構築への意志と逸脱へと向かうフリーキーなエナジーの拮抗は、編集の政治力学に基づき配分され、至るところ亀裂や断層が走り、対立と軋轢に満ち溢れながらも、奇跡的とも言える求心的な結びつきを生み出しており、そのはらみこむ矛盾の大きさゆえに、直接聴く者の感情に触れてくる。フレンチ・フリーの産婆／乳母役を務めた彼女は、そのことよりも、これらの高度な達成によって語られるべきシーンの最重要人物のひとりである。　（福島）



CORMAN & TUSCADU
Pentacle
CD/Warner Chappell Music 592138 '92年

CORMAN & TUSCADUというバンドがどういう活動をして来たのかは全く知らない。知っているのはこのアルバムだけ。スタイルとしてはパンク・サイドからの流入組だろう。サイド・ギターのノイジー・サウンドがいかにもそれらしいし、メンバー４人中３人がギター／ベース／キーボード／ヴォーカルを取っ替え引っ替えで回し合っているのもありがちな編成だ。ただ、サウンドの構成力にはかなりのものがあり、そこらの半端なバンドとは出来が違う。全曲が映画を動機としており、当然サントラのカヴァーが大半を占める訳だが（例えば「ポパイ」とか「屋根の上のバイオリン弾き」とか）、そのアレンジが秀逸で、彼らの才気が原曲に圧勝している。単純にカッコよさを評価してもいいバンドだ。　（坂本）



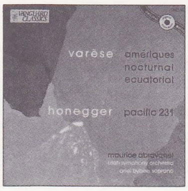
DOMINIQUE REGEF
Tourneries
CD/Van D'Œuvre 9306 '93年

ヴァランタン・クラストリエ（別項参照）と並び、最も特異で意欲的なヴィエル・ア・ルー（ハーディ・ガーディ）奏者であるルジュフは、ミッシェル・ドネダ（別項参照）との共演のほか、オクシタン・トラッドの第一人者であるロジーナ・デ・ペイラ＆マルティナ（別項参照）の作品（例えば〈トゥルバドール〉）にも参加している。即興ソロを中心とした本作において、もともとの豊かでポリフォニックな倍音は、ほとんどエレクトロニックなまでに暴力的に凝縮されており、様々な音色のベクトルが互いに交錯／衝突しながら、サウンドそれ自体の内圧を軋轢によって天井知らずに高め、プラズマが発光するような危機的な音色を紡ぎ出すに至っている。顕微鏡的なポリフォニーによる「内声の残酷演劇」。　（福島）



EDGARD VARÈSE
Amériques/Nocturanl/Ecuatorial/(Arthur Honegger/Pacific 231) by Maurice Abravanel
指揮　ユタ交響楽団
CD/(U.S.)Vanguard OVC 4031

《アメリカ》(1922)は、現存する彼の最初の作品で、125人という大きな編成で書かれた。初演後、彼の死の年まで一度も演奏されなかったというのもこの編成のためか。《エクアトリアル》のテクストはマヤの宗教書「ポポル・ヴ」から採られている。《ノクターナル》は、死後弟子のチュー・ウェン・チュン(周文中)によって完成されたやはり声楽を含んだ作品。ヴァレーズ自身による妙なシラブルが呪文のように繰り返され、テクストは〝You belong to the night〟に始まり、〝I kissed his shadow〟に終わる謎めいた作品。聴きどころは、アブラヴァネル～ユタ響のどこまでも乾いた響き。スペイン―ポルトガル人の両親のもとギリシアに生まれ、スイスで育ち、ベルリンでヴァイルに学んだ彼の演奏は、まさにうってつけ。（五十嵐）



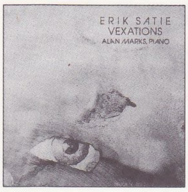
EDGARD VARÉSE
Intégrales/Ionisation/Déserts/Poème Électronique
by Cliff Crego指揮ASKOアンサンブル、デン・ハーグ・パーカッション・グループ
CD/(Ho.) Attacca BABEL 9263-2

印象派風の趣味にも、セリエリスムにも巻き込まれることなく、独自の道を貫いた希有な前衛作曲家が、ヴァレーズである。《イオニザシオン》は打楽器だけを使った作品として音楽史上重要だが、史的価値を離れても、われわれの耳を取り巻く状況のなかで、なお屹立する作品である。《ポエム・エレクトロニク》は1958年、ブリュッセル万博のフィリップス館の400個のスピーカーから流された電子音楽作品。この作品は、彼が追求したテーマである「音響と空間の拡張」をまさに実現したものだった。この初演に集まった作曲家たちの写真があるが、その顔ぶれは、シュトックハウゼンからベリオまで実に多彩だ。おそらくヴァレーズは手法として彼らに影響をあたえることはなかった。彼の夢に影響を与えたのである。　(五十嵐)



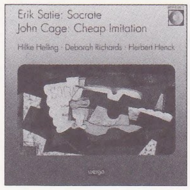
ERIK SATIE
Early Piano Works Vol.1
by ラインベルト・デ・レーウ(pf)
CD/Philips 412243-2

「失速寸前のサティ」と評されるほど遅いテムポ。かつマサティのレコードが殆ん出ていなかった頃は、リスト弾きのチコリーニが余芸で演奏していたレコードが幅を利かせていたこともあり、リリース当時人々が驚いたのは無理もない。デ・レーウはシェーンベルク・アンサンブルなどを率いて指揮者としても活躍するオランダのピアニスト。しかしこの尋常ならざるテムポは、今なお聴いた瞬間から、幾多の演奏とは一線を画している。ここには、フランスのエスプリなど微塵も無いが、何かサティの本質に触れる静謐さに満たされている。ペダリングやタッチは丁寧にコントロールされているが、少しも演出過剰にならず、聴き慣れた〝グノシェンヌ〟でさえ、初めてサティを聴いた時の、あの感覚に今一度引き戻され胸が痛い。(五十嵐)



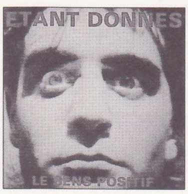
ERIK SATIE
Vexations
by Alan Marks(pf)
CD/(U.K.)Decca 425221-2

52拍からなるフレーズを840回繰り返すという指示があるこの曲、十数時間かかるのだが、実際をその演奏に立ち合ってもみたが、この指示を遵守することが、本当に意味のある行為であるかどうか、ついにわからなかった。実際の演奏にでかけるのは酔狂だが、CDを好きなだけリピートするのならかまわないだろう。このディスクには、40回分が収録されているので、これを21回繰り返すとやっと全曲聴いたことになる。CDとしては、ケージの〝4分33秒〟と双璧をなす珍品だが、こちらのほうがずっと実用性がある。実用といっても、BGMではない。おそらくこれは密室の中での行なのだ。サティの音楽には二種類ある。窓を開けたくなる音楽と、窓を閉めたくなる音楽とである。たとえ外が夏であろうと、冬であろうと。　(五十嵐)



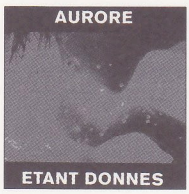
ERIK SATIE
Socrate
byヒルケ ヘリング(alto)、デボラ・リチャーズ(pf)
JOHN CAGE Cheap Imitation
byヘルベルト・ヘンク(pf)
CD/(Ger.)Wergo WER 6186-2

プラトンの「対話篇」からテクストを採った交響ドラマ。オーケストラ版もあるが、これは最初に書かれたピアノ伴奏版。3部から成り、最後が「ソクラテスの死」の場面である。ドラマティックな展開がまったく無く、先に進むという感覚すら感じられない。実はこの作品は、サティの「家具の音楽」の思想、つまり壁紙や家具のように生活に溶け込みかつ邪魔にならない音楽、というサティのモットーと密接な関連があるといわれている。アルバム後半は、ケージによるこの作品の『チープ・イミテイション』。サティの〝ソクラテス〟のフレージングの要素の一部やリズムを保存しながら、易を用いて分解／再編成した作品。たしかにサティのような気もするし、ケージのようにも感じられる。　(五十嵐)



ETANT DONNÉS
Le Sens Positif
LP/D.M.A.006　'87年

エタン・ドネは、もともとアルトー的な強度の獲得を目指すスペイン出身の演劇集団（実は兄弟二人のみ）であり、自分たちのパフォーマンス用テープ制作から音楽に関わり始めた。既製音楽を全く用いず、音素材を自然音と肉体ノイズ（声・息遣い・心臓の鼓動・足音等）に限定し、テープの速度変化や位相操作等によりマテリアルを構築していくやり方は、全く彼ら独自のものだ。LP第一作（これ以前にシングル１枚とカセット・テープ数本を制作している）の本作では、空間から分泌される量子状のノイズ（水音や軋み、機械音の反復…）に包囲され、脅かされ、ついには成す術なく蹂躙される肉体が、叫び声・呻き声・荒い吐息・息絶え絶えのかすれた囁きによって、生々しく眼前に立ち現れる。　(福島)



ETANT DONNÉS
Aurore
CD/Touch TO:16　'90年

本作においては、雷・雨音・潮騒・風のうなり・教会の鐘・積もった枯葉を踏む足音・遠くに聞こえる遊ぶ子供や小鳥の声…といった環境を構成する自然音素材を専ら変形なしで用い、CDサウンドの一種異様な明晰さを十二分に活かして、眼前に広がる光景を、聴者が一瞬たじろぐ程の圧倒的な迫真性とともに立ち現れさせる。突如の場面転換と噴出するノイズや叫び声に金縛りにされて、荒れ狂う暴風雨と雷鳴の中を、超高速で引き回され駆け抜けていくが如き感触は、後期ターナー的な速度のヴィジョン（高速度で遷移する視点に映る極度に圧縮された風景）を思い出させる。とはいえ冷徹なマテリアリズムには至らず、展開にある種の物語性（「アッシャー家」的カタストロフ）を残しているのは彼らの出自ゆえか。　(福島)



FRANÇOIS TUSQUES
Free Jazz
LP/Mouloudji EM 13507　'66年
CD/ADDA 590039

フレンチ・フリー・ジャズ・シーン最初の成果である本作は、テュスク、ベルナール・ヴィテ(tp)、フランソワ・ジャノー(sax, fl)、ミッシェル・ボルタル(bcl)、シャルル・ソードレ(perc)、ベルナール・ゲラン(b)によって吹き込まれた。同時代の米フリーに特徴的な、パルス状のリズムと煮えたぎる粘液を思わせるフリーク・トーンの応酬による、慌ただしく沸騰しながらも足を止めたように動かない風景とは反対に、ここでは常に明澄さをたたえた音色による管楽器の自在な運動／交錯が、ピアノがコードによって張り巡らすスクリーンに、滑らかに移り変わる音風景を映し出し、リズムはむしろスペースを保つことに専念している。フレンチ・フリー・ジャズ独特の柔らかな構築性は、ここで既に確立されている。　（福島）



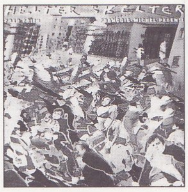
FRANCOIS TUSQUES
Intercommunal Music
LP/Shandar SR 10010　'71年

テュスクとベブ・ゲラン(b)の二人が、サニー・マレー(ds)、アラン・ショーター(tp)、スティーヴ・ポッツ(as)、アラン・シルヴァ(vc)らアメリカ勢を迎えての本作は、前掲作とは異なり、所構わず噴出する荒々しいエナジーによる破綻と亀裂に満ち満ちている。モールス信号のようなテーマ・フレーズの回りで、渦を巻きながら飽和／膠着状態へと向かう音に対し、テュスクは自ら粉々に砕け散って螺旋を描き、また執拗にテーマ・リズムを反芻することによって混沌に明確な輪郭を与えようとする。彼は大衆から離反したフリー・ジャズへの反省から、労働者のためのダンス音楽を演奏するインターコミュナル・ダンス・オーケストラへとこの後急転回するが、この時点で既にそうした認識に達していたものと思われる。　（福島）



FRANÇOIS TUSQUES
Dazibao N°2
LP/Futura GER 32 '71年

前年録音の「N°1」においては、複雑なコードやリズムにより、かえって身動きが取れなくなり飽和／膠着状態に追い込まれることなく運動を継続するための戦略として、ある限定された単純さが選び取られているが、続く本作において彼はピアノにプリペアドを施すことにより、音に非中心的な散乱あるいは不測の衝突へと向かう偏差（クリナメン）を与えるとともに、常に発見と共にあり、新しい音がそれを操るべき方法と同時に獲得されるような、見通しの効かない不透明な場の中に自らを置こうとする。この楽器それ自体への差異においてピアノを獲得するやり方は、コンパクトな打楽器オーケストラを手に入れようとしたケージのそれとは対極的なものである。なおタイトルは文革時の新聞「大字報」を指す。　（福島）



FRED FRITH/FRANÇOIS-MICHEL PESENTI
Helter Skelter
CD/(Swi)Rec Rec RECDEC 40　'92年

言うまでも無くこの音楽はフリスの物であり、連名のプサンティは楽劇へのテクスト及び舞台監督としての関わりに留まる。この事はフリス自身が内ジャケで本作は舞台でのそれとは異なった物になったとことわっている事からも明らかだ。（ちなみに、かってH・ボッシュの「愚者の船」にインスパイアされたと紹介されたが、作品の性格への例えとして名が出されているのみで直接の関係は無い）。とは言え、演奏をしているのはフランストで、現在グループとしての活動もあり、この先重要な活動も見せて行くだろう事からの掲載となった。楽劇の性格上か、最近のフリスの持つ飄々とした所は押え気味に、緊密な構成が冴えるロック・オーケストラ作品になっており、レコメン派は必聴の一枚。　（中西）



GARLO
Tribal Scandal
CD/Cip/Audio CIP 1007　'92年

ガルロなるミュージシャンのソロ・アルバムは実に心地よい刺激に満ちていて、楽しめる。サンプリングを駆使したサウンドもビートも今でなければ現われないであろう同時代性をふんだんに盛り込んでいて、ガルロの冴えた感性を存分に教えてくれる。ガルロ自身はサンプリング、パーカッション、ベース、ヴォイス等に大活躍だが、もうひとり彼の左腕として活躍しているBubu（フランソワ・ボワーヌ）のヴァイオリンとギターが鋭い対比を見せ、非常に巧いバランスを生み出している。この音楽の本質は、なかなかそうは聞こえないかも知れないが、ポップ性にあると思うし、聴き流しても差し支えない音楽だ。将来化ける可能性はあるが、本名も判らないのだから、今はＢＧＭとして楽しめばそれで充分だろう。　（坂本）



GHEDALIA TAZARTÈS
Tazartès' Transports
LP/Cobalt CBL 05　'81年

ゲダリア・タザルテのセカンド・アルバム。クリアー・ビニール製なのでクレジット等は全くわからない。CBL05という刻印がかすかに読みとれるので、ファースト・アルバム「Diaspora」(Cobalt CBL 02) のレコード番号から類推して、コバルト・レーベルからリリースされたものかもしれない。ゲダリア・タザルテはロック・ミュージシャンというよりも現代音楽の作曲家に近い所に属する人物であろう。ファースト・アルバムにおいてミッシェル・シオンの曲をとりあげていることがそれを示している。タザルテの音楽は、高度にメタフィジカルなコラージュ・ミュージックである。ストリート・ノイズ、読経、世界各地の民族楽器、それらすべてがアマルガムとなって一体化したものが彼の音楽である。　（宇田川）



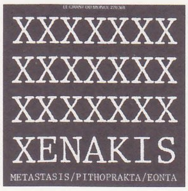
GHEDALIA TAZARTÈS
Une Éclipse Totale De Soleil
LP/Celluloid CEL 6661 '84年

前作の紹介文を読んで最初に浮かぶのは、おそらくバザールの雑踏を素材としたキャブスの「スリー・マントラズ」だろう。しかし、あくまでも音素材レベルでのエキゾティックな快感指向に基づいた彼らとは異なり、タザルテのコラージュとは、言わば幼年期のトラウマを探し求めて自己の内奥に向う沈潜の旅路にほかならない。その過程において、子供のいたいけな歌声が突如ループとなって単なる発信音と化し、そこにかぶさる男女の(コーランの詠唱にも似た)小節豊かな歌声も、これまた突然硬直したようにループ化される。突然襲う理不尽な衝撃（今まで会話していたのは、実は機械仕掛けの人形に過ぎなかった)。彼の作品は閉じかけた傷口をわざわざ押し開いて見せつけるような鋭い悪意に満ちている。（福島）



HERATIUS
Gwendolyne
LP/Frigico FLVM 3004 '78年

1978年8月6日〜8日にフリジコ・スタジオで録音された自主制作盤。スタジオ内で試みられた演奏にエフェクト効果、テープ処理を加えて無造作にコラージュ、編集した趣味的な実験作である。使用楽器はギター、パーカッション、ピアノ、オルガン、クラリネット等。けだるいクラリネットの音色やブルースのフレーズ、女性ヴォーカルのシャンソン、フリー・ジャズ調のギター等が次々と飛び出すが、いずれもアンダーグラウンドでアンニュイな雰囲気を湛えたものである。メンバーはロベール・ディア、アルマン・ミラール、フロランスから成り、A・ミラールは後にパスカル・コムラードの作品に参加している。奇妙な安っぽさを備えたこの作品はレジデンツ、ファウスト等に捧げられている。（松本）



IANNIS XENAKIS
Eonta/Metastasis/Pithoprakta
CD/Le Chant Du Mode LDC 278368

50年代から60年代の作品集。クセナクキスが、建築を学び、ル・コルビュジェの協力者であったこと、1958年のブリュッセル万博におけるフィリップス館の設計の帰属をめぐって両者の間で悶着があったことは、よく知られるところであるが、実際クセナキスの作品の中に見られる建築的思考ということになると、やはりこの時期の作品にもっとも顕著にみてとることができるだろう。音の運動やグリュッサンド、分布などの確率計算にコンピューターが用いられているが、1965年当時の生々しいこの演奏を聞くと、コンピューターの使用＝無機的という短絡がその初発から陳腐なものであったことを感じさせられる。「エオンタ」(1964) でのピアノは当時クセナキスに師事していた高橋悠治である。（五十嵐）



IANNIS XENAKIS
Electro-Acoustic Music (Bohor Ⅰ/Concert P-HⅡ/Diamorphoses Ⅱ/Orient-Occident Ⅲ)
CD/(U.S.)Nonesuch H-71246

1950年代から60年代にかけてのミュージック・コンクレート作品集。コンクレート＝具体音といっても、日常音や小鳥のさえずりが聞こえるわけではない。殆んど原形を留めないノイズの塊の咆号が暗黒の中でうねっているだけである。その変化は連続的で、じっと耳を傾けていてもその変化を感じ取ることができない。試しに指でレコードの針を進めてみると、やっとその変化が確認できる。以前マルチ・トラックでこれらのライヴを聴いたが、拷問に近い音響エネルギーに圧倒され、身動きが出来なかった。これらの作品は、彼の音楽の過渡的形態として無視されることが多いが、地下闘争で片目を失い、欠席裁判で死刑判決を受けてギリシアを脱出した彼の神秘的（原初的）闘争性はこうした作品なくしては体験できない筈だ。（五十嵐）



IANNIS XENAKIS
Musique De Chambre 1955-1990 by アディッティ弦楽四重奏団、クロード・エルフェ(pf)
CD/Disques Montaigne 782005

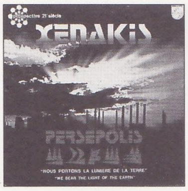
現代音楽のスペシャリストとして、向かうところ敵なしのアルディッテSQとクセナキス作品を弾かせたら誰も彼を止めることはできないというC・エルフェである。世代は異なるがクセナキスに挑むという意気が通じあったのか、どれもスケールの大きな見事な演奏。《ST／4》(1955-62) から《tetora》(1990) までの15作品が収められている。グリュッサンドを多用するクセナキスにとって、弦楽器は特に重要な楽器である。15年程前「こんな醜い作品しか書けないのなら、もう弦楽器のために作曲してくれないほうが良い」いっていた音楽評論家がいたが、状況はさして変わっていないだろう。《エヴリアリ》(1973) を暗譜で弾いてしまうエルフェはいつ見ても神業だ。これを聴くともう他のピアニストでは聴けない。（五十嵐）



IANNIS XENAKIS etc.
Space Theatre
LP/RVC JRZ 2501

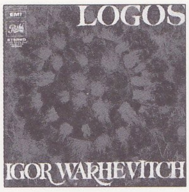
クセナキスは、現代音楽系のフィールドの中でも、際立った個性を持つ作曲家である。彼の作曲法の特徴は、その過程において、確率計算やコンピューターの使用等、何らかの機械的な操作が導入されている事だが、そうした過程とは裏腹に、出て来た音楽は人間の豊かな感情性を感じさせるものが多い様に思う。ここに収録された〝ヒビキ・ハナ・マ〟は、'70年に大阪で開かれた万国博の為に作られた、多元的なスピーカー・システムを用いた作品。オーケストラを素材に、電子変調された様々な音響群が、あらゆる方向から聴き手を取り囲む。強烈なインパクトを持った作品である。音響空間芸術の先陣を切ったこの作品も、再評価されるべき時期に来ている。（沢田）

IANNIS XENAKIS
Persepolis
LP/Philips 6521 045　'74年



クセナキスは勿論ギリシャ人だが、その活動をフランスで行なって来たことを考慮して、ここに採り上げる。クセナキスの音楽の最大の特徴は確率計算／構造計算に基づく数学的作曲と、トーン・クラスターの手法にある。音楽を線的にではなく、確率曲線で捉えようとする理論は、実は全くもって正しい。ミュージック・セリエルとは微妙な齟齬を抱えながら、少なくとも僕らにとって彼の音楽が有無を言わせぬ説得力で屹立しているのはその理由でだ。そして、どの現代音楽関係者よりも遙かに僕らが感動せずにはいられない音楽が、このミュージック・コンクレート作品「ペルセポリス」だ。楽音／現実音／極端に拡大された微細音。これらが暴力的に邂逅して繰り広げる壮絶なノイズ・シンフォニー。必聴。　(坂本)

IGOR WAKHEVITCH
Logos
LP/Pathé 2C064 10934　'70年



イゴール・ヴァケヴィッチのファースト・アルバム。'70年のアヴィニョン・クレアシオン・フェスティヴァルに参加したN.Schmuckiのバレーのための音楽であり、トリアングル、混声合唱、バンド・マグネティクが演奏に参加している。パーカッションを主体にしたバンド・マグネティクの演奏とフリー・フォームなコーラスは、大きな広がりを感じさせるスペイシーなもので、巨大な音の渦のような迫力がある。トリアングルもその中に見事に融け込み、自らのアルバムとは多少異なる重々しい演奏を展開している。シリアス・ミュージックにも、ロックにも精通したヴァケヴィッチならではの作品であり、時代を考えると、文字通りの意味で、極めてプログレッシヴなサウンドと言える。　(賀川)

IGOR WAKHEVITCH
Docteur Faust
LP/EMI Pathé C072-11537　'71年



イゴール・ヴァケヴィッチはバレー音楽を中心にしてコンテンポラリー・ミュージック・シーンで活動している作曲家である。現代音楽手法をメインとしているものの、デビュー作「Logos」ではTRIANGLEと共演するなど、ロックの要素も積極的に取り入れた曲作りを行なっている。本セカンド・アルバムはCréation Mondiale Au Festival D'Avignon '71におけるNorbert Schmuckiのバレーのための作品を収めたものであり、オーケストラによるダイナミックな演奏とバンドによる力強い演奏を組み合わせることで躍動感に富んだサウンドを作り出している。　(賀川)

IGOR WAKHEVITCH
Hathor
LP/Atlantic 40533　'73年



スペインでリリースされた最新作を別にすると、唯一、EMI-Pathé以外のレーベルからリリースされた、ヴァケヴィッチのサード・アルバム。シンセサイザーとコーラスを中心にした、音が渦を巻くような壮大な音作りは従来どおりであるが、演奏がメロディアスになっており、フリー・フォームな部分が減少している。彼の全作品の中でも最も聴き易いもので、ジャーマン・ロックに通じる呪術的な雰囲気もある。彼の作品はいずれも非常に独創的かつ彼ならではの個性を感じさせるが、それぞれの作品から受ける印象は微妙に異なっている。一般のプログレッシブ・ロック・ファンが最初に聴くべき作品はやはり本作であろう。彼がロックも好きなことがよく分かる内容である。　(賀川)

IGOR WAKHEVITCH
Les Fous D'or
LP/Pathé Marconi 2C064 13083
'75年



イゴール・ヴァケヴィッチ、4枚目のアルバム。初回プレスはクリアー・ヴィニール、インサート付きだったが、盤質はあまりよくない。曲はザ・カロリン・カールソン・ダンス・シアターのために作られたものである。従来どおり、シンセサイザー、弦楽器、パーカッション、ヴォイス等による演奏であるが、かつての作品と比べると音の動きが小さくなり、ゆったりとしたものになっている。一聴した時の印象はやや弱いかもしれないが、音の断片をちりばめたようなサウンドは正に彼独自のものと言える。ジャケットに描かれた、荒涼とした風景をイメージさせる音作りは、ダンス音楽としての側面が色濃く出たもので、ダンスと一体にして評価するのが本当であろう。　(賀川)

IGOR WAKHE VITCH
Nagual (Les Ailes De La Perception)
LP/Pathé Marconi 2C 068 14430
'77年



ヴァケヴィッチ、5枚目のアルバム。Carolyn Carlson作の「This, That And The Other」のための音楽である。電気処理した男女の語り、シンプルなパーカッション、ほとんど変化せずに流れる弦の音、シンセサイザーで作り出した効果音、クラシカルな雰囲気の分り易いピアノ、カーヴド・エア時代のダリル・ウェイを思わすエレクトリック・ヴァイオリン、クリスタルな印象のハープとチェンバロ、タンジェリン・ドリーム調のシンセサイザーなどが次々に登場し、フリー・フォーム演奏、クラシカルな演奏、ロック的な演奏を繰り広げる。個々の演奏は悪い出来ではなく、全体の印象も変化に富んだ聴き易いものであるが、今一つ焦点の定まらない、拡散した感じがあることも事実である。　(賀川)



IGOR WAKHEVITCH
Let's Start

L P/Pathé Marconi ZC068 14770 '79年

寮歌のような日本語の歌が早々に登場し驚かされるヴァケヴィッチの６枚目のアルバム。その後も日本語の掛声が飛びかう中、シンセサイザーの連続音が徐々に変化しながら、波のように漂う。エルドンやフリップ・アンド・イーノをよりミニマル・ミュージック的にしたような雰囲気がある。次の小曲ではシンセサイザーがガラスの楽器のような音色で、シンプルながら、リリカルでクリアーな演奏を聴かせる。Ｂ面にはメロディアスなシンセによるややポップで暖みのある曲、光が拡散するようイメージのスペイシーな曲、リリカルなピアノとシンセサイザーによるコンテンポラリー・ミュージックとエレクトロニクス・ロックの中間に位置するかのような曲が収められている。彼の静の部分が強調された作品である。（賀川）



IGOR WAKHEVITCH
Salvador Dalì "Opéra-Poèma, Être Dieu"

L P/DCD ED 50001～3 '89年

ダリのオペラ・ポエマ「Être Dieu」をテーマにした組曲でLP３枚組、CD２枚組。ダリの作品や手紙等を掲載した二つ折のインサートも付いている。全ての曲がダリを含む４人の共作になっているが、その中にヴァケビッチの名前を見ることが出来る。彼とダリを除く２人についてはどのような人物か分からないが、作品の内容はヴァケビッチの従来の作品に近いものとなっている。ロック・バンド（ディディエ・バタール、フランソワ・オジェ、ミッシエル・リポーシュらが参加）とオーケストラ、ヴォイス、パーカッションを組合わせるという手法は彼の得意とするところである。曲はアヴァンギャルドな展開を見せるが、パーカッシヴでめりはりがあり、無理なく流れ聴き易い。丁寧かつ分り易い音作りに好感が持てる。（賀川）



ILITCH
Périodik Mindtrouble

L P/Oxygen OXY 09 '78年

ティーリィ・ミュレとリュット・エリーリから成るイリッチの初作。彼等の音楽はg.keyを多用しつつも様々な音響処理を施し、またそれらをコラージュするなど二次的なものと言える。そして時に過激でいびつな響きは仏実験音楽とオルタネイティヴ・サウンドを掛け渡すものでもある。本作はＡ面のa-gを折り混ぜたｇサウンドＢ面の反復するorgサウンドから成り、それらは共に硬く冷たい音色のものである。以後更に実験色を加味し「10Suicides」（Scopa SC 325、'80）テープ作品「P.T.M Works」（米Eurock ED 04、'80）を発表するが、何れも難解ではあっても稚拙さは感じられない。２ndに付されたブックレット、そのフォト・モンタージュ、各作品のラベルに至るまで、彼等のトータル・アートの意志がよく伝わっている。（松本）



JAC BERROCAL
Fatal Encounters

CD/Les Disques Du Soleil Et De L'Acier CDSA 54026 '93年

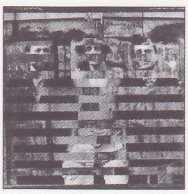
既発（大部分は入手困難）＋最近の未発表ライヴから成る編集盤。とりわけ'80年代以前の彼の野蛮なまでの凶暴さに驚かずにはいられない。ここに収められたトラックのみを見ても、彼は'78～'79年に録音した２作目「カタログ」において、イタリア語MC入のアナクロ・ジャズ・バンドを率い、エレクトリック・ギターの飽くなき反復とエレクトロニクス変調による歪んだ空間を提示し、ミュジーク・コンクレートを導入し、カンにも似た覚醒したビートの上で泣きじゃくり、トイ・ピアノでアコーディオンとのデュオを試みている。このほか現在でも入手可能な作品としては、一聴、各地のライヴの寄せ集めながら、聴き込むにつれ迷路的世界が開ける「La Nuit Est Au Courant」（ADDA/in situ）をお薦めしたい。（福島）



CATALOGUE
Pénétration

L P/Hat ART 1997/98 '82年

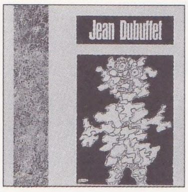
LPと30cmEPがダンボールのジャケットに入った、ハット・アートのスイス・メイド・シリーズの１枚として出たカタログのファースト・アルバム。グループ写真の絵ハガキも付いている。メンバーはジャック・ベロカル（cor, fl, vo）、ジャン・フランソワ・ポブロ（g, hormonica, p, uo）、ジルベール・アルマン（ds, org, p）の３人。全ての曲が３人の共作である。フリー・フォームなサウンドであるが、ヴォーカル入りの曲もあり、難解な感じはなく、ポップな部分も少なくない。ベロカルがリーダーシップを取っていると言えなくもないが、ラード・フリーやアーバン・サックス風の演奏も度々登場する。フレンチ・フリー・ロックのファンも十分に楽しめる内容である。（賀川）



CATALOGUE
Insomnie

L P/Blue Silver 8247 '87年

ベローカル、ジャン＝フランソワ・ポーヴロ、ジルベール・アールマン（彼のみ前作から参加）による３作目。前作「Pénétration」のインテリ・パンク的な過激さは影を潜め、代わって別種の野蛮な凶暴さ（徹底して愚鈍な動物性とでも言うべきか）が前面に出てきている。にもかかわらず、食植物にも似た、あえかな手触りと物憂げな香り、そして洗練の極みで腐りかけているようなエロティックな甘みが、本作には浸み込んでいる。とは言え、確信犯的なふてぶてしい手つきでイメージを撒き散らし、ふと行ったこともない遠い異国の思い出に想い馳せるような、あり得ないリアリティーを辺りに充満させたかと思うと、それをまたサディスティックに裏切っていく暴力性は健在だ。（福島）



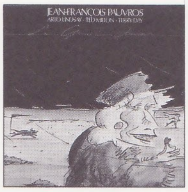
JEAN DUBUFFET
Musique Brut
L P/TIME 3008　'61年

ヴァイオリンの軋みやピアノ弦の掻き鳴らし、サックスの遠吠え、メタリックなジャンク・ノイズ……様々な音響の切れ端が広々とした空間に解き放たれ、水音や虚ろなつぶやきとのコラージュや、ミュジーク・コンクレートの変形を施される。随所に手遊び感覚に満ちた繰り返しや多種多様な速度の交錯、パーカッシヴな驚きが溢れており、あらゆるアヴァンギャルドの原形質と言うべき音響は、デュビュッフェの開かれた強靱な「野生の耳」を感じさせる。彼のアンフォルメル美術は、実存的な重苦しさのみならず、向う側へと突き抜けたユーモアを備えており、特に性を巡る表現は、精神分析的なシンボリズムを寄せ付けない輝かしくも即物的な強度に満ちている。次々に連結される鮮やかなアンチ・オイディプス的達成。　(福島)



JEAN-FRANÇOIS JENNY CLARK
Unison
CD/CMP Records CMP CD 32　'87年

ジャン＝フランソワ・ジェニー＝クラークはフランスを代表するジャズ・ベーシストであり、またアンサンブル・ミュージック・ヴィヴァンのメンバーにも起用されるなど、現代音楽方面でも長らく活躍を続けているミュージシャンだ。'60年に16歳でデビューしたというからその活動歴はとっくに30年を越している。参加アルバムは無数にあるが、ソロ名義作はどうやら本作だけらしい。彼の音楽歴をそのまま音に凝縮した内容であり、J・キューンやC・ラウアーを迎えてのフリー・ジャズもあれば、ジェニー＝クラークの悲哀に満ちたアルコ・プレイもあり、W・クイントゥスの操作する音響との神秘的な交感も繰り広げられるなど、彼の優れて鋭敏な感性が見事に生かされた充実作となっている。　(坂本)



JEAN-FRANÇOIS PAUVROS
Le Grand Amour
L P/Nato

ジャン＝フランソワ・ポヴロはフランスのアヴァンギャルド・ミュージック・シーンで全く独自の活動を行なって来たギタリストだ。彼の音楽を説明するのはかなり難しい。単なるノイズ・ギターではないが、背景にどんな音楽が介在しているのかを理解しにくいのだ(その意味ではヘンリー・カイザーに通じる部分もある)。本作ではもうひとりの無秩序ギタリスト、アート・リンゼイをパートナーに迎え、更にテッド・ミルトン(vo, as)とテリー・デイ(ds, as, pf, vo, fl)が参加。不思議にR＆Bしたリラックス・ムードが漂う中、まるでドライヴ感のないプレイが奔放に繰り広げられる。シリアスさと無縁のアヴァンギャルド・ミュージック。もう少し自分に媚びを売ればデイヴィッド・アレンになれるかも知れない。　(坂本)



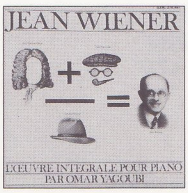
JEAN-FRANÇOIS PAUVROS
Hamster Attack
CD/Nato CD 1544

ポヴロのロック／ファンク感覚が前面に押し出されたアルバム。割とやりたい放題にやっていながら、曲として整然と纏められているので、ポヴロ流ポップ・アルバムとして聴き込むことができる。スタン・サルツマン(sax, fl)やエヴァン・パーカー(sax)、フランク・リコティ(perc)といったイギリス勢ジャズ・ミュージシャンをフィーチャーしてこういう音楽をやってしまうのが面白い(これはNatoレーベル自身のスタンスでもある)。無名ながらSabu Bhugobaun(b)とJulian Fenton(ds)のリズム・セクションが非常にエッジのきいたプレイを披露し、それが成功の要因になっている。これならヒット・チャートを狙うことだって強ち無茶ではないと思うのだが、フランスのメジャー・シーンはそこまで寛容ではないか。　(坂本)



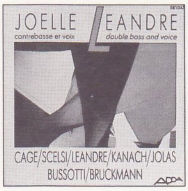
JEAN-FRANÇOIS PAUVROS
Musiques Pour Anne Dreyfus
CD/Spalax Music 14276　'93年

最新作と思われるポヴロのソロ・アルバムは、タイトルの通り、アンヌ・ドレフュスの振り付けによる2つのバレー音楽で構成される。バレー音楽ということで音楽的な夾雑物がこそげ落とされ、非常にシンプルなサウンドが展開する。これは結果としていい具合に作用し、ポヴロの音楽の美しい表情が新鮮な衝撃となって聴き手に伝わって来る。曲によってはロック・サウンドもしっかりとフィーチャーされるのだが、MALICORNE、B＊A＊Gのジャン＝ピエール・アルノーのドラムスが繰り出す乾いたビートがかつてのジルベール・アートマンにも似て、何とも感動的だ。音楽家、ポヴロの世界を知るには絶好のアルバムだろう。1曲だけだが、ミッシェル・ゴダール(tb)も参加している。　(坂本)



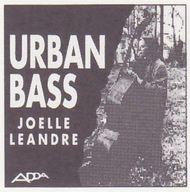
JEAN WIENER
L'oeuvre Pour Piano
byオマール・ヤグービ)pf)
CD/Le Chant Du Monde LDC 278.867

サティのピアノ全曲集の決定版とされるJ・バルビエのレコーディングで4作品の相方を努めていたのが、このヴィエネル。パリで初めて黒人音楽であるJazzを取り入れてJ・ドゥセとピアノ・デュオを組んで成功したのが、このヴィエネル。映画〝現金に手を出すな〟の音楽を担当、同名の曲を作曲したのがこのヴィエネルである。コクトーたちの根城であった文学キャバレー「屋根の上の牡牛」のピアニストでもあった。このアルバムは、1920年代作品2曲から晩年の1981年の作品までさらに、「現金……」までを収録。難解さと平明さを併せ持つヴィエネルの世界がここにある。他にオーケストラ品や、デュセとのピアノ・デュオによるアルバムも出ている。ポスト・サティを探すならこの人しかいない筈なのに…。　(五十嵐)



JOËLLE LEANDRE
Contrebasse Et Voix
CD/ADDA 581043 '88年

トータルな音楽表現の探求において、バール・フィリップス、斎藤徹と並んで、現在最も重要なベース奏者。本作はジョン・ケージ、ジャチント・シェルシらの作品集（彼女はパリ国立音楽院の出身であり、現代音楽専門の演奏集団アンサンブル・アンタルコンテンポランや２Ｅ２Ｍに在籍したこともある）。タイトル通りに、深々と流麗なアルコとさわりを含んで硬く輪郭を際立たせたピチカート、闇の中から浮かび上がる荘重な聖歌、何物をも射通すオペラティックなヴォイス、凶々しい力を秘めた異言は、すべて比類なき強度に溢れている。なお、彼女と一音の内部に折り畳まれた襞の深奥を凝視し続けたシェルシとの親交は厚く、献呈を受けた作品もある。シェルシ作品集「Okanagon」（hatART）を参照のこと。（福島）



JOËLLE LEANDRE
Urban Bass
CD/ADDA 581254 '91年

コンポーザー・パフォーマーたる彼女の多重録音を駆使した自作自演集。次第に高まっていくアルコ・ベースの牧歌的な交錯が緩やかに始まりを告げると、バンシーのように荒れ野を渡る声が遠く呼び交わし、タクシーを呼び止める声が交通混雑の騒音に掻き消される。ベースを背景に続けられる独白、古典有名曲の引用、したたかに打ち鳴らされる弦、ズタズタに寸断されたパッセージ……。全体は一編のドキュメンタリーあるいは日記映画のようだ。ここには媒介者たる彼女のすべての側面が集められている。日記、予定表、ポートレイト、思いつきを書き留めたノート……。彼女の姿も、彼女の眼差しがとらえた世界も、同じ日常のひとコマとして同等に映し出され、生活と作品は分かち難くひとつとなっている。（福島）



JOËLLE LEANDRE'S CANVAS TRIO
L'Histoire De Mme.Tasco
CD/Hat Hut hatART CD 6122 '93年

ただならぬ親密さに浸されたジンガロとのデュオ（別項参照）に、シュヴァイツァーの共同作業者を務めたルディガー・カール（acc, cl）が加わり、エロティックに溶け合う弦の音色や、オペラティックに引きつったヴォイス、そして何よりもむせかえるような世紀末の香りを増殖させる鏡となる。女主人と年老いた二人の執事が繰り広げる（ダニエル・シュミットの〝今宵限りは…〟を思わせる）一夜の秘めやかな倒錯的儀式。とりわけ終曲（カール作曲）において、仲睦まじくもつれあうように飛ぶ二羽の海鳥をよそに、アコーディオンが紡ぎ出す、カルロス・ダレッシオ（〝インディアン・ソング〟はじめマルグリット・ディラス御用達作曲家。アルゼンチン出身）がうつむいたような旋律の美しさは狂おしい程に胸に迫る。（福島）



JOËLLE LEANDRE & IRÈNE SCHWEIZER
Cordial Gratin
ＬＰ/FMP FMP 1160 '87年

パーカッシヴな奏法による簡素で印象的な音型を巧みに用い、間髪入れず素早い合いの手を放り込み、また組み合わせ増殖させて構成的なソロを取るシュヴァイツァー（p）と、緊密な応答回路を張り巡らしながら、弦の軋みやオペラティックなヴォイスの粒だちによって、そこから踏み出そうとするレアンドゥル。二人の共演は、かつてISが結成した伝説的なフェミニスツ・インプロヴァイジング・グループの流れを汲むもので、レアンドゥルはこの人脈において、やはりISの主宰する女性即興演奏者のプールであるカネイユへの参加や、リンジー・クーパー及びマギー・ニコルス（vo）との「ライヴ・アット・バスティーユ」、IS、ニコルスとの「レ・ディアボリーク」等の豊かな成果を残している。（福島）



JOËLLE LEANDRE & JON ROSE
Les Domestiques
ＬＰ/Konnex ST 5019 '88年

電話のベル、バスタブの水音、ガラスの破砕音、走り回る靴音、犬のうなり声……タイトル通りに混入される様々な生活環境ノイズ（二人によって「演奏」されている）。背景をなす環境音ごと即興演奏を収録する試みは以前からあった。ロケーションを含めた演奏の全体性の再現。しかし、ここでそれらは背後へと退かず、テープ上へ一回定着されたことによって獲得した強固な物質性を剝き出しにして、演奏の現場へと踊り込み、交通事故だらけの一種の戦争状態をもたらす。変形楽器の過剰さに棲みつくあまり、モノローグ的な演奏に陥り易いローズ（ここでも19弦チェロほかを弾いている）に、それを許さないのは、この決して内部化し得ない物質性である。とすれば、タイトルは一種反語的に響くこととなろう。（福島）



JOËLLE LEANDRE&CARLOS ZINGARO
Ecritures
CD/ADDA 590038 '90年

しかしこの艶やかに親密でしなやかに自在な空間はいったい何か。連ねられた15の小曲は、全て漏れきたる僅かな明かりのもとで繰り広げられる黙劇を思わせる（抑制された動作の反復と引き伸ばされた平担な持続が、信じ難い劇的強度を呼び込む）。あるいは蠟燭の灯に浮かび上がるジョルジュ・ド・ラトゥールを。明かりを巡らすにつれ、炎の揺らめきとともに次々と照らし出される各部は、最初から絵画の一部としてそこにありながら、まるで光の黙劇の一場面のように現れる。聴き進むうち、いつしかこの濃密にして甘やかな深みへと緩やかに沈んでいき、寂しさゆえひとり語る声に遠く応える石壁の反響のように、呼び交わし寄り添ってついに重なり合う弦の揺らめきを、ぼうっと見上げている自分に気づく。（福島）



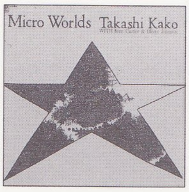
JOËLLE LEANDRE & ERIC WATSON
Palimpseste
CD/Hat Hut hatARTCD 6103　'92年

弦をしたたかに打ち鳴らし、弓を激しく震わせて楽器を責めさいなんでは、苦しげに呻き異言を唱えて、暗く奥深いエナジーを解き放とうとするレアンドゥルと、輝かしくも強靱な理性と透徹した音によって、そうした凶々しい力を封じ込めようとするワトソン(p)。ここには、かつてレアンドゥルがデュオの中で切り開いた回路、すなわちシュヴァイツァーとの間に張られた緊密な回路も、ローズと彼女をもろともに巻き込んだ環境音の唐突な噴出も、ジンガロと寄り添い合った滑らかで親密な広がりもない。二人が全く距離を介さずに対峙するなか、音は生まれるそばから激しく衝突し合い、ふたつの層は互いを侵食しながらひとつに重なり合う。魔女と悪魔祓い師のように。あるいはピアニストの左手と右手のように。　(福島)



加古隆
Night Music
L P/Sun SR 109　'77年

東京芸大大学院修了後、パリ・コンセルヴァトワール作曲科で学びながら（メシアンに師事)、豊住芳三郎(ds)やノア・ハワード(as)との共同作業等を経て、全編ソロ・ピアノによる本作を'74年に録音。ソロ名義の処女録音となる。ハワード作品２曲と自作曲６曲により構成されており、最近人気を博した「グリーンスリーヴス」等とは一線を画した、崇高さを希求する切り詰められ透徹した響きとほの暗いロマンティシズムを秘めたエナジー、垂直に切り立った危機的なリリシズムがみなぎる鮮やかな達成を示している。本作の張り詰めた流れを聴いて、最初に思い浮かぶあるべき共演者は富樫雅彦だろう。実際、コンセルヴァトワールを最優等で卒業後の帰国コンサート（'77年）は彼のグループを招いてのものだった。　(福島)



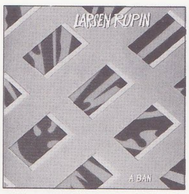
加古隆
Micro World
L P/トリオ PA-7175　'76年
CD/クラウン BRJ 4034

フランスの音楽シーンと直接関わった日本人が何人かいる。ジャズ・ファンには特にアヴァンギャルド・シーンとの関わりで加古隆、沖至の名がたちどころに上がるだろう。加古隆は東京芸術大卒業後、フランスに留学し、パリ国立音楽院でメシアンに師事。現代音楽の作曲家として出発しながら、ピアニストとしても活動を開始し、在学中よりフランスのミュージシャン達と共演。一時帰国直前にケント・カーター(cb, vc)、オリヴァー・ジョンソン(d)、イレーヌ・アイービ(vln, vo)を迎えて制作した４thアルバムである本作には、そうした彼の音楽の硬質の煌めきが美しく結晶している。これが後のTOK結成の布石となった。現在は日本で活躍し、ソロ・ピアニストでポピュラリティーを獲得している。　(坂本)



KLIMPEREI
Tout Seul Sur La Plage En Hiver
L P/AYAA cdt0590　'90年

クリンペライは、ピアノやギターなどアコースティックな楽器を用いて、キュートでキッチュでポップなおもちゃ箱サウンドを奏でる２人組のユニット。ライヴ演奏は一切行わず、'86年の結成以来、密室的な自主制作カセットをリリースし続けている。過去のカセットからの抜粋を含んでいるが、このアルバムが彼らの初めてのＣＤである。センチメンタルかつノスタルジックなサウンドは、しばしばパスカル・コムラードとの類似性を指摘されるが、彼らの音楽はよりナイーヴで無垢で内向的、作意もなく、コムラードがときおり見せるラテン的パッションにも欠けている。タイトル通りまさに「冬の海辺でただ独り」の趣き。　(渡邊)



LARSEN RUPIN
A Ban
CD/AYAA CDT　0292　'92年

同じくAYAAのL'ENSEMBLE RAYÉと絡むと聞いて、酒落た、軽妙なタイプかと思われる方もあろうが、大はずれ、ぶっ早いテンポでせわしなく曲調の変わりまくる、変拍子押しまくりバンドである。その勢いの良さはX-LEGGED SALLYやCHAINSAW JAZZなどを思わせたりする。もっとも編成がドラムス、サックス兼ヴォーカル、ベースの三人のみなのでエトロン・フーのように各楽器の隙間を意図的に利用したタイプでもある。クリアーな録音も手伝って一人一人の存在感が強いのも曲自体のメリハリを付けるのに役立っており、疾走型バンドにえてして見られる単調さはない。レコメン系新世代グループの中でもインパクトの強さでは上位を争う出来。もっと聴かれるべき一枚。　(中西)



LOOK DE BOUK
Lacrimae Rerum
L P/AYAA dt0885　'85年

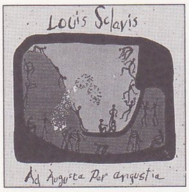
ルク・ド・ブクは奇才エティエンヌ・イマラヤ率いる異色のバンド。ぺらぺらのシンセサイザー、色々なおもちゃやガラクタに電気ギター。キッチュで可愛い機械仕掛けのアンサンブル。でも全体を覆っているのは、おもちゃ箱をひっくり返したような楽しさではなく、一抹の哀愁、どこか人を寄せつけない神経質さである。ZNRの「Barricade3」、カトラ・トゥラーナの１stに共通する密室的なセンスだ。ゲストには元デビル・メントールのジャン＝モーリス・ロッセルとセドリック・ヴュイユ、ダニエル・コスコヴィッツ（ソワサン・テタージュ）らの他、マルシャル・カントレルなる人物が参加。アレンジを変えて３回演奏される曲は〝フエルディナン・シュヴァル〞。ここにもまた独身者の機械＝音楽が。　(渡邊)

LOOK DE BOUK
Bec Et Ongles
CD/AYAA T. I. C. 0890　'92年



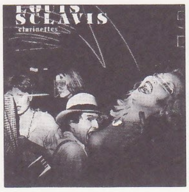
ギタリストが抜け、男２人、女１人の３人組となった２作目「嘴と爪」。インストゥルメンタルからヴォーカル中心へとスタイルを変え、前作にも関わっていたジャン＝モーリス・ロッセルのプロデュースにより、ポップで楽しいおもちゃ箱サウンドになっている。カズーや笛、おもちゃの楽器、ガラクタなどの音にチープなシンセをかぶせたキッチュな演奏と、音程の定まらない童謡のようなヴォーカル。何ともいえない摩可不思議な雰囲気に満ちた、へたうま脱力ポップ。ロウ・ファイではあるが、アヴァンギャルドと言うにはあまりに可愛い。ラッシュ・ホルメル(元サムラ・ママス・マンナ)の曲のカヴァーも秀逸。カモ(？)が緑色のスーツを着たヘンなジャケットも最高。（渡邊）

LOUIS SCLAVIS
Ad Augsta Per Angustia
ＬＰ/Nato Nato 14　'81年
CD/Nato 600340



先立つワークショップ・ド・リヨン（この仏のAECとも言うべき重要グループについては『ジャズ批評』81号の大里俊晴氏による紹介を参照）の一員としての録音に続くソロ第一作は、オリーヴ油とニンニクの香りに満ちている。おそらくは演奏に伴うコミカルな仕草に誘われて、聴衆がこらえきれずに爆発させる笑い声と共に始まり、音色の、フレーズの、テンポの鮮やかな対比は、ほとんど「サウンドの劇場」と言ってよい程で、曲がりくねった回廊を鮮やかに駆け抜ける、異国の舞姫を思わせる優雅な身のこなしを聴くことができる。ここで音楽は交通の網の目たる地中海の豊饒さと台所の猥雑なエナジーを帆いっぱいにはらんでおり、こうした要素は最近のECMにおける諸作では聴き取りにくくなっている。（福島）

LOUIS SCLAVIS
Clarinettes
CD/IDA Records IDA 004CD　'85年



思いがけず来日を果たしてしまったルイ・スクラヴィスの重要性はいくらでも強調すべきだろう。ジャズ／現代音楽／民族音楽を同時に極め、スクラヴィスは現在、世界の音楽シーンでも突出したミュージシャンの一人となっている。本作はタイトルでも判るように彼のクラリネット多重奏に焦点を当てたアルバムで、２曲ほどパーカッショニストの参加した演奏も含まれているが、後はすべてスクラヴィスが一人で演奏している。読者にはＹ・セファーの「Adama」を連想してもらってもいいだろう(まさしくピッタリの連想だ)。クラリネットの多重奏が果たして面白いだろうかと思うリスナーもいるだろうが、これが申し分なく面白いのは、スクラヴィスが民族音楽を研究して来たためにほかならない。（坂本）

LOUIS SCLAVIS
Chine
CD/IDA Records IDA 012 CD　'87年



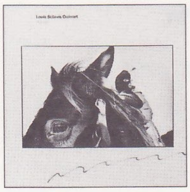
この９月（'94年）に来日し、個性と調和がギリギリの所で拮抗したとてつも無い演奏を見せたスクラヴィスのカルテット。現在ヨーロッパでトップに位置するアンサンブルである。'87年の本作はソロ名儀ではあるがピファレリ、シェヴロンと言った主要メンバーが既に加わっており、実質的にはグループ作と言えよう。(自国以外の物も含めた）トラッドや近代クラシックと言った様々なヨーロッパ音楽とベースにしたシリアスながらも瞬発力のある音はヨシコ・セファーのそれに匹敵する程の強度を持つ。殊に本作では、ドラムス、キーボード類を配し、前期諸要素を絡めた楽曲にジャズ・ロック的な走りもあるので入り易いと思う。繰り返すが、現在のヨーロッパのトップ・アンサンブル。傑作。（中西）

LOUIS SCLAVIS SEPTET
Chamber Music
CD/IDA Records IDA 022CD　'89年



個定したメンバーで続けて行く事により、アンサンブル総体としての熟成をはかるスクラヴィスとしては、異色作になるのだろう、レギュラー・ドラマーを外して、Ｙ・ロベール（トロンボーン）、Ｍ・ゴダール（チューバ）、Ｐ・ドゥシュペ（ギター）を迎えている。タイトルにあるように、チェンバー、ミュージック（室内楽）を目指したと言う事か。チェンバー・ロックでは無いので注意。でも、この際、間違えてしまってもかまわないだろう。打楽器を外す事により、弓弾きパートと呼応するピチカートの激しさが強調されている。これの奇数拍子のたたみ掛けと不安定ながらも鋭いヴァイオリンやリード、更には時にソロを交えた低音管楽器からなるアンサンブルはゼロやセファーに通じるインパクトがある。（中西）

LOUIS SCLAVIS QUINTET
Rouge
ＬＰ/(Ger.)ECM 1458 511029-1　'92年
CD/(Ger.)ECM 1458 511029-2



ECM移籍第一弾。メンバーに変動は無く、近代クラシックや各地のトラッドなどを取り込んだ音楽性にも変化は無いが、彼等のディスコグラフィの中では比較的、地味な印象を与える。独奏パートや小編成による寡黙なインター・プレイが多いせいもあろうが、全体に多少、振幅が弱くなり、静のパートが増えている事は確かだ。勿論、当代一のアンサンブルだけに、良く聴けば各パートのテンションの高さは相変らず凄い物なのだが、通してのメリハリが若干、弱いか。これがレーベル移籍と関係があるのかどうかは良く判らないが、次作では（基本メンバーはそのままに）編成をある程度変える事からバンドとしての過渡期だったとも考えられるが、どうか。（中西）



SCLAVIS/PIFARELY/DUCRET/ CHEVILLON
Acoustic Quartet
CD/ECM Records ECM 1526　'94年

「Rouge」に続くスクラヴィスのECM第２弾。前作のクインテットからキーボードとドラムスが抜け、代わりにギタリストのマルク・デュクレが参加している。いよいよ周辺の重要ミュージシャン達がこぞってECMのターゲットに含まれることになりそうだ。デュクレの参加はドラムスの不在を補って余りあるものになった。アコースティックでドラムレスというと、退屈な音楽を想像する読者もいるだろうが、メンバー各人が奏でる力強い旋律が強度の高いアンサンブルを形成し、微塵も揺るがぬ稠密な構造性をかちえている。ある局面ではクラシックの室内楽にも匹敵する高潔さに達し、それでいて決して近寄り難くないのは、やはりスクラヴィスの背景にあるトラッド・フォークの素地が作用している所為だろう。　（坂本）



QUINTET CLARINETTES
Musique Têtue
CD/Silex Y225001　'90年

バスク、カタロニア、オクシタン、サルディニア、ブルターニュ、ジプシー、地中海！……言わば地理的(国境線を越えて)／ジャンル横断的（先鋭的なジャズ・ミュージシャンの起用による洗練されたモダニズムの導入）に拡張された「フランス民族音楽」の探求を続ける、現在フランス最注目レーベルSilexの第一作は、南仏リヨン出身のスクラヴィスと北仏ブルターニュ出身のクラリネットのみから成るクインテットの共演。後に述べるトリオ・ド・クラリネッツのパフォーマティヴな自由度の高さに対し、こちらはアレンジとアンサンブルの可能性探求に比重が置かれており、トラッドの馥郁たる香りを豊かにたたえたメロディが、たおやかな速度と典雅な音色により、淀みなく滑らかに繰り広げられている。　（福島）



TRIO DE CLARINETTES
Live
CD/FMP CD 39　'91年

鮮やかな超絶技巧と卓抜なユーモア、思いがけないひらめきに溢れた彼らの演奏は、楽器の同質性を基盤としながらも、むしろそれゆえに、僅かな抑揚の差異や声音の違い、息のかすれ／にじみが、各人の「声」を交換不可能なものとしてしまうような地平を前提としている。この身体性を刻印された語りの卓越こそが、②で聴かれるヴォイスの応酬や他の二人の寝息(！)の上でか細く紡がれるオーヴァートーンといったパフォーマティヴな演奏を支えている。スクラヴィス(cl, bcl)、ジャック・ディ・ドナート(cl, bcl)、アルマン・アンステ(cl, bcl, contra-bcl)のうち、ディ・ドナートはかつてミュージーク・ヴィヴァンの一員であり、ここでもアンステとのデュオでピエール・ブーレーズの〝ドメーヌ〟を採り挙げている。　（福島）



LUC FERRARI
Brise-Glace
CD/ADDA 581089

1929年生まれのフェラリは、器楽作品と電子音楽とを真に等価に使いこなせる数少ない作曲家の一人である。メシアンに師事したが、決定的な影響を与えたのは、ヴァレーズとの出会いであった。初期の彼の作品の楽譜には、ヴァレーズによる鉛筆の直しが入っているという。フェラリはシェフールの率いる音楽研究グループ（GRM）に参加していたが、'63年GRMを去ってから、電子音楽と器楽の両方を総合するような作風に変化している。《独房75》（1975）では、ノイズ・ロックにも通じる響きに至っていた。この《氷砕船》は、フェラリの〈逸話的音楽〉の流れに属するもので、オーケストラと電子音をもとにして編まれた音響ドラマで、初期からの彼の音楽の特徴であるテープによる反復が効果的に用いられている。　（五十嵐）



LUC FERRARI
Céllule 75-Collection 85
ＬP/ADDA 581010　'86年

ソニック・ドラマ的コンクレート作品の多いフェラーリの異色作２曲。〝Cellule '75〟はオリエンタルなピアノとパーカッション、テープが織りなす催眠的/覚醒的ミニマル・ミュージック。〝Collection '85〟は、ZNRの「Barricade 3」やアクサク・マブールの「Onze danse...」を想起させるエキセントリックな小品集。ピアノにシンセサイザーとテープ・コラージュをかぶせ、諧謔と機知に富んだ23のオブジェを陳列する。ワーグナーやシューマン、リストやブラームスからの引用やパロディが現れるかと思えば、〝A嬢の物語〟では電子音にムチ打たれた女性があえぎ声をもらす。いまだ先鋭的な過激さを失わない電子音楽界の巨匠フェラーリの、アヴァンギャルド・ロックに通じる一面を窺わせる傑作。　（渡邊）



LUC FERRARI
Matin Et Soir
CD/ADDA 581156　'89年

リュック・フェラーリは普通の音楽ファンがイメージする現代音楽の作曲家からは大きく逸脱した作曲家だろう。こういう作曲家だと思ったその印象は、ほかの曲を聴くと簡単に覆されてしまうことがあり、フェラーリ観は一朝一夕には養えない。その意味では、多分一番オーソドックスな現代音楽作品を集めたこの「朝と夕」と題されたアルバムは、取り敢えず導入部として相応しい。ピアノ、タンバリンとテープのための〝失われたリズムを求めて〟('78)、ミュージック・コンクレート作品〝私は切り落とされた〟('69)、ラジオ・フランス委嘱オーケストラ曲〝歓喜と悲嘆の歴史〟('81)の３曲が収録されており、どれも大変判り易い。〝歴史〟など、普通のクラシック・ファンに聴いてもらいたいほどだ。　（坂本）

LUC FERRARI/HENRY FOURÈS
Avec Le Vivant Quartet Électronique
CD/ADDA 581088 '80年



さて、リュック・フェラーリはオーソドックスな現代音楽作品を書いている作曲家だと理解したリスナーは、このアルバムを聴くと目が点になる。思わず中身が違っていないかを確認してしまうほど、あなたの予想を裏切るからだ。本アルバムにはフェラーリの器楽アンサンブルとテープのための〝エクリチュールについての反省第３番〟と、アンリ・フーレの〝インタヴュー第１番〟、〝コルベール通り９番地〟の３曲が収録されている。〝反省〟を演奏しているのはLE VIVANT QUARTETとあり、その編成を見るとg/fl & sax/pf/percとある。これはロックとかジャズの編成ではないか。そう、まるでユーロ・ロックのような曲調で始まり、トラッド色、ジャズ色が平気で顔を出すのだ。面白過ぎる。一聴の価値あり。（坂本）

LUC FERRARI/DAVID JISSE
Brise-Glace
CD/ADDA 581079 '87年



何故フェラーリの音楽がこうも捉えがたいのかと言えば、彼の関心がマチエールとフォルムの連結、媒体と視線の連結にあるからだ。そうした彼の特異な音楽観が異形のフォルムに結実した傑作（あるいは問題作）がこの「砕氷船」だ。ラジオ・フランスの委嘱で北極海を行く砕氷船をテーマにしたマルチ・メディア・シンフォニーを仕上げたのがフェラーリの〝もしも私が今のままならば…〟であり、またダヴィッド・ジスの〝私は決して同じままではいない〟だ。フェラーリ作品は朗読とオーケストラと自然音で構成されており、ジス作品は朗読とミュージック・コンクレートで構成されている。どちらもまるで夢と現が交錯するような摩訶不思議な音楽であり、未知なる航海を体験できる。（坂本）

MICHEL DONEDA
Terra
L P/Nato Nato 532 '85年



相棒ドミニク・ラズロ(as)と離れたドネダが、民族音楽への傾倒を思いっきり明らかにした傑作。ベニャ・アチアリ(vo)、ジェラール・シラクーザ(perc)ら常連が放つ、まだ若い地酒や香草詰め料理の並ぶ食卓を思わせる生のままの鮮烈な香りの饗宴（シャーマニスティックに解き放たれたアチアリのヴォイスの聴く者を金縛りにする張り詰めた強度と、ノンブレス・マルチフォニックスやロング・トーンによるドネダの倍音領域への苛烈なアタック、焼付色タイルを思わせる目の覚めるような音色を駆使してシラクーザが編み上げる目にも綾なポリリズム）を、英Beadレーベルから参加のフィル・ワッシュマンの操るヴァイオリンとエレクトロニクスが、束の間緩やかに溶け合わせて、混然一体馥郁たるハーモニーを醸し出す。（福島）

MICHEL DONEDA
L'Élémentaire Sonore
CD/ADDA 590107 '92年



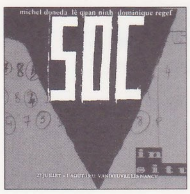
８曲中２曲でドミニク・ルジェフが加わるのみの無伴奏ソプラノ・ソロ集。ノンブレス・マルチフォニックスによる素早い遷移のただ中から、幾重にも重なり合うさざ波のように、もつれ合う倍音が立ちのぼり、限界まで引き伸ばされたロング・トーンの内部から、込められた息のざわめきが多声となって頭をもたげる。青写真をなぞるのではなく、今鳴っている音に耳をそばだて、目を凝らして、一音を編み上げ成り立たせている複数の流れ、それらがぶつかり合う潮騒の手触りを感じ取ることから、この即興は始まっている。こうした場に対する身体のチューニングを通じて、音の内側に多声の空間を開いていく演奏の在り方は、むしろ韓国のアルト奏者カン・テーファンを思わせる。交通空間への限りないオマージュ。（福島）

MICHEL DONEDA, DAUNIK LAZRO
Général Gramofon
CD/Nato 53028 2 '88年

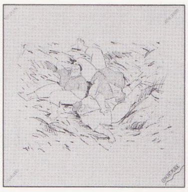


ギタリストが共通する事もあり、多少、同レーベルのロンリー・ペアーズを連想させる所があるが、制作時期からして偶然だと思う。ソプラノ、アルト二本のサックスにg、b、dsの五人編成。英仏混合もしくは多国籍。このレーベルにはこの手が多いが、実は昔からジャズ・ミュージシャンは楽器片手に動き回っていた訳で何も今に始まった事では無い。早いテンポで切り返しの多いリズム、エキセントリックなギターにリーダー格二人が土着的、空間的フレーズを応えて疲走する。総じてアグレッシヴで力強いが、間の取り方が効果的なので、勢いにまかせたと言う印象は受けない。CMPやCuneiform系のジャズ・ロックを追っている人にはレーベル共々要注意。時として見られる切迫感も魅力的。（中西）

MICHEL DONEDA, LE QUAN NINH, DOMINIQUE REGEF
Soc
CD/ADDA 590163 '93年



前掲作のラズロがルジェフに交替してのトリオ。演奏の焦点は音の遙かに微視的な領域に移行しており、それとわかるフレーズを排した、一見とりとめなく希薄な平坦さ（時にラモンテ・ヤングをすら思わせるドローン）のうちに、信じがたい速度／強度に満ちた苛烈な戦争状態が開けている。ソプラノの震えるロング・トーンに、空間を横切って長く尾を引くゴングの一打に、胸を掻きむしるようにして刻々と生み出されるヴィエル・ア・ルーの持続に、演奏の背景をなす静寂にさえ、至るところ粒だつ響きがぶつかり合って弾け飛び、群衆が怒濤とざわめき、悲鳴と怒号が飛び交う様を見て取ることができる。クセナキスを彼方に望みながら、パニワグァ・アンサンブルとオルガヌムの間を埋めるパーカッシヴな達成。（福島）



MICHEL DONEDA, DAUNIK LAZRO, LE QUAN NINH
Concert Public

L P/VAN D' ŒUVRE 8903 '89年
CD/ADDA 590037 '90年

2匹の蛇のように絡み合いもつれ合って、駆け昇り駆け降りる2サックス(as, ss)を、時にあからさまにシャーマニックな金属音によって、緩急自在に煽り立てるパーカッション。あきれる程に簡素なセッティングから、なんと豊饒で薫り高い音楽が生み出されることか（ミクロな衝突や飛躍に満ちた響きの粒だちが、岩間を走り抜ける細流となって、激しく渦を巻きしぶきを飛び散らせ、聴く者を揺さぶりたてて、熱狂の中心へと運び入れずにはおかない)。この音楽は、バザールの猥雑なざわめきと抜目ない素早さに溢れている（大道芸の逞しさ)。なお、レ・カン(perc)は現代音楽領域で活躍するパーカッション・グループ「ヘリオス・カルテット」にも所属し、ジョン・ケージ作品等の録音を残している。（福島）



MICHEL GODARD
Le Chant Du Serpent

CD/La Lichere CD LLL 37 '89年

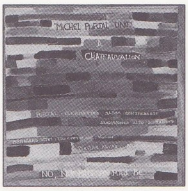
チューバや、その原型と言うべき古楽器セルパン（その名の通り蛇が§字型にうねった形をしており、音色は丸くほら貝に似ている）の多重録音が織り成す抑揚豊かな起伏を、5人の女性ヴォーカリストに横断させた本作は、ゆったりとした心地よさをたたえながらも、多彩な音色と繊細な息づかいに溢れている。彼は自身のグループであるインヴィジブル・トリオやランコントル（バグパイプ・オーケストラ「バガ・ケンパール」との壮絶な共演作(Silex)あり）のほか、オルケストル・ナショナル・ドゥ・ジャズや現代音楽演奏集団アンサンブル・アンタルコンテンポランにも参加しており、最新ソロ「アボリジニ」('94年）では、ヴィヴァルディの「四季」をチューバで吹くという暴挙に出て成功を収めた。（福島）



MICHEL PORTAL
Alors !!!

L P/Futura GER 12 '70年
CD/FD Music 152072

これはヨーロッパの先鋭的なジャズ・ミュージシャンを統合した画期的なグループ、MICHEL PORTAL UNITの伝説的なアルバムであり、'93年に漸くCD化されている。本アルバムでのメンバーは主役のポルタル(as, b-cl)のほか、ジョン・サーマン(bs, ss, b-cl)、バール・フィリップス(cb)、ステュー・マーティン(ds)、ジャン＝ピエール・ドゥルー(perc)の計5人。ポルタルは'60年代から現代音楽畑でその名を知られたクラリネットの名人であり、それと並行してフリー・ジャズ・シーンでも活躍。そうした活動の代表的成果として知られた作品だ。今聴き直すと、割とありがちな音にも聞こえてしまうが、どこかでジャズを超越する瞬間があり、演奏の鋭さにはやはり特筆すべきものがある。編集も少々奇抜。（坂本）



MICHEL PORTAL
No, No But It May Be

L P/Le Chant Du Monde LDX 74526 '72年

フレンチ・フリーの処女作「フリー・ジャズ」('66年）に参加し、また現代音楽演奏集団ミュジーク・ヴィヴァンに加入。さらにグロボカールらとニュー・フォニック・アート（別項参照）を結成するなど、'60年代をシーンの核として過ごした後、'70年代をメンバーの流動的なユニットを率いて活動。本作はその時期の代表的ライヴ。「フリー・ジャズ」参加のB・ヴィテ(tp)、B・ゲラン(b)に加え、コエルメック・アンサンブルからレオン・フランシオリ(b)、スイスからピエール・ファーブル(perc)を迎え、低音域を中心に、切り立った硬質の音色と内に沈潜したフリーキーなエナジーが拮抗し、異様なまでの緊張感を最後まで持続させさらにタミア（別項参照）の初録音（出番はごく僅か）という超豪華メンバー。（福島）



MICHEL PORTAL
Turbulance

CD/Harmonia Mundi HMC 905186 '87年

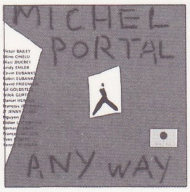
ヨーロッパきってのマルチ・リード奏者、ミシェル・ポルタル。クラシックからフリーまで幅広い活動を見せる彼ならではの分類不能な作品。A・エムラー、H・ペプル、J・F・ジェニー・クラーク、M・シヌル、J・トップ、C・バルテレミ、R・ガリアーノ等々と言うメンバーは凄いが、これはあくまでもポルタルのアルバムであり、彼等はあくまでも適切な彩り。彼の(多くは重ねられた)リードとパーカッションによる、各地の伝統音楽もモチーフとしたパートを主に、エレクトリック・バンドとしてのパート／曲を交えるが、どちらにしてもテーマのみ安易に借りて来た物では無く、感覚の鋭さを基にした綿密な計算がされている。白熱する場面や、瞬発的な切りこみの冴えもあるが、理知的な作風。（中西）



MICHEL PORTAL
Men's Land

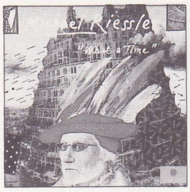
CD/Label Bleu LBLC 6513 '87年

このアルバムをここで採り上げると違和感があるのは、ポルタルの音楽が現在大きな振幅を持っていることの現われであり、ポルタルというミュージシャンの器量の大きさに今更ながらに感嘆してしまう。ジャック・ディジョネット(ds)、デイヴ・リーブマン(ss)、ミノ・シネル(perc)、J－F・ジェニー＝クラーク(b)、ハリー・ペプル(g)を迎えてのヨーロッパ・ツアーの模様を記録したライヴ・レコーディングであり、当時のディジョネットのSPECIAL EDITIONの拡大版といった趣だ。こういったミュージシャン達が信じられないほどその音楽に集中し、見事な名演を繰り広げている様は大いなる驚異だ（私は当時目から鱗が落ちる思いだった)。現代ジャズ・シーンの正統派の成果として記憶されるべき傑作。（坂本）



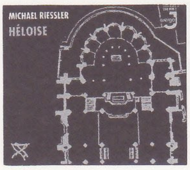
MICHEL PORTAL
Anyway
CD/Label Bleu LBLC 6544　'93年

古くからフランス・ジャズ界で活躍してきた管楽器奏者の'91年から'92年にかけての録音を集めた作品。曲ごとにあちこちのスタジオで異なった編成で録音されたものだが全体の統一感もちゃんとあり一本筋が通っている大分ジャズ寄りのジャズ・ロック。そのゲスト奏者なのだが驚くような顔ぶれで、Label Bleuの要注意人物Nguyen LeやAndy Emler、CMPからTrilok Gurtu、David Friedman、更にはDidier Lockwood、Marc Ducretらも。それぞれの曲で各奏者の味をしっかり出しながらちゃんと自分が中心となっている辺りはなかなか巧い。前半３曲で演奏しているT.Gurtuが圧倒的な個性を発揮しており、また２曲目でのD.Lockwoodの演奏はかなりキレている。この路線ではかなりの名作。（伊藤）



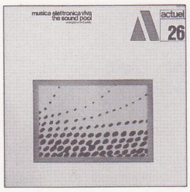
MICHEL RIESSLER
What A Time
CD/Label Bleu LBLC6537　'91年

ミッシェル・リースラーはスクラヴィスに続いて登場して来たクラリネットの逸材だ（どうしてフランスにはクラリネットの名手が次から次へと登場するのだろう）。クロード・バルテレミー率いるO.N.J.に起用されたのとほぼ同時期のレコーディングによるリーダー作であり、バルテレミー(g, b)は勿論のこと、ジェラール・シラクサ(ds, perc)、ヴィンコ・グロボカール(tb)、ミッシェル・ゴダール(serpent)といった相当硬派のゲスト達が参加している。表現としてはまだ大分堅さが残っている分、成長途中という印象も受けるが、演奏およびアンサンブルの技術には恐ろしいほどの切れ味がある。27分にも及ぶ組曲に挑戦するなど、恐れを知らない者の勢いすら感じさせる。これからが大変楽しみだ。（坂本）



MICHEL RIESSLER
Heloise
CD/Wergo　WER 8008-2　'93年

NOJはじめ、彼の活動歴がそこで得た人脈を通じて、壮大な組曲へと仕立てられる。ドナウエッシンゲン音楽祭という場と欧州オール・スターの編成、ワールド・ミュージック的色彩、コラージュ風の組曲構成は、ちょうど四半世紀前のドン・チェリー「永遠のリズム」初演の遠い記憶を呼び覚まさす。しかし、両者の間にはワールド・ミュージック以前／以後の断層が明らかに横たわっており、後者においてガムランが発見の驚きとともに引用されていたのに対し、ここで導入されたヴィエル・ア・ルー、ウード、ツィンバロン、アコーディオン、セルパンは、エスニック食材のように皿の上で自在に混ぜ合わされ、彼は滑らかな風景の移り変わりのうちに、地理的・歴史的に普遍化されたヨーロッパを展望している。（福島）



MUSICA ELETTRONICA VIVA
Sound Pool
ＬP/BYG Actuel 26　'69年

MEVは仏のグループと言うよりは、イギリス(Polydor)、アメリカ(Mainstream)、イタリア(Holo)等に録音を残す無国籍な集団即興のグループ。BYGに於ける本作は割に入手も容易で、且つ内容的にも彼らの音を伝える好サンプルであろう。F･Rzewski、A･Curran、R･Teitelbaumといった著名な現代音楽家が中心となっているが、彼らそれぞれの作風と全く異なるのが面白い。全体を支配するのは異様な熱気をはらんだ〝場〟の継続とも言うべきもので、聴衆も参加している為､他に類を見ぬ混沌とした当時のパワーに満ち溢れている。彼らはBYGからはもう一枚「Leave The City」を出しているが、こちらも本作とは全く違った意味で風変わりなアルバム。それ以外のLPはフリー・ミュージック的色彩が極めて強い。（平野）



MUSICA ELETTRONICA VIVA
Leave The City
ＬP/BYG Actuel 35　'75年

MEVに一体何が起こったか(？)的な楽しいアルバム。まずはジャケ裏！。この怪しさいかがわしさは何なのだろう。アメリカのYA HO WA13以上といったらこれしかない。音は一層いかがわしい。電子音やコラージュの中に、呪術を唸える如くうめき声が響き渡り、インドにトリップしたりよれよれのアシッド・フォークになったり、全体がもうろうとぼやけていて、AGITATION FREEの１stで物足りない人はピッタリ。Ａ面がMessage、Ｂ面がCosmic Communionと言うのだから、それだけでたまらない人は聴くしかない。MEVの2ndとは言えど、先の3人の音楽家は当然参加しておらず、前作にも参加していたCoaquette夫妻の指向性をダイレクトに反映した新興宗教ヒッピー版MEVとでも言うべきもの。（平野）



NEW PHONIC ART
New Phonic Art
ＬP/Wergo　WER 60060　'71年

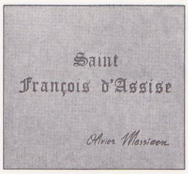
ミッシェル・ポルタル(cl, bcl, sax)、ヴィンコ・グロボカール(tb, alphorn)、ジャン=ピエール・ドゥルエ(perc)、カルロス・ロケ・アルシーナ(p, el-org, fl)により、一切の事前取り決め無しの完全即興演奏を行う集団として'69年４月に結成され、現代音楽側からの即興演奏探求を進める。エレクトロニクスをほとんど使用していないのは、当時のこの種のグループとしては珍しい。ジャズ的なフレーズの交換による対話を排し、演奏は特徴的な音色を用いて、幾何学的なフレーズを空間にちりばめながら、むしろサウンドの重ね塗りを軸に進められる。ポルタル及びグロボカールのその後の活躍については別項参照。またドゥルエは'74年にシアトリカルな打楽器トリオ「セルクル」を結成。'89年に来日している。（福島）



OLIVIER MESSIAEN
Turangalila Symphonie

CD/ポニー・キャニオン PCCL-00014
'87年

『宿命的な愛／肉体・精神を超え、宇宙的な規模に広がってゆくが故に死を呼ばざるを得ないような愛（メシアン談）』をテーマにした〈トリスタンとイゾルテ3部作〉中、最大であると同時に20世紀の交響作品中、確実に次世紀に残ってゆくであろう作品。ピアノ、オンド・マルトノとオーケストラによる壮大な本作は彼の交響作品中、一番メロディアスで親しみやすいと思う。「我が音楽語法」執筆後の重要作品のひとつである本作は、氏の新しい理論書「リズムの教程」で全曲解説されるはずであった。これも様々な指揮者による盤が存在するが、筆者としてはジルベール・アミ指揮のものをＣＤ化して欲しいと思う（オン・エアーのみで、アナログさえ存在していないはず）。 (Chihiro S.)



OLIVIER MESSIAEN
Saint François D'Assise

ＬＰ/Cybelia CY 833-834-835-836
'88年
CD/Cybelia CY 833-834-835-836
NEC アヴェニュー A30C-3002-5

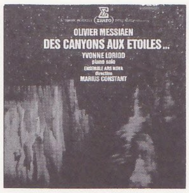
晩年の作品の中では最重要作。「現在、オペラを作れるのは私だけだ」というピエール・ブーレーズの思い上がった発言を意識したかのように制作された大作(実際にはパリ・オペラ座からの委嘱)。'83年に小沢征爾指揮により世界初演され、'86年に日本でも小沢指揮オラトリオ形式（演出は実相時昭雄／彼は「ステージに十字架を出現させろ」というメシアンのリクエストに見事応えた）で抜粋演奏された。雅楽等の邦楽の研究の結果、彼としては新しい手法であるポリ・テンポを導入している。鳥の声を理解したという聖人フランチェスコを題材に選んだところはメシアンらしい（〝鳥たちへの説教〞というパートもある)。この曲は初演時にビデオ取りもされている。ＬＤでリリースされないものなのだろうか。 (Chihiro S.)



OLIVIER MESSIAEN
Quatuor Pour La Fin Du Temps

ＬＰ/Erato STU-70156
CD/Erato ECD 71597

数少ない器楽曲を代表する作品。「世の終わりのための四重奏曲」という邦題で有名。黙示録第10章の天使の「もう時がない」という言葉を受け、『時間の停止』を目指した第５曲/第８曲、プログレ・ミュージシャンにとって変拍子養成ギブス的な第６曲と、興味深い曲が多い。ここではこの盤を選んだが、この曲集を演奏するプレイヤーは世界一線級か、この曲に思い入れの深い演奏者であることが多いので、どれでもそれなりに楽しめるはず。メシアン自身によるレコーディング（捕虜収容所での初演時のチェリストを含む）は、作曲技法上と演奏上でリズムに関して違うスタンスを持っていたのではないか(意識的か無意識的かはわからないが)、と思わせる点が興味深い。このメシアン盤のＣＤ化が待たれる。 (Chihiro S.)



OLIVIER MESSIAEN
Des Canyons Aux Étoiles…

ＬＰ/Erato STU70974-75 '77年
CD/Erato ECD 71584-6

「アメリカの名誉のための作品」という条件を考えたメシアンが、ユタ州を旅行し、この地の鳥の声を採取することによって制作された作品。ピアノ、ホルン、クシロリンバ、グロッケンシュピール、弦楽器群、打楽器群に風の音を現わすエオリフォーン（初めてこの曲でこの楽器を聴いたとき、『何故ステレオから風の音が聞えているのだろうか』といぶかしんだのを覚えている)、大地の音を現わすジェオフォーンという特異な編成による管弦楽曲。風景、鳥の声、星々の描写は、メシアン独特のカトリシズムによって最終的に天国／宇宙へと向かう。ここではコンスタン指揮のこの盤を選んだが、最近は様々な盤が出ている。中にはエオリフォーンがあまり風に聴こえないものもあるので注意したい。 (Chihiro S.)



OLIVIER MESSIAEN
Vingt Regards Sur L'enfant Jésus

ＬＰ/Erato ERA9111-13 '78年
CD/Erato ECD 71597

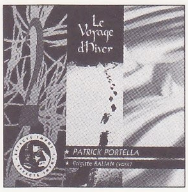
敬虔なクリスチャンであるメシアンらしい題材である。メシアンのピアノ曲に見られる和声は、オルガンの倍音特性から派生したものであり、この作品も非常に色彩豊かである。全20曲からなるこの曲集は〈神の主題〉、〈星と十字架の主題〉、〈和音の主題〉という３つの循環主題により、全曲に統一感を持たせている。こうして出来た20の作品は無秩序に配置されているのではなく、キリスト教的数字解釈（例：６が創造、７が安息）により、巧みに配置されている。ここで取り上げた盤は初演のイボンヌ・ロリオ（この曲は彼女に捧げられている）によるもの。メシアンはロリオというヴィルトーソを得て、演奏者の技術的限界を気にすることなく、作品を書けるようになったというわけだ。 (Chihiro S.)



PANDEMONIUM
Ville Ouverte

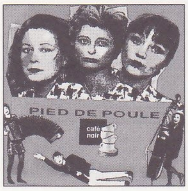
ＬＰ/Atem 7003 '79年

PANDEMONIUMは、おそらくコンポーザー、シンセサイザー奏者のJean-Baptiste Barrièreのコンセプト名だ。彼はこのコンセプトでもう一枚のアルバム「Non、Jamais L'espérance」(Atem 7004, 79年)を発表している。両方ともART ZOYDをシンセサイザーで演奏したようなシアター・ミュージックの印象が強い。「Ville Ouverte」はバリエールが'75年に書いた作品で、彼とJean Marie Barrière(syn)によって演奏されている。とてもスタティックな音世界を作り出しており、効果音のような役割で使われるソロ・プレイに幾らかノイズィさを感じさせる。エルドンやBernard Szajnerのトーン、アール・ゾイの空間幅を合わせたような内容だ。 (松本)



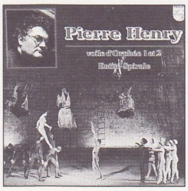
PATRIC PORTELLA
Le Voyage D'Hiver
CD/GMEM EI02 '93年

エレクトロニクスと過剰な声の身振りによって変形し尽くされたシューベルト「冬の旅」。ポルテラの名はZNRのジョセフ・ラカーユとの共同作業によって知られていよう。レコード再生による正統的歌唱の上に重ねられる超ハスキー・ヴォイス（息を吸いながら声を出しているのか？)、突風あるいは高波のように全てを蹴散らすノイズに蹂躙され、雑踏のざわめきに寸断され、重々しく終止型を反復する低弦に疲労し、過剰呼吸に卒倒し、破壊的なテープ・ループに揺さぶられ消耗して、路頭に立ちつくす声。あるいは交通騒音（巨大なトラックが眼前を通り過ぎる)、パーティのざわめき、何物かの動作音。なお、本作はリンツ電子芸術祭（ゲッベルス「南極大渦巻」もここで演じられた）において初演された。（福島）



PIED DE POULE
Cafe Noir
CD/GRRR 2019 '91年

Michèle Buirette(acc, vo)、Geneviève Cabannes(b, vo)、Dominique Fonfrède(vo)による女性トリオ。Bruirette名義の「La Mise En Plis」やPied De Pouleの前作「Indiscréation」における緻密な室内学的アレンジや、様々な実験的アイディアを盛り込んだコラージュ風の物語構成へのこだわりは、それ自体ユニークな特長でありながらも、むしろ彼女たちにとって観念的な檻となっていたのではないか。本作において、たわいない言葉遊びや童謡風のメロディの一片のまわりで、簡単な規則のもとに繰り広げられる演奏が、軽やかに笑いさざめくような速度と運動性を獲得しているのを聴くにつけ、そう思わずにはいられない。まばゆくもたおやかな朝の光の祝福を受けた音がここにある。（福島）



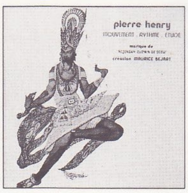
PIERRE HENRY
Voile D'Orphée 1 et 2/Entité/Spirale
LP/Philips 836 887 '69年

ピエール・アンリの代表曲は何かと考えた時、私の脳裡に真っ先に浮かぶのは「オルフェ」だ。ピエール・シェフェールと出会ったことでミュージック・コンクレートの研究にいそしむことになったアンリの、シェフェールとの共同研究の成果のひとつとして生まれた曲であり、改作を経て誕生したのがこの'53年の作品「オルフェのヴェール」だ。囁きつつ昂揚する朗読と、オーケストラの断片と、クラヴサンの響きが織りなす暗く重い音響は、恐怖の感情よりはシュールレアリスティックな感覚の次元へと聴く者の心を誘う。モーリス・ベジャールのバレー音楽として成立している音楽でもあり、そのステージを想像しただけで私は異様な興奮を覚える。この世で最も劇的な音楽のひとつ。（坂本）



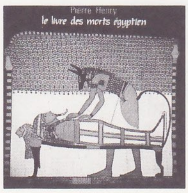
PIERRE HENRY
Messe De Liverpool/Pierres Réfléchies
CD/Mantra MANTRA 023

アンリの作品など殆ど入手不可能だった時代が長く続いていたが、現在ではMantraレーベルにより集中的にＣＤ化が進み、聴いたこともなかった近作までが容易に入手できるようになっている。これは〝リヴァプールのミサ〞('67)と〝反射する石〞('82)の２曲を収録したアルバムだ。〝リヴァプール〞は朗読を中心に淡々と展開するミサ曲で、味も素気もないが、最後になって器楽音を用いたコンクレート音響が控え目に盛り上がる。〝反射〞の方は逆に饒舌な音響が終始鳴り響いており、ハッキリと聴き取れる反復音形は明らかにミニマル・ミュージックをなぞってみせる。巨大なテープ再生機の怪物と格闘してみせる様は殆ど時代錯誤の産物だが、アンリにとってこれは通過すべき必要な実験だったのだと思う。（坂本）



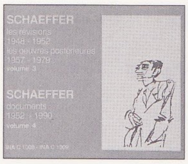
PIERRE HENRY
Mouvement-Rythme-Étude
CD/Mantra MANTRA 024

'70年の作品、「ムーヴマン／リズム／エテュード」は全部で１時間を越す大作だ。おずおずと、まるで始めたくないかのようにそっと反復されるパルス。怯えるが如くに持続を警戒し、反復だけが状況の継続を導いて行く。21の断章からなる組曲であり、局面は決して平坦ではないが、慎重に回避された持続が、恰もミュージック・セリエルのこだわりに似て、何やら「主のない槌」のパロディーじみて聞こえて来る。ブーレーズに見離されたアンリが逆に賢明にセリーにしがみついているかのような振る舞いは、アンリの孤独を物語るようで、些か寂しい。とは言え、この作品もモーリス・ベジャールのバレー音楽であり、その上演ステージを想像すれば、それはそれで随分愉快なものであったのではないだろうか。（坂本）



PIERRE HENRY
Le Livre Des Morts Égyptien
CD/Mantra MANTRA 043 '90年

'90年の新作「エジプトの死者の書」は、やはり１時間を越す大作だ。何より未だに創作活動を継続していたアンリの現在の音楽が聴けるということがそれだけで感動に値する。ミュージック・コンクレートにこだわり続け、何十年も前から時代の先端から取り残されてしまった実験音楽家の冷めやらぬ情熱の純度が眩しいほどの快作だ。IRCAMの委嘱作だということにも隔世の感を覚える。もしかするとこれはもう電子音をも含めたエレクトロニック・ミュージックなのかも知れないが、今更そんなことはどうでもいいだろう（こだわっている者がいるとしたら、それはアンリ自身なのだから)。楽理ではなく、表現を主題とした音楽でアンリの才能は最も輝かしい。彼は原点に戻ったのかも知れない。（坂本）



PIERRE SCHAEFFER
L'Œuvre Musicale
CD/ADDA　INA C 1006〜9　'90年

ミュジーク・コンクレート（MC）の創始者シェフェールの足跡を、'48年から'79年までたどったタイトル通りの作品集成（4CD＋ブックレット）。シェフェールによる講演やセミナーの抜粋までもが収められている。我々はMCというとサウンド・ドラマのようなものを思い浮かべがちだが、実際には本文に述べたように所謂「電子音響音楽」の３つの源泉のうち最も早いものであり、シェフェール自身は数学主義的な12音音楽に対抗する「聴覚による音楽」と考えていた。彼自身インタヴューに「探求は失敗に終わった。ドレミの外側には何もなかった」と答えているが、むしろサンプリングが普及した現在こそ、彼の当初のヴィジョンが示唆するものは大きい（逆に言えば誰も受け継いでいないということだ）。　（福島）



RAGNAR GRIPPE
Sand
ＬＰ/Shandar 83518

本文でも述べたように、シャンダールは米ミニマル作品に続き、おそらくその影響の産物であろう仏ミニマル作品をリリースしている。トレモロ奏法による色彩の共鳴と言うべきシャルルマーニュ・パレスタン「ストラミング・ミュージック」、本作、そしてむしろアシッド・フォークの香り高いアコースティック・ギターのデュオ、ヴァンサン・ル・マーニュ＆ベルトラン・ポルケ「ギタール・デリーヴ」である。砂絵に触発され、リュク・フェラーリの協力を得て制作された本作は、オルガン、ギター、リコーダー、マラカス等のライヴ多重録音によっており、カラフルな音色と脆弱な構造、いかにも手造り風のチープな味わいを特徴としており、その点でマイク・オールドフィールドを思わせると言ってよいだろう。　（福島）



RAYMOND BONI/QUATUOR BALANESCU
Le Trajet Ou Le Peuple Témoin
CD/Stupeur&Trompette! ST 1002　'94年

ジャズ/インプロヴァイズド・ギタリストとしてすでに20年以上のキャリアを持つレーモン・ボニが、ポスト・モダン弦楽四重奏団バラネスク・クァルテットとジャズ/ロック・ドラマー、ミシェル・ボアトンのために書き下ろした作品。ボニのルーツでもあるジプシーの一族に捧げられており、全編、エキゾチックな熱情に満ちている。5人全員がアグレッシヴに盛り上がる部分でのチェンバー・ロック的カタルシスは言うに及ばず、弦と太鼓が静かに響き合うときの内に秘められた激しさが聞きどころだ。クラフトワークやディヴィッド・バーンのカヴァーで頭角を現しただけあって、バラネスクのロック/ジャズ的曲想に対する適応力はクロノス以上か。　（渡邊）



RAYMOND BONI/MAX EASTLEY/TERRY DAY
Les Mistrals
ＬＰ/Nato NATO 865　'86年

レイモン・ボニは古くよりフリー・ジャズ・シーンで活動しているギタリストだ。ロル・コックスヒルとの共演で知る読者もいるだろう。既成の音楽の枠に塡められることを好まず、ジャズの枠にも収まろうとしないボニだが、彼の演奏には情に依存する部分が多く、聴く者を決して突き放さない。本作はボニがマックス・イーストリー（vo, perc, g, etc.）、テリー・デイ（ds, perc, harmonium, syn, vo, sax, fl）と共演したスタジオ・レコーディングで、３者対等のバランスで奔放なプレイが繰り広げられる。イーストリーとデイがノン・ミュージシャンとして型を模倣／解体して行くのを、ボニが支援しているような内容であり、総体としてドラマティックな展開が大変聴き易い。Natoならではの標準作。　（坂本）



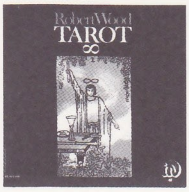
RENÉ CLEMENCIC
Molière
ＬＰ/Harmonia Mundi HM 1020　'78年

太陽劇団を率いるアリアーヌ・ムヌシュキンが監督した５時間に及ぶ同題の映画のためのサウンドトラック。演奏はもちろんクレマンシック・コンソートで、彼ならではの奔放な快活さに満ちており、また典雅さとの対比も抜かりない。この作品が17世紀に活躍した劇作家モリエールの伝記と重ね合わされた「カーニヴァル／革命」を描いたものであろうことは、そう題された楽曲が他を圧して長く、また彼方から次第に近付きこの場を席巻する荒々しい力の噴出を描いて全編のクライマックスとなっていることからも推察できる。また静かに狂っていくような妖しい女性ヴォーカルによる〝鏡の部屋〟は、〈五月〉との屈折した重ね合わせを物語っていよう。パーセル作品の編曲の終曲〝モリエールの死〟のみデラー指揮。　（福島）



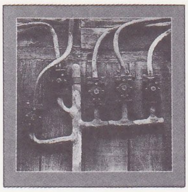
RENÉ CLEMENCIC
Kabbala
CD/Col Legno WW 1CD 31861　'93年

通常、クレマン・ジャヌカンやピエール・ド・ラリューのアンサンブルと同じく古楽演奏のカテゴリーで語られるクレマンシックだが、彼が演奏に持ち込む過剰な想像力は、オーセンティシティに拘泥する古楽から彼の音楽を遠く離し（それゆえ音楽史の専門家連中には評判が良くないようだが）、むしろ古楽自体が当時そうであったようなアヴァンギャルド・ミュージックへと結び付ける。そうした傾向は、ユダヤの秘儀「カバラ」を題材としたオラトリオである本作に聴かれるように、作曲においてより明らかなようだ。５ヴォーカル（うち２声はカウンター・テナー！）の錯綜した交錯を、鋭く倍音豊かなブラスと遠近を強調して響き渡るパーカッションが煽り立て、劇的な高揚を積み重ねていく。ウィーン生まれ。　（福島）



ROBERT WOOD
Tarot
LP/Edici ED 00 61020　'72年

ロバート・ウッドはイギリス人ヴィブラフォーン奏者だが、活動はフランスだったようだ。１枚目に当たるこのアルバムもパリで録音されている。編成はSteve Potts(a-sax,fl)、Kent Carter(b)、Ron Pittner(ds)とのクァルテット。次作のフリー・サウンドや「Vibrarock」でのジャズ・ロック・サウンドとも違って比較的オーソドクスではある。Ａ面は４ビートの上でヴィブラフォーンがよく響く。ジャズの範中のもの。Ｂ面になるとＡ面の流れはなくフリー・フォーム主体になる。どちらも物静かで音の響きが生かされたものだ。タイトルといいジャケットといい何か大いに意味ありげだが、確かにＢ面はそうした神秘的なイメージを醸し出すかもしれない。　（松本）



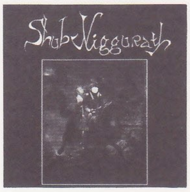
ROBERT WOOD
Sonabular
LP/Edici ED 0061030　'73年

ヴィブラフォーン奏者ロバート・ウッドのセカンド・アルバム。彼はフランスにおいてもそれほど有名な存在ではないが、その音楽活動歴は長く、本作品以外にも 1 st「Tarot(Edici ED0061020)」、ゴングのピエール・ムーランらをゲストに迎えた 3 rd「Vibra Rock(Polydor 23913137)」 4 th「Tombac Vibe(Polydor 2393150)」と３枚のアルバムを発表している。本作品に収録された曲は、ウッドの完全なソロであるＡ③を除いていずれもがジルベール・アルマン(ds)とのデュオとなっている。ウッドのプレイは、多くのヴィブラフォーン奏者に見られるメロディアスなものではなく、ヴィブラフォーン独特の余韻を残す金属音を巧みに用いて音を組立てるというパーカッション的手法に基づいている。　（賀川）



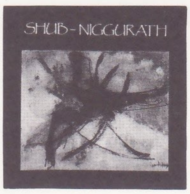
SERGE PÉRATHONER, JANNICK TOP
Music Film Scoring
CD/Baillemont CD 918　'90年

タイトルどおり三つの映画のサントラを抜粋収録している。全20曲。かたやトランジット・エクスプレスの中心人物、かたや〝De Futura〞といい顔合わせだが、中身はお仕事物だ。一部はエスニック・ヴォイスふうの合成音が耳に残り、二部ではピアノをメインにと、これで19曲まで行く。すると懐しや「Üdü Wüdü」の〝Soleil D'ork〞ではないか。ベースを押え気味にしたリミックスだとは言え、急に人生が明るくなるではないか。なんせスピード・リミットでも演っていた位だ。アフリカの密教ムードみたいでやはりいい。という事だ。　（松本）



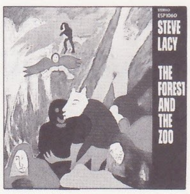
SHUB-NIGGURATH
Les Morts Vont Vite
LP/Musea FGBG 2002　'87年

グループ名はLovecraftらによるCthulhu神話に登場する、「千匹の仔を孕みし森の黒山羊」と呼ばれる地の精の事。内容もその名に恥じぬ（？）あたかもMAGMAがUNIVERS ZEROの〝Heresie〞をカヴァーしたかの様にアルバムのハイライトとなるラストのＢ②では、強力なドラムの上をベースがギターがフリーキーに吼えまくる笑い出したくなる程凄まじい（臨界点を超えた恐怖を待つものはただ笑いのみ）怪演。雰囲気作りに徹するピアノをブリッジとし、空ろな女性ヴォーカルとトロンボーンの起用が一層のアイデンティティ確立に寄与している。蛇足ながらvoのAun StwartはTUDER LODGEの彼女とは（多分）別人。Musea屈指の一作。　（山田）



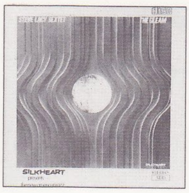
SHUB-NIGGURATH
C'étaient De Très Grants Vents
CD/Musea FGBG 4042　'91年

５年振りの２nd。ゼロ、ゾイ、アート・ベアーズからヤクラ、果てはディス・ヒートまで連想させる多彩な（しかしトーンは暗黒一色）音楽性を見せ、遠吠えのように金切るギターと鬱々とダグマるヴォーカルが印象的だった前作に比べ、今回はチェンバー・ロッ暗くクと言うよりも、言わゆるオルタナティヴ、ノイズ寄りの音に近づいている。実験的な側面が強まった分、散漫な感じを受ける。ヴォーカルも一曲のみ少し聴けるだけで淋しい。又、トロンボーンというこの手のバンドの編成上のユニークさは今回も生かされていない。　（高森）



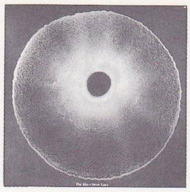
STEVE LACY
The Forest And The Zoo
LP/ESP 1060　'67年
CD/ZYX ESP 1060-2

NY生まれのレイシー(ss)、イタリア出身のエンリコ・ラヴァ(tp)、共に南アフリカ出身のジョニー・ダイアニ(b)、ルイス・モホロ(ds)による異国アルゼンチンでのライヴ(南米楽旅のひとコマ)。この真空中に結晶のように屹立する音たちの凛とした冷やかさには、どこか亡命者特有のノスタルジア／メランコリアが影を落としているように思われる。どこまでも見通せる透明な空気の中で、音は加速度的に脆く、軽くなり、壊れやすさを増しながら、さらに哀しげな速度を獲得していく。フリー・ジャズの頂点にして、既にポスト・フリーの手触りを予感させる記念碑的傑作。レイシーは、この一連の楽旅の後、アメリカを完全に離れ、〈五月〉直後のパリに居を構えながら、今も果てることのない「旅」を続けている。　（福島）



STEVE LACY
The Gleam
CD/Silkheart Records SHCD 102
'86年

スティーヴ・レイシーと言えば、多分ユーロ・ロック・ファンにはAREAとの共演作が思い浮かぶだろう。昔からフリー・ジャズの巨匠としてレイシーの名は轟いているが、彼の音楽が実はそれほどごりごりのフリー・ジャズではないということは知っておいた方がいい。とりわけ'80年代に彼がフランスで活動の基盤にしているセクステット（クインテット）の音楽は、例えばM・ウェストブルックあたりの音楽に惹かれているファンは聴き逃せない。スティーヴ・ポッツ(sax)、イレーヌ・アイービ(vo, vln)、ボビー・フュー(pf)、ジャン＝ジャック・アヴヌル(cb)、オリヴァー・ジョンソン(ds)という殆ど不動のメンバーで数多くの作品を残しており、どれもが非常に高いグレードを誇っている。（坂本）



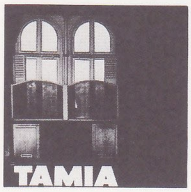
STEVE LACY
The Kiss
ＬＰ/Lunatic Records 002 '87年

レイシーの音は、常にソロへと立ち返っていく。自らの歩みをたどり直すために、あるいは遙か彼方を透かし見るために（自らの演奏テープを幾度となく聴き返すレイシー）。ここで音は宝石のような美しさをたたえながら、同時に何もない空間の中にポツンと取り残された淋しさに震えている。彼はソロの怖しさを演奏へと没入・自閉することで紛らわせようとはしない。あるいはあらかじめ定められた構造や対比に頼ることも。テーマはそこから遠くへ離れるためにだけ始まりに置かれ、演奏は瞬間瞬間に全てを映し出しながら進み、マッチの燃えさしのような音をたてる。なお、本作は広島リアル・ジャズ集団主催によるソロ・コンサートのライヴ録音であり、彼らの設立した自主レーベルからリリースされている。（福島）



STRUCTURES SONORES LASRY-BASCHET
Chromophagie
ＬＰ/Arion 30S 060 '69年

テディ・ラスリの父、ジャック・ラスリとベルナール・バシュの共同プロジェクトSTRUCTURES SONORES LASRY-BASCHETの作品、テディ(fl, b, par)他、後にエレゴ・サムに参加するJean Guérin (tabla, per)ら６人のミュージシャンによる演奏である。そのサウンドはプロジェクト名に現われているように、各種パーカッション、管楽器、ヴォイス、ベース、エコー等のシンプルな音を組み合わせ音の空間を構築するというものである。曖昧模糊とした中にその輪郭が見え隠れするようなイメージである。ジャケット違いのセカンド・プレスもある。（賀川）



TAMIA
Tamia
ＬＰ/T1001 '78年

誰の師事を受ける事もなくその類稀な才能に磨きをかけつつ数々のアーティストとの共演を重ねていたTamiaの29才にして初めてリリースした衝撃的ソロ・アルバム。２曲程16名のヴォイスによるドローン・サウンドを従えている他は、全て彼女のヴォイス・パフォーマンスによる。人声のみならず、様々な楽器や自然界にもインスパイヤされたであろう幅広く豊かな表現力を持ったそのサウンドは鮮烈の極み。今でこそホーミー等の特殊唱法は一般でもかなり認知されているが、かなり早期から系譜を持たない彼女がこうした指向性を持った事に先天の才を感じざるを得ない。そして作品全体を貫く尋常ならざる雰囲気は、民族音楽や伝統芸能に宿る「神憑った一瞬」が本作にもまた招喚された事を示している。（山田）



TAMIA
Senza Tempo
ＬＰ/T Records T 1002 '81年

まさに驚異的な音域の広さ（低音は男声と聞き紛う）も、繊細極まりないヴォイス・コントロールも、ここではすべて空間を官能的に息づかせるためにのみ奉仕しており、16チャンネルの多重録音により、鐘乳洞を渡る風が綾なす襞を細部までそのままに視覚化したような響きの豊かさをもたらしている（引き伸ばされた響きのなかで、むらとなって浮かび上がる息の動きや、ちらつくような倍音のかげりを描き出す仕方を、彼女は雅楽から学んだようだ）。この奥深いしめやかさは、まず何よりもエロティックである。シェリー・ヒルシュが敏感極まりない尖った新芽であり、マギー・ニコルスが引きつり、こすれあう痛々しく乾いた傷つきやすい粘膜だとすれば、タミアは透明な蜜をあふれ出させる潤んだ洞である。（福島）



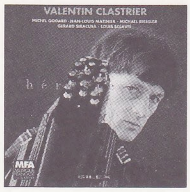
TAMIA/PIEERE FAVRE
Solitudes
CD/ECM ECM 1446 '92年

子音（ノイズ）によって切り裂かれ、意味を吹き込まれる前の母音だけのユートピア。この自他未分のマターナルな空間の内部では、ひとたび鳴り始めた音は、移ろい漂って別の音色、別の響きへと姿を変えながら、だが決して止むことがない。沈黙との鋭い対立を経て屹立する代わりに、静寂に浸み込むことで静寂そのものと化す音楽。ファーブルは多種多様なパーカッション類の音色を編み上げ、あるいはゴングの余韻に耳を傾けて、タミアのための褥を整える。母なる振動への共鳴を通じて、彼女の声の中に自らを溶解させてしまおうというマゾヒスティックな喜び。匂うように立ちのぼり、甘やかにたちこめた声は、夜空にかかる虹のようなあり得ない美しさを香らせて、夜の帳が降りるように聴く者を包み込む。（福島）



VALANTIN CLASTRIER
Vielle À Roue/Hurdy-Gurdy
CD/Audivis A 6130 '87年

ジャック・ブレルと「ラマンチャの男」で共演し、コメディ・フランセーズの伴奏をも務めた彼は、'84年「空想的ヴィエル・ア・ルー」（本作に再録）で一躍注目を集める。彼は、'60年代のトラッド再興まで殆ど忘れ去られていたこの古楽器から、弦の追加等の各種改造や特殊奏法の開発によって、全く電子的な変調を用いずに驚くほど多種多様なサウンド（各種打楽器やヴァイオリンから電子音としか思えない連続的に変化する音まで）を引き出してしまう。それらのサウンドは、楽器構造上の特長を活かしてドローンを含めてポリフォニックに織り成され、さらに倍音変化レベルのミクロなポリフォニーと相俟って、まさにイマジネールとしか言いようのない、広大にして肥沃なサウンドの大陸を現出させている。（福島）



VALANTIN CLASTRIER
Hérésie
CD/SILEX Y225402 '92年

前掲作において、ソロ演奏により現出した想像上の大陸は、ミッシェル・ゴダール(tuba)、ルイ・スクラヴィス(cl)、ジェラール・シラクーザ(perc)ら、これ以上は望み得ない程の優れた共同作業者たちを得て、諸力の交錯へと解きほぐされ、中世の写本にも似た目にも絢な音絵巻となって、国家に囲い込まれる以前の交通空間へと向けて開け放たれる。邪悪にひび割れしわがれたつぶやきと、女声と聞き紛うばかりに澄み切ったハイトーン・ヴォイスの間の自在な往復や、またホーミー唱法やヴィエル・ア・ルーの演奏において、豊かな倍音が交錯／衝突の中で結び織り成す響きの豊饒さは、本文に述べた「抑圧されぬ交通／異種交配としての異端」の鮮やかなヴィジョンを描き出している。もはや歴史的名盤と言えよう。（福島）



VINKO GLOBOKAR
5, Die Sich Nicht Ertragen Können
L P/FMP FMP1180 '87年

グロボカールの即興方面の演奏活動の記録としてNew Phonic Art（別項参照）と本作を挙げたい。tbやアルプホルンはもちろん、呼び笛やディジェリドゥー、声まで用いて、一人多重録音により作り上げられた空間は、南イタリアの魚市場にも似た猥雑な喧噪に満ち満ちており、一時も休まずに叫びまくり、至るところほえ回って、泣き、歌い、つぶやき、つばを吐いて、くぐもった呻き声をあげる。ここで、各種特殊奏法による多彩なサウンドは、グロボカール自身による様々な身振りを伴った声とともに、そのままにわめき散らす群衆であり、溢れ出す色彩と音響の洪水である。なお、彼は75年のフリー・ミュージック・ワークショップでtbソロのほか、13人編成のブラスバンド（うち11人がtb）を率いて出演した。（福島）



VINKO GLOBOKAR
Les Émigrés
CD/Harmonia Mundi HMC 905212 '91年

５人のナレーターが十数ヵ国語で読み上げ怒鳴り散らす移民たちの手紙や劇作家ペーター・ハントケによるテクスト。「バベルの塔」的な多言語の交錯、怒号の嵐、沸き上がる拍手や歓声を貫いて舞い上がり、各国の民謡をすら歌い上げる男女ヴォーカルと小コーラス。重工業的な重苦しさから目にしみる鮮烈な大音響の炸裂までメタリックな輝きに溢れたオーケストラと、ジャズ・トリオ(p, g, ds)の生み出す軽音楽との目も眩む落差。さらにライヴではスライドやフィルムのモンタージュ、巨大な人形芝居まで加わったという。F・ザッパ「ようこそ合衆国へ」を何十倍にもスケールアップしたかのような超大作。ここで全ての状況設定／音響は何かの寓意でありながら、与えられた役割を踏み越える劇的強度をかち得ている。（福島）



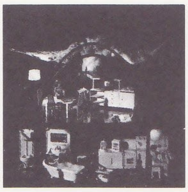
VINKO GLOBOKAR
Globokar By Globokar
CD/Harmonia Mundi HMC 905214 '92年

自作自演によるトロンボーン曲集。最も古い「ディスクールII」('68年)において、母音発音に関する音声学的研究に基づいた音色の拡大を試みており、凄まじいノイズ流（アルト・サックスのマウスピースの代わりにゲーム・コールを装着したかつてのジョン・ゾーンのソロを思わせる）と叫び声によるソロ「交換」('73年）を経て、エレクトロニクス変調を伴う最近の作品まで、このサウンド・パレット拡大への指向は変わることがない。そうした中で「コロ」('88年）は、共同体（混声合唱）から析出した個人（ソロ・トロンボーン）という社会学的寓意が「移民たち」を思わせ、またアルプホルンとしゃべりによる「アルプスの叫び」は、過剰な身振りと過激なユーモアに溢れたシアター・ミュージック的快作。（福島）



VINKO GLOBOKAR
Hallo, Do You Hear Me ?
CD/Harmonia Mundi HMC90933 '94年

オーケストラ＋混声合唱＋ジャズ・コンボという「移民たち」的大編成による表題作（'86年）以外は、演奏者間のコミュニケーション・システムを探求していた'70年前後の作品。〝放射〟は円形に並んだ21人の演奏者による音の探り合い。ミッシェル・ポルタルが音により彼らに指示し、相互のコミュニケーションを誘発する。〝流動〟は分子運動をモデルとしたダイアグラムによる。音の運動状態を指定された各ブロックを、演奏者集団（９管楽器＋３打楽器）が順に通過していくことにより、もやもやとしたドローンから煮えたぎる沸騰状態まで、サウンドは大きく振幅する。オーボエ・ソロによる〝息の学習〟は、循環呼吸による極端に引き伸ばされたソロと、それに添えられる声やため息によるコメントから成る。（福島）



VIRGULE4
Des Accords D'accord
LP/AYAA DT0386 '86年

C.Cohade(b, vo)、I.Lentin(ds, vo)、F.Morel(cel, vo)、C.Valade(marimba, syn, vo)の女性４人組チェンバー・ロック。不安定な編成に加え、フリーではないにせよ構成やアンサンブルの融和という意識は稀薄な展開、プロだか素人だかよく分からない様な呆けた演奏等、一見ネガティヴな要素が一体となった時に生まれる摩可不思議でポップなサウンドつまり「キッチュ」と言う事だろうか）にはかなりのセンスを感じる。まずフランス以外では出て来ないタイプの音楽だろう。スタッフにCharles Bullenの名を見つけて恐れずとも良い。プライヴェートなイメージを好む人にはかなりいける。後年、メンバーの内CohadeとLentinはL'EMPIRE DES SONSでよりまとまったサウンドを聴かせてくれる。（山田）



VIVENZA
Réalités Servo Mécaniques
LP/Electro Institut (Musee St Pierre) 74014 '85年

仏ノイズ系では、脳天気なDDAA周辺や、単調なパシフィック231やル・サンディカあるいはその後身にして未来派の末裔を自認するアントレ・ヴィフよりも、このヴィヴェンツァとエタン・ドネを挙げたい。ヴィヴェンツァの生み出す音響は、エスプレンドール・ゲオメトリコ（EG）にも似た、何か重工業機械の動作音のような工業ノイズの反復なのだが、テープの高速回転によるサウンドの硬質化や、速度感覚の異なる反復の重ね合わせ、破砕音とのモンタージュ等、むしろ音を歪ませず切口の鋭利さ、粒だちの鮮やかさを活かすミュージーク・コンクレート的な繊細さにより、EGとは一線を画する。私の知る限り、他に7'及び12'シングル各１枚、カセット３本、さらにコンピレーションへの参加多数がある。（福島）



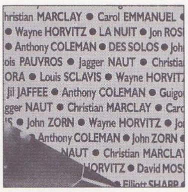
YVES ROBERT
Tout Court
CD/COPSI/deux Z ZZ 84103 AD 184 '91年

イヴ・ロベールはジャズ・シーンで活躍しているトロンボーン奏者で、アンドレ・ジョームやルイ・スクラヴィスのグループでも異彩を放って来たが、珍しい所ではデヴィッド・モスとの共演などもある。どちらかと言えばアヴァンギャルド派に所属するが、ジャズ・ロック・プレイヤーとしてのセンスも侮れない。そんな彼の独特のスタンスと、ヴァーチュオーゾぶりを音に反映したこのアルバムは、フィリップ・デッシェッパー(g)、クロード・チャミッツィアン(cb)、グザヴィエ・デサンドル(perc)という一癖ある共演者達を揃え、新鮮な驚きに満ちた内容の優れものとなっている。１分にも満たない曲がずらっと並んでいるのも、エレクトリック・サウンドを効果的に採り入れているのも、すこぶるチャーミング。（坂本）



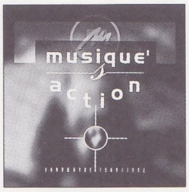
V. A.
Festival Mimi '87
LP/AMI 2001 '87年

フランスで行われたFesstival MIMI(Mouvement International des Musiques Innovatrices)のライヴ盤。世界各国、７バンドの演奏が収録されている。各バンドの指向性が様々なので全体像を伝えるのは難しいが、レーベルの代表者としてエトロン・フー・ルルーブランのフェルディナン・リシャールの名がクレジットされている事からも想像できる通り、レコメンデッド系の音(？)が中心となっている。ジュルヴェルヌは「A Neuf」からの選曲。スタジオ・テイクとはアレンジ等が異なるロマンティックで熱っぽい演奏が聴ける。日本からの参加は期待のアフター・ディナー。緻密で繊細な演奏が生み出す子守歌とでも言えばよいだろうか？　本アルバム中一番光っている様に思える。（沢田）



V. A.
La Nuit Des Solos
LP/Van D'Œuvre 8802 '87年

'87年ミュジーク・アクション・アンタルナショナルの一企画〝ソロの夜〞ライヴ録音からの抜粋。ジャン・フランソワ・ポーヴロやギグー・シュヌヴィエ、ルイ・スクラヴィスらフランス勢に加え、デヴィッド・モス、エリオット・シャープ、クリスチャン・マークレイ、ジョン・ゾーン、トム・コラ、ウェイン・ホーヴィッツ、キャロル・エマニュエル、アンソニー・コールマンほか多数のアメリカ勢を含む（全16曲中12曲）のは、別企画でジョンのコンポジション「ルアン・リンギュー」とデンス・バンドのライヴ（それゆえ本作にはジョン・ローズも参加している）から成る「アメリカの夜」が催されたため。'85年のメールス登場以降のヨーロッパにおける凄まじいNYインベイションの証左として挙げておきたい。（福島）



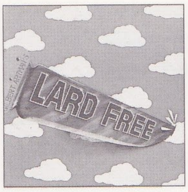
V. A.
Musique's Action
LP/Vand'oeuvre 9304 '93年

フランス、ナンシーの村ヴァンドゥーヴルで、'84年から毎年約10日間にわたって開催される、アヴァンギャルド・ミュージックのためのフェスティヴァル「ミュジック・アクシオン」の'88年から'92年までのライヴ録音からセレクトしたオムニバス。パスカル・コムラード、ダニエル・コスコヴィッツ、ルイ・スクラヴィス、ドミニク・ルジェフ、エリオット・シャープ、デイヴィッド・モス、ゲシュタルト・エ・ジャイヴ、ディヴィッド・ガーランド、クラックハウス等が収録されている。同時に刊行された同タイルの本には「ミュジック・アクシオン」に関する記事と共に、200名を超える参加アーティストのステージ写真が収録されており興味深い。（渡邊）

GILBERT ARTMAN



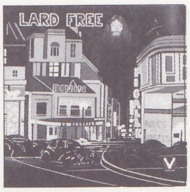




LARD FREE
Gilbert Artman's Lard Free
LP/Vamp VP 59 500 '73年
CD/Spalax Music 14225
キングKICP 2733

ラール・フリーはジルベール・アールマン(ds, p, vibe)のコンセプトに基づくプロジェクトでこの初作の他2nd、重く沈んだインダストリアルな響きを持つ3rd「Lard Free」(Cobra COB 37007、'77年)を発表した。メンバー重複がなく楽器編成が一定していた彼等のこれはエルベ・エイーアニ(b, syn)、フィリップ・ボルリ(sax)、フランソワ・マティーヴ(g)によるもので1作ごとに過激さを増したそのサウンドの原型を収録している。彼等の頂点というべき3rdの解け合った音色からすれば曲の傾向が分散しており、それはジャズ色の濃いサックスやギター、ややブルース調のベース、初期エルドンに近い無機質なシンセサイザー等から成っている。活動終止後、アールマンは次なるプロジェクト、アーバン・サックスを開始する。

(松本)



LARD FREE
I'm Around About Midnight
LP/Vamp VP 595202 '75年
CD/Spalax Music 14221
キングKICP 2737

ラール・フリーは、ジルベール・アールマンを中心としたグループで、このアルバムは彼らのセカンドである。メンバーは、ジルベール・アールマン、リシャール・ピナス、アラン・オーダ、アントワーヌ・ヴュヴェルノー、ジル・イープルマン、アラン・アルマン、である。彼らは他にヴァンプ・レーベルから1枚、コブラ・レーベルから1枚、レコードをリリースしている。'75年に発表された本アルバムは、音的には初期エルドンなどにも通じる、エレクトロニックでアヴァンギャルドな作風である。ジルベール・アールマンのサックスは電気的に処理されて、特異なインプロヴィゼーションをくりひろげ、リシャール・ピナスの、ロバート・フリップ的なギター・プレイがこれにからみついていく。

(宇田川)



LARD FREE
Lard Free
LP/Cobra COB 37007 '77年
CD/Spalax Music 14224

オリジナルはセイム・タイトル(CD化により「III」)だが、3枚目。LARD FREEの最高傑作。螺旋状に渦を巻く音像はトリップ感覚120%だ。ただし、単なるジャンキーの垂れ流し的ドラッグ・ミュージックではなく、フレーズ/構成共に良く練られた作品だ。アナログ時のA面全てを占めた〝Spirale Malax〟などは、あらかじめ録音/ミックス・ダウンまで考えて楽曲が作られているかもしれない。前作のR.Pinhasに変わり、ギタリストはXavier Bauilleretだが、Pinhasよりも適任。無調的なフレーズを効果的に聴かせている。彼のギターとArtmanのドラムを中心としたラスト・ナンバーのカタルシスを味わって欲しい。この編成でもう一枚位リリースして欲しかった。

(Chihiro S.)



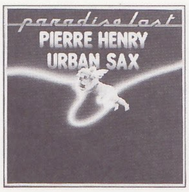
URBAN SAX
Urban Sax
L P/Cobra COB 37004 '77年
CD/EPM FDC 1124

Gilbert ArtmanがLARD FREEと並行して活動をしていたURBAN SAXの1st。CD化に際し、この「Urban Sax」と2ndの「Urban Sax 2」がカップリングされている。サックス群をステレオ感溢れるオルガンのように使用するアイデアは斬新。整然とアレンジされた楽曲（当時、本作を聴く前には「16人のサックス奏者」というとアウト・オブ・コントロールな状況しか想像できなかった）は、編成こそ違うが、ArtmanがLARD FREEで目指した特殊音響空間と同一のもの。彼はLARD FREEの3rdで自分のスタイルを掴んだと言える。路線的にはこの都市の暗闇を思わせるサウンドのまま現在に至るが、人数的には増殖を続ける。1st時に16人、2ndでは37人編成だが、'92年の来日時には50人を越えていた。（Chihiro S.）



URBAN SAX
Urban Sax 2
L P/Cobra COB 37017 '78年
CD/EPM FDC 1124

ジルベール・アールマンをLARD FREEの、URBAN SAXの、と言うのは的を射いるとは思えない。彼の音楽は、LARD FREEと名づけられたユニットでの実験によって、音から音響へ、やがてURBAN SAXと名義がえして、遂には音響がレコード盤をはみ出し街中へ浸み込んでいった、と言えると思う。考えようでは、彼のコンセプトは音楽の三次元化その実践だったとも言えるわけで、じゃなければ、各国各地で様々なパフォーマンスをするに至るわけがない。つまり空間表現、もっと言えば場の再構築を目指したのだと思う。URBAN SAXでの1～2作目はそのステイトメントとも言えるし既に単なる記録に過ぎなかったとも言える。今彼にリアリティがないのは、彼のコンセプト以上に各地で場の位相が変わり先が読めない程だからだ。（松本）



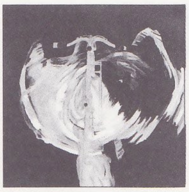
PIERRE HENRY, URBAN SAX
Paradise Lost
L P/Philips 6313 293 '82年

ピエール・アンリとの共同作品である本作は、すべての曲がアンリとジルベール・アールマンによって作られている。アンリはフランスにおけるミュージック・コンクレートの先駆者であり、また'69年にはスプーキー・トゥースとともに「セレモニー」というアルバムをレコーディングしたことでも知られている。さて本作の内容であるが、アーバン・サックスのメンバーは前2作同様サックス音が断続的に漂うといった感じの演奏を行っている。にもかかわらず、全体の印象は従来の作品とは大きく異なり、かつての重々しい雰囲気は全くと言ってよい程無くなっている。それは全編に渡って飛び回る電子音の所為と思われる。私個人としてはアーバン・サックスが新たな実験を開始した作品として高く評価したいが、賛否両編が出る作品であることは間違いない。（賀川）



URBAN SAX
Fraction Sur Le Temps
L P/Celluloid CEL 6788 '85年
CD/EPM 982042

ピエール・アンリとの共演盤に続くアーバン・サックス4枚目のアルバム。作品のレヴェルとしては初期の2作と比較して劣ったものではないが、サウンド的にはあまり変化がなく、ファースト・アルバムを初めて聴いた時の衝撃はない。CD化にあたって、オリジナル・アルバムの地味なジャケット・デザインではなく、派手なライヴ・パフォーマンスの様子を写したカラー写真を多く使ったインサートに変えられていることからも分かるように、既にライヴ・パフォーマンスに活動を置いていた時代の演奏であり、観点を変えれば作品の評価も変わるだろう。（賀川）



URBAN SAX
Spiral
CD/(Jap.)Wave EVA2027 '91年

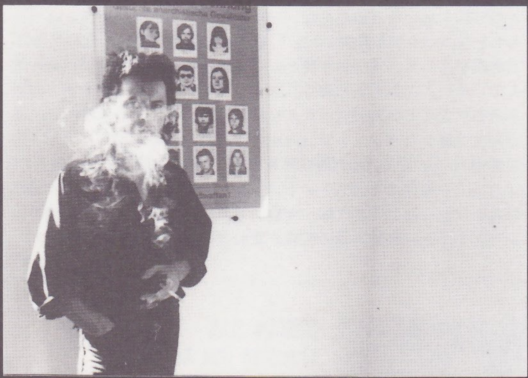
来日記念盤として国内発売（フランスとほぼ同時にリリース）されたアルバム。前作「Fraction Sur Le Temps（時間のかけら）」の発表以来、約6年間アルバムのリリースがなかったわけであるが、現在の彼らがアルバム製作よりもライヴ・パフォーマンスに重点を置いた活動を行っていることを考えると当然のこととも思われる。内容的には従来の作品の延長線上にあるソプラニーノからバスに至るサックス群が重層的なサウンドとなって押し寄せる重く迫力のあるものだけでなく、コーラスとヴァイブラフォン中心の演奏がシンプルに波打つようなサウンドや映画のサントラを思わす不気味で叙景的なサウンド等も加わり、より変化に富んだ聴き易いものになっている。なお、④はラール・フリー時代の曲（サード）のリレコーディングである。（賀川）



VIDÉO-AVENTURES
Musiques Pour Garçons Et Filies
10″シングル/Recommended R.R 1981 '82年

ジルベール・アールマンの流れで追うと異色な1枚だが、それもそのはずこれは彼のプロジェクトではなく、参加作だ。1曲のドラム・プレイと2曲のミックスに立ち合っている。それにしても何か居心地の悪い（いい？）変質した音楽だ。エレクトロニクスとポップ。ポップというよりもキッチュなものがうまく結びついたような音。黄色地にヴィニール・カヴァーでそこにはファウストの1stのようにスミ塗りで男が描かれている。これもチープなことのセンスがあるものだ。音楽もそのとおり。安くて妙なうわつきがあるのに、つまらなくない。'70年代のエルドンあたりの感触が、そのままうわべだけスライドする際、それをキッチュなまでにペラペラにした作為性を感じさせるものだ。（松本）

PASCAL



COMELADE



PASCAL COMELADE
Paraleo
LP/Parasite PAR 002　'80年

遡ること10数年、パスカル・コムラードはこのアルバムで世に出た。彼が最初から音響面で音楽をとらえていたことは、これでもよくわかる。コムラードの音楽は、自己表現というよりも、彼と聴く人との間にあってその距離感を音にしたような客観的視野が介在して出て来たものだ。そう思うとこのアルバムも基本的な発想面では共通している。が、しかし、随分と学究的だ。まだ実験段階なのか堅苦しく音楽に閉じている気がする。実際に鳴っているトーンは、現在の彼のトーンとは似ても似つかない。ノイズィーな音の反復だったり、エレクトロニクス・ミュージックの断片のようだったりする。ただし即興ではない。トーンこそ違っても音響効果である彼の音楽のポリシーのようなものは明確にある。　(松本)



PASCAL COMELADE
Sentimientos
LP/(U.S.)DYS 05　'82年

今やフランスではトイ・ミュージック、サロン・ミュージックの一人者でもある彼。本作は彼の'79～'81年の集大成でアンビエントな趣きを湛えたピアノ曲、トイ・ミュージック、「Paralero」(PAR002、'80)に顕著な無機質で数理的な電子音の反復等様々な傾向の曲を各作品から収録、再録音したものである。デヴィッド・カニンガムやエラティウのA・ミラール等が数曲に参加、イーノやサティ等の曲を含むが同レーベル所属のニーモニストによるヴィジュアル・マテリアル、内側に画家クールベの作品を転写した三つ折ジャケ等すべてにおいて独創的である。他には500枚限定EP「Ready-Made」('80)、テープ「Slow Musics」('81)同「Logique Du Sens」('83)等がある。いかにもフランスらしいノスタルジアとサティにも通じるユーモアに満ち溢れている。　(松本)



PASCAL COMELADE
Détail Monochrome
LP/Les Disques Du Soleil Et De L'acier 54002　'84年

フランスにおける感覚派プログレッシヴ・ロックの第一人者、パスカル・コムラード。前作同様、ジャック・ベロッカル、デヴィッド・カニンガムらが一部の曲にゲスト参加しているものの、大部分はダビングを用いた彼一人の演奏である。キッチュでユーモラスな音作りは従来の作品と同じであるが、曲調には多少の変化が見られる。オルガン、各種トイ・インストゥルメントを用いたノスタルジックでゆったりとした曲以外にも、ベロッカルのフリー・フォームなトランペットやカニンガムのエレクトロニクスを巧みに利用したややアヴァンギャルドな曲が収められている。「デタイユ・モノクローム(単色の細部)」というアルバム・タイトルに象徴されるように、シンプルではあるが繊細な作品と言える。　(賀川)



PASCAL COMELADE
El Primitivismo

LP/Les Disques Du Soleilet L'acier 54011　'87年

1年に1作以上の割合で精力的にLPやカセットを発表しているパスカル・コムラード。曲ごとに異なるものの、多くのゲストを迎えての演奏は従来よりもバラエティに富んだものとなっている。とは言うものの、本質的な部分は不変であり、彼の持ち味が十二分に反映されている。場末のカフェで戯れる男女、その後でアコーディオン、ヴァイオリン、ギターを奏でる男達。このジャケット・デザインとコムラードの過去の作品からイメージされるものが一体となったサウンドがここにはある。ノスタルジックでユーモラス。しかし、どこかうら寂しい、古き良き時代のフランスの情景を見事に描き出している（ジャガー＝リチャード、ワイアット＝シンクレア等、他人の曲もあるが、完全にコムラードのもとなっている）。　（賀川）



PASCAL COMELADE
Impressionnismes

CD/(Jap.)Wave 29EVA 2004　'89年

〝ロック界のサティ〟の売り文句の下、「印象派」と名付けられた日本のみ発売の編集盤である。トラッド、サンバ、ストーンズ、R・ワイアット(MATCHING MOLE)等のカヴァー、R・ピナスとの共作を含む全21曲は、幼な子がおもちゃの楽器やガラガラ音を出して遊ぶような遊び心に溢れ、聴く者をノスタルジアと奇想の世界へ誘う。ノスタルジックな色彩のなかで夢と現実、過去と現在が手を取り合って踊るような。フランス的な粋とそこに含まれた毒と俗、そして夢想への心意気。これこそが彼とサティの比較される要因なのだろう。前衛としてスタートした印象派が後にお茶の間芸術となったように、一聴して心地好い音であるが、その中にはFAUSTも試みた音楽解体の精神がフレンチ風味で息づいている。　（高山）



PASCAL COMELADE
33 Bars

CD/(Jap.)Wave EVA 2011　'90年

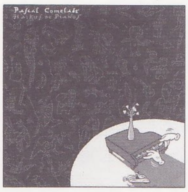
過去のアルバムから日本で独自に編集した初のCD(実はマスター・テープが無事に残っていた曲は少なかったという）に続いて、ついに日本先行でリリースされたオリジナル作品。ベル・カント・オルケストラとしての演奏を中心に'88年から'89年にかけて録音された。いつもながらのトイ・インストゥルメントのアンサンブルに、曲によってはハードなエレキ・ギターが競演している。実際の映画音楽「オ三の男」のカヴァーを含め、ニーノ・ロータやエンニオ・モリコーネ、カブリエル・ヤレドの映画音楽を思わせるような、叙情的でセンチメンタルな曲が多い。キッチュだとか可愛いなどと言うよりも、コムラードに特徴的なラテン的なパッションと哀愁がいつも以上に前面に現れた作品。　（渡邊）



PASCAL COMELADE
Ragazzin' The Blues

CD/(Jap.) Eva WWCX 2029　'92年

謎めいた文学的なタイトルが並ぶ。5曲目の〝A' glass of gaz〟はなんとなくデュシャンのガラス容器にはいった50ccのパリの空気を想い起こさせる。聴き手に媚びるような甘いリリシズムはないが、いつだって奥に秘められた底意地の悪さも姿を消して、虚勢を張らないパスカルが一人で部屋に座っている。編成はピアノ、キーボード、マンドリンとパーカッションくらいだが、このアルバムにはそれ以上なにも必要ではない。誰かと一諸にきいてはいけない、パスカル上級者向けのアルバムといった風情である。　（五十嵐）



PASCAL COMELADE
Haïkus De Pianos

CD/(Jap) Eva WWCX 2038　'92年

内ジャケットにあるようにグランド・ピアノと小さなトイ・ピアノが中心になったアルバム。ここで取り上げられる作品は、たった10秒だけの〝Smoke on the water〟は別にしても、E・モリコーネ、ミクローシュ・ローザ、ファウスト、リシャール・ピナス、ルイス・ヤッカ、N・ロータ……、etcと一見手当り次第、〝ベサメ・ムーチョ〟まである。どの曲もパスカル・ワールドの壁に懸かった小品たちなのであろう。おそらくソロでピアノを弾いていてもパスカルの頭の中にはきっといろいろなアレンジの可能性が響いているに違いない。ピアノ・ソロとはいっても、妙な閉鎖性が感じられず、彼の頭の中で蠢くアイディアが雰囲気として伝わってくる佳作。ラストの〝Les Humeurs de Catherine〟は古今の名曲に互して恥じぬ名曲だ。　（五十嵐）



PASCAL COMELADE
Traffic D'abstraction

CD/(Jap.)Eva WWCX 2049　'92年

'92年パリとバルセロナでの録音。ロベール・コンバによるジャケットが先ず目を引くが、大きくパスカルの名とタイトルが画面に配されてるところを見ると、このアルバムのために書き下ろされた作品らしい。パスカルはこのアルバムの中でも実にさまざまな楽器を演奏し、かつトランペットやクラリネットと打楽器を中心とした不思議なアンサンブル・アレンジを展開している。実際にアプライト・ピアノを使っているのは、冒頭の1曲だけのようだが、微妙に狂ったチューニングのせいか、録音のせいか、全編アプライト・ピアノのように聞こえ、それがこの無理のある編成を親密感あるものにしている。ディランの〝Like a Rolling Stone〟も取り上げられているが、例によってチープで軽く、腹もたたない程である。　（五十嵐）

HELDON

□賀川雅彦

リシャール・ピナスはシゾー(Schizo)のメンバーとしてレコード・デビュウした。シゾーは2枚のシングルを残しているが、'72年にリリースされたセカンドのピクチャー・スリーヴによると、グループはPierrot Roussel(b)、Coco Roussel(per)、Richard Pinhas(g, synth)、Georges Grumblatt(moog)、Patrick Gauthier(p,moog)という編成になっている。ファーストはサイケデリック・ミュージックからの影響を感じさせる内容であり、セカンドには多少なりともエルドン的雰囲気が漂っている。後にフレンチ・プログレッシヴ・ロック・シーンで活躍するミュージシャン達のルーツという意味で大変興味深い。

ピナスはその後もライヴ活動を続け、'74年、遂にエルドン名義でアルバムを発表する。「Electronic Guerilla」と題されたこのアルバム、1曲目こそシゾー当時のメンバーによる同グループのナンバー"Le Voyageur"の別テイクであるが、他の曲は全てAKSシンセとギブソン・レス・ポール1952によるピナスの演奏となっている。ジャケットには"ロバート・ワイアットに捧ぐ"とあるが実際にはフリップ&イーノの影響下にある。翌'75年にリリースされた「Allez Teia」ではそうした傾向がさらに強まり、"In The Wake Of King Fripp"という曲も収められている。ほとんど全ての曲をピナスとGeorge Grunblatt(g,arp,mellotron)の2人が演奏しており、作曲もそれぞれの曲と共作がほぼ1/3ずつという比率になっている。しかし、同年に制作されたサード・アルバム「It's Always Rock'n'Roll」になると、2枚組にもかかわらず、Grunblattの曲は1曲となり、エルドン=ピナスとの関係が明確になってくる。同アルバムでは曲ごとに、ラード・フリーのGilbert Artman(ds)、ザオのJean-My Truong(ds)、Ariel Kalma(harmonium)、Patrick Gauther(arp)、Grunblatt(g,mellotron)らと共演しており、ゲストの個性とピナスの音楽性が融け合った初期の傑作である。'76年に入りピナスの活動はより精力的になる。エルドンのフォース・アルバム、「Agneta Nilsson」ではピナスとともにCoco Roussel(ds)が中心的役割を果し健闘しているが、そろそろ新しい展開が必要な時期に来ていることを感じさせる。こうした状況下、ピナスはFrancois Auger(ds)とともに新たな活動を開始する。その成果は2枚のソロ・アルバム「Rhizosphere」「Chronolyse」(リリースは「Rhizosphere」より後であるが、録音されたのはそれ以前)、そして、エルドンのフィフス・アルバム「Un Reve Sans Consequence Speciale」となって現われた。特にエルドンのアルバムはそのダイナミックかつ独創的な音作りで彼らの最高傑作の一つに数えられている。その後、やや時期を置いて'78年「Interface」を発表する。最も人気の高い同作品は従来の作品に比べてサウンドがややハードになっており、前作に劣らぬ傑作といえる。同年に録音され、翌'79年にリリースされた「Stand By」はエルドンのラスト・アルバムとなった。約5年間に渡るエルドンの集大成的作品であり、これも充実した内容を誇っている。以後、ピナスは一年一作の割合で3枚のソロ・アルバムを発表する。'80年リリースの「Iceland」ではエルドンや以前の作品に見られたヴァイオレントな部分が後退し、イメージが広がる叙景的サウンドになっている。同年に製作発表された「East West」でもサウンドは変化している。ピナスの作品としてはこれまでになくポップな感覚があり、聴き易い。この傾向は次作「L'Ethique」('81年発表)で更に強まった。同作品、ポップではあるが悪い出来ではない。しかし、何故かイギリスのみのリリース(前作からオリジナルはイギリス盤)でフランスではリリースされていない。この作品を最後に



●リシャール・ピナス



●パトリック・ゴーティエ

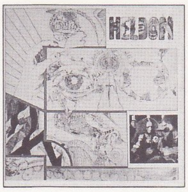


●フランソワ・オジェ



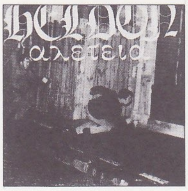
リシャール・ピナスの名前はロック・シーンから姿を消した。後年、未発表ライヴを含む2枚組のオムニバス・アルバム「Perspective」がリリースされただけで情報は何も伝わってこないという状況が続いた。

昨年から今年にかけて、エルドン及びピナスのソロが次々にCD化され、彼らに興味を持つ若いファンが増えている。そんな中ピナスの新作「DWW」がリリースされるというニュースが届いた。その後、最新作「Cyborg Sally」が出ている。



HELDON
Electronic Guerilla
L P/Disjuncta 12/13 '74年
CD/Spalax Music 14239

エレクトリック・ミュージックで暴力を振るい続けたHELDONの記念すべきデビュー作。中心人物Richard Pinhasは'70年代初頭よりSCHIZO(スキゾ)のメンバーとして演奏していたが(2枚のシングルを残し、ここにPatrick Gauthierも参加していた)ここではSCHIZO(スキゾ)の曲の別テイクが1曲収められている。後の全盛期における「時間の金属化」や暴力を抽出した様な音は未だ感じられず、どちらかというとジャーマン・シンセ・ミュージックからの影響が強く感じられる、伸びやかな、流れるような音が全編にわたっている。HEIDONの序章。同年、友人関係にあるR.FrippはFRIPP & ENOとして「No Pussyfooting」を発表しているが、本作と同傾向であることに何らかの関係を感じさせる。 (伊藤)



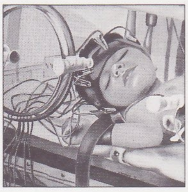
HELDON
Allez Teia
L P/Disjuncta 000002 '75年
CD/Spalax Music 14235

〝In The Wake Of King Fripp〞なる曲が収録されていて、メロトロンの大洪水だということで当時話題になった2nd。前作はR.Pinhasが殆ど一人で演奏していたが、本作ではSCHIZO(スキゾ)のメンバーでもあったGeorges Grunblattの二人でのコラボレーションというスタイルになっている。シーケンサー的なエレクトリック色はかなり後退して、深くサスティーンするエレキ・ギターがアコースティックな響きを出したギターが波のうねりを連想させるようなシンセのバッキングの上に流れるというたおやかな曲が殆ど。特に最後の曲は〝Michel Ettori〞とタイトルされたアコースティック・ギター・デュオだが、本人は演奏していないと推測される。意味深なジャケット写真は後のスタイルを象徴しているのだろうか? (伊藤)



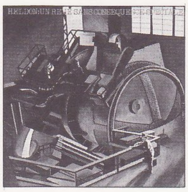
HELDON
It's Always Rock'n Roll
L P/Disjuncta 000006&7 '75年
CD/Spalax Music 14231/14232

人を食ったタイトルが付けられている本作は2枚組としてリリースされ、内容的にも全盛期のスタイルが形成されつつある初期段階という注目作。R.Pinhasを中心に、本作では多彩なゲストを迎えそれぞれの個性的なプレイが楽しめるという作品になっている。特にGilbert Artmanがドラムを叩く曲が歪んだ音のギターと相成ってクリムゾンっぽく仕上がっていたり、Patrick Gauthierがふわふわとした ARPのソロをとりJean-My Truongがドラムを叩くと後期のスタイルが一瞬感じられたりとなっているが前作までの流れをくむ曲も多い。全編有機的に絡み合う無機質な世界が構築されるのはこの後から。 (伊藤)



HELDON
Agneta Nilsson
L P/Urus 000011 '76年
CD/Spalax Music 14227
(U.S.)Cuneiform Rune 60

僕は今でもエルドンの最高作は6枚目の「Interface」だと信じて疑わない。決してピナス・ワンマンでなく、フランソワ・オジェが、パトリック・ゴーティエが、ディディエ・バタールが全て同一のものを持っていたあの意識の奥底にまでナイフを突き立てる彼らのサウンドは、当時のユーロ・ロックの中では最大級の怪物的エネルギーを有していた。この「エルドン4」は「これからの踏み板にすぎない」とピナス自身が語っているように過渡的な作品といえる。彼らの未来を予知させるものとして重視されて然るべき作品であり、特にA①はまるで悪夢のつづれ織りの様などろどろのカオスの中にも、はっきりとしたピナスの目指す暴力的なエナジーが表われている。 (いわね)



HELDON
Un Rêve Sans Conśequence Spéciale
L P/Cobra COB37002 '76年
CD/Spalax Music 14234
キング KICP 2724

エルドンの通算5枚目、自らのレーベルDisjuncta Urusを離れCobraレーベルに移籍後の1枚目である。一つの転換期であった前作「Agneta Nilsson」を経て、彼らの音楽はいよいよパワーと緻密さを増し、もはやフリップ&イーノの模倣の枠を打ち破ったと言える。特に本作以後は、シークェンサーと一体になって独特のリズムを生み出すパーカッショニスト、フランソワ・オジェのメンバー定着が大きい。リーダー、リシャール・ピナスの作品群の中でも、本作と続く6thアルバム「Interface」、そして彼の2ndソロ・アルバム「Chronolyse」を絶頂期の作品として挙げたい。エルドン——リシャール・ピナスの魅力とは、一言で表すならば〝理知的な暴力性〞とでも呼ぶべきものと考えるが、いかがなものか。 (城元)



HELDON
Interface
L P/Cobra COB 37013
CD/Spalax Music 14230 '78年
キング KICP 2714

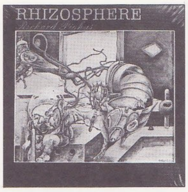
HELDONの傑作の一つ、通算6枚めのアルバムとなる。ビートの効いたシーケンサーにパーカッションとPinhasの歪んだギターがからみ、ムーグが飛び交う。ノイズやアンビエント、ミニマル・ミュージックにも通じる作品であり、「太陽と戦慄」以降のインプロヴィゼーション主体のKING CRIMSONを別な方向に発展させた、という見方もできる。特にLPのB面すべてを費やした大曲〝Interface〞では刻々とパターンを変えるシーケンサー、それにからむドラム、Frippしているギターが心地よい。間違ってもすがすがしい朝に聞いてはいけない、深夜作業の精神高揚BGMに。なお、ジャケットはCDサイズでは今一歩の迫力であり、是非ともLPジャケットでこの不気味さを鑑賞してほしい。 (野呂)



HELDON
Stand By

LP/Egg 900 578 '79年
CD/Spalax Music 14233
キング KICP 2713

HELDONの頂点の一角、従来と比べ曲として完成された感の3曲が収録されている。P.Gauthier作の小曲は彼のソロ作に通じるもので複雑ながらテクノ系にも通じるオシャレささえある。大曲2曲はそれまでのHELDONの集大成。〝Boléro〞はストイックに選ばれたエレクトロニクスが最大の効果を発揮していて、変化する8つのパートが勇壮な輝きを発しながら流れる。メインのシーケンサーはちょっとTDを思わせるが、それに絡みつき持続する緊張感を生みだしているF.Augerのドラムスが素晴らしい。さらにここぞ！という箇所で現われるPinhasのウネウネギター、彼のセンスと手法が集約されている。タイトル曲はバンド編成のCRIMSON風ヘヴィ・メタル、圧倒的なパワーだ。CDでは曲順が変更されている。（村本）



RICHARD PINHAS
Rhizosphere

LP/Cobra COB 37005 '77年
CD/Spalx Music 14237

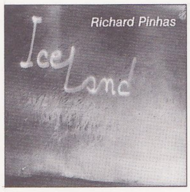
一般にこれほどピナスの作品で評価の低い作品は稀である。まるで、初期CLUSTERをミニマルにしたと、酷評をされたとしても、仕方がない。実際このアルバムは、発売が後になった、「Cronolyse」の後の制作にも係わらず、なんの手当ても無しに作品として放出されてしまったのだから仕方が無いかも知れない。ただ改めて聞き直した時感じるのは、やはり、ピナスも、音色おたくであるという事実である。気に入った音色を組み合わせてそれを延々流しっぱなしにするというのは自己満足であるにせよ気持ちのいいものである。尚、このアルバムの3曲目は、ミニマル御三家の一人フィリップ・グラスに捧げられている。尚蛇足ではあるが、買うのは、ずばりCuineform盤である。ボーナス曲が凄い！（中野愛渇）



RICHARD PINHAS
Chronolyse

LP/Cobra COB 37015 '78年
CD/Spalax Music 14220
(U.S.)Cuneiform Rune 30
キング KICP-2725

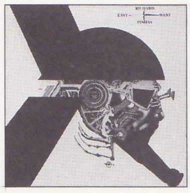
「終わりのない夢」（通称「溶鉱炉」）と殆ど同時進行的に作られたアルバムである。ピナスはこの時代以後、過激で理知的なギタリストという看板を全面に出す半面、センスの良いシンセ・ワークがあまり目立たなくなるのだが、このソロ・アルバムでは悩める彼の姿が見え隠れするかの如く、FRIPP & ENOに通じるアンビエントでミニマルな展開が前半（LPではA面、CDでは1－8曲目）に現れ、後半（LPではB面、CDでは9曲目）では、正に、〝ギターレス&バイブル・ブラック〞（ギター入っているんだけど、クレジット無し）ともいうようなシンセとベース、パーカッションによる「あ～プログレ聴いていて良かった」と、思わせてくれる、手に汗握り、元気も出てくるインプロヴィゼーションである。（中野愛渇）



RICHARD PINHAS
Iceland

LP/Polydor 2393 254 '80年
CD/Spalax Music 14236

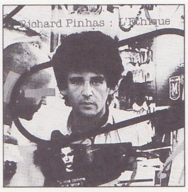
収録曲の〝Iceland〞、〝Greenland〞に表されるような氷原を無機的に描いたような作品。Francois Augerと Jean-Philippe Goudeが〝Greenland〞1曲だけに参加しているが、前作までのようなインプロではなく、ピナス的エレクトロニクス・サウンドに溶け込んでいる。エルドン＝ピナスという公式を考えると対極にあるような作品で、延々と繰り返されるモチーフの中をさりげなく、しかも説得力を持ったメロディが淡々と流れていく。そこには情景が拡がり、人間性をも感じられる。エレクトロニクス・ミュージックとしてジャーマン勢にも劣らないトップ・クラスの作品である。尚、CDには同時期のライヴから〝Winter Music〞という大作が収録されているが、これも全く同様な楽曲で、ボーナスとして違和感がない。（津田）



RICHARD PINHAS
East West

LP/CBS 84787 '80年
CD/(U.S.)Cuneiform Rune 31

いきなり炸裂。緊張感が高まる。まさに、SF仕立てのテレビ・ゲームのような生きの良いハードでパンク的な緊張感が溢れ出てくる1曲目〝TheCrash Landing Part1〞。ヒューストン69というテーマが付けられた1曲目から、ミニマル・ミュージックによる、世界旅行が始まる。ロンドンではDavid Bowie の〝Sence of Doubt〞を借用したりと、各地を転々としながら、ニューヨークに到っては、これほど評判が悪い曲もないのではないかというあまりにもポップな歌が始まる。しかしこの曲ですら、やはりミニマルの範囲からはさほど脱した訳ではない。ポップ・ミュージックの皮を被った、ピナスの世界なのである。このあたりのセンスは更に磨き上げられ、'94年9月に発売された「Cyborg Sally」にまで引き継がれているのである。（中野愛渇）



RICHARD PINAHAS
L'Éthique

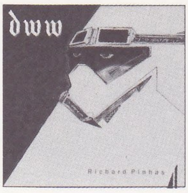
LP/Pulse 006 '82年
CD/(U.S.)Cuneiform Rune 36

おなじみの豪華メンバーが大挙して参加、全体にシンセのトーンが心地よく聴きやすいが、イージーに響く部分もある。ポップになったわけでもないのだが。そんな中で聴き所はやはり、Paganotti, Bailly, Gauthierの参加ピースになるだろう。上物の美しい緊張感とパガノッティのベースのバランスが耳新しい④、ちょっとゲーム音楽みたいな⑥、そしてベスト・テイクはKING CRIMSONに捧げられた②か。「Stand By」をコンパクトにしたようなヘヴィで攻撃的な曲だが、これが〝Interface〞のCDでは「Interface Pt.1」としてボーナス収録されているのは…いい加減かもね？また本作のCDボーナス⑩はAugerを含みやはりCRIMSONのインプロを思わすセッションだが、〝Interface Pt.2」と同じ時の演奏か。（村本）



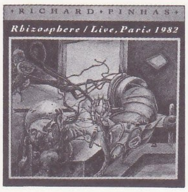
RICHARD PINAS/HELDON
Perspective
LP/Wea 24 0303-1　'84年

未発表ライヴ・テイクが収められたベスト盤。彼等の音楽はインプロヴァイズドされた部分が多いだけにこれは非常に嬉しい。CD再発に伴いボーナス・トラックとしてちょっとずつ収録されたライヴ・テイクはここからの音源だろう。2枚組LPのうち、量的には1/3弱だが〝Interface〞、〝Southbound〞、〝Marie Virginie C.〞を収録。ライヴにおける彼等はやはり非常に素晴らしい演奏をしている。PALACEでのライヴ、と表記されているだけでいつなのかは判らないが、R.Pinhas、F.Auger、P.Gauthierという編成になっている。スタジオ・テイクの方は、'76年「Un Reve」から'82年「L'ethique」の間の曲を、HELDON/ソロを問わず。どうせならスタジオ・テイクは入れずにライヴ・アルバムとして出してしまえば収まりも良かったと思うのだが。（伊藤）



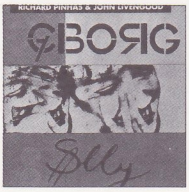
RICHARD PINHAS
DWW
CD/(U.S.)Cuneiform Rune 40　'92年

SF作家のP.K.ディックがEnoの「Discreet Music」をエンドレスで流しながら、最後期の傑作、ヴァリスを書いたのは有名な話であるが、本作では、個人的にはもっと好きなユービックをモチーフにした、そのものずばり〝UBIK〞が収録されている。おっと、余談から始まってしまった。本作は、'80年代の傑作で、評判も高い「Iceland」の'92年ヴァージョンであるが、一般的には評価がかなり低く、ポップな側面も好きな私は残念である。先に書いた〝UBIK〞は、約9分の緊張感やハード色を極力押さえながらも、メローでファンタジー色彩が強くしかもピナスらしさも発揮している隠れた名曲である。全体的に頭を使って聴く音では無く、手足を使い、腰で聴く音楽になっている点で評価したい1作である。（中野愛渇）



RICHARD PINHAS
Rhizosphère/Live, Paris 1982
CD/(U.S.)Cuneiform Rune 61
'77年/'94年（'82年録音）

ピナス/エルドン・ファン必聴。'82年パリでのライヴ音源が、LPにして1枚分の分量で収録されている。もちろん初公開、おまけにC・バイー、P・ゴーティエ、B・パガノッティ、ピナスという強力な布陣でのライヴ。実質的なカップリングCD状態である。ゴーティエ（syn）がいることもあり、ピナスのギターもたっぷりフィーチャーされ、15分を超える曲ではパガノッティがギター並みにベースを弾く。全体にカオスティック。ソロの秀作「Rhizosphére」とのカップリングだから一石二鳥だろう。エレクトロニック・ゲリラの名に恥じない。（松本）



RICHARD PINHAS
Cyborg Sally
CD/キング KICP 423　'94年

Pinhasの新作（ジャケットはJohn Livengoodとの連名、背はPinhas名義）。収録曲は、Pihhasの作品かLivengoodとの共作が大半だ。表題作のタイトルからは、W・ギブスン的なサイバーパンクを感じさせる。真夜中の近未来都市を思わせるようなサウンドは、確かにこの手のコンセプトとのマッチングが良い。表題曲と4曲目の作曲クレジットの中に見られるNorman Spinradは米SF作家（フィリップ・K・ディック、サミュエル・ディレーニー、ハーラン・エリスン等と並び称される程の作家）かと思われる。'79年頃、SF作家Spinradとアルバムを作る予定があったようだが、こういう形での実現となったようだ。Pinhasとしては久しぶりの快作。次作はリズム・マシーンではなく、ドラマーを起用して欲しい。（Chihiro S.）



OSE
Adonia
LP/Egg 90277　'78年

オズは主に「ベスト」というフランスの音楽誌で評論家として活動していたエルヴェ・ピカールが作ったバンドでメンバーも実際にはピカール一人だけである。このアルバムではゲストにエルドンのリシャール・ピナスとフランソワ・オジェが参加し、エルドンに近い演奏をしているがエルドンよりは幾分けだるく重い雰囲気を持っている。アドニアとは架空の惑星でジャケ裏にストーリーが書かれている。バンド名もSF作家のフィリップ・ファーマーの小説のタイトルからとられているSF的要素が強い作品に仕上っている。圧巻はB①のピナスのギター・ソロでオーガズム・マシーンという享楽を得る機械で人々が狂気の宴を繰り広げてゆくのを見事に表現している。クレジットではピカールが曲を書いているがピナスとの共作。（いわね）



GEORGES GRÜNBLATT
K-Priss
LP/Polydor2473 911
'80年（録音'77年）

元エルドン。と言う訳で、ピナス、ゴーティエ、エトリ、バタール、オジェと言った面々が（編成を替えつつ）各曲に顔を出す。となればエルドン・ファンの期待もふくらもうが、主役自身の感覚が前記ゲスト連のそれに比べやや平凡な為、出来栄えもそれに見合った物になってしまっている。殊に旧B面が弱い。フュージョン寄りのジャズ・ロックを凡庸なエレクトロニクス系にしたかの様な作風、とは言え、さすがにバックがバックなのでそれなりの出来はある。旧A面ではその辺が上手く出て、拡がりが予兆を感じさせる一曲目、オジェ、ゴーティエがあのエルドン・トーンで迫る二曲目、共に仲々良い。エルドン周辺をマニアックに追いたい向きには充分な作品、と言った所が妥当な評価か。（中西）

ART ZOYD

アール・ゾイ、イメージのブラック・ホールとしての音楽
□佐々木敦

'89年の発表ながら、アール・ゾイ単独のアルバムとしては現時点での最新作('90年にJ.A.ディーン、ジェフ・グリンケとのオムニバス盤が出た)ということになる"Nosferatu"は、言うまでもなく無声映画時代のドイツの監督フリードリッヒ・ウィルヘルム・ムルナウの名作『吸血鬼ノスフェラトゥ』('21年)に曲を付けたものである。各々3〜4分の断片的な楽曲群から成る全17曲が、映画のシークエンスに厳密に対応しており、いわば半世紀後に制作されたサウンド・トラック盤とでも呼ぶべき、本格的な「映画音楽」になっている。インナースリーヴには、実際にフィルムを映写しながら演奏している写真も載っているから、彼らは「映画」との共演ライヴも行なったのだろう。同じような試みは日本でも上野耕路なんかがやっていたが、ムルナウを持ってくるあたりいかにもアール・ゾイらしい。フランスのバンドでありながら、彼らの音楽には明らかにドイツ表現主義的と言ってよいような、明暗の激しいコントラストと、過剰な装飾性、そして幾何学的なコンストラクションが存在しているからだ。そう言えば彼らの近作をリリースしているレーベルEAR-RATIONALはエリオット・シャープの個人レーベルだが、ドイツを本拠とする会社である。

アール・ゾイは異端のバンドである。俗にチェンバー・ロックなどと呼ばれる一群の中にあって、彼らの存在は屹立している。ストリングスとキーボードがそのサウンドの中枢を成しているが、パーカッションというよりも(ドラマーのクレジットはない)楽器全体のアンサンブルがもたらす脅迫的なリズムと、ストラヴィンスキーやバルトークのもっともテンションの高いクライマックス的瞬間だけを取りだして延々と持続させたような恐るべき緊張感は、他に類を見ないものである。管弦楽器を使用していながら、彼らの音作りはいかなる意味でもシンフォニックではない。とりわけサンプラーを導入した"Nosferatu"ではますます錯乱の度を深め、限りなくイノズ・エクスペリメンタルなスタイルに接近している。ところで私はこのアルバムこそ、10年を優に越えるアール・ゾイの活動に於て、紛れもなくひとつの結節点となるものだと思う。ここには彼らの音楽が孕み持つプロブレマティークの、可能性と限界とが共に明らかになっていると考えられるからだ。

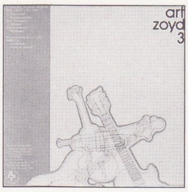
サウンドとイメージは本質的に互いに不可侵なものであり、決して入り交じることがない。そしてそれゆえにこそ、どのようにでも接続可能である。私達が映画などを観て、音が映像に合っていると感じる時、そこには私的な感覚以上の論理的な正当性は存在しない。サントラのような形で音楽のみを取り出すことが可能なのは、逆に言えばその楽曲が音だけでも存在し得ること、そこに映像があるのは単に恣意的な事柄に過ぎないことを意味している。アール・ゾイがユニークなのは、にもかかわらずその音楽が確かに、ある特定の映像から生まれてきているように思われることだ。しかもその映像を脳裏に思い描いてみようとしても、それはイメージ出来ない。何かの像を結びそうになっても、それはすぐさま音に吸い込まれていってしまうのである。ここに明白なパラドックスがある。つまり名作"Berlin"にしても、バレー音楽として発表された"Le Mariage Du Ciel Et De L'enfer"にしても、それらは実は存在しない「映画」のサントラとして作られていたのではないか。いわば彼らの音楽は「無声映画」の正反対に位置するものだったのだ。イメージの欠落としてのイメージを所有する音楽?

従って、彼らがやがて「無声映画」と遭遇することになるのは、ほとんど必然と言っていい成り行きだった。だが、今後もこの様な試みを続けるとすれば、アール・ゾイの音楽自体変わらざるを得ないだろう。具体的な映像の侵入によって、彼らの奏でるサウンドに装填された「イメージのブラックホール」が脅かされることになるからである。

アール・ゾイ略歴
□松本昌幸

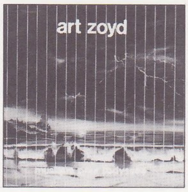
10作めの新作も間近いフレンチ・チェンバー・ロックの最右翼、アール・ゾイの歴史は古く、'70年代初頭に遡る。'71年にはシングル「Sangria/Something In Love」を自主製作しているものの、'70年代後半からの本格的な活動とは疎遠な内容のようだ。'76年、デビュー作「Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cités」でのラインナップは、Thierry Zaboitzeff(b,vo)、Gérard Hourbette(vln)、Jean-Pierre Soarez(tp,





ART ZOYD 3
Symphonie Pour Le Jour Où Brûleront Les Cités
LP/Production Michel Besset 001
'76年

アール・ゾイのデビュー作（厳密には本アルバム以前にシングルを１枚リリースしている）であるとともに、一時ユーロ・ロック・シーンで最も注目を集めているチェンバー・ロックの先駆けとなった作品でもある。ベース、トランペット、ギター、ヴァイオリンの４人が作り出すサウンドは複雑なリズムでクラシカルな展開をみせる。それはジャズ・ロックでもシンフォニック・ロックでもない新しい形態の創造的ロック・ミュージックである。なお、本作品は'81年にオリジナル・メンバーにヴァイオリン、サックスを加えて再録音されている（Atem7010）。オリジナル盤が各人のソロに重点を置いているのに対して、再録盤は絶妙のアンサンブルを誇っている。彼らは現在までに11枚のアルバムと２枚のシングルを発表している。（賀川）



ART ZOYD
Musique Pour L'Odyssée
LP/Atem 7002 '79年
CD/Mantra 065

今から見れば夢のような作品。ベルギーのナンバー１チェンバー・グループである、UNIVERS ZEROのDaniel Denis、Michel Berckmansの二人が参加しているんだもん。今なら正に夢の共演。Denis だけならば、１作目と３作目にも参加してるけど、Berckmansの参加は、オーボエと、バスーンとを持ち込んでの参加だけにその意味は大きい。ただ基本的な音の組み上げ方は、室内楽の領域や、フリー・ジャズがかつて'60年代に示した領域からは、大きく外に出るものではない。だが、この異常とも言えるテンションの高さと、暗黒な響きは、正に、KRONOS QUARTETの最高作の一つ「Black Angels」に匹敵する、ロックからの、あるいはヨーロッパからの一つの解答であり、その先駆けであった。（中野愛潟）

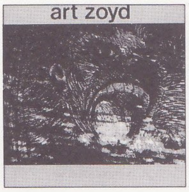
per)、Alain Eckert(g)。グループは以後、前2者を中心とした4～5人の編成で作を重ねる。

ディスコグラフィ

1st「Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cités」　'76年発表
2nd「Musique Pour L'odyssée」　'79年1月22～27日録音
3rd「Génération Sans Futur」　'80年2月14～21日録音
4th「Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cités」
再録'80年2月14～21日録音
5th「Phase IV」　'82年4～5月録音
6th「Espace Inquiets」　'83年8月録音
＊'84年　Thierry Zaboitzeff「Promethee」発表
7th「Le Mariage Du Ciel Et De L'enfan」　'84年10月録音
8th「Berlin」　'87年2～3月録音
9th「Nosferatu」　'88年10月～'89年1月録音

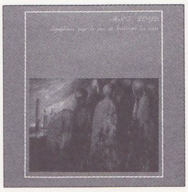
'79年から'80年にかけて、リコメンディッド・レーベルのRock In Oppositionに参加し、ユニヴェル・ゼロとのライヴ、ダニエル・ドゥニ、ミシェル・ベルクマンの2nd、3rdへの参加などから一つのピークをつくり上げる。比較的、室内楽調のクラシカルな色の強かった2ndから、ストラビンスキー風の躍動感を加味した3rdへ、そしてこの路線が最も表面化した4thへと過度に誇張されたサウンドが続く。特に1stを再録した4thは、新作と呼べる程のクオリティがあって、アート・ベアーズを旗印にしたリコメンディッドへの連動さえ読みとれる。3rdから加入したピアノ奏者、Patricia Dallioは後期アール・ゾイのサウンドの一端を担っただけに、この時期のバンド・テンションは高い。

アール・ゾイの特質は、サウンドの映像性にあり、似たフォームのユニヴェル・ゼロとの違いもここにある。構築性を追及するゼロに比べ、ゾイは遥かに情緒指向にある。5thは移行期とも言えて、以後はこの情緒指向が映像に結びつく方向で顕在化する。具体的にそれはサントラとなり、Le Collectif Theatral Du Mainautの「Aeschylus' Prometheus」の為の「Promethee」、ローラン・プティの為の7th、ムルナウのドラキュラ映画の為の8thといった作品となる。6th以後、彼らは自身のサウンド特質のアリバイをこれらサントラに見出したことで、終息したとも、その映像的な甘美さを極立たせたとも言える。それは一言に怪奇ムードと言えるものだが、サウンドの洗練が音響的な厳格さを引き出していて、むしろストイックでもある。



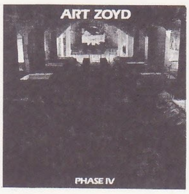
ART ZOYD
Génération Sans Futur
LP/Atem 7007　'80年
CD/Mantra 065

この後アンサンブルの重要な鍵を握ることとなるPatricia Dallio(p)の加入等、メンバーの半分が入れ替わったこの3rdは、'60年代末期のアート・ロック時代から、サウンドとメンバーの変遷を重ねて来た彼らが世界第一級のアーティストへステップ・アップした決定作。前作からの極立った変化として、彼らのオリジナリティを語る上で欠かせない「バーバリズム」の発現が何と言っても大きい。また複雑な展開、加えてドラムレスという編成にも関わらず、アンサンブルにはドライヴ感すら生まれており、これらが相まって全体にはえも言われぬ凄味が漂っている。更にD.Denis(ds, per)まで参加したタイトル・チューンは、彼率いるU.ZEROの〝Dense〟らと並びチェンバー・ロックを代表する名曲。（山田）



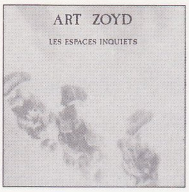
ART ZOYD
Symphonie Pour Le Jour Où Brûleront Les Cités
LP/Atem 7010　'80年
CD/Mantra 065

〝Génération…〟の直後に製作された1stの再録盤。前作での編成と音楽的成果には彼ら自身相当の手応えを感じていたのではないか。僅か5ケ月という間隔でのレコーディングの意味は、1stのモティーフのメンテナンスまたは再生という意図もさる事ながら、アーティストとしての創造的欲求の成せる業とも思える。変拍子やポリリズムを含む入り組んだアレンジがエモーショナルに、それでいて雰囲気に流されぬ強靱さを以って展開される。後半の組曲のヤケクソもしくは末期分裂症的バーバリステック・ワールドはファンならずとも一聴の価値あり。RIOが世界中を席巻した時期という事もあり、彼らと言えば本作という人は多いだろう。2nd～本作までとアルバム未収テイクが3＋αin 2でCD化された。（山田）



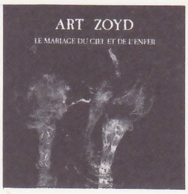
ART ZOYD
Phase IV
L P/Recomended Records 14-15 '82年
CD/Mantra Records 6016-6026

ピアノの一音一音がブリープとなり、大地に種を蒔き、サックスの遠吠えに、驚いた種が萌芽し、芽は大地を揺らし、徐々に根をより深く、より広くへと延ばし、茎は大空を目指し、人目のある昼間は避け深夜に、月を目指す。土地の霊たちは夜中に咲く暗黒の花の蜜をすすり、喜びの歌を歌う。ドラマである。だが、それは、まだ完成には到っていない。未完成の完成というものがあるとしたならば、それは、ビートルズの「ホワイト・アルバム」であり、本作であると言える。余談ではあるが、CD化に際して、本作と「Les Espaces Inquiets」と更に未発表曲集パート2とが、2枚のCDになったのだけど、何故か、私が持っているCDでは、ディスク1とディスク2がCDのミス・プリントで入れ替わっている（泣笑）。（中野愛潟）



ART ZOYD
Les Espaces Inquiets
L P/Cryonic INC 1153 '83年
CD/Mantra 6016-6026

いきなり恐いのである。暗黒なのである。蠢いているのである。何か判らないものが襲おうとしている、という、恐怖映画のサントラさながらに始まる、本作は正に、架空のサウンドトラックである。今までのフリー・フォームな一寸先は闇という展開の読み難い作風から、曲毎にテーマあるいは、意志（と言っても良いかも知れないが）を持った作品へと変貌したのが本作である。時折響くヘヴィーなギター、ポスト・インダストリアルを彷彿させるパーカッションの響き、サンプリング（テープと思われるが）の多様等からも、彼等が新たな展開を始めたということが判る。もしこの時点で、彼等の音が主流になっていれば、後のゴシック・サウンドは、大きく変貌を遂げていたであろう。名盤である。（中野愛潟）



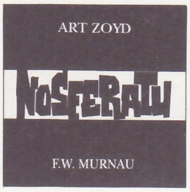
ART ZOYD
Le Mariage Du Ciel Et De L'enfer
L P/Cryonic MAD3009 '85年
CD/Cryonic MAD 3009 CD

Roland Petitによる創作バレエの為の委嘱作品。「Lcs Espaces…」で顕れたサウンド傾向は更に押し進められ、シンフォニック（勿論多くの人が期待するイメージとは懸隔があるが）なシンセ、シーケンスやエフェクトの効果的使用等、ひとつピークだった'80年代初頭のパターンから脱した新生面を聴かせる。支離滅裂と紙一重の4thなどを懐かしむ声もなくはないが、形は変われど突然の衝撃的イメージ・チェンジは本作にも健在。加えて執拗に繰り返される反復はシャーマニックな集中力すら生み出しており、タイトル（Blakeの作品の借用）そのものの世紀末世界を幻視出来る。本作あたりからZOYDに入るのも（CDであれば一度オリジナル通り①、②、⑧、⑨の順で聴いてみていただきたい）一興かと思う。（山田）



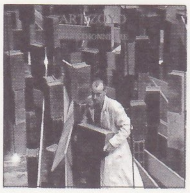
ART ZOYD
Berlin
L P/Cryonic MAD 3632 '87年
CD/Mantra CO 6021 CD

1stから要所のスパイス的役割を果たして来たJ・P・Soarez（tp, per）が脱退、後任にUNIVERS ZEROの「Uzed」で大活躍したAndré Mergenthaler（Cello, a-sax, vo）とは何とも贅沢な話だ。A面は具象性を持たないシンセが時間と空間を切り刻み溶かす様なHourbetteの、B面ではメカニズムとバーバリズムの対比が〝Macbeth〟の儀式的世界を更に黒化させてゆくZaboitzeffのペンによる大曲がそれぞれ収められている。初期の彼らは、Zodyan宣言に代表される自らの精神性の体現を独創的な曲想と強靱なアンサンブルにより図っていたが、ここに至り、聴き手の潜在的イメージを強烈に惹起しつつも、音そのものへのあらゆる解釈や介入を許さない真の意味での抽象性を確立させたと感ずる。代表作の1つ。（山田）



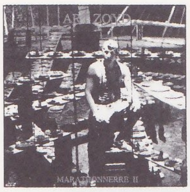
ART ZOYD
Nosferatu
CD/Mantra 031 '90年

オムニバス（「ART ZOYD. J.A.Deane, J.Greinke 〈Ear-Rational ECD1021〉」）ながら、2曲で20分を越える新作を発表して健在ぶりを示したアール・ゾイ。1921年にFriedrich Wilhelm Murnauによって製作された映画「Nosferatu」にインスパイアされた映画の流れに沿って作られた小品が17曲（他に「Vorgange」をテーマに3曲）収められている。既にグループとして円熟の境地にありサウンド自体に大きな変化はないが、その表現力は素晴らしく、インサートの数多くの写真からも感じとれる白黒映画ならではの不気味な雰囲気や恐ろしさが巧みに描き出されている。'70年代に彼らの作品を初めて聴いた時の衝撃こそないが、ゾイならではの叙景的サウンドであり完成度は高い。一部で使われている日本語のナレーションもそれほど無理がない。（賀川）



ART ZOYD
Marathonnerre I
CD/Atonal ACD 3015 '93年

前作同様に「Promenade au fond du bois」「Sang pour sang」等の映像を素養とした12時間（正午より）耐久？ライヴのドキュメント。'92年、フランスでの最終公演（'91年に既に2度行われた）から抜粋の形で通算約120分、27曲を収録。いつも通りThierry ZaboïzeffとGérard Hurbetteが折半で曲を提供（ほぼ書下し）し編成はピアニストPatricia Dallioを加え今回は3人のみ。演奏はスタジオ録りでは？と思わせる程クールである。確かに拍手入りの曲も有るのだが。残りの10時間ではおそらく〝Nosferatu〟を除く旧作が演奏されたと推測される。その非アコースティックなトーンは前作、あるいはZaboïzeffのソロに共通するものがある。映像、舞踏、加えて普遍的な主題を音楽で統合、そして変形させる試みはさらに深化へと向うようだ。（松本修一）



ART ZOYD
Marathonnerre II
CD/(Ger.)Atnal ACD 3016　'92年

日本人女性のTumomi Takegiが、ヴォイスというか、詩の朗読で、参加している〝Marée à la Nuit(Japanese version)〟が収録されているなど暗黒のテンションが異様に高い曲が要所に散りばめられた好作品である。この作品以外にも、「Nosferatu」でもやはり、日本人の詩の朗読が効果的に使われている。HourbetteとZaboitzeffにとって日本語の存在が、一体どんな意味をもつのか。あるいは、一体にどのように聴こえるのか。意味があるのか、無いのか。日本人リスナーを意識している訳ではあるまいが、日本の少女のあの虚ろな響きは忘れられない。トータル的にはやはり、12時間の完全盤ビデオ付で発表すべき作品を２枚のCDだけで終わらせるのはなんとも、惜しい話では無いか。　(中野愛湯)



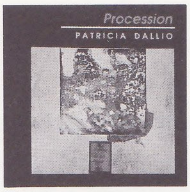
THIERRY ZABOITZEFF
Prométhée
ＬＰ/Cryonic INC 1154　'84年

「プロメテ」と題されたこの作品、アール・ゾイでベース、チェロを担当するティエリー・ザボワツェフの初のソロ・アルバムである。「エースキロス(ギリシャの悲劇詩人)のプロメテウス」という演劇のための音楽ということもあってか、その内容はアール・ゾイの作品とは異なる(部分的にはゾイに通じるところもある)。ゾイの同僚ディディエ・ピエトン(sax)と女性ヴォーカリストが一部参加しているが、キーボード、ベース、ギター、パーカッション等ほとんど全ての楽器をザボワツェフが演奏しダビングしている。反復構造の曲が多く、初期のグラスやライヒを思わす部分、フリップ＆イーノ風の部分、更にはゾイを電気的にした部分等が印象に残る。(賀川)



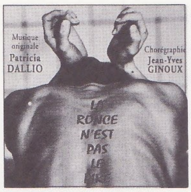
THIERRY ZABOITZEFF
Dr.Zab & His Robotic Strings Orchestra
CD/Mantra 074　'92年

セカンド・ソロは、１分未満の曲から７分弱の曲まで、全23曲から成る60分超の組曲である。キーボードを中心に弦楽器、打楽器等も一人で操って作り出したサウンドは、近時のアール・ゾイの作品同様、サウンド・トラック的雰囲気を持った叙景的なものである。ただ、ゾイ程の暗さはなく、曲調もゾイ風のものに加えて、ややポップなものやよりアヴァンギャルドなもの、クラシカルなものが含まれている。近時のゾイの作品に関しても言えることであるが、現在の彼らにデビュウから「PhaseⅣ」に至る時代のような進取の精神を感じることは出来ない。既に確立された手法のもとで如何にドラマチックで完成度の高いものを作るかという点にこそ存在意義があると言える。こうした観点で見て、本アルバムは中々の力作である。　(賀川)



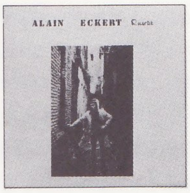
PATRICIA DALLIO
Procession
CD/David & Theodosis Records DTR554　'92年

アール・ゾイのキーボード奏者として知られるパトリシア・ダリオ、初のソロ・アルバム。かつての同僚であるアラン・エケールらも一部の曲に参加している。全13曲、50分超の小品集であり、曲調はゾイを思わす感じのものと、よりクラシカルな雰囲気のものとがある。全体として暗く不気味な印象は共通しており、白黒あるいはダーク・トーンの色調の映画のサントラ的サウンドでイメージが広がる。並々ならぬ力量を感じさせる質の高い作品であり、ゾイにおいて彼の存在がいかに重要かも分かる。次回は組曲的大作が聴いてみたい。　(賀川)



PATRICA DALLIO
La Ronce N'est Pas La Pire
CD/Body &Soul BS CD 00294　'94年

ソロ第２弾。舞踏絡みの音楽として作曲された作品のようだ。ART ZOYD系のミュージシャンというと、ジャケットのように重苦しい楽曲ばかりのような気がするが、女性ヴォーカリストSusan Bellingをフィーチャーしたおおらかな地中海的サウンドを堪能できる④、声楽的ヴォーカル・スタイルを多少イレギュラーに用いた⑦、お待ちかねの18分に及ぶ大曲の⑨、と収録曲はバラエティに富んでいる。ART ZOYDに叙情的な部分を付加した感じだ（その辺りがゴリゴリのファンには多少物足りないかもしれないが、音楽としてのバランスはこちらの方が良いと思う)。良く出来た映画のサントラのように、映像的なイメージを喚起する作品だ。ソリストとしてL.Georges(cl, b-cl）等が参加。　(Chihiro S.)



ALAIN ECKERT QUARTET
Alain Eckert Quartet
ＬＰ/L'amanite 011　'82年

ART ZOYD 3,「Symphonie Pour Le Jour Où Brûleront Les Cités」'76年版のギタリスト、アラン・エケールを中心にしたカルテットの録音。メンバーは他に、このアルバムを録音した'81年当時既にART ZOYDの重要人物になっていたPatricia Dallio、'80年代頭にユニットを率いてマグマ張りの強腕なドラミングで驚かせてくれたSerge Bringolf、そしてベース奏者のAlain Lecointe、と仲々おもしろい。そのまま各奏者のカラーが絡み合うようで、曲によってはアール・ゾイとマグマの臭いがいっしょにする。しかし、あくまでもこのアルバムはジャズ・カルテットの色が強い。そしてジャズという言葉を使うには相当癖が強く、またロック寄りで複雑に組み立てられた部分が目立つ。そういう一聴に値する一作。　(松本)

ZNR

□渡邊宏次



独身者の機械学、その後のZ et R

ZNRはエクトール・ザズーとジョセフ・ラカイユによる、フランスのチェンバー・ロック・ユニットだ。彼らが室内楽の形式で創りあげた唯一無比の音楽は、十数年を経た今なお、そのねじれた美しさで聴く者を魅了する。

もう一人の影のメンバー、ルイーズ・アルカザール夫人によって念入りに編曲された小品の数々は、ヴェールのかかった甘美な夢を、時にメランコリックなノスタルジーを醸し出す。しかし、こうした外貌の下に隠されてすみずみにまでゆきわたった〈毒〉がひきおこす〈融解〉こそが、彼らの音楽に超絶的な美しさを与えている。

ユニヴェル・ゼロやアール・ゾイが、バルトークやストラヴィンスキー、ショスタコーヴィッチあたりから、そのスタイルをとりいれたのに対し、ZNRはエリック・サティに、音楽性のみならず精神的な面でも、圧倒的な影響を受けている。すなわち〝ジムノペディ〞の作曲者と『健忘症患者の覚書』の著者とに。

1968年パリ五月革命の騒乱から生まれた前衛的ジャズ・ロック・グループ〝バリカード〞のメンバーだったザズーとラカイユがZNRを結成したのは'75年のことだ。翌'76年にデビュー・アルバムをマイナー・レーベルのイザドラから発表する。「Barricade 3」と題された作品は、初期のシンセサイザーと生楽器の薄っぺらなアンサンブルで、エキセントリックな機械音楽を奏でたオブジェ集だ。なお、このLPはイザドラの倒産ののち、'81年にイギリスのレコメンディッド・レコーズより、ジャケットを改めて再発された(ただし、何色もの別ヴァージョンがある)。アクサク・マブールやルク・ド・ブクのLPとともにCD化が望まれる名作だ。(近年CD化済み)

'79年にようやく2作目にして最後のアルバム「Traité de Mécanique Populaire」『一般機械学概論』をS.C.O.P.A.よりリリースする。生楽器が主体の室内楽団が奏でる曲は、時に前作以上に機械的な美しさを放っている。言葉遊びに対する偏愛など、いたるところに呪われた天才作家レーモン・ルーセルの多大な影響を感じさせる。このLPもS.C.O.P.A.の消滅とともに廃盤となるが、何故かフランスの民族音楽レーベル、BUDAからCD復刻されている。

以上2枚の作品を残しZNRは解散するのだが、二人のソロ活動は現在も続いている。

エクトール・ザズーは、リンガラ・ポップの帝王パパ・ウェンバとの共演盤マキシ・シングル「Malimba」のリリースを経て、同じくアフリカのヴォーカリスト、ビカエとコンビを組み、ベルギー、クラムド・ディスクのメイド・トゥ・メジャー・シリーズで数枚のアルバムを残している。そのかたわら同シリーズのVol.5としてリリースされた「Geography」は声楽と室内楽のための作品集で、深めのリヴァーヴが厳粛な雰囲気を醸し出している。ザズーはこの中で「Barricade 3」の彼



自身の作品を2曲リメイクして収録している。ただし、その後のシリーズVol.20「Geologies」は「Geography」の続篇というふれこみに反して、耳に心地よいニュー・エイジ・ミュージックの類であろう。

最近の彼の仕事としては、ポリグラムからリリースされた「Les Nouvelles Polyphonies Corses：コルシカ島の新しいポリフォニー」のプロデュースがある。ポリフォニー合唱といえばブルガリアン・ヴォイスが有名だが、地中海コルシカ島にも伝統的な無伴奏合唱曲がある。これにザズーと、ゲストのジョン・ハッセル、坂本龍一らが伴奏を加え、エフェクトをかけたものだ。「Geography」以来の声楽の探究と、パパ・ウェンバとの共演に始まる民族音楽への興味が結実した、ザズー流のワールド・ミュージックといえるだろう。

ジョセフ・ラカイユはZNR解散後、'83年に"Barricade 3"時代からの盟友、パトリック・ポルテラとのデュオ作品「Les Flots Bleus」(12インチ、45回転)、同時に小編成のバンドによるシャンソン集「Six Petites Chansons」(7インチ、33回転)をレコメンディッドからリリースする。

その後、レコメンディッド系の各種オムニバスに参加するなど、地道な活動を続けてきたラカイユだが、最近は舞台裏での活躍が目立ってきている。まずはジャック・イジュランの息子アルチュール・Hのプロデュース。続いてユダヤ民謡とジプシー音楽、ブラッチ"BRATSCH"のプロデュース。

'91年には久々にCD「Triton」をリリース。ただしこれは、若手演出家ビエール・デュクフレの同名のバレエのための音楽で、パラジートなる人物と曲を半数ずつ受け持った連名作品であり、付随音楽の域は出ないようだ。

'92年アルベールヴィル冬季オリンピックの開会式のファンタスティークなスペクタクルの演出を手がけているのが、このデュクフレで、ラカイユはここでも曲を提供している。

そして、サティ、ミヨー、プーランクの歌曲からバリ・ハイまでこなすというフランスのトリオ、"ドラ・ルー"。彼らのアルバムに半分、オリジナル曲を提供しているのがまたラカイユなのだという。現在ではCDが手に入るはずだが、このドラ・ルー、既に来日の予定があるから要注意だ。

器用な才人ザズーに対し、趣味の人、ディレッタントの印象が強かったラカイユだが、このところの、マイナー/メジャーの境界を縦横無尽に往き来する暗躍には目を見張るものがある。

こうして最近の二人の活動をみていると、今さらながらZNRが稀有な才能の幸運な出会いだったことを思い知らされる。謎の多いルイーズ・アルカザール女史を触媒にして作られた、あの魅惑的な作品群は二度と生まれることはないだろう。今はただ、二人の自作自演のオリジナル作品ができるのを待つばかりだ。

ZNR
Barricade 3



LP/Isadora ISA 9002 '79年
CD/(U.S.)ReR ZNR1

1968年パリ5月革命の騒乱の中から生まれた前衛ジャズ・ロック・バンド、バリカードのメンバーだったエクトール・ザズーとジョゼフ・ラカイユが1975年に結成したロック・ユニット、ZNRの1stアルバム。アナログ・シンセサイザーのチープな電子音とフランス近代音楽風のピアノ、生楽器のアンサンブルで機械の夢を紡ぎだす、エキセントリックなサロン・ミュージック。キラキラと鉱物質の輝きを放つ音のオブジェのメカニークな美しさには比類がない。エリック・サティの影響は、音はもちろんのこと、随所で顔を出す諧謔精神にも明らかだ。内ジャケットにはキャプテン・ビーフハートのデッサンも収められ、「室内楽の編成でアヴァンギャルド・ロックを演奏するサティの末裔」といったところか。 （渡邊）

ZNR
Traité De Mécanique Populaire



LP/S.C.O.P.A.10002 '79年
CD/Buda 82477-2
Tomk ; TK 0005-2311

完全に室内楽の編成となった2作目にして最終作「一般機械学概論」。念入りに彫琢を施された生楽器のアンサンブルは、ヴェールのかかった神秘的で甘美な夢を、或いはメランコリックなノスタルジーを醸し出す。しかしこの作品の超絶的な美しさはそんな表層にあるのではない。いたるところに仕掛けられた謎とミスティフィカシオン、ペダンティックな引用とパロディ。隅々にまでゆきわたった毒がひきおこす融解の美、高い張力で宙づりにされた痙攣的な美がここにある。エリック・サティの影響は言わずもがなだが、機械的な道具だてと言葉遊びへ偏愛は呪われた作家レーモン・ルーセルの影響を感じさせる。チェンバー・ロックの奇跡的名作。 （渡邊）

HECTOR ZAZOU
Geographies



LP/Crammed Discs MTM5
CD/Crammed Discs MTM5

ピアノとヴァイオリンやチェロ、クラリネットやオーボエなどの生楽器アンサンブルによる室内楽作品集。ZNRでは用いられなかったメゾ・ソプラノを中心とした声楽が、このアルバムでは大幅に取り入れられている。全体に深いリヴァーヴをかけて空間的な奥行きを演出するアンビエントな音作りは、メイド・トゥ・メジャー・シリーズを活動の拠点にして以降のザズーの特徴的な手法だ。ZNR時代の曲もアレンジを加えてリメイクされているが、聴き易くなった反面、ZNRの屈折した魅力は薄れている。なお、続編として同シリーズで後に制作された「Geologies」はエレクトロニクスをより多用した室内楽作品だが、一層、毒は薄まって、むしろニュー・エイジ・ミュージックに近い印象を受ける。 （渡邊）

HECTOR ZAZOU
1977-1990



LP/Tomk TK 0001-2311 '91年

アルジェリア生まれのフランス人、奇才エクトール・ザズーの足跡をたどるベスト・アルバム。文字通り、'77年ZNR時代の頽廃的室内楽から、'80年代、メイド・トゥ・メジャー・シリーズで発表したエレクトロニック・アフロ・ミュージック、声楽と室内楽とシンセサイザーを用いたアンビエント・ミュージックを経て、'90年のコルシカ島の伝統歌唱を素材にしたエスノ＝アンビエント作品にいたるまで収録している。改めて通して聴いてみると、ザズーが本質的にプロデューサーであることがわかる。「現代のサティ」ジョゼフ・ラカイユから声楽、民族音楽など、彼には常に興味の対象となる素材があり、これは、その魅力を生かしながら別の何かを作り出そうとしてきた才人の軌跡である。 （渡邊）

HECTOR ZAZOU
Sahara Blue



LP/Crammed Discs '92年
CD/ソニー・レコーズ SRCS 5975

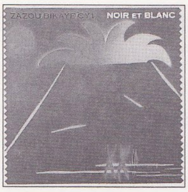
アルチュール・ランボーの没後百年を記念して制作された企画アルバム。ジョン・ケイル、坂本龍一、デイヴィッド・シルヴィアン（ミスターX）、シェブ・ハレド、ビル・ラズウェル、ジェラール・ドパルデュー等々、参加アーティストは多士済々。ランボーの詩を選択して彼らに割り振り、各トラックをプロデュースしてアルバム全体を構成するのが「映画監督式プロデューサー」ザズーの役目だ。仏語、英語、アラビア語、ヘブライ語が飛び交う奇抜な組み合わせで、詩人ランボーと砂漠のエキゾティズムを描き出している。なかでも坂本龍一が引き合わせたとおぼしい、ザズー＝シルヴィアンの共作3曲が秀逸。ザズーのプロデューサーとしての手腕が、初めて表舞台で発揮された作品。 （渡邊）

HECTOR ZAZOU
Reivax Au Bongo



LP/Crammed Discs MTM2
CD/Crammed Discs MTM2

クラムド・ディスクスの視覚音楽シリーズ、メイド・トゥ・メジャーの第2弾。グザヴィエ・ランブール作・演出、ザズー主演・脚本のフォト・ノヴェルのための音楽。シンセサイザーにヴァイオリン、クラリネットなどの生楽器、アフリカン・パーカッションの演奏に、リヴァーヴのヴェールをかけた幻想的/視覚的なアンビエント・ミュージック。A面がアフリカ音楽のリズムと音階、ボニー・ビカエのヴォーカルをフィーチャーしたワールド・ミュージック。B面がメゾ・ソプラノの多重録音を加えた室内楽。付属のフォト・ノヴェルは、アフリカの架空の王国ボンゴで繰り広げられる青年レーヴァックスの荒唐無稽な冒険活劇。ズボンを脱いでの怪演に、奇人ザズーの一面をみることができる。 （渡邊）



ZAZOU/BIKAYE/CY1
Noir Et Blanc

LP/Crammed Discs/LP CRAM 025 '83年
CD/Crammed Discs/CRAM 2534 CD

ZNR解散後、ザズーはアフリカ音楽に接近する。リンガラ・ポップの帝王パパ・ウェンバとの12インチをリリースした後、ザイールの歌手ボニー・ビカエとコンビを組み、'89年の「Guilty!」まで活動を共にする。本作は録音にマルク・オランデルはじめアクサク・マブールのメンバーが（1曲だけフレッド・フリスも）参加している。エレクトロニクス担当の「マッド・サイエンティスト集団CY1」はザズー＆オランデルの変名か。タイトル「黒と白」が表わすビカエとザズー、民族音楽と電子音楽、熱狂と冷静、野生と理性の対比は調和を目指すわけでもなく、イーノ＆バーン以後の「ワールド・ミュージック」のように片方が他方を消化（略奪）するわけでもない。奇才ザズーの意図的な（？）ミス・マッチ。（渡邊）



LES NOUVELLES POLYPHONIES CORSES
Les Nouvelle Polyphonies Corses

LP/Philips 848515-2 '91年

エクトール・ザズーのプロデュースによる「コルシカ島の新しいポリフォニー」。ポスト＝ブルガリアン・ヴォイスとして民族音楽ファンの注目を集め始めていた地中海コルシカ島のポリフォニー合唱のアカペラに、坂本龍一、ジョン・ハッセル、ジョン・ケイル、マヌ・ディバンゴ、イヴォ・パパソフ等が伴奏を加え、ザズーがエレクトロニクス処理とアレンジを全面的に施している。伝統歌唱の荘厳な美しさを生かした、良質なエスノ＝アンビエント・ミュージック。声楽と民族音楽をMTMシリーズで並行して追究してきたザズーがついに到達した、ワールド・ミュージックの新境地だ。セールス的にも初めて成功を収め、ザズーはこの作品でプロデューサーとして一躍脚光を浴びた。（渡邊）



PATRIZIA POLI
Zara

CD/Philips 510973 2 '92年

フランス領コルシカ島には「ポリフォニー」と呼ばれる孤高の伝承音楽が存在するが、これに目をつけたHector Zazouがその現代解釈として制作したプロジェクト・アルバムでリードを取っていた女性シンガーのソロ・アルバム。Zazouの作品のようなアカデミックなものを狙った訳ではなく、打ち込みを多用してポピュラー・フィールド寄りのアレンジが施されている。しかしルーツであるコルシカ島の「血の濃さ」は消えず、結果的にプログレッシヴ以外の何物でもない唯一無二のヴォーカル・アルバムとなってしまった。伝承音楽をサシで歌っていたこともあって、その大地に根ざしたかのようななまめかしいヴォイスは一聴するだけで背筋に戦慄が走るほどの存在感がある。ドラムは元PAGAのClaude Salmieri。（内田）



PATRICK PORTELLA/JOSEPH RACAILLE
Les Flots Bleus

12″ Single/Recommended RR16 '83年

元ZNRのジョゼフ・ラカイユと、アルバムに参加していたパトリック・ポルテラの12インチ45回転のミニ・アルバム。A面はポルテラのソロ。クラリネットの多重録音による合奏曲小品集。シンプルなのに豊かなアンサンブル。B面はラカイユのピアノ弾き語りによる〝数え唄〟の他、ピアノ曲と、ポルテラのクラリネットを加えてのデュオ。ZNR時代の曲もリメイクされている。〝数え唄〟はユーモア（時にブラック・ユーモア）に満ちた9曲の歌曲小品集。全体にフランス近代風の軽さ、明るさに溢れている。ジャケットもどこか楽しげだ。ZNR時代には表面に出てこなかったラカイユの特質である。歌は相変わらず下手だが、不思議なことにそれが彼の音楽の魅力を増すことはあっても損ねることはない。（渡邊）



RACAILLE/PARAZITE
Triton

CD/Babylone BAB 875005 '90年

アルベールヴィル五輪開会式のスペクタルの演出で名を挙げる前、まだ新進気鋭の振付家だったフィリップ・ドゥクフレのダンス作品〝Triton〟のための音楽。半数をラカイユが、半数をパラジートなる電子音響ユニットが担当している。ラカイユのパートはエキゾティックな室内楽。ハワイアン、ミュゼット、タンゴ、チャチャチャ、アラブ音楽、ブルガリア音楽等がラカイユ流に料理され、技量の確かな楽団により軽快に演奏される。知的な中に溢れるユーモアはまさにドゥクフレの作品にふさわしく、以後ドゥクフレ作品にラカイユの音楽はなくてはならないものになっている。しかし一方この音楽が、そのファンタスティークな世界でこそ真価を発揮する「ドゥクフレのダンスのための」の作品であることも否めない。（渡邊）



DORALOU
Repertoire Demi-Mondain

CD/ADDA 590065 '91年

ドラ・ルーは主にフランスの近代歌曲をレパートリーとするユニークなユニットだ。このデビュー・アルバムでは、サティやミヨー、プーランクといった大家の歌曲とともに、元ZNRのジョゼフ・ラカイユの〝数え唄〟(「Les Flots Bleus」所収)などの作品が同等に取り上げられている。オーソドックスなソプラノに、一見、場違いなハワイアン・ギターやスライド・ギター、ウクレレを、絶妙なセンスでかぶせているのは元ヴィデオ・アヴァンチュールのシリル・ルフェーブル。脱力を誘うようなこの伴奏によって、これらの歌が貧血症のクラシック歌曲ではなく、ベル・エポック期のミュージック・ホールの華やかさを持った、楽しく艶っぽい、魅力的な「フレンチ・ポップ」だったことに気づかされる。（渡邊）

ETRON FOU LELOUBLAN

□坂本　理

フランスのポピュラー音楽の背景に横たわるアヴァンギャルド指向の歴史は非常に古く、その源流を遡るだけの根気は私にはないが、少なくとも第2次世界大戦後のフランスの殆どすべての音楽の背景にそれを聴き取ることができるだろう。特にそれが顕著に現われている例がシャンソンの世界であり、その異様に突出した演劇的な要素において前衛的な表現をつとめて内に組み入れようとする傾向が強い。

それをいびつなほど極端な形でロックに持ち込んだのがETRON FOU LELOUBLANだった。ETRON FOUが特異だったのは、特にフランス語から要請される固有の表現形態を音楽の構造そのものに反映して、決してフランス以外では生まれ得ないアヴァンギャルド・ロックを創造したことだ。彼らがヒントにしたのがCAPTAIN BEEFHEARTだったりFAUSTだったりしたことは間違いないにせよ、彼らの音楽のオリジナリティーはいかなる批判にも微動だにしないほど強靭だ。だからこそ、解散して久しいバンドにも関わらず、彼らの音楽が今尚フレンチ・アヴァンギャルド・ミュージック・シーンにおいて繁殖をし続けている訳だ(現在のフレンチ・アヴァンギャルド・ロックの核となっているのはこの周辺と、Natoレーベルのミュージシャン達だと理解していい。Natoはフランスからはみ出し、ちょっと意表を突いたイギリスのミュージシャン達を巻き込んでいる。それ故にフランスの音楽シーンの中ではとても語り切れない)。

ETRON FOU LELOUBLANの活動期間は'73～'85年と想定される。その間に『Batelages』('77)、『Les Trois Fous Perdegagnent』('78)、アメリカ公演を収録したライヴ・アルバム『En Public Aux Etats Unis D'Amerique』('79)、フレッド・フリス・プロデュースの『Les Poumons Gonfles』('82)、『Les Sillons De La Terre』('84)、再びF・フリスがプロデュースした『Face Aux Elements Dechaines』('85)の6枚のアルバムを残している(ライヴを除く5作は『43Songs×3CDs』に纏めてCD化されている)。彼らは'78年にHENRY COWが提唱したRock In Oppositionに参加したことで一躍バンドの名を高め、フランスにETRON FOUありの強烈な印象を世界中のアヴァンギャルド・ロック・ファンに知らしめた。それくらい彼らの生み出した音楽は異形だった。

ETRON FOU LELOUBLANはフェルディナン・リシャール(vo,b)とギグー・シュヌヴィエ(d,sax,vo)をメインにサックス奏者が加わったトリオとして活動した(長い活動期間中にサックス奏者は次々と交代)。リズム・セクション＋サックス＋ヴォーカルというまるでハーモニーに恨みでもあるかのような編成は、空間を埋めるのではなく、いかに強く太い線を描くかに心血を注がせる作用をもたらした。それは4thアルバムより参加したジョー・ティリオン(kb)が4人目のメンバーとして固定しても変わらなかった。

フェルディナン・リシャールもギグー・シュヌヴィエも、ETRON FOU在籍時よりソロ・アルバムを発表していたが、バンド解散後活動を異にしても、ふたりはそのままETRON FOUの音楽を継承した。

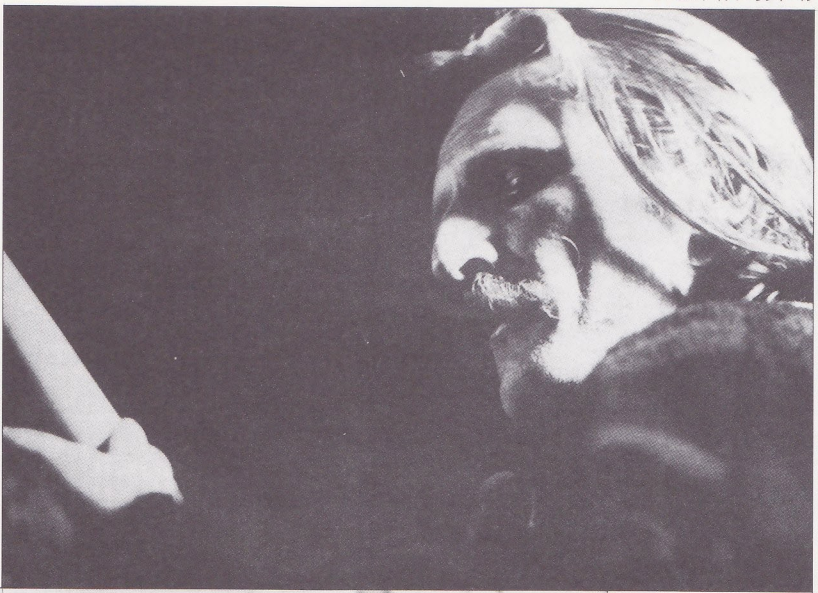
リシャールは'84～87年、アルフレート・ハルト(sax)らと多国籍グループGESTALT ET JIVEで活動。また、ETRON FOUの最終メンバーだったブルーノ・メイエ(sax,fl)とデュオ・グループBRUNIFERDを結成し、'86年から活動を開始。更にLES PHILOSOPHESを率いてのソロ・アルバムやフレッド・フリスとのデュオFRED & FERDでもアルバムを発表している。彼の最新プロジェクトはARMINIUSで、これも既にアルバムが出ている。

一方のシュヌヴィエは'86年にLES BATTERIESを結成。ライヴ活動も行ない、2枚のアルバムを発表している。また、'84年にアムステルダムで知り合ったミュージシャン達と結成したENCORE PLUS GRANDEはBARBARIE LEGEREを経て'90年にOCTAVOへと発展を遂げた。

ETRON FOUの最終メンバー、ジョー・ティリオンとブルーノ・メイエのふたりも個別に活動を展開。ティリオンはART MOULUでライヴ活動を行なう。また、メイエはLES Ⅰで活動後、アメリカに足を踏み入れ、マーク・ハウエルとZERO POPを結成した。2枚のソロ・アルバムも発表している。

ここで登場したすべての関連バンド/プロジェクトがETRON FOUの影響を色濃く反映していることは、彼らの音楽の特異性を今もって主張し続ける。しかも彼らの音楽は周辺にも伝播した。リシャールが運営しているMIMIフェスティヴァルや、元DEBILE MENTHOLのモモ・ロッセルが運営しているAYAAレーベルに参加しているミュージシャン達が完全に徒党を成しており、一大勢力となっている。そうした拡散して行くETRON FOUを確認できる好サンプルとして『Hardis Bruts』は聴き逃すことができない。

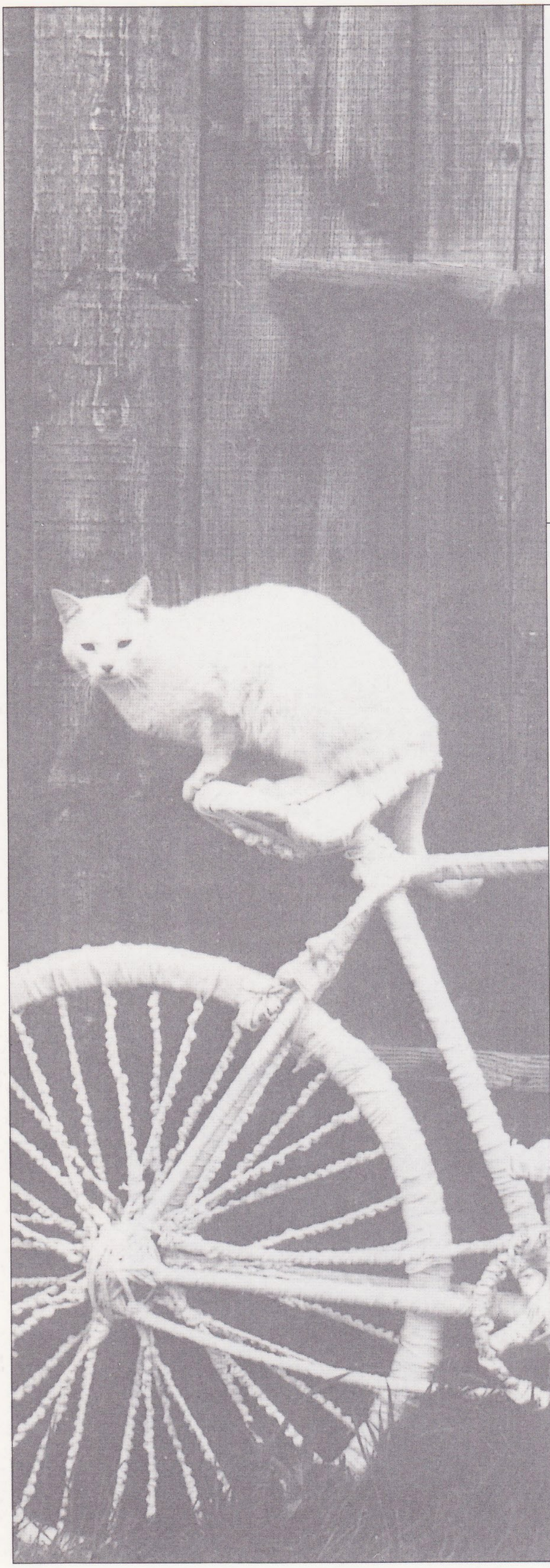
●フェルディナン・リシャール





●ギグー・シュヌヴィエ







ETRON FOU LELOUBLAN
Batelages

L P/Gratte Ciel 2001　'77年
CD/Baillemont CD 929

「狂糞白狼」を名乗る３人組の鮮烈なデビュー作「大道芸人」。気が狂ったようにシンバルをスパークさせるドラムスとほとんどエフェクトなしの生音フェンダー６弦ベースが暴走し、フリーキーなサックスがそれに乗って突っ走る。ほとんど詩の朗読が演劇の台詞のように芝居がかった、シニカルで挑発的な諧謔に満ちたヴォーカル。野獣の咆哮、道化の警句。もはや手のつけられないこのフリーク・アウトぶりは天才と紙一重か。彼らの全作品の中でも最もテンションの高いアルバム。唯一無比の極めて奇形的なサウンドだが、もしもボリス・ヴィアンがあと30年遅く生まれて、ジャズではなくキャプテン・ビーフハートに感銘を受けていたなら、こんなロック・バンドを組んでいたかも。　（渡邊）



ETRON FOU LELOUBLAN
Les Trois Fou's Perdegagnent (aupays des…)

L P/L'orchesra OLPS　55002　'79年
CD/Baillemost CD 929

エトロン・フー・ルルーブランは、それでも後期には、楽曲的にも洗練され、アンサンブルもいくらか緻密になっていく。初期の破天荒な野放しの凶暴さはコントロールされるようになり、崖を転げ落ちるような激しさは、坂を駆け降りる勢いになる。しかしキーボードが入る前、この２作目までは、原初的な衝動がむき出しのまま現れており、猥雑ゆえのダダイスティックな美しさがある。ヴォーカルの過剰な芝居っぷりも初期に顕著で、グランギニョール（残酷演劇）の諧謔と挑発がこのアルバム全体にあふれている。ギグー・シュヌヴィエとフェルディナン・リシャールの、その後の活動の原点はここにある。　（渡邊）



ETRON FOU LELOUBLAN
43 Songs×3 CDs

CD/Baillemont CD 929　'92年

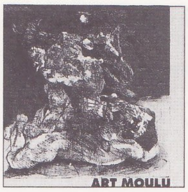
今ETRON FOU LELOUBLANを聴くなら、このCDで殆ど用が足りる(クレジットの不親切さが実に勿体ない。)全６枚のうち、ライヴ・アルバムを除く５枚のアルバムがこの３枚組CDに収録されている。あまりにも個性の強い彼らの音楽を全部ぶっ通しで聴く元気は普通のリスナーにはないだろうが、しかしこうして纏めてCD化された意義は極めて大きい。彼らのごつごつとした独特の節回しは終始首尾一貫しているが、通して聴くと、女性kb奏者J・ティリオンが参加した４thあたりから少しづつうっすらとした肉付けが施されていることに気付く(まるでジャコメッティの塑像のような肉付けだが)。それが奇妙なレリーフ効果となって現われている５th『Les Sillons De La Terre』の音楽が個人的には一番好みだ。　（坂本）



ARMINIUS
Arminius

CD/Stupour & Trompette! ST 101001 '93年

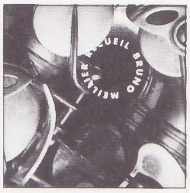
ARMINIUSは、現時点で最新のフェルディナン・リシャールのプロジェクトだ。バンド名であるアルミニウスは西歴9年にローマ軍を撃滅したゲルマンの首長の名に因む。紀元後のヨーロッパ文明に常につきまとうゲルマン対ラテンの構図はこれまでにも多くの芸術家の関心を誘って来たが、ドイツで開催された2つのフェスティヴァルに関わったリシャールも改めて歴史と音楽の関係に深い興味を抱き、このユニークなバンドを結成するに至った。2本のヴァイオリンと2本のエレクトリック・ベースというカルテット。ほかの3人のメンバーが名前からすると日系/東欧系/ゲルマン系/と混在していて、テーマへのこだわりの程が窺える。編成故に派手さには若干欠けるし、まだ実験段階という印象だが、一聴の価値あり。（坂本）



ART MOULU
Art Moulu

L P/Il Post Records IPR 1116 '91年

6弦ベースこそないものの、変拍子をフリーキーにたたき出すドラムス(ジャン=フランソワ・ウェルテ)と奇妙なリフを繰り返すサックス(オリヴィエ・マッソン)、粗野なダミ声ヴォーカル(モーリス・オット)からなるアール・ムリュは、かねてよりエトロン・フー・ルルーブランの強い影響を感じさせていたバンドだが、エトロン・フーの解散後、キーボーディストのジョー・ティリオンがメンバーとして参加したことにより、一層エトロン・フーのサウンドに近づいた。'80年代からオムニバスには参加していたが、このイタリアでのライヴ盤が初めてのアルバムである。本家に比べると（猥褻な歌詞を含め）いささかストレートすぎるきらいはあるものの、エトロン・フーのファンなら必聴であろう。（渡邊）



BRUNO MEILLIER
Recueil

CD/NM 202 '91年

エトロン・フォロワーというべきLes Iから招かれたブルーノ・メイエは(as, ts, fl)は、解散後リシャールとのデュオBRUNIFERDを経て、マーク・ハウエル(g元Curlew)を含むNYベースのトリオZERO POPで活動している。私の知る限り彼のソロ名義作は2枚。初作「ソロ・サクソフォン」(NM201 '87年)は、一部デュオを除き一人多重録音(as, ts, fl, pf)によっており、ユーモアと典雅さをたたえた音色と幾何学的な構成が美しい。続く本作ではNY人脈(DR. NERVEのリーダー)のNic Didkovsky(g)やPASCAL COMELADEの共同作業者Pierre Bastien(cb, harp)、前作にも参加のDaniel Brothier(ts)らの協力を得て、さらに繊細な鋭利さを増した音色により、緻密にして速度感に溢れた演奏をしている。（福島）



BRUNIFERD
Un Puteh Kitch

CD/Saxophone & Musiques Innovatrices NM 203 '91年

元ETRON FOU LELOUBLANのフェルディナン・リシャール(b, vo)とブルーノ・メイエ(sax, fl, vo)のデュオ・プロジェクト。これはRecRecからリリースされた「Bruniferd」('86)に続く2ndアルバムだ。その間にメイエは渡米し、ZERO POPでマーク・ハウエルと共演し、またソロ・アルバムも制作している。ここではふたりきりの演奏で、オーヴァーダブも行なっていないので、日頃いやと言うほど厚塗りのサウンドに甘やかされた耳には衝撃的とも言えるすかすかのサウンドになっている。勿論ETRON FOU自身がそういうバンドだった訳だから、殊更意外ではないにせよ、余計な装飾を一切排除し骨格だけで成り立っている音楽の在り方は、聴く者に、音楽とは本来どういう表現行為なのかという根源的な命題を喚起する。（坂本）



ENCORE PLUS GRANDE
Total Bliss

CD/ '87年

ENCORE PLUS GRANDEは元ETRON FOU LELOUBLANのギグー・シュヌヴィエ(d)がオランダのミュージシャン達と結成したバンドが発展してOCTAVOになり、またオランダのミュージシャン達は別にSUMBURを結成することになることからも判るように、ETRON FOU関係の数多いバンドの中では特にロック色が強いので、この辺の音楽に慣れていないリスナーにも聴き易いだろう。音楽的なリーダーはシュヌヴィエではなくHan Buhrs(vo, g)と思われるが、それでもいかにもETRON FOU一派らしい音になっているのはさすが。多分唯一のアルバムであるこの作品はプロデュースをティム・ホジキンソンがかって出ており、演奏にも参加。ミュージシャン達のこうした活発な動きが現在のこのシーンを築き上げて来た。（坂本）



FERDINAND ET LES PHILOSOPHES
...Enclume

CD/RecRec ReCDeC 36 '91年

フェルディナン・リシャールはETRON FOU LELOUBLAN在籍中からファースト・ネームのみを名乗って、「Ferdinand En Forme!」('81)と「En Avant」('83)の二枚のソロ・アルバムを発表しているが、それに続くソロ作品がこのアルバムということになる。但し、LES-PHILOSPHESはアラン・ロシェール(g, vo)と元LES Iのドミニク・ランタン(ds, vo)を率いてのトリオとしても解釈できる。例によって骨格は野太いが、肉の薄い音楽で、ETRON節としか呼びようのない音楽が力強く演奏される。ゲストとしてジョー・ティリオン(kb)やクリスチャン・コハード(b)ら馴染みのミュージシャンが参加している。途切れることなく作品を発表し続ける元メンバー達の音楽を聴くと、ETRON FOUは解散ではなく細胞分裂したのだとしか思えない。（坂本）



FRED & FERD
Dropera
CD/RecRec Music ReCDec 32　'91年

フレッド＆フェルドとは、フレッド・フリスとフェルディナン・リシャールのこと。このふたりがENCORE PLUS GRANDEの管楽器奏者を迎え、フェルディナンの作詞に基づく何とも妙ちきりんなストーリーを音で綴る。今時大変珍しいコンセプト・アルバムだ。ジャケットも忠実にストーリーに添っていて、どうにも不気味でユーモラスな寓話風の世界を描き出す。主役は間違いなくフェルディナンで、それをフリスがバックアップしている形だが、それは一癖も二癖もあるフェルディナンの音楽(ETRON FOU一派に共通の音楽)を巧く引き立てている。レコーディング・ミュージシャンとしてのフリスを見直させてくれる完成度の高いアルバムだ。（坂本）



GUIGOU CHENEVIER/DENIS BERNET-ROLLANDE
Le Diapason Du Père Ubu
L P/In Poly Sons CD IPS 0493　'93年

先駆的ダダイスト、アルフレッド・ジャリの戯曲「ユビュ王」をもとに、ドニ・ベルネ＝ロランドが演出・脚色したオペラ「ユビュ親父の音叉」のために、元エトロン・フーのドラマー、ギグー・シュヌヴィエが作曲した舞台音楽。'92年ヴァンドゥーヴルのミュジック・アクシオン・フェスティヴァルで上演された。ユビュフォン、腸クラリネットなど珍妙な創作楽器を含む管楽器群と、シュヌヴィエとリック・ブラウンのパーカッションからなるオーケストラは、ジャリが「ユビュ王」の上演に際し実際に想定していた楽団にヒントを得たものだ。コミカルで可愛いコスチュームに身を包んだ出演者は喜劇を演じながら、ダダイスティックで荒唐無稽な音楽をぷかぷかとユーモラスに、またシャープに演奏する。（渡邊）



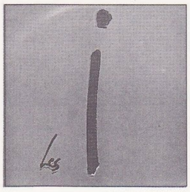
L'EMPIRE DES SONS
Le Saucisson De Mer
L P/Musea MP 3006　'90年

LES I、VIRGVLE IV密接にからまるグループ。確かAYAAのディストリビュートでもう一枚出ていたと思う。フランスのこの辺と言うと、割とアイディア勝負の小体な感じを受けるが、これもそう言った部類に入るのだろう。テクニックの関係もあろうが、簡素な演奏に素朴な女性Voが乗る辺り、ジャケットのモノクロと合わせて地味ながらも好印象を与える。ただ、CD一枚を雰囲気でもたせられているかと言われると多少つらい所があるかも知れない。持てる範囲で丹念には造ってあるのだが、一線級とは呼び難いグループ。奇妙に魅力的ではある。何と制作にアンドレ・デュシュヌが関わっており、一曲ギターも弾いている。（中西）



LES BATTERIES
Domesure Revolutionnaire
CD/Baillomont CD 961　'91年

ギグー・シュヌヴィエ、チャールズ・ヘイワード、リック・ブラウンという３人のReocommended系のドラマーによって結成されたLES BATTERIESが、「Noisy Champs」('86)に続いて発表した２ndアルバム。とても継続的なバンドだったとは考えられないが、それにしても２作目が出て来るとは誰が予測していただろう。残念ながら本作にはヘイワードは参加していないが、ヘイワードの残していった余塵が彼らのサウンドに深く反映している。今回は数曲でモモ・ロッセル等のゲスト・ミュージシャンを迎えているものの、基本的に作り上げるスタイルに変化はない。ベースもギターもないドラムスだけのアンサンブルがこんなにも面白いというのが驚異。（坂本）



LES I
Les I
L P/Celluloid CEL6598　'81年

エトロン・フー・ルルーブランのフェルディナン・リシャールがプロデュースした女性を含む５人組LES Iのファースト・アルバムである。明らかにエトロン・フーの影響下にあるそのサウンドはきっちりとまとまっており、デビュー作とは思えない高い水準を保っている。反面、どうしてもエトロン・フーを意識させてしまうのが彼らの最大の弱点と言える。その場合、全体としてのダイナミック感、曲展開の旨さ、意外さ等、エトロン・フーには遠く及ばない。彼らが大成するためにはこの難問を解決し、独自のオリジナリティを確立しなければならないであろう。異端派と言われたエトロン・フーが、確固たる地位を築き、他のミュージシャンの目標となっていることを感じさせる１枚でもある。（賀川）



OCTAVO
Des Piedse Et Des Mais
CD/AYAA ocdt 1191　'92年

ギター/ベース/キーボード、ドラムス/キーボード/サックスを核にもう一人サックスが一部ゲスト参加という変則トリオによる痛快レコメン系インスト・ミュージック。他のレコメン系レーベルと連携を持っているAYAAからのリリースということだけでも大体予想が付くだろう内容で、その中でもかなり上位にランクされるだろう。表面的にはシリアス色はそう強くなく、寧ろゴリゴリと走り回る部分が強く出ている。が、素直に突っ走ってくれるわけはなく一癖も二癖もあってひねくれている曲調だ。編成の小ささを感じさせない音の厚さと録音の良さは見事。F.Frithのソロからの影響を強く感じるが。レコメン系という言葉でピンと来る人にとっては文句無く勧められる内容。（伊藤）

FRENCH JAZZ ROCK

MAGMA

□伊藤　直継
□松本　昌幸

UNIWERIA ZEKT presents MAGMA

マグマの母体は1968年の5月革命に前後する時期にできあがっている。中心人物のクリスチャン・ヴァンデ(Christian Vander)は、それ以前にCRUCIFERIUS LOBENZ(コルトレーン影響下のバンド、彼の死後'67年に解散)、そして後にマグマに参加することになるベルナール・パガノッティ(Bernard Paganotti)らとCHINESEというR&Bバンドを組んでいた。この頃C.ヴァンデは既にPIVESというバンドのローラン・ティボー(Laurent Thibault)、ザブと知り合っている。そのPIVESはバンド名をZORGONESと変え、'68年6月にアルバムを録音したが、これが発売中止となり失意の内に解散。C.ヴァンデはそのメンバーだったローラン・ティボー、ザブ(Zabu、本名Lucien Zabuski)、フランシス・モーズ(Francis Moze)とバンドを始めることになる。そしてここにマグマの母体ができあがったというわけだ。

'69年の夏、バンドはJean-Jacques Ferry(g)、Eric Grumbert(g)を加えて、Chalotte Leslieのバックをつとめるが、合わないという理由で2回でくびになる。しかし実力は認められ、CARNABY STREET SWINGERSという名前でイギリスのバンドとみせかけたツアーを行う。

当時のレパートリーはSPIRITSの"Fresh＆Barbage"、45分にも及ぶファラオ・サンダースの"Lower Egypt"他、サム＆デイヴ、オーティス・レディング、R.ストーンズ等の踊れる曲だった。C.ヴァンデのアイディアで、ザブはF.サンダースのテーマに乗せて自作の言語で歌うようになり、そのうちにはサム＆デイヴの曲などもその言語で歌うようになった。その言葉に格別の乗りがあると見たメンバーは、自作の曲のタイトルにも使うことにした。最初の曲は"Kobaïa"と題されたが、元々は英語で歌われていた。が、その後、C.ヴァンデがLeon Thomasのスキャット、及びストラビンスキーのスラヴ的な音から言葉をつくるようになってコバイア語ができた。

ツアー後、パリに戻った所でギタリスト2人が脱退。残った4人は当時フレンチ・ロックの中心地だったRock'n'Roll Circusに入りびたりメンバーを探した。この頃、F.モーズが兵役の為に抜け、ルネ・ガルベ(René Gárber)、クロード・アンジェル(Claude Engel)らが参加している。

この時点ではまだコバイア・ストーリーの案もなく、'69年の10〜12月頃までは、バンド名すら付いていなかった。当初はUNIWERIA ZEKT MAGMA COMPOSEDRA ARGUEZDRAといっていたが、Rock'n roll Circusでギグを始めることになった彼らは、最初のギグの直前、近所のカフェでふさわしい名前を考えていた。C.ヴァンデは類を見ない程のパワー、火山の様な熱気を表わすような名前をと思っていたとのことで、そんな中からマグマというバンド名に落ち着く。


●初期マグマ

そしてそこでのギグを通じてアメリカ人クラシック・ピアニスト、Karl Knuthと知り合う。彼はマグマを気に入り、バンドに援助の手をさしのべる。

この頃、クロース・ブラスキス(Klaus Blasquiz)が参加した。「クリスチャンとは'69年8月に会ったのだが、当時、彼はクロードと演っていた。私はクロードを誘ったのだが、逆に私が誘われる結果になった。そして連中の練習によく顔を出すようにはなっていた。でもバンドのシンガーとしてではなく、ただ聴いて覚えるといった具合だった。その頃、ザブが歌っていたが、彼は政治問題の関係で8ヵ月間程バンドを抜けることになって、私は手助けのつもりで歌い始めた。その後ザブが戻ったので私は身を引いたのだが、一週間程してクラブで連中に会ったら、彼らは『キーボードのトラックのバックで歌っている君の声を聴いたよ。あの声こそ我々の必要としているものだ』と言うんだ。だから私は答えた『君たちはザブか私のどちらかを選ばなきゃならない』てね」。同じ頃、フランソワ・カーン(Francois Cahen)、リシャール・ロー(Richard Raux)、Paco Charley(tp)が加わっている。

こうして'69年10月から'70年1月まで練習が続く。この間も、F.モーズが兵役から戻ったり、R.ガルベに替ってテディ・ラスリ(Teddy Lasry)が加入したりと相次ぐ。そして'70年4月の終わり、3日間、毎日10時間かけて録音。C.ヴァンデによって発案されたコバイア・ストーリーに基づくこのデビュー・アルバムは、5月6日に完成した。そして5月末にリリース。

コンセプトについて、K.ブラスキスは次のように答えている。「クリスチャンは『これがストーリーだ、我々は地球から脱け出るんだ』といった大まかなアイデアしか持っていなかった。それを即興

で歌うには難しかったから、彼は私にストーリーの正確な所を書かせてくれたんだ。それが私の最初の仕事だった。」

ステージ・デビューは'70年5月22日、Theatre de la Musiqueにて。TRIPTIQUE、MOVING GELLATINE PLATEが一緒だった。デビュー作で知名度を得たマグマだが、経済的には苦しかったとのことで、C.ヴァンデ、F.カーン、F.モーズ、C.アンジェル、T.ラスリは、同時にTRANSITIONの名前で活動、'60年代ジャズを演奏していたという。当時のライヴをもう少し追ってみよう。「我々は最初の2年間、ファースト・アルバムを最初から最後まで演るだけだった。ストーリーだったからね。とにかく組織だっていなかったから、バンド全員、家族のように一種の旅をするように、演奏場所と観客をつくりながら巡ったよ。ロック・バンド自体少なかったし、皆無名だったからね。レコードの売れ行き自体は悪くなかったけれど、12人編成のバンド全員に行きわたる程ではなかった。名声だけで金は無かった。とてもきつい状態だった」。こうして彼らはフレンチ・ロックを切り開いていく。「最小の編成？ 9人だったと思う。平均は12〜13人だった。ツアーじゃ無かったんだ。ただライヴが有るといった感じだった。パリのクラブでは、時にはアンプと何人かがステージの上に、何人かは下といった具合だった。」

'70年8月末、L.ティボー、R.ロー、P.Charleyが脱退。また生活の糧を得るために何人かのメンバーは、他にセッション活動を始め、そんな中の一人、C.アンジェルも脱退してしまう。「彼が1年半位ツアーに出るのをやめようと決意して、私は大変驚いたよ。私にしてみれば、彼はマグマの大変重要な一部だったからね。最初、彼が辞めるつもりだと言った時は、冗談だと思い笑ってしまったよ。」

こうして数人のメンバー・チェンジを経て'71年に2作目「1001°Centigrades」を発表。コバイア・ストーリーは前作より続いているが、サウンドは洗練され、大曲指向に傾いている。しかし注目すべきは、ヨシコ・セファー（Yochk'o Seffer）の参加だろう。彼の参加はこの時期の短期間に止まるとは言え、F.カーンと意気投合し、脱退後ザオを結成して更に活動を広げていくことになる。このあたりのメンバーの動きが、「マグマは音楽自体とてもハードな、それに新しい物だった。我々の所にはロックン・ロールしか知らないメンバーが沢山いた。時に我々はクラシックふうの曲を作ったものの、彼らには演奏できなかった。ひどい時には3/4拍子すら分らなかったんだ。それでロックン・ロールやR＆B、クラシックを知っているジャズ・プレイヤーを見つけて来る方が簡単だったからね」という会話に読める。

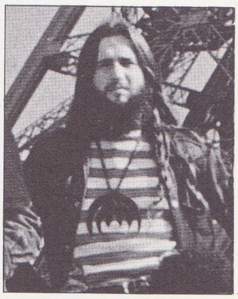
さて、同じ'71年の秋、マグマの面々は、旧友のC.アンジェルやザブをも迎えて、ユニヴェリア・ゼクトの名前でアルバム「The Unnamables」を録音する。ユニヴェリア・ゼクトとマグマの関係についてK.ブラスキスは、「ユニヴェリア・ゼクトとは、まあ一種の別名のような物だ。バンドとして活動していくうちに、メンバーの中でも同じ精神を共有できない者が出てきたので、ユニヴェリア・ゼクトをマグマのコンセプトとして使うことにした。グループとしてのマグマは、アイデアをより具体的に伝える為の道具というわけだ」と話している。こうした背景からか、マグマ独特のインパクトの強さには欠けるが、根底にはやはりC.ヴァンデの流れを感じ取る事ができる。このプロジェクト・アルバムを最後にセファーとカーンは、ザオ結成のため脱退、F.モーズやT.ラスリも去って、バンドは転期を迎えた。

トゥーズァムターク（Theusz Hamtaahk）三部作

一年強の過渡期―ブランク―を経て、音楽のスタイルが変化した。これまで曲の中心を担った管楽器が大幅に減り、それに替わって重厚なコーラスが中心になる。ステラ・ヴァンデ（Stella Vander）（コーラス）が入ったのも、この時期だった。コバイア・ストーリーも引き継がれ、次作よりトゥーズァムターク三部作になり、一つのピーク期に入る。この三部作とは「Wurdah Itah」（後にC.ヴァンデのソロ名義作「Tristan Et Iseult」として再録音/発表される）と、「Wurdah Glao」（製作されたが未発表）、そして「Mekanik Destruktiw Kommandoh」（以下M.D.K.）から成ると云われていたもので、いずれにせよコバイア・ストーリーの核心に迫るとともに、この時期に確固としたサウンド・スタイルを築く。

この三部作については、LP時代から「Tristan Et Iseult」（＝「Wurdah Itah」）に"2e Mouvement de THEUSZ HAMTAAHK"とあり、同じように「M.D.K.」には"3rd Movement〜"とクレジットされていた。この意味がよく分からなかったが、マグマを知る上では、実はこのクレジットこそ重要だった。'85年に出たC.ヴァンデの編集による「Mythes Et


●クリスチャン・ヴァンデ


●クロース・ブラスキス



●(左→右)ヤニック・トップ、クロース・ブラスキス、クリスチャン・ヴァンデ

Legendes I」。ダイジェストとは言え、ここには"1st Movement"が収録され、ようやく第1部が"Theusz Hamtaahk"、第2部が"Wurdah Itah"そして第3部が"M.D.K."だと判明した。そして表向きにはアルバム・リリースのなかった'72年とその前後、この頃のスタジオ・リハーサルが大きな意味を持っていることも、最近のリリースなどから解ってきた。

'73年のマグマは結束しているように見えて実は謎めいている。水面下では様々な事が起こっていたようだ。最近になってその一部を物語る音源が、バンド側からリリースされた。一つは'89年に初めて公けにされた「Mekanik Kommandoh」。録音は'73年1月で、当時リリースされた「M.D.K.」より3ヵ月前のもの。まだ細かい点で煮詰められていない分、ヴォーカル、コーラスにより荒々しさを感じる。ベーシスト、ヤニック・トップ(Janick Top)の加入前の音源だけに、ベーシックだ。もう一つが、今年になってリリースされた「Sons」。こちらの録音は、トップ加入後の'73年4月15日、「M.D.K.」レコーディング・セッションの一部だった。それだけに「M.D.K.」の強力なリズム・セクションと重厚なコーラスが紡ぎ出す抑揚、ストーリー性を白紙に戻すような即興、その平坦なサウンド・コンセプションには、この時期のマグマの知られざる局面を垣間見れる。

これら二つの未発表音源/ドキュメント物を除くと、'73年4月に「M.D.K.」を録音、そして'74年4月に「Wurdah Itah」を再録音し、同年5月には5作目「köhntarkösz」が録音されることになる。ただし、この時期の録音には裏がある。K.ブラスキスのインタビューを追ってみよう。

「『Tristan Et Iseult』を'71年に録音したそうですが」の問いに彼はこう答えている。「いや'71年頃はシャトー・デルーヴィル・スタジオでただリハーサル・セッションをしているにすぎなかった。ところが、ローラン・ティボーが許可無くテープをサントラ用に使ってしまったんだ。それで皆で映画を観た。冗談としか思えなかった。あまりにひどいんで20分で映画館を出たね。我々は怒って彼とスタジオ入りして、もっと良い物をつくるよう強制し、完全に録音し直した」。そして「フィルムにはオリジナルの音が残っていると?」の質問に彼は「知ったこっちゃないね! ただのリハーサルの録音に過ぎないね」と答え、この経緯について「その事については話したくない。ジョルジョ・ゴメルスキー(当時のマネージャー)は、しょっちゅうそんな事をしたんだ」と紋切り型の答え方をしている。また「M.D.K.」についての彼のコメントもこうだ。「あのアルバムはマグマを身近に感じない。なぜならあちこちと指示を受けたアルバムだから。ゴメルスキーは『もっと強力な音が欲しい』だの『ヤニックの音が聴こえない』だの言い続けていたんだ」

マグマは'71〜'72年にフランス以外にベルギーとドイツでもライヴを行ない、(この時、ジャン・リュック・マンドゥリエ(Jean-Luc Mandelier)とダニエル・ドゥニ(後にユニヴェル・ゼロ結成)に接触する)、次のツアーはスイスからドイツ、イギリス、オランダ、イタリア、スペインとヨーロッパ各国を廻り、「M.D.K.」録音直後の'73年5月にはU.S.ツアーに出るなど、この頃、対外的にも足掛りをつかんだだけに、メンバーを取り巻く音楽外での軋轢は想像に難くない。J.トップの脱退についても「彼はゴメルスキーに対して怒っていたんだ。色々あって一緒にはいられなかった」とのこと。

そのJ.トップだが、'73年4月の「M.D.K.」録音に参加し、前述のU.S.ツアーが彼のマグマでの初ステージとなっている。この時の音源を中心に過去のツアー時のものや後のU.K.ツアーの音源を寄せ集めたライヴ盤が「Inedits」というわけだが、'77年に出回ったこの盤の経緯をK.ブラスキスは次のように話している。「あの頃は金が必要だった。誰かが出来のいいテープを渡してしまった。この事については余り快くは思っていない。レコードになるものとは思っていなかった。ただ、あれは今までレコード化されていないメンバーでの録音だったし、音楽その物は良かった。私はよく"Sowiloi"を聴いていたし、発表されるべき曲だと思っていた。でも出来た物には不満がある。後悔しているよ」

こうして'73年の渦中を過ぎ、前4作目「Wurdah Itah」でのクリスチャン&ステラ・ヴァンデ、クロース・ブラスキス、ヤニック・トップの最小にして最大の布陣を拡大した編成で、'74年5月、トゥーズァムターク三部作から切れた5作目「Köhntarkösz」を録音する。更にはこのアルバムに収録された大曲(タイトル曲)をベースに、バンドの充実期を示すライヴ・アルバムを翌'75年にリリースした。



●ヤニック・トップ(左)、クリスチャン・ヴァンデ

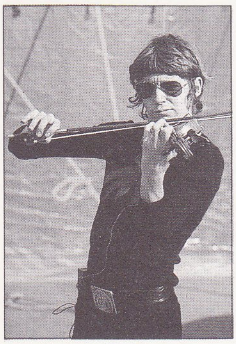
「Magma Live」

「Köhntarkösz」発表後、マグマにとって最重要ともいえるベーシストにメンバー・チェンジがあり、J.トップに替わって、ベルナール・パガノッティが加入する。「我々は旧友ベルナールの事を思い出した。彼はマグマ以前にクリスチャンと4年程一緒に演っていて、それまでにも彼を加入させようという話は何度も出ていた。で、その時が来たという訳で、彼に声をかけた。彼が最初に来た日の事を覚えているよ。我々はシャトーで練習していたのだが、そこへ彼がヤニック・トップみたいな頭をして入って来た。彼は古い空胴のグレッチをつないでどでかい音を出した。これだと皆で言い合った。それに彼はとても良い性格だしね」。そして更にブノワ・ヴィデマン(Benoit Widemann)(key)やディディエ・ロックウッド(Didier Lockwood)(vln)が加入する。この布陣で'74年10月からリハーサルに入り、翌'75年2月からU.K.ツアーに出る。ちなみに'74年12月3日付でBBCに出演し、ライヴ専用の未発表大作を含むライヴ演奏を残しているというひっくり返るような事実もある。

こうして'75年6月、パリ、オリンピア劇場でライヴ録音が行われる。この「Magma Live」に対するK.ブラスキスの言い分は、当時も変わりがない。「私の好きなのは『Live』で、なぜならあれは私にとって単なる記念といった物ではなく、最もマグマの音を伝えているからだ。『Live』を聴く時とてもマグマを身近に感じる」。これ以上の確信はない。

また、インタビュー中にはこのライヴ盤についての興味深い解答も得られている。それは、「"Kobah""Lihns""Hhai"はタバーンという別の所、一種の地下室で客を入れずに再録した。観客と共に録音したテイクは音質に問題があったり、曲によってはノイズがあったりした。観客があまりにも熱狂的だったのでアルバムとしては不向きになってしまったので、もう一度演る事にした」というもの。

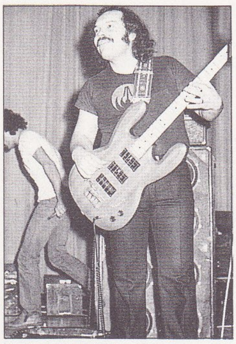
嬉しい事にその緊張感は翌年まで保たれていて、近年出回ったブートレッグ・ライヴCD「Theusz Hamtaahk」でも凄まじい演奏を聴くことができる。収録は'76年3月。ここでのキーボードは、ジャン・ポル・アスリン(Jean Pol Asseline)に替ってパトリック・ゴーティエ(Patrick Gauthier)と、そしてB.ヴィデマン。この二人のシンセサイザー奏者の為にキーボード・ソロ・パートが長めにとられ、正規盤テイクとはやや違った印象を与える。この時期のライヴは、「我々はステージの上でだけとは言え、パトリックとブノワの為に特別なパートを与えることにした。パトリックはムーグ奏者だったし、ブノワはアープ奏者だった。彼らはかけ合いを繰り広げてそれはとても良かった」というとおりである。



●ディディエ・ロックウッド

過渡期 —「Üdü Wüdü」—

'76年5月、彼らは早くも7作目の録音にとりかかっている。ライヴで極めつけの演奏を見せつけてくれたメンバーに加え、レコーディングのみで何人かのスタジオ・ミュージシャンが参加し、そして一度は脱退したJ.トップがこのアルバム・レコーディングの為だけに復帰している。つまり曲ごとにメンバーが違うことからも、ここへ来てコバイア・ストーリーに基づいたコンセプチュアル・バンドとしてのマグマは、崩れてきたと見て構わないだろう。このアルバム「Üdü Wüdü」は、片面に小曲を集め、もう片面にはトップ作曲の大作"De Futura"を収録している。ここでも彼の貢献は絶大だった訳だが、このナンバーはマグマ用に作曲したものではなく、元々は大掛りなオーケストラ曲として書かれたものである。「あの曲はライヴで一年程彼と演っていたからね。当時ベルナールがバンドのベーシストだった訳だけれども、作曲者であの曲のオリジナル・ベース・プレイヤーを使った方がいいと思ったんだ。あの曲を録音したのは、単にいい曲だからだよ」。そしてこのアルバムでのC.ヴァンデの役割りに関連して、「彼が全てを取り仕切っていたわけではない。例えばベルナールは彼の曲"Weidorje"ではドラムを含めて全パートを書いた。私はそこに歌詞を書き、それらをまとめあげるのを手伝い、タイトルを考え、曲に伴う絵も描いた。その他我々は"De Futura"を長い間ステージで演奏し、あの曲を段々と展開していった。それに値する強力な曲だったからね」というように、明らかに、C.ヴァンデのバンド統率が後退して、メンバー/曲本位になっている。



●ベルナール・パガノッティ

事実、B.パガノッティ作"Weidorje"このナンバーは、後に彼が結成したグループ、ヴィドルジュの為のもので、B.パガノッティとP.ゴーティエは、マグマを脱退する。そしてかつてのJ.セファーとF.カーンによるザオと同様、ここにもう一つの新しい主流が生まれることになる。

一方、マグマはこのアルバムでのメンバーでツアーに出ることはなく大きな転機を迎えた。バンドは'76年9月頃に解散し、以後再建に向かう。

新生マグマ「Attahk」〜'70年代総括「Retrospective」/クロース・ブラスキスの脱退

'76年11月頃、クリスチャン&ステラ・ヴァンデ、クロース・ブラスキスを中心にバンドが再結成される。ブノワ・ヴィデマンを加えジャン・ポル・アスリンとヤニック・トップの二人を再起用したものの、二人はすぐに脱けてしまう。'77年1月の時点ではセカンド・ドラマーとしてクレモン・バイー(Clémont Bailly)、ギ・ドゥラクロワ(Guy Delacroix)(b)、Jean De Antoni(g)、Florence Bertauxを加えた編成だった。セカンド・ドラム、ベース・ギター、キーボードのB.ヴィデマンの4人が皆アラン・スティヴェルのバンド出身だ。この編成についてK.ブラスキスは、「マグマに新風を入れようとしたんだ。それを行ったのは、予定が詰まっていたうえ期日が迫っていたからで、彼らは皆お互いを知っていたので、リハーサルが演りやすかったからだ」と答えている。そしてステージにおいても、「我々のイメージを多少変えることにした。もっと乗りを良くしたりね。フランスの聴衆は、もっと踊ったりしたがっていたし、ただ演奏するだけではそれを満たせなかったので、パフォームすることにした」。

そして彼らは'78年9月より8枚目の新作「Attahk」の録音に入る。J.D.AntoniとC.バイーは脱退していて、二人のスタジオ・ミュージシャンが管楽器としてレコーディングのみ参加している。この新作は翌'79年に発売される。

この頃になるとコバイア・ストーリーはなくなっているようだが、このアルバムもある一つのコンセプトに基づいて製作された。"OurgonとGorgoの出会い"がそのコンセプトのテーマだが、この辺りの事情を追ってみよう。「アルバムではギ・ドゥラクロワがその両方(エア・ベースとアース・ベース。ウルゴン/ゴルゴの関係を楽器に置き替え、更に善悪の概念に置き替えている)を弾いているが、元々の案としては二人のベーシストを使う予定だった。(コンセプト上の)善とそうで無い者とね。で、それはステージで実現した。ジャン・リュック・シュヴァリエ(Jean-Luc Chevalier)がゴルゴ役で、Michel Herveがウルゴン役だった。またアルバムではB.ヴィデマンがキーボードを弾いていたが、ステージではAndré Herveが弾いた」。「Attahk」の発案はライヴでこそ実ったというわけだ。「我々はコンセプトについて色々考えていた。音楽よりも更にだ。もっと色々やってみようと思っていた。例えば衣装を黒から赤へ変えたり―女性には白の衣装―、それから舞踏を加えたり。そういった事柄は良いステージへと結びついた」。

しかし、K.ブラスキス自身にとってはそうではなかったようだ。「『Attahk』の録音の際、ローラン・ティボーが中ばプロデューサーのような立場だったのだが、大変腹立たしい出来事が起きた。私は彼を、彼は私を信用しない。で、彼はクリスチャンに『自分で歌ってみたらどうだい？』と言った。何ともいまいましい事にね！　実際それ自体はうまくいった。彼は素晴らしく良く歌ったからね。で、私はバック・ヴォーカルだけを歌った。とても寂しかったね」「私はあれを前進だとは思っていない。むしろ原則的にも音楽的にも後退だとすら思っている。(楽曲その物というよりも)コンセプトそれ自体がだ。なぜなら、あれはより即興的でクリスチャンが今までしていた事に比べると物足りない物でしかないからだ」。

またS.ヴァンデよりも以前からバンドの運営に携ってきた彼にとって、「Attahk」に前後する2年間のツアーやコンサートは、彼を消耗させたようだ。「意味もなくツアーする事にはうんざりしている。お金の面でも良くない。フランス式の馬鹿げた素人振り同様、マグマの音楽から組織に至るまでの素人染みた有様にも飽々している。我々はエージェントやロード・クルーやメンバーやレコード会社を探し続けて来たんだが、見つけられなかった。やるべき事が多くて私にはその時間がさけない」

そして遂に彼は脱退する。デビュー・アルバム以来常にマグマを支え、貢献度No.1のリード・ヴォーカリストが脱けることで、マグマの活動も鈍る。


●ルネ・ガルベ

'80年6月、そんな中にあってマグマは3週間だけ復活する。デビュー10周年を記念した"レトロスペクティヴ"コンサートである。一説にはクレジットされているメンバー以外にY.セファー、T.ラスリ、L.トースカが参加したとのこと。デビュー以来の歴代のメンバーが一堂に会し、過去の代表曲を次々に再現していったこのコンサートは、そのもの'70年代のマグマを総決算した形となる。

「コンサートは'80年の6月に行われたが、計画はその1年半前からできていたんだ。我々はメンバーがそろうまで待った。アメリカに行く計画もあった。ちゃんとしたバンドに成ったらすぐ短いツアーをして、その後にレトロスペクティヴをだ。が、ツアー計画がひどかったのでやめることにした。私はレトロスペクティヴのコンサートを3週間演る様にと言われ、結局同意したのだが、今は後悔している。私はそれを観衆の為にやり、それは感動的だったから全てを後悔しているわけではないが、計画が悪過ぎた。だからやめる事にしたし、クリスチャンも同意した」。

レコードのリリースは何故か「Vol.3」が'81年2月、「Vol.1＆2」の2枚組が同年6月と逆の順だった。また「Vol.3」において、K.ブラスキスのヴォーカルが後のマグマの主要メンバーとなるギ・カリファ(Guy Khalifa)のヴォーカルに差し替えられていて、K.ブラスキスはその際の成り行きに疲れ果てたと、当時のインタビューに語っている。

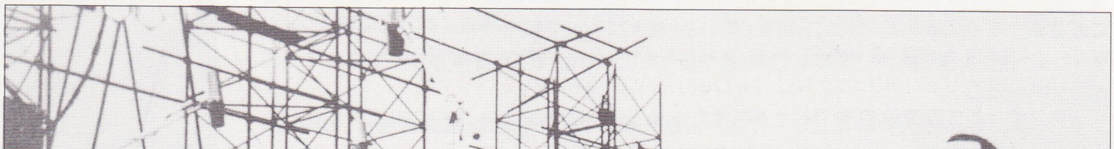
この頃を境にしてバンド編成、サウンドの傾向が変化していくことを思うと、クロース・ブラスキスの脱退は、一つの指標に成っていると言っていいだろう。

Spiritual

'80年代に入り「Retrospektïw」ライヴを経て、いよいよマグマはクリスチャン・ヴァンデに集約されていく。ピアノのメロディよりもピアノ一音の響きへ、歌以上に声へと、肉声へと、'70年代のジャズ/ロックのスタイルに包まれていたスピリチュアルなものが、唐突な誇張を助けにせず

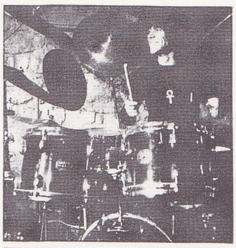


●(左→右)ルネ・ガルベ、ステラ・ヴァンデ、クリスチャン・ヴァンデ、クロース・ブラスキス



●(左→右)ディディエ・ロックウッド、クリスチャン・ヴァンデ、ベルナール・パガノッティ

自然な形で溢れ出す。ショー・ビジネスから遠ざかるような、ある意味で寡黙な音楽に、クリスチャン・ヴァンデの原点がちらつく。彼が'80年代に入って分派させたかに見えるMAGMA、OFFERING、CHRISTIAN VANDER TRIOの三つのバンドは、どれも彼の原点に根づいて自然体に近寄っているものだろう。'70年代の経験をこなした肩の力の抜けと、一瞬の感覚の貫通、その研ぎ澄まされ方は、多くを語らずして伝わるといった種のものだ。この意味でベーシックだし、スピリチュアルなものをより感じさせる。それは彼が敬愛するコルトレーンに間違いなく通じているに違いない。あまりにナイーヴなのでリスナーを選ぶ。それは'70年代マグマの異常なまでの誇張の裏返しのようでもあって、実は同じ物の両極面を見ているのだと思う。マグマをロック・アンサンブルの熱狂だけで見るには、もう既に10余年が過ぎ、その間にクリスチャン・ヴァンデは幾つものアルバムを残した。



宙に浮いたMAGMA　「OFFERING」へ

「Retrospektïw」から「Merci」へ。マグマはこの間に様々なメンバーでライヴを行っていたようだ。元アリスのアラン・ヴェス、元ヴィドルジュのA&Y・ギアール(A&Y Guillard)兄弟、かつてのツアー・メンバーだったフランシス・ロックウッド(Francis Lockwood)など。こうした不定形なマグマに並行して、C.ヴァンデも、J.トップ、D.ロックウッド、B.ヴィデマンでユニットを組み、アルバム「Fusion」を製作し、ライヴ活動を行う。同じ'80年頃には一方でB.ヴィデマン、F.ロックウッド、D.ベルトラン、P.ゴーティエらとALIENを組んでライヴ活動をしている。その他では、パトリック・ゴーティエのソロ・アルバム「Bébé Godzilla」に参加している。再びK.ブラスキスのインタビューを引用させてもらおう。「マグマはクリスチャンで、クリスチャンはマグマそのものだ。だから彼は他の事をする必要がないし、出来ない。なぜなら彼がその音楽を理解していないならば、彼はどうやるべきか判らず何時間もかかってしまう。もちろん技術的にこなす事はできる。が、そこに精神がなければ彼にはできないんだ。何度か試みたんだけれどもね」。

こうしてマグマは'82年6月から新作の録音に入る。終了は'84年10月。随分と時間をかけている。参加ミュージシャンも異様に多い。これは、曲ごとに編成が変わっており、トータルなアルバムとしてではなく曲ごと録音していったからだろう。その中で主要なメンバーは、C.ヴァンデ、S.ヴァンデ、G.カリファ、リザ・ドゥリュックス(Liza Deluxe)、B.ヴィデマンといった所か。つまり主役は声。'70年代マグマの音楽の中で段々と割合を占めていったヴォーカルは、ここで完全に主役となった。J.コルトレーンに捧げられたこのアルバムは「Merci」と名づけられ、オリジナル(デモ・ヴァージョン?)は、'84年にドイツで発売された。その直後リミックスが施され、本国フランスでは'85年にリリースされる。

また、ムゼア・レーベルから'87年にリリースされたコンピレーション・アルバム「Enneade」に収録された未発表"You !?"は、「Merci」のアウト・テイクと見て構わないだろう。録音は'82年6月で、「Merci」録音スタート時に当たるばかりか、メンバー、ソウルフルなヴォーカルに重きを置いた音傾向も共通している。

この「Merci」録音期間中のメンバーの出入りに注目してみると、ゴングのピエール・ムーランやフレンチ・ジャズ・ロック界の名ベーシスト、S.マルクが一瞬出入りしていたりして興味深い。バンドのスタンスとしてはジャズ寄りで、かつてのコバイア・ストーリーのマグマは宙に浮いている。

この時期のコンサートについては、不定期ながらあちらこちらで演っていたようだが、大きなところでは、'83年の終わりと'84年の終わりに2度ジャーマン・ツアーに出ている。

そして'85年にはマグマ初のベスト盤「Myth Et Legends Vol.1」が発売される。

OFFERING

オファリングはアルバム名以前に、C.ヴァンデのユニット名であることを確認しておこう。C.ヴァンデ、S.ヴァンデ、G.カリファの主要メンバーに二人は「Merci」からの居残り、あとの数人は新加入。'85年9月からこのユニットで録音に入り、'86年9月に終了、同年中に「Offering I-II」として2枚組でリリースされた。これもまた「Merci」と同じくコルトレーンに捧げられている。

このアルバムで音楽自体も少なからず変化したが、根底にあるものは確かにマグマに通じる。これまでC.ヴァンデ自身の音楽をマグマというフィルターを通して演奏する際には、様々な要素が入り混って、それは多様な装飾として映ったりもしたが、「Offering」でそのフィルターは取り

払われ、彼の音楽がむき出しにさらされているように感じる。肝心なのは、マグマの音楽＝C.ヴァンデだったし、オファリング＝C.ヴァンデも、また同様だ。それは音楽経験から引き出されてくる言葉使いの違いなのだろう。彼自身の根本に違いは感じられない。経験が積まれ丸くなるどころか鋭敏になっていったあたりに、彼のある種ネイティヴな音楽家肌を感じるばかりだ。

オファリングでのライヴ活動については情報不足だが、定期的には動いていたようだ。可能であれば、小誌27、28号の貴船さんの「オファリング・ツアー日記」を参照して下さい。実際にツアーに同行した理解者の目を通した生身のオファリングに触れると思うので。「クリスチャンだけでなく、オファリングのメンバー、そして元マグマのメンバー達に会って話をする様な時、私はいつも彼等の手が不思議で見つめてしまいます。彼等の鍛練された手は、普段でもとても不思議な動き方をします。会話中の手振りをみても、指がすごく繊細に動き、手の甲を通して神経が入ったり抜けたりする様が良くわかります。ミュージシャンが舞台上で良い音楽を創り出す時、その手が異次元の空間にある様に見えた経験をお持ちの方もいるでしょうが、彼等の手がいつもそう見えるのは、彼等の音楽イコールC'est la vie（それが人生—それが彼等の生）という生き方に、大きな鍵がある様に思います。」と彼女は書いている。ここにはマグマもオファリングもないし、ロックもジャズもない。彼女の言葉を借りれば、音楽が「生き様」ということになる。

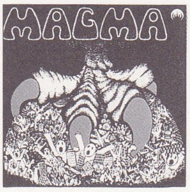


CHRISTIAN VANDER TRIO

一方でC.ヴァンデはオファリングとも並行してクリスチャン・ヴァンデ・トリオでライヴ活動をしている。そもそもトリオは「Attahk」のツアー後に端を発している。ALIEN、そして「Fusion」での活動を経て、'81年頃に組まれたこのトリオは、メンバー・チェンジを重ねて現在も断続的に続いている。'70年代の大掛りなマグマが解体した事とほぼ期を同じくするトリオの活動は、とても大きな意味をひめているように思う。C.ヴァンデは、一方で初心とも言えるジャズ、そして観客の目の前で演奏する事に戻った。それは当初、マグマに対する治癒だったのかもしれない。「彼の敬愛するジョン・コルトレーンの音楽の為に、マグマやオファリングの忙しい合い間を縫って時間を見つけては、コルトレーンの曲をこのメンバーで演奏するようです」と彼女のレポートにある。'89年11～12月に録音され、'90年にこのトリオ名義でリリースされた「Jour Apres Jour」は、そのとおりストレートなジャズだ。彼のベーシックな部分、ミュージシャンとして演奏することの楽しみ、好きなもの、そんな所にあるいわば彼の普段着なのかもしれない。

Solo

少し話が前後するが、C.ヴァンデはソロ名義のアルバムを'88年3～8月に録音している。タイ



MAGMA
Magma (Kobaia)
LP/Philips 6395 001/002 '70年
CD/Seventh REX Ⅳ/Ⅴ

ロック史上永遠に語り継がれるであろう怪物MAGMAのデビュー作。新人グループのデビューがいきなり2枚組と言うことだが、ポップ・ジャズという基礎の上に成り立っているスタイルで後に見せる強烈な個性は未だ完成されていない。が、ブラスを大胆にフィーチュアした初代マグマ・スタイルはそれでもかなりユニーク。彼等の音楽の中核であるコバイア・ストーリー（架空の惑星を舞台にした物語）とコバイア語（その惑星における架空の言語）を使用したヴォーカルは早くも本作で使われており当時のフランスで如何に彼等が進歩的であったかが判る。膨大な人脈と今でも多大な影響を周りに与える音楽性はここから始まった。まさに彼等の原点だ。（伊藤）



MAGMA
2 (1001° Centigrades)
LP/Philips 6397 031 '71年
CD/Seventh REX Ⅵ

ブラス入り初期スタイルは本作までで、J.SefferとF.CahenはZAO結成のために脱退してしまう。それぞれC.Vander、T.Lasry、F.Cahenによる作曲のA面1曲、B面2曲という構成で、大曲指向が出始める。とはいっても初期スタイルなので、全盛期にみられるドラマチックな劇的高揚感はまだ薄い。本作直後バンドは一度解体、メンバーががらりと変わる。音楽的にもいわゆる黄金期のスタイルに変化して行く、その直前の姿。因みにLPのジャケは2種類有り、火山の噴火をあしらった物は再発物で、シルヴァー・ジャケットがオリジナル、かなりレアなものだ。（伊藤）

トルは「To Love」。メンバーはC.ヴァンデとS.ヴァンデの二人のみ。ドラムを叩いているのも一曲のみ、しかも淡々とリズムを刻んでいる。

彼の両手によるピアノ、そして弾き語り。静かで、しかし確実に心に染み入ってくるタイプの音楽だ。マグマの最も激しい音楽から最も遠くにある音楽だが、隔たってはいない。この音楽はマグマの音楽の中にあった。

再びOFFERINGからMAGMAへ

前述のジャズ・トリオに並行してオファリングも活動を続けていて、'90年10月には、やはりコルトレーンに捧げられた続編「Offering III-IV」がリリースされる。主観ながら、「Retro-spectiw」以後では、このアルバムが最もマグマらしい力強さを連想させる。オファリングのライヴでも、かなりパワフルな事をやっていたとのことだから、その熱気をスタジオ録音に最も強く反映させた、とも解釈できる。ぶ厚いコーラスとリズム・セクション以上にパーカッシヴなピアノの刻み、そのパワフルでスピーディな音は、マグマに通じる。後期を代表するアルバムだ。

そしてオファリングでの編成と並行して、突然マグマがライヴ活動を始めた。現時点で「Les Voix」、前述の「Sons」がリリースされ、今後の予定には'76年南仏トゥールースでのライヴも入っている。

「Les Voix」は'92年8月のライヴ録音で近況を伝えているが、他にも'92年5月にオファリングでのライヴ、その直後の5～6月にクリスチャン・ヴァンデ・トリオでフランス国内をツアー、7～10月にはマグマで数回のコンサートと、全てが並行している。

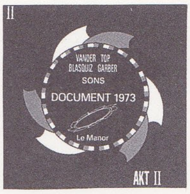
「Les Voix」にはマグマ・ファンに馴染み深い曲が並んでいるが、実際のコンサートは新旧のナンバーが入り乱れていて、こんな曲が演奏された。"Emehnteht-Re""To Love""I Must Return""C'est Pour Nous""Zess""Ronde De Nuit""Tous Ensemble""Wurdah Itah""Mekanik Destruktiw Kommahdoh""Innocent""La Marche Celeste"。曲はソロ、オファリング、マグマからと多彩。ラスト・ナンバー"La Marche Celeste"は、オファリングとしての最終アルバム「Offering V-VI」(スタジオ録音される予定)に収められる曲のようだ。

最新マグマの編成は、オファリングと同様に主役はコーラスになっている。で、ドラムはC.ヴァンデが叩いていて"M.D.K."など、ドラム・セットに座ったまま歌っている。主要メンバーはクリスチャン・ヴァンデ・トリオの面々にS.ヴァンデ、彼女を含めてコーラスだけで8人。中にはクリスチャンとステラの娘、ジュリ・ヴァンデ(Julie Vander)の名前も見える。(二人は既に離婚している)。



MAGMA
Mekanik Kommandoh
CD/Seventh REX Ⅵ Z
'89年('73年録音)

オリジナル・テイクの録音より数カ月前の'73年1月に録音されたもう一つの"M.D.K."。曲は既に完成しているがアレンジはまだ荒い印象を受ける。実際バックの演奏は若干だがスカスカ気味、しかしその分荒々しさが増していてヴォーカルとコーラスはかなり気合いが入っている。完成度よりパワーを優先させる人はこっちのテイクの方が気に入ると思う。メンバーを見るとベースはJ.Top加入前でJ.P.Lambert、C.OlmosもT.Lasryも居らず、その代わりコーラス隊(Storchhausオーケストラ)が加わっている。曲の構成や進行ががらりと違うわけではないのでハード・コアなファン向けだろうが、ある程度以上のファンは何故今更、第三者のプロデュースの手が加わっていないこのテイクを出したのかを考えて貰いたい。 (伊藤)



VANDER/TOP/BLASQUIZ/GARBER
Sons
CD/AKT 2 '92年('73年録音)

近年リリースされた発掘物。元々このAKTというレーベルはMAGMAの過去の未発表音源を発表するためのレーベルであるが、それにしてもここまで貴重な音源があるとは驚いてしまう。「M.D.K.」録音前、Janik Top(正式なスペルはこう書く)が加入した直後'73年1月のスタジオ・セッション。収録曲は"Neheh(Kehr)"と題された70分1曲。MAGMA特有のドラマチックに構成された激しいコンポジションは一切無く完全なフリー演奏、J.Topはベースを弾かずにオルガンとパーカッション。レコードでリリースされた彼等からは想像もつかない音楽だ。しかしテンションは妙に高い。執拗に反復する金属音や恐怖を表すようなうなり声がまるで密教の儀式を思わせる。完全に上級者向けだが何かしら意味のある一枚。 (伊藤)



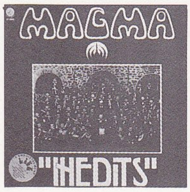
MAGMA
Mekanik Destruktiw Kommandoh
L P/Vertigo 6499 729　'73年
CD/Seventh REX Ⅶ

コバイア・ストーリー時代のマグマのステージでは必ず演奏されていたという代表曲の中でも別格の大曲。7つのパートに分かれているがトータル・アルバムとなっていて劇的なまでの激しさを持つコバイア語コーラスによってストーリーが語られる。近年になって当時の未発表音源が発掘されて判ったが曲自体は古くからモチーフが存在しそれは'71年まで遡れる。改編を重ね、練り上げ熟成させた最終型がこの1枚である。カンタベリーさながらに広く影響を与えている「Zeuhlサウンド」のスタート地点。邪悪なまでのパワーを持つリズム・セクションの上でコバイア・コーラス、キーボード、ギター等が渾然一体となって曲を押し進める。そう、これはVandertopのスタートでもあった。　(伊藤)



MAGMA
Mythes Et Légendes
L P/Bon Indépendant 2404411　'85年
CD/Seventh REX ⅩⅣ

サブ・タイトルに〝1970-1980〟と付いているが実際は'70年代前半に作られた曲で構成されるベスト盤。彼等自らの手による編集に加えて曲間にはC.Vander等によるナレーション。前半は1stと2ndからの曲に加えて嬉しい事にシングル〝Mekanik Kommando〟のB面のみに収録だった〝Klaus Kohnbalad〟もここに収録されている。後半は〝Theusz Hamtaahk〟3部作で、第1部はスタジオ録音されなかったために「Retrospectiw」のテイクから、第2部は「Tristan Et Yseult」として発売された「Wurdah Itah」から、第3部はかの「M.D.K.」からそれぞれ抜粋して構成している。本作vol.1となっているが、現時点ではvol.2のリリースは無く予定も無いようだ。　(伊藤)



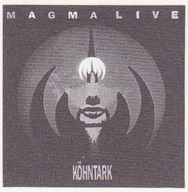
MAGMA
Inédits
L P/Tapioca 10001　'77年

'71年〜推定'75年頃迄のLive集。バンドに無断でリリースされ編集は粗悪、完奏収録は1曲のみと来ては、バンドは勿論リスナーをも舐め切った所業。しかし演奏自体はそのどれもが素晴しい。特にA面、縦横無尽の活躍を見せるTopのヘヴィ・ベース・ソロ、BlasquizのAREAのStratosと双璧を成すヴォーカル、彼のper、Vander、Topのトリオを軸としたバトル… MAGMA史上(＝プログレ史上)屈指のテンションの高さだ。マスターの状態から本作のCD化は困難と聞くが、他にフレンチ＆カンタベリー系の夢の共演Utopic Sporadic Orchestra(映像もありとの由)も含め、Top在籍時の音源リリースはファン最大の願い。珠玉のスタジオ作品群すら石に変えてしまう程のMAGMAのLiveの魔力よ。　(山田)



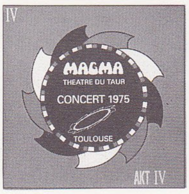
MAGMA
Kohntarkösz
L P/Vertigo 6325 750　'74年
CD/Seventh REX Ⅷ

〝M.D.K.〟同様に彼等の代表曲である大作〝Kohntarkosz〟を中心にした作品。Vandertopの世界は前作より更に一歩前進。その表題曲だが、重量級リズム・セクションに加えてピアノもリズムを刻み、コーラスとキーボードによって彼等独特の空間が作られている。前作と比べて装飾が少ない分よりコアな感じだ。他に短めの2曲、一方はJ.Topによる彼流のヘヴィ・ナンバー、コーラス（うなり声？）とチェロで思考が真っ黒になって停止してしまいそう。もう一方はC.Vanderが彼の敬愛するColtraneに捧げた曲で静かなピアノで至上へ昇ってゆくような曲調、彼の本質はむしろこれだろう。前作から続くこの世界は自作で頂点に登り詰める、その一歩手前の雄姿。　(伊藤)



MAGMA
Live (Hhai/Live)
L P/Utopia CYL2-1245　'75年
CD/Seventh REX Ⅹ/Ⅺ

満場一致でMAGMAの最高作、というよりむしろロック界におけるライヴ盤の頂点の一つ。ベースにB.Paganotti、ヴァイオリンにD.Lockwoodを迎えた編成での'75年6月のライヴを収めた究極の作品。〝M.D.K.〟、〝Kohntark〟という文句無しの大曲を中心にぎりぎりの限界から更に一歩超えてしまった様なテンションで嵐のような演奏が再現されており、スタジオ盤と比べてみても数段上回っている。最も充実していた彼等の絶頂期を最も良い形で作品として残せたことは誠に嬉しい限り。SeventhからのCD再発はC.Vander自らの手によるリミックス＆ボーナス・トラック2曲収録。フレンチ・ロック史上、いや、全世界でみても語り継がれるべき作品。　(伊藤)



MAGMA
Thâétre Du Tour-Concert 1975-Toulouse
CD/AKT Ⅳ　'94年('75年録音)

究極の一枚「Live/Hhai」を聴いて「他にももっとライヴを！」と長年思い続けていたらバンド・メンバー自らの手により'75年9月のライヴという究極の兄弟アルバムがリリースされてしまったという幾ら喜んでも喜び足りない2枚組CD。2トラック録音ながら(むしろその方がライヴらしさが出るものだが)より切れ味鋭い〝Kohntarkosz〟を一気に収録、「Live/Hhai」ではスタジオ録音だった〝Hhai〟と〝Kobaia〟がライヴ演奏(当然かなりアレンジが違う)、更に〝Mekanik Zain〟で多少カットもあるが曲アタマから収録の〝M.D.K.〟とどうしようもない、手の付けられない大爆発。「MAGMA未体験者は「LIVE」から入門すべし」の格言を軽く覆す。キーボードがJ.P.AsselineからP.Gauthierに交代しているというだけでも軍配はこちらか？　(伊藤)



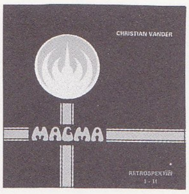
MAGMA
Üdü Ẃüdü
LP/Utopia FPL I 7332　'76年
CD/Seventh PEX XII

MAGMA史上、Blasquizと並ぶキーパーソンとして甲乙つけ難い功績を上げて来たベーシスト二人、即ちPaganottiとTopがそれぞれ手がけたナンバー2曲が全てを物語る。前者の小品〝Weidorje〞は、Peganotti-Gauthierによるこの曲名を冠したグループ結成(Blasquizもそこで少なからず尽力している)の嚆矢となり、後者の大曲は言うまでもなくヘヴィなベース・リフのみで既に完結しているMAGMA系アーティストPaganottiですらその影響から逃れる術はなかった一の座右の銘。勢いコンセプチュアル・リーダーとしてのVanterの存在感は揺らいでおり、前後作と並べて聴けばその差異は歴然としている。ヴォルテイジは高く、MAGMAを語る上では勿論不可欠だが、本作のみで全てを語る事もまた不可能。　(山田)



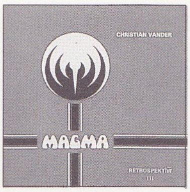
MAGMA
Attahk
LP/Eurodisc 913 213　'78年
CD/Seventh REX XIII

H.R.Gigerの素晴らしいジャケットも印象的な'77年録音の作品。分裂から一度解散、メンバー再構成、更に音楽的にも試行錯誤が成された時期の1枚だけにライヴ演奏で導入し始めたファンク色が本作にも反映され始めている。短めに各曲をまとめて全7曲の構成、比較的判り(馴染み)易いメロディとストレートなノリが全面に出ているが、強烈なコバイアン・コーラスはむしろ冴えまくっている。K.Blasquizの比重が低くなっているのはちょっと寂しいが。アルバム・コンセプトとして「OurgonとGorgoの出会い」があり、クレジットにも「basse Terre」と「basse Air」とあるがレコーディングではG.Delacroixが両方をこなした。因みにプロデュースも「M.D.K.」から前作まで続いたG.Gomelskiの手を離れ、本作ではL.Thibault。　(伊藤)



MAGMA
Retrospective Vol.1 & 2
LP/RCAPL 37497　'81年
CD/Seventh REX XVI・XVII

音源は'80年、「往年の」マグマとしては最期の雄姿。さて、本作の聴きどころを三つ挙げるとすれば、一つに本作を最後にマグマを離れるクロース・ブラスキの名唱。特に〝Theusz Hamtaahk〞のイントロは絶品だ。二つに10人にものぼる名手達による複雑かつ量感溢れるアンサンブル。そして三つめは勿論ライヴならではの風情。「Mëkanik…」に顕著な彼らのブルージィな哀感について語られる事は滅多にないが、実は彼らを理解する上で重要な要素だと思う。流石に全盛期の「Live」と重複する部分こそ見劣りするものの、他は「円熟」という言葉が相応しい充実ぶり。昔からのファンには涙モノ(特にオープニング)だろうし、初めての方や彼らをこれまで敬遠されていた方にもお薦めしたい。　(山田)



MAGMA
Retrospectiw III
LP/RCA PL 37481　'81年
CD/Seventh REX XV

'80年6月、新旧メンバー勢揃いの伝説のコンサート「Rétrospective」の模様を収録したライヴ盤。「I&II」に4カ月先行し、'81年2月の発売。「I&II」はまさに往年の名曲を収録したものだがこちらは「マグマ'80年ヴァージョン」と言っても良いだろう新しい音楽性を打ち出したものとなっている。よりブラック色が強くなった躍動的な〝Rétrovision〞にC.Vanderが朗々と歌い上げる名曲〝Hhai〞。小曲〝La Dawotsin〞は実際にはライヴ演奏されず、スタジオ録音の収録となっている。レコード化にあたり、〝Rétrovision〞のヴォーカルがG.Khalifaに差し替えられたが当日実際に歌ったK.Blasquizのオリジナル・ヴァージョンも素晴らしい出来であることをつけ加えておく。(伊藤)



MAGMA
Merci
LP/JARO 4120　'84年
CD/Seventh REX III

だんだんと比重を増やしていったヴォーカルの割合が本作で完全に主役になる。曲調、ホーン・セクション等をみても非常にソウルフルだ。本作で見限ったファンがかなり多いが(確かに表面上これだけ変化すると無理もない)、C.Vanderの基本姿勢は従来から変わらず、ただ重厚な装飾をはぎ取っただけだろう。当時ステージではセカンド・ドラマー(F.Laizeau)、ホーン・セクション(Guillard兄弟)を配していたがバンドの実体はなかったと思われ、本作でも一部の主要メンバーを除いて殆どがゲスト参加である。ヴォーカルもフランス語、英語、コバイア語と一貫性が無く全体のまとまりは希薄だ。が、C.VanderがColtraneと同様に敬愛して止まないO.Reddingに捧げる〝Otis〞等、どうみても感極まる名曲が収録されているのも事実。　(伊藤)



MAGMA
Les Voix
CD/AKT AKT 1　'92年

マグマは'90年代に入ってなお勢力的な活動を続けており、マグマ名義としては久々の(10年振りか)新作である本作は'92年に行われたステージからのライヴ・アルバムである。収録時間も短いが、ファンにとっては〝Thesz～〞後半部を演っているのが大いに気になるところだろう。また未発表曲〝Zess〞は'70年代後期から演奏されており、原曲は40分を超える超大曲である(2曲共完全収録でないのが残念)。形態はオファリングに近くピアノとコーラスが中心で、ドラムはほとんど入らない。旧来とはスタイルが全く異なるとはいえ、マグマの音楽にクリスチャンの「魂」を感じ、それに共鳴できる人ならば何も文句はあるまい。　(内田)



UNIVERIA ZEKT
Unnamables

LP/Théleme 6332 501 '72年
CD/Musea FGBG 4086

MAGMAの様だがMAGMAでは無い。が、メンバーは当時のMAGMAそのまま。MAGMAの内部に生まれたMAGMA以外のコンセプトをこの名前を使って再現した一枚。時期的には2ndと3rdの間になるが、作風は未だ旧タイプのポップ・ジャズに準ずるものだ。それぞれの曲が作曲者によってカラーが違うので統一感はあまりない。MAGMA的な要素、いわゆるジャズ・ロック的な部分、ブルーズ色を引きずる部分等が入り交じっている。A面に短めな曲を、B面に長めの曲を配しているがやはり後者の方がやや出来が良いか。オリジナルLPは見開きジャケットで内側にはあのMAGMAマークとThélemeレーベルのマーク（デザイン・コンセプトが非常に似通っている）が大きく映し出されている。（伊藤）



OFFERING
Ⅰ & Ⅱ

LP/Seventh A1/A2 '86年
CD/Seventh A Ⅰ/A Ⅱ

MAGMAにおいて用いられた「装飾」の部分を取り払った、C.Vanderによる新たな編成による第一弾。彼の〝Spiritual〞な部分がより全面に出て「愛」を強く語っただけで本質には変化はない。ドラムは更に裏方に回り、サウンドの中心はピアノと声（ヴォーカル、コーラス）になっている。狂気のごとく荒れ狂う爆発的演奏とは異質だが非常に美しく、且つ信念の通った力強さの漲った曲が並んでいる。因みに'86年の発表だが、OFFERINGの名前を用いた最初のステージは'83年10月6～8日、この時で既に素晴らしいステージが出来上がっていた。初期のツアーにはF.Mozeも参加していたが（映像で確認出来る）レコーディングには不参加。（伊藤）



OFFERING
Ⅲ & Ⅳ

CD/Seventh REX AV A Ⅵ '90年

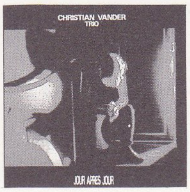
前作から続き番号でタイトルされているように、同じ方向性を持った作品であり、且つより完成度が増している。圧倒的な大作〝Another Day〞（45分に及び本作のほぼ全編を構成する）は'82年6月のMAGMAのステージで既に演奏されていて、段々と完成度を高め最終型がここに収録された次第。力強く高揚する曲調はChristianとStellaの強力な声の掛け合いと揺さぶりまくりリズム・セクション、それに拍車を掛けるリズム楽器と化したピアノで盛り上がりまくる。全盛期MAGMAも含めてC.Vanderの代表曲と言い切ってしまおう。この大曲に続く短めの2曲は静かな終焉を表現するようで、寧ろOFFERINGとしての本質はこちらかもしれないが。'80年代以降のC.Vanderの文句無しの代表作。（伊藤）



OFFERING
A Fiiëh

CD/Seventh A Ⅸ '93年

'80年代より発足したクリスチャン・ヴァンデのプロジェクト、OFFERING。当然のことながら過去2作の延長線上にある音なのだが、現代楽曲風のオープニング（クリスチャンのキーボードによる）やオペラさながらの合唱曲があったりして、これまでになく重く荘厳な雰囲気が漂う。先にリリースされたステラのソロ・アルバムとクロスする部分も多いようだ。ラストはこれまでのオファリング・ミュージックの集大成ともいうべき大作で、凄絶なアンサンブルとクリスチャンのヴォイスが攻めぎ合い、ブレイクがかかった後は寂静とした空間の中で響き亘る愛の賛歌。ラストを飾るに相応しいこの曲は〝Purification〞＝「浄化」と呼ばれ、これこそがクリスチャンが求め続けてきた「愛＝無垢の心」の到達点であるといえよう。（内田）



CHRISTIAN VANDER TRIO
Jour Apres Jour

CD/Seventh REX A Ⅳ '90年

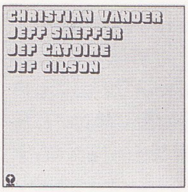
C.Vanderの根底に根ざす「ジャズ」を自らの手でも演奏しようというスタンダードなスタイルを忠実に守ったジャズ・トリオ。メンバーはC.Vander、Emmanuel Borghi（p）、Philippe Dardelle（b）の3人。メンバーは固定していなかったが、'80年半ば頃からトリオ編成で純然たるジャズを演奏するライヴを不定期に行ってきた訳で（当時はM.Graillierが参加したりしていた）、決してつけ焼き刃ではないしっかりした演奏だ。オリジナル曲に加えてスタンダードのカヴァー曲〝Chim Chim Cheree〞やJohn Coltraneの曲も収録。同じスタイルで2nd「65！」も発表している。（伊藤）



CHRISTAN VANDER TRIO
65！

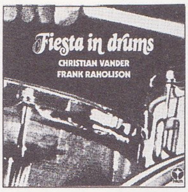
CD/Seventh AX '93年

C.Vanderを中心とするジャズ・トリオの2作目。前作同様完全なジャズでマグマ時代の音楽性は全くみられない。が、コルトレーンに惚れ込み続けている彼がこのようなジャズを演奏することに疑問は感じない。オリジナル曲に加えてコルトレーンのナンバー3曲、ファラオ・サンダースのナンバーを1曲（OFFERINGのナンバー〝Another Day〞にサンダースの〝Lower Egypt〞のフレーズがモチーフとして使われている事実もある）。全体的にアセンションの頃のコルトレーンにかなり似ていて良く練られパワーある演奏だ。仲々の名演である。ジャズとしては。（伊藤）



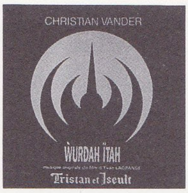
CHRISTIAN VANDER
Christian Vander Et Les 3 Jef
LP/Palm 006　'73年

C.Vanderを中心にJeff Seffer(ts)、Jef Catoire(b)、Jef Gilson(p)という3人の奏者とのセッション。とはいってもセッション的な演奏は前半の2曲のみ、半分にも満たない。A面後半とB面全てはC.Vanderのドラム・ソロが占めている。前半のジャズ・セッションは'69年6月の録音、最も初期の編成のMAGMAの直前ということになる。この時点で既にJ.Sefferとの交流が確認されるわけだ。演奏は非常にスタンダードなスタイルのジャズである。後半のドラム・ソロは'73年6月の録音、当時のMAGMAのステージから〝Ptah〟を感じさせるが、もっと間をを感じさせるソロ・ドラミング。どうせならジャズ・セッションかドラム・ソロのどっちかに統一した方が内容が濃くなっただろう。(伊藤)



CHRISTIAN VANDER
Fiesta In Drums
LP/Palm 003　'73年

MAGMAの全盛期である'73年6月に録音された、MAGMAの音楽性とは関係ないところでのC.Vanderの作品。他のメンバーと違って'70年代に入るとセッション・ワークは少ないのでこの様な形の作品はなかなか珍しい。Frank Raholisonというドラマーとのデュオであるが、デュオの形式をとっているのはA面前半のみ、A面後半はC.Vanderの、B面全部を使ってF.Raholisonの、それぞれのソロということで混沌とした世界が両面続く。構築された部分は殆ど無く全体の印象としては取りとめが無い。プレス枚数は少なかったと思われるが、ハード・コレクター向きの1枚。(伊藤)



CHRISTIAN VANDER
Tristan & Yseult (Wurdah Itah)
LP/Barclay 80.528　'74年
CD/Seventh REX Ⅸ

C.Vander名義でY.Lagrangeの映画のサントラとして利用されながら実はTheusz Hamtaahk第二部、面子はC.Vander、S.Vander、K.BlasquizにJ.Topという中身は完全にMAGMA名義(最小の編成ではあるが)の1枚。〝M.D.K.〟流の強力なヴォーカル&コーラスにJ.Topの地鳴りベース、そして本作を特徴付ける反復を強調したピアノが重いリズムを生み出している。ここでのピアノはリズム楽器の一部となりアルバム全体の推進力になっている。上層楽器を使用せずに装飾を省いている分ダイナミズムが抽出されていて非常にコアな1枚。本作リリースに至るまでのL.Thibault、G.Gomelskiとのすったもんだは確かにあるがそれにも関わらずMAGMAとして非常に魅力的な1枚。因みにCDも含めてジャケは3種類ある。(伊藤)



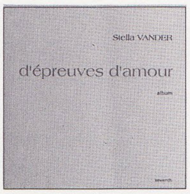
CHRISTIAN VANDER
To Love
LP/Seventh A3　'88年
CD/Seventh A Ⅲ

実質的なソロの1枚目(「Wurdah Itah」はソロ名義ではあるが中身は純然たるMAGMAそのもの)。彼の音楽の本質にある「愛」を素直に反映した、非常にしっとりとした曲が並ぶ。実際彼がプレイしているのは歌とピアノが殆どでドラムを叩いているのは僅かに1曲のみ、そのドラムもジャズのスタイルに則ったもので叩きまくらずに静かに間合いを表現したようなもの。Stellaも1曲ゲスト参加している。確かに地味ではあるし、コバイア・ストーリーズMAGMA的内容は殆ど見られないが心に染み入る美しい曲が並んでいる。このままリズム・セクションを付け、上層楽器やコーラスを重ねればOFFERINGと同等になりそうだ。(伊藤)



CHRISTIAN VANDER
Les Voyage De Christophe Colomb
CD/AKT AKT Ⅲ　'93年

'92年秋、「Les Voix」ツアーの間隙を縫って録られた本作は仏北部ランスで開催されたコロンブス新大陸発見500周年記念の野外イベントに因むスタジオ・ワーク。彼はシンセ及びテキスト(仏語)朗読を、ステラは効果音を担当。当日は映像、ライト・ショウ等を背に生演奏された模様。〝Palosの町〟〝出航〟〝ユートピア〟〝神秘の嵐〟の4部構成で「La Marche Celeste」「Eliphas Levi」のパッセージを含むドラマチックで映像を喚起する作品である。全編に流れるクリスチャンの「語り」は堂に入ったもので、彼の「ヴォイス」が好きな方には特に一聴をお勧めしたい。(松本修一)



STELLA VANDER
D'épreuves D'amour
CD/Seventh A Ⅷ　'91年

C・ヴァンデという才能を世に出した女性、つまりマグマを背後からつかさどった人物とのことだ。'73年マグマに正式加入して以来、あのコーラスの一人として不可欠な位置にいる。それにしては遅過ぎるソロだが、彼女のユニヴェリア・ゼクト・スタジオで製作されたこの音楽は、マグマを離れた嵐の後のような静けさ、そして安堵感に包まれてとても母性的だ。ピアノはC・ヴァンデが弾く。これもまた静かに波立つような演奏だ。ヴォーカル作といっても当然スウィングしない。近代クラシック寄り。不安気で優しげな緊張感のある音だ。(松本)

ZAO

□賀川雅彦

ザオの誕生はヨシコ・ジェフ・セファーとフランソワ・ファトン・カーンがマグマで共演したことに端を発する。マグマのメンバーとして活躍し、アルバム「Magma」('70年。カーンのみ参加)、「2」('71年)、更には、ユニヴェリア・ゼクト名義の作品「The Unnamables」('72年)にも参加した2人はロック・ミュージックの持つ新たなる可能性に賭け、'73年ザオを結成する。当時、セファーはジーグフリード・ケスラー(p)、ディディエ・ルヴァール(b)、同じくザオのメンバーとなったジャン・ミ・トゥルオンとともにパーセプションとしても活動しており、ザオ結成後もパーセプションがしばらくの間存続したため、セファー、トゥルオンは2つのグループで並行してに活動していた。

セファー(sax, cl)、カーン(p)、トゥルオン(ds)、ジョエル・デュッド・デュグルノー(b)、ジャン・イヴ・リゴー(vln)、モーリシア・プラトン(vo)、の6人から成るザオは活動の中心をライヴに置き、数多くのコンサートを開いた。こうした地道な活動は徐々にではあるが確実に彼らの支持者を増していった。そして、'73年の秋、待望のファースト・アルバムが発表された。セファー、カーンがマグマで得たものと彼らを中心に各メンバーの持つ独自の音楽性を融合させて作り出したサウンドは最高水準の完成度を示している。ロックの情熱とジャズの高度なテクニックが一体化した演奏は緊張感に富んだ見事なものである。このように優れた作品であるにもかかわらず、レコード会社はこのアルバムの販売促進に積極的でなかった。彼ら自身の手でできる唯一のプロモーションはライヴを行い自分達の音楽をより多くの人々に知ってもらうことであった。彼らは連日のようにライヴ・ハウス等に出演した。それは肉体的にも精神的にも非常にハードなものであった。そして、遂にリゴーのグループ脱退という事態に至ってしまった。彼は余裕を持った静かな生活を望んだのである。更に、しばらくしてプラトンもグループを去っていった。

こうした状況下、残りの4人は、メンバーの補充を行うことなく、3人のゲスト(内1人は元メンバーのリゴー)を迎えてセカンド・アルバムの製作に取り掛った。'74年9月のことである。完成した作品は「Osiris」と命名され、エルドンの作品で知られる創造的マイナー・レーベル、ディスジャンクタ(後のウラス)から発表された。専任のヴォーカリストこそいないものの基本的にはファースト・アルバムと同傾向の好作品である。

この時期あたりからフランスのプログレッシヴ・ロック・シーンは一気に盛り上がりを見せる。数多くの優れた作品が作られ、大手のレーベルもこの種の作品をリリースするようになった。中でもRCAは「バランス」というシリーズを作り、ジャズ・ロック系の作品を積極的に発表した。ザオのサード・アルバム「Shekina」もその一環としてリリースされた。'75年7月に録音されたこのア

●ザオ



ルバムには、イギリスに渡ったデュグルノーに替わってジェラール・プレヴォス(b)が参加しており、また、前作にゲスト参加したピエール・ギュイニョン・TY・ブーム(per)の名前も見られる。それはクラシックの弦楽四重奏団クワトール・マルガンとのコラボレーションを含む意欲作であり、セファーの音楽的教養の広さを改めて認識させるものとなっている。バンドのみによる演奏は極めてテクニカルでドライヴ感に富んだジャズ・ロックとなっており、一方、クワトール・マルガンとの共演部分ではクラシック的要素とジャズあるいはロック的要素が無理なく融合して独自のサウンドを作り出している。こうした試みはセファーのソロ・プロジェクト、ネフェシュ・ミュージックに引き継がれ、より完成度の高いものとなっていった。

翌年、彼らは新たにディディエ・ロックウッド(vln)をメンバーに迎え、ジャズ・ロックの神髄とも言うべき作品を発表した。実質的にはザオのラスト・アルバムとなった「Kawana」である。トゥルオン、プレヴォスのスピーディかつ正確なリズム、セファー、カーン、ロックウッドの白熱のインタープレイ、そして、絶妙のアンサンブル、正にジャズ・ロックの金字塔である。

この作品を最後に各メンバーは独自の道を歩み始めた。プレーヤーとしてのみの存在に飽き足らなかったトゥルオン、ロックウッドはザオを脱退し、自らの音楽性をよりストレートに反映させたスルヤ(SURYA)を結成した。また、セファーもソロ・プロジェクト、ネフェシュ・ミュージックに専念するためグループを去った。残されたカーン、プレヴォスは新たにトロンボーン、サックス、ドラムス、パーカッションの4人を加え、フィフス・アルバム「Typhareth」を発表したが、かつての精彩は見られなかった。カーンもそれを十分に認識し、遂にグループを解散した。こうしてフランスのプログレッシヴ・ロック・シーンが生んだ最大のジャズ・ロック・グループ、ザオの歴史は閉じられた。

時は流れ1986年。幻の名盤となったファースト・アルバムの再発を記念して、セファー、カーン、トゥルオン、デュグルノーがステージに立った(他にデボラ・セファーがヴァイオリンで参加)。一夜のみ(6月6日)のコンサートであったが、それは正にザオ伝説の復活であった。その後、'94年にセファーとカーンを中心に再度再編され、アルバムもリリースされた。

●ヨシコ・セファー



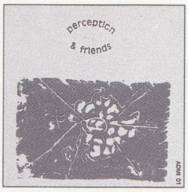


●スルヤ



PERCEPTION
Perception
LP/Futura Records GER.19 '71年

PERCEPTIONはヨシコ・セファーがMAGMAに加入したちょうど同時期に並行して参加していたアヴァンギャルド・ジャズ・バンドだ。セファー(sax, b-clr)、ジークフリート・ケスラー(pf)、ディディエ・ルヴァーユ(b)、ジャン＝ミ・トゥルオンの4人が対等の比重でサウンドをコントロールしている。いかにも若々しい、やる気の漲った引き締まったインプロヴィゼーションが繰り広げられる。セファーは元々こういうシーンのミュージシャンだったに違いない。イギリスのサックス奏者、ジョン・サーマンによく似た印象がある。
(坂本)

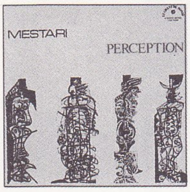


PERCEPTION & FRIENDS
Perception & Friends
LP/A.D.M.I.ADMI 01 '73年

これはもしや自費出版では…？　ジャケットは完全手作り状態だし、ナンバリングがしてあるし、おまけに録音は悪いし…。1972年6月と10月のライヴが収められているが、曲によってメンバーの異動があり、タイトル通りPERCEPTIONと仲間達のセッション大会という趣だ。特にケスラーはバンドと別行動をとっているようで、もしかすると一時的にバンドを離れていたのかも知れない。テディ・ラズリー(clr, ss)、ジャン＝シャルル・カポン(vc)らに混じって、ケント・カーター(vc)、J・F・ジェニー＝クラーク(vc)の名が見える。
(坂本)

PERCEPTION
Mestari

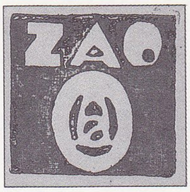
LP/Le Chant Du Monde LDX 74555 '74年



PERCPTIONの最終作は再びレギュラー4人の編成に戻っての、しかしこれもライヴ録音だ(1973年11月28日)。トゥルオンのドラミングがかなりロックっぽくなって来たことで、よりエネルギッシュになった印象を受ける。こういうサウンドは当時ヨーロッパ各地のジャズ・シーンに満ち溢れていて、例えばイギリスのOVARY LODGE辺りを連想してもあながち的外れではなさそうだ。充実してはいるが、この先は袋小路だぞ、という予感がバンドに終止符をもたらしたのだろう。ロック・ファンの耳にはあともう少しで羽撃きそうな所が歯痒い。 (坂本)

ZAO
Z=7L

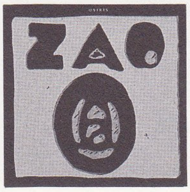
LP/Vertigo 6499 738 '73年
CD/Musea FGBG 4081



マグマ、ユニヴェリア・ゼクトを経たセファーとカーンがJ-M・トゥルォン(ds)、J・デュグルノ(b)、J-Y・リゴー(vln)、M・プラトン(vo)を集め結成したザオの1st。ユニゾンを多用した変則的なリフはマグマとの共通性をうかがわせるが、小編成な分直線的でいわゆるジャズ・ロックらしさが強い。一方、メンバーの出自の割にはソロの応酬と言った部分は少なく、全体のアンサンブルを強調している。尚、同年録音の未発曲が4thCDに追加されたが、メンバーが異なるせいか、アドリブを前に出した物になっているのが興味深い。 (中西)

ZAO
Osiris

LP/Disjuncta 000004 '74年



前作からほぼ一年、ディスジャンクタ(後のUrus。エルドン他が出ている)にレーベルを移してのこの2ndでは、プラトン、リゴー(ゲストでは参加)が脱け、M・シャトンロー、T・ブームをゲストに迎えている。基本的には前作と同傾向なのだが、多少緩やかになったほか、メンバーが減った為カーン、セファーの両者が単独にリードを取る場面が増え、アドリブ・ソロも多くなっている。又、フルート、エレピ等によるメロディックな部分もあり、前作ほど脅迫的で派手な音ではない分、バランスの取れた落ち着いた好作品になっている。 (中西)

ZAO
Shekina

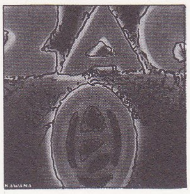
LP/RCA FLP 1 0097 '75年
CD/Musea FGBG 4067



今度はRCAから出た三作目、ベーシストをG・プレヴォへ替えマルガン弦楽四重奏団をゲストに起用している。弦の使用は、セファーの主導で行われた。それは近代クラシックの要素をバックによりスピリチュアルな方向性を持った音楽を造る為の手段だったと思われるが、テクニカルなジャズ・ロック指向を増したバンドとは今一つ融合し切れなく、セファーは後のネフェシュ・ミュージック三部作でこの落し前を付ける事になる。とは言えザオの事だからにして、各パートそのものは充実していて聴き所も多く、他の作に引けを取らない出来ではある。 (中西)

ZAO
Kawana

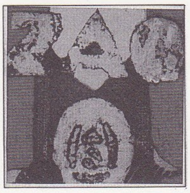
LP/RCA FLP 1 0178 '76年
CD/Musea FGBG 4039



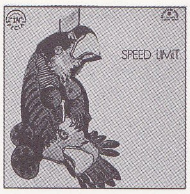
D・ロックウッドを迎えた四枚目である本作では弦カルテットを使った実験を試みた前作とは少々異なり、Y・セファーの色を中心とした独特性は保ちつつもよりテクニカルなジャズ・ロック作品としての造りとなっている。殊にインター・プレイのやりとりでのロックウッドの加入の効果は大きく、2曲目辺りでのソロの応酬などはその典型例が聴ける。と言った訳で、本作はその充実した演奏振りから最高作として挙げられる事も多いのだが、カーンとセファーの持ち味の違いと言った所も途々に明確になっており、それが本作発表後の分裂を招いた。 (中西)

ZAO
Akhenaton

CD/Musea FGBG 4125 '94年

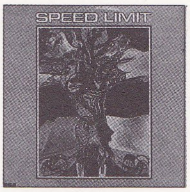


ザオ再結成。一時再編コンサートをやったことはあったが、曲が書かれ録音されたのだから、疑いようもない。'93年に中心人物だったセファーとカーンが決めた再結成には、Jean-My Truong(ds), Dominique Bertram(b),Patrick Tilleman(vln)が呼ばれた。申し分のない5人編成で限りなくザオ・ミュージックが甦った。しかも熟練の重味を感じさせる。特にやはりセファーが生き生きとしたリードをとる。リズム・セクションも未だ十分に重味と切れを持っていて、各リードを支えている。曲の動きは、さすがに20年前のようには行かないとは言っても、この再結成は同窓会ではなく芯の通った音楽ZAOのキャリアを延長させるものだ。この年齢にしては思いの外、角っぽい。'94年5～6月に録音された。 (松本)



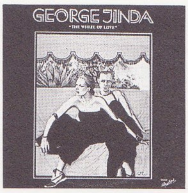
SPEED LIMIT
Speed Limit
L P/Le Chant Du Monde LDX 74575 '74年

PERCEPTION解体を受けて、セファーは勿論ZAOでの活動は続けながら、SPEED LIMITの結成に加わる。この常に複数のバンドで活動していく行動原理は彼のバランス感覚だろうか。ジョージ・ジンダ (d) 率いるSPEED LIMITは、音楽的にセファーとジャン＝ルイ・ビュキ (pf) がイニシァティヴを握っていた。PERCEPTIONに比べるとへろへろしたプレイがふやけてるし、ZAOに比べるとロック・ビートの歯切れが悪いしで、中途半端な煮え切らなさがとても気になる。多分その１番の原因はギタリスト (Gérard Curbilion) の力量不足だろう。 (坂本)



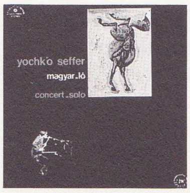
SPEED LIMIT
Speed Limit
L P/RCA FPL 1 0101 '75年

スピード・リミットのセカンド・アルバム。ヤニック・トップ (b, per, vo, etc)、ヨシコ・セファー (ss, b-cl, fl, vo)、ジャン・ルイ・ビュキ (p,vo)、シロック (per)、ジョルジュ・ジンダ (ds, per) から成る５人の正式メンバーに加えて、ミッシェル・リポーシュを含む４人のヴァイオリニスト、ジャン＝シャルル・カポン (cello) がゲスト参加している。Ａ面には前作「Speed Limit (Le Chant Du Monde LDX 74575) '74年」をより軽快な感じにしたピアノとサックス中心のジャズ・ロック組曲とトップによって作られた「Üdü Ẁüdü」を思わす曲が収められている。一方、Ｂ面はセファー作曲の組曲であり、ストリングス・アンサンブルを用いたメロディアスな曲とコンボによるジャズ・ロックを聴くことができる。 (賀川)



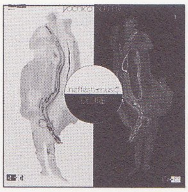
GEORGE JINDA
The Wheel Of Love
L P/Motors MT 44051 '78年

スピード・リミットのリーダーとして知られるジョルジュ・ジンダ (ds) の唯一のソロ名義作品。ジャン・ルイ・ビュキ (key)、ヨシコ・ジェフ・セファー (sax, fl)、ディディエ・バタール (b) らが参加しており、実質的にはスピード・リミットの３rdとも言えるものである。グループとしての２枚の作品よりもロック色が濃く、より高い完成度を誇っている。ジンダのクリスチャン・ヴァンデを彷彿させるドラムス、ビュキのメロディアスで歌心あるエレクトリック・ピアノ、セファーの変幻自在なサックスと他の作品ではあまり聴くことのできないリリカルなフルート等が中心となって迫力に富んだ演奏を展開している。作品自体の知名度は低いものの実力派ミュージシャンによって作られたジャズ・ロックの名作である。 (賀川)



YOCHK'O SEFFER
Magyar-Lò
L P/Le Chant Du Monde LDX 74604 '76年

'75年11月21日、ランスにおけるライヴである。タイトルはハンガリー産のたくましい馬のことである。ヨシコ・セファーは、テナー・サックス、ソプラノ・サックス、クラリネット、ピアノ、そして自作の楽器「カムカ」を自在に使っている。ソロ・アルバムであり、彼の他のアルバムよりもフリー・ジャズに近く、ジャズ・アンサンブルとしてのパーセプション、ジャズ・ロック・ユニットとしてのザオ、異教的なスピリチュアリティを感じさせる一連のネフェッシュ・ミュージックなどとは異なり、ここでは、彼のコンポーザーという面よりもむしろ一人のサックス・プレイヤーとしての面が強調されている。インプロヴィゼーションが主体であるが、エスニックなものから得たようなプレイも多く、興味深い。 (宇田川)



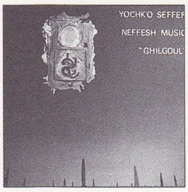
YOCHK'O SEFFER NEFFESH MUSIC
Délire
L P/Moshé Naim MN 12008 '76年

ネフェシュ・ミュージック三部作の頭。プレイヤーからコンポーザーに変身した彼の才能が結晶し始めた作品。ドラムのJ・M・Truongのサポートの力強い曲とマルガン弦楽四重奏団とのアンサンブルに大別出来るが共にオリジナリティあふれる良作ぞろい。より完成されてゆく三部作の中ではまだ登り坂の途中かもしれないが次作との関係は密接でラストの曲名は次作のタイトルと同名。ジャズをベースに現代音楽的な作曲方法、東欧民族音楽の要素、それだけでは説明不可能なシリアスさ。表面的にはベーシスト不在なのがちと淋しい。 (伊藤)



YOCHK'O SEFFER NEFFESH MUSIC
Ima
L P/Moshé Naim MN12010 '77年

タイトル曲であるＡ面の大作は前作を継承し、ネフェシュ・ミュージックの典型。様々な管楽器に声を重ねてぶ厚い不思議な雰囲気の中、彼のプレイヤーとしての持ち味が出ている。そしてＢ面は一転しM・KatchéとD・Bertramのスピーディなリズムに乗ったザオ型のジャズ・ロック。すんげえカッコ良い。彼のエレピも注目に値するが四人の弦が緊張感を増幅する。特にＢ②などあおる様に盛り上げてゆくリズムの上のsaxとM・Platonのヴォーカルで血圧が五割増になる。知名度は大分落ちるが〝ザオより好き〟という人は多い。因みに曲番号は前作より通し。 (伊藤)



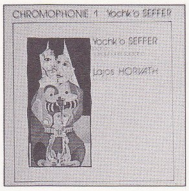
YOCHK'O SEFFER NEFFESH MUSIC
Ghilgoul
L P/Garou Garou SR 116　'78年

「Délire (MOshé-Naim MN 12008) '76年」「Ima (Moshé-Naim 12010) '77年」に続くネフェシュ・ミュージック最終作品である。前２作にも参加していたクワトール・マルガンに加えて、ドミニク・ベルトラム（b, IMAにも参加）、フランソワ・レゾー（ds）がセファーをバックアップしている。このアルバムに収められた音楽はクラシックからロックに至る各種音楽の融合物とも言うべき形態をとっているが、その本質は紛れもなくセファーの魂の音楽である。彼のサックス、ピアノとクワトール・マルガンの弦楽器を中心にヴォイスとリズム・セクションが絡み合い曲は進行する。セファーがプレイヤーとしてのみならず作曲家として実力を十二分に発揮した力作である。その後、彼は大作「Chromophonie」に取り組んだ。（賀川）



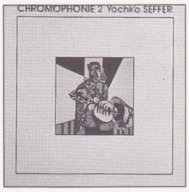
ETHNIC DUO
Ethnic Duo
L P/Blue Marge BM 1004　'81年

MAGMA、ZAOと行動を共にしたヨシコ・セファー、フランソワ・カーンのふたりが三たび手を組んだのはデュオ・グループ、ETHNIC DUOにおいてだった。既に独り立ちしていた両者だが、まだふたりでできることは残っていることに気が付いたという風に再会し、このアルバムを残した。ピアノとサックスという至ってシンプルな編成だが、両者がそれぞれの原点にたち返って発見した音楽はとても感動的だ。ここから先、ふたり揃ってジャズ・ロックを離れて行ったという意味からも、両者にとって共に活動の節目となった重要な作品だ。（坂本）



YOCHK'O SEFFER
Le Diable Angélique
L P/G·C GC2101　'81年

10部作として始められたChromophonieシリーズ第１弾。セファーがぞっこんに惚れ込んだハンガリーのヴァイオリニスト、Lajos Horvathと繰り広げる音楽には、セファーの音楽が最も純粋な形で表出している。これは最早ジャズでもロックでもない、セファーそのものの音楽だ。どうやら当初はここにリズム・セクションを加えてレコーディングされたらしいが、結局ふたりによる演奏が収録された（１曲だけ控え目なギターが加わっている）。この音楽を前にあらゆる形容詞は不毛だ。セファーの精神の在処が否応なく聴き手の精神を震わす。（坂本）



YOCHK'O SEFFER
Le Livre De Bahir
L P/G·C GC2102　'82年

６曲中２曲にマルガン弦楽四重奏団を加え、後はすべてセファーのソロ演奏だ（勿論多重録音）。前作に比べるとサックスの比重が増し、その分躍動感がある。本来はこちらがシリーズ１作目となる予定だったとも言われている。O・メシアンの影響を公言するなど、彼がどちらを向いて音楽活動を行っているかは明らかだが、このシリーズでは更に、悪魔だの地獄だのがテーマになっていて（ヒエロニムス・ボッシュやブリューゲルの絵画がモチーフとなっている）、そもそも美術家でもあった彼の創作姿勢が浮き彫りになっている。（坂本）



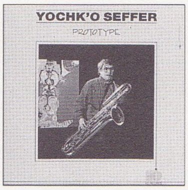
YOCHK'O SEFFER
Adama
L P/Moshé-Naim MN12069　'86年

ジャケットの裏を見るとこのアルバムの内容は一目瞭然なのだが、つまりセファーがひとりでありとあらゆるサックスを多重録音した作品だ。勿論彼が機会のある度に披露してきた数々の自作楽器も含まれている。曲によってはピアノも演奏しており、想像以上に演奏はカラフルだ。視覚にすると何となく笑ってしまうが、音楽自体はこれまでのセファーの音楽そのもの。ひとりで何重奏も繰り広げた演奏はまるでマルガン弦楽四重奏の生き写し（当たり前か）。ここまで来ると彼の音楽は彼ひとりで完全に充足していることが判る。（坂本）



SIGFRIED KESSLER, YOCHK'O SEFFER
Dialogue Water-Fire
L P/Moshé-Naim MNO12071　'86年

ふたりのコラボレーションは少なくともアルバム・レコーディングに於いてはPERCEPTION以来のことになる。PERCEPTIONでは妙にころころとしたタッチのクラヴィネット・プレイが特徴的だったケスラーだが、ここではピアノに専念し、非常に躍動感のあるプレイを繰り広げる。セファーもサックス・プレイに徹し、ふたりの相性は抜群にいい。ETHNIC DUOの延長線上にある音楽だが、ケスラー自身もセファーとためを張るくらいに実験精神が旺盛で、ふたりの感性が巧くマッチングしている。個人的にはケスラーの評価を改めさせられた１枚だ。（坂本）

YDCHK'O SEFFER/SIEGFRIED KESSLER/FRANÇOIS MECHALI/PETER GRITZ
Monk Forever
CD/Moshé-Naim　100282

タイトルの通り全曲が、セロニアス・モンクの作品。その方面は疎いので、どの程度忠実なのかはっきりとは判らないのが残念だが、冒頭のハーモナイザーをかけたサックスだけでセファーと判るからには、かなり自分の物にしているのだろう。他のメンバーとも馴染みがあるだけに良くこなれた演奏で、仲間内のルーツをたどる同窓会的意味も持っていたのかも知れないが、つややかな中にも気迫あふれるセファーの音は同時期のリーダー作と並べても遜色の無い仕上りで、単なる企画物とは大分違った印象がある。尚、セファーは同時期にモンクへのトリビュート・ビッグ・バンドでの活動もあるので、明らかに関係した作品だと思われるが、具体的な事は判らないのが、これも残念。　（中西）

YOCHK'O SEFFER
Prototype
CD/Kid Records 590 462　'89年

ジャズ・ロック・ビートを排した現在のセファーの音楽はジャズとの相性がいい。ジャズ・シーンに回帰したセファーは、ここでバール・フィリップス（b）、バリー・アルトシュル（b）というアメリカ出身の、'60年代フリー・ジャズ・シーンに大きな功績を残したミュージシャン達と実に息の合ったプレイを繰り広げる。勝手知ったるこの土俵に乗ってしまえば、やることは知り尽くしている。インプロヴァイザーに徹したセファーは今も昔も変わらない。そんな中、愛娘、デボラ・セファー（vln）がおそろしく鋭い切り口で斬り込んで来る様は圧巻。　（坂本）



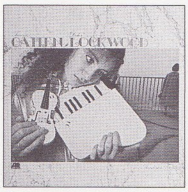
MESTARI
Mestari
CD/Gimini Music CD 590131　'93年

セファーにとって、明確なアンサンブルの一員としての作品はザオ以来になる。関係は無いだろうが、一曲はザオの曲のリメイク、他にも張りのあるジャズ・ロック・ビートの上で、独特のリズム／音使いを見せる曲もあり、単純に嬉しい。が、かつてのセファー作品に見られた、集中力の塊と言った雰囲気が薄れてしまっているのが気にかかる。かつての同僚達同様に落ち着いた、と言う事なのだろう。仕方が無い事ではあるが、別格だった存在が普通のレヴェルに降りてくるのを見るのは淋しい物だ。依然、その中では高いレヴェルにはあるのだが、共演者の楽曲が割と平凡なのも痛い。逆に特別な思い入れが無い方が高く評価出来ると言う事かも知れない。まだまだ娘には負けてはいないが。　（中西）



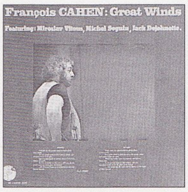
FRANÇOIS "FATON" CAHEN
Piano Concerts
ＬＰ/Le Chant Du Monde LDX 74588　'75年

ザオを離れたフランソワ・カーンが最初に出したアルバムが、このグランド・ピアノとエレクトリック・ピアノを使ったソロ・コンサートのライヴ盤だった。バンドからソロへ、その一歩、ということを思えば、なんとなく意味が通ったようにも思えるが、本当のところは分からない。まだザオでのプレイが手に残っているのか、ピアノ・リサイタルにはならず、乱暴にリズムをとるような激しさもある。メロディアスな部分はジャズというよりもクラシカル。エレクトリック・ピアノでの演奏のほうが多いが、こちらはもう一つ気迫・集中力が伝わりづらい。どちらにせよ、この後バンドを当分組むことなくソロ製作を中心に進めていったカーンの初期、ということで比較的角のある演奏が聴ける。　（松本）



FRANÇOIS CAHEN, DIDIER LOCKWOOD
Thank You Friends
ＬＰ/WEA 50489　'78年

世にもつまらぬジャケット・デザインで大損をしているなかなかの秀作。ZAOを解散したカーン（kb）が元メンバーのディディエ・ロックウッド（vln）とふたりだけで制作したこのアルバムは、ふたりのプレイの華麗さがいい形で調和し、少なくともカーンにとっては最高の出来となっている。妙な邪念を捨ててふたりがやりたいように力を注ぎ合ったのが成功したのだろう。こう言っては何だが、ロックウッドというミュージシャンはフランス時代で燃焼し尽くしている気がする。'80年代に渡米してからの彼は、知名度に反比例して精彩がない。　（坂本）



FRANÇOIS CAHEN
Great Winds
ＬＰ/Trema 310　069　'79年

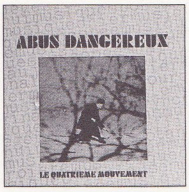
ＺＡＯでの活動と並行してソロ活動も行っていたカーンだが、ZAO解散後はソロ活動に力を注いでいた。どういう経緯があったかは知らないが、1979年３月、本作はニューヨークで録音された。正直言って彼の音楽はどうもうわっつらだけで節操がなく、好きになれないのだが、この録音は参加メンバーに救われている。何と言ってもミロスラフ・ヴィトウス（b）の全面協力が全体のレヴェルを強力に引き上げており、更に２曲だけだが何とジャック・ディジョネット（d）が参加。これじゃあ、彼らの邪魔さえしなければいいものができるに決まってる！　（坂本）

FRENCH JAZZ-ROCK



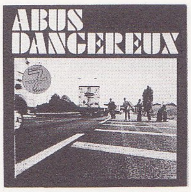
ヴェトルシュ

A to Z



ABUS DANGEREUX
Le Quatrième Mouvement
ＬＰ/AJ Records 1001　'80年

誰も明言しないから敢えて断言するが、これはフレンチ・ジャズ・ロックの最高傑作の１枚だ。ギタリスト、ピエール・ジャン・ゴーシェによって結成されたABUS DANGEREUXはこの１stアルバムでいきなり極点に昇り詰めてしまった。ギターの演奏スタイル、女声スキャットの効果的な起用、控え目ながらしっかりとバランスを支えるキーボード、そして圧倒的なリズム・セクションの歯切れ良さ、それにゴーシェのツボを掴み切った作曲が鮮やかに決まって、もう溜息をつくしかない見事な音楽を生み出している。カンタベリー・ファン、MAGMAファンは決して聴き逃してはならない。総勢10名。無名ミュージシャンが並ぶ中、イギリスのチェリスト、ナイジェル・ウォーレン・グリーンの名前が目を惹く。　（坂本）



ABUS DANGEREUX
Happy French Band
ＬＰ/Metro JB105　'83年

３作目。デビュー作の硬派な音造りからはうって変ってストレートな'80年代型ジャズ・ロックへ転じた前作に続き、軽快な曲が並ぶ。メンバー自体も大きく変わっているのでこの変化も無理は無いが、これはこれで良く出来ている。ビブラフォンやマリンバ等と言った打楽器群に、腰の入ったベースを軸に、刻々と自然に移り変わる曲調は、ソフトになったとは言えどこかカンタベリー的でもある。特にＢ面を占める組曲にその色がうかがえ、いわゆるハッタリ気は無いにしろ、工夫をこらした楽曲がなめらかに進行する様は、聴いていて楽しい。まずは１stを聴いて欲しいが(ついでに再発もして欲しいが)、この情け無いジャケとタイトルだけでパスするのは勿体無い。　（中西）



ABUS DANGEREUX
Live
ＬＰ/JB 106　'85年

とんでもないデビューを飾ったABUS DANGEREUXだが、国内での反響はきっと微妙だったろう。それはそうだ。あの音楽を一般のジャズ・ロック・ファンが聴いてどれほどついて来れたものか。アルバムを追うごとに知名度のある若手プレイヤーを迎え入れ、この４作目では２ndから参加のボビー・ランゲル(sax, fl)、３rdから参加のフランソワ・ヴェルリ(ds)らが名を連ねている。２nd以降フュージョンに急接近し、やや緊張感の薄い演奏に満足してしまった様子もあったが、ここではライヴということもあり、特にヴェルリの超絶プレイが高得点だ。ヴァイブをフィーチャーした淡々とした演奏が個性となっている。以後バンドはABUSと名乗り、ランディ・ブレッカーと共演したりしている。ベストCDあり。　（坂本）



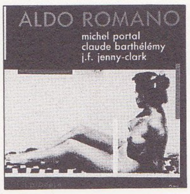
ALAIN CONDA
C'est Plus Ce Que C'était
ＬＰ/Phaeton 7802　'79年

Alain Condaの恐らく唯一の作品。POTEMKINEのGoubin３兄弟が揃って参加しており、バックの演奏はPOTEMKINEに似たクールでジャージーなサウンドである。Alain Condaのヴォーカルは、フランスならではの説得力!?があり、一見ミス・マッチの様にも思えるが、これが実に絶妙なマッチングを見せ、独特の音世界を作り出している。ジャズ・ロック・ファン、カンタベリー・ファン、シンフォニック・ロック・ファンの何れもが抵抗無く聴ける数少ない良質な作品と思われる。尚、彼は知る限りで他に「Les Barques De Papier」と言うアルバムを1986年に発表している。　（中島洋一）



ALAIN MION
Pheno-Men
ＬＰ/Coravage 66106　'84年

コルテックスのメンバーとして３枚のアルバムをリリースしたアラン・ミオンが、グループ解散後に発表した唯一のソロ・アルバム。全８曲、いずれもミオンのキーボード(ほとんどがエレクトリック・ピアノ) を前面に押し出した軽快なジャズ・ロックである。コルテックス時代からフランス臭さを感じさせない、アメリカのフュージョン風の音作りをしていたが、本アルバムでは音が増々洗練され、クールでテクニカルなものになっている。バックグラウンド・ミュージックとしても十分聴けるセンスの良いサウンドであるが、超一流のジャズ・ロックのみに見られる独特の緊張感や強い個性は当然ながら感じられない。フレンチ・ジャズ・ロックとは別の視点で評価すべき音楽である。　（賀川）



ALDO ROMANO
Il Piacere
ＬＰ/Owl 015　'79年
CD/Owl 015 CD 3800152

イタリア出身。フレンチ・ロック最初期のグループ、トータル・イシューの一員だった。その後はジャズ・シーンに戻り、かなり有名。ソロ作も複数あり、結構面白い名前もいたりするのだが、必ずしも芳ばしい出来ではない。が、この作品のみは別で、明らかにバルテルミと判るトップ・ナンバーの重々しくも切迫した出だしから引き込まれる。そう言った硬質のナンバーの他、南欧の柔らかな光を思わせるアコ・ギとアコーディオン(M・ポルタル)のデュオなど変化のある作風。硬軟両方への振幅も効果的だが、それ以上に全体を覆う翳りが作品を引き締めており、その感覚故に一瞬の閃光のような激しさも引き立つ。彼の出自と共演陣の持ち味がこの上なく上手くブレンドされた仕上り。　（中西）



ALPHA DU CENTAURE
Contact
L P/Spirales SRP 3318　'79年

フレンチ・ロック・シーンにおける伝説のグループ、コミンテルンのドラマー、ジル・ロベールによって'75年に結成されたアルファ・ドュ・サントール。その後、幾多のメンバー・チェンジを経て、本ファースト・アルバムを発表した時にはロベールもグループを去っていた。本作品を録音したg, ac-b, dsという編成はジャズ・ロック・グループとして一風変わったものと言える。３人のプレイを個別に見ると、Ｊ．Ｐ．リシャールのギターはロック・サウンドに位置するもので、かすかながらもロバート・フリップの影響を感じさせる。一方、O.コクランのウッド・ベースはジャズ色の濃いものとなっている。これらにJ.ディキンソンの典型的ジャズ・ロック・タイプのドラムが加わり、完成度の高い作品に仕上っている。　(賀川)



ALTAÏS
Altaïs
12"Single/1021　'86年

マグマ影響下のバンドと言うのは結構多いが、その中でもこれはソックリ大賞的な存在だろう。レーベル名が無く、ジャケ裏のコンタクト先もメンバー個人の物と言った状況から全くの自主製作だと思われるが、その分サウンド・プロダクションが甘い。またコピー的な楽曲、演奏共に本家と比較された場合、どうしようも無い程の格差があるのは同時代のシンフォ系と共通する所。「Enneade」収録のＡ面は中期マグマの、Ｂ面はヴィドルジュ期のゴーティエ辺りの影響下に有る音。一作で解散後、ベースは同傾向の新バンド結成を目指したが、消息不明。　(中西)



ARCANE V
Morron Dingue
L P/Exit ARC 001　'79年

アルカン・サンクの唯一の作品。ドラムス、管楽器（サックス、クラリネット、フルート)、ギター、ウッド・ベースの４人による演奏は、ジャズ色が強いといった程度のものではなく、完全なジャズと言っても全く問題がない。モダン・ジャズの手法によるアドリブ主体のテクニカルなプレイは聴き応えがある。しかし、よく聴くと、リズムやフレーズの一部にロックを感じることがある。彼らがロックにも興味を持っていたかどうかは分らないが、ロック、シーンとジャズ・シーンがスムーズに交流しているフランスならではの音とも言える。勿論ジャズとしてもかなりの力作である。彼らは個性派のシンガーとして知られるAntoine Toméといっしょに活動していたこともある。　(賀川)



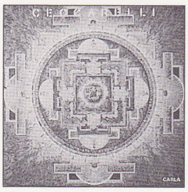
ANAÏD
Belladonna
L P/Anaïd 03 JM　'89年
CD/JMEC 1991

特異なジャズ・ヴォーカル作、と言うだけでは異和感もある。Emmanuelle Lionetの澄んだ歌声はジャズ/クラシックを吸収したスキャットふうのもので目立つし魅力的だが、抑制のきいたバック陣のプレイの造り出す暗目のトーンと緊張感が、彼女をひき立てて捨て難い。CD「Four Years」はデビューLP「Belladonna」を収録した形のセカンド・アルバムとなっているが、そのLPではヒュー・ホッパーがベースを弾いていたりする。包み込むような柔らかさがある反面で鋭敏さを感じさせるジャズ寄りのサウンドになっている。(松本)



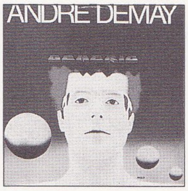
ANAÏD
Four Years
CD/JMEC 1991　'91年

ANAÏDはJean-Max Delva (vib, d, perc) とEmmanuelle Lionet (vo) をリーダー格とするジャズ・ロックのスタイルを持ったバンドだが、Lionetのヴォーカルをメインにフィーチャーしているため、いかにもユーロ・ロック的な味わいを持っていて、独特の音楽を生み出している。問題はそのメンバーで、'86年の結成以来多くのカンタベリー系ミュージシャンがバンドに参加。何しろ初代メンバーにヒュー・ホッパー(b)、パトリス・メイエール(g)、ソフィア・ドマンシック(kb)がいて、'90年にはホッパーからリック・ビダルフ(b,g)にメンバー交代している。２枚のオリジナル・アルバムとこのベストCDをリリース。「Belladonna」から全曲を再収録しているが、その内少なくとも５曲はトラック差し替えが施されている。　(坂本)



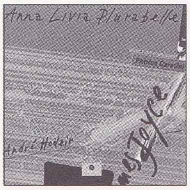
ANDRE CECCARELLI
Ceccarelli
L P/Carla CAR500 002　'77年

フランスのジャズ・ロック界ではセンス、テク共に最高峰にあるドラマー、アンドレ・セカレッリの初リーダー・アルバムである。'60年代のビート・グループ、ピラナ・サウンド時代からその卓抜したテクは、ジンジャー・ベイカー並みであったし、今となっては既に第一級と呼べるものである。Ｄ.ロックウッド、Ｊ.トップ、Ｓ.ヴァンデール他の豪華なメンバーを集めているが、Ａ④でのジャン・ポール・セカレッリとのドラムのかけ合いはすさまじく、その後に続くドラム・ソロも圧巻である。その後、セッション・ドラマーをしながら、JMSよりセカンド・アルバム「André Ceccarelli」(JMS-014) を発表した。　(中藤)



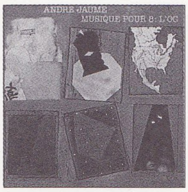
ANDRÉ DEMAY
Généric
LP/WEA 58115　'80年

Michel Ripocheのとの活動が知られるAndré Demayの恐らく唯一の作品。イタリアのLuciano Bassoあたりに似たシリアスな雰囲気のオープニングからただものでは無い実力が感じられる。SHYLOCKにも似たフランス的な色彩感はあるものの、全編に渡って緊張感溢れるシリアスで硬質なジャズ・ロック寄りの演奏が繰り広げられている。主役であるDemayのギター・ワークが非常に印象的。バックを務めるJannick Topを始めとするミュージシャンも実力派揃いで、スキの無いテクニカルな好サポートを見せている。プログレ衰退期の1980年代初頭の作品の中では傑出した完成度を持った作品と言えるであろう。　(中島洋一)



ANDRÉ HODEIR
Anna Livia Plurabelle
CD/Label Bleu LBLC 6563　'94年

André Hodeirは'21年生まれのジャズ・コンポーザー。'58年にはケニー・クラークが彼の作品集を吹き込んでグランプリを受賞しているくらいだから、どれだけ年季の入った作曲家か判るだろう。しかもジャズ・フィールドにとどまらず現代音楽畑でも活動し、'76年からはハーヴァード大学で作曲を教え、'80年代はIRCAMで調査研究に携わっている。そんなHodeirによって作曲されたこの大作はジェイムズ・ジョイスのテキストに基づく意欲作品だ。ふたりの女声によって導かれての進行はM・ウェストブルック作品を連想する。'65〜'66年の作曲とあって、いかにも書式が古めかしいものの、指揮をするパトリス・カラティーニの音楽とは相通ずるものがある。フランスのジャズ・オーケストラの歴史を証言している。　(坂本)



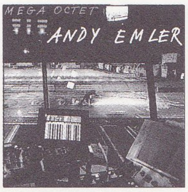
ANDRÉ JAUME
Musique Pour 8 : L'oc
CD/Hat Hut Records hat ART CD 6058　'82年

アンドレ・ジョームは'40年生まれのジャズ・サックス／クラリネット／フルート奏者。'70年代半ばより頭角を現わして来たが、これは時代とのスタンスを象徴する彼の代表作と言えそうだ。その名の通りの８人編成だが、トロンボーンが２人、チェロも２人というのが相当の変わり種。一般的な'70年代風フリー・ジャズの通念に添う部分を確実に内包しながら、どこかでそれを越えようとする運動性がこの編成から生まれていて、特にチェロのアンサンブルが演出する室内楽的な整合感はしきりに何かジャズならざるものを予兆する。ジョームのパートナーと言えるフランソワ・メシャリ(cb)とジェラール・シラクサ(perc)に対して、イヴ・ロベール(tb)の存在は見えない形で重要な役割を果たしているかも知れない。　(坂本)



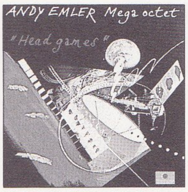
ANDRÉ JAUME QUINTET/TAVAGNA
Piazza Di Luna
CD/Musique Francaise D'aujourd'hui CELP. C 10　'89年

アンドレ・ジョームにはジャズとは別に民族音楽の研究を継続して来た経歴があり、それがジョームの音楽を一辺倒のものでなくしている。コルシカのポリフォニックな歌に接したジョームは大変な刺激を受け、コンサートで出会ったコーラス・グループ、TAVAGNAと共演し、Natoより「Incontru」を発表。第２弾として制作されたのがこのアルバムだ。似たような実験を行なっているノルウェーのヤン・ガルバレクに比べれば、まだ吹っ切れてない硬さがあって、必ずしも成功作とは言えないが、試みとしては面白い。ここでのジョームのバンドはギタリストとギター・シンセサイザー奏者を迎えており、更にドラマーがあのフレディ・シュトゥーダーだったりするので、バンド自身のプレイが案外聴き所かも知れない。　(坂本)



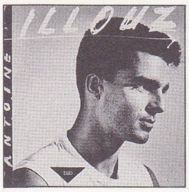
ANDY EMLER
Mega Octet
CD/Label Bleu LBLC6533　'90年

古くはF・モーズの作品に関わり、'80年代中頃からリーダー作を発表しているアンディ・エムラー(フランス人ではないらしい)だが、このユニットでの二枚を聴く限り、とんでもない才能の持ち主のようだ。現代のミュージシャンにふさわしく、過去数十年間のジャズ(・ロック)は勿論のこと、ワールド・ミュージックやクラシック等も消化、吸収した上ですっかり自分の音にしている。８人の演奏者による一糸乱れず、尚かつ若々しさと勢いにあふれた演奏、ゲスト格のベニヤト・アキアリ(バスク出身、近年この筋との関わりが深い)の故D・ストラトスに匹敵する声、いずれもぶち飛ぶような躍動感にあふれ、聴いているだけで熱くなる。純正ジャズ・ロック・グループとしては現役世界最強の部類。　(中西)



ANDY EMLER MEGA OCTET
Head Games
CD/Label Bleu LBLC6553　'92年

最近のフレンチ・ジャズ界の中心人物的存在になっている彼の'92年の作品。３人の管楽器奏者を加えた編成で演奏されるジャズロックは痛快きわまりなく、'80年代後半以降のヨーロッパ・ジャズ・ロックではトップの作品の中の一つとなるだろう。シリアスになりすぎず、イーズィーに流れすぎず、適度な緊張感を保ちながらスピーディなノリを持って進んでゆく。'90年に同様の編成で(vocalが一人多い)作られている前作と比べても完成度はこちらが若干上か？キー・パーソンは彼本人は勿論ギターのNguyen Le。彼もやはりこのレーベルの要注意人物。　(伊藤)



ANTOINE ILLOUZ
Sud
L P/Ecorce ECO AI 2 '85年
CD/Flat & Sharp 590192

アントワーヌ・イルーズはジャズ・トランペット奏者で、特にビッグ・バンドでの経験を多く積んでいる。そんな彼が初めて挑戦したソロ・アルバムが本作だ。参加したルイ・ウィンズベール(g)、ジャン=ピエール・コモ(kb)、ジャン・バールディ(b)、フランソワ・レゾー(ds)はいずれもアントワーヌ・エルヴェのもとで一緒に演奏していた仲間だ。また、ウィンズベールとコモのふたりはSIXUNのメンバーでもある。このクインテットで繰り広げるイルーズの演奏はマイルスを意識しながら、とてもきびきびして気持ちがいい。それを演出しているのがレゾーのドラミングで、実にいい味を出している。その後イルーズは「Wait !」('88)、「Mogadiscio」('91)とソロ・アルバムを発表している。 (坂本)



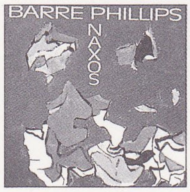
B＊A＊G
Sondain, L'Éléphant...
CD/Musea FGBG 4079 '93年

B＊A＊Gのサウンドは実に現代的なジャズ・ロックのノリを持っているが、出自を辿るとMALICORNEに辿り着く。'80年代後半からMALICORNEに加入しているキーボード奏者のPatrice Clémentin(別名Patrick Robin)と、ドラマーのJean-Pierre Arnouxがメンバーとして加わっており、その絡みでだろう、ジャケットにはGabriel Yacoubのコメントが記載されているほか、Yacoubの曲も採り上げられている。確かに背景にトラッドが存在している深みのある音楽であり、近年のMALICORNEの音楽には通じるものがあるものの、この音楽は最早トラッド側から捉えるべきものではない。何と言っても魅力的なのがまるでDavid Tornを思わせるNicolaï Van Mingoのギター・プレイ。Torn周辺の音楽に惹かれるファンは必聴。 (坂本)



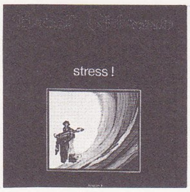
BAROQUE JAZZ TRIO
BJT
L P/Saravah SH 10 004 '?年

J.C.Capon, P.Combelle,G.Alexandreによるトリオ。チエンバロ、チェロ、タブラという基本編成によるジャズ・トリオだが、当然こうした楽器編成なだけに毛色が違う。これでフリーに走れば、相当おもしろかったかもしれない。意外と曲はオーソドクス。それでも所々ジャズから離れたなにやら怪しい雰囲気がかもし出される。うっすらと覆い重なるようなアコースティック系のサウンドになっている。アンリ・テキシエの'70年代初期のアルバムなんかに通じるか。ジャン・シャルル・カポンのチェロが鳴れば、まさしくこちら向きか。加えてどこかエスニックな臭いもほのかにする。それでチェンバロ・リードなのだからおもしろい。'60年代終り頃か'70年代初めの録音だと思う。 (松本)



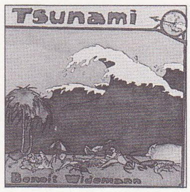
BARRE PHILLIPS
"Naxos"
CD/CELP Musiques CELPC14 '90年

勿論フランス人ではない。アメリカ出身。一般的にはザ・トリオ、あるいはECMでの諸作（実は極めてこちら向き）で知られるが、他にも世界各地で様々な形態／面々での活動がある。文字どおりの越境人。元々は映像作品に付せられた物に手を加えた録音。娘（？）のクローディアを除くsax、g、keyの三者がフランス人。クローディアの虚ろな声や本人の弓、指弾きされるベースの落ち着いた音色に各人が色を付ける。空間的に、感覚的に、直情的に、あるいはそれらが同時に進行するノン・ジャンル・ミュージック。とは言え曖昧なままの何でもありでは無く、はっきりと自分の音を見捉えた上での明確さが通っている。イメージ豊かだが流されない音。それは彼のベース音の持ち味でもある。 (中西)



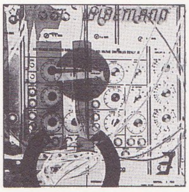
BENOÎT WIDEMANN
Stress !
L P/Ballon Noir BAL 13002 '77年

コバイアン・ストーリーのMAGMAの後期('74年11月から'81年9月まで、〝Üdü Wüdü〟直後と'78〜'79の一部を除いて)において名を馳せたというより鍵盤を担当する中心人物であった彼のソロ第1弾。基本的に一人でまとめているが曲によってはゲストにC.Bailly、G.Delacroix、J.P.Fouquey、P.Gauthier等という豪華キャスト。静と動の入り交じり具合、基本的な楽曲のスタイル等J.P.Goudeの「Drones」に通じる部分が大きい、いや、あそこまで豪快ではないが。つまり、動の部分では〝Zeuhlフレーズ〟の匂いが感じられ静の部分ではミニマルっぽい味付けがしてあるというもの。作品全体の出来はなかなか練られていて聴きごたえ充分。 (伊藤)



BENOÎT WIDEMANN
Tsunami
L P/Ballon Noir BAL 13014 '79年

MAGMAとAlain Stivellの人脈のかけ橋になる共通重要人物、ソロ2作目。前作と同傾向のフレンチ・エレクトリックとZeuhlサウンドの融合。すっとぼけた可愛らしいイラストのジャケットからP.Gauthier「Bébé Godzilla」を思いだすが、もうちょっときめが粗くまとまり具合もバラけている。本作でもなかなか豪華なゲストを揃え、André & Jean-PierreのCeccarelli兄弟、Remy Dall'Aneseのリズムセクションを核にJean-Paul Fouquey等が参加して前作同様の軽快且つ良く練り上げられたエレクトリック・ジャズ・ロックを繰り広げている。彼のソロ名義の3作の中では最高作か？Zeuhl一派の中でも侮れない一枚。 (伊藤)



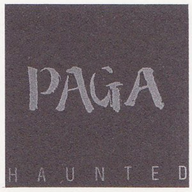
BENOÎT WIDEMANN
3
L P/CY Records 733614　'84年

メンバーが良い。K・Rust、D・Bertram、S・Marc、F・Laizeau。全体的に軽めのフレンチ・ジャズ・ロックなのだが、フレーズ自体は仲々マグマっぽかったりする。しかし彼はテクニックがしっかりしている。文句なしに上手い。マグマはキーボードに恵まれなかったと言われるが、そんなことはないぞ。知名度、評価は低いがマグマの影響云々を抜きに考えれば評価は変わるはず。彼のソロは「Stress！」や「Tsuami」がよく知られているが、やや明るめの音になった事以外はレベル的に同程度だろう。A①は前作「Tsunami」のA①のテイク違い。　(伊藤)



BERNARD PAGANOTTI
Paga
L P/Cream 120.185　'85年
CD/Colombia/Sony 46844-1

ヴェードルジュの解散はメンバーにとっても早過ぎた様で、その後の主要メンバーのソロ、ドローンズ/べべ・ゴジラ/パガ、いずれにおいてもヴェードルジュを意識した材料が見受けられるし、又、三作共にメンバーほぼ全員が参加している所からも想像が付くが、言いかえればバンドの中で、それぞれの個性が担っていた部分の延長と拡大とも言える。その中でもプレイヤーとしての個性が楽曲のそれと直結するのがパガノッティであり、結果あくまでも彼のベース・プレイを軸にする事により全体を通しての統一感と勢いを得る事に成功した。(ただし楽曲自体はしっかりとした構造を持つ物でソロを際限なく弾いている訳では無い)結果当作、'80年以降のこの手ではトップ級の出来となっている。　(中西)



PAGA
Haunted
L P/Blue Citron BLC 004　'88年
CD/Blue Citron LBLC 0004

ソロ名義第1弾(B.Paganotti/Paga)に続く、自己のグループのデビュー作。メンバーはK.Blasquiz、C.Salmieri、B.Lajudie。ソロ名義の前作が、WEIDORJE用に作られた曲などを収録していた為にマグマ・ファミリー的な要素がかなり強かった印象があるが、本作では彼の本質にある所謂ジャズ・ロック/フュージョンの要素が強く出始めている。それでもかなりの傑作であることは間違いなし、メンバー当人もライヴ・ペースはかなり寂しいがかなり本気で考えている編成だ。タイトル曲やB面を占める大曲などはなかなか良いが、Keyboardのセンスがイマイチなのが難点。カヴァーのロゴは書道家の父を持つB.Paganottiの妻、直子パガノッティによるもの。　(伊藤)



PAGA GROUP
Gnosis
CD/Bleu Citron BLC D016　'93年

ベルナール・パガノッティを中心とするパガ・グループの2作目。ベース、ドラムス、キーボード、サックス、ヴォーカル(クロース・ブラスキス)という編成は前作と同様である。演奏は非常にテクニカルであり、曲も凝っているが、ゆったりとした乗りはどちらかと言うとジャズのもので、熱いプレイを期待するジャズ・ロック・ファンにはピンとこないかもしれない。本アルバムをマグマやパガノッティのソロと同じ視点で見ることは作品の本質を見間違うことになるだろう。実力派ミュージシャンによる玄人向けの作品であり、多くの聴き所を持っている。　(賀川)



BIRELI LAGRENE
Inferno
CD/東芝EMI CJ32-5002　'87年

あまりにも若くして「ジャンゴ・ラインハルトの再来」としての名声をほしいままにしたジプシー・ギターの名手、ビレリ・ラグレーンだが、当然のようにジャズ・ロックの洗礼も受けていて、故ジャコ・パストリアスとの共演盤などでその一端を垣間みせていた。アメリカに渡ってBlue Noteレーベルと契約して以来、本格的に同時代音楽への接近戦を展開。彼の視野にロックは入っていないので、時として日和った印象も受けることがあるが、このBlue Note移籍第1作あたりはロック・ファンにもアピールするだろう。1曲目のタイトル曲はまるでHELDONのような曲調で迫るが、ドラマーが何と、ピエール・ムーランだったりする。残りのメンバーはいずれも錚々たるアメリカの凄腕ミュージシャン達。　(坂本)



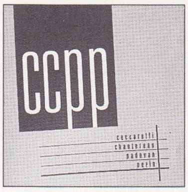
BRUNO LETORT
Asia
CD/ADDA 581102　'88年

フランスの音楽シーンにはワールド・ミュージックと連動しようとする傾向が少なからず見られ、ジャズ・ロックあるいはフュージョン・シーンも例外ではない。キーボード奏者／ギタリストのブルーノ・ルトールの本作は露骨なタイトルでも判るように、そうした試行を狙った作品に違いないのだが、それほどエクゾティズムに徹した内容ではなく、あまり大仰に捉える必要はないだろう。寧ろ、かなり売れ線を意識した音楽である所が多少リスナーを選ぶかも知れない。ルトールはディディエ・マレルブと親しいらしく、互いの作品に顔を出し合っている。パトリック・ゴーティエ、シルヴァン・マルクの参加も読者には気になるだろう。そのほかカリール・シャヒーンの人脈も参加。　(坂本)



BUNNY BRUNEL
Touch
LP/Warner Bras WEA 56636　'79年

チック・コリアとの活動でメジャーに出たベーシスト、そのファースト・ソロ。スタンリー・クラークやジャコ・パストリアスと一まとめにした方が一般的なのだろうが、このアルバムは実質的にはダニエル・ゴヨンヌとの共作で、またドラムがA・セカレッリということで、アメリカへ行ってしまった彼のフレンチな布陣による一作として挙げておきたい。フレットレス・ベースをメロディアスに鳴らし一切の破綻もない。正調。高クオリティ。そしてもうじきフュージョンという言葉の青空が見える。フレンチ・ジャズの一サンプルとしてとりあえず。　(松本)



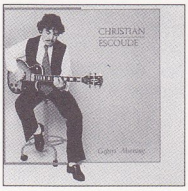
C·C·P·P·
C·C·P·P·
LP/Flamophone 2933 104　'76年
CD/FD Music 15912

グループ名のC.C.P.P.とは4人のメンバー、André Ceccarelli(ds)、Marc Chantereau (per, key), Christian Padovan (b), Slim Pezin (g) の苗字の頭文字を取ったものである。フレンチ・ジャズ・ロック・シーンの実力派として知られ、スタジオ・ミュージシャンとしての活動も多い彼らが、Daniel Goyone (p, cl), Alain Hatot (sax, fl) らこれまた一流のゲスト達と作り出した唯一の作品はフレンチ・ジャズ・ロック・シーンの底力を見せつける力作である。切れの良いリズムに乗ってサックス、トランペット、トロンボーン、フルート、ギター等がソロやユニゾンでテクニカルかつ余裕を持ったプレイを展開している。全体の印象としてはややファンキー過ぎる感もあるが、良質のジャズ・ロックに仕上っている。　(賀川)



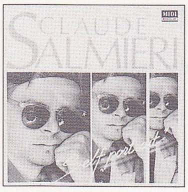
JEAN-PAUL CÉLÉA & FRANCOIS COUTURIER
Passagio
CD/Nocturne NPCD 509　'90年

ジャン＝ポール・セレア(cd)とフランソワ・クチュリエ(kb)のコンビは'80年頃から始まり、ジョン・マクラフリンのフランスでの活動を支えたことで一躍その名を世界に知られるようになった。以後も共演を続け、ドミニク・ピファレリ(vln)とフランソワ・レゾー(ds)を加えたカルテットにも発展している。ふたりの連名で少なからぬ作品が残されているようだが、ともすると軽いフュージョン・サウンドに流されることもあるので、聴く作品は選んだ方が賢明だ。その中で特に推薦できるのや本作。フランソワーズ・クブラー(vo, melodica)、アーマンド・アングスター(b-cl,ss,mdln)、ヴォールフガング・ライジンガー(ds)を迎え、タンゴから始まり、深遠な室内楽へと導かれて行く。チェンバー・ファンは特に要注目。　(坂本)



CHRISTIAN ESCOUDÉ
Gipsy's Morning
LP/JMS 013　'81年

ジョン・マクラフリン、パコ・デ・ルシアと日本で共演したクリスチャン・エスクーデ。ユーロ・ロック・ファンにはコンフリュアンスのメンバーとして知られている。彼は同じコンフリュアンスのメンバーだったジャン・シャルル・カポンとのデュオ等、数多くの作品を発表しているが、本アルバムでは元ザオのジャン・ミ・トゥルオンらと共演している。軽快なリズムをバックにエスクーデがメロディアスで鳴りの良いギター・ソロを披露、それをメロウなエレピがサポートするという展開が基本になっている。乗りの良い明快なジャズである。　(賀川)



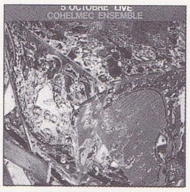
CLAUDE SALMIERI
Self Portrait
CD/Midi Mandoline MMJCD　01　'91年

元PAGAグループのドラマー。どうやら2ndソロらしい。フランソワ・レゾーを除いて、現在のPAGAの全員が参加している他、その方面ではジェラール・ビキアロ、イヴォン・ギヤール、マリア・ポプキヴィッツの名が見える。ベースの音が重いのが多少それらしいとは言え、基本的にはまともにフュージョン。楽曲/演奏共に達者だが、それ以上でも以下でもない。元々がそう言った人なのだろう。唯一ブラスキスとの共作曲⑨が、「Haunted」辺りに入っていてもおかしくはない仲々の秀作になっているので、首までつかったマニアなら探してもいいかも知れないが、そうでなければ（普通にフュージョンが聴ける人は別として）無理する事はない。　(中西)



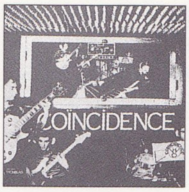
COHELMEC ENSEMBLE
Next
LP/Saravah SH 10007　'72年

'68年から約8年間、多くのステージに立ったコエルメック・アンサンブルであるが、レコーディングの機会には恵まれず、3枚のアルバムしか残していない。本作品は「Zebra」に続くセカンド・アルバムである。'60年代のフリー・ジャズ・ムーヴメントの流れを組むサウンドであるが、定型リズムを多用し、メロディアスでポップな演奏を取り入れるなど、フリー・ジャズという枠を越えたスケールの大きさを感じさせる。更に特筆すべきことは、ユニットとしてのアンサンブルが素晴らしく、音が非常に個性的かつ構築的なことである。メンバーの多くは、今もフレンチ・ジャズ・シーンで活動しているが、この時代の活動があまり話題にならないのは残念なことである。　(賀川)



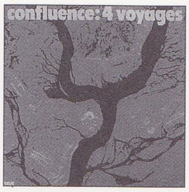
COHELMEC ENSEMBLE
5 Octobre 1974
LP/Le Chant Du Monde 74606〜7 '74年

コエルメック・アンサンブル最後の作品となったサード・アルバム。参加メンバーはJean-François Canappe(tp,flh,fl)、Jean Cohen(ts,as,a-cl)、Joseph Dejean(g)、François Mechali(b)、Jean-Louis Mechali(ds,per)の5人。フリー・フォームな演奏であるが、各メンバーのインプロヴィゼイションのぶつけ合いではなく、あくまでもグループとしての演奏にこだわっている。このため、それぞれのプレイはかなりフリーなものであっても、それが一つとなった時には明確な方向性があり、非常に聴き易い。グループとしての強い連帯意識なくしては不可能なことである。現代音楽、フリー・ジャズ、ロック、民族音楽を一呑みにしたかのような巨大グループは、'76年、メンバーDejeanの死によって消滅した。 (賀川)



COÏNCIDENCE
Coïncidence
LP/Tromblas RY 1133 '78年

南フランス、モンペリエ出身の4人組、コワンシダンスのデビュー作。翌年にはもう1枚のアルバム「Clef De Ciel」(Village 100 255 251)も出ている。メンバーはJean-Claude Llabador(kbd,g)、Jean-Pierre Llabador(g,vo)、Jean-Pierre Barreda(b)、Jacky Cataldo(ds)。ジャズ・ロック・タッチの内容だが、アコースティック・ギターやストリングス・シンセサイザー等を生かして、メロディックな面が強い。細やかでおおらかな印象は、地中海の明るさとも言えそうで、スペインやイタリアのジャズ指向のロック・バンドの持つ雰囲気によく似ている。知名度は低いが、クオリティのある音楽性と演奏力を持った好グループ。 (松本)



CONFLUENCE
4 Voyages
LP/RCA FPL 1-0132 '76年

コンフリュアンスのデビュー・アルバムであり、ライヴである。事実上のリーダーであるディディエ・ルヴァールを軸に織りなすフリー・インプロヴィゼイション群と、難解な曲構成が混在しており、混沌としたまま迫力のみが耳に残って終わる。3枚のパーセプションのアルバムよりももっと硬派なつきつめた音である。その後、彼らはより柔軟な音づくりに向かうが、それは、カポンとエスクーデの脱退によって拍車をかける。解散後、スウィング・ストリングス・システムやソロ活動を経た彼らの中でカポンはスタジオ・ミュージシャンになり、エスクーデはジョン・マクラフリンと来日したりして話題にもなったが、よりポップな音楽性に変化している。(中藤)



CONFLUENCE
Arkham
LP/RCA PL 37109 '77年

前作「4 Voyages」ではペルセプスィオの延長とも言えるシリアスなフリーが中心だったが、この2作目では作曲もされ随分と聴き易い。J・C・カポンのヴァイオリンチェロ、A・ルマルのパーカッションなどがシリアスな味を出すとしても、アコ・ギ、フルートなどとも波長が合っていて、しかも繊細さが引き出されている。それが時には軽味の4ビートに乗せたメロディにつながり、時にはメディティショナルにさえ響いて、このアルバムの独特のカラーになっている。各奏者間のバランスから生み出される整合感に、バンドのピークを感じる。 (松本)



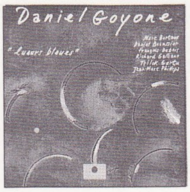
CORTEX
Troupeau Bleu
LP/Disques Esperance ESP 155524 '75年

コルテックスはアラン・ミオン (key) とアラン・ガンドルフ (ds) を中心に結成された。サード・アルバム「Pourquoi Pas」(Crypto ZAL 6458) は78年にリリースされている。本作では、アラン・ミオンの軽やかなキーボード・プレイを中心として、多彩なゲスト・メンバーのプレイが色どりをそえている。特に、ジャン・クロード・ダゴスティニのギターと、紅一点のミレイユ・ダルブレイのスキャット風のヴォーカルが素晴らしい。全体の印象は軽やかなメロディ・ラインを持つ透明感あふれるジャズ・ロックというものである。B面の大曲〝サバ〟(サバトのこと) は悪魔の宴というよりも妖精の踊りというような清らかな印象を与える。なお、サード・アルバムはかなりファンキーなものである。 (宇田川)



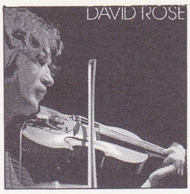
CORTEX
Vol.2
LP/Disques Esperance ESP 165 501 '78年

フランスのファンの間でもあまり知られていないコルテックスの2nd。参加メンバーの記載がなく、ジャケットの裏側にディスク・エスペランスからリリースされた他のレコードのジャケット写真が5枚も掲載されていることから考えて、当初より廉価盤として発売され、プロモートもほとんど行われなかったものと思われる (ほぼ同時期に1stもタイトルを「Mary＆Jeff」と変えジャケット・デザインを一新して、オリジナルと同番号で再発されている)。1st同様、一部に女性スキャットがフィーチャーされているがその重要性は低く、キーボード、ギター、フルート等によるジャズィな演奏が中心となっている。ジャズ・ロックとしては軽く多少イーズィであるが、テクニカルで聴き易いものと言える。 (賀川)



DANIEL GOYONE
"Luers Bleues"
CD/Label Bleu LBLC 6550 '93年

通算５作目。'70年代後半辺りから面白そうな所に顔を出している彼だが、いざリーダー作となると、もう一つ食い足りなくなってしまう。部分的には才能を感じさせるのだが、通して聴くと、例えばトリロク・グルトウの諸作のような勢い、流れに乏しく感じてしまう。なまじ色々な事を何でも出来てしまうせいなのだろうか。時にラテン・フュージョン、時にクラシカル、時にヘヴィなジャズ・ロック、全部きっちりとはこなしているのだが。とは言え、「こいつに主役はムリ」と見放すには惜しい出来は、各アルバム共に保っているので困る。とりあえずはピアノを中心にした引いた感じの音が上手く雰囲気を造っている本作辺りが代表作だろうか。地味でクラシカルな中にも結構きわどい音使いが面白い。（中西）



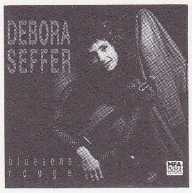
DAVID ROSE
Distance Between Dreams
ＬＰ/Gratte-Ciel CIEL-2007 '77年

ダヴィッド・ローズの唯一のリーダー・アルバム。バックはトランジット・エクスプレスがガッチリとかためている。本作は、いわゆるフレンチ・ジャズ・ロックの名盤であり、ブーヴィエ、ギュゼッリ、ペラトネールもさることながら、ローズの安定したテクニックに支えられた、鋭角的なプレイと表現力は、群を抜いているようである。近代楽曲風のＡ⑤を筆頭にクラシカルな要素の強い楽曲が多いが、リズム・セクションはジャズ・ロックのビートを強く打ち出しており、確実なローズのヴァイオリンが絡み合って見事なアンサンブルを表出している。トランジット・エクスプレス亡き後は、自己のバンド、ローズを結成、２枚のアルバムを発表し、その後は、ブルー・ローズという名で、ポップな音楽を演っていた。（中藤）



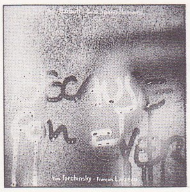
DEBORA SEFFER
Silky
CD/Label La Lichere CD LLL 157 '92年

ヨシコ・セファーの愛娘、デボラ・セファー（vln）は、ＺＡＯの再結成ステージへの参加、あるいは父親との共演、更には「Violin Connection」への参加等に頭角を現わして来ていたが、遂にここでソロ・デビューを果たすに至った。同世代のピアノ、ベース、ドラムの３人を率いての堂々たる演奏が既に新人のものではない。父親の音楽はすべて吸収した上で更に新しいジャズを追求しようという姿勢が立派。祝辞を寄せているＤ・ロックウッドを越える日も遠くないかも知れない。但し、時々余所見しているような所がちょっと気になる。（坂本）



DEBORA SEFFER
Bluesons Rouge
CD/Label La Lichere CD LLL 237 '94年

時に切れ味鋭く、時に優雅に、デボラ・セファーのヴァイオリンは様々な顔を見せる。豊かに表情を変える魅力的な女性のように。それを支えるＴ・マイヤール（Key）、Ｆ・ネルソン（b）、Ｌ・ロバン（ds）の溌剌とした演奏も特筆すべきだろう。中でも約半数の曲を手掛けたこのキーボーディストに注目したい。時折聴けるデボラのヴォイスも良い雰囲気を出している。ヨシコ・セファーの愛娘ということでなしに、一人の若手ヴァイオリニストとそのバンドの実力が発揮された好盤と言って差支えない。女性的な繊細さが息づく美的なパートではダヴィド・ローズ「Distance Between Dreams」を思い出した。ラストはＪ・ベックのカヴァー。ヴァイオリンがギター・パートをどうこなすか。面白いアイデアだが。（高山）



DENIS BADAULT/SIMON SPANG-HANSSEN
"Because Forever"
CD/Blue Line VR 057 CD '93年

初代O.N.J.のメンバーにて、四代目のリーダー、ドゥニ・バドーガ、O.N.J.の同僚サクソフォニストとの連名で発表した作品。この両者にベース、ドラムスを加えた編成で、音の傾向もO.N.J.でのそれと同様、基本的にはオーソドックスながら、若々しさ瑞々しさが冴える感覚で聴かせる。アップ・テンポの曲とバラードを適度に折り混ぜた構成で、どちらも的確で端整な演奏を聴かせるが、どちらかと言えば、前者のタイプの曲での歯切れの良さと、興が乗るにつれて音が内から溢れ出んばかりの様がダイレクトに出る様が印象に残る。ちなみに、ドラムスのフランソワ・レゾーはこの世界ではマグマ系の人として知られるが、今やフランスでは若手トップ・クラスのドラマーとして、あちこちと活躍をしている。（中西）



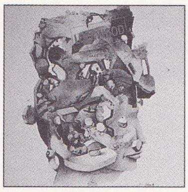
DENIS FOURNIER
Maë
CD/Label La Lichere CD LLL 197 '94年

近年のフランスのジャズ・ロック・シーンで興隆目覚ましいワールド・ミュージック系サウンドの代表格がドゥニ・フルニエだ。フルニエ自身は'54年パリの生まれのようだが、地中海音楽の強い影響を受けており、また本人はロバート・ワイアットの影響でドラムスを始めたと公言している。既に数枚のアルバムがあるが、まだ決定打という作品はなさそうだ。ここでは最新作を採り上げておこう。Nabil Khalidiのウードと Frédéric Tariのヴァイオリンがリード楽器として全面的にフィーチャーされ、Jean-Luc Ponthieuxのベースがフルニエのドラムスと共にリズムを支える。重くスピーディーなリズム展開はなかなかの迫力(もうひとりFrançois Corneloupのサックスは脇役に甘んじている)。一聴の価値あり。（坂本）



DHARMA TRIO
Snoopy's Time
LP/Société Francaise De Productions SFP 53.007 '70年

Patricio Villarroel(el-p)、Michel Gladieux(b)、Jacques Mahieux(ds)から成るトリオの、多分唯一のアルバム。まったく知られていないジャズ・トリオの一つ。内容は4ビートのジャズでそのままフリー・フォームへとつながるような演奏になっている。少しPERCEPTIONなんかに似た印象がある。1970年頃のフリー・ジャズの臭いが濃厚。ウッド・ベースとドラムのフリーな演奏にエレクトリック・ピアノがソロを入れるというのが基本パターンだが、ピアノにディストーションがかかっていることが多く、荒々しさが感じられる。それは3人が混然一体となってぶっかり合うといった印象だ。曲のほとんどもエレクトリック・ピアノ奏者が書いている。　（松本）



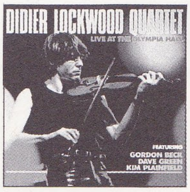
DIDER LOCKWOOD
Jazz-Rock
LP/Music Zag 773.001 '76年

一応D・ロックウッド名義なのだが共作が一つ有るのみで他はメンバーの曲（B・ブルネル4曲、兄のフランシス2曲、ゴーティエ1曲）によって占められているあたり、バンド作らしい。とは言えこの時期マグマ～ザオ～スルヤと忙しかった訳で継続的な活動をしていたとも思えない。それも道理でマグマ加入前に兄弟で結成していたVOLKOR(本作B①のタイトルでも有る)の前身だと言う事が確認された。幾分ラフでロック的な所も有る分SURYAのそれ程洗練されていない音傾向となっている。　（中西）



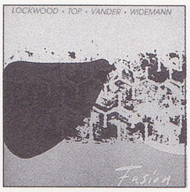
DIDIER LOCKWOOD
Live In Montreux
LP/JMS 011 '80年

'80年7月16日のモントルー・ジャズ・フェスティヴァルでの録音。Bob Malach(t-sax)、Jan Hammer(syn)、Marc Perru(g)、Bo Stief(b)、Gerry Brown(ds)との共演になる。1曲目等でスリリングな演奏をきかせてくれるほかは、和気あいあいといったリラックス・ムードで、フェスティヴァルらしい内容になっている。ロックウッドのソロ・パートを聴くとそれでもまだ角があるというかキーキー言った感触のものだが、これは彼の若さか周りの配慮によるものなのか。ロックウッドはマグマのヴァイオリニストだったがむしゃらの10代を過ぎて、海外のプレイヤーとの共演を重ね、今やフランスを代表するヴァイオリニストの一人でもある。そこそこ小気味よい彼のプレイが聴けるアルバムだ。　（松本）



DIDIER LOCKWOOD QUARTET
Live At The Olympia Hall
LP/JMS 040 '86年

「Magma Live」から約10年。あの超絶盤が録られた同じ場所でのライヴ録音。当時18才（18才／小僧だぜ、あのプレイが）だった彼も円熟味を増し、もはや独壇場。最近どうも日和っている彼だが、この頃はバリバリ。一発目からJ・ベックがヴァイオリンを弾いているようなもので破れかぶれのソロが凄い。そしてゴードン・ベックのピアノが年寄りらしく落ち着いた味を出せば応じて細やかな表現も見せる。とまあフレンチ・ジャズ界の新鋭ヴァイオリニストとして好き放題やってきた彼の足跡を追うも良し、今や一つの主流をつくる彼である。　（松本）



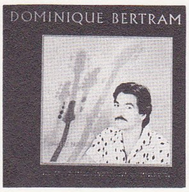
LOCKWOOD, TOP, VANDER WIDEMANN
Fusion
LP/JMS 015 '81年
CD/Polydor POL 2473 948

「豪華な顔ぶれの割に…」ということで人気のない作品だが、そこにこだわらずフレンチ・フュージョンの観点から見れば非常に良質な作品。D・ロックウッドのvlnは後半の小曲の方が際立っている。J・トップも弾きまくってはいないが彼らしい。ソロではけっこうマグマっぽいフレーズも演っていたB・ヴィドマンは、ここではそんなでもない。こうなるとC・ヴァンデールが普通すぎる。ドラマーとしての仕事をきっちりこなしたという感じ。このメンバーだったら…を期待する人は避けた方が良いが、作品自体は水準以上。でもこのメンバーなのに…。　（伊藤）



DOLPHIN ORCHESTRA
Prologue
LP/RCA PL 37112 '77年

我国においてはほとんど知られていないが、ドルフィン・オーケストラは4枚のアルバムを発表した、実力派のジャズ・ロック・グループである。本作品はRCAのバランス・シリーズの1枚としてリリースされたファースト・アルバム。リーダーのJeon-Pierre Debarbat(ss,as,ts)他、Frédéric Sylvestre(g)ら、計5人のメンバーが参加している。Debarbat、Sylvestreの2人はかなりの熱演であり、他のメンバーも良い演奏を披露している。ただ、いずれのソロもジャズとしてオーソドックスなもので、ソロとサポートに徹するバックというう演奏パターンも新鮮さに欠ける。また、グループとしての個性もあまりない。テクニカルなプレイに焦点を合わせて聴く作品である。　（賀川）



DOMINIQUE BERTRAM
Chinese Paradise
LP/String　33.858　'84年

　ネフェシュ・ミュージックからレトロスペクティヴ期のマグマを経たベルトラムは様々なスタジオ仕事の後、本作を発表したが、その経歴、参加メンバー（カッチェ、ヴィドマン、トップ、パガノッティ、シャントロー他）にもかかわらず音自体はジェフ・バーリンの1st辺りにも通ずるオーソドックスな物で、極端な個性は感じられない。B②ではトップ、パガノッティを迎えているのだが今一つ決まらず、むしろA面や中盤辺りでの達者な楽曲、演奏にこそ持味が出ていると思う。唯一ヴァンデールに捧げたラストの曲がそれらしい物になっている。　（中西）



DOMINIQUE PITARELY
Insula Dulcamara
CD/Nocturne NTCD　104　'88年

　先日のルイ・スクラヴィス・カルテットの来日公演でも一際鋭い演奏を聴かせてくれたピファレリ。私感では既にロックウッドをしのぎ、現役フレンチ・ヴァイオリニストの頂点にいるとの印象がある。出来ればもっと最近の作品を紹介したかったのだが手配がつかなかった。ここではその弓さばきの鮮やかさは聴けるものの、楽曲面での明確さがまだ出てはいないようだ。要所に（スクラヴィス同様に）過去の幅広い音楽を消化した上での感覚の冴えはうかがわれるものの、どこかはっきりと目標を見捉えきってはいない印象を与えてしまう。スケールの大きさはあるものの、流されがちとでも言おうか。尚、フランス以外ではマイク・ウエストブルックのバンドにもいた。この先必ず出て来そうな人物の一人。　（中西）



ÉDITION SPÉCIALE
Allée Des Tilleuls
LP/United Artists UAS　29965　'76年

　元トリアングルのマリウス・ミミ・ロランツィーニが結成したエディシオン・スペシアルのファースト・アルバム。彼らはこのほかに「Aliquante」（RCAPL 37069）'77年、「Horizon Digital」（RCA PL 37215）'78年、と2枚のレコードをリリースしているが、これらジャズ・ロック指向の3枚のアルバムの中で本作品は最もロック色の濃いものとなっている。ロランツィーニのギターは多少ハードなものからメロディアスなものまでバラエティに富み、バルスト（彼女のヴォーカルも良い）のセンスあるキーボード・ワークとともに曲を盛り上げている。また、インストのみの1曲を除きすべての曲においてヴォーカル又はコーラスが効果的に用いられていることも特筆に値する。このアルバム以後、彼らは更にジャズ色を強めていく。　（賀川）



ÉDITON SPÉCIALE
Aliquante
LP/RCA PL　37069　'77年

　EDITON SPÉCIALEはもう一つのフレンチ・ジャズ・ロックの系譜ーMAGMA人脈に連ならない一派ーを代表する名グループだった。この2ndはインストゥルメンタル・パートの比重が増した事もあり、有名な1stあたりと比べると幾分地味な印象を受けるが、その構成やアンサンブルもまた緻密さを増している事もお忘れなく。時折見せるゴリ押し的なロックっぽさも含め、リズム・セクションは力強いが軽やかさを失う事はない。その上でテーマやソロを奏でるLorenziniや麗人Ballesterのプレイはセンスの良さを感じさせ、飽きの来ない味わいはまるで古い友人との楽しい語らいの様だ。彼らが遺したアルバム、そこには大向う受けする派手派手しさこそないものの、いつの時代にも色褪せる事のない輝きがある。　（山田）



EDITION SPÉCIALE
Horizon Digital
LP/RCA PL 37215　'78年

　元TRIANGLEのMimi Lorenziniが結成したÉDITION SPÉCIALEの最後のアルバム。フランスのジャズとロックを掛けわたすバンド。エンジニアは、ローラン・ティボー。アグレッシヴな展開の速いリズム・セクションにユニゾン、バッキングしてミミ・ロランツィーニのギター・プレイやMireille Bauerのヴィブラフォーン、マリンバ・プレイ等が絡むスリリングな曲調が特徴。打楽器奏者が二人いるということもあって、手数、音数が多く、曲の活発さに拍車をかける。とりわけミレーユ・ボーエルはバンド・サウンドの装飾部でありながら特色にもなって、数多くのジャズ・ロック・バンドからÉDITION SPÉCIALEの性格を浮き出たせている。　（松本）

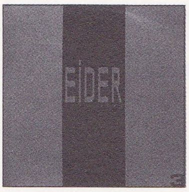


EIDER STELLAIRE
Eider Stellaire
LP/K　001　'81年

　エデール・ステレールのファースト・アルバム。ギター、ベース、ドラムス＆ピアノの3人を中心にシンセ、フルート、パーカッションが曲ごとに参加。6人のミュージシャンによって作られた。サウンドの特徴は重々しい力強いリズムにある。スピーディでややハードなギターも小気味よい。多少荒削りな面もあるが逞しく緊張感のあるジャズ・ロックである。オリジナル・ジャケットの他、セカンドのジャケに「1st Album」と書かれたシールを貼ったものもある。セカンド以降、音はより洗練されたが、その分、力強さがやや後退した。　（賀川）

EIDER STELLAIRE
3

L P/Musea FGBG　2009　'87年

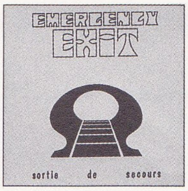


アルバム・タイトル通り、エデール・ステレールの３枚目の作品である。10年近いキャリアを誇る彼らの演奏は無駄がなく安定しており、アンサンブルも極めて良好である。ベース、ドラムス、エレクトリック・ピアノによる小気味よいリズムを受けてのギター・ソロは伸び伸びとしており饒舌でもある。キーボードの的確なプレイはサウンドをより広がりのあるものにしている。現在のフランスのジャズ・ロック・シーンにおいて傑出したグループの１つであることは間違いないが、演奏があまりにもスムーズなため、作品全体の流れがやや単調になってしまっているのも事実である。こうした弱点を克服するためにはより変化に富んだ曲作りが必要であろう。

（賀川）

EMERGENCY EXIT
Sortie De Secours

L P/Pôle 0015　'76年



FLUENCE,MAHOGANY BRAINのセカンド、PATAPHONIEのファースト、POTEMKINの「Foetus」等、個性的な作品を数多くリリースしたPôleレーベル最後の作品。同レーベルのほとんどの作品がTapiocaから再発されたにもかかわらず、何故か本作品はその対象にならなかった。グループはギター＆ヴォーカル、ベース、ピアノ、ドラムスから成り、本アルバムが唯一の作品。多少なりともハットフィールド＆ザ・ノース的雰囲気を持ったジャズ・ロックで、ジャズィなピアノ、メロディアスなギター、暗めのフルート（ゲスト）ら、全員がテクニカルな演奏を展開している。曲作り、アレンジが今一つのため、音に厚みがなく、ややぎくしゃくした感もあるが、聴き所の多い作品である。

（賀川）

ERIC BARRET QUARTET
Eric Barret Quartet

CD/Carlyne Music CARCD 16　'89年



エリック・バレットはフランスの中堅所で活躍するサックス奏者で、フランソワ・ジャノーの率いた初代O.N.J.に参加。また、O.N.J.の２代目リーダー、アントワーヌ・エルヴェとの共演も多く、ANTOINÉ HERVE BIG BANDやBOB 13に参加していた。リーダー・アルバムが何枚あるかは知らないが、本作に関して言えば、堂々たる内容であり、充分に主役を務められる人材だ。このカルテットはギターを含む編成で、そのギタリストがマルク・デュクレと来れば期待度が高まるのも必然だろう。バレットもウィンド・シンセまで駆使し応戦。デュクレ客演作として楽々の及第点をクリアしている。ピーター・グリッツはセファー＆ケスラーの「Monk For Ever」やフランシス・ロックウッド作品に参加していたドラマーだ。

（坂本）

ESKATON
Ardeur

L P/Musique Post-Atomique E-38001　'80年

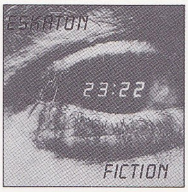


エスカトンはローザンベール兄弟とアンドレ・ベルナルディを中心としたグループで、今までにアルバム２枚、シングル１枚、テープ１本をリリースしている。マグマの影響を強くうけているが、マグマほど重いリズム・パターンは持っていない。歌詩の内容も重々しいものなのだが、二人の女性がスキャット風にフランス語で歌うためか、軽やかさすら感じる。デビュー・シングルでは生硬さがみられる部分もあったが、このアルバムでは音が厚みを増し、曲の進行もスムーズになっている。B面の曲においてマグマのジャニック・トップ風のベースが聞こえるなどオリジナリティに欠ける部分もあったが、セカンド・アルバムではそうした欠点は改善され、より軽い感じを受ける反面、洗練された内容になっている。

（宇田川）

ESKATON
Fiction

L P/E　38301　'83年

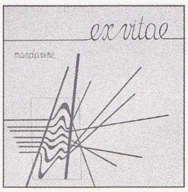


メンバーは不変だが、G・Rozenbergがギターを多用する等、役割分担には変化が見られる。この２ndを一言で言えば、「水準は高いが、１stの魅力には一歩譲る」。理由はミディアム・テンポの曲が多くなった事と、あらゆる場面で機能していたソプラノ・デュオの位置づけが「２人のヴォーカリスト」に変わった事だ。冷たくソリッドなリズム・セクションの切れなど聴き所は多いが、フレンチ・アヴァンギャルド系特有のメタリックで無機的な質感と日本人との相性を考えれば評価は望み薄か（それだけ１stが傑出していたとも言えるが）。尚、'86年録音の小品（１stと本作の中間的な仲々の出来）がMuseaの「Enneade」へ収録され、一時３rdの情報もあったが、リリースされる事なく現在に至っている。

（山田）

EX VITAE
Mandarine

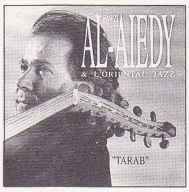
L P/EV 1　'78年



リモージュのグループ、エクス・ヴィタエの唯一の作品。ベース、ギター２人、管楽器、キーボード、ドラムス、ヴァイオリンという比較的大きな編成である。メロディアスで軽快なジャズ・ロックからメローなジャズ、フリー・フォームなものまで、うまく組合せて、変化に富んだ音作りをしている。聴く者を釘付けにする恐しいまでの緊張感や圧倒的存在感こそないが、曲作り、アレンジ、演奏技術、アンサンブル等、いずれもかなりのレヴェルにある。メジャー・レーベルに時として見られる、実力派ミュージシャンによるリラックスした雰囲気の作品とは対極にある、熱気に溢れた好作品であり、フレンチ・ジャズ・ロック・シーンの底力を見せつける１枚でもある。

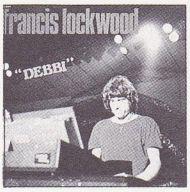
（賀川）

FAWZI AL-AIEDY & L'ORIENTAL JAZZ
Tarab
CD/Flat & Sharp FS.972　'92年



ファウジ・アル=アイーディはフランスのジャズ・ロック・シーンで活動しているイラク出身のミュージシャンだ。オーボエ、イングリッシュ・ホルンの名手だが、このリーダー作ではリュートと歌もたっぷりと聞かせてくれる。François Couturier(kb)、François Mechali(cb)、Francois Verly(ds)、Patrick Buchmann(d)等の実力派ミュージシャンが全面バック・アップしており、現在最も良質のフレンチ・ジャズ・ロック・サウンドを惜しげもなく披露している。しかし、何と言っても素晴らしいのはアル=アイーディ自身の超個性的な音楽だ。日頃馴染みのないアラブ系のサウンドのアイデンティティーをこれ以上ない説得力で表出させた殆ど奇跡的な作品として傑出している。100回聴いても飽きない名作。　(坂本)

FRANCIS LOCKWOOD
Debbi
LP/America AM 6161　'82年



D・ロックウッドの兄。キーボード奏者。'79～'80年にかけてマグマに在籍したが録音は残していない。これはファースト・ソロに当たる。K・ブラスキスいわく「彼には我々と同じ精神がないと感じた」というとおりのサウンドだ。決して悪い出来ではない。ただ面白味には欠けると思う。ハード・タッチのフュージョン、そのお決りのパターンを疑いもなく軽快に進む彼の資質は、あまりマグマの音楽とは関係がなさそうだ。バンド編成で録音されているが、アンサンブルはなくソロも平凡、曲がありきたりなメロディばかりにたよって一本調子。　(松本)

FRANÇOIS JEANNEAU
Éphémère
LP/Owl 07　'77年
CD/EMI 827179 2



フレンチ・ジャズ・シーン期待の新人と言われながらロックに走り、トリアングルに参加したFrancois Jeanneau。しかし、トリアングル解散後は再びジャズの世界に戻った。そんな彼が同じように一時ロック・グループ、トータル・イシューを結成していたAldo Romano、Henri Texier他、Didier Lockwood、André Ceccarelli、Michel Graillier等ジャンルを問わず活動するミュージシャンと作ったソロ・アルバム。サウンド的には完全なジャズであり、力強いリズム・セクションと奔放なアドリブを展開するJeanneauのサックスが印象的である。　(賀川)

FRANÇOIS JEANNEAU
Pandemonium
CD/Carlyne Music CAR C12　'88年
(録音'85年)



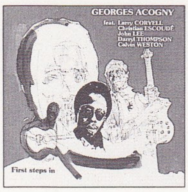
冒頭いきなリザオが大編成になったかのようなテーマから始まり引き込まれる。その後に続くピファレリの凄絶なヴァイオリン・ソロ、ここまでで勝負あり。基本的には現代的感覚によるビッグ・バンドで柔らか味のあるパートも多いのだが、とは言え適宜はさみ込まれるテンションの高いパートや集団疾走の迫力は聴きごたえがある。13名のメンバーの中にはM・デュクレ、M・ゴダール、J-P・セレア、F・クチュリエ等の名前も見える。この翌年ONJが創立され、ジャノーが初代リーダーとなるが、何か関係はあるのだろうか。当然、複数のメンバーが重なるが、付き合い、実力を考えればむしろ偶然と言う気もする。確か同名ユニットで他に作品が出ていたように記憶するが、そちらも聴いてみたいものだ。　(中西)

FULL MOON ENSEMBLE
Crowded With Loneliness
LP/CBS S 64267　'71年

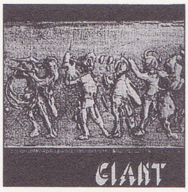


フランスのジャズ・シーンにその名を残すコエルメク・アンサンブル。そのメンバーであるJoseph Dejeanらの協力のもと、Claude Delclooが製作したフル・ムーン・アンサンブルの唯一の作品である。シェン・ノワールを思わす女性のトーキング・ヴァーカル、パーセプション風のフリーな演奏、ユニゾンによるマグマに近いサウンド等はロック、ジャズ、フリー、ミュージックといったジャンルに捕われることのないフランスのミュージック・シーンの自由闊達さをよく表わしている。フランスならではの幅広い音楽性を持った重味のある作品だ。　(賀川)

GEORGES ACOGNY
First Steps In
LP/String 33.851　'81年



'54年生、セネガル出身。'72年からフランスに住み、クリスチャン・エスクーデを通してL・コリエルやJ・マクラフリンと出会う。そう言った経歴を反映して、彼のデビュー作にはコリエルを始めとした米ジャズ及びMPS辺りで活動していた面々や現在ワールド・ミュージック・シーンで活躍している者も参加している。他にフランス系ではP・ゴーティエ、S・マルク、M・カッチエ、D・ベルトラム辺りがいるが、この辺はセッション・マンとしての参加か。勿論エスクーデもいる。で、音の方だが、'80年代前後のフレンチ・ジャズ・ロックらしい問を生かした音を響かせる作風に通じるが、もう少し一般的ではあるか。ゴーティエのソロ辺りに通じる感覚もある。地味目だが飽きのこない好作。　(中西)



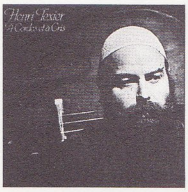
GIANT
Giant
LP/Inrevnational ZO201V　'?年

ジャイアントはジャンコ・ニロビックを中心に30人を越えるミュージシャンを擁したオーケストラ的セッション・グループである。ニロビックはホーン、ストリングス、リズムの各セクション及びコーラスを巧みにまとめあげ、流麗なシンフォニック・ジャズ・ロック・サウンドを作り出している。収録された5曲はいずれもハイ・レヴェルの出来であるが、やはり話題はSANDROSEのアルバムでも聴くことのできたA②であろう。ジャズィなホーンとクラシカルなストリングスが混り合う中、ジャン・ピエール・アラルセンが短かいながらもソロを展開する部分は特に印象的である。　(賀川)



GREEN SPACE
Trace De Vie
LP/Slim Production SP　88088　'88年

'88年に本6曲収録の45回転ミニ・アルバムでデビューしたGREEN SPACEは、キーボード、ドラムス、ギター&ヴォーカルの変則的なトリオ編成のグループである。音の方はいわゆるポンプ・ロック系で、ペンドラゴン、マリリオンと言ったイギリスのグループの強い影響が見られる。フランスらしさは希薄で、歌詩の大部分は英語である。しかしながら、あまたある同系統のグループの中では、曲構成、アレンジ、テクニックのいずれをとっても仲々の高水準にあり、一聴しただけで飽きてしまう様な作品では無い。惜しまれるのは自主制作故の録音の貧弱さで、やや奥行きに欠ける点であろう。本作以降の活動については、残念ながら不明である。　(中島洋一)



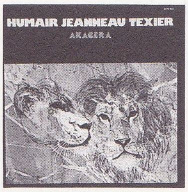
HENRI TEXIER
A Cordes Et À Cris
LP/JMS 06　'79年

アルド・ロマーノ(g)、ゴードン・ベック(p)、J・C・カポン(vlncello)、D・ロックウッド(vln)との録音。アンリ・テキシエはかつてTOTAL ISSUEを率いたベース奏者だが本業はジャズ。ここでもダブル・ベースにパーカッションにと忙しい。エスニック色を取り込んだ思いっきりシックなカラーは玄人好み。各奏者とも矢継早やなソロをとるが、それを覆ってみずみずしいような流れがあって、これが安っぽくなくていい。アコースティックでスウィング感のない落ちついたジャズだ。カポンの潤滑油ふうトーンも見逃せない。　(松本)



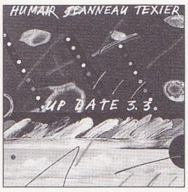
HERVÉ BOURDE
Superbe Démanagement
CD/APIA 191132　'88年

B・フィリップスの作品に参加していると言う事しか判らないSax/Fl奏者(補助的なシンセもやるが)。前半がS・ケスラーとのデュオ、後半がフィリップスとドラム奏者とによる作品で、いずれも同じフェスティヴァルにおけるライヴ。前半はクラシカルながらも感覚的なケスラーにエフェクト類を使用した強烈な音色を交えつつ、多彩な反応を見せる。一方の後半では、暗い切迫したトーンの曲を主にしているが、フィリップスの空間的な弓弾きの効果もあって、拡がりのある音。どちらにしても即興色は強いが、スペースの感覚を活かした音使いは整って聴える。基本的な色調を共演者に負っているとの印象があるが、出来自体は仲々。気にしておいた方が良い名前だろう。　(中西)



HUMAIR, JEANNEAU,TEXIER
Akagera
LP/JMS 012　'80年

フレンチ・ジャズの古株3名、ダニエル・ユメール(ds,perc)、フランソワ・ジャノー(sax,fl,b-cla,syn)、アンリ・テキシエ(contrabass,oud,perc)の連名による2作目。フリー・ジャズ、フォーク・ジャズ、エレクトロニクス等3名の様々な面が合わされたアルバムだ。全体の印象としては地味だが、よく聴けば落ち着いた中にもアグレッシヴな部分を見つけることができる。ジャズの範中だとしても、それはスペイシーなシンセサイザーがバッキングしていて、民族楽器の響きがあるものだ。フリーな部分があるかと思えば、ロック調の画一ビートを刻んでいる部分もあって少々焦点の定まらない内容でもある。やはりフリー・フォームな部分がおもしろい。　(松本)



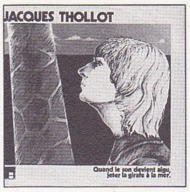
HUMAIR, JEANNEAU, TEXIER
Up Date 3.3
CD/Label Bleu LBLC 6530 HM 83　'90年

ダニエル・ユメール(ds)、フランソワ・ジャノー(sax)、アンリ・テキシェ(cb)のトリオによるアルバムは何枚かリリースされているようだ。いずれも相当なグレードを持った力作ばかりのようなので、アルバム選択には迷う所だが、逆にハズレがないので興味のあるファンには購入方針は立て易そうだ。3人ともに'60年代から活躍を続けているヨーロッパを代表するジャズ・ミュージシャン達であり、それぞれにリーダーを張っての活動も目立つ。そんな3人が全く手を抜かず五分で渡り合っているのだから、聴き応えは充分だ。しかもジャンノーが曲によってマルチ・レコーディングまで行なっているので曲の完成度も高い。甘さは一欠片もないジャズながら、とても判り易い音楽であり、取っ付きは悪くない筈。　(坂本)



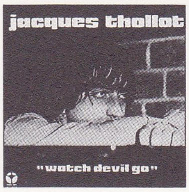
IVAN JULLIEN BIG BAND
Secret Service
LP/Riviera 521 173T　'71年

エマニュエル・ブーズの「Le Jour Où Les Vaches」において、ウィリアム・シェラーとともに、見事なアレンジを披露したイヴァン・ジュリアン。本来はジャズ・シーンのトランペッターであり、本アルバムではビッグ・バンドのリーダーとして20人を越えるメンバーを率いている。参加メンバーの中には、André Ceccarelli(ds)、Michel Grailler(p)、Tony Rosso(tp)らの名前もある。ジュリアンを中心とする各メンバーのソロで繋いでいくという展開はビッグ・バンド形式のジャズとしてオーソドックスなものであるが、曲作り、演奏（スタンダードなスタイル）ともに充実しており、聴き応えがある。一部音が舞う（ダンスではない）ような部分があり、ブーズの作品におけるアレンジに通じる雰囲気がある。　（賀川）



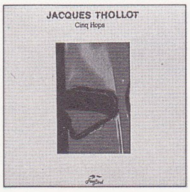
JACQUES THOLLOT
Quand Le Son Devient Aigu, Jeter La Girafe À La Mer
LP/Futura GER 024　'71年

'60年代にスティーヴ・レイシーやドン・チェリーの周辺にいたジャック・トロは、このアルバムで彼の思うところを始めた。ドラム、パーカッション、ピアノ、オルガンを使ってのソロ・アルバムだが、ジャズというよりはフリー・ミュージックと言ったほうが、ふさわしい内容になっている。様々な音の断片が小曲になって集まっている印象だ。多重録音という手法一つをとってみても、一つの像をつくるものではなく、音の位相を次々と飛ばしてコラージュ効果を際立たせたりする。そうしてほとんどの曲が何らかの音響効果をうみ出しており、仲々曲としての像が描けない。一ジャズ・ドラマーのソロにはまったくもっておさまらない意欲的な作品だ。　（松本）



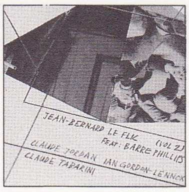
JACQUES THOLLOT
"Watch Devil Go"
LP/Palm 17　'75年

ソロ2作目は、François Jeanneau(sax, fl, syn)、Jean-François Jenny-Clark(ac-b)、Charoline Scott(vo)、A STRING QUARTETのゲストを入れて録音されている。1作目のアプローチは感じさせるものの、ゲストとの共演で随分と聴きやすくはなっている。中でもフランソワ・ジャノーの役割が大きく、時としてトロがドラム奏者となってフリー・インプロヴィゼイションになる場面もある。またジャズ・ヴォーカル・ナンバーがあったり、ジャズ・ベースの室内楽ふうの曲があったりと、傾向が幅広いのもこのアルバムの特徴。それでも全体から見ると実験色が強い。トロはこの後'78年に3作目「Resurgence」(Musica MUS 3021)をリリースし、続いてジャズ寄りの好作「Cinq Hops」をリリースした。　（松本）



JACQUES THOLLOT
Cinq Hops
LP/Free Bird FLY 03　'78年

ジャック・トロのリーダー作は4枚。これが4作目になる。かつては、S・レイシー、D・チェリーの録音に参加した経験を持つドラマーだが、リーダー作ではフリーではありながらも近代クラシックの無調感、そして静謐で時としてノスタルジックなニュアンスをひめたジャズ・サウンドを打ち出した。4作目はそうした方向性のジャズ・ロック寄りの内容でクオリティも一段と高い。ナイーヴという以上にアンニュイ。F・ジャノーがつややかないい味を出している。マグマ関連では「Kohntarkosz」他のM・グライエ（key）がいる。　（松本）



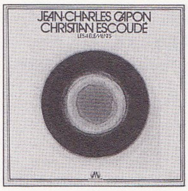
JEAN-BERNARD LE FLIC
Jean Bernard Le Filc(Vol.2)
CD/(Swi)Plainis Phare PL1267-5oCD　'90年

個人名では無く、スイスのグループ。元アンダー・コントロールの（あの）フルートとドラマーの二人が中心となり、トランペット奏者、さらにベースにバート・フィリップスを全面的に迎え入れて制作された。半数程の曲は、順次ソロを取って行くセッション風のジャズ・ロック（構成はされている）で、個人の芸風（特にクロード・ジョーダンのフルートはエフェクトやシンセを通して、ギター/シンセ的に響く事が多い）を除いてはまあ、普通なのだが、残りのバルトーク、シューベルト、エリントン、ハンガリーのトラッドをモチーフにした曲での、プログラミング、シンセを用いた大掛りな音造りは、冗談なんだか本気なんだか判断に困ってしまう。曲によっては、やたらと格好良いのだが。変な一枚。　（中西）



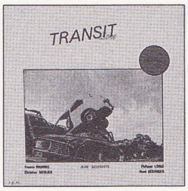
JEAN-CHARLES CAPON
L'univers-Solitude
LP/Saravah SH 10008　'71年

コンフリュアンスの重要人物の一人。ヴァイオリンチェロ奏者。このアルバムは、彼がペルセプスィオンにゲスト参加していた頃の録音で、相棒はタミアとの活動で知られるパーカッショニスト、ピエール・ファーヴル。硬派な二人による緊張感の強い一作で、カポンの以後の活動を見る上でも興味深い。両者半々といった割合だけにたっぷりと楽しめる。形態はフリーだがこの楽器の組み合わせだから音の余白、響きが随分に取り込まれ聴き易い。どちらかと言えばクラシック寄りのフリー・ミュージックで、ジャズ色は薄い。タイトルに沿うイメージだ。　（松本）



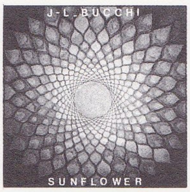
JEAN-CHARLES CAPON, CHRISTIAN ESCOUDÉ
Les 4 Éléments
L P/Musica MUS 3006　'76年

両者が参加したコンフリューアンスのファースト・アルバム発表直後に録音されたデュオ・アルバム。エスクーデにとってはこの後続くデュオ・シリーズの第一弾でもある。カポンのメロディアスかつゆったりとしたチェロとエスクーデの力強く音の輪郭のはっきりしたギターが融け合ったリリカルな演奏、コンフリューアンスを思わすフリー・フォームでインプロヴィゼイション主体の演奏、やや暗めのブルース調の演奏等、内容は変化に富んでいる。そのいずれもが高い完成度を誇っており、2人の幅広い音楽性とプレイヤーとしての並々ならぬ力量を示している。フランスのジャズ系ミュージシャンがジャンルに捕らわれない活動をしていることを示す好例でもある。'79年、続編とも言える「Gousti」を発表した。　(賀川)



JEAN GEERAERTS
Transit Zone
L P/r.p.m productions r.p.m jz 007　'86年

Nantes出身のグループDÜNのメンバーであったJean Geeraertsは、グループ解散後メンバーの一部を誘い本作を1986年にリリースしている。GENTLE GIANTにも似た個性的でテクニカルな演奏を見せていたDÜNと比べると、非常にリラックスした作品となっている。ロック色は無く、クールでアダルトな雰囲気を漂わせるパートとファンキーなパートからなるジャズが全編に奏でられている。John Coltraneのナンバーも取り上げられており、彼のジャズへの傾倒が窺える。テクニカルな面と編曲の巧みさには磨きがかかっており、完成度は高いが、ジャズ・ファン以外にはややきついのではないかと思う。個人的には好きなアルバムではあるのだが…　(中島洋一)



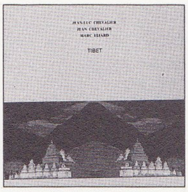
JEAN-LOUIS BUCCHI
Sunflower
L P/Trema 310.047　'78年

J・L・ビュキはスピード・リミットのキーボード奏者だったが、この唯一のリーダー作ではジャズ・シンフォニー寄りの作風を見せる。オメタクサリアとの共作('77年)でたっぷりと聴かせてくれたクラシカル・タッチのピアノ、そしてストリング・セクションを加えた部分のたおやかさが印象に残る。曲によっての傾向に大差があるものの、それらをトータルに包み込んだアプローチが読める。ジャズ・ロックを取り込んだクラシカル・ミュージックいった所か。部分的には随分としまりのない音使いも聴かせてくれる。J・トップも参加。　(松本)



J.L.CHEVALIER, M.ELIARD, J. CHEVALIER, P.VANDENBULCKE
J.L.Chevalier, M.Eliard, J. Chevalier, P.Vandenbulcke
L P/Cryonic MAD 3013　'85年

「Attahk」のツアーで鍵を握ったベーシストの一人、ジャン・リュック・シュヴァリエを筆頭にしたユニット。連名作だが本来はドゥロマデールでの唯一のアルバム。編成はg, b, ds & sax, fluteで彼はギターを担当している。J・L・シュヴァリエは'78年から'83年までマグマに在籍し、その後このアルバムを皮切りにジャズ・フィールドで活動し、同じく'80年代初期にマグマにいたマルク・エリャールとはその活動を共にしている。このアルバムはクリアー・トーンの妙にばらけたサウンドがフュージョンと言うに止まらず新鮮。ECM系に通じる。　(松本)



JEAN-LUC CHEVALIER
Tibet
L P/Cryonic MAD 3030　'86年

ジャン・リュック・シュヴァリエ名義だが、前作からフルート奏者が一人減って、Jean Popof Chevalier、Marc Eliardとのトリオ編成で録音されたアルバム。タイトルもジャケットも〝Tibet〞になってしまったからと言って、サウンドの傾向に変化はない。B①のタイトル曲に効果として、チベットふうのパーカッション、コーラスが味つけされた程度だ。ECM並みにクリアーな響きに、意外とこれは似合いそうなので、むしろもう少し積極的にアプローチしてほしかった気がするくらいだ。相変わらずのリラックスしたムードだが、音の響き方は繊細で、静けさとみずみずしさを感じせる。'88年にはJean-PhilippeBordier(el-g)を加えた４人編成で「Zantic Le Jazzman」(Musea FGBG 2022)を出した。　(松本)



JEAN-LUC PONTY
Sunday Walk
L P/(Ger.)MPS. 15045　'67年

クラシックのヴァイオリニストのような、短髪のジャケット写真が印象的なジャン・リュック・ポンティのファースト・アルバム。「新世代の名手」との評価を決定づけた記念すべき作品である。共演者はWolfgang Dauner(p)、Niels-Henning Orsted-Pedersen(b)、Doniel Humair(ds)の3人。一部、彼らのソロも加えながら、ポンティが伸び伸びと端整かつ流暢なソロを展開する。ピアノ、サックス等のジャズの花形楽器に決して引けを取らないテクニカルなプレイは、当時としては正に驚異的なものであった。アドリブを主体にした、60年代のジャズのメインストリームを行く演奏は、今聴くと時代を感じさせる音と言えなくもないが、演奏自体の完全度は非常に高いものである。　(賀川)



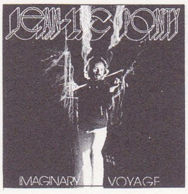
JEAN-LUC PONTY
King Kong
LP/Pacific Jazz 20172　'70年

ポンティ名義のフランク・ザッパ作品集（1曲ポンティ作品あり）。ザッパがA④に参加している他、ジョージ・デューク、アーサー・D・トリップ3世、アーニー・ワッツ、イアン・アンダーウッド等がバックを務めている。ポンティというとジャズ色の強い初期、フュージョン色の強い後期という印象があるが、音色的にも演奏内容もアラン・ソレンティの「Aria」での客演を思い出させるアグレッシヴな内容だ。本作はザッパの「Hot Rats」の流れを組むA面、現代音楽色が強いB面、という構成になっている。'70年という早い時期に、ザッパがB①のような現代音楽的な作・編曲法を身に付けていたことは驚くべきことだと思う。余談だが、表題曲は英のBABE RUTHもカヴァーしている。　(Chihiro S.)



JEAN LUC PONTY EXPERIENCE
Live At Montreux 72 Vol.2
LP/Les Disques Pierre Cardin　'73年

タイトルの通り、'72年のモントルー・ジャズ・フェスティヴァルでのポンティー(vln)率いるEXPERIENCEのライヴ録音だ。'60年代終わり〜'70年代前半に一斉に離合集散し合ってひとつの汎ヨーロッパ的なシーンを形成したジャズ・ロック・グループの代表格がこのEXPERIENCEだ。メンバーはあまり固定しておらず、セッション・グループとしての性格が強かった。かつてW・ダウナーやG・デュークらが在籍していたが、ここでのラインナップはヨアヒム・キューン(pf)、ナナ・ヴァスコンチェロス(perc)、オリヴァー・ジョンソン(ds)、J-F・ジェニー＝クラーク(b)と非常に強力だ。全5楽章の組曲1曲という構成が当時としては斬新だし、ポンティーの演奏スタイルも聴衆には相当刺激的に聴こえた筈だ。　(坂本)



JEAN-LUC PONTY
Imaginary Voyage
LP/Atlantic 18195　'76年
CD/(U.S.)Atlantic 19136-2

ジャン＝リュック・ポンティーが再度アメリカに渡り、'70年代後半にAtlanticに残した「Aurora」〜「Live」の5枚ソロ・アルバムは純正のプログレッシヴ・ジャズ・ロックとみなすのが正しい評価だ。すべてが古典的名盤と言い切れる。この「Imaginary Voyage」の聴き所は何と言っても20分に及ぶ同名の組曲。ポンティーがMAHAVISHNU ORCHESTRAから学んだものがあるとすれば、それはこのプログレッシヴ・ジャズ・ロック・スタイルの作曲法だったと思う。当時の彼の片腕だったアラン・ザヴォッド(kb)、後にGENESISのサポート・メンバーとなったダリル・スターマー(g)、ザッパのもとで活動をともにしたトム・ファウラー(b)、後にJETHRO TULLで活躍するマーク・クレイニー(ds)という顔触れが凄い。　(坂本)



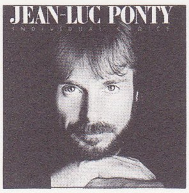
JEAN-LUC PONTY
Enigmatic Ocean
LP/　'77年

代表作。序曲＋3つの小品＋2つの組曲が統一感を持った流れの中に連なっており、ドラマティックな展開、バランス良いソロの配し方と各々の役割分担等、トータル・サウンドとしてのPontyの配慮が窺い知れ、結果、幅広い層へアピール出来る一枚となった。ヴァイオリニストとしての彼の技量は勿論の事、当時既にミュージシャンズ・ミュージシャンとしてカルト的人気を持っていたA・Holdsworth(g)を始め、D・Stuermer(g)、A・Zavodkeyという我々に馴染みの深い人達の活躍も光るが、何と言ってもR・Armstrong(b)とS・Smith(ds)という切れのあるリズム・セクションが出色の出来。クロスオーヴァー/フュージョンの持つポップさ、明快さが最も良い形で発揮された一枚として挙げておきたい。　(山田)



JEAN-LUC PONTY
Cosmic Messenger
LP/Atlantic WEA 50505　'78年

バンド形態であることが強調された、とてもまとまりのある内容である。Jean-Luc Pontyの演奏するエレクトリック・ヴァイオリンは、音の生々しさという点ではアコースティックのそれにかなわないものの、バック陣の演奏にはとても良くマッチしており、この作品の完成度を高めている。バック陣の好演も特筆もので、特にツイン構成のギター・サウンドが、この作品を一介のフュージョン的な作品とせず、ロック色の強いスリリングな内容にしていると言える。Jean-Luc Pontyはヴァイオリンの超絶プレイの他にも、オルガンやシンセサイザーもプレイしており、専任のキーボード・プレーヤーと共に作品に色艶を与えている。　(雨宮)



JEAN-LUC PONTY
Individual Choice
LP/Atlantic 80098-1　'83年
CD/Atlantic 780098-2

J・L・ポンティをフレンチ・ロック/ジャズ・ロックの文脈で捉えている人がどれ位いるか(GONGもそうだが)筆者は量りかねるが、そうしたことを抜きにしても、これは「Enigmatic Ocean」以来の快作である。再びA・ホールズワースが参加、他にG・デューク、R・ジャクソン、R・グリフィンの協力を得て、ポンティはヴァイオリンと同じ比重で緊迫感漂ようシンセをプレイ。同年のJ・ハマー、B・ブラッフォード、P・コリンズ参加のアル・ディメオラ「Scenario」も同傾向の作品だが、筆者はこちらを取る。〝世界平和の為のコンピューター呪文〟〝スピリチュアル・ラヴ〟というタイトルからして、精神的なメッセージが込められているのだろう。唯のフュージョンではないプログレッシヴな作品。　(高山)



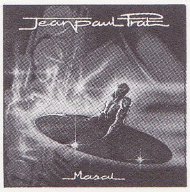
JEAN-LUC PONTY/DON SUGAR CANE HARRIS/NIPSO BRANTNER/MICHAL URBANIAK
New Violin Summit
LP/ '72年

伝説のニュー・ヴァイオリン・サミット。ジャン=リュック・ポンティを中心に４人のヴァイオリニストたちが繰り広げる夢の共演だ。アメリカから参加のシュガーケーン・ハリスはTHE MOTHERS OF INVENTIONのメンバー。ニプソ・ブラントナーはオーストリア出身のジプシー・ヴァイオリニスト。そしてマイケル・ウルバニアクはポーランド出身のジャズ・ロック・プレイヤー（現在も第一線で活躍しているのはポンティとウルバニアクのふたりだけだ）。輪をかけて凄いのがリズム・セクションの顔触れ。テリエ・リピダル(g)、ヴォルフガンク・ダウナー(kb)、ネヴィル・ホワイトヘッド(b)、そしてロバート・ワイアット(ds)。ワイアットなど本当はこんなに巧かったのかと舌を巻くほどの名演を聴かせる。（坂本）



JEAN MICHEL KAJDAN
First Steps
LP/Polydor 2393 249. '79年

多くのアルバムで脇役を務めて来たジャン・ミッシェル・カジュダンのソロ第一作目。裏ジャケにJ・ベックやL・カートンの名を挙げている事からも想像が付く通りフュージョン色が強い。全体に軽いと言う印象は強いもののロックウッド兄弟、J・M・トゥルオン、G・プレヴォー等の達者な演奏振りはさすが。中でもロックウッドのVlnはキレが有る。いつも目立たない位置におかれている彼も曲調に応じて前記両ギタリストに通じるソロを随所に見せるものの、技術はともかくセンスが平凡で前面に出るには華が無い。ここいら辺りが脇に回される原因なのだろうか。（中西）



JEAN PAUL PRAT
Masal
LP/Stand By 831201 '84年

重々しいベースにドラム、管、ヴォイスが序々に厚みを増して行くと言うオープニングのこの作品、最低のジャケのせいで全く無視されているのだが、マグマ系フォロワーとしては最右翼の作品といえる。ドラムスを叩くプラット自身を始め計14人の大所帯による音はヴィドルジュにマグマを振り掛けたと言った所。Ａ面パート１、Ｂ面その２という極端な大作なのだが、強弱を付けたドラミングや管を初めとし要所を締めた作編曲振りも堂に入った物。彼は本作発表後、宗教の道を選び、スタジオ仕事を含め、音楽から離れてしまったと言う。残念だ。（中西）



JEAN-PHILIPPE GOUDE, OLIVIER COLÉ
Jeunes Années
LP/Saravah SH 10064 '76年

ジャン・フィリップ・グードの１stアルバムで、パーカッションのオリヴィエ・コレとのデュオ。kbとpercのデュオというとイタリアのルスティケッリ＆ボルディーニを思い出すが、まるで正反対の地味な虚脱した音である。グードのセカンド「ドローンズ」（ラムセス2473-108）と比べると、いささか遜色があるが、処々では同レベルにある。このアルバムが何故「青春時代」と題されているのか説明されてはいないが、今頃になって聞くと、ノスタルジアを感じさせ、ピッタリである。その後もコレは実験的な領域で活動を続け、グードは、言うべくもない。純正フレンチ・エレクトリック・ミュージックの名手である。（中藤）



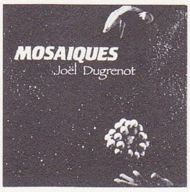
JEAN-PHILIPPE GOUDE
Drones
LP/Polydor 2473 108 '80年
CD/Musea FGBG 4102

マグマを受け継ぐように分派したWEIDORJEは、やがて解散して三つのアルバムを産む。一つがパガノッティの「Paga」、一つがゴーティエの「Bébé Godzilla」、そしてもう一つが本作品。参加メンバーを見るとヴェドルジュの全員、エルドンの面々、K・ブラスキス、M・カッチェ、D・ローズ、マルガン弦楽四重奏団他、とこの近辺を総ナメの感がある。これでろくな物にならなかったら怒るという人材だ。曲の傾向はバラついてはいても独特のジャズ・センスで貫かれ統一感はある。パガノッティのベースのうなる1曲目や8曲目、D・ローズ(Vln)の参加した4曲目等の出色の作がある。その一方で何曲かのソロで深味に欠ける演奏も散見してしまう。CDにはグード、ゴーティエ、ヴィデマン3連ムーグ・ソロ曲を追加収録。（松本）



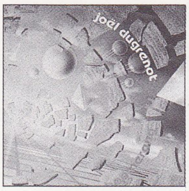
JEAN-PHILIPPE GOUDE
De Anima
CD/Hopi Mesa H.M.CD 006 '92年

テディ・ラスリー、ジャン・ルイ・ビュッキらと同様、近時の彼は映像関係の音楽の仕事が多く、自己名義の本格的アルバムとしては「Drones」以来約12年ぶりのものとなる。グードというと、ゲスト参加の作品も含めて、キーボード中心のフレンチ・エレクトリック・ミュージックのイメージが強いが、一転、今回は作曲者としての側面を強調したアコースティクでクラシカルな作品になっている。全15曲、全て彼の作曲であるが、彼自信が演奏者として参加している曲は４曲しかない。ピアノと各種弦楽器、それにクラリネット、バスーンを加えたもの、ピアノと弦楽器のデュオという３つの編成を基礎に、ジュルベルヌ調の演奏、サティ風のピアノ、多少なりとも実験的な演奏等が次々に登場する。（賀川）



JOËL DUGRENOT
Boomerang
LP/SPX 6839 '82年
CD/Mantra COM 6036

ブーメランはザオのオリジナル・ベーシスト、Joel Dugrenotを中心に'82年に発表された。いわゆるフレンチ・ジャズ・ロック・シーンのベテラン勢が集合している。David Rose(vl)、Claude Olmos(g、ex-MAGMA)Jean My Truong(ds、ex-ZAO)他合わせ7人が参加している。ZAOの「Z=フレ」('73)のラスト曲はDugmenotの作だが、この曲など他のCahenやSefferといった本当のMAGMA上りの人達の作品以上にそれに近いドラマチックな曲だったと記憶している。しかし本作では攻撃性やめまぐるしく変化する展開などはおさえられ、叙情的なメロディは全8曲に共通し、演奏者の比重も特定の人物に偏ることはなく、オーソドックスなセッションをとりおこなっている。このメンバーにしてはやや意外とも感じられる正攻法的なスタイルだが、余裕のうかがえる好作品といえる。 (松本修一)



JOËL DUGRENOT
Mosaiques
CD/Mantra COM 6037 '91年

D・クロス、F・フリス等の英国勢を含むメンバー、又、曲目からも'75年に録られた未発作の可能性が有るが、音色等付合しない点が幾つか有り判定しかねる。ともあれ本作は「Boomerang」同様引いた音の中にも丹念な作編曲とそれを活かす演奏が光る好作だが、クリアライトにも似た空間的な音をより絞り込ませた造りは一層地味な印象を与える。とは言えその完成度の高さと響きの冴えは聴き込む内に印象度を増す。尚、デュグルノにはカセット作「See」と未発作が他にも一作有りCD化が望まれる。 (中西)



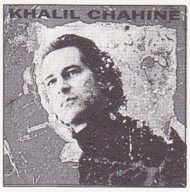
JOHN McLAUGHLIN
Belo Horizonte
LP/(U.S.)Warner Bros BSK 3619 '81年

カティア・ラベックとの関係でか、'80年代以降のマクラフリンはフランスを拠点の一つとしている。本作はその始まりの頃の作品で、F・クチュリエ、J・P・セレア、F・ジャノー、S・シーハンと言った腕達者な連中を集めている。もう一つ言えるのは、本作から近年のアコースティック、ギター中心の活動が始まっていると言う事。マハヴィシュヌやシャクティとは異なる軽やかなトーンが主になっているが、良く聴けば実際の極端さには何の変わりも無く、突出した存在である事は近作でも明らか。タイトルの通りラテン的な音使いをしていても、常に彼自身であり続ける。この演奏と音楽との一体故に彼は只の超絶ギター弾きとは遠く隔った位置にいる。出る音のリアリティ（リアリズムでは無い）が違う。 (中西)



JOHN McLAUGHLIN
Music Spoken Here
LP/ '82年

イギリスからアメリカへと渡り、MAHAVISHNU ORCHESTRA、SHAKTI、ONE TRUTH BANDと様々なフォーマットで世界のジャズ・ロック・シーンを震撼させて来たジョン・マクラフリンがフランスに渡って制作した2枚のアルバムのうちの2作目がこのアルバム(邦題は「吟遊詩人」)。ここで彼は現在の伴侶であるカティア・ラベック(ラベック姉妹としてクラシック界では大変有名なピアニスト)と運命的な出会いを迎えたのだが、そのカティアのほか、フランソワ・クチュリエ(kb)、ジャン=ポール・セレア(b)、トミー・キャンベル(ds)がバンド・メンバーとして定着している。マクラフリンはエレクトリック／アコースティック・ギターを縦横に操り、以後の彼の音楽の原点を正確に描き出している。忘れられた名盤。 (坂本)



KHALIL CHAHINE
Khalil Chahine
CD/Omd CD 1542 '94年

このカリール・シャヒーンなる音楽家について知る所は殆どない。アルバムの音楽に耳を傾ければ、もしかすると単なるイージー・リスニング界の作曲家か何かなのかも知れないが、時折見せる躍動的なワールド・ミュージック感覚が飛び抜けていて、背景に人並み外れた感性を持ったミュージシャンであることは確かだ。シャヒーン自身のクレジットがなく、作編曲を担当しているようだが、詳細は不明。演奏に参加したミュージシャンの中にはアンドレ・セカレッリ(ds, perc)がいるほか、フランス独特の音楽であるミュゼットの第一人者、リシャール・ガリアーノ(bandonéon)も彩りを添えている。そのほかはセッション系ミュージシャンが多い。荘重なシンフォニック・ミクスチャー・ミュージックと言いたい。 (坂本)



KOONO
Planet People
CD/Big World Music BW2004 '91年

クーノなる人物、よく考えたらどこのミュージシャンなのか全く判らない。'80年代後半からピレリ・ラグレーンのバンドでブレーンとして活躍しているキーボード奏者なので迷わずここに紹介することにしたものの、レコーディング・ロケーションから見ると、ドイツ出身の可能性もある。クーノのソロ・アルバムとしてはHot Wireからリリースされた「Senegal」('90)があって、実は本作と7曲が重複している（両アルバムとも10曲入りなので両方買わないと3曲がこぼれてしまう）。アルバムとしての統一感はこちらの方が高い。クーノは世界随一のジョー・ザヴィヌル・フリークで、ザヴィヌル自身が絶賛するほどのなりきり状態(お見事！)。尚、参加ミュージシャンの中にはPILI PILIのトニー・ラカトス(ts)がいる。 (坂本)



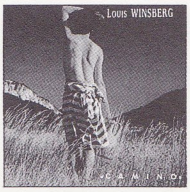
LAURENT CUGNY BIG BAND
LUMIÈRE
Dromesko
CD/Polygram EMARCY 514 300-2
'93年

ローラン・キュニーは'80年代末にめきめきと頭角を現わして来たジャズ・オーケストラのコンダクターで、少なくとも国外では晩年のギル・エヴァンスと共演した作品が遺作として登場したことで一躍その名を知られるようになった。O.N.J.を引き合いに出すまでもなく、近年のフランスのジャズ・オーケストラはその実力と優れた感性で世界でも稀な盛り上がりを見せているが、キュニーの登場はそのことを改めて裏付ける。フランスのジャズ・オーケストラの特徴は直接／間接にロック・ミュージックを（もっと具体的に言えばMAGMAを）通過していることにあり、キュニーの率いるLUMIEREにもその特徴がはっきりと現われている。と同時に確かにギル・エヴァンスの後継としての成果もしっかりとものにしている。（坂本）



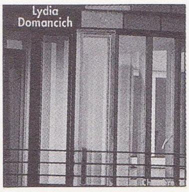
LORENZINI
Orchestra V
CD/Musea FGBG 4002　'88年

エディション・スペシアルのメンバーとして３枚のアルバムを残したMimi Lorenzini（g）とAnn Ballester（p）は、以前にデュオ・アルバム「Orchestra II」をリリースした。本ＣＤはその続編とも言うべきもので、「Orchestra V」のタイトルに示されているように、彼ら２人に加えて、Didier Malherbe(sax, fl)、Tatau Caetano(ds)、Emmanuel Binet（b）の３人がレギュラー・メンバーとして参加している。ジャズ・ロックと言うよりも、ロック的フィーリングを持ったジャズと言え、サックス、ギター、ピアノの各ソロはジャズとして極めてオーソドックスなものでメロディアスかつ軽快である。また、リズム・セクションと一体となったバッキングも巧みであり、ソリストを盛り上げている。（賀川）



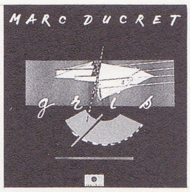
LOUIS WINSBERG
Camino
CD/Bleu Citron BLC D 009　'90年

ルイ・ウィンズベールは現在、フランスを代表するフュージョン・ギタリストの一人と言っていいだろう。アントワーヌ・エルヴェのもとから飛び立ち、同僚らと結成したSIXUNでコンスタントに活動を継続中だ。この辺の事情を知っていれば、間違ったリスナーを混乱させることもないだろう。くれぐれもシルヴァン・マルクやキルト・ルストの名前で妙な期待をしないように（ジャン=ジャック・アヴネルの名前でもっと変な期待をした人は確実に腰を抜かすだろう）。とは言え、１ギタリストの作品としてこれは結構よくできたアルバムだと思う。ジョン・マクラフリン・トリオのドミニク・ディピアッツァ(b)を迎えてのインター・プレイなど見事だし、ヴァラエティーに富んだ選曲も巧い。意欲あるミュージシャンだ。（坂本）



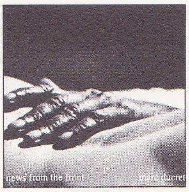
LYDIA DOMANCICH
Chambre 13
CD/Gimini Music GM 1007　'93年

ピプ・パイルの関連アルバムをリリースしているフランスのGiminiレコードは、カンタベリーとMAGMAの周辺をかすりながら、気になるアルバムを送り出して来る。既にドマンシック姉妹のアルバムは２枚ずつリリースされているが、これはリディアの３rdアルバム。ミケランジェロ、ペトラルカ、ダ・ヴィンチ、それにピプ・パイルの詩に基づいて制作された作品であり、ステラ・ヴァンデの歌が実にいい。ステラの声にオーボエが絡む様は譬えようもなく美しい。かつてのObscureレーベルの音を連想させつつ、ジャズやクラシック、民族音楽の要素が微妙に添えられ、不思議な音楽を生み出している。シンプルに聞こえるかも知れないが、かなり風変わりな音楽だ。オリジナリティーあり。（坂本）



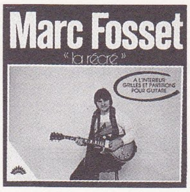
MARC DUCRET
Gris
CD/Label Bleu LBLC 6531　'90年

他の項でも書いたが、近年のフレンチ・ジャズ・シーンには優れたギタリストが多い。そんな中でもこのデュクレは最も良く知られた存在だろう。現スクラヴィス・カルテットの一員である他、JMTでも活躍している。本作はギター・トリオをベースに、各種管楽器、エレピ等が適宜加わる形を取っており、互いの間の取り方が優れた、落ち着いた中にも余情がこぼれ落ちるかのような雰囲気を中心に、ここぞと言う所で見せる抑制された激情と言う感覚が心地良い。カンタベリー系のテリエ・リピダル等といった表現も浮ぶが、適切かどうかは自信がない。どちらにしてもオリジナルな音。間の絶妙な取り方と、感覚の細やかさが強く印象に残る。（中西）



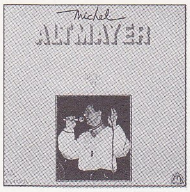
MARC DUCRET
News From The Front
CD/JMT Productions JMT 849 148-2
'92年
ポリドール POCJ 9022

ご存知、マルク・デュクレのソロ最新作。デュクレのソロは少なくとも「La Theorie Du Pilier」('87)、「Le Kodo」('89)、「Gris」('90)があって、これは４作目ということになるのだろうか。１stと本作の２枚は日本発売されている。Ａ・エルヴェの一派から出発したデュクレだが、エルヴェよりも寧ろA・エムラーのクインテットを経ていることの方が重要かも知れない。ソロ・アルバムも初めはパット・メセニー風だったのが、アメリカに渡りティム・バーンのもとで実践を積んだ現在、極めて鋭角的な演奏に様変わりしている。アメリカからハーブ・ロバートソン(tp, flh)を迎え、フランスからはイヴ・ロベール(tb)とフランソワ・ヴェルリ(perc)が参加。一見おとなしそうで、実は凄い切れ味の音楽。（坂本）



MARC FOSSETT
La Récré
L P/America AM 6153 '78年

Marc Fossetといってもよほどのファンでないかぎり、MAGMAの「Inédits」に参加していた事など知らないだろうが、元々は、オーソドックスなつまらないジャズ・ギタリストであった。この1stアルバムは、いわゆるジャズ・アルバムとは一味違う。というよりは、ジャズというカテゴリーから大幅にはずれたところに位置する。全体的にギターのオーヴァー・ダブで創られたこのアルバムは、ジャズのセンスがあちこちに顔を出してはいるが、プログレ・ファンの興味をひく内容のものだ。生粋のジャズギタリストがコンテンポラリーな感覚で弾き、多重録音を駆使して創り上げたこの譜面付小曲集は、やはり、不思議な作品と呼べるだろうか。（中藤）



MICHEL ALTMAYER
Troll Vol.2
L P/Musea FGBG 2010 '88年

J・P・Boffoらと組んでいた初期TROLLは瓦解、数年の後、ひとり残ったAltmayr（ds, vo, key, b）はNathalie Basst（vla）をパートナーにこのアルバムのレコーディングに入った。ゲストにはMAGMA人脈がズラリ。中でも第一線を退いたと思われていたK・Blasquiz（vo）の名は目を引く。本作の魅力はテクニカル（Altmayerはdsだけでなくkeyの腕前も光っている）でスリリングなジャズ・ロックと言うのは勿論間違ってはいないが、精神面での志の高さを忘れる訳にはいかない。そこには緊張もあるが、同時に平隠や感謝、希望があり、祝福がある。初のアルバムにして「Attahk」や「Offering」の高みにある作品と言えば分かる人は分かる筈。以後彼のTROLLとしての消息が跡絶えてしまったのは惜しいが。（山田）



MICHEL EDELIN
Flûtes Recontre
L P/Marge MAR 15 '80年

元トリオードと言う事で多少は知られているか。もっとも音を聴けばそんな事はどうでも良くなる。はっきり言ってトリオードの10倍は良い。リズム隊にF・Mēchali、F・Couturier等の達者な面々を揃え、その上を三人の（フルートを中心にした）管楽器奏者が乗る。適宜インプロヴィゼーション的な部分を挟みつつ、小刻みなリズムの上を軽快な管がリードして行くが、躍動感の中にもヨーロッパ的なシリアスな音使いを多用しているので軽く流されはしない。殊にピアノの才気あふれるバッキングは効果的。大まかに言えばジャズだが、計算された、あるいは自然発生的なアンサンブルの小気味良さと整然とした曲調の転換はロック・オンリーの人にも馴染み易い。（中西）



MICHEL GRAILLIER
Agartha
CD/ADDA 591041 '70年

あまり詳しくはないのだが、ミシェル・グライエはMAGMA以前からフレンチ・ジャズ・シーンで活動しており、現在も一線で活躍している。発表されている作品も決して少なくなさそうだ。因に彼の代表作「Dream Drops」（1981）は日本盤のCDが出回っている。ここに紹介するアルバムも再発CDであり、入手は易しそうだ。アルビー・キュラーズ（b）、ベルナール・リュバ（ds）を従えての完全なピアノ・トリオであり、ロック色など逆立ちしても出て来ないが、非常にしっかりとしたタッチが不思議にエロティックな味わいで、聴き惚れてしまう。（坂本）



MICHEL GRAILLIER
Dream Drops
CD/Owl Records OWL026CD 3800262 '82年
NECアベニュー A29C-1019

ミシェル・グライエの代表作として広く知られているアルバム。'88年に転落死したチェット・ベイカー(tp)の晩年のパートナーとして'86年の来日にも同行しており、本作ではベイカーの客演が話題を呼んだ。しかもピアニストのミシェル・ペトルチアーニまで参加しているとあって、読者には手が出しにくいかも知れないが、グライエ自身がピアノのみならず、エレクトリック・ピアノとOberheimに手を出していることもあって、非常に聴き易い。グライエのソロ・アルバムに僅かでもロック色を期待するならこの辺で手を打つのがいい。グライエは地味なプレイヤーだが、ソロ・アルバムではしっとりと自分の魅力をアピールしてみせる。J—F・ジェニー＝クラーク(cb)、A・ロマーノ(d)も参加している。（坂本）



MICHEL HAUMONT
Michel Haumont
L P/Disques Carrere 67791 '81年

殆ど全く無名と思われるミシェル・オーモンなるギタリストの'81年の作品。基本的には後のギターを中心とした、ニュー・エイジとフュージョンの中間を行く様な、静ひつさをたたえた穏やかなインストものである。ただし本作には、パガノッティが共同プロデュースの片方と全ベースを担当、全面的に協力している他、ブラスキスが全11曲中5曲、ゴーティエとアラルセンが3曲ずつ参加しており、彼らしい演奏を聴かせてくれる。また、唯一パガノッティ作曲のA⑥は、ヘヴィでこそ無いものの、まるでヴェドルジュの様な出来の曲。（森下　忠）

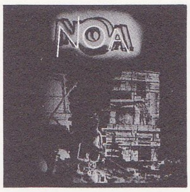
MUSIQUE NOISE
Fulmines Reqular



L P/Musea FGBG 2028 '89年

混声ヴォーカルとコーラスがメイン。しかもバックはピアノがリズムを刻んでゆく。ということでタイプとしてはオファリングに近いが、バックの演奏がより前面に出てくるため歌と演奏のバランスが良い。結構演奏はこなれているが曲自体のインパクトがやや弱いか。サックスがいい感じでアクセントを付けている。静かに流れる2曲目、速いパッセージの、3曲目、ベースが突き進むジャズ・ロックの5曲目等が中々良い。'70年代マグマの影響を受けたバンドは数あれど'80年代マグマやオファリングの要素を含むバンドは少ない。あっさり味だが。（伊藤）

NOA
Noa



L P/Noa 1 '81年

ギター＆ベース、フルート、女性ヴォーカル、サックス、ドラムス＆パーカッションの5人から成るノアの唯一の作品。各メンバーのソロを中心にしてサウンドを組立てている。このような場合、演奏者のプレイヤーとしての力量が作品の出来、不出来に直接的に影響する。いずれのメンバーもやる気を感じさせる中々の熱演であるが、内容的にはやや凡庸、平均的な作品と言える。女性ヴォーカルなら何でもという人やフリー・フォームでジャズィな音を好む人はそれなりに楽しめるだろうが、一般のファンの心を摑むまでには至っていない。（賀川）

O.N.J.(ORCHESTRE NATIONAL DE JAZZ) 86
O.N.J 86



CD/NEC アヴニュー A29C-1040 '86年

現在のフレンチ·ジャズの中核たるユニットO.N.J（フランス国立ジャズ·オーケストラ）、その名からも判る通り、フランス文化省の音楽部門に付属し、国家予算から補助金を受けて運営されている。とは言え、音楽自体は勿論ミュージシャンの自由裁了で行なわれており、我が国の(以下略)。リーダーは二〜三年毎に交替するようだが（それに伴いメンバーも入れ替る）初代のフランソワ・ジャノーのみ一年で交代している。また、歴代リーダー中、最も自作曲の割合が低いのだが、作品を通しての統一感は充分に造っている。後の諸作同様、国営と言っても博物館的な音では無く、エレクトリックの楽器を多用したコンテンポラリーなアプローチの中、欧州的要素を自然に取り込んだ見事な今の音。（中西）

O.N.J. 87
O.N.J. 87



CD/Label Bleu LBLC 6511 '88年

ONJの第2作。フランソワ·ジャノーに代わってアントワーヌ·エルヴェが音楽監督を務める。アンドレ·セカレリ(ds)、ニュイアン·レ(g)、アントワーヌ·イルーズ(tp)、フランソワ·ヴェルリ(perc)等の有名プレイヤーが大勢名を連ね、更にレコーディング·ゲストとしてディディエ·ロックウッド(vln)やディーディー·ブリッジウォーター(vo)も参加。エルヴェ自身の曲を中心に、チャールズ·ミンガスやセロニアス·モンク、ダニエル·ゴヨンヌの曲まで採り上げてる。ギル·エヴァンスからの影響は歴然としているが、フランスのジャズ·オーケストラの水準を証明する好アルバムだ。但し、ロック·ファンにお勧めは'91年の来日でフィナーレを迎えたC·バルテレミー期の作品なので、それをお忘れなく。（坂本）

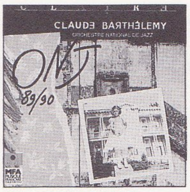
O.N.J.88/89
O.N.J88/89



CD/Label Bleu LBLC 6521 '89年

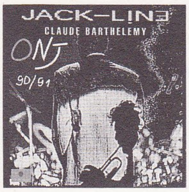
前作を聴いた限りでは、センス、力量共に優秀ではあるものの、シリーズ中最もコンテンポラリーな感覚が強い所が気になったのだが、それぞれメンバーのマイナー・チェンジをした二つの（二年分の）バンドを収めた本作では、基本的にはラテン等も取り込んだエレクトリック・ビック・バンド・ヨーロッパ風と言う路線に変わりは無いものの、バンドを手中にしたかのような確信が感じられる、撥刺とした音になっており、バンドは成長する物だとの意を新たにした。各曲ともコンパクトな長さに収められている分、前作のような決めの大作には欠けるが、その分機動性が増したのもプラスだろう。一人一人才気に溢れた演奏は異様なまでに歯切れが良い。素直に格好の良いジャズ・ロック・オーケストラ作。（中西）

O.N.J89/90
Claire



CD/Labal Bleu LBLC 6529 '90年

現在のフレンチ·ジャズ·シーンの充実振りを知るには、このONJシリーズ、及び周辺ミュージシャンを追って見るのが一番早い。無論、その他にもまだまだ沢山いるのだろうが、それだけでも新鮮な出会いがある筈だ。そう言った作品群の中でもクロード・バルテルミがディレクションした本作と次作は絶対のおすすめ。本人が「ロックのパワフルな要素を取り入れたかった」と語っていた通り、鋼のような強靱さを持ったアンサンブルが大迫力で押し迫ってくる様は、硬派な音使いをしていても圧倒的な躍動感を失わない。いわゆるビッグ・バンドと思って敬遠していると大損すると言うより、現代ヨーロッパ・ジャズのビッグ・バンドが（に限らずだが）、どれ程意欲的な活動を見せているかの好サンプル。（中西）



O. N. J. 90/91
Jack-Line
CD/Label Bleu LBLC 6538　'91年

フランス文化省のサポートによる国営オーケストラ、ORCHSTRA NATIONAL De Jazz。毎年一人リーダーが選ばれ作品を一任されるが、本作は昨年に引き続きギタリストのClaude Barthélémy。彼の人脈で集めた演奏者は集めも集めた22名。こちら側に馴染みのある名前は殆ど見かけられないが各人が名演奏を繰り出し、これをジャズの方法論で巧くとりまとめるバルテレミーの才能はやはり注目だ。全員一癖も二癖もある奏者のソロ回しと全体の楽曲の複雑な構成を上手くバランスをとってまとめ、全体の疾走感を加速させているという事は並大抵ではない。日本盤でも発売されているこのシリーズを聞くと音楽という文化に対する国家のスタイルの違いをまざまざと感じさせられる。　(伊藤)



O.N.J. DENIS BADAULT
À Plus Tard
CD/Label Bleu LBLC 6554　'92年

バルテレミーに代わって新たにO.N.J.のリーダーとなったのはキーボード奏者のドゥニ・バドー(Denis Badault)だった。残念ながら、バドーに関して知ることは殆どない。改めて参集されたメンバーは全部で16人。私の持っている半端な知識では大半が未知のミュージシャンで、これまでの顔触れと比較するといくらか小粒になった印象も否めない(重箱の隅をつつけば、オカイ・テミズの関係者とか、LUMIÈRE参加者とか、アンディ・エムラー・メガ・オクテットのメンバーとかは見つかる)。そんな中で一人目立っているのが、ドラマーのフランソワ・レゾー。この所レゾーはどこからも引っ張り凧の人気者だが、遂にO.N.J.からもお呼びがかかってしまった。紅一点Elise Caronの存在がもう少し引き立てば面白くなりそうだ。　(坂本)



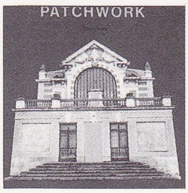
O.N.J DENIS BADAULT
Monk Mingus Ellington
CD/Label Bleu LBLC 6562　'93年

O.N.J歴代の指揮者の中でも、最もオーソドックスにジャズ・オーケストラとしての作品を作っているのが、このドゥニ・バドーだろう。その端整なアレンジメントからは、正統派の寵児と言う表現がピッタリくる。そんな彼による本作は、タイトルからも判る通り、モンク、ミンガス、エリントンの曲と彼等へのオマージュと言うべき自作曲を集めた物。と言う訳で、前記巨匠達の作品に親しんでいればそれなりの感想があるのだろうが、全くの門外漢たる私にも充分楽しめるのは、悠揚迫らず自然に進行する中にも溌剌とした現代感覚を交えたアレンジの魅力故。本当に豊かな音楽だと思う。普段追い求めている物とはまるで違っていても心に残る物はあるものだ。尚、レギュラー版での新作が既に出ている。　(中西)



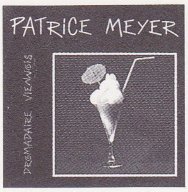
OKAY TEMIZ
Dervish Service
CD/(U.K.)Ton Son Ton Records
SNTCD 1020　'89年

オカイ・テミズはトルコ出身のジャズ・ドラマー／パーカッショニスト。現在もトルコとフランスとスウェーデンに跨がって活動している。シルヴァン・カッサップ(sax, cl)やレナーシュト・オーベリ(sax, fl)との共演でいくらか知られているかも知れない(と言っても、紹介記事など読んだことがないが)。数枚のアルバムが確認されている中で、内容の秀逸さで本作を選んだ。本作のレコーディングはテミズの出身地、イスタンブールにおいて行なわれ、オーベリやアート・トゥンク（おそらくトゥンクボヤチのことだろう）の名前は見当たるものの、殆ど地元トルコのミュージシャン達によって演奏されている。トルコのミュージシャンの実力など想像もつかないだろうが、これがなかなかのもの。一聴の価値あり。　(坂本)



PATCHWORK
Ouvertures
LP/Cobra COB 37016　'78年

ギター、ベース、サックス&フルート、ドラムス、キーボード、パーカッション2人という比較的大きな編成のパッチワーク。軽快で安定したリズムをバックに、サックス、エレクトリック・ピアノ、ギター等がメロディアスでややシンプルなソロを展開するというパターンを基本としたジャズ・ロックである。全体に明るめのリラックスしたサウンドで、トップ・クラスのジャズ・ロックのような、オリジナリティ、緊張感は感じられないし、特別のテクニカルなプレイも見られない。演奏自体は確実なもので、特に欠点もないが、流れが変化に乏しく、また、フランスらしさもほとんど感じられない。一度、あるいはたまに聴く程度の作品と言える。　(賀川)



PATRICE MEYER
Dromadaire Viennois
LP/FMR 0986 '89年

パトリス・メイエールのセカンド。'82年に作られたデビュウ作「Racines Croisées」ではHenri Texier(b)らをゲストに迎え、かなりジャズを意識した音作りをしていたが、本作品は、ヒュー・ホッパー(b)、ピプ・パイル(ds)、ディディエ・マレルブ(fl.ts.ss)といった参加メンバーからも分かるように、かなりジャズ・ロック色が強まっている。A面はギター、ドラムス、キーボード、ギターのカルテットに、一部フルート等の管楽器と女性ヴォーカルを加えた組曲で後期のソフト・マシーンに通じる力強く熱い演奏が繰り広げられたB面は曲ごとに編成を変え、フルート、ヴァイオリン、チェロなどを起用し、アコースティック・ギターも用いて、よりゆったりとリラックスした演奏を展開している。　(賀川)



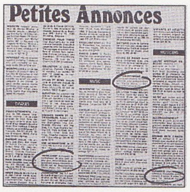
PATRICK GAUTHIER
Bébé Godzilla
LP/CY Records CY 733.612 '81年
CD/Seventh REx XVIII

フランスMAGMA周辺で思いつく限りの豪華ゲストが参加している歴史的名盤。HELDON-MAGMA-WEIDORJEの橋渡しをする彼だけあって内容も万華鏡のように多彩できらびやかながら「ゴーティエ節」といっても良いだろう独特な軽やかさが全編を貫き非常に内容の濃いエレクトリック・ジャズ・ロック。イメージが外へ向かってどんどん広がってゆく様な鍵盤が中心となっているが参加メンバーも皆それぞれのカラーを充分に出し切っていて必然性は充分。且つ細部に目を移すと非常に細かな技や癖の強さがある。努力で得るタイプのものではないこの感性がHELDONを、そしてWEIDORJEをあそこまでの名盤に仕上げたという事が良く判る。12年振りの2ndでもこの感性は鈍っていなかったことが判り嬉しい限り。（伊藤）



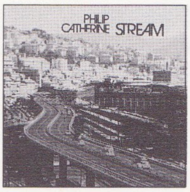
PATRICK GAUTHIER
Sur Les Flots Verticaux
CD/Seventh AXI '93年

実に12年振りの復帰作。その間には本人にも随分と変化が有っただろうし、周りの状況も又変わった。それらを反映してか、一聴して落ち着いた印象を受ける。具体的に言えばテンポを落としてアレンジを簡素化させている辺り。部分部分にジャズ的な音使いも感じられる。こう言った変化は昔の仲間達のそれと通じる所だが、細かな装飾音の入れ具合、更にはどんなに複雑な音使いをしていても各パートが良く唄い、飛び回るかのような自由度を得ている辺りの感覚は彼ならではの物。これが有るからこそ幾分地味であろうとも納得は行く。もっとも熱くせめぎ合う高速ジャズ・ロックを期待されては困るが。キーボード・トリオにコーラス（3〜4人）を加えた編成。ドラムのアントワーヌ・パガノッティにとってはデビュー作だろう。（中西）



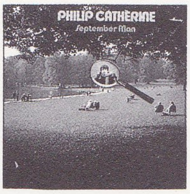
PETITES ANNONCES
Petites Annonces
LP/BB 33.33 '81年

プティ・ザノンスはOlivier Joss（b）を中心に、Bruno（ds）、Cyrille（p）、Jérome（g）、Laurent（tp）のヴェルドー4兄弟、Brigitte Marchand（sax）、Frédéric（syn、p）、Jean-Patrick Voindrot（g）の8人から成るセッション的色彩の濃いグループである。本アルバムは自主製作盤として発表された彼らの唯一の作品であり、全11曲と収録曲は多いものの、曲の流れがスムーズで聴き易いものとなっている。切れの素晴らしいリズム・セクションとスピーディかつメロディアスなギターが一体となって熱演を展開するクリアライトをよりフレンチ・フュージョン風にしたかのような曲、リズミカルなピアノのサポートを受けてトランペットがダルな感じのソロを披露する伝統的ジャズの影響下にある曲等は特に印象的である。（賀川）



PHILIP CATHERINE
Stream
LP/Warner Bros.N° 46149 '72年

プログレッシヴ・ロック・ファンには後期フォーカスのメンバーとして、また、ヨーロッパ・ジャズ・ロックを代表するギタリストとして知られているフィリップ・カテリーン。'70年代初頭、ジャン・リュック・ポンティのバンドに参加し一躍注目を浴びた。その後もヨーロッパ各国で活動し、チャールス・ミンガス、ヨアヒム・キューン、パコ・デ・ルシア等錚々たるミュージシャンと共演している。本アルバムはそんな彼のファースト・ソロ。ピアノ、ベース、ドラムス、トロンボーンらが彼をサポートしている。極一部ハードなプレイもあるが、大部分はジャンゴ・ラインハルト以来の伝統的ジャズ・ギターの流れを汲むものである。フォーカスでのぎこちない演奏とは異なり、流暢なプレイが聴ける。（賀川）



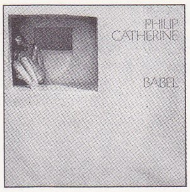
PHILIP CATHERINE
September Man
LP/Atlantic ATL 40562Y '75年

ソロ二作目。この頃良く付き合っていた、ヴァントフ、マリアーノ、ブラウン、リーに北欧のマイルスことパレ・ミケルボルグが参加。いわゆるマイルス・スクール、殊にマクラフリン影響下にあるジャズ・ロックであるが、彼のヨーロッパ的なスケール感覚がなす、内省的な上昇感がアグレッシヴなバックと結び付いた素晴らしい出来となっている。特にサウンドの勢いと熱さに関しては、数あるカテリーン絡みの作品の中でも随一のもの。どちらかと言えば整理された優美な音を得意とする彼だが、その持味をそこねる事なく、バックに煽られて鋭いフレーズを連発する。とは言え、ダビングにより複数のリードを重ねる辺りの構成力もかなりの物だが。T・リピダルや後期マシーンに匹敵するジャズ・ロックの傑作。（中西）



PHILIP CATHERINE
Guitars
LP/（U.K.）Atlantic K50193 '76年

この業界だと後期FOCUSに参加ぐらいの知名度の彼だがソロ名義の作品、加えて'70年代中期のヨーロッパ・ジャズ界のセッション・マンとしての演奏は相当良いものが並んでいる。そんな彼の、「Septmber Man」に続く作品。クリアーな音色、少なくない音数もさることながら一番の特色はコード・プログレッションでは無かろうか。意表を突きながら心地よい。FOCUSに収められている〝Sneezing Bull〟も入っているが当然の様に本作の方が数段出来がよい。C.Mariano, J.Van't Hofに加えてJ.LeeとG.Brownの強力リズム・セクションがサポート、更にR.Frankenのストリング・アンサンブル。本作と前作からセレクトした「Nairam」（Warner Bros. BS2950）もある。（伊藤）



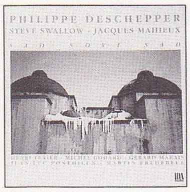
PHILIP CATHERINE
Babel
LP/(Ger.)Elektra ELK 52 224 '80年

カテリーンは元々J・ヴァントフ、J・キューン他、ドイツを中心としたヨーロッパ・ジャズ/ロック系のギタリストで他一時フォーカスにも居た。本作ではトップ/セカレッリ他フランス系のメンバーを迎えており、時期的な事もあろうが'70年代の彼の作品に比べ柔らかみを帯びた作風に転じ、誰かが突出する事無くアンサンブル総体として一定のトーンを作り出している。特に弦カルテットの使用はふくらみを出すのに効果的でトップの音色もそれに応じた物になっている、とは言えカテリーン独特の内省感と上昇感は充分に感じられる好作。(中西)



PHILIPPE CAILLAT
Stream Of Time
CD/(Ger.)Laika LK 92-030 '92年

フィリップ・カイアは'80年代の初期から活動をしており、何故かドイツのレーベル・ミュージシャンとの活動が多い。本作もまたその一つで、明らかにフランス系とドイツ系が入り混じった編成。チャーリー・マリアーノ(はアメリカ人だが)やゲォルグ・コッホベック(マーク・ナウシーフとの活動でお馴染み)の名も見える。基本的にはフュージョン・ギタリストと言えるのだろうが、曲のトーンや音使いに気を配った演奏は部分的にJ・ベック辺りを思わせる才気走った物。バックの音が締まっている事もあり、伸びやかでスケールの大きい楽曲は結構、来る物がある。近年のアンディ・サマーズ辺りに雰囲気が近いが、もう少しリラックスした音。曲によってはもろに南方系フュージョンになってしまうのが残念。(中西)



PHILIPPE DESCHEPPER
Sad Novi Sad
CD/IDA Records IDA 008 CD '86年

'70年代のフレンチ・ジャズ・ロックにおいては中核となったバンドーマグマーの音楽性からか、ギタリストは異例な程に地味な存在である事が多かった。が、'80年代以降のシーンにおいては優れた存在を数多く見つける事が出来る。それぞれのスタイルはあるにしろ、共通して言えるのは教則本型ギター・ヒーローの座を目指さず、立体的な空間の中でうねりやゆらぎを表現している事。これ自体は世界的な傾向だが、フランスにはこれに長けた者が多い。Deschepperも又、そう言った一人で、落ち着いた中にもセンシティヴな拡がりを見せる感覚は地味ながらも魅力的。とは言え、地味なばかりでは無く、時折はさみこまれる不安定な早いパッセージやエキセントリックなオーヴァー・トーンによる変化も効果的。(中西)



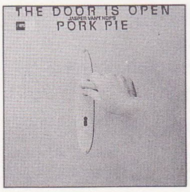
PIERRE BLANCHARD
Each One Teach One
LP/CY 733618 '84年

MARTIAL SOLAL BIG BANDで好プレイを見せたPierre Blanchardのファースト・アルバム。ステファン・グラッペリ、ジャン・リュック・ポンティに続くフランスのジャズ・ヴァイオリニスト第3世代としてはほぼ最後に位置する一人である。全8曲、比較的リラックスした演奏であるが緩漫な感じはなく歌心あるプレイが楽しめる。そうした中、時折り登場するシリアスなプレイは彼の並々ならぬ実力を物語っている。ドミニク・ベルトラム(b)らリズム・セクション、キーボード等も好プレイを展開している。小粒ながら捨て難い作品である。(賀川)



PIP PYLE'S EQUIPE OUT
Pip Pyle's Equipe Out
LP/52 Rue Est RE 004 '87年

ピプ・パイル(ds)、エルトン・ディーン(sax)、ディディエ・マレーブ(fl,ts)、ソフィア・ドマンシック(p,syn)、ヒュー・ホッパー(b)の5人による作品。演奏はジャズィなリズムに乗って、ディーン、マレーブ、ドマンシックが次々にソロを取るという展開が中心になっている。本来フリーを得意とするディーンのオーソドックスなプレイはそれでもシリアスである。マレーブは余裕を持ってメロディアスなプレイを繰り広げる。ドマンシックの演奏は典型的ジャズ・ピアノと言える。このような各人の個性が十分に反映されたものとなっており、作品の質も高い。全体としてかなりジャズィであるが、ロック・ファンにも無理なく聴けるのは彼らのキャリアのせいであろうか。2作目「Up」も出ている。(賀川)



PORK PIE
The Door Is Open
LP/(Ger.)MPS 68038

P・カテリーン、C・マリアーノ、J・ヴァントフの三人を中心に、B・スティーフ、J・マーシャルからなる5人編成。当時の(MPSを中心とした)ユーロ・ジャズ・ロックの常連達によるグループで、これと三人以上面子が重なるアルバムは何十枚とあると思う。シャープながら落ち着いた曲調が中心で、前記中心人物三人の、上昇感有る優美なギター、スペイシーなオルガン+硬質でクラシカルなピアノ、はっきりと明快なサックス+民族楽器、と言った持ち味を良く活かしている。また曲自体も良く練り込まれた魅力ある物で、極端さは無いにしろ、類似バンドが仲々思い付かないと言う不思議なポジションにある。クールでメロディアスだが軟弱にならないジャズ・ロックの秀作。(中西)



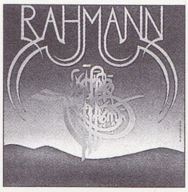
POST IMAGE
Caldeira
CD/Fnac Music 662108　'94年

元々はウプサラのリズム・セクションが中心になって結成されたグループ。'90年の「Les Nouvelles」以来３作目になるかと思う。一作目ではウプサラの曲を焼き直すなど、多少の話題性はあったものの、演奏、録音共に素人臭く、ほめられた出来ではなかったのだが、本作ではドラムを始めメンバーも替るなどして、プロフェッショナルなレヴェルのグループとなっていて一安心。音楽性自体は以前と変らず、'80年代後半のマイルス・グループ影響下にある物で、フランスあるいは本人達ならではの個性が見受けられないのが残念だが、出来自体は仲々にスリリングで、楽しめはする。結局、ウプサラを支えていたのはフィリップ・コーヴァンだった事が良く判るが、これはこれで良く出来ている。　(中西)



PUZZLE
Puzzle
ＬＰ/Puzzle PU03-83　'83年

PUZZLEは、1979年Muller兄弟を中心として結成され、1983年に唯一の作品と思われる本作をリリースしている。フランク・ザッパ、ジミ・ヘンドリクスを好むと言うAndré Mullerのギターを中心とした非常に個性的で高水準な作品で、オリジナリティの欠如が目立つ80年代の自主制作盤の中では異彩を放っている。後期HELDON、PULSAR、CAMEL、Zappa等をミックスした様な独特なサウンドは、聴き手の好みを分けてしまいそうだが、上記のグループを気に入っている方なら一聴しておいても損は無いだろう。グループは1980年代後半頃迄活動を続けていた様で、Mu̇seaからの作品リリースの話もあったらしいが、その後の消息は不明である。　(中島洋一)



RAHMAN
Rahman
ＬＰ/Polydor 2393 252　'79年

ジャケ裏を見ると全曲マハマッドなる人物の作曲と有り、ターバンにヒゲ面の怪しげな写真なので不安になるが、音の方は仲々良い。やはり中近東系なのだろう、多少イスラム味を帯びたメロディが感じられ、変拍子もある程度ナチュラルな物なのかも知れない。こう書くとアレア/パガーニ系の音を連想するが実際の所は典型的なフランス系ジャズ・ロックに近い。これはプレヴォのベースとキーボード奏者のM・ルテイグリアノの演奏振りによる。他、D・ロックウッド、S・マルク、L・ドゥリュックス参加。ラムセス・プロダクションからの知られざる秀作。　(中西)



RAPHAËL GIMENEZ-FAUVETY
Raphaël Gimenez-Fauvety
ＬＰ/AROC 50001　'82年

ABUS DANGEREUXのドラマーが加わっている、と言う他には何一つ判らない。編成としてはギターと打楽器がそれぞれ二人ずつに、ベースとサックスの六人。各メンバーの演奏センスはジャズ・ロック的なのだが、曲自体は、ギター、打楽器それぞれのコンビネーションと両者を対比させた組み合わせなど、構築的。多めの人数を適確に出し入れさせてスペースを表現するのが上手い。いわゆるテーマ/ソロ型のジャズ・ロックとは一味違う作風で、ある程度はプログレッシヴ・ロックを意識しているのかもしれない。リード・ギターは時にJ・P・アラーセンを思わせる所がある。同時期のABUN DANGEREUXをEDHELSに寄せたと言えば近いか。　(中西)



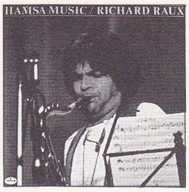
RÉMI CHARMASSON TRIO
Nemo
CD/CELP Musiques CELPC.22　'93年

ANDRÉ・JAUMEの所のギタリストが同グループの同僚でもあるフレディ・シュトウーダー（ds）更にジャン-フランソワ・ジェニー-クラークとのトリオでライヴ録音した作品。ラフなテーマからスポンティニアスなやり取りを重視した演奏形態は、何ら奇をてらった物では無いが、三者の息の合った中に見られる緊張感はかなりの物。お互いの出方を探りつつの出だしから、きっかけをつかむ瞬間やその後の兆々発止としたやり取りは、既して地味ながらもスリリング。それぞれの反応の良さと音色に関しての懐の深さをうかがわせる。どこかジャズ・ロック直前のマクラフリンを思わせる音使いもある。フレンチ・ジャズの層の厚さと元気の良さを示す好作。　(中西)



RHESUS O
Rhesus O
ＬＰ/Epic EPC 64560　'71年

Alain Monier (org) とJ.P.Asseline (p) を中心にAlain Hatot (sax, fl)、Francis Moze (b)、Serge Lenoir (b)、Thierry Blanchard (ds) の６人から成るRHESUS O。唯一の作品である本アルバムには他に２人のゲスト（スキャット、b）が参加している。そのサウンドはほぼ同時期に活動していたムーヴィング・ゼラチン・プレイツをよりジャズィかつクールにしたもので中期のソフト・マシーンに類似している。ジャズィではあるがソフトなリズムとメロディアスで必要以上に饒舌でない演奏が彼らの存在をロック・サイドに位置付けていると言える。　(賀川)



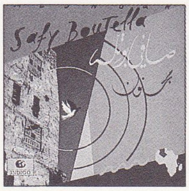
RICHARD RAUX
Hamsa Music
L P/Mercury 6313 142　'80年

リシャール・ローのソロ名義第一作。但し'76年にグループHAMSAとの共作で一枚有る。一応、元マグマの初期サックス奏者だったローだが、本作に参加しているM・Graillerと同様、それは忘れていいだろう。多少ロック色は有るものの基本的にはイスラム/アフリカ/カリブ等の異文化の要素を上手に取り入れたヨーロッパ系ジャズの一作となっており、そう言った範中の音としては熱気と冷静さのバランスが取れた好作品と言える。この後のローのアルバムとしては'84年にもう一枚「Feel Good At Last」が出ている。　(中西)



ROSE
Worlds Apart
L P/RCA XL 17749　'79年

トランジット・エクスプレスのセカンド・アルバムにゲスト参加、その後グループのメンバーとなり、彼らの最高傑作と言われる「Couleurs Naturelles」でその実力を遺憾なく発揮したダヴィッド・ローズ。グループ在籍中に発表したファースト・ソロ・アルバム「Distance Between Dreams」もフレンチ・ジャズ・ロック屈指の名作である。それから２年、かつての同僚Serge Perathoner(key)他、Gérard Prévost(b), Steve Shehan(per) Claude Salmieri(ds)という豪華メンバーを集めて作ったローズのファースト・アルバム。ヴォーカルにもかなりの比重を置いた、ゆったりとした雰囲気のポップなジャズ・ロックである。そうした中にもきらりと光る箇所は多い。以後、彼の音楽は増々ポップになる。　(賀川)



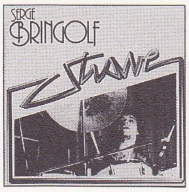
SAFI BOUTELA
Mejnoun
CD/Label Bleu LBLC 2501　'92年

'50年、アルジェリアに生まれ、クラシックの素養を持つ彼の'91年録音の作品。ヴァイオリンを加えた割と大きめの編成に何人かのゲストも加わり、それでもばらけずに、緻密ながら大きくうねる演奏が繰り広げられる。アラビア辺りの中近東の音階、フレーズを大胆に導入したジャズであり、スピード感が充分にあることもあって異色ながら一気に聴き通してしまう。この中近東の雰囲気にヴァイオリンがなんと相性の良いことか。多数の奏者の中にNana Vasconcelosやギターの Nguyen Leの名前もある。このSafi Boutela、非常に面白い素養を持つ人物であるが、フランスのシーンに現れてきたのは'80年代後半から、他の作品はそう多くなさそうだ。　(伊藤)



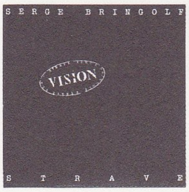
SAÏNO
Saïno
L P/Sai 01　'82年

印象的なジャケットに包まれたSAÏNOの１stアルバム。基本的には'70年代的な色合いのジャズ・ロック・アルバムであるが、SHYLOCK辺りに似たフランスらしい情感が感じられる音作りとなっている。テクニック的には取り立てて見るべきものは無いが、無理無く、それでいて余りアマチュア臭さが鼻に付かない演奏には好感を持てる。この時期の自主制作盤としては仲々良い作品と思う。その後グループは1984年に２ndアルバム「Bitume Rouge」(Saï02)を発表しているが、そちらでは本作で見られたジャズ・ロック色を残しつつも、ヴォーカルを大幅にフィーチャーして、MONA LISA風のサウンドとなっている。そちらも仲々の出来である。　(中島洋一)



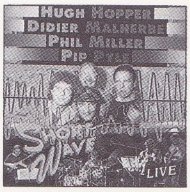
SERGE BRINGOLF
Strave
L P/Oméga Studio OM 67016　'80年

デビュー作にして２枚組。10人編成。'70年代後半からのフレンチ・ジャズ・ロックの活性化を示すようなアルバムだ。ドラマーのSerge Bringolfは、クリスチャン・ヴァンデールのテイストを受け継ぐようなところがあって、このアルバムもコーラスなどそのままといった感じだ。他にブラス・セクション、ヴァイオリン奏者等がいるだけに、幅は広い。２枚組にわたって様々なフォーメーションを生かした演奏が聴ける。どちらかというと、流れのあるサウンドで、その中でソロがとられる。Bringolfはこのアルバムの翌年にSERGE BRINGOLF STRAVE名義で「Vision」を出すが、こちらはタイトだった。それを思うと、デビュー作の方は彼のやりたかった事をふろしきを広げるかのように見せたといっていいと思う。　(松本)



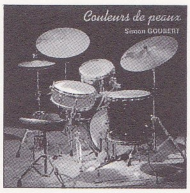
SERGE BRINGOLF'S STRAVE
Vision
L P/Oméga OM 67028　'81年

何といっても、デビュー・アルバムが２枚組であったという事実の前には技量の不安などみじんも感じられない。1 st (Omega OM-67016) は、セルジュ・ブランゴルフの「ストラーヴ」だったが、今作ではそのストラーヴがバンド・ネームになっており、しかも華々しいメンバー・チェンジがなされて、元アール・ゾイのアラン・エケールが参加している。ここでの彼のギター・プレイは、自己のアルバムよりも遥かに冴えを見せており、曲の素晴らしさとメンバー間の迫力に輪をかける。ブランゴルフのマグマ、ザオ狂いは未だに終わっておらず、ヴァイブや金管が走り回る中を派手に気合いを入れてドラムをたたく。力作である。マグマ、ザオの正統な後継者であると言えそうだ。　(中藤)



SHORT WAVE
Live
CD/Gimini Music GM1003 '93年

カンタベリー・ジャズ・ファンの新しいマスト・アイテム登場。ヒュー・ホッパー、ディディエ・マルヘーブ（と発音している）、フィル・ミラー、ピプ・パイルの４人によるライヴ盤だ。'91年にル・マン・ジャズ・フェスティヴァルの企画で誕生したユニットだが、ピプ・パイルのL'EQUIP OUTの発展型と見ることもできる。メンバーの方がその気になってしまったようで、バンドとして継続し、ステージでSOFT MACHINEやHATFIELDの曲なども採り上げる一方、アルバムにはずらっと新曲が並ぶ。１曲MATCHING MOLEの曲を演奏しているのがまた嬉しい。 （坂本）



SIMON GOUBERT
Couleurs De Peaux
CD/Seventh AX II '93年

現在C.Vander周辺要注意人物のソロ２作目。前作同様ジャズ。が凄く出来がよい。しっとりと、そして心が熱くなる様な出来栄えだ。殆どドラムスを叩いているが、１曲目の彼のペンによるナンバーでは演奏では参加せずC.Vanderがゲスト。また７曲目では（これも彼のナンバー）ピアノを弾いている。他はカヴァー・ナンバーで構成されているが、C.Vanderのペンによる〝Day After Day〟(Jour Apres Jour、C.Vander Trio一作目参照）やElvin Jones、Tony Williamsのナンバーもある。久し振りにマグマ周辺に顔を出したM.Graillierの参加も仲々。 （伊藤）



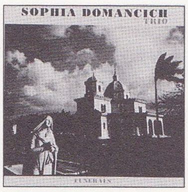
SILVIN MARC
Nite Life
ＬＰ/Cream 033 '83年

元SURYAの、という肩書きはこの際無視してよかろう。とにかくメンバーの多彩さに圧倒される。Francis Lockwood, Jean-Michel Kajdan, Kirt Rust, David Rose, Richard Rauxに、WEIDORJEの２管、そしてPierre Blanchard (vln)、その他無名人多数、総勢26人。全体に金管楽器が前面に押し出されていて、オランダのエクセプションではないが、軽いなあ、というイメージが一聴して耳に残る。何人かがソロをとるが、このアルバムの中ではＢ②のヴァイオリン・ソロが絶品。もちろん奏者はP.Blanchard。その他はR.Rauxのソロが光る程度か。だいたいこのS.Marc、ドラム、ベース、ヴォーカル、ピアノをとっかえひっかえこなすのだから、たいしたもんではあるが、その分、散漫になってはいないか、という不安が残る。（中藤）



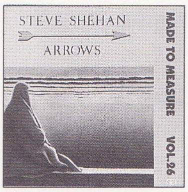
SIXUN
Live
CD/Bleu Citron COP 27 D '89年

SIXUNは'84年に結成されたフュージョン・バンドで、メンバーの大半はアントワーヌ・エルヴェのビッグ・バンド出身だ。早いうちにパーカッショニストが交代したほかはメンバー・チェンジなしで次々とアルバムを発表して来ており、国内での人気の程がうかがえる。これは彼らのライヴ・アルバムであり、安定した実力と素直な魅力が聴き取れる。ある部分で彼らのサウンドにはWEATHER REPORTからの影響を感じるが、全体のバランスから言えば、それは大きく見積もって寧ろYELLOW JACKETSの受けたそれくらいの影響と言えるだろう。６人のメンバーのうち、演奏で特に注目すべきはLouis Winsberg (g) とJean-Pierre Como (kb) だろうか（しかし、Comoのソロ・アルバムは×なので注意すべし）。 （坂本）



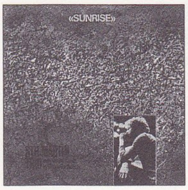
SOPHIA DOMANCICH TRIO
Funerals
CD/Gimini Music GM 1001 '91年

ソフィア・ドマンシックと言えば、'91年のあの１度限りのHATFIELD AND THE NORTH再結成にデイヴ・スチュワートに代わって参加したキーボード奏者だが、何を隠そう、ピプ・パイルの彼女だったりする。その彼女がパイルのEQUIP OUTとは別に自分のバンドを披露したのがこの１stアルバムだ。へえっ、と言うようなミュージシャンも参加しているが、基本はもう立派にジャズ。むやみに気張った内容ではないものの、彼女のやる気が漲っている。これからきっとイギリス、フランス両方のジャズ・シーンで活躍して行くことだろう。どうせなら、ヨーロッパのカーラ・ブレイになって欲しいものだ。 （坂本）



STEVE SHEHAN
Arrows
CD/(Bel.)Crammed Discs MTM Vol 26 CD '90年

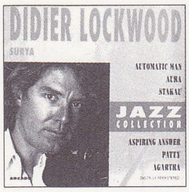
一時期マグマにいた事もあるパーカッショニスト。現在はセッション・マンとして幅広い活動がある彼の知る限りでは唯一の作。クラムド・ディスクのMade To Measureシリーズで出ている。各種パーカッション類を駆使する他に、キーボード/ステイック/ギターも重ね、自然音を折り混ぜる作風は、エスニック・ニュー・エイジとでも言えば良いだろうか。とは言え、前記楽器類を重層的に織り上げた音の中にも時として押し迫るようなうねりやテンションの効いた切り返しなどがあり、総じて硬派な印象を受ける。この手ではかなりの才能がある人だろう。システマティックな音の組み立ての中にも奇妙な生々しさがあるのも魅力。二昔前のL・ティボー辺りを少し思わせる。 （中西）



STU MARTIN TRIO
Sunrise

LP/Terrones MARGE 13　'79年
CD/EPM 152192(MARGE 13)

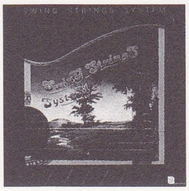
ステュー・マーティンは'70年代初頭にジョン・サーマン(sax)、バール・フィリップス(cb)と結成した伝説的なグループ、THE TRIOで一世を風靡したアメリカ出身の名ドラマーだ。パワーとテクニックとを両立させた安定したドライヴ感を特徴とするエキサイティングな彼のプレイはこのリーダー・アルバムで炸裂し、凄まじいピークを迎えている。満を持して結成された新しいトリオは、当時殆ど無名だったふたりのフランス人ギタリスト、ジェラール・マレーとクロード・バルテレミーを迎え、とてつもなく刺激的な音楽を生み出した(バルテレミーは主にベースを演奏している)。そしていよいよパリのフェスティヴァルに踊り出ようとした矢先の'80年6月にマーティンは43歳でこの世を去ってしまった。　(坂本)



SURYA
Surya

LP/Cotnélia Productions COR 4310　'79年
CD/Arcade 302801

ロックウッドとトゥルオンはより自分自身の音楽性を生かす為、ザオを脱け、このスルヤを結成した。(現在知名度の関係か、ロックウッド名義になっている)。その結果である本作はより当時のクロスオーヴァーと呼ばれた物、例えばR.T.F、J.L.ポンディ等に近いテクニカルな部分を際立せた物になっている。とは言え、スリリングな音の背後に有る柔らか味はやはりフランスらしさを感じさせるのだが、マグマやザオ(セファー)と言った怪物的な個性を欠いているのも事実。プロダクション不良等の事情から一枚のみで解散した。　(中西)



SWING STRINGS SYSTEM
Swing Strings System

LP/Uniteledis UNI 131078　'78年

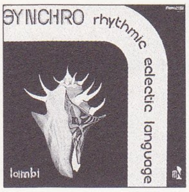
スウィング・ストリングス・システムは、その名の通り、6人の弦楽器奏者とクラヴィネット、ドラムスから成るグループである。コンフリュアンスを母体としており、リーダーのディディエ・レヴァーユ(b)、ジャン・シャルル・カポン((cello)、ドゥニ・ヴァン・エック(cello)、クリスチャン・エスクーデ(ds)の4人は同グループで共演している。他のメンバーもディディエ・ロックウッド(vln)、ジャン・イヴ・リゴー(vln)、(ともに元ザオ)、ジークフリード・ケスラー(clavinette)(レヴァーユのパーセプション時代の同僚)、ベルナール・リュバ(ds)と強者である。ジャズ・ロック、ジャズ、そして、ややフリー・フォームな演奏が小気味良く軽ろやかに展開された名作である。　(賀川)



SYLVAIN KASSAP
Saxifrages !

CD/Evidence EVCD 02　'85年

トロンボーンが三本、エレキ、アコースティック、各一人のベース。異常に低域重視の編成だが、マグマ系でもドローンを効かせている訳でもない。その他二人の打楽器とE・ギターを従えたリード奏者シルヴァン・カサップのアルバムはヨーロッパ系のクールネスに地中海/中近東的な熱さを加えた素晴らしい出来になっている。それもその筈、M・ゴダール、Y・ロベール、C・バルテルミ、B・シェヴィロンと言った精鋭揃いなのだから良いのは当り前か。変わった編成を意識させない整然とした音の中にも迎え難いうねりと勢いがあるバックの上でカサップが走り回る。更に特筆すべきはバルテルミの醒めた暴力とでも言うべき切り込み。マジでヤバいぞこいつは。真暗な迷路を迷いもせずひた走るような快作。　(中西)



SYNCHRO RHYTHMIC ECLECTIC LANGUAGE
Lambi

LP/Moshé-Naïm MN 12007

「Franck Valmont et Syncro Rhythmic Eclectic Language」(Moshé-Naïm10023)に続くセカンド・アルバム。元ZAOのJean Yves Rigaudが本作より加入し、ややアフロ色の見られるジャズ・ヴォーカル物と言った趣のあった前作から、ややサイケ色の混ざったジャズ・ロックへと変化している。エレピとよく歌うサックス、そしてRigaudのヴァイオリンが緊張感に満ちた、それでいてどこかリラックスしたインター・プレイを繰り広げる。ZAOやMAGMAの様な強迫感や、一部のジャズ・ロックに見られるテクニックのひけらかしは無いが、独特の緊張感が感じられ、心地良い。尚、グループには2枚のアルバムの他、知る限りでシングル「Sipote/Suite」(Song Records SR04)がある。　(中島洋一)

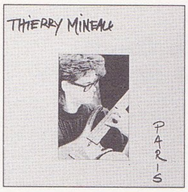


SYNTHÉSIS
Synthésis

LP/ARC ZAL 2005　'77年

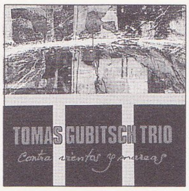
イヴァン・ジュリアン(tp)、フランソワ・ジャノー(sax,fl,syn)、アンドレ・セカレッリ(ds)、ディディエ・ロックウッド(vln)ら、20人を越えるミュージシャンのセッション的作品。ジュリアンが多くの曲を作り、全ての曲のアレンジを担当している。所謂するジャズ・ロックの範疇にはいるサウンドであるが、多くのヴォーカル・パートが妙にポップであるのに対して、演奏及び曲の作りは如何にもジャズ的である。そのちぐはぐなところが、時代を感じさせる。とは言うものの、ロックウッド、ジャノー、ジュリアンらのソロや一部ヴォーカルは中々聴き応えがある。ロックやポップ的要素を持ったビック・バンド・スタイルのジャズとして聴けばそれなりに楽しめただろう。　(賀川)

THIERRY MINEAU
Paris
L P/Paris 08101-2



ティエリー・ミノーはあまり知られていないかも知れないが、エレクトリック・ベースの名手の一人だ。フランス国内ではかなりの評価を受けているミュージシャンのようだ。私の知っている彼の唯一のリーダー・アルバムである本作を聴けば、その実力と音楽的な才能はいやと言うほど判る。ほぼ全面参加のPatrick Buchmannのドラムスとの相性が抜群であり、彼らのビート感覚と、やはりほぼ全面参加のVincent Limouzinの奏でる感覚的なシンセサイザーが実に美しい対比を見せる。本当を言えば、アメリカから参加したコブハム、スターン、ギャンバレ、シールマンス、ラグレーン、シネルら豪華ゲストのプレイを第一に絶賛すべきなのだろうが、それ以上にミヌーのサウンド・プロデュースの才能が光っている。　(坂本)

TOMAS GUBITSCH TRIO
Contra Vientos Y Mareas
CD/Pan Music PMC 1105　'88年



ギターを弾くグビッシ、ピアノのオズヴァルド・カロの両名はアルゼンチン出身かと思われる。とは言え、活動の基盤はフランスのようで、本作のベーシスト、ジャン・ポール・セレアなどとシンガーのサポートをしている作品もある。実際、普段はアレンジャー的な仕事が多いようだ。そう言った面での能力が、'20年代の母国の音楽、'60年代のロック、'80年代のジャズ、近代クラシック(バルトーク、ストラヴィンスキー、ドビュッシー)と言った好みと結びついて仲々にシリアスな響きを出す。一方では南米系の物哀しくも拡がりのある音使いや、激しいたたみかけもある。先鋭と言う訳ではないが、流されずに自分の音を適確に出す。前記要素の組み合せはこちら向きでもある。　(中西)

TRAITEMENT SPÉCIAL
Traitement Spécial
L P/SDRM 1



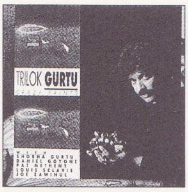
TRAITEMENT SPÉCIALは比較的どこにでもいそうなジャズ・ロック（フュージョン）・バンドで、巧いと言えば相当に巧いのだが、個性の薄いのが勿体ない気がする。Jean-Pierre TaïebとJean-Michel Huréのギターをフィーチャーしたギター・トリオで、両者が同じ曲で演奏していない所を見ると、レコーディング途中でメンバー交代したのではないかと推察される。但し、ゲスト参加のPierre Luc Valletが全面的にキーボードを演奏しているので、実質的にはカルテットの音になっている。全体のバランスも非常によいのだが、このバンドの本当の存在価値は実はベーシスト、Thierry Mineauにある。アルバム後半に進むと彼の存在感がどんどん増して来るのが、かなりの圧巻だ。Mineauの過去を知る作品。　(坂本)

TRANSIT EXPRESS
Couleurs Naturelles
L P/RCA PL 37020　'77年



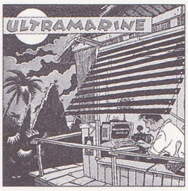
イヴ・シモンのトランジット・プロダクションに所属したグループで、元々、イヴ・シモンのバック・バンドとして結成されており、バンド・ネームはシモンの小説「トランジット・エクスプレス」からとられている。当初は４人であったが、２nd「オパス・プログレシフ」でゲスト参加のダヴィド・ロウズ（vln）が、本作では正式メンバーとしてクレジットされている。一般的に、トランジットの最高傑作、と言われるこの「クルェール・ナチュレル」は、ロウズがバンドの不可欠要素になってしまった事を裏づける音作りである。各人の完璧なテクニックと、そのエネルギッシュでプログレッシヴなジャズ・ロックはフランス独自のものであろう。この後、プロダクションの経済的理由により、バンドは解散する。　(中藤)

TRILOK GURTU
Crazy Saints
CD/CMP Records　'93年
ジムコ・ジャパンJICL-98707



'70年代初頭よりヨーロッパで活動していたトリロク・グルトゥはインド出身のパーカッショニストだ。'85年にOREGONに加わってからはアメリカに舞台を移して大活躍。ジョン・マクラフリン・トリオで名声を馳せている。そんなグルトゥのソロ・アルバムはすべてCMPからリリースされており、この３rdはパット・メセニー(g,g-syn)、ジョー・ザヴィヌル(kb)という超大物をゲストに迎え大評判を呼んだ作品だ。彼のソロ・アルバムには必ずダニエル・ゴヨンヌ(kb)が付き合っており、グルトゥの音楽を支える重要なパートナーとなっている。また、本作にはルイ・スクラヴィス(cl)やエルンスト・ライセーガー(vc)まで参加しており、グルトゥの交遊範囲の広さと、音楽の感度の良さに感心させられる。　(坂本)

ULTRAMARINE
Programme Jungle
L P/Blombido BL 001



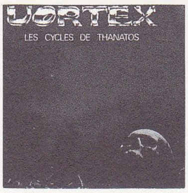
このULTRAMARINEは、今、密かに注目すべきフランスの最重要ギタリストの一人、ニュイアン・レ(Nguyên Lê)が在籍していたというただその１点で存在価値を持つフュージョン・バンドだ。レはその変わった名前からも判るように、ヴェトナム人の両親を持つが、本人は'59年にパリで生まれた。'83年に結成し、３年間に渡って活動したのがこのULTRAMARINEで、これが彼の最初の足跡となる。アルバムではギターのみならず、ベースからプログラミングまで手掛ける活躍振りを見せている。その後、明確にロックを経過したジャズ・ミュージシャンとして特異な活動を繰り広げており、O.N.J.やアンディ・エムラーのオクテットに参加している。彼の名前を見かけたら、多分それは聴く価値のある音楽だと考えていい。　(坂本)

VORTEX
Vortex
LP/JBP 463 '75年



自主製作盤と発表されたヴォルテックスのファースト。エレクトリック・ピアノ、ベース、ドラムス、サックス、フルートの5人によるジャズ・ロックであるが、ドラマチックな曲展開、フルートとサックスによるメロディアスな演奏は、若干ながらも、カルプ・ディアンを思わす雰囲気がある。ジャズ・サイドからのジャズ・ロックと比べるとリズムが甘く、ややドライヴ感に欠けるが、ロックならではの明解さ、叙情性がそうした欠点を補っている。フランスに多く見られる、テクニックのみが売り物のジャズ・ロック・バンドとは正反対に位置する貴重なグループで、そのめりはりの利いたサウンドは正にプログレッシヴ・ロック・ファン向けのものと言える。
(賀川)

VORTEX
Les Cycles De Thanatos
LP/FLVM 3008 '78年



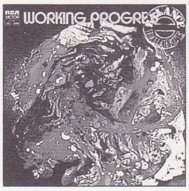
キーボードが二人、打楽器三人、サックス二人を含む大所帯での二作目、この頃の彼等はRIO系のグループとの活動が多く、アール・ゾイとは共同コンサートで合体演奏をするなど交流も深かったようだ。その関係で、いわゆるチエンバー・ロック的な入り組んだアンサンブルを聴かせるが、マグマやカンタベリー系の影響も感じられる分、ジャズ・ロック的でもある（一曲目はジョン・マクラフリンへのオマージュ）。時折ひき合いに出されるアール・ゾイあるいはヴィドルジュに比べると極端な強烈さに欠けるとはしても仲々の出来。この後、バンドはテルパンドルとメンバーを共有しつつ3rdの録音を計画するが、時期的な事もあり、解散。テープの存否は不明。
(中西)

WEIDORJE
Weidorje
LP/Cobra COB 37.014 '78年
CD/Musea FGBG 4058



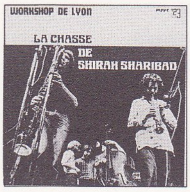
マグマ・ファンなら先刻御承知、矢鱈とある周辺作のうちでも代表格の一つ。と言うのも近頃すっかり嘘臭いがこれは本物。パガノッティの重々しいベース、反復を多用したキーボードを中心に管、ギター、気色の悪いヴォイス（コーラスでは無い）がからむ。これではそのまんまマグマだが、違いはと言えばキーボードがエレピの柔らかい音でややミニマル的な分、浮遊感があるほか、管楽器もより開放的で、ギターにも存在感があるあたりか。典型的なのはB②で、強引に突き進むベースの回りを他の音群が飛び回る様はマグマ系の中でも名曲として名高い。他の二曲も良い出来でA面がパガノッティ、B面がゴーティエの作曲。その後のそれぞれのアルバムとの共通点/違いを聴き比べるのも興味深い。
(中西)

WORKING PROGRESS
Working Progress
LP/RCA FPL1 0059 '75年



ジャズ・ロックの傑作を数多くリリースしたRCAレーベルのバランス・シリーズの1枚としてリリースされたワーキング・プログレスの唯一のアルバム。André Ceccarelli(ds)他、ベース、パーカッション、ギター、ピアノ、ウッド・ベース、ヴォイス、サックス&フルート、トロンボーン、トランペットと計10人のメンバーが参加している。セッション色の濃いグループであるが、グループとしてのまとまりは非常に良く、各メンバーがバランスの取れた演奏を展開している。個性的なパーカッションが特に印象的な演奏はラテン・アメリカ風のジャズ・ロックで、所謂フランスのジャズ・ロックとは雰囲気が異なるが、そのテクニカルで緊張感を感じさせるプレイは十分に楽しめる。
(賀川)

WORKSHOP DE LYON
La Chasse De Shiran Sharibad
LP/Un Deux Trois N°8 '75年



かってはフリー・ジャズ・ワークショップ・ドゥ・リオンと名乗っていたグループ。本アルバムの参加メンバーはMaurice Merle(as, ss), Louis Sclavis(ss, b-cl), Patrick Vollat(p), Jean Bolcato(b, vo), Christion Rollet(ds)の5人で、Sclavis以外は以前と変わっていない。ここで聴くことの出来るサウンドは、確かにフリー・フォームなものであるが、リズムも定型のものが多く、グループとしてのまとまりを重視している。時としてポップなプレイも見せる彼らは、コエルメック・アンサンブルとともに、フリー・ジャズという枠を越えた集団即興演奏を展開していた。Merle、Sclavisの2人はMARVELOUS BANDのメンバーでもあり、Steve Waringと共演するなど、よりポップな分野でも活動した。
(賀川)

X-TET
Premieie Ligne
LP/FLVM 3034



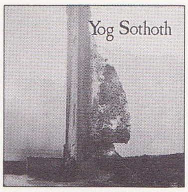
2人のキーボーディスト(共にヴォーカルを兼務)、そしてサックス、ベース、ドラムスの5人から成るX-TET唯一の作品。曲調はジャズ・ロック、フリー・ジャズ、ややエレクトロニックなものと多彩だが、散漫な印象は無く、良質な作品となっている。全編に渡って「ソフト・マシーンの3rdでのエルトン・ディーンを思わせる」と評されたサックスが大活躍している。個人的にはA①のヴォーカル・ナンバーが気に入っている。尚、本作をリリースしているFLVMは、いわゆるプレス屋でジャンルを問わず多数の作品がリリースされている。プログレ系の作品も多く、ABUS DANGEREUX、HYBRIDE、PRINCE、KHA-YM、FLAMEN DIALIS Didier Paquette等がリリースされている。
(中島洋一)

XAAL
En Chemin
CD/MSI CDMS 1163　'93年



最近のマグマの前座をつとめたというバンド。低音指向？のジャズ/ロックの中間を行く癖の強さが、なるほどと思わせる。ds、b、gの編成、そしてヴェドルジュでわずか知名度のあるギヤール兄弟がサポート。複雑な曲を想定している割には力量不足か。曲調の転換にしても、そこに何かスリリングさやスケール感が出るのならわかるが、実際には取って付けたような荒さを感じてしまう。ただしアイデアは随分あるようで、このアルバムはそれがうまく活されていないだけで、今後のびる可能性があると思う。この手が好きな人には悪くないかもしれない。（松本）

YOG SOTHOTH
Yog Sothoth
ＬＰ/Cryonic MAD 3110　'84年



ラヴクラフトからグループ名を取ったと言われるYOG SOTHOTH。ヴァイオリン、サックス＆フルート、キーボード、ベース、ドラムスの５人が作り出すサウンドは個性的である。ジャズとして比較的オーソドックスなソロ中心の演奏、アップ・テンポのジャズ・ロック、アール・ゾイをやや明るめにしたかのような叙情的サウンド、フリー・フォームなインプロヴィゼイション等が次々に登場する。いずれも聴き所を持った好演奏であるが、作品全体としてはややばらけた印象を受ける。構成にもう一工夫あればより良いものになったであろう。（賀川）

YVES＆ALAIN LORENZ
Espaces 2
ＬＰ/Arc-En-Ciei SM 32905　'80年



ローレンツ兄弟'80年の作品。アコースティック・ギターにエレクトリック・ギター、オルガン、シンセサイザーを用い、兄弟のみで単々と演奏している。素朴なまでのスペース・ミュージックは、まさに天空のハルモニアである。系譜として、ポール・ブレットの「アース・バース」やアラン・マルクスフェルとリシャール・ヴィマルやスペース・クラフトの中間に属するようだが、「インヴェンションズ・フォー・エレクトリック・ギター」のアシュラ・テンペルの影響をも受けているようだ。同じレーベルから「Espacesi」(SM20841)と、「Imaginations Aux Grandes Orgues」(SM30398)もリリースされている。静かな星空のもとで聴くべき一枚である。（宇田川）

ZARTONG
Zartong
ＬＰ/DOM 50 001　'79年



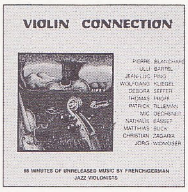
フランスのみでリリースされたアメリカ人のグループ、ザルトンの唯一のアルバム。グループは４人編成であるが、ベース、ドラムス、シンセサイザーといった通常の楽器に加えて、Kemantckaというヴァイオリンのような弦楽器、Santourという80本の弦を張った打楽器（いずれも東洋の民族楽器）が使われている。自作の曲とトラッドがほぼ半分ずつ収録されており、前者はリリカルなメロディが印象的なシンフォニック・ロックに仕上がっている。一方、後者は両民族楽器のフレーズがトラッド的であるが、リズムが完全なロックであり、また、めりはりが利いたアレンジがされているので、トラッド臭の漂うシンフォニック・ロックとして聴くことが出来る。この種のものとしてはWÜRTEMBERGと並ぶ力作。（賀川）

V.A.
Enneade
CD/Musea FGBG4005　'87年



オリジナルLPでは９組、CD再発に伴い５組を追加収録したコンピレーション。殆どが未発表テイク、且つ本作品以外に作品を残さなかった編成も多く、歴史的価値は非常に高い。シンフォニック系の作品は別のコンピレーションにまとめられており本作はジャズ・ロック編となっている。Magma本体とそのOB(B.Paganotti, Y.Seffer etc)等、それからMagmaから影響を受けた世代の比較的若いグループに大別され、双方共に面白味がある。収録はMagma/Troll/Xalph/B.Paganotti/Y.Seffer/Eskaton/F.Cahen/Shub Niggurath/Eider Stellaire/Musique Noise/Farben/Altais/Univers Zero。フランスをある側面から見たときの好サンプル。（伊藤）

V.A.
Violin Connection
CD/Musea FGBG 4004　'90年



フランスとドイツのヴァイオリニストの作品を12名収録したコンピレーション・アルバム。ほぼ同時にリリースされた他のコンピレーション・アルバム「Enneade」や「Enchantment」に比べると収録アーティストが地味な気がする。ほとんどの収録楽曲がフュージョンよりのジャズ・ロックである。まあヴァイオリンがメインの作品集なので、そうなるのもしょうがないのかもしれないが、もう少し鬼気迫るようなインター・プレイが聴きたいと欲求不満気味。カフェ・オ・レを飲みながらフランスの街並みを想像して聴くと、パリジャン気分にひたれるような気はするが、中にはシリアスな曲もあり、ちょっと困る。クォリティが低いわけではないので、ヴァイオリンの音色が好きな人なら良いかも。（津田）

CHANSON ▸

BRIGITTE FONTAINE

□松山晋也

ブリジット・フォンテーヌは、日本では'70年代から極く一部で特殊な人気を誇ってきた。特殊、というのは、そのファン層の顔や受容のされ方という点においてである。一般的なシャンソン・ファンではなく、いわゆるプログレッシヴ・ロック（シンフォニック・ロックに非ず）や前衛ジャズの意識的・積極的聴き手によって発見され、しかも一種奇妙というか過剰な思い入れをもって語られてきたのだ。例えば、'70年代前半のサラヴァ・レイベルからの諸作品における故・間章による私小説あるいは詩のようなライナー（当然俺も彼の"極北"にしっかりヤラレた）などは、そうした"特殊状況"を象徴する最たる例だろう。つまり、まさしく"カルト"なアーティストなのである。

そうした状況は本国フランスでも似たりよったりであるらしく、一般的人気という点では、日本よりも更に厳しいらしい。現在も同志アレスキー・ベルカセムと共に、パリの場末の小劇場などで、時おりライヴをやっているらしいが、客は非常に少なく、終演後に日本人の女性ファンが花束を献じたりする、といった悲話も聞く。日本では'88年にリリースされた久しぶりのアルバム「French Corazon」なども、本国ではようやく2～3年前に市場に出回り出したというし。

が、だからといって、そうした現実がブリジット・フォンテーヌというアーティストの存在価値を落としめるわけでは決してない。過剰なまでに熱い思いで語られてしまうというのも、彼女の余りにも妥協のない硬質な表現、チンケなポピュラリティなどとは隔絶した絶対的なコスモロジーゆえである。いつだって彼女の世界は、中途半端に近づくことを断固拒否する。安易に聴き流すことを



断固拒否する。安易に聴き流すことを決して許さない。再び、間章ではないが、彼女に限ってはまさに"極北"という言葉以外に適当な表現が思い浮かばない。冗談ではなく。

フォンテーヌは、'39年6月24日、フランス北西部ブルターニュ地方フィニステール県モルレで、教師の娘として生まれた。ルイス・キャロルやコレット等の小説に魅せられた子供の頃、そしてランボーやヴェルレーヌに耽溺した乙女時代を経て、'57年にソルボンヌ大学に入学するも、並行して演劇学校に通ううちに、そちらにのめり込んでゆき、大学を中退する。小さな劇場で実験的な演劇をやっているうちに、その特異な演技が著名な演出家ニコラ・バタイユの目にとまり、イヨネスコの処女作「禿の女歌手」の主役に抜擢されるまでになる。既に'60年代の初頭には、個性派の若手女優としてかなりの評価を得ていたようだ。

が丁度その頃、彼女が舞台に立つことを嫌う恋人に気を遣い、しばらく芝居から遠ざかってしまう。気晴らしに彼女が始めたのがギターをつまびいて歌うことで、その趣味が高じて'63年にはセーヌ左岸のキャバレのオーディションを受け、合格。ここに、歌手としてのキャリアもスタートした。そしてその特異な個性はまたしても一人の大物の目を引き付ける。ブラッサンスやブレル等を育てたフィリップスの敏腕プロデューサー、ジャック・カネッティである。カネッティはフォンテーヌをブラッサンスの前座に起用するなどして彼女を育てた。

一方、演劇にも再び身を入れ出し、その頃知り合った新進俳優のジャック・イジュランと共に実験劇「ママン、恐いよ」を制作・出演しヒットさせる。それを見たカネッティはますますフォンテーヌの才能に入れ込み、フィリップスを辞めて自分で設立したばかりのカネッティ・レイベルで彼女のデビュー・アルバムを制作し、リリースする。'66年のことだ。フォンテーヌは続けてカネッティで、イジュランとのコラヴォレイション・アルバムを2枚発表し歌手としてのキャリアを積むが、オーヴァーグラウンドでも彼女の名が語られ出したのは、やはりサラヴァ・レイベルに移ってからだろう。

'66年にこのインディ・レイベルを設立したオーナーのピエール・バルーは、イジュランと共にフォンテーヌとも契約し、'68年にはアルバム「Brigitte Fontaine」をリリース、そして'70年の「Comme A La Radio/ラジオのように」が彼女の評価を決定的なものとする。アメリカからパリに渡ってきた前衛ジャズ・グループ、アート・アンサンブル・オヴ・シカゴ、そして既にイジュランを通して仲間になっていたアレスキー・ベルカセム等が織り成すアフロ/アラビックな呪術的グルーヴに貫かれたサウンドをバックに、フォンテーヌが息も絶え絶えに呟くように歌うこのアルバムは、言葉と音が異様なテンション下で劇的な化学反応を起こした稀有な例であり、未だに新しいファンを増やし続けている。'71年度のアカデミー・シャルル・クロ大賞を獲得したのも当然だろう。

この後フォンテーヌは'72年に、硬質なリリシズムをより追究した「Brigitte Fontaine」、そしてアレスキーとの完全なコラボレイション作「Je Ne Cannais Pas Cet Homme」をサラヴァから出し、翌'73年にはBYGからも1枚「L'incendie」を発表、その後再びサラヴァから「Le Bonheur」('75年)、2枚組「Vous Et Nous」('76年)、「Les Eglantines Sont Peut-etre Formidables」('81年)の3作品をいずれもアレスキーとの2人3脚で発表するが、以前にも増した表現の自閉性ゆえか、次第に表舞台から消えてゆく。'88年には、突如来日して公演を行ない、更に7年ぶりの新作「French Corazon」も発表したが、その後再び消息が途絶えてしまった感じだ。前述通り、今も2人して、パリの小さな劇場などで歌い、演じているらしいが……。もう2度と表舞台に登場することはないのだろうか。



BRIGITTE FONTAINE
Brigitte Fontaine Est…
LP/Saravah SH 10001　'68年
CD/ポリスター PSCY 1010

Fontaineの作品中一番ポップで聴きやすい作品だと思う。個人的にも一番好きな作品だ。だが、そのポップさも一筋縄でいくノリではない。ZNRのもつ柔らかいシニカルさとでも言うべき感覚が、この国には脈々と存在したのだということを思い知らされるようだ。ここにあるのは男に理解できる艶めかしさ／コケティッシュな部分と、男に理解しきれない静かな狂気だ。〈芸術顧問〉としてピエール・バルーの名がクレジットされている。各曲のアレンジは秀逸だ。重厚なストリングスとグロッケンの同居等、鍵盤打楽器が効果的に扱われている。定位をよく考えたトラック・ダウンも評価に値する。収録曲の〝ランボオのように〟は頭脳警察によるカヴァーも有名。

(Chihiro S.)



BRIGITTE FONTAINE
Comme À La Radio
LP/Saravah SH 10006　'71年
CD/ポリスター PSCY 1007

Fontaine、Areski（Belkacem)、そしてAACM一派の巨人ART ENSEMBLE OF CHICAGOの妙なる共演の記録。残酷なまでに内省的な世界がまるで陶酔の様な軽やかさで響きわたるFontaineのモノローグ。前作でのそれ自体強烈なアイロニーと言えるシャンソン然としたバックとは180度異なり、そのアンサンブルは彼女の内面から湧き出るが如くの非日常性と必然性を感じるが、それがクールでありながらシリアスなAECの名演に多くを依存している事は言うまでもない。そして両者を繋くAreskiの非凡な才…。それらの融合が本作となり花開いた。それは「ポップ・ミュージックの仮面を被ったシャーマニズム」と言える程の、各々のキャリアの中でも特異な地平に咲いた妖しく美しい花だった。

(山田)



BRIGITTE FONTAINE
Brigitte Fontaine
LP/Saravah SH 10034　'72年
CD/コロムビア CY 4667

フォンテーヌといえば、一も二もなくまず「ラジオのように」、というのが一般的評価のようだが、このサラヴアの3枚目はある意味で前作「ラジオ〜」以上の傑作ではなかろうか。純粋に音楽的完成度やスリル、全体の構成力という点では、AEOCの技術と土俗的パワーにフォンテーヌの個性が相乗した前作がやはりズバ抜けているが、発語者としてのフォンテーヌの絶対的強度とラディカルさ、サウンドの実験性という点では、間違いなく本作が最高だ。〝マルセル〟〝メリー・ゴー・ラウンド〟等での言葉と音が錯綜するコラージュ的手法、残酷なまでに清浄なイメージを喚起する〝はたご屋〟（チエロはジャン＝シャルル・カポン、オルガンは仏ジャズ・シーンの大立者ジョルジュ・アルヴァニタス）…。寒い。

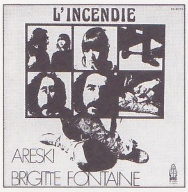
(松山)



BRIGITTE FONTAINE
Je Ne Connais Pas Cet Homme
LP/Saravah SH 10041　'73年
CD/コロムビア CY 4668

アルジェリア出身のアレスキー・ベルカセムは、ジャック・イジュランを通じて'68年にフォンテーヌと出会ったが、それ以来現在までずっと2人は、公私に渡る同志として活動を続けている。サラヴァからの4枚目になる本作は、「ラジオのように」のようなズバ抜けた求心力とノリ、あるいは3rdにあった身を切られるような残酷なリリシズムには恵まれていないが、曲と詞のバランス、作品全体の持つ奥深く豊かなイメージという点では、前2作をも凌ぐ。これは、全面的に音作りを主導しているアレスキーの才能に依るところが大きいと思われる。6曲目〝冬の探求〟などほとんどシェーンベルクの弦楽四重奏曲のようだし、8曲目〝それは正常〟は「ラジオ〜」の続編風、とヴァラエティに富み、聴き応え十分だ。

(松山)



BRIGITTE FONTAINE, ARESKI
L'incendie
LP/BYG 529 026　'73年

なぜかサラヴァを離れ、BYGからリリースされたアルバム。フォンテーヌのこの頃のアルバムとしては、割とまとまりのある曲が多い。所々に録音されているささやき声や、アレスキー他による即興もおさまり気味だ。もちろん二人による密会・告白のような空気は変わりようもなく充満している。アヴァンギャルドだとされる彼等、そしてフォンテーヌの歌だが、実際はもっと個人的な所で音楽になっている気がする。彼等の音楽は、子供の無邪気な戯れのように作為的なものを感じさせない。何か二人が向きあって音で会話している様子を見ているような気分になる。その様子はとても密着した関係で温かく嫌味なく素朴なのだ。それをうらやましく感じた時、言葉がアヴァンギャルドにすり替えられたのかもしれない。

(松本)

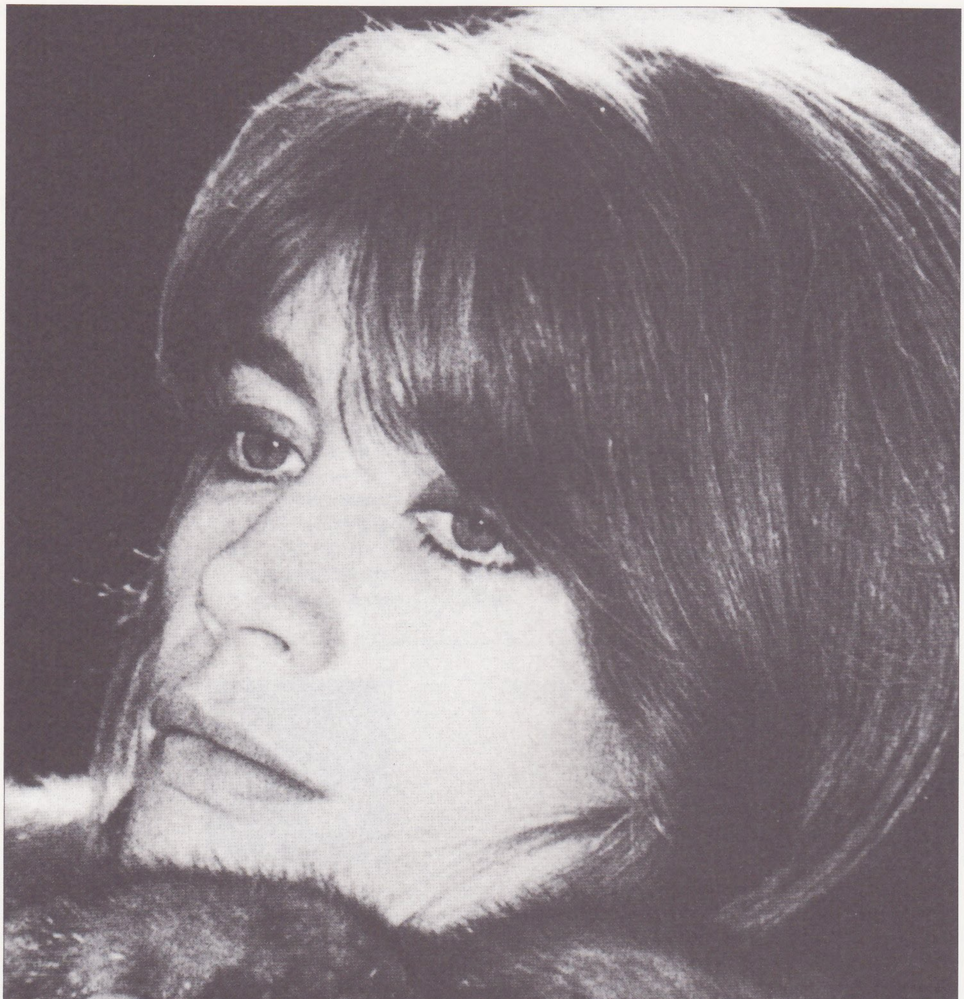


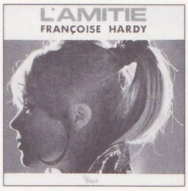
ARESKI, FONTAINE
Le Bonheur
LP/Saravah SH 10059

名盤として現在も評価の高い初期作品を発表した後、'70年代後半でのフォンテーヌ、アレスキの作品は、それまでの求心性の強い作風から次第に方向性が拡散していく要素が強くなっていくが、それは2人の作品への迷いや試行錯誤を端的に表している。このアルバムも内容の基本的なスタイルは、「Je ne connais pas cet homme」と同様のフォークロア的なシンプルな歌志向を継承している。突発的にサウンド・コラージュなども盛り込まれているがそこには以前の感覚の先鋭さはなく、かえって作品の印象を散漫なものにしている。よく聴いてみると収録されている曲には意外と佳曲が多いのだが、アルバム全体のプロデュースが中途半端なのがいかんせん惜しい。

(関口)

FRANÇOISE HARDY





FRANÇOISE HARDY
L'amitié
L P/Vogue　'60年代後半

フランソワーズ・アルディは'62年にデビューして早いうちにフランスのアイドルになった。映画出演に雑誌のモデル。'60年代、イエイエの時代のこと。その時代をアルディはVogueで過ごしている。デビュー曲〝男の子女の子〞から'68年までの彼女は手しも押されぬ存在だ。でも彼女の声質はああだし、第一この人は自己主張が強そうだ。そっけない来日時の話をどこかで読んだこともある。部屋を真黒に塗ったとか、とてもちやほやされて歌っていることに自分をおさめられるような人ではなかった。で、'68年にショー・ビジネスから離れる。'68年に近い頃の曲、例えば〝秋のランデブー〞などは既に'68年以後のアルディだし、だいたいこの人の歌はVogue時代もそんなにはキャンキャンしてない。熱が低いのだ。　(松本)



FRANÇOISE HARDY
Françoise
CD/エピック ESCA 5186

ショー・ビジネスから身を引いたアルディは、'60年代末自身のレーベル、ヒポポタンからこのアルバムを出す。記念すべき再デビュー。その１曲目はドイツ語で歌われている。歌われているのにまるで角がない。しかも微妙に重苦しく気怠げで柔かく、物思いに漫るような曲想だ。既に勝負はあったと言わざるを得ない。だいたいスタンダードの〝さようならを教えて〞が物思いにふけっている。この頃からアルディの感性は研ぎ澄まされていった気がする。このアルバムを代表する〝もう森へなんか行かない〞や〝水の中の環〞といったアコースティック・タッチのナンバーで、アルディの声は、感性の震えのように静かに広がっている。全体には過渡期なのか曲によって傾向のばらつきが激しくはある。　(松本)



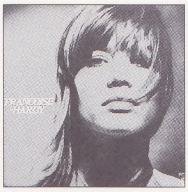
FRANÇOISE HARDY
Conte De Fées
CD/エピック ESCA 5187

通称(邦題)「アルディのおとぎ話」。割とロックっぽいアレンジの目立つアルバム。今となると、このアレンジが曲によって時代を感じさせすぎて、アルディのナチュラルさを妨げているようにも思える。まあ、曲によってはそのままのハモンド・オルガンの音が懐しく響いて、アルディの歌とマッチングしたりもする。でもやはりストリングス主体のバッキングで彼女が映える。アルバムはタイトルどおり。彼女の感じるところを書いた詩をお伽噺に例えるようにして１枚になったものだ。アルバムなのだ。曲も歌い方にしても、幾らかキュートだったりおどけていたりと表情豊かなところを見せる。かわい気な雰囲気のある少し箱庭的な、そしてアルディに少女を垣間見るアルバムだ。そうしてあの歌声。いい曲が多いんだ、これが。　(松本)



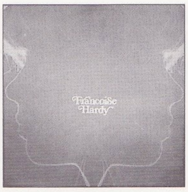
FRANÇOISE HARDY
Viens
CD/Flarenasch 728693　'71年
エピック ESCA 5188

フレンチ・ポップス「囁き戦術派」の女王アルディ。この時期のアルバムは、どれを取っても、アンニュイな曲調と、うっとりするようなストリングス等のアレンジが素晴らしい傑作ばかりなので、一枚ごとの違いを説明するのが難しいのですが、本作なら出来ます。本作では、Tucaというブラジルの女性ギタリストが、ボサノバでよく使われるナイロン弦と思しきアコースティック・ギターを弾いて、ほとんどの曲を共作ですが作曲しています。でも、それほどボサノバ調ではなく、いつもよりは絡みつく感じが少ないかなというくらいで、元気な１曲目以外は、柔らかな曲調と控え目ですが夢見心地のストリングス、そして後ろ髪を引かれるような歌声と、やはりアルディの世界なのです。是非聴いて下さい。　(斉藤)



FRANÇOISE HARDY
Love Songs
L P/Kundalini　'72年
CD/エピック ESCA 5190

「ランディ・ニューマン、ニール・ヤング等、孤独のシンガー・ソングライターの作品を英語で歌うアルディ。愛のイマージュをアコースティックとストリングスのサウンドに求めて拡がるナイーブな世界」実に的確なキャッチ・コピーです。本誌読者へのウリは、トゥリーズの１stのタイトル曲のカバーが入っている点でしょう。本家よりも、また、同じく同曲をカバーしたオール・アバウト・イヴの演奏よりも、アルディのヴァージョンの方がステキです。そして他の曲も、アラン・テイラー、バフィ・セント・メリー、ジョン・マーティンの妻ビバリーのカバー等、いい曲ばかりです。さらにこのジャケットどおりの憂いと翳りのあるサウンド、大半の曲のアレンジは、元トゥリーズ他のトニー・コックスでした。　(斉藤)



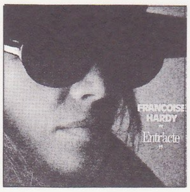
FRANÇOISE HARDY
La Vie Privée
CD/エピック ESCA 5189　'73年

アルディは'70年を前後してますますシャンソンというくくりからはずれて、彼女自身の音楽に向かった気がする。その頃のアルバム。通称「私生活」。自分主義のアルディにふさわしい邦題だ。録音はロンドン。バック・ミュージシャンもイギリス勢で、SSWふうだったりブルース・ロック調だったりと、全体の印象がこれまでとは違う。もともと感情を込めるタイプではないし、抑揚の激しい曲の少ないアルディだが、同じ平担な曲調でもこれには異和感を覚えるのだが。というのも最後の２曲のみパリでの録音になっていて、アコ・ギやストリングスを使ったこちらの方が明らかに肌合いがいい。彼女の繊細さが生かされた好ナンバーに仕上っている。　(松本)



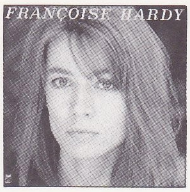
FRANÇOISE HARDY
Message Personel
CD/WEA 9031 74 205 2　'73年

フランソワーズ・アルディの傑作。独立したての頃のメロディ加減はもう薄らいで、もっとアルディ個人を耳元で感じとれるアルバムだ。彼女が一番分かりやすい形で出たアルバムだと思う。参加ミュージシャンと一体になって研ぎ澄まされている彼女の感性が、あまりにもみずみずしく、きっと多くの人を彼女と一対一で向き合わせると思う。水面を輪が広がっていく時、その時が音になってしまったかのような1曲目で、このアルバムのテンションは伝わるはず。そしてもとのLPでは最後になるタイトル曲に至って、アルディの独白が聴く人をとらえて離さないと思う。このアルバムほどすっと浸み込んで〝個〟を意識させるアルバムもない。ささやきを聴くようなアルバムだ。気持をやわらげてくれるアルバムでもある。（松本）



FRANÇOISE HARDY
Entr'acte
L P/WEA 56 091　'74年

「Message Personnel」に続くアルバム。アルディのトーンは変わっていないが、アレンジに大きな変化があって、全体の印象に違いがある。前作の張りつめた空気はほとんど感じられない。かわってアコースティック・ギターのソフト・タッチなトーンと、弦の響きを出した彫りの深いストリングス・アレンジが、アルディの歌を包むようにある。ソフト・フォーカス気味なのだ。曲も落ち着きのあるものばかりで、この点は前作に共通しているが、今回はバッキングの理由から温か味を感じさせる。時にはヴィスコンティの映画音楽張りになる。靄がかったようなゆるやかな流れのあるストリングスは、これまでにはなかったものだ。目立った曲はないが、どれも好印象を与えてくれる。
（松本）



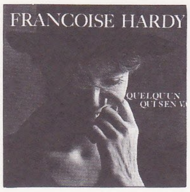
FRANÇOISE HARDY
Musique Saoûle
L P/EMI 2C 070 14697　'78年
CD/エピック ESCA 5192

日本では「山羊座の女」という題で発売されている本アルバムの原題は「酔っ払った音楽」。本作に全面的に曲を提供しているのは人気シンガー・ソングライターのミッシェル・ジョナス。超現実的で幻想的な内容の歌、うまくいかない愛についての歌など、ジョナスはアルディの感性や個性をよく理解したうえで彼女の新境地を演出していて、音もカラフルだ。1曲目の禁欲的な(？)ファンキー・ナンバー〝ふられた気分〟が特に印象的だ。「地面に転がる酔っ払った音楽を聞いている／地獄のファンキーが飛び出すナイトクラブで一人ぼっち／彼は私を一人残した／男の人に対する私の心はもうグラグラ」。4曲目の〝霧のコルヴィザール〟は彼女の私生活のパートナー、ジャック・デュトロンとのデュエット。（松元）



FRANÇOISE HARDY
À Suivre...
CD/エピック ESCA 5194　'81年

本作では、バラエティに富んだ作詞家、作曲家陣を迎えている。ルイ・シェディッド（彼の項も参照）、ジャン・クロード・ヴァニエ（エマニュエル・パールナンも彼の曲を歌っている）、エチエンヌ・ロダ・ジル（ジュリアン・クレールの作詞家）、ピエール・グロコラら、自分の世界を持ちつつ彼女の個性を理解している面々である。例えば、〝いけない子〟は1970年代のシェディッド節だが、アルディにもぴったりの佳曲だ。〝ひと夏の孤独〟、〝タマルー〟などの多少ポップな明るい曲も良いが、〝ほんの少しの愛で〟のような、彼女が自分の本音を出している内輪の雰囲気の曲がやはり印象的だ。「ちょっとした仕事があるから充分よ／自転車もあるし、充分よ／貴方がいて、暖かいから、充分よ」（松元）



FRANÇOISE HARDY
Quelqu'un Qui S'en Va
L P/WEA 723 643　'82年
CD/エピック ESCA 5195

ジャケット写真がセルジュ・ゲンズブールの撮影だというのはまあどうでもいいが、彼は〝何も考えないほうが〟という曲まで提供している。全体的に静かな曲が多く、例えばピアノと彼女の声がよく調和した〝マズルカ〟は絶品。〝それは私〟はアルディ自身もファンであると言っているアラン・スーション（この人の項も参照）の作品で、スーションらしい歌であると同時にアルディらしい歌でもある。ここには等身大のアルディがいる。アルディを語るのに、「アンニュイ」、「エレガンス」、「翔んでる女」といった言葉がよく使われるが、それはちょっと違うのではないかと筆者は思っている。この曲を聴けば賛成してもらえると思う。なお、本盤の邦題は「時の旅人たちへ」だが、原題は「行ってしまった人」。（松元）



FRANÇOISE HARDY
Décalages
CD/WEA Flarenasch 728690　'88年
エピック ESCA 5176

彼女は当時のインタビューで、彼女のテーマは「自分が感じたことを表現することの難しさ、愛し合える人を見付けることの難しさ」であり、なぜ本作の題名が「ずれ」かというと、「人は結局自分にとって大切な人との間にずれを起こしながら生きているから」であると言っている。このアルバムを聴くとその認識の悲しいほどの正しさに思い切り頷いてしまうと同時に、その悲しさが癒されもする。その一方、「もうゲームはやめて。誘惑に負けて。欲望と対象だけになって」という一見直接的な一節の裏に隠れた彼女の微妙な感受性も味わい深い。個人的には彼女の全アルバムで本作が一番好きだ。なお、最後の曲〝人生はどこに〟はウィリアム・シェラーの曲〝ダージリン〟に彼女が別の歌詞を付けたもの。（松元）

SERGE GAINSBURG

□松山晋也

'91年3月2日にセルジュ・ゲンスブールが死んだ時のフランス国中の"動揺"のすごさといったら、一体どう表現すればいいのか戸惑ってしまうほどであった。ル・モンドから3流色モノ雑誌に至るあらゆる新聞・雑誌がかなりのスペイスを割き、ミッテラン大統領やシラク・パリ市長から芸能人まで、多数の追悼コメントを交えながら、セルジュの死を悼む大特集を即座に組んだ。5日に行なわれた追悼の儀には、数万人が集まり、パリでは交通規制が敷かれた。そして何よりも僕の胸を打ったのは、そうした状況を冷静に伝えるべき、いい歳をしたジャーナリストたちが自ら、あたり憚らず涙を流し、悲しんでいた情景である。フランス国民に最も尊敬されたポップ・ミュージシャンはジョルジュ・ブラッサンスだったかもしれないが、最も愛されたのは、間違いなくセルジュ・ゲンスブールだったと思う。最後の最後まで、あれだけメチャクチャをやり通し、敵も多かったセルジュが、何故かくも深く広く愛されたのだろうか。



セルジュは、1928年4月2日、パリのリュー・ド・シーヌ（中国通り）のアパルトマンで、ヨーゼフ・ギンズブルグとオリアの長男として生まれた。本名はルシアン・ギンズブルグ。両親は共に、社会主義革命の混乱を逃れてパリに亡命してきたユダヤ系ロシア人だった。ピアニストの父の手ほどきの下、幼少時からピアノの厳しい訓練を受けたルシアンだったが、彼の興味は音楽よりもむしろ絵画の方に向けられ、中学に入ると並行して絵画アカデミーにも通い始めた。いつか大画家になることを夢見つつ成長したセルジュだったが、現実は甘くない。51年に結婚してからは、背に腹は変えられず、クラブ等でピアノやギターを弾いて糊口を凌いだ。が、そうした不本意な日々の中にも、やがて成功の光が差し込んでゆく。

'56年、セーヌ右岸のキャバレ≪ミロール・ラルスイユ≫で、歌手ミシェル・アルノーのピアニストを務めていた頃、セルジュは初めてボリス・ヴィアンのステイジを観て感動し、自分も歌いたいと思うようになった。やがて、ミシェルの薦めもあって、≪ミロール～≫に歌手として出演し始める。自作自演歌手セルジュ・ゲンスブールの評判はすぐに広まり、'58年にはフィリップスが契約、11月にデビュー・アルバム「第1面のシャンソン」がリリースされた。

'59年に2nd、'61年に3rdと順調にアルバムを発表していったが、ちょうどその頃からフランスにもロックンロールのブーム（いわゆるイエ・イエ）が訪れ、ジョニー・アリデイやシルヴィ・ヴァルタンに代表される若手スターたちに一般の人気は移行、従来の文学的なシャンソニエたちはまたたく間に駆逐されていった。ゲンズブールの歌も随所に左岸派の香りを漂わせた高踏的なものが多かったため、元々芳しくなかったアルバムの売れ行きは益々落ちこみ、一時は歌手廃業を考えたほどだった。が、こうした苦境は、逆に彼に大きな転機をもたらすことにもなった。

ゲンズブールは、イエ・イエの若手シンガーたちのために、歌を書き始めたのだ。元々深い思い入れがあって歌手になったわけではない。絵画きになりたかったのがかなわず、

●フランス・ギャルと



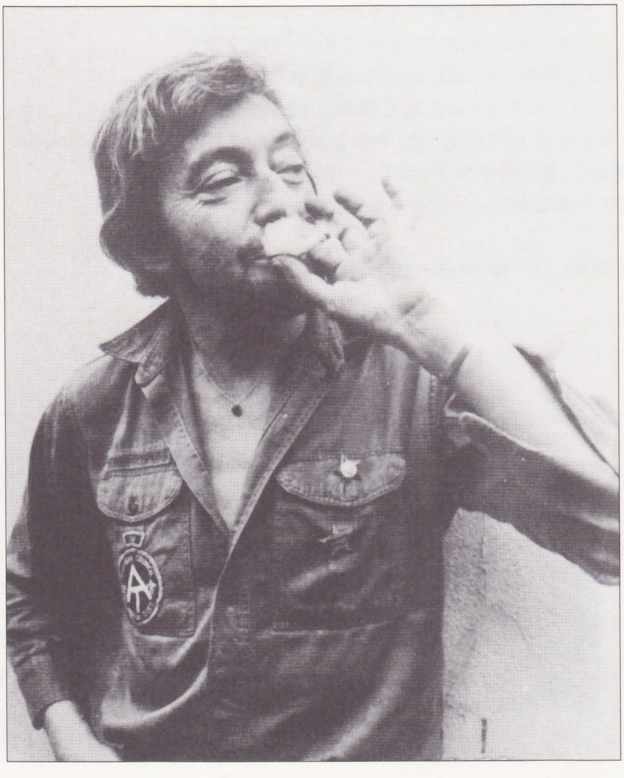
なんとなくこの世界に入ったセルジュである。ポップ・ミュージックなんて所詮下らないものだというニヒリスティックな視線を最初から持っていたセルジュが、たわいもないフレンチ・ロックンロールを量産することを躊躇う理由などなかった。

そしてとてつもない成功が、ある日突然訪れた。'65年3月20日、ユーロヴィジョン音楽祭で、セルジュの作った"夢みるシャンソン人形"を歌ったフランス・ギャルが優勝したのだ。この日を境にセルジュの人生は変わってゆく。たわいもない3分間ポップ・ソングの名匠として、次々に殺到する作詞・作曲の依頼をこなし、芸能界に確固たる地位を築き上げていった。その後のやりたい放題の人生については、ここで書くまでもなかろう。

結局死ぬまでにゲンズブールが得た肩書きを書き連ねると、作詞・作曲家、シンガー、俳優、映画監督、CM監督、カメラマン、小説家、画家と、まさにルネサンスの万能芸術家の如く多岐に渡っている。そしてその間のスキャンダルの数々。ブリジット・バルドーとの不倫劇をはじめ、ヴァチカンの激怒を買ったエロティック・ソング"ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ"、フランス国歌を巡る右翼とのいさかい、テレビや雑誌でのたび重なる極端な放言等々、常にゴシップねたをバラ撒き続ける華々しい人生だった。

しかし、ただそれだけでは、単なる2流のスケベ・オヤジにすぎない。ゲンズブールがあれだけ多くの人々に愛されたのは、その一見デタラメな歌やライフ・スタイルの中に、人間の生が本質的に抱えこんだ哀しみや苦悩や空しさを深くにじませていたからに他ならない。そしてまた、どんなにデタラメでショッキングな表現であろうとも、そこには常に、ある種高貴なユーモアと優しさが感じられた。狂躁の影に漂うダンディズムとメランコリー。ひとことで言えば、そういうことである。彼の激しい挑発は、同時に見事な詩でもあったのだ。「彼の衝撃を与え続けた生き方、リニューアルを繰り返した音楽は、青春そのものだった。私たちは、彼の中に、青春の混沌を見ていたのです」。彼の死に際してフランソワーズ・アルディが述べたこのコメントは、まことに核心を突いている。

画家になりたかった、一人のシャイなユダヤ人、セルジュ・ゲンズブール。この男の歌ほど、生に対する悦びと畏れ、生が孕む孤独と哀しみを深く感じさせる歌を、僕は他に知らない。





SERGE GAINSBOURG
Du Chant À La Une!
LP/Philips 6313 150　'58年

'58年のデビュー・アルバム。ミロール・ラルスイユで歌うセルジュを観て、フィリップスの敏腕プロデューサー、ドゥニ・ブルジョワはすぐに契約を申し込み、ボリス・ヴィアンの専属アレンジャー、アラン・ゴラゲールを起用して録音に臨んだ。〝小さな穴〟というリフレインがなんとも斬新な印象を与える〝リラ駅の切符切り〟で幕を開け、〝ロンサール58〟〝他の男の体の下にいる人妻〟等々、全体に極めてニヒリスティックな香りを漂わせている。余りにも反道徳的だということで、ほとんどの曲がラジオでの放送を拒否されたという。ヴィアンにショックを受けて歌い出したゲンスブールだが、ヴィアンの方もこの異様な風貌をしたユダヤ人シンガーの才能に驚嘆し、あちこちでしきりに推薦文を書きまくった。　（松山）



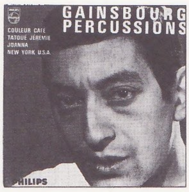
SERGE GAINSBOURG
L'étonnant Serge Gainsbourg
LP/Philips 432 533 BE　'61年

'60年、セルジュはヌーヴェル・ヴァーグ映画「唇によだれ」のテーマ曲をアラン・ゴラゲールと共作し、10万枚のヒットを飛ばしたが、自身のアルバムの方は1stに続いて2nd('59年)も、ほとんど売れなかった。おまけに'61年には、いよいよイエ・イエ旋風が本格的になり、既に33才のセルジュにとって、状況は益々厳しくなってきていた。そんな中で発表されたこの3枚目のアルバムは、多くのカヴァ・ヴァージョンを生んだ不朽の文学シャンソン「プレヴェールに捧ぐ」が象徴する如く、全体に逆噴射左岸派路線となっているが、そうした中にも、やっぱり流行が気になったかのような〝ネルヴァルのロック〟や〝アルヴェールのソネット〟といったイエ・イエ調の曲が混じっており、彼の複雑な心境が窺える。　（松山）



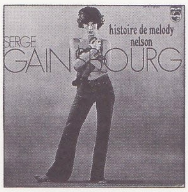
SERGE GAINSBOURG
Gainbourg Confidentiel
LP/Philips 77980　'63年

セルジュは元々ジャズが非常に好きで、デビュー以来、彼の書く音楽のベースには常にジャズのニュアンスが色濃く流れていたが、この'64年の5枚目のアルバムに至って、いよいよ全面的なジャズ・アプロウチを試みる。そのきっかけになったのは、パリのクラブで観たバド・パウエルのライヴだった。彼はその時ベーシスト、ミシェル・ゴードリーと、当時評判を集めつつあったハンガリー自身のジプシー・ギタリスト、エレク・バクチックを誘い、完全なピアノ・トリオ・スタイルで録音に入った。当然、仕上がりは極めてシブイ。当時モンマルトル界隈の画家たちの間では、マイルスやコルトレイン等と並んで、最も愛聴されたという。そして、当然、一般には全く受けなかった。尚、本作から30センチ盤になった。　（松山）



SERGE GAINSBOURG
Gainsbourg Percussions
LP/Philips 434 994 BE　'64年

'64年に入って初めてフランス・ギャルに〝アイドルばかり聞かないで〟などのイエ・イエ・ポップスを書いたことが、セルジュの心のわだかまりを一気に解消したのだろうか、この頃から彼ははっきりと新しい時代にマッチした大衆音楽を作っていこうと決意したようだ。同年発表されたこの6枚目のアルバムは、かなり斬新な音作りとなっている。前作同様、M・ゴードリーとE・バクチックとのトリオによる制作だが、全編に女性コーラスとパーカッションをフィーチュアし、アフロ&ラテン・フレイヴァの濃いアレンジで攻めまくっている。セルジュはアフリカやラテンのレコードを大量に買い込んで、かなり熱心に研究したらしい。ニュー・ジャズやラテンがもてはやされる昨今の東京でもバカ受けしたそうだ。　（松山）



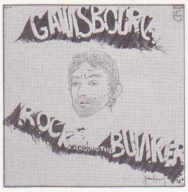
SERGE GAINSBOURG
Histoire De Melody Nelson
LP/Philips 6397 020 2　'71年

映画音楽やアイドルの仕事、あるいは色恋沙汰ばかりに熱心になり、自身のオリジナル・アルバムは6年以上も発表してなかったセルジュだが、'71年になってようやく出たこの新作は、彼の全作品の中でも最も大がかりな、そして最初のコンセプト・アルバムとなった。バルドーと別れた'68年に新たに恋仲となったジェーン・バーキンが、ピグマリオン・セルジュのロリータ幻想に決定的な火を付け、14才の赤毛の少女メロディを巡る物語を誕生させた。50人編成の大オーケストラを配したかなり実験的な音作りが成されており、決してポップな作品ではないが、本質的に純粋芸術指向家であるセルジュの贅質がよく伝わってくる。が、本作における最大の貢献者は、名アレンジャーのジャン=クロード・ヴァニエだろう。　（松山）



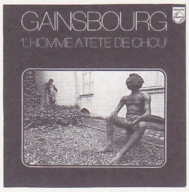
SERGE GAINSBOURG
Vu De L'extérieur
LP/Philips 6499 731　'73年

'70年代は、ゲンズブールにとってけっこう厳しい時代だった。'60年代のようなアイドル相手の仕事が極端に減って、自分自身の音楽や映像表現の場が広がったのはいいが、その結果逆に、前にも増して一般的な支持が得られにくくなったのだ。が、この不遇の'70年代こそ、アーティスト・ゲンズブールの真価が十分に発揮された時代でもある。'73年のこのアルバムは、前作〝メロディ・ネルソンの歴史〟から一転、非常に美しくメランコリックなメロディを持った曲が多い半面、歌詞はどれもこれもエキセントリックなまでのエロティシズムとバカバカしさに溢れたものばかりで、まさに〝デカダンスとナンセンスの人〟ゲンズブールのイメージが確立された退廃的傑作だと言える。個人的には最も好きなアルバムの一枚。　（松山）



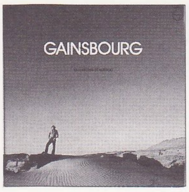
SERGE GAINSBOURG
Rock Around The Bunker
LP/Philips 6325 195　'75年

前作「見かけ」からまたまた激変した75年のアルバム。オリジナル・スタジオ盤としては9枚目。タイトルの〝バンカー〟というのは戦場の塹壕のことで、当時日本発売された際は「第4帝国の白日夢」なる邦題がついていた。歌われている内容は、ナチスを題材にした変態愛欲もののオンパレードで、サウンドは、頭からケツまで古めかしいロカビリー/ロックンロールに終始している。ここまで下らなさを追究したアルバムというのも珍しい。子供の頃、パリを占領したナチスにかなり虐待され心に深いキズを負ったユダヤ人のセルジュにしかできないアブナい表現が満載されており、彼独特のニヒリズムの美学を理解してないと、面白味が全くわからないだろう。「見かけ」にも増して売れなかったのも当然。　(松山)



SERGE GAINSBOURG
L'homme À Tête De Chou
LP/Philips 9101 097　'77年

通算10枚目。「メロディ・ネルソン〜」と対を成すこの幻想的なコンセプト・アルバムは、ギャラリーで買ったクロード・ラランヌの彫刻「キャベツ頭の男」にインスパイアされて制作したという。貧乏ジャーナリストと、理髪店に勤める色情狂の小娘マリルゥのシュールな恋物語。ムーグを多用したBGM的サウンドをバッグに、語りというか呟きのようなセルジュの声が乗る、ポエトリー・リーディング風の音作りで、まともな曲らしい曲はほんの2〜3しかない。本作で初めて試みたレゲエが、続く2枚の本格的レゲエ・アルバムの布石になった。尚「見かけ」から本作までの3枚は、アラン・ホークショウ('60年代から活躍するキーボード奏者)を中心とするイギリスのミュージシャンたちがバックを務めている。　(松山)



SERGE GAINSBOURG
Aux Armes Et Caetera
LP/Philips 9101 218　'79年

英米のポップ・シーンの流行を節操なくパクリ、自分流に味付けを施すのは、セルジュの常套の手法だったが、レゲエに関しても、彼が仏で一番早かった。というか、スライ&ロビーやアイ・スリーズを全面的に起用してアルバム1枚を作ってしまったのは、仏と言わず全白人ミュージシャンの中でも彼が最初だったのではないか。ジャマイカへの飛行機の中で半分、着いた日に残り半分の曲を書き、3日で録音、1日でミックスダウンというやっつけ仕事だったが、何と50万枚以上という大ヒットを記録した。仏国歌をレゲエ仕立てにした〝祖国の子供たちへ〟が右翼の猛反発を招き、大きな事件に発展したが、本作の成功によって、セルジュは完全に永遠のパンク・オヤジとしてのステイタスを確立したと言える。　(松山)



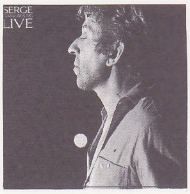
SERGE GAINSBOURG
Mauvaises Nouvelles Des Étoiles
LP/Philips 6313 270　'81年

前作の大成功に気を良くしての、レゲエ第2弾。今度はバハマ/ナッソーのコンパス・ポイント・スタジオに飛んでの制作で、スライ&ロビーをはじめとするスタッフもほぼ同じ、かけた日数もまたまた6日だったサウンドは、よりタフで野太くなっており、レゲエのアルバムとしても1級品。歌詩の方は相変わらずのバカバカしさで、特に、リズム・トラックにオナラの音だけを乗せた〝エフゲニー・ソコロフ〟(セルジュの唯一の自伝的小説「スカトロジー・ダンディズム」の主人公の名)の絶望的なまでの無意味さは、爆笑と共に涙を誘う。また、カトリーヌ・ドヌーヴとのデュエットでヒットした名曲〝国際電報〟のレゲエ・ヴァージョンも聴きもの、英スノードン卿が撮ったジャケット写真もイケる。　(松山)



SERGE GAINSBOURG
Love On The Beat
LP/Philips 822 849・1　'84年
CD/日本フォノグラム 32PD 48

モード写真/映画界の巨匠ウイリアム・クラインの手になるジャケットの鮮烈な印象も功を奏したか、セルジュの全作品中で最大のヒットとなり、これによって彼は遂に世界的人気を獲得した。米のロック・バンド、サウスサイド・ジョニーのビリー・ラッシュやスタン・ハリスン等、デイヴィッド・ボウイの「レッツ・ダンス」のスタッフをバックに配し、音作りの方も当時のボウイをかなり意識したビート主体のアッパー・ファンク・ロックとなっている。特に、バンブーとのSM(鞭)プレイを想起させるオープニングのタイトル・ナンバーは、〝レッツ・ダンス〟そのまま。でもどこからも文句が出ないところが、さすがというべきか。また英語の〝Beat〟を仏語スラング〝Bite〟(チンポ)にかけているのも、彼ならでは。　(松山)



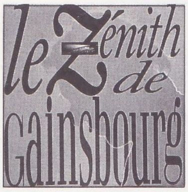
SERGE GAINSBOURG
Live
LP/Philips 826721-1　'85年
CD/Philips 826 721-2
日本フォノグラム 32PD 167

セルジュのライヴ盤は、本作とゼニット・ホールでのラスト・ライヴ、そして80年に出たパラス劇場でのレゲエ・ライヴ2枚組の3タイトルがあるが、本人の気力と内容(曲目やアレンジ)から見て、本作が最も出来がいいと思う。「Love Oh The Beat」の大成功を受けての、パリ・カジノ座でのライヴ('85年10月3〜5日)である。バックは勿論B・ラッシュ一派。新しいヒット曲はほんの少しに留め、〝ボニー&クライド〟〝唇によだれ〟〝ハーレイ・ダヴィッドソン〟〝手ぎれ〟といった代表曲をズラリと網羅しているので、ベスト盤としても楽しめる。但しアレンジはかなりファンク/ロック的だが、そうした中、キーボード1台のみの伴奏で〝ジャヴァネーズ〟をゆっくりと歌い上げるエンディングは感動的だ。　(松山)



SERGE GAINSBOURG
You're Under Arrest
CD/Philips 32PD-434　'87年
日本フォノグラム 32PD 434

最後のスタジオ録音盤。「死ぬ前に自分で納得のいくアルバムをちゃんと作っておきたかった」という本人の言葉通り、音楽的な充実度、全体に迫る気迫とスピード感という点で、最高作ではないか。バック・ミュージシャンは前作と同じ、ビリー・ラッシュとその仲間たちだが、今回のサウンド・プロダクションは、ヒップホップが柱になっている。'87年の時点では、白人ミュージシャンとしては、かなり早かった。勿論、仏国内では、最初の本格的ヒップホップ・サウンド。まあ彼の場合、元々ラップのようなしゃべくりヴォーカル・スタイルをずっとやってきてたから、唐突な感じは全くないが。この頃既にボロボロだった体で最後の力を振り絞って歌い上げる〝俺の外人部隊〟が、白鳥の歌のように聞こえる。　(松山)



SERGE GAINSBOURG
Le Zénith
CD/日本フォノグラム PPD-15　'89年

'88年5月、セルジュは待望の来日公演を行ったが、その直前の3月23〜25日にパリ最大のゼニット・ホールでやったライヴを収録したもので、ＬＰは2枚組だった。全18曲で71分余。「You're Under Arrest」発表後のツアーということで、曲目は「Live」に比べてかなり'80年代のものが多く、アレンジもファンク/ヒップホップ的アプロウチでガンガン。人見記念講堂での熱狂ライヴを思い起こさせる。しかし、その東京で見られた彼の姿がかなり痛々しかったことからもわかる通り、この頃セルジュの体調は相当悪化しており、ヴォーカルにもかなり不安定なところが見受けられる。そのせいか、逆にアジテイションの爆発ぶりは鬼気迫るものがある。結局これが彼のラスト・アルバムとなった。　(松山)



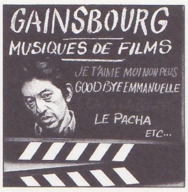
SERGE GAINSBOURG
De Gainsbourg À Gainsbarre
CD/Philips 848 364-2　'91年
日本フォノグラム PHCA 65〜6

死後すぐに、追悼の意を込めて出された2枚組ベスト盤。デビュー曲〝リラ駅の切符切り〟から〝俺の外人部隊〟まで、計42曲を収録。代表曲はだいたい入っているので、入門者にはうってつけだろうし、熱心なファンもとりあえず納得のいく内容か。頭から順に聴いてゆくと、伝統的なシャンソン・フランセーズから始まって、ジャズ、ラテン、アフロ、クラシック、ロックンロール、レゲエ、ファンク、ヒップホップと、まあ何ともヴァラエティに富んだサウンドである。前向きと言えば前向きだが、全く一貫性がないというか、支離滅裂だとも言える。しかし、このイーカゲンさこそが、セルジュ・ゲンズブールという挑発詩人の本質をよく表している。尚、よりコアなファンには9枚組大全集を薦める。　(松山)



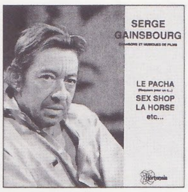
SERGE GAINSBOURG
Je T'aime, Moi Non Plus
ＬＰ/

セルジュの最大のヒット曲といえば、シェーン・バーキンとデュオで歌った〝ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ〟だが、このエロティック・ソングをベイスに、セルジュ自らシナリオを書き、監督し、勿論音楽も作ったのが、'76年公開の映画『ジュ・テーム〜』だ。カフェのウェイトレスとホモのカップルの3角関係を巡るこのファンタジック・シネマこそ、彼のあらゆる創作物の中で最も重要なひとつである。このサントラ盤の目玉は何と言ってもテーマ曲のインスト版。原曲よりも若干ゆっくりめにメロディを奏でるギターを弦楽団が緩やかに包み込み、それを引き継いだバッハのコラールのようなオルガンの響きが天空に溶け込んでゆく。その他カントリー調のピアノ曲〝ジョニー・ジェーンのバラード〟も名曲。　(松山)



SERGE GAINSBOURG
Musiques De Films (1960-1978)
ＬＰ/Philips 9101 246

作曲家としてのゲンズブールの業績において、映画音楽はかなり大きなウェイトを占める。というか、単純にメロディの美しいキャッチーな曲は、彼自身のオリジナル・アルバムよりもサントラの方に多いので、ストレイトなポップ・ミュージックが好きな人には、この映画音楽集を是非薦めたい。『唇によだれ』『セックス・ショップ』『ガラスの墓標』『スローガン』『チャーリー・ブラウン』『グッバイ・エマニュエル』といった映画のテーマ曲や、ＴＶミュージカル『アンナ』からアンナ・カリーナ本人が歌う〝太陽のアンナ〟、『マダム・クロード』の挿入歌〝イエスタディ、イエス・ア・デイ〟、『パリ大捜査網』中の〝バカ者のためのレクイエム〟そして勿論〝ジョニー・ジェーンのバラード〟等々、名曲揃い。　(松山)



SERGE GAINSBOURG
Chansons Et Musiques De Film
CD/Hortensia

'91年、セルジュの死後すぐに、サントラの専門レーベル〈ホルテンシア〉から新たにリリースされた映画音楽集第2弾。もっとも、セルジュが書いた代表的な映画音楽は、前述のアルバム「Musiques De Films」にほとんど入っているので、本作ではそれ以外のよりマニアックで、レコード化されてなかった曲を中心にすくい上げている。まずは名曲〝バカ者のためのレクイエム〟と〝セックス・ショップ〟でツカミはＯＫ、あとは'67年の〝彼に狂った女たち〟から5曲、同年の〝ブレイク・ダウン〟から4曲、'79年の〝メランコリー・ベビー〟から2曲等々、計13曲を収録。ほとんどがインスト曲で、いかにも映画音楽といった感じの地味なものばかりだが、作曲家としての彼のプロフェッショナルな手腕が再確認できる。　(松山)

JANE BIRKIN

□松山晋也

'90年代の今や、ネコも杓子もオカメもヒョットコも得意満面でウィスパーしまくるご時勢の東京だが、そうしたスタイルを最初に確立した"ウィスパーの第1人者"(笑)といえば、やはりこのジェーン・バーキンだろう。ただ彼女の場合、その手の施しようもなくカスな歌唱力ゆえの必然的なスタイルの選択と、持って生まれたチャイルディッシュかつ純情可憐なお嬢様的性格がものの見事に合致したからこそ、ここまで説得力溢れる結果に結びついたわけで、ハスッパなオカメやヒョットコがどんなに真似しても出せない絶望的なまでにナチュラルなはかなさとスゴ味は、彼女だけのものだろう。

ジェーンがショウ・ビジネスの世界に登場したのは60年代半ば、スウィンギング・ロンドンを象徴するカメラマン、デイヴィッド・ベイリーが撮影したグラビアによってである。'46年12月14日、英海軍の高級将校と有名な舞台女優夫婦の間にロンドンで生まれ、何不自由なく育てられたお嬢様のジェーンのキューティさはたちまち評判を呼び、'65年にはリチャード・レスター監督の『ナック』に脇役で映画デビュー、続いて出演したミケランジェロ・アントニオーニの『欲望』では大胆なオール・ヌードで力演。また、10代で既に作曲家ジョン・バーリーと結婚し女児ケイトをもうけたが、'68年には離婚し、ケイトを連れてフランスに渡った。その渡仏のきっかけになったのは、ピエール・グランブラ監督の映画『スローガン』への出演依頼だった。そしてそこでジェーンが出会ったのが、運命の男セルジュ・ゲンズブールである。

『スローガン』でカップル役を演じた2人は、実生活でもたちまち恋人の間柄になり、以後約12年間に渡りフランス芸能界きってのおしどりカップル(といっても法的には結婚してなかった)として、マスコミを賑わわせ続ける。

ゲンズブールはジェーンの出現により、生来のピュグマリオン幻想を決定的に爆発させ、'70年代以降続々とロリータ趣味的な優れた作品(レコード、映画、写真など)を発表してゆき、方やジェーンもセルジュに導かれながら女優/歌手としての才能を本格的に開花させていった。しかし、ジェーンのアーティストとしての成長は、同時にセルジュのロリータとしての存在からの脱皮につながる人間的成長の過程でもあった。自我に目覚めたジェーンが、一人の独立した女であることを宣言するように映画監督ジャック・ドワイヨンのもとに走ったことで、2人の私生活上のパートナーシップは崩れ去ったが、そのことによってジェーンとセルジュの精神的きずなは逆に強まってゆき、ジェーンはいよいよ表現者としての深みを感じさせる作品をものにしていった、と言える。

セルジュ・ゲンズブールによって作られ、セルジュ・ゲンズブールを乗り越えることで一人の表現者としての声と顔を獲得したのが、ジェーン・バーキンである。







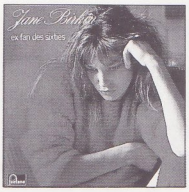
JANE BIRKIN
Baby Alone In Babylone
CD/Philips 814 524-2　'83年
日本フォノグラム 32PD 47

『バビロンの妖精』なる邦題がつけられたこの４枚目のアルバムは、同年度のアカデミー・シャルル・クロ大賞を獲得したジェーンの代表作であると同時に、セルジュのプロデュースした女性ヴォーカルもの中の最高作の１枚でもある。'80年に２人の私生活上の仲は壊れ、しばらくの間セルジュは廃人同様だったが、この頃ようやく立ち直り、２枚の力作をほとんど同時に作ってしまう。１枚が本作で、もう１枚がイザベル・アジャーニのアルバムだ。ドヌーヴのアルバムに入っていた名曲〝国際電報〟をはじめ、なんとも美しい曲のオンパレード。ブラームスの交響曲第３番の３楽章のメロディを用いたアルバム・タイトル曲以外の10曲は勿論全てセルジュの作詞・作曲。バックは例によってアラン・ホークショウ一派。（松山）



JANE BIRKIN
Amours Des Feintes
CD/Philips 846 521-2　'90年
日本フォノグラム PHCA-32

'86年に同名大ヒット曲を含むコンピレイション・アルバム『Quoi』、'87年に『バビロンの妖精』の続編的な秀作『Lost Song』及び２枚組ライヴ・アルバム『Au Bataclan』をリリースし、３年ぶりに登場したスタジオ新録盤は、セルジュ＆ジェーンのラスト・アルバムになった。前年、肝臓の３分の２を切除する大手術をしたセルジュは、この頃既に半死の状態だったが、ここでも最後の力を振り絞るように全ての詞と曲を書き、加えてジャケットのイラストまで自ら手掛けた。結局セルジュは死ぬまでひたすらジェーンのみを愛し、ジェーンへの愛だけを自身の生の拠り所としたことが、本作を聴くとよくわかる。全体に起伏が乏しく弱々しいがゆえに、メロディの美しさが余計哀しい。セルジュ最後の愛情表現。（松山）



JANE BIRKIN
Ex Fan Des Sixties
LP/Fontana　'78年

'69年に〝ジュ・テーム〜〟や〝ジェーン・B〟などが入ったセルジュとの連名アルバム「Jane Birkin-Serge Gainsbourg」を出した後、'73年に単独名義の１stアルバム「Di Doo Dah」、そして'75年に２nd「Lolita Go Home」を発表。本作はそれに続く第３作目のアルバムである。前作が準備不足のセルジュに代わってフィリップ・ラブロが歌詞を書き、ジャズのカヴァもあったりしたのに対し、ここでは詞、曲、プロデュースと全面的にセルジュが本腰を入れて制作している。ヒットした冒頭のタイトル曲（邦題〝思い出のロックンローラー〟）は、ジェーンがなかなか上手く歌えず、一度ボツになった半年後の再トライでようやくセルジュのＯＫが出たという。〝クラシー・Ｘ〟等の韻の踏み方がいかにもセルジュらしい。（松山）



JANE BIRKIN
Je Suis Venu Te Dire Que Je M'en Vais
CD/日本フォノグラム PHCA 1009〜10　'92年

セルジュの死後発表されたカジノ・ド・パリの２枚組ライヴ。録音は91年５月、つまりセルジュの死の２カ月後。計26曲収録。通常のライヴとは異なる意味合いが込められていることは、収録曲を見れば一目瞭然。これまでに彼女がリリースしてきた自分のアルバムには入ってない、セルジュの代表的な持ち歌をここでは何曲も歌っているのだ。〝プレヴェールに捧ぐ〟〝雪の下のマリルー〟〝手ぎれ〟等々。ここでのジェーンは、誰にも何の挨拶もなくひっそりとあの世へ旅立って行ったセルジュになり代わって、悲しみを押し殺しながら必死になって歌い上げる。２人の関係は、一緒に暮らした12年間のみならず、別れた後の10年間があって初めて完結したのだ、と改めて宣言しているように聞こえる。（松山）

MYLENE FARMER

□内田哲雄

ミレーヌ・ファルメールの謎
逆説→戦慄の方程式

ことサウンド面に関して言うなら、チャートを狙ったかのようなキャッチーなリズム、表面上の「軽さ」ははっきり言って「逆説」だと思う。確かに純フレンチ・ポップス・シンガーとして聴き流すことも可能だ。しかしそれができなかったのは、一過性のポップスらしからぬ耳離れの悪さを感じたからである。アレンジはやけに凝っているし、軽いノリとは裏腹のメランコリックというか、どんよりと沈むようなメロディが耳について離れない。

その謎を解き明かすカギのひとつは、一種独得の歌詞にある。彼女の歌に登場するテキストは大部分が「悲しみ」、「絶望」、「裏切り」、「死」といった、モチーフとしては非常にネガティヴなものが多い。こうなるとあのキャッチーさと合わないではないか、という声も出そうだが、私はその逆と見る。こうしたアンダーなシチュエーションをグショグショに泣きぬれたメロディで演出した場合、引き出せるモノには限界があるし、第一に陳腐だ。まかり間違えば「もう誰も愛さない」の世界に一直線である。ところが彼女はこうした「鬱」なテキストを軽快なサウンドにのせて淡々と歌う。その両極端ともいえるコントラストが、そこに内在する属性を何倍にも増強する。黒いオブジェを白い背景によって引き立てる、というとわかり易いかもしれない。「悲しみの極みは笑う」という言葉があるが、軽いからむしろ、コワイ。だからこそ「逆説」なのだ。ちなみに彼女はフェイヴァリット・アーティストとしてピーター・ゲイブリエルとエドガー・アラン・ポォをあげていたが、なるほど納得。

もうひとつ、彼女の音楽を語る上で忘れてはならないのがビデオ・クリップだ。以前本誌のレヴューでも紹介したが、その凝り方たるやすでに尋常ではない。戦争、憎しみ、流血、そして体当りの演技。マーケッティング・リサーチ的見地に立っても、アイドル・ポップスとして売り出すには逆効果なやり方としか思えない。イメージの崩壊につながりかねないほど、見せなくてもいい側面までを露わにしているし、チャートの上昇を狙うならば他にやり方はいくらでもあるはずなのだ。そこで重要となるのは映像とテキストの関連性である。先にテキストの特質を「鬱」と書いたが、曲を一聴してわかる通り決して喜怒哀楽を全面にはぶつけてこない。むしろ妙に理性的な、もっと突っ込んでいえばある種の「客観性」めいたものを感じたりもする。その背景にあるのはズバリ、「精神分析」そして「心理描写」である。一見奇をてらったかにも思える映像作品は、人の心の中に眠る「潜在意識」の投影図だ。テキストの中に隠されたこの潜在意識が映像(視覚)を触媒としてある時は「憎悪」、ある時は「哀しみ」に姿を変えて襲いかかってくる。モチーフの選択も実に巧妙だ。かのイソップがキツネやヒツジなどを使って童話まがいの心理学をブチ上げたように、映像におけるシーンのひとつひとつが心の裏側に隠された「エス」を置き換えたもののように思えたりもする。例えば、女性の「性のめざめ」を描いた"Sans Contrefaçon"や"Plus Grandir"に登場する人形は性に目ざめる前の無垢な子供心の分身を連想させるし、愛情が高じて殺意へと変わる瞬間の心の葛藤を歌った"Sans Logique"に登場する黒ずくめの老女たちはまるで純愛をあざ笑うかのようにささやきかける「憎悪」の象徴のようだ(老女たちが去った後に見せる悔恨の血の涙、このシーンは何度見ても鳥肌が立つ)。恐るべき洞察力である。見透かされているようでやはり、コワイ。彼女の作品に接した時に感じるゾクゾク感は、何か腹心を見抜かれた時の「ギクッ」という感覚に近い。この戦慄こそ彼女の中に秘められた謎、その方程式を解くカギなのかもしれない。これから接してみようという方はまずビデオから当たってみると良いと思う。

最後につけ足しておくと、ライヴ・アクトもまた映像に匹敵するほど徹底したものである。とりわけ墓地を形取ったステージ、ジプシーや修道士といった異質な姿をまとったダンサー達に度肝を抜かれた。是非ナマで見てみたい。しまいにゃフランスまで追いかけるぞ。来日した暁には、是非赤飯を、といきたいところだが、彼女には紅白の色合いは似合わない。やはりモノトーンだ。上にごましおでもふりかけるか。なお、過去のサポート・ミュージシャンの中には、アラン・アトゥ(元マグマ)、フレドリック・ルソー(シリル・ヴェルドゥ、ジャン・ミシェル・ジャールと共演)、そしてベルナール・パガノッティといった有名どころの名も見える。







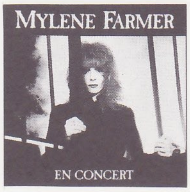
MYLÈNE FARMER
Cendres De Lune
CD/Polydor 831 732-2 '86年

奇才Laurent Boutonnatプロデュースによる１作目。実は'80年代初め、まだ10代の頃にRCAからリリースされたアルバムが存在するのだが、うだつの上がらないただのポップス物であったようだ、本人も忘れたいに違いない。そして本作はそれとは全く趣きを異にするロリータ系ささやき路線を地でいくものといえそう。しかし不必要なまでに凝りまくったアレンジは普通のポップスと言うには引っかかりを感じるし、加えて映画仕立ての大がかりなビデオ・クリップが大きなセンセーションを巻き起こし、一大ステイタスを築くまでになってしまったのである。デビュー・シングルとなった〝Maman A Tort〟はRCA当時に作られた曲であり、作曲者である歌手のJérome Dahanはその当時の彼女の恋人でもあった。　（内田）



MYLÈNE FARMER
Ainsi Soit Je…
CD/ポリドール POCP 1001 '90年

作曲、アレンジ両面共に前作から格段の進歩を遂げた２作目。どの曲も代表曲と呼べるほどまでにそれぞれの「色」を持っているし、彼女の作品を他のロリータ物から遠ざけていた独特の「毒気」も増した。ビデオ・クリップばかりが話題になりがちだが、尋常ならぬアレンジも手伝って単独の音楽作品としても十分楽しめるものであることは強調しておきたい。そのビデオ・クリップだが、今ここに極まれりといった感があり、ちょっとエッチな歌詞の④は20分もの戦争映画になってしまっているし、男と女の愛憎を歌った⑦などはゴシック風のカルト・ムービーだ。これが単なるコケおどしではないことは一見してもらえば分かると思うが、制作者Boutonnatの映像作りの才にはただ驚きあきれるばかり。　（内田）



MYLÈNE FARMER
En Concert
L P/Polydor 841 744-1 '89年
CD/Polydor 841 744-2

このライヴのビデオが発売されているような日本にはならないものなのか。エンターテインメントだし、よく出来たライヴ・ビデオだぞ。ステージ冒頭、中央最奥上段から出て来るシーンなんぞ、逆光で影になった彼女が立ちはだかり、服は風に舞い、バックの音はそれこそコーラス・メロトロンの壁よ、もう神々しいのなんの。で、低い声で１曲目を呟くように歌い出したあかつきには暗い気分のまま高揚してしまうという訳の分からなさだ。照明も衣装もサポート・ダンサーも目まぐるしく完璧壮大過剰。でもファッショナブルな中で濃くドロッとするのだ。２枚組に代表曲がずらり。アルバム未収曲〝Puisque〟など、ホントさめざめする。音だけではよく伝わらないアルバムだ。この人は映像を観て音楽を聴かないと。　（松本）



MYLÈNE FARMER
L'autre…
CD/ポリドール POCP-1125 '91年

ミレーヌ・ファルメールの代表作。内面を深く一気に刺すような、そしてその痛味が広がっていくような詞の世界は、〝綺麗〟に映りがちな彼女から想像もつかない。音のクールさもこれを覆い隠す。しかしシングル・カット並みに製作されているビデオ作品を観れば、誰もが納得せざるを得ない程に詞の描くリアリティが強烈だ。それはクリップなどといったちゃちな物ではない。短編映画なのだ。そこに見る彼女の演技力には目を見張るものがあるが、何よりこの人は痛味というものを知っているのだと思う。洗練された彼女という外見とは裏腹に、渦巻く情念がコンプレクスになったような深さがあり二重人格、そのまま。本当に外目からは分かりづらいが、倒錯している。この作為的な音楽と詞の関係は、まさしく彼女の外と内だ。　（松本）



MYLÈNE FARMER
Dance Remixes
CD/Polydor 517 557-2 '92年

これまでシングルのみに収録されていたアルバム曲の別ヴァージョンを集めた２枚組の編集盤。一見ベスト・アルバムのようにも思えるが、「アレンジの鬼才」Boutonnatが徹底的に手を加えているだけに、テイクが異なるというだけで全く「別の曲」として楽しむことが可能である。特に１stアルバム収録曲はシングル自体を入手することが困難なだけに貴重度は高い。他曲のコーラス・パートを引っ張り出してぐちゃぐちゃにいじくり回した〝Plus Grandir〟のライヴ・ミックス・ヴァージョンにおける凝り方は凄まじいものがあり、各所でBoutonnatが「偏執アレンジャー」としての才を存分に発揮している。ソロ・アルバムでも作ればさぞかしプログレッシヴなものができただろうに。　（内田）

CHANSON



キャロル・ロール

A to Z



ALAIN BASHUNG
Pizza
L P/Philips 6313129 '81年

アラン・バシュンは、奇妙でありながらポップなロックン・ロールをぶっきらぼうな嗄れ声で歌う1947年生まれの作曲家兼歌手。このイギリス録音アルバム「ピッツァ」は1981年のフランス・ロック大賞を受賞した彼の代表作で、以前からの協力者、ボリス・ベルグマンを作詞家に迎え、サックスでメル・コリンズ、キーボードでトミー・アイアーが参加。大ヒット曲〝Vertige De L'amour(恋のめまい)〟を筆頭に、ロカビリー的な響きのギター、エレクトロニック的なドラムス、隠し味的なシンセサイザーを核にした彼らしい退廃的なロックン・ロールが聞ける。なお、1986年のアルバム〝Passé Le Rio Grande...〟にはイアン・デュリーのミュージシャン２人とキーボードのヴィック・エマーソンが参加している。（松元）



ALAIN BASHUNG
Osez Joséphine
CD/Barclay 511485-2 '91年

エレクトロニクス系のロックからルーツ音楽まで、ロックとかシャンソンとかいう言葉だけでは語りきれない音楽性の幅の広さを示してきたアラン・バシュンだが、「思い切ってやりなよ、ジョゼフィーヌ」と題されたこのアルバムはメンフィスとブリュッセルで録音されたブルース・ロック、カントリー風の作品だ。良く研究されており、出来も最高である。〝マダム・レーヴ〟という曲では元マンダラバンドのヴィック・エマーソンが弦のアレンジをやっていたり、ギターとペダル・スチールとベースのみの伴奏による〝サテンの夜〟のブルース風のカヴァーを英語で歌っていたりと、なかなか面白い。フランス語が違和感なく聞けてブルースも好きなプログレ・ファンがもしいれば、ぜひ一聴を勧めたい。私は好きだ。（松元）



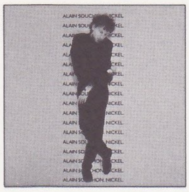
ALAIN KAN
Alain Kan
L P/Motors MT 44026

アラン・カンのファースト・アルバム、彼はフレンチ・デカダン・ロックの雄として紹介されることが多く、そのため、きわ物的存在と思われている節が多少なりともあるが、実際はかなりの実力を持ったシンガーである。その声には独特の艶があり、本作品では激しくシャウトする唄い方から甘くささやくような唄い方まで変化に富んだ歌唱を見せる。バックの演奏も見事に彼の唄を盛り上げている。また、B①の軽快なリズムを基礎に甘美なシンセサイザーとメロディアスなフルート、ギターが絡み合うインスト部分の出来は白眉である。更に、センスの良いジャケット・デザインも特筆に値する。次作（Mortors MT 44036）も本アルバムと同系統の作品であるが、それ以後の作品はポップ色が強まっている。（賀川）



ALAIN SOUCHON
Jamais Content
L P/RCA PL 37137 '77年
CD/RCA BMG-Ariola ND 70218

アラン・スーションは1944年生まれの作詞・作曲家兼歌手。作曲家で歌手のローラン・ヴルズィとのコンビで歌を作るようになった1970年代後半から爆発的な人気を呼ぶ。新しい感覚の歌詞と曲調を持つユーモラスで優しい自伝的な歌で「男は強くあるべし」という固定観念をひっくり返し、「新しいフランスのシャンソン」のさきがけとなる。この２人はレノン＆マッカートニーに匹敵するコンビといえよう。本作「Jamais Content（いつも不満足）」は初期の大ヒット作。世の中に適応できずに放浪する青年を歌った自伝的な６曲目〝ねえ、お母さん、痛いよ〟、彼が15歳の時に事故死した父親に「あなたと同じ名前の小さな赤ん坊が今僕の家にいるよ」と歌いかける８曲目〝あなたを見た18歳〟などを収録。（松元）



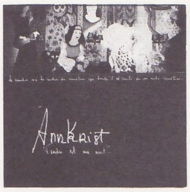
ALAIN SOUCHON
Nickel
CD/Virgin 30314 '90年

1985年の「C'est Comme Vous Voulez（あなたのお気に召すままに）」と1988年の「Ultra Moderne Solitude（超現代的孤独）」の２枚のアルバムを出した後の、彼にとって３枚目のライヴ・アルバム。音楽的にはロック色が強まっている。世の中に適応できなかった青年は力強く成長し、感傷的であることは決して恥ずかしくないことを独特の視点で歌う。「パリ、オスマン大通り、５時／突然彼女の心から涙が溢れる／一体何が起きたのかわからない／なぜ頬にこの河が流れる／これが超現代的孤独…」その一方で、フランス的な反骨精神もある。「歌手の私には意見はありません／どんな企てにも従います／私には名誉はありません／あなたのお気に召すことを羊よろしくやりますよ／あなたのお気に召すままに…」（松元）



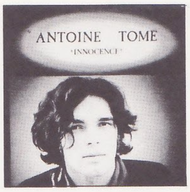
ALAIN SOUCHON
C'est Déjà Ça
CD/Virgin 72438 391782-2 '93年

彼の曲作りが円熟の境地に達した感もある現時点での最新作。１曲目の〝Foule Sentimentale（感傷的な大衆）〟は作詞、作曲ともスーション自身で、大ヒットしたついでに1994年の「ヴィクトワール・ドゥ・ラ・ミュージック」（フランス版グラミー賞）の最優秀男性歌手部門のグランプリを受賞した。寂しげなメロディーで「バラ色の人生が僕達にもっと多くの物を持てと仕向け、さらにまた別の物が欲しくなる／幸せとはタンス一杯の物を持つことだと思わされた／感傷的な大衆の僕達は理想に飢え、星にひかれ、商売絡みでない物に魅せられる」と歌う。アルバム・タイトル曲〝もうそうなんだ〟ではフランスに住むアラブ系移民の青年が孤独を抱えて当てのない夢を見る姿が共感を込めて歌われる。（松元）



ANN KRIST
Tendre Est Ma Nuit
LP/Spalax SPX 7.6810　'78年

確かもう１枚アルバムがあるが、そちらは未聴。緑色でデザインされた何かあり気なジャケットからレコードを取り出すと、聴こえてくるのは、ハスキーなおばさん声。どことなくママ・ベア・テキエルスキを思わせる。初期のママ・ベアほど過激な印象ではないが、後期のママ・ベアよりは遙かにそれっぽい。バックはジャズ・タッチで音少なに演奏されている。どすのきいたジャズ・ヴォーカルとも言えなくもないが、やはりシャンソンの劇的な路線といったところだ。それにしても語尾のひきのばし方などママ・ベアにそっくり。曲自体は割と淡々としていて上下運動しない。当然、薄暗いムードがある。（松本）



ANTOINE TOMÉ
Innocence
LP/Argile ARG 2001　'79年

カトリーヌ・リベロやエマニュエル・ブーズほど強烈ではないが、アントワーヌ・トメも、実力派ミュージシャンによる面白味のある演奏をバックに唄う個性的なシンガーである。本アルバムは「Les Chants Du Coeur (Moshé Noim MN 10030)」('78)に続くセカンドで、ディディエ・ロックウッドらが参加している。ややジャズィな演奏やトラッド色の濃い演奏をバックに、トメはアップ・テンポで澱みなく、情感の籠ったヴォーカルを被露する。それはトラッドの影響下にあるが、そこには留まらない斬新さもある。また、バックの演奏も非常に味わいがある。本作以後も「L'Amour Titan (Flarenasch 723.632)」('81)、「Farniente (同723.649)」('82)、「Tous Les Murs De La Ville (同723.667)」('85)の３枚のアルバムを発表している。（賀川）



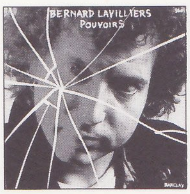
ARMANDE ALTAI
Atavisme
LP/RCA PL 37329　'79年

J・デュグルノの関わったシンガー系の作品の例にもれず傑作となったこの作品、彼が全曲作編曲した上、ローズ、ジャノーと言った仲間とも言える腕達者達も、そのザオ以来の強烈な楽曲を活かし、ふくらませる演奏振りで大きな貢献をしているが、やはり主役であるアルタイの唄その物の力が無ければこれ程の物にはならなかっただろう。トルコ出身との事で多少非西洋的な節回しをも用いた唱法は劇的で、殊に取りつかれた様な高音域、あるいはうって変わった柔かみが瞬時かいま見える辺りは印象的。仏シンガー系トップ・クラスの一枚。（中西）



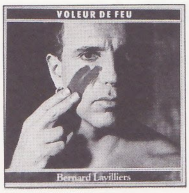
BARBARA
Châtelet 87
CD/Philips 834040-2, 834041-2
'87年
日本フォノグラム 30PD-408～9

バルバラは1930年、パリ生まれ。本名モニック・セール。ユダヤ系のため、ナチス・ドイツの侵攻とともに各地を転々と逃げ回る苦難の少女期を過ごす。終戦後、音楽を学んで1949年から歌い始める。彼女の歌に顕著なのは、絶望や死の影であるが、その裏には、かすれ気味の声を振り絞って希望を掴もうとする気迫が覗く。フランスではその誠実さと気迫は20歳くらいの若い聴衆にも強い感動をもたらしていて、このライヴ・アルバムではその様子がよくわかる。コンサート終盤には〝我が麗しき恋物語〞、〝ピエール〞、〝孤独のスケッチ〞、〝黒いワシ〞、〝ナントに雨が降る〞、〝パリとゲッティンゲン〞と代表曲が続き、歌そのものにだけでなく、聴衆の熱い反応にも感動させられる。これがフランスなのだ。（松元）



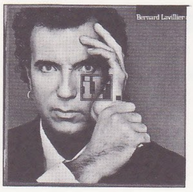
BERNARD LAVILLIERS
Pouvoirs
LP/Barclay 96013　'79年
CD/Barclay 843394-2

ベルナール・ラヴィリエは1946年、フランス中南部の工業都市サンテチエンヌで貧しい労働者の家庭に生まれた。不良少年として感化院にもいたことがあり、アマチュアのボクサーでもあった彼は十代の後半にブラジルに渡り、音楽的、精神的影響を強く受けた。本作「権力」は前半を占める約17分の組曲〝権力〞が圧巻である。１年かけて彼が書いた硬質な歌詞にフランソワ・ブレアンとパスカル・アロヨが冷徹なプログレ調の強力な曲をつけている。商業的なウケは非常に悪かったが、彼の追究するテーマの一つが見事に結晶していることに間違いはない。アルバムの後半にはワルツ、タンゴ、レゲエなどが彼らしく消化された曲が並ぶ。なお、CDは大胆なリミックスが施されてLPよりも音像が明瞭になっている。（松元）



BERNARD LAVILLIERS
Voleur de feu
LP/Barclay　829342-1　'86年
CD/Barclay 829342-2

１作ごとにスケールを増すベルナール・ラヴィリエの傑作がまた１枚。総計50人以上のミュージシャンが参加し、旅、放浪、闘争、孤独、冒険などをテーマに力作を作った。フランソワ・ブレアンのピアノが見事な〝タンゴ〞、放浪の戦士の安らぎを歌う〝国境〞、「どの国の生まれであろうと、肌の色が何であろうと、音楽は内からほとばしる心の叫び」と歌う、弾圧されたアフリカの社会活動家を鼓舞する〝黒と白〞、パスカル・アロヨの作曲になる、危険な南米の奥地で一攫千金を夢見て金鉱を探す男たちの歌〝成り上がり貴族〞、セネガルのドゥドゥ・ニジャエ・ローズのパーカション隊にジャニック・トップとラヴィリエが曲をつけた〝戦いの師〞など、ラヴィリエの経験と思想が生々しく伝わる。（松元）



BERNARD LAVILLIERS
If
LP/Barclay 837718-1　'88年
CD/Barclay 837718-2

再び強力な作品。旅の経験から書かれ、中南米の政情不安を伝える〝サンチアゴ〟と〝ニカラグア〟、アイルランド人の放浪の歴史の一コマ〝On The Road Again〟、ボードレールの詩にボサノバの曲をつけた〝ある顔の約束〟、戦乱の中を生きる子ども達に歌いかける〝小さなおまえに〟、映画に触発された〝市民ケーン〟など強力な歌揃い。冒頭の〝もしも〟はラディヤード・キプリングの詩にクラシック調の曲をつけた歌で、男の生き方を問う。「お前の人生をかけた作品が壊されても黙って再び作り始められれば／憎まれても憎み返さず、自分の身を守れれば／民衆のままでいながら国王に進言できれば／夢に支配されることなく夢を見ることができれば／息子よ、その時お前は男になれるのだ」　(松元)



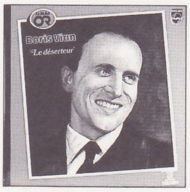
BERNARD LAVILLIERS
Champs Du Possible
CD/Barclay 523304-2　'94年

現時点での最新作「可能の場」。権力をテーマにしたプログレッシヴ・ラップ(?)の〝第三の刃〟にまず度胆を抜かれる。「西暦2000年が我々の目の前にあり、数時間が我々を隔てる。それについては何も言うな、と言われた。だが、この沈黙はお前たちの時計を合わせる呪われた振動のようだ。今こそその時だ。第三の刃について語るのに早過ぎはしない。」5曲目の〝女と子ども〟は、孤独の不安感を醸し出す美しいバラード。最後の曲〝物としての女性〟では、後半に配されたピアノとトランペットのソロが良い。パルカル・アロヨが音楽面を主導しており、全編にわたって、ロックからレゲエ、ラテン、エレクトロニクスまで緻密に作られている。重厚好みのプログレ・ファンならラヴィリエを聴いて損はない。　(松元)



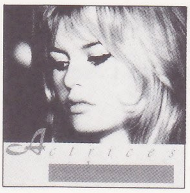
BEVINDA
Fatum
CD/Célluloid 66943-2　'94年

パリを拠点に活動するポルトガル系の女性シンガー、Bevindaのデビュー・アルバム。アコースティック・ギターやアコーディオン、ストリングスをバックにポルトガルの代表歌謡「ファド」をしっかりと歌う。一口に「ファド」と言っても本国で見られるような古典的なものではなく至ってモダンにアレンジされており、音だけを聞けばシャンソンやミュゼットと区別がつかなくなることもしばしばである。メロディも泣かせどころのツボをよく心得ており、とりわけ2本のフルートとアコーディオンの物悲しいフレーズが絡む⑤は絶品である。ミュージシャンは全てフランス勢で固められており、ベーシストは元MAGMAのMarc Eliardだったりする。全曲ポルトガル語。　(内田)



BORIS VIAN
"Le Déserteur"
LP/Philips 9101268　'55年

ボリス・ヴィアン。小説家、俳優、作詞作曲家兼歌手、トランペット奏者、評論家。小説「うたかたの日々(日々の泡)」はメモリアンスのアルバムの題材になったことはご承知の通りである。歌手としては、このコンピレーション盤にも含まれている〝原子爆弾のジャヴァ〟、〝僕はスノッブ〟、〝進歩の嘆き節〟、〝怒鳴られるために人、ここにあらず〟、〝脱走兵〟など、皮肉とひねったユーモアを交えて国家権力や風俗を痛撃する歌が持ち味であり、つまりはフランス的な歌手なのだ。「大統領閣下、私は人を殺したくありません／私は脱走します／もし血を流さなければならないのなら、大統領閣下、あなたの血をどうぞ／もし私に追手をかけるなら／私は武器を持たないから撃ってもよいのです。」なお、彼の息子はパトリック・ヴィアン。　(松元)



BRIGITTE BARDOT
Actrices

今や動物愛護運動超過激派オバサンとしてしかニュースには登場しないバルドーだが、'60年代の彼女は、ホントにもう気絶するほどセクシーでカワイかった。富豪の娘としてワガママいっぱいに育っただけあり、その一挙手一投足にダイナミックなキュートさとナマイキさが溢れており、庶民はただもうオロオロするやら感心するやら。歌だって勿論、取り付くシマもないほどヘタクソで自由奔放である。本ベスト盤は、'62年から'70年の間に発表された彼女のシングル・ヒットを中心に編集されたもので、計21曲を収録。ここでもやっぱりゲンズブール曲(6曲)が聴きどころで、中でも'86年になって初めて日の目を見た〝ジュ・テーム～〟はドロドロスケベ。名曲〝ハーレイ・ダヴィッドソン〟が未収録なのがイタイ。　(松山)



BRIGITTE BARDOT ET SERGE GAINSBOURG
Bonnie And Clyde
LP/Fontana 885.529　'67年
CD/日本フォノグラム PHCA 75

終末的なストリングス・アレンジ、呟くようなゲンズブールのvo、まるで投げやりな何をやるのも面倒だといったバルドーの声、まるでのめり込むように二人の声がボニー＆クライド…と歌う。淡々とした曲調が何もかもをその中に浮かび上がらせ、そして埋没させる。曲展開とか、はっきりしたメロディとか、音楽に必要だと思われているものは切りとられ、或いはエレメントに過ぎず、代わって重要なものを浮き出たせている。歌をうたうことが歌でなく、そこに息づいているものが歌だとしたら、彼ら二人の歌は、そのものであり、いつも底の方で流れている歌だ。簡単に流行で断ち切られる音楽ではない。聴き続けられて、忘れられずに在り続けるものだ。表面的に語られ、表面的に真似されてる今の流行は余りに安易だと思う。　(平野)



CAROLE LAURE
Alibis
L P/Saravah RSL 1072　'79年
CD/Mantra 005

キャロル・ロールと言えばルイス・フューレイ、ルイス・フューレイと言えばレナード・コーエン。本作以前から、ルイスとの連名で活動を始めていた彼女の、ソロ・デビュー作が本作（日本語になっている「アリバイ」の意味）です。でも、連名の数作とどう違うのかと聞かれても、同じです。作曲は全曲ともルイスですし、演劇的で屈折したユーモアを交えた、退廃的でなおかつ美しいメロディーは、いつもどおりです。それが、少し低めで艶めかしいキャロルの歌声を生かしているのです。ルイス自身のソロ・アルバムの曲は、もっとエキセントリックな曲が多いですから、その使い分けは流石です。本作は勿論ですが、連名のアルバムも、一挙CD化されていますから、未聴の方は、是非とも聴いて下さい。　（斉藤）



CAROLÉ LAURE
Western Shadows
CD/Secret 842146-2　'89年

キャロル・ロールって美人だよな、「Alibis」のジャケとか、それに「Alibis」はしっとりと落ち着いた感じだし、などとイメージが結構あった人は多い。けど割と最近来日公演をやってステージではしゃいでパンツ丸出しだったと聞いて、このアルバムにも納得した気がした。アレンジは例によってルイス・フューレイ。「Alibis」のおとなしくおさまったイメージからもっと気楽になって、その分、彼女の地が見えるような気がする。歌詞が英語ということもあるし、だいたい曲調がシャンソンの上へ下への感情露吐ではない人だ。ちょっとうらぶれた雰囲気もある。音のことだけを言うのなら、あえてフランスで囲う必要もない。歌声に都会の臭いがする、そういう意味では洗練されている。でも吐息っぽい内容だ。　（松本）



CARTE DE SÉJOUR
2 1/2
L P/Barclay 831259-1　'86年

フランスは旧植民地のマグレブ諸国（アルジェリア、モロッコ、チュニジアなど）から多くの移民を受け入れている。文化的交流の契機の増大が陽の側面であり、彼らに対する人種差別の発生が陰の側面である。このカルト・ドゥ・セジュールはアラブ系移民とフランス人の混成ロック・グループで、フランスの現代史、文化史の点からも重要なアーチストだ。グループ名の「外国人滞在許可証」にも託された彼らの切実なメッセージは、本作に収録のシャルル・トレネのカヴァー曲〝やさしきフランス〟のアラブ風のアレンジにも明らかである。リーダーの言葉を借りれば、「いちばん紋切型のシャンソンの新しい解釈による、ファシズムや非寛容さへの反撃のメッセージ」であり、この曲は25万枚のヒットとなった。　（松元）



CATHERINE LARA
Catherine Lara
L P/CBS 65304　'72年

デビュー作。最近は随分とファッショナブルになったカトリーヌ・ララも、まだこの頃はポップス畑というにはロック寄りだ。ヴォーカリスト、ヴァイオリニストとしてのララ、アレンジをするピアノ、オルガン奏者のJean Musy、そしてFrançois Auger(ds)他５名のバックメン、全員が一まとまりになって曲によってはプログレ・ファン向けのものになっている。ジャン・ミュズィのアレンジとララのヴァイオリンにバックが絡むようなら相当聴ける。ララのヴォーカルは少々なまめかしさがあるが、'72年ということを思えば垢抜けているほうだ。基本的にはヴォーカル作なので誤解のないように。演奏部も半分位の割合であるが、初期のララのアルバムは、こうした傾向が続く。　（松本）



CATHERINE LARA
Lara Live
CD/Trema 710273　'88年

1980年代のカトリーヌ・ララの集大成的な位置付けのできるライヴ・アルバム。ジェラール・ビキアロ、ベルナール・パガノッティ、ブノワ・ヴィドマンらがバックを固め、メロディ、ハーモニー重視だがリズムもしっかりしたロックを、低音でハスキーだが艶と伸びと力強さのある例の声で歌っている。短いながらもスリリングな彼女のエレクトリック・ヴァイオリン・ソロも随所で聞かれる。アレンジも良いが、基本的には彼女の作る曲が良いからこそこれだけの充実した作品ができるのである。初期の大ヒット曲〝La Craie Dans L'encrier（インク壺の中のチョーク）〟は大胆にアレンジを変えてコーラス主体で歌われるが、良いメロディはどのようなアレンジでも映えるという良い見本である。　（松元）



CHARLÉLIE COUTURE
"3 Folies" Live
L P/EMI Pathé Marconi 7923831
'89年
CD/EMI Pathé Marconi 792604

シャルレリー・クチュールは1956年、フランス東部のナンシーで生まれた作詞作曲家兼歌手である。彼は美術畑の出身で、音楽をやるかたわら絵も描く。1980年代前半は英国のアイランド・レコードと直接契約していた唯一のシャンソン歌手としても知られる。本作は、青年層の孤独を描いた２枚のアルバム、「Solo boys」(1986)、「Solo Girls」(1988)からの曲だけを歌ったライヴ・アルバム。ブルース色ある味わい深いロックに乗せて、古くて新しいテーマを語り、歌う。非行少年の歌〝ジャッキー〟の前で非行と無気力に至る人間の心理を語った後の「個人間の違いを強調するほど、人間同士の連帯感が失われる。そう考えると人種差別が台頭するのも不思議ではない」という言葉が彼の歌の洞察の深さを象徴している。　（松元）



CHARLOTTE GAINSBOURG
Charlotte For Ever
LP/Philips
CD/日本フォノグラム PHCA 72

ゲンズブールとジェーン・バーキンの一粒種、シャルロットの今のところ唯一のアルバム。パパが監督した映画「シャルロット・フォーエヴァー」に続き、同じくパパが書き下ろして制作された。この時シャルロット15才。当時ゲンズブールが組んでいたビリー・ラッシュー派がここでもバックについているせいもあるが、サウンドの感触やアレンジのクセは「Love On The Beat」にかなり近い。パパの強力な指導の下で何度も録り直されたに違いない、音程の不安定なウィスパー・ヴォイシングは、バーキンのそれにそっくりだが、ママにはないフテブテシさというか天衣無縫さをも所々に忍ばせているところは、さすがにパパの血か。「Love On～」にも入っていた近親相姦的〝Lemon Incest〟(曲はショパン) も改めて収録。（松山）



CLAUDE ENGEL
Engel Story
LP/CBS 65439　'73年

オメガ・プリュ、マグマのギターリストとして知られるクロード・アンジェル。本アルバムは、そんな彼のソロ・デビュウ作である。マルセル・アンジェル（元オメガ・プリュ）、フランシス・モーズ、ベルナール・リュバらのサポートを受けたアンジェルのアルバムというと、ややハードなジャズ・ロック調のサウンドをイメージするが、全10曲中9曲が彼のヴォーカルをメインにしたポップな作品であり、曲調もリリカルなバラードから、ややコミカルなもの、多少ハードなものとバラエティに富んでいる。短い演奏部分に彼及びゲストの個性を感じるが、全体から見れば、やはり味付け程度である。唯一のインスト曲には、かなりマイルドにはなっているものの、オメガ・プリュの残り香がある。（賀川）



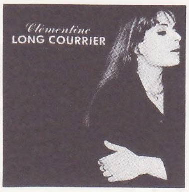
CLAUDE NOUGARO
Zénith Made In Nougaro
CD/WEA 2292-46109-2　'89年

クロード・ヌガロは1929年、南仏のトゥールーズ生まれ。新聞記者として働くかたわらシャンソンを書き、自作を他の歌手に提供することから始め、1962年から自分も自作曲を歌うようになる。彼の歌にはジャズの影響を中心に、時期によってはブラジル音楽、ファンクなどの要素も取り入れられている。本作は、ビュニー・ブリュネル、フィリップ・セス、ダニエル・ゴヨンヌらが参加の「ヌガヨーク」、「パシフィック」の2枚のアルバム発表後のライヴで、アメリカのミュージシャンをバックにした強力なファンク・ロックである。今も現役の彼は1991年には一転してモーリス・ヴァンデールのピアノ伴奏だけのライヴ・アルバムを出しているが、これも見事。なお、アンジュはヌガロの〝赤と黒〟をカヴァーしている。（松元）



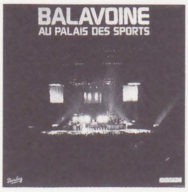
CLAUDINE LONGET
The Look Of Love

これはクロディーヌ・ロンジェの2枚目のアルバムに当る作品。基本的に彼女の作品はどれを聴いてもやってることに大した違いはないのだが、選曲の良さと（つまらないビートルズ・ナンバーがなければもっと良いのだが…）アレンジの新鮮さではこのアルバムが一番。今さら彼女についてあれこれ書くのも野暮で気の引ける作業ではあるが、自然であるがままであるという点でこれほど魅力的なヴォーカルは他に見あたらない。最もそれは彼女の意志や音楽的才能の有無とは全く関係なく、素材としての立場に一貫して忠実だった（あるいはそれ以上のことができなかった）クロディーヌのいさぎよさから来るものなのかもしれない。しかし、そんなことは取るに足らない事柄に過ぎず、いつ聴いても彼女の声は魅力的だ。（関口）



CLÉMENTINE
Long Courrier
CD/ソニー・レコーズ SRCS 6760　'93年

ベン・シドランや日本のゴンチチとの共演アルバムが知られ、シングル曲がCMで使用されるなどして多大な人気を博しているシンガーである。彼女の作品にはシャンソンはもとよりサンバやボサノヴァ、ジャズ等の強い影響が見え隠れしているが（父親の仕事の関係で南北アメリカやヨーロッパを転々としていたが原因らしい）、最もフランスらしいものを挙げると言われれば本作ということになるだろう。この手のご多分にもれずプログラミングを多用してはいるもの、多くのロリータ物とは一線を画す「オトナの雰囲気」が漂っている。1曲を除き、バックは全て日本人ミュージシャンが受け持っているのだが、その筋では名うての実力者ばかりなのでアンニュイなムードはしっかり保持されている。（内田）



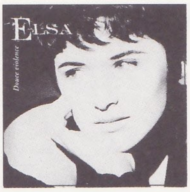
DANIEL BALAVOINE
Au Palais Des Sports
LP/Barclay 825122-1　'84年
CD/Barclay 825 122-2

ダニエル・バラヴォワーヌは1952年生まれ。高音の声、自作の美しいメロディを武器に人気も得ていた作詞作曲家兼歌手で、ベルリンの壁をテーマにしたトータル・アルバムを作るなど、硬派のメッセージも持っていた。1986年に事故で即死し、多くの人に惜しまれた。本作は、1983年の力作アルバム「Loin Des Yeux De L'Occident（西洋の目から遠く離れて）」発表後のコンサートのライヴ・アルバム。〝小さなおっぱい〟、〝応援団〟のような軽いユーモラスな曲から、麻薬を明瞭に否定する〝檻の中の魚〟、西洋の目から遠く離れた第三世界の現状への関心を促す〝革命〟、〝目覚める寡婦〟、〝君の頭で叩け〟などの曲まで、歌に全力をぶつけている。当時のピーター・ゲイブリエルからの影響もある。（松元）



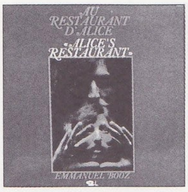
ELSA
Rien Que Pour Ça
LP/BMG Ariola 210979　'90年
CD/BMG Ariola 260979
　BMG ビクター BVCP 123

本名エルザ・ランギーニ。1973年パリ生まれ。青い目に栗色の巻き毛。好きなもの、パスタ、映画、フランス語、両親、飼っている犬、ピアノなど。嫌いなもの、不正、人種差別、麻薬、ほうれん草、周りで煙草を吸う人など。フランス的な女性アイドル歌手である。声や歌唱はべとつかず、恋の歌もクールな中に可愛らしさとほのかな官能性が秘められている。恋の歌だけではない。親子の関係について歌う〝去っていく子ども〞、人生と戦う勇気を歌うラストの〝戦うのよ〞、そして、自らメロディを書いた〝ただそれだけの理由で〞では人種差別を取り上げている。社会を自分の目で見つめる彼女の意志がこれらの歌に反映されている点が彼女をフランス的なアイドル歌手という所以である。必聴。　(松元)



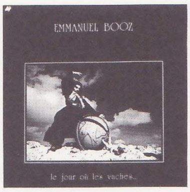
ELSA
Douce Violence
CD/BMG Ariola 74321111552　'92年
　BMG ビクター BVCP 602

前作「ただそれだけの理由で（邦題：夢物語）」に続くエルザのサード・アルバム。女優としても活躍する彼女だが、映画「カサノヴァ最後の恋」で全裸シーンを演じただけあり、本作には〝マーキュロクロム〞、〝激しい愛〞など、彼女の女性としての成長が窺える官能的な曲が目立つ。日本盤の帯には「19才の清純エロチカ」というあまりにも的確で赤面してしまうコピーが付いているほどである。その一方で、〝一緒にいれば（エートル・アンサンブル）〞という曲では「一緒にいることは二人が似ているということじゃない／一つの習慣より二つの孤独／リズムも傾向も私たち全然似ていない／でも彼を愛している」と恋愛の中の精神的独立を歌う。フランスはアイドル歌手も大人である国なのだ。推薦。　(松元)



EMMANUEL BOOZ
Au Restaurant D'Alice
LP/Barclay 920 186　'70年

シングル「Le Mont De Oliviers/Glorification (Vogeu INT80217)」('69) で解散したEGREGIEのヴォーカリストとして、また、同じ曲を再レコーディングした自己のファースト・シングル「Le Mont De Oliviers/Le MontDe Oliviers (Instrumental) (Barclay 61.185)」において、リリカルでややクラシカルな演奏をバックに、情感に富んだヴォーカルを聴かせたエマニュエル・ブーズ。そんな彼のファースト・アルバムは、他の作品（本アルバムからカットされた2枚のシングルは除く）とかなり異なった内容である。アルバム・タイトルからも分かるように、アーロ・ガスリーのアルバム「アリスのレストラン」に収録された曲をアーロ・ガスリーの監督のもと、フランス語で歌っている。一風変わったカントリー・ロックが聴ける。
(賀川)



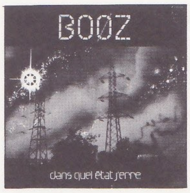
EMMANUEL BOOZ
Le Jour Où Les Vaches…
LP/Atlantic 50095　'74年

本作は彼の2ndにあたると思われる。これ以前にバークレーから「Alice Au Restaurant」と題されたシャンソン・アルバムが出ている。ブーズの作品はいずれも超強力無比な彼のヴォーカルをメインとして創り上げられてはいるが、各アルバムのサウンドはそれぞれ少なからず異質な物となっている。本作は壮大なオーケストラ・アレンジとバンドによる演奏が見事な調和を保ち、圧倒的な緊張感を持って進行する。曲調は重く、暗く、深い。それは正に彼独自の音空間であり、そのスケールの大きさは到底筆舌できる物ではない。続く3rdアルバム「Clochard」は、クリアーライト3rdのメンバーを中心としたバンドをバックにした曲と、A・ギターのみをバックにした曲が半々で、本作よりも幾分リラックスした出来である。(城元)



EMMANUEL BOOZ
Clochard
LP/Atlantic WEA 50.294　'76年

壮大なオーケストレーションの前作、怒濤の迫力の次作に挟まれて目立た無いが実はこれも名作。J・デュグルノのアレンジが光りまくる。A・Altaïと同様、彼絡みの中ではNo.1。バックががっちりサポートする曲と弾き語りで静かに攻める曲が半々位で共に良く練られているのだが、A面頭とB面ラストの出来が良すぎるためどうしても前者に軍配があがる。因みにバックのサポートはM・リポーシュ(vln)、F・ジャノー(sax)、J・デュグルノ(b)など。F・WertheimerやBregent等、いわゆるBoozタイプの歌物の中でもトップに入る1枚。
(伊藤)



EMMANUEL BOOZ
Dans Quel État J'erre
LP/Polydor 2393 259　'79年

ディディエ・ロックウッド（vln）、アルファ・ラルファのシャルリー・シャリーラ（b）等12名を迎え'77年〜'79年にかけて製作された4作目。前作「Clochard」(Atlantic 50 294Y, '76年) が彼の持ち味をシンガーとして活かした作品だったのに対し本作は大胆にロック色の濃いヘヴィ・アレンジを持ち込んだものとなっている。各奏者の高度な技術の絡み、小刻みな展開、緩急、ジャン・クロード・ダゴスティーニ（g）とジル・ティネール（key, syn, p）によるアレンジの冴え、そしてメイン・アクト、ブーズの怒鳴りつける様な豪快なヴォーカルが一体化した非常にテンションの高い作品である。インパクトもフレンチ・ロック史上のもの。個性の強さでは他を圧倒するものがある。2作目のスケールでもって更に突き詰めたような鋭さのあまり、金縛り状態に陥る。　(松本)



FRANCE GALL
France Gall
CD/日本フォノグラム PPD-1093

'90年代に入ってからの日本におけるロリータあるいはキューティ・ブームたるや、何とも凄まじいものがあるが、そうしたムーヴメントにおいて一種神格化されたポジションにいるのが、このフランス・ギャルである。'70年代のドン底時代を経て、今やギャルは堂々たるオトナの実力派ポップス・シンガーとして活躍しているわけだが、10代でデビューしたてのこの'60年代のベスト盤には、なるほど女子中学生からすけベオヤジまでが狂ってしまうのもうなずける濃厚なロリータ・エキスが充満しており、思わずガッツ・ポーズが出る。何のこっちゃ。計18曲、イエ・イエ黄金時代を飾った曲ばかりなので、どの歌もポップでカワイイけど、やはり内8曲を占めるゲンスブールの作品がとりわけキューティ。必携ですね。（松山）



FRANCE GALL
Le Tour de France 88
LP/WEA Apache 244214-1 '88年
CD/WEA Apache 2292-44214-2

1960年代の「夢見るシャンソン人形」は1970年代半ばにミッシェル・ベルジェと出会って以来、アイドル性も保った大人の歌手として力強く成長した。どの作品も当たり外れがなく、フランス・ギャルの魅力がよく出ているが、このライヴ・アルバムではそれが最高の形で全開している。夫の作る曲を歌うだけで、しかも特別に凄い歌唱力があるわけでもないのだが、ラヴ・ソングの優しさといい、メッセージソングの力強さといい、歌を演じるプロフェッショナリズムには特別なオーラさえ感じる。主観的で大げさな言い方を許してもらえるなら、私は彼女にほとんど恋している。なお、CDは2枚組LPより2曲少ない。本ライヴのビデオ版ではあのジャニック・トップがピアノを弾く姿も見られる。（松元）



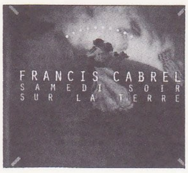
FRANCIS CABREL
Sarbacane
CD/CBS CBS 463462-2 '89年

フランシス・カブレルは1953年生まれ。B.ディラン、ジェームス・テーラー、ジャクソン・ブラウンなどのアメリカのフォーク・ロックに影響を受け、1979年にはフォーク調の美しいラヴ・バラード〝死ぬほど彼女を愛してる〟が大ヒット。本作「吹き矢」は7枚目のスタジオ録音盤で、マニュ・カッチェ、ベルナール・パガノッティ、ジェラール・ビキアロらが参加。相手に気に入られようと必死な恋する男の姿を赤裸々かつユーモラスに描いた1曲目〝動物〟から、愛にはごたごたがつきものだが年月が過ぎても君は彼女を忘れられない、と歌う2曲目〝それが決まり〟を経て、恋人のために殺人を犯して10年を獄中で過ごした男の愛を歌う〝バレリーナのステップ〟まで、歌詞も曲も歌も演奏も聴き応えのある歌が並ぶ。（松元）



FRANCIS CABREL
D'une Ombre à L'autre
CD/Columbia COL 468971-2 '91年

「Sarbacane」発表後の2種類のコンサート・ツアーを収録した3枚組ライヴ・アルバム。強力なロックから生楽器のみの曲まで、丁寧と同時にダイナミックな歌と演奏で、聴衆の反応も素晴らしい。愛をいろいろな角度から見つめたラヴ・ソングはお手のものだが、それに加えて、反人種差別、社会的無関心との戦い、東欧諸国の圧政、先住民族の尊厳なども彼らしい繊細な筆致で織り込まれる。彼がギターを弾き始めると大歓声の後に自然に合唱がわき起こる〝死ぬほど彼女を愛してる〟は感動的だ。「無に等しかった僕が今日、彼女の眠りを守っている／人生の戦いと愛を経験してきた彼女／僕は死ぬほど彼女を愛している。」なお、公演エージェントの中には元ピュルサーのヴィクトール・ボッシュの名前もある。（松元）



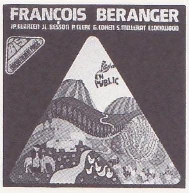
FRANCIS CABREL
Samedi Soir Sur La Terre
CD/Columbia COL 475949-2 '94年

すでに100万枚以上売れた最新作、「土曜の夜、この地上で」。ロック色よりもブルース、カントリー、フォーク色が強いが、繊細な音楽的探求とシンプルな曲作りが重いテーマもまっすぐ聞き手の心に運ぶ。牛の立場で描いた1曲目〝闘牛〟では、牛が死を前にして「人間どもが墓の回りでこんなにお祭り騒ぎができるとは思わなかった」とつぶやき、2曲目〝世界の縁に腰掛けて〟では神が世界の混乱に涙を流し、4曲目のアルバム・タイトル曲ではやや官能的なオルガンとサックスとギターが男女の怖ず怖ずした愛を描き、5曲目では「君を愛した、愛している、愛するだろう」と自分の子どもに歌いかけ、7曲目〝木が倒れる〟では環境を破壊する人間の無意識の傲慢さをさり気なくあぶりだす。控えめなる傑作。（松元）



FRANÇOIS BÉRANGER
L'alternative
LP/L'escargot ESC 328 '75年
CD/Baille Mont CD 887

フランスでは本作よりも「ル・モンド・ブージュ」(ESC-323) の方が有名だと思われる。フランソワ・ベランジェの数あるアルバムの中で本作が何枚目にあたるのか皆目見当がつかない。何故に日本でこの「ラルテルナティヴ」の評価が高いかというと、B面全てを費した名曲が含まれているからであり、しかも、ジャン・ピエール・アラルセンのペンになる曲であるという事が大きな理由であろう。実際には旧A面ラストの〝トゥ・セ・モ・テリブル〟からその音世界が拡がってゆく。B面の〝パリ・リュミエール〟と名付けられた大作は、イントロをはじめとしてバック・ミュージシャンの力量をいやという程に思い知らされる。オリジナルは見開きジャケットである。（中藤）



FRANÇOIS BÉRANGER
En Public
LP/RCA L'escargot ESC 340　'77年
CD/Baillemont CD 888

文明批評、政治批判などのテーマを歌う時、それがエンターテインメントとして成立するには、明快で質の高い音楽、そして笑いが必要である。フランソワ・ベランジェはこの２枚組ライヴ・アルバムでそれを実践している。歌詞や語りの内容を理解できないと多少辛いが、ジャン・ピエール・アラルセンやフランシス・ロックウッドらのサポートに支えられたフォーク・ロック、ロックン・ロールのサウンドはひとまずそれだけで楽しめる。エコロジックな社会批評の〝機械仕掛けの鳥〞、都会の工場労働者の境遇を歌い、途中でアルジェリア戦争の死者の数についてもコメントする〝一片の人生〞、大統領選の選挙運動と候補者を批判する〝闇取引ブルース〞、多面的な文明批評を盛り込んだ〝マニフェスト〞などが面白い。（松元）



FRANÇOIS WERTHEIMER
Wertheimer
LP/BYG 529028

フランソワ・ヴェルテーメのファースト・アルバム。彼の唄とエマニュエル・ブーズの「Le Jour Où Les Vaches」でお馴染みのアラン・スーザン、ドゥドゥ・ヴェス（彼らはアリスのメンバーでもある）、イヴァン・ジュリアンらの演奏が見事に一体化した素晴らしい作品である。曲調は大きく二つに分かれ、一つはジャケットのデザインに象徴されるファンタジックでメロディアスなものである。シャンソンの香りが漂うベルテーメの叙情的な唄声をギター、キーボード、オーケストラ等が巧みにサポートしている。もう一つはブーズを思わすハードで衝撃的なものである。リズムを強調した演奏をバックに彼が力強く唄う。また、曲と曲の間を〝さくら、さくら〞のオルゴールで繋いだ部分が数ケ所あり印象に残る。（賀川）



FRANÇOIS WERTHEIMER
Fermez Les Yeux
LP/Philips 9101 133　'77年

フランソワ・ヴェルテーメの２作目。BYGよりの前作は、暗くアンニュイなシャンソンを絶妙なオーケストレイションをバックに唄っていたが、本作はあきらかに前作を凌ぐアルバムだと言える。A面は場末のサーカスを思わせるようなうら悲しさを伴うシャンソンだがアレンジの奇抜さに度胆を抜かれる。B面はヘヴィさを伴う歌で埋めつくされているが、このアルバムの真髄はこちらの面にあるといっていい。まるでエマニュエル・ブーズ（しかも全盛期の）のアルバムかと思わせるようなベースのリフで始まり、熱を帯びた、パワフルな曲構成で息もつかせぬB①からラスト・チューンまで素晴らしい流れを創り出している。ブーズやアラン・カーンらと親しく交流しているシンガーであるようだ。（山崎）



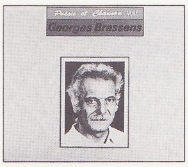
FRANÇOIS WERTHEIMER
Alice Au Pays Des Merveilles Racontè Par Wertheimer
LP/Philips 9101 181　'78年

フランソワ・ヴェルテーメにはよく知られた2枚のアルバムの他に、「Popera Cosmic（CBS S7 63981）」「Gomina（Philips 6325 174）」等、ロック・オペラやサントラ関係のレコードが数枚ある。サントラの一部に注目に値するものもあるが、多くはプログレッシヴ・ロック・ファン向きのものとは言い難い。本アルバムもそうしたものの一つで、フランスの大手レコード店には必ずコーナーがある、子供のためレコードである。ルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」のストーリーを数人のストーリー・テラーが語っており、ヴェルテーメもその一員に加わっている。そして、内容に合わせて、効果音や短い演奏が語りを盛り上げている。フランス語が分かれば楽しめるかもしれないが、一般向きの作品ではない。（賀川）



FRANZ
Peut-Être Aux Yeux-Silence…
LP/Cat Records CR2001　?年

音からすると'70年代前半の録音だろう。女性ヴォーカル作とは言ってもバックの音と一体になった内容の、それこそプログレッシヴ・ロック・ファンが飛びつくような意欲的な作風になっている。ds、g、b、kbdにストリングスというバックの編成だが、ハモンド・オルガンの響きもまったくこちらのサイドの例にもれず、他にしてもとにかくピンと来るプレイだ。クレジットがないだけに余計興味をひかれる。意外と知られた人がいるのかもしれない。全体の感じとしては例えばIRISを女性ヴォーカルにしたようなイメージ。メインの女性ヴォーカルはそれほど特徴のあるものではないものの、耳あたりはよく、第一、曲がありきたりなシャンソンものにおさまらない。効果音を使ったり、語りがあったり、と凝っている。（松本）



GEORGES BRASSENS
ジョルジュ・ブラッサンスのすべて
CD/オーマガトキ SC-3104～5

シャンソンとは歌である。歌とは言葉である。言葉とは思想であり、信条である。ジョルジュ・ブラッサンス（1921-1981）は生ギターとコントラバスだけをバックに、ぼそぼそした口調で人間の真実を、反権力を、個人主義思想を、友情を、色恋好きのフランス人気質を、弱い者への愛情を歌う。シャンソン界最大の巨匠はフランスの音楽界を潤し続ける泉であり、その泉はシャンソン界だけでなく、フランス・プログレ界をも潤し、没後も決して涸れることはない。〝パリジャン気質〞をアンジュが、〝悪い噂〞をモナリザがカヴァーしている。フランス音楽とは何かを語る時、彼を忘れるわけにはいかない。この２枚組の日本編集盤には代表作が多く収録されており、詳細な解説、対訳もついているので入門用にいい。（松元）



GÉRARD MANSET
Gérard Manset
L P/EMI Pathé C 068 11788 '68年

'60年代中頃から、シングルやEPを発表して、それなりに知られた存在だったジェラール・マンセ。'70年にリリースされた「La Mort D'Orion」が各音楽誌及び一部の一般誌で絶賛され、一躍、その名が知れ渡った。本アルバムはその2年前に発表された、ファースト・アルバムである。作詞、作曲、オーケストレイションを全て彼一人で行っているが、その非凡な才能が既に開花している。全12曲の小品集であり、自らのしっとりとした説得力あるヴォーカルにドラマチックかつダイナミックなオーケストラを組み合わせて、非常に魅力的なサウンドを作り出している。全体の印象はロック的雰囲気を持った斬新なポップスと言える。次作「La Mort D'Orion」の登場を予感させるに十分な力作である。 (賀川)



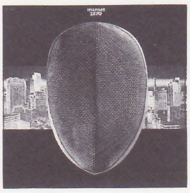
GÉRARD MANSET
La Mort D'Orion
L P/EMI Pathé C064-15628 '70年

20年近いキャリアを誇り、今なお活躍を続けるジェラール・マンセ。メロディアスなオーケストラとヴォーカルを中心とした現在の彼のサウンドは完成度の高いアダルト感覚のポップスであるが、'70年代初期の彼は正にフレンチ・ロック界の寵児であった。本２ndは彼の10枚を越えるアルバムの中でも最もクリエイティヴな作品であり、フレンチ・プログレッシヴ・ロックの黎明期を代表する１枚でもある。作詩、作曲、オーケストレーションを全てマンセが担当し、ダイナミックで迫力に富んだ音作りがされている。弦楽器、フルート、チェンバロ等に女性ヴォーカルが絡む展開は一瞬オパス・アヴァントラを彷彿させる。また、クラシカルかつリリカルなオーケストラをバックに切々と歌い上げる男性ヴォーカルも印象的である。 (賀川)



GÉRARD MANSET
Long Long Chemin
L P/EMI Pathé 2C 062-12342 '72年

「La Mort D'Orion」に続くGérard Mansetの３rdアルバム。名作として評価の高い前作に比べて、シンガーとしての彼自身が前面に出た音作りとなっている。Emmanuel Boozの「Le Jour Où Les Vaches…」に似た作風で、前作同様の壮大なオーケストラ・アレンジが光る傑作である。彼自身のヴォーカルはBoozの様な迫力こそ無いが、仲々の説得力がある。本作以降はよりシンガーとしての色合いが濃くなり、「2870」等プログレッシヴな方向性を持った作品も見られるが、全般的にはポップス指向の作風となっている。尚、現在彼の作品の多くがCD化(一部のリミックスが施されている)されているが、初期の作品については彼自身が内容に不満を持っている為、CD化の予定は無いとのことである。 (中島洋一)



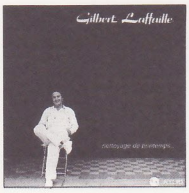
GERARD MANSET
2870
L P/EMI Pathé 2C 068-14482 '78年

大物シンガー、ジェラール・マンセの硬派な一作。ヒプノシスがデザインしたジャケット、内袋の写真、これらモノトーンの色あい、などでなんとなくアルバムの感触が伝わりそうだが、このアルバムはとてもとがっている。それはバックがシンプルなロック形態だからかもしれない。突きささってくるような音をしている。特に2曲からなるB面は、マンセ自身によるオーケストレーションと彼のヴォーカルがこれに一体となり切迫感が強い。マンセには多分にこうした歌物の枠を超えた側面があるが、アルバム単位では「La Mort D'Orion」なんかに並んでインパクトが強い。「La Mort～」がクラシックの要素が強いとすれば、こちらは余分なものをそぎおとしたロックの要素が強い。冷たいと言うよりもきつい印象がする。 (松本)



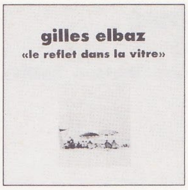
GILBERT BÉCAUD
Desperado Olympia 83
L P/EMI Pathé 172775.1 '83年

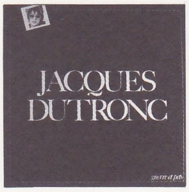
ジルベール・ベコーは1927年、南仏のトゥーロン生まれの作曲家兼ピアニスト兼歌手。1952年に〝十字架〟という歌でデビューし、1954年にはオランピア劇場で歌い、観客が椅子を壊すほどの熱狂を生み出し、「ムッシュー10万ボルト」の異名をとる。ロックン・ロール誕生前の話だ。南仏的なパワーと熱気で歌われる彼の歌は容易に国境を越え、アメリカや日本でもよく知られている。〝絶望した男〟、〝競売の風景〟、〝憧れの女〟、〝ユカタパのインディアン〟など、このライヴ・アルバムでもその熱気が堪能できる。なお、本盤にも入っている〝神の思いのままに〟という曲は〝レット・イット・ビー・ミー〟という英語詞でアメリカでもヒットし、ニュー・トロルスも「コンチェルト・グロッソ２」でカヴァーしていた。 (松元)



GILBERT LAFFAILLE
Nettoyage De Printemps...
L P/Accord Musidisc ACV 130001 '78年

ジルベール・ラファイユは1948年、パリ生まれ。芸術評論家を父に持つ恵まれた家庭で育つが、文学専攻の大学生時代、1968年５月革命の学生運動で彼は変わった。卒業後についた国語(フランス語)教師の職は３年でやめ、色々な職業を経て歌を作り始める。これは1977年の「大統領と象」に続く２作目のアルバム「春のお掃除」。ジャン・ミュズィが編曲とキーボードを担当したフォーク的な作品である。彼の作詞作曲する歌は穏やかだが、鋭い批評精神と詩情とユーモアが実にフランス的である。比類ない美しいタイトル曲の他、鮮やかな批評精神に頬が弛む〝筆記試験〟、大食漢に食べられてしまう卵が嘆く歌〝大食漢〟などが愉快で素晴らしい。日本でも近作と編集盤各１枚が発売された。 (松元)

 **GILLES ELBAZ** **Gilles Elbaz** ＬＰ/Alvarés C456 '71年 マグマ関係のレコードとしてはトップ・クラスのコレクターズ・アイテム。ジル・エルバは我国では全く、フランスでもあまり知られていないが、実力派のシンガーで5枚程度のアルバムを発表している。中でも本作品は全曲テディ・ラスリのアレンジ、バックはラスリ他、フランシス・モーズ、クロード・アンジェル、クリスチャン・ヴァンデという豪華メンバー。エルバの切々と歌い上げる暗めの歌とヴァンデらのややジャズィで重味のある演奏がうまく融け合い説得力あるサウンドを作り出している。全員がかなりの熱演である。（賀川）	 **GILLES ELBAZ** **Le Reflet Dans La Vitre** ＬＰ/A.B.A.BLB 110 '?年 ジル・エルバの後期の作品。クリスチャン・ヴァンデらのマグマのメンバーと共演したことは有名であるが、他にジーグフリート・ケスラーがバックを務めたアルバムなどもあり、いずれも単なるヴォーカル作品を越えるものとなっている。本アルバムにはKirt Rust(ds)、Jeff Sicard(sax、b-cl,oboe)、Robert Schaz(key)、Pascale Degli(vo)らが参加している。女性ヴォーカルを含む、軽いながらも繊細で非常にセンスのよい、ジャズィな演奏をバックに、ジルバはフランス語のアクセントを活かした、表現力豊かなヴォーカルを披露している。どちらかというと暗めで、リリカルなサウンドはプログレッシヴ・ロック・ファンにも支持されるであろう。この種の作品としては傑出した出来と言える。（賀川）
 **GILLES JANEYRAND** **Gilles Janeyrand** ＬＰ/Heloise Disques HEL 67111 このジル・ジャネランのアルバムは純粋のシャンソンとしての評価を下すのが正しいように想う。ここには人生があり、喜びがあり、悲しみがある。ただし彼の視点はそんな世界の外側にある。ちょうど僕の愛するイタリアのカンタウトーレ、マウロ・ペローシがそうであるように。僕には残念ながら彼の事は何もわからない。ブリュッセルの古いレコード店で見つけたレコードである。バックに流れる多彩なキーボードが彼の音世界を形成するのにとてもよい効果をあげている。それはこのアルバムのコンポーザーであるドミニク・プリエールに依るところが大きいようだ。彼は全てのキーボードを弾いている。（山崎）	 **HUBERT-FÉLIX THIÉFAINE** **Méteo Für Nada** ＬＰ/CBS STE 26526 '86年 CD/CBS STE CD 26526 日本では全く無名で、筆者の知る限りでは、その筋のファンや業界人の間でも話題になったことがないロック歌手、ユベール・フェリックス・ティエフェーヌ。1948年生まれの彼は1983年からステージ活動を始め、1976年からしばらくトニー・カルボナールのグループ「マシャン」と共演し、1978年に単独でデビュー・アルバムを発表し、現在までに15枚のアルバムがある。他国語も混ぜた奇妙な歌詞とメロディを持つ曲を独特の退廃的な声で歌う。本作は「肉体は血を流すのが定め」と歌う1曲目の〝ディース・オレ・スパラドラ・ジョーイ〟(「スパラドラ」は包帯のこと)、3曲目の〝早漏〟(おいおい)、6曲目の〝直立二足動物〟、最後の〝過つは人の常〟(ラテン語だ) など、一風変わった面白さに満ちている。（松元）
 **ISABELLE ADJANI** **Isabelle Adjani** ＬＰ/Philips 814 827-2 CD/Philips 814 827-2 日本フォノグラム PHCA 74 ゲンスブールは愛妻ジェーンをはじめとして、多くの女優たちに曲を書き、アルバムをプロデュースしているが、このイザベル・アジャーニの唯一のアルバムはそれらの中でも最も良い出来の1枚だろう。例によってアジャーニもまた震えるような細かいカスレ声でヘタに歌っており (アジャーニの証言によると、ゲンスブールはいかにもウマい歌が嫌いで、自分がプロデュースする女性たちは、わざとヘタクソに歌わせたのだという)、一聴した限りでは、ほとんどバーキンのアルバムのようだが、そうした中にも確かな自己主張の欲望と気性の激しさを感じさせる。計11曲全てゲンスブールの書き下しだが、内5曲の作詞又は作曲でアジャーニも協力し、多才ぶりを見せている。バックは英のアラン・ホークショウ一派。（松山）	 **JACQUES BREL** **Brel** ＬＰ/Barclay 96010 '77年 CD/Barclay 866 726-2 雲が浮かんだ空の写真に「BREL」とだけ書かれたジャケット。南太平洋のマルキーズ諸島での癌と戦いながらの何年かの隠遁生活の後、1977年に突如パリに戻って録音したブレルの白鳥の歌。本盤発表後、1978年10月12日に彼は世を去った。日本盤は「偉大なる魂の復活」と題されたが、それはまさに本盤の内容そのものである。1929年、ブリュッセル生まれ。24歳の時にパリに上る。俗悪と偽善を嫌う誠実さに満ちた自作曲が徐々に多くの人々の共感を呼ぶ。アンジュも強く彼の影響を受けた。本盤は、労働者の支援に力を入れた社会主義者、ジャン・ジョーレスへの敬意を込めてアコーディオンだけの伴奏で歌った〝ジョーレスは殺された〟から、最後の〝遙かなるマルキーズ諸島〟まで、崇高な歌声が心に深く響く。（松元）



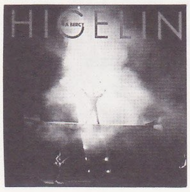
JACQUES DUTRONC
Guerre Et Pets
LP/WEA Gaumont Musique 753801 '80年

俳優でもあり、シンガー・ソングライターでもあり、フランソワーズ・アルディの私生活のパートナーでもあるジャック・デュトロン。このアルバムは題して「戦争とおなら」。「おなら」と「平和」がともに「ペ」という発音であることに引っ掛けた言葉遊びでまず笑わせてくれる。彼の歌はどれもこの手の言葉遊びやユーモアや毒を含んでいるので、フランス語が解らないと辛いかもしれない。本作は全10曲中６曲がセルジュ・ゲンズブールの作詞だとなればなおさらである。１曲目は差別的な罵り言葉を散々並べておいて「おいらはペニスだから」とオチをつける〝愛の賛歌〟、２曲目は野菜の名前が入った成句を織り込んだ〝食用のバラード〟という具合である。なお、ベースはジャニック・トップが担当。 (松元)



JACQUES HIGELIN
No Man's Land
LP/Pathé EMI 2C 06814554 '78年
CD/Pathé EMI 7928392

1940年生まれ。映画、前衛シャンソンの世界を経て、1970年代からカリスマ的な人気を得る。フランク・ザッパ的前衛性と多彩な音楽性、ブルース・スプリングスティーン的パワー、桑田佳佑的ポップ性がフランスのシャンソンの土壌、「歌う狂人」と評されたシャルル・トレネの影響の上に花開き、無垢と背徳で精神を解放するのがジャック・イジュランである。本作は1970年代の代表作で、彼のスタンダードの〝出発〟、〝エレベーターの中の飛行士〟、〝民衆の敵ナンバー・ワンの恋人への手紙〟を含む。エレクトロニック・バラード〝美のようなＬ〟や最後を飾る10分に及ぶ〝愛とは何かを知らずに〟も名曲。フランシス・モーズ、セルジュ・ペラトネール、クリスチャン・ルルー、ダン・アル・ブラらが参加。 (松元)



JACQUES HIGELIN
Higelin À Bercy
LP/Pathé EMI 2609853 '86年
CD/Pathé EMI 7462758

ユッスー・ンドゥールとモリ・カンテをゲストに迎えた1985年の大コンサートを収録したライヴ・アルバムで、イジュランのカリスマ性とパワーが２時間以上にわたって全開している。汲めども尽きぬイジュランの想像力と創造性、詩情、優しさ、狂乱。緻密なリハーサルをしたうえで自由奔放に繰り広げられる即興的な展開の楽しさ。フレンチ・プログレ・ファンにはお馴染みのギヤール兄弟、ブノワ・ヴィドマン、パトリック・ゴーティエ、エリック・セラらが参加。「私は叫び、私は泣き、私は笑う／野に咲く花の脇で／思いわずらわず／春の魂の中で呆然として／ときめく心、締め付けられる心／怒りによって、人生のはかない美しさによって」（３曲目〝Tête En L'air （心うきうき）〟より） (松元)



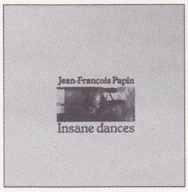
JACQUES HIGELIN
Tombè Du Ciel
LP/Pathè EMI 7915141 '88年
CD/Pathè EMI 7915142

ブリジット・フォンテーヌに始まるイジュランの共演歴は驚くほど多彩で、フランスのプログレ関係者はほとんど共演歴があり、T.レックスのギタリストのミッキー・フィンとも演ったことがあるが、本作「空から落ちて」では、ウィリアム・シェラー、ドゥドゥ・ニジャエ・ローズ、チャーリー・オリンズ（元エスクワイア）らも参加し、クラシック、ファンク、アラブ音楽、ラテンなどが彼流に消化されている。ディディエ・ロックウッドをフィーチャーし、リズム・マシンが独特の〝Follow The Line〟、父親の思い出に捧げられた〝モンスーリ公園〟、フランス革命200年を記念した自作のクラシック曲〝人権交響曲〟、「無を恐れるな／君はそこから生まれたのだから」と優しく語る〝無垢〟などが彼らしい。 (松元)



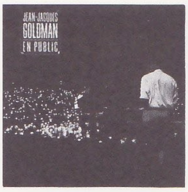
JACQUES HIGELIN
Le Rex
LP/Pathé EMI 7810142 '92年

1992年２月にパリで収録されたライヴ・アルバム。こういうライヴ・アルバムを前にすると、魅力の分析が馬鹿々々しくなる。躍動感溢れる１曲目の〝Jack In The Box （びっくり箱）〟。ニコラ・フィッツマン（ベース、元コス）、続木力（ハーモニカ、フルート）、ダヴィッド・サルカン（ドラムス）らの完成度の高い演奏を得た名曲〝シャンパーニュ〟が12分にわたって地獄の宴を描きだす。〝不法〟では「禁じられた行為だけが俺を興奮させ、想像力を刺激する」と禁断の愛が歌われる。〝鳥人〟では壮大なサックスやキーボードやハーモニカやドラムスが空中を飛ぶ人間の姿を歌い上げる。カントリー風バラード〝(魂の休息には) 名前がない〟の前の優しく詩情に溢れた語り。美しい魂と精神の自由。 (松元)



JEAN-FRANÇOIS PAPIN
Insane Dance
LP/Upon TYNE 382

「インセイン・ダンス（狂気の舞踏）」と名付けられたこのアルバムは、リュック・マリアニを中心とする音楽集団ロック・クリティクスの一員ジャン・フランソワ・パピンのソロ・デビュー作品である（プロデュースはマリアニ）。彼らの作品を聴く度に思うことではあるが、このアルバムもシンセサイザーの使い方が独特かつ巧みである。何といってもハイライトはB面であり、アコースティック・ギターをバックに淡々と唄い始め、遂にアラン・ソレンティ「アリア」の世界にまで至る曲、シンセサイザーが流れる中、ギターをかき鳴らし、ちょうしっぱずれの歌を唄った曲、ロック・クリティクスに通じる良い意味でつかみどころのない曖昧模糊とした曲等、いずれも素晴らしい出来である。アルバム・タイトルに偽りなし、狂気の１枚でした。 (賀川)



JEAN-JACQUES GOLDMAN
En Public

L P/Epic EPC 450191 1 ’86年
CD/Epic EPC 450191 2

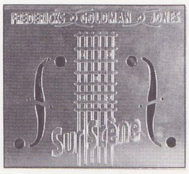
タイ・フォンなき後、彼がソロ歌手としてフランス語盤アルバムを４枚出した後の初のライヴ・アルバム。初期の代表曲がほとんどすべて、聴衆の熱い反応とともに聞ける。無論タイ・フォンの曲はない。前々作、前作のアルバム・タイトル、「前向きな」、「認証を受けず」が示すように、成熟し独立した精神の成人に向けて書かれた歌詞なのに、歌詞を暗記した少女たちがコンサートに詰め掛けるという彼の人気の内容が、彼の社会的影響力の大きさを浮き彫りにしている。エリート校のビジネス・スクールを卒業し、硬派の雑誌で首相とも対談する知識人であり、人権擁護と社会的公正を追求する社会活動家であり、音楽的才能溢れる音楽家である、文字通り「黄金の男」が到達した第一の頂点。CDはLPより２曲多い。　(松元)



JEAN-JACQUES GOLDMAN
Entre Gris Clair Et Gris Foncé

L P/Epic EPC 460404 1 ’87年
CD/Epic EPC 460404 2
Epicソニー 25-8P-5280

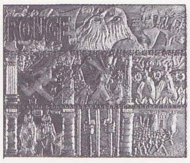
彼はこのアルバムで音楽の幅を飛躍的に広げ、新たなステップを踏みだした。前半は電気楽器によるポップ・ロック、後半は生楽器による多種多様な曲調で歌う。作詞、作曲、編曲、歌、演奏、プロデュースをこなす彼の歌の高い完成度はあきれるほどだ。10代のアイドルにすぎないとか一発屋とか売れ線流行曲メーカーとかいう冷笑が過去にあったが、それを一掃する強力な作品。個の内面の自立、連帯感、孤独、優しさ、建設的な社会参加の意志などのメッセージは決して薄っぺらにならず、強い説得力で胸を打つ。フランスでは100万セット以上が売れ、彼の歌に共鳴する若年層を指して「ゴールドマン世代」なる言葉も生まれた。なお、日本盤は1985年のアルバム「Non Homologué」の曲も混ぜた抜粋編集盤。　(松元)



FREDERICKS, GOLDMAN, JONES
Sur Scène

CD/Columbia COL 472787 2 ’92年

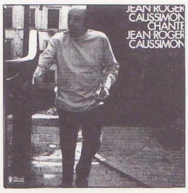
ジャン・ジャック・ゴールドマンが女性ヴォーカリストのキャロル・フレデリックスとギタリストのマイケル・ジョーンズとの共同名義でアルバムを作るようになった後の1991年のライヴ。良い意味でのポップな音楽ゆえの、聴衆と演奏者の間の一体感が素晴らしい。ジャケットに記された「私達は以前と同じように再会したわけではないが、たぶん自らを真に見いだしたのだ」という言葉が演奏者と聴衆双方の成熟を暗示する。バラード曲〝Là-bas〟が感動的だ。アルバム「Entre gris clair et gris foncé」で発表された、シリマという女性歌手とのデュエット曲だが、本作では彼女のパートをサックスが奏で、聴衆が歌う。１枚の真摯なアルバムを残して夭逝した彼女を演奏者と聴衆とで深く悼む暖かさが心を潤す。　(松元)



FREDERICKS, GOLDMAN, JONES
Rouge

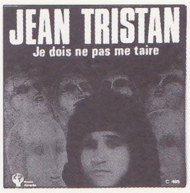
CD/Columbia COL 474955 2 ’93年

ジャン・ジャック・ゴールドマンの現時点での最新作、「赤」。ブルガリアやロシアの合唱隊、ダイアー・ストレイツ風ブルース・ロック（歌詞にマーク・ノップラーの名が出てくる）、ハード・ロックまで取り込み、新たな高みに登った。彼に強い影響を与えたシャンソン界の巨匠レオ・フェレの死も悼んで「抱き締めておくれ、悪魔を閉め出して」と歌う１曲目〝抱いておくれ〟、国境を越えた人間の連帯を歌った３曲目〝世界の歌は何を語る〟や８曲目〝同胞〟、希望についての歌の６曲目〝赤〟、投獄された人や娼婦の境遇を通じて人間の尊厳を歌う12曲目〝目を閉じて〟など、間接的なメッセージと強力な音楽が聞き手の想像力を刺激する。一人でも多くの人に聞かれるべき、現代フランス最高峰の歌手である。　(松元)



JEAN-ROGER-CAUSSIMON
Chante J.R. Caussimon

1918年に生まれたジャン・ロジェ・コシモンは本来は役者やコメディアンとして知られていた人物。シャンソン歌手としての出発はかなり遅く、既に50才を過ぎた’70年代に入ってからのことだ。この作品はサラヴァから’70年にリリースされたものであり、プロデュースをピエール・バルー、作曲にはレオ・フェレやフランシス・レイなど当時活躍中の人物が多数参加している。内容は全体に多彩なアレンジが施されていて大変聴きやすく、外国人がパリやシャンソンにいだくイメージに忠実なノスタルジックな雰囲気を持っている。コシモンのヴォーカルは淡々としていて素朴な味わいがあり、シャンソン入門向けの佳作といった出来である。　(関口)



JEAN TRISTAN
Je Dois Ne Pas Me Taire

L P/Disques Alvarès C495

ジャン・トリスタン(vo, g)自身、そして本作、参加アーティスト４名、一切不詳である。全曲、トルコ、スペイン、モザンビーク等計９名の前衛詩人の詩に彼が曲をつけて歌ったものである。作品自体は彼のシンギングを中心とした所謂シンガーの作品であるが、バックのアコースティック・ギター、ヴァイオリン、タブラ等の民族楽器等による演奏とそのメロディー・ラインにジプシー音楽、イスラム色、或いは中近東色を反映しており、かつ暗い雰囲気を生んでいる。この暗さや民族楽器の使用は、多少にかかわらず特に’70年代前半のフォーク全般に独特の共通事項であったことから、本作もその頃の作品かと思われる。そして本作は彼が文学志向でありフォークという領域で意欲的なシンガーであることを物語っている。　(松本)



JEANNE MAS
Les Crises De L'âme

L P/EMI Pathé Marconi 7918171
'89年
CD/EMI Pathé Marconi 7918172

ジャンヌ・マスは1984年にデビューし、たちまち人気を得た女性歌手。作詞を主体とした自作の曲を歌う。優しさ、激しさ、美、退廃、エロティシズム、繊細さ、エキセントリックさと多くの面を持っているが、アルバムごとにエキセントリックさの比重が増していることは、彼女自身のアイデアによる、髪を刈り上げた彼女のセクシーでエキセントリックな本作のジャケット写真でもわかる。安易な言い方だが、フランス版マドンナといえば当たらずとも遠からずだと思う。「魂の危機」というこのアルバムは4作目で、マニュ・カッチェ、デヴィッド・ローズ、トニー・レヴィンが3人揃って全面的に参加。歌詞の面では、戦争に狩り出された男の立場から歌う〝キャロラン〟のような熱いラブソングが良い。（松元）



JEANNE MOREAU
Jeanne Moreau

CD/Jacques Canetti 195482　'87年

ヌーヴェル・ヴァーグの女王ジャンヌ・モローは、歌の方も極めてチャーミングだ。テクニックや声量など、決して歌唱力があるわではない、というか、はっきり言ってかなりヘタなのだが、とにかく他の女性歌手や女優にはない特殊な魅力を持っている。これはひとえに彼女の知性のなせるワザだろう。計20曲収録されたこのベスト盤は、'64年にアカデミー・シャルル・クロ大賞をを受賞したアルバム「12のシャンソン」の全12曲を中心に編まれており、作詞は全てシリュス・バシアーク（イラン生まれのシンガー・ソングライターで、画家・小説家でもあった）、作曲は映画音楽の巨匠ジョルジュ・ドルリューやスウィングル・シンガーズのリーダー、ウォード・スウィングル等が担当している。（松山）



JOAN PAU VERDIER
Vivre

L P/Philips 9101 058　'78年

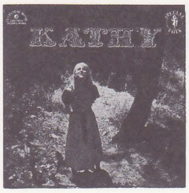
'73年から'80年にかけて7枚のアルバムを発表したジョアン・ポー・ヴォルディエのフォース・アルバム（他6枚は「Occitania Sempre」「L'exil」「Faits Divers」「Tabou Le Chant」「Le Nuage Dans La Tête」「Le Chantepleure」）。エンジニア及びミキサーはDominique Blanc-Francard。バックをDidier Alexandre(b)らが務めている。実力派ミュージシャンによる変化に富んだ演奏に合わせて、ヴェルディエが表現力に富んだ多彩なヴォーカルを披露している。リリカルなもの、物悲しい雰囲気なもの、どことなくブーズを思わすトーキング・ヴォーカル等、曲自体はそんなに凝ったものではないが、いずれもがバックの演奏と一体となって聴く者を引き込んでいく。（賀川）



JULIEN CLERC
Jaloux

L P/EMI Pathe Marconi C 06814577
'78年
CD/Virgin 30094
東芝EMI EOS-81188

ジュリアン・クレールは1947年生まれ。1968年5月にシングル「騎兵」でデビュー。1969年にはミュージカル「ヘアー」に出演。当時から現在に至るまで作曲家兼歌手としてフランスでは不動の地位を築いている。彼が組んだ作詞家にはセルジュ・ゲンズブール、フランソワーズ・アルディもいる。このアルバムは〝Je dors avec elle（邦題：愛の鳥籠）〟、〝嫉妬〟、〝僕のお気に入り〟、〝人生は辛いけど〟など数々のヒット曲を含む彼の代表作。西インド諸島の血をひくこともあって、ラテン的なエキゾチズムと情熱を持つ歌声、そして、特にバラードで真価を発揮する強力なメロディに男の色気を感じる。その一方で、1980年には死刑反対を明確に訴えた歌〝殺された殺人者〟を発表するなど、骨もある歌手だ。（松元）



KATHY LOWE
Kathy

L P/Le Chant du Monde LDX 74533
'73年

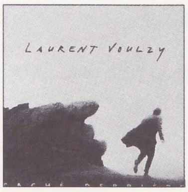
同レーベルの〝Special Folk〟というシリーズの一枚で、曲によって、ピアノ、フルート、パーカッション、そして彼女本人の弾くマウンテン・ダルシマ（バイオリンの胴体を縦に引き伸ばしたような、細長い形のアレ）も入っていますが、伴奏の中心はアコースティック・ギターです。ですから、サウンドは至って地味なのですが、半分以上はオリジナルで占められた収録曲の大半はしっとりした曲ですし、フォーク系のシンガーには多い、ほんの少しかすれた彼女の歌声は、細くてキレイです。歌詞は英語が多いです。でも、「ジャケットがあるならそれでいい」と言ってもらったのですから、この枠には、ダニエル・ビダルちゃんを載せたかったぁ！私がLPかCDを持っていれば……ピンノッキョ〜！（斉藤）



LAURENCE VANAY
Laurence Vanay

L P/SFP 34.024

プロデュース等で数多くの作品でその名を伺えるティボの、実際の演奏が聴ける数少ない作品の一つだが、彼はここでは単にベースを弾いているだけ。主人公のローランス・ヴァネイがヴォーカル、ピアノ、オルガン、曲、詞、アレンジ全てをこなしている。彼を差し置いてのことだけあって、全編落着いた雰囲気、かつ、ダイナミックな張りのある情感豊かな素晴らしい作品に仕上げている。ギターとフルートはティボのソロにも参加のセルジュ・ドリアン。ドラムはジャン・シュヴァリエとあるが、ジャン＝リュックかどうかは不明。（森下）



LAURENT VOULZY
Caché Derrière
LP/BMG-Ariola 262970　'92年

アラン・スーション（彼の項も参照のこと）との名コンビを組むローラン・ヴルズィの代表作、「後ろに隠れて」。超寡作主義、完璧主義のヴルズィには駄作はないが、１枚だけ選ぶとしたらこれ。ビーチ・ボーイズ、ビートルズなどの影響を彼の優れたセンスで消化（昇華）してポリス風のギターやケルト風のメロディなどの味付けまで施した美しい最高のポップス・アルバムである。「音楽の後ろには夢、色の中には別の色、沈黙の中には祈り、祈りの中には沈黙、夢の中には開く扉が一つだけある／だから目を閉じても星を見ながら騎兵を見ていたい／後ろには何かが隠れている…」お馴染みのマニュ・カッチェはじめ、最後の曲ではアラン・スティヴェルとリッチー・ブラックモアまで参加している。　（松元）



LÉO FERRÉ
La Solitude
LP/Barclay 90311　'71年

レオ・フェレは1916年、モナコ生まれ。哲学、法律、政治を学び、レオニード・サバニエヴに師事して音楽を学ぶ。1946年頃から自作の曲をシャンソニエで歌うようになるが、当初の客の反応は芳しくなかった。苦闘の中、多くの作品によって1950年代には徐々に浸透してゆく。社会批判的な自作曲、オペラやオラトリオ、美しい愛の歌、ボードレール、ランボー、アポリネール、アラゴンなどの詩人の詩に曲付けした歌など、幅広い活動をした彼だが、本盤「孤独」は、ジャズ・ロック・グループ、ズーとの共演曲を含むアルバムで、この時期の彼は1968年の５月革命からのインスピレーションで絶対自由主義者としての姿勢をより明確にしている。ズーのギター、オルガン、フルート、リズムを得て毅然と「孤独」を歌う。　（松元）



LÉO FERRÉ
La Violence Et L'ennui
LP/RCA PL 37470　'80年
CD/EPM Musique FDC 1015

60歳を越えてもレオ・フェレの創作活動は衰えるどころか、ますます活発になる。「暴力と嫌悪」と題された本盤は、一般には彼の代表作とは考えられていないが、それでもこの衝撃である。１曲目のアルバム・タイトル曲は、パーカッションとフェレ自身のピアノの即興的演奏をバックにした７分30秒の語りの奔流だ。あらゆる権威を否定し、「無秩序とは、権力抜きの秩序だ」という信条の彼らしい詩句が随所にみられる。美しく官能的な愛の歌〝幾何学的に君のもの〟、中世の泥棒詩人、フランソワ・ヴィヨンの詩「墓碑銘（絞罪人のバラード）」に自作の詩「愛に年齢はない」を重ねて重厚なオーケストラを配した〝同胞よ〟など、激しさ、優しさ、強さ、弱さが一体になって私の心を激しく揺さ振る。　（松元）



LÉO FERRÉ
Alors, Léo...
CD/EPM Musique 98294-2, 98295-2　'93年

1993年７月14日、ついに巨星が落ちた。76歳であった。このライヴ・アルバムは1990年、彼が74歳の時のコンサートだが、彼の死の直後に発売された。完全な一人のコンサートで、自ら指揮したオーケストラのテープを使うか、自らのピアノ伴奏で歌うかしている。彼の無限の崇高な精神力が歌や語りを通して私を鼓舞する。後半、〝スペインの船〟、〝パリのフラメンコ〟、〝神も主人もなく〟と名曲が続き、「レコードに録音して以来、なぜかステージで歌ったことがない歌」と前置きして歌う〝死〟、〝サンキュー・サタン〟、〝追憶と海〟、〝アナーキストたち〟、本当の最後の「時の流れに」の最後のピアノの音が消えて、静寂の中、彼は去る。しかし、肉体は死んでも作品と精神は永遠だと確信させられる。　（松元）



LIO
Des Heurs Pour Un Cameleon
CD/ポリドール POCP 1096　'91年

63年ポルトガル生まれ、ベルギー育ちのリオは、'80年にシングル「バナナ・スプリット」でデビュー。当時はベルギーのテクノ・グループ、テレックスのバック・アップを受けていた。その後映画界でも活躍して、ソフィー・マルソーやヴァネッサ・パラディなどと並ぶ〝歌って演じる〟若手スターとなったわけだが、最近ではヴァネッサにちょっと水を開けられた感じがなくもない。が、'91年に出したこのアルバムなどを聴く限り、ポップ・シンガーとしての力量とセンスは、さすがにキャリアの長さに裏打ちされた本格派だと感心させられる。屋敷豪太のプログラミングに基くシャープで華麗なエレクトロ・サウンドと生楽器の調和が見事で、エリオット・マーフィーも参加。プロデューサーはエティエンヌ・ダオ。　（松山）



LONE GUDMUNDSSON
Lone
LP/CBS 80923　'75年

ファッション・モデルが片手間に作ったレコード。フランスは片手間の発祥国かもしれない。日本の歌謡曲アイドルは死滅したが、フランスは'60年代のアイドル様式輸出期から今も続く。俳優がレコードをつくるなんていうのも、ざらだ。そう思うとやはり片手間の度合が違うと言うか、それ自体が一つのジャンルだったりする。ところでこの片手間レコードはバック陣もソロをとったりそこそこ本気のようだ。取り立てるようなプレイは聴こえないけど。それよりもこのモデルのいかにも片手間調な歌が仲々よいのだ。ハスキーな声質で寝起きにでも録音したような感じだ。歌っているとも話してるとも言えない調子でもある。さすがモデル。しかし、くすぐられる片手間さだ。タイプとしてはJ・バーキン系。　（松本）



LOUIS CHÉDID
Anne, Ma Soeur Anne
LP/Virgin 70380 '85年
CD/Philips 846053-2

ルイ・シェディッドは1948年生まれ。映画の世界からシャンソンの世界に入り、1973年アルバム・デビュー。1985年の本作は、1980年代を代表する最も重要なシャンソンと言い切ってもいいアルバムタイトル曲、〝アンヌ、アンヌ姉さん〟を含む。時代も国も異なる2つの文学作品、つまり、「アンネの日記」の内容を下敷きに、中世の童話作家のシャルル・ペローの「青ひげ」の文体を組み合わせ、抑制された行進曲風ドラムスと短調のシンプルなメロディにのせてナチズム再来の恐怖を歌うが、現実の社会情勢を見ればこれが決して杞憂でないことがわかろうというものだ。フランスのシャンソンここにありという傑作。こうした重い歌の一方、底抜けに楽しい〝God Save The Swing〟等がバランスを取っている。（松元）



LUCID BEAUSONGE
En Concert
CD/D.L.B./W.M.D. 352.005 '91年

1980年頃にデビューしたリュシッド・ボーソンジュはフランスのシャンソン界の主流に位置する歌手ではないが、独自のペースで充実した活動をしている。以前はフランソワ・ブレアン、ジャン・ミュズィも参加したロック、ポップ的なバックを付けたアルバムも作った彼女だったが、この2枚組ライヴ・アルバムは弦楽五重奏団をつけた彼女のピアノの弾き語りである。これが実に良いのだ。このシンプルな編成が彼女の芯のある美しい声と彼女自作の美しい歌詞としっかりしたメロディの持ち味を最大限に生かし切っている。半ば自発的な聴衆の合唱も感動的である。現代のシャンソンの隠れた名盤。なお、弦のアレンジは何とジョゼフ・ラカイユだが、音の感触がZNRっぽいということは特にない。（松元）



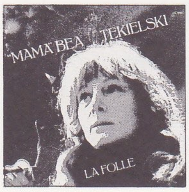
LYDIA VERKINE
Lidia Verkine
LP/Barclay 80.513 '73年

歌声はキレイな方ですが、少しクセがあるでしょうか。でも、それもほんの少しですから、それさえ大丈夫なら、ドラマティックなサウンドで泣き泣きの女性Voものが好きな方には、お推めできます。1曲目がいきなりファンキーなので、「このウソツキじじい！」と怒られそうですが、他の曲は少なくとも穏やかな曲で、ほとんどの曲には、オーケストラもしくはソリーナが入っていて、ウルウルに盛り上げてくれるのです。アレンジはJean Musyが担当しています。それから、内ジャケットは、薄手のネグリジェの胸が半分はだけている格好でまどろんでいる彼女の写真という、見えそうで見えない、悩ましいものです。聴いて良し見て良し、正にオーディオ・ヴィジュアルの極みを行くアルバムでしょう。（斉藤）



MAGALI NOËL
18 Titres/Chansons D'auteurs
CD/Phonogram 836 982-2

主に50〜60年代に活躍したトルコ出身の個性派女優マガリ・ノエルは、シンガーとしてもかなりブッ飛んだ存在である。そのキテレツさがサン・ジェルマン・デ・プレの帝王ボリス・ヴィアンのスノビズム&アナキズムとうまくフィットしたようで、アンリ・サルヴァドール同様、ヴィアンの作った歌をたくさん歌っている。'55年から'59年の間に発表された歌を18曲収めたこのベスト盤にも、11曲ものヴィアン・ソングが入っている。中でもとびきりの傑作が、スウィング・ジャズに乗ったコミカルSMソング〝あたしをいじめて、ジュニー〟。その他、ヴィアンが作ったヨーロッパ最初のロックン・ロールや、ミシェル・ルグランの曲などを歌っているが、声色や表現法の多彩さとスットンキョーさは驚くばかり。パンクだ。（松山）



"MAMA" BÉA TEKIELSKI
La Folle
LP/Isadra ISL 9010 '77年

本名ベアトリス・テキエルスキ。オーソドクスなシャンソン歌手だった彼女が、ギター片手にそのしゃがれ切った声で絶唱し始めた記念すべきアルバム。2枚組で大曲ぞろい。かつてのカトリーヌ・リベロを思わせる。メンツはプロデュースを兼担のジョエル・デュグルノ、ブーズの「Dans Quel〜」を仕切ったジル・ティネールとJ・C・ダゴスティーニ等、文句なし。このメンツでバックには収まってはいない。「Dans Quel〜」のヒントはあるし、リベロの再来だし、デュグルノの仕事がいいし、何より彼女の最高作。殺気迫る物がある。（松本）



"MAMA" BÉA TEKIELSKI
Faudrait Rallumer La Lumière Dans Ce Foutu Compartiment
LP/RCA PL 37126 '77年

'72年にテディ・ラスリー(fl,p,per)、ジャン・コアン・ソラール(fl)、ジャック・トゥリーズ(g)らのバックで、力強く、ややアンニュイな雰囲気のアルバム「Je Cherche Un Pays(SFP 14.004)」を出したベアトリス・テキエルスキー。5年の時を見て、ジャケットの写真から分かるように、貫禄のついた彼女が突如発表したセカンド・アルバムは衝撃的なものであった。本アルバムはそれに続く第3弾。前作とはやや異なり、バックの演奏はシンプルなものになっており、彼女のヴォーカルもフリー・フォームな感じが多少後退しているが、パワフルで説得力がある独自のスタイルは変化していない。フレンチ・プログレッシヴ・ロックの女性ヴォーカルを代表する力作の一つである。（賀川）



MAMA BÉA TEKIELSKI
Pour Un Bébé-Robot...
LP/RCA PL 37203　'78年

　個人的にはママ・ベア・テキエルスキーの最高傑作と思っている「赤ちゃんロボットのために」。無垢な者たちを洗脳し抑圧する権力への渾身の異議とそこからのサヴァイヴァルの意志をストレートな曲調に乗せて歌い叫ぶ〝この街を破裂させよう〟、盲目的愛国心の愚かさを比喩的な歌詞と先鋭的なサウンドで歌う〝赤ちゃんロボットのためのバラード〟などの曲がパンク的な直接さとプログレ的な深さとブルース的なやるせなさで聴き手を揺さぶる。アンダーグラウンド・シーンを突き抜けて浮上するパワーまでも兼ね備えた作品。編曲とキーボードにはジル・ティネール、ドラムスにはずっと後にABWHの「閃光」にもクレジットされることになる、フランスで活躍するアメリカ人のジョー・ハマー。（松元）



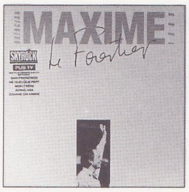
MARIE LAFORÊT
Marie Laforêt
LP/Polydor 2393 231　'79年

　数多い〝歌うフランス女優〟の中でも、ひときわ高貴でブリリアントで優雅なイメージを放ち続けているのが、マリー・ラフォレ。なにしろギリシャ語で小説まで書いちゃうほどの高踏派である。'60年の出演映画〝赤と青のブルース〟で挿入歌を歌い歌手デビューした後、〝恋の収穫〟や〝マンチェスターとリヴァプール〟などのヒット曲をはじめとする多くのシングルや数枚のLPをフェスティヴァル・レコードからリリース。'70年代に入ってポリドールに移籍してからは、そのはかなげで知的なムードを一層強調する路線でナイスなアルバムを連発してきたが、本作は特にロマンティックな秀作である。恋を旅にたとえて世界中の海を漂うオープニング・ナンバー〝Moi Je Voyage〟など、タメ息の出る美しさ。（松山）



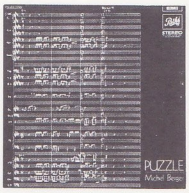
MARIPOL
Femme De Sable Et D'eau
LP/Le Chant Du Monde　'78年

　これまで彼女の３枚のアバムを聴いたが、どれもフランスのアンダーグラウンドな雰囲気とジプシー調のフォーク・サウンドとが混ざり合ったふうで、メランコリックな曲調に醸し出されるマジカルな雰囲気がいい。どこか'70年代前半のカトリーヌ・リベロに通じるアングラ調の詩的感覚がある。コスモフォンの揺らぐような音の流れをバックに詩をつぶやく、あのイメージに近い。そして例えばギリシャのイレーネ・パパスの歌に感じる女性的な感情のうねりも感じる。異国情緒なミスティズムを想像するのは、３枚のジャケットに共通するイメージ豊かなデザインによるのかもしれない。魔女というイメージを起こさせるが。（松本）



MAXIME LE FORESTIER
Bataclan 1989
LP/Polydor 841138-1　'89年
CD/Polydor 841138-2

　マキシム・ル・フォレスティエは1949年生まれ。1968年の５月革命を経験した世代が政治、反戦に関心を持っていた1970年代、反体制的だが詩情豊かな自作曲で人気を得た。これは、1987年の〝Né quelque part（どこかで生まれて）〟の大ヒット後のコンサートのライヴで、ジャン・ミッシェル・カジュダン、シルヴァン・マルク、キルト・ルスト、ブノワ・ヴィドマンがバックを務める。ミディアム・テンポのフォーク、時にエスニック風という曲調である。南アフリカのズールー語を交えて「僕らは両親も誕生地も選べない／歩き始める舗道がパリにあるかマニラにあるかアルジェにあるかも選べない／どこかで生まれるんだ／生まれる者にはそれは偶然なのだ」と歌われるメッセージがやはり胸を打つ。（松元）



MICHEL BERGER
Puzzle
LP/Pathé Marconi 2C 072 11742
'65年

　歌手として多くのアルバムを発表しているミッシェル・ベルジェーの問題作。Ａ面とＢ面の一部が〝パズル～ピアノ、ポップ・グループ、そしてシンフォニー・オーケストラのためのコンチェルト〟という大作になっている。キース・エマーソンを思わすピアノ、Claude Engel(g)を中心とするバンドとオーケストラの融合はまずまずだが、個々の演奏はダイナミックで良い。ベルジェの作曲家としての力量が発揮された作品と言える。B面の残りにはベルジェ自身がピアノを弾いたクラシカルな小品が２曲収められている。（賀川）



MICHEL BERGER
Beauséjour
LP/WEA Apache　'80年
CD/WEA Apache 2292-42482-2

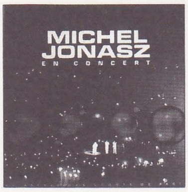
　フランソワーズ・アルディ、フランス・ギャルらの女性歌手のプロデュースで有名なミッシェル・ベルジェは、自らも自作曲をリズミカルなピアノを弾きながら歌い、片端からヒットさせている。本作は大ヒット曲〝ピアニストのグルーピー〟など彼の代表曲を多数含み、ニール・ラーセン、サイモン・フィリップスらが参加してアメリカ各地とパリで録音された。ただの使い捨てポップ・ミュージックと思うと大間違いで、無関心と画一主義のはびこる世の中での孤独を巧みな脚韻とシンプルな言葉とメロディで描いた〝西暦2000年の娘〟を歌う彼の優しい声を聞くと、彼が現代社会と人間の姿をよく観察していることがわかる。〝男でいるのも難しい〟はユーモラスな一篇。フランスらしいポップスである。（松元）



MICHEL BERGER & FRANCE GALL
Double Jeu

CD/WEA Apache 4509-90069-2 '92年
WEA WMC5-582

1992年８月のミッシェル・ベルジェの本当に突然の死は多くの人に惜しまれた。本作は、彼の死の直前に発表され、「最後のデュエット」という題で日本盤も出た、彼のパートナーのフランス・ギャルとの最初で最後のデュエット作である。言うまでもなくポップなアルバムだが、ポップスは多くの人に聞かれ、その感情が共有されることが存在意義なのだ。芸術家や文学者や社会活動家が自らの理想を追う姿(〝いにしえの夢〟)、戦火の中のプノンペンで人道的医療行為に従事する人々の姿(〝カルメットの少女〟)、手紙を書くことで恋人を愛する女性の姿(〝手紙〟)、反人種差別の意志の表現(〝金髪の黒人娘〟)などに込められた優しさはポップな音楽に乗って人々の心に届いているはずだ。合掌。　(松元)



MICHEL JONASZ
En Concert Au Palais Des Sports De Paris

L P/Atlantic 240810-1 '85年
CD/Atlantic 2292 40810-2

ミッシェル・ジョナスは1947年生まれ。ジャズやソウル、リズム・アンド・ブルースなど、黒人系の音楽に影響を受けてきた歌手である。それらの音楽からの影響を彼独特のポップスとして消化し、ことに1980年頃から急速に人気を高めた。これは1985年のライヴ・アルバム。マニュ・カッチェのドラムス、ジャン・イヴ・ダンジェロのピアノを中心としたバック・バンドのカラフルなサウンドに乗せて、艶のある彼の声が主にミディアム・テンポのジャズ的バラードを歌うのだが、これが素晴らしい。つれない女へのラヴソング〝リュシール〟、世紀末的光景を描いた〝Les Fourmis Rouges(赤い蟻)〟、宇宙的な広がりを持った曲調の〝Unis Vers L'uni (一つに結ばれて)〟が特に良い。マニュ・カッチェのファンは必聴。　(松元)



MICHEL POLNAREFF
Kāma Sūtra

CD/エピック ESCA 5082 '90年

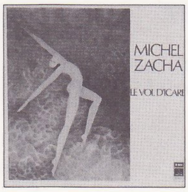
名前は誰でも知っているだろうミッシェル・ポルナレフ。日本でも1970年代には人気は高く、ファン・クラブもあったし美しいメロディのヒット曲も多くあって、フランスという枠を越えて広く愛されていた。ところが今ではフランスでも日本でも話題にならなくなってしまった。流行とは冷たいものだ。だが、作曲の才能が涸れたわけではない。彼の伸びやかな高音の声を生かしたメロディアスなこのアルバムは、目の前が明るく開けるようなスケール感のある仕上がりである。安易な形容だが、ABWHの「閃光」をソフトにしたような曲調で、プログレ・ファンも聞いて損はない。ギターとベースは元GTR のフィル・スポルディング、数曲でギター・ソロを弾いているのは何とマイク・オールドフィールドでもあるし。　(松元)



MICHEL ZACHA
La Nuit Des Cigales

L P/EMI 2C 064-12299 '72年

'70年代初期、ミッシェル・ポルナレフをはじめとするフレンチ・ポップスが日本にも紹介された。シャンソンの枠を越えた彼らのサウンドは新鮮なものだったが、一部のアーティストを除いては、正しい評価を受けることはなかった。当時の評論家は全てをドラッグ・カルチャーの一語で片付けようとした。本アルバムは日本盤が出ているが、特にそのライナーを見ると、はなはだしく誤解されているようだ。「蟬の夜」と名付けられたこのアルバムは、センシティヴな感性に裏打ちされた叙情的な小曲集のA面とジャン・ピエール・アラーセンのギター・プレイが素晴しいB面の対比が興味深い。なお、彼のアルバムはこの他に、「Le Vol D'Icare」(Pathe'064 12729)と「Inutile」(同068 14489)がある。　(宇田川)



MICHEL ZACHA
Le Vol D'Icare

L P/EMI Pathe 2C064-12729 '74年

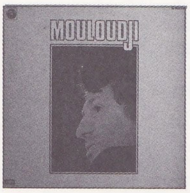
1945年５月28日Vance生まれのシンガーMichel Zachaは、1969年末ミュージカル「ヘアー」に出演しプロとしてのスタートを切った。1972年にはミュージカル「ジーザズ・クライスト・スーパースター」に出演、レコードも残している。それと相前後してソロミュージシャンとしての活動を始め、知る限りでアルバム３枚、シングル６枚(プロモ盤を含む)をリリースしている。「イカルスの飛翔」と題された本作は、「アトランティスの約束」のシリーズ第２作に当り、1974年にリリースされている。前作のセンシティヴな感性は裏打ちされた叙情性にそのままに、よりプログレッシヴな音作りが成されており、彼の最高作と言えるだろう。バックを務める親友J.P.Alarcenのギター・ワークも聴きものである。　(中島洋一)



MÔRICE BÉNIN
Apocalypse ...

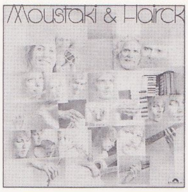
L P/Ben 98

ジャケットからしてそれっぽい。モーリス・ベナンは他にも何枚かアルバムを出しているようだが、このアルバムは弦楽器やキーボード、ギター、コーラスなどを彼の歌に絡めた意欲的な作風になっている。いわゆるシャンソンの枠からずれるシンガー作という印象だ。最後を飾る10分強のタイトル曲などはその典型で、曲中に語りを入れたりして構成の面でもおもしろい。計６名の奏者はモーリス・ベナンの歌と対等なまで前に出てきているだけに、バンド形態のアルバムという印象さえする。小曲でもヴァイオリンチェロとピアノと彼のヴォーカルがいい味を出していたりして、聴き所が少なくない。　(松本)



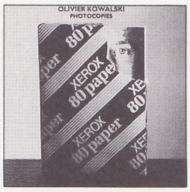
MOULOUDJI
L'adagio Du Pont Caulaincourt

ムルージはブラッサンスやレオ・フェレと並ぶシャンソンの巨人である。彼のキャリアのスタートは十代の頃からの子役としての映画出演である。数多くの映画へ出演し、俳優としての地位を確立した後小説家としても高い評価を受け、詩や戯曲の分野へも進出を果たしている。そしてシャンソン歌手としてのデビューは'52年、30歳となった時である。この作品は'70年頃の録音であり、シャンソン歌手としては円熟期のころのものである。バックのアレンジなどは時代を反映して、ロック色も加えられたリズミックな内容となっていてムルージを初めて聴く方はこの時期のものが、接しやすいだろう。バックの音が変化してもムルージの歌の世界はゆるぎないものであり、優しさとあるがままの自然さに満ちた軽やかな歌声を聴かせてくれる。（関口）



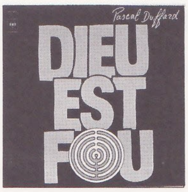
GEORGES MOUSTAKI & FLAIRCK
Moustaki & Flairck
LP/Polydor 239336　'82年

ジョルジュ・ムスタキは1934年、ギリシャ人としてエジプトで生まれ、少年時代はフランス人学校で学んだ。「いろいろの肌の子どもが玩具を持ってきて遊ぶ池」と彼自身言う地中海が彼のシャンソンの源である。本盤はムスタキとフレアークの持ち味が対等にぶつかり合った地中海音楽絵巻で、「フレアークのアルバムにムスタキが歌手として参加した」とも言えるだろう。ただ、ムスタキの歌詞の持ち味であるリベラリズムと虐げられた人々との連帯は本作ではあまり重視されていない。その辺に興味のある向きには、〝Et Pourtant Dans Le Monde（もうひとつの歌）〟、〝異国の人〟、〝Nous Sommes Deux（二つの望み）〟、〝ヒロシマ〟、〝人生哲学〟、〝サッコとヴァンゼッティ〟などの名曲を挙げておこう。（松元）



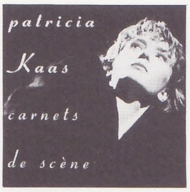
OLIVER KOWALSKI
Photocopie

マリコルヌのユーグ・ドゥ・クールソン等のバック・アップを得て創作されたオリヴィエ・コワルスキーの作品。おそらくアルバムとしては本作のみであると思う。全体の中にどことなく香るプログレッシヴ・ロックからのフィードバックはあるにはあるが、一言でいうならフレンチ・ポップスの作品である。レゲエのリズムの曲があったりと、当時のミュージカル・トレンドを吸収している。この作品の良さは、オリヴィエのフランス的なセンスとそれを具体化した一流ミュージシャン達によるサポートからくるものと思う。遠く、プログレッシヴ・ロックからのエッセンズがかくし味になっているのも重要だ。最終的には好みだろうが、極上のフレンチ・ポップス（プログレッシヴ・ロック・ファンの為の）と僕は思っている。（山崎）



PASCAL DUFFARD
Dieu Est Fou
LP/CBS 81589　'76年

謎のヴォーカリスト&キーボード・プレイヤー、パスカル・デュファールの唯一の作品である。彼に関しては、このアルバムを発表したこと以外一切不明であるが、その無名さに反して、音楽的にはかなりの才能を持った人物と思われる。本作品にはアンナ・プリュクナル（vo）、ヨシコ・セファー（sax）、ティム・ブレイク（syn）、フランシス・モーズ（b）、クロード・アンジェル（g）ら多くの有名ミュージシャンが参加しており、全員が力のこもった演奏を展開している。サウンド的には、多少なりともマグマの影響を感じさせるバンドを中心としたダイナミックな部分とピアノとオーケストラをバックにデュファールがやさしく唄うメロディアスな部分に大別される。そして、そのいずれもが素晴らしい出来である。（賀川）



PATRICIA KAAS
Carnets de scène
CD/Epicソニー ESCA 5488～9　'91年

当時、エディット・ピアフの再来と騒がれた女性ブルース・シャンソン歌手、パトリシア・カースの３枚目にして初めての２枚組ライヴ・アルバム。収録は1990年５月、パリのゼニット・ホール。彼女は先の２枚のアルバムの大部分の曲を熱唱して新たな魂を吹き込んでいる。彼女のブルース的な資質と声が完璧に生かされており、スタジオ盤が要らないくらいの出来のライヴ・アルバムだ。「母が教えてくれた歌です」と前置きして〝リリー・マルレーヌ〟を少し歌ってから歌う〝ダルマーニュ〟や、「愛する息子たちは闘士なんかにならないで音楽家に、科学者に、数学者になれたかもしれないのに」と声を絞り出す〝ケネディ・ローズ〟や、アンコールの〝最後の１週間はニューヨークで〟など、感涙ものだ。（松元）



PATRICIA KAAS
Je Te Dis Vous
CD/Epicソニー ESCA 5747　'93年

通常のラヴ・ソングをかなり避けていた先の２枚のスタジオ録音アルバムとは趣が変わって、真剣で重い感情を歌ったラヴ・ソングが並んでいて、彼女の心境の変化が窺われる。３曲は彼女自身のアイデアに基づいて書かれただけあって、感情が生きている。聴いていると、こちらも彼女の歌う愛の世界に引きずり込まれ、官能的な気分にさえなる。その一方で、〝あなたのために歌わせて〟や〝自由と踊れ！〟といった歌では恋愛以外の現実社会とも向き合う。シングルにもなった美しく切ないラヴ・ソング、〝はかない愛だとしても〟はジャン・ジャック・ゴールドマンが変名で書いたそうだ。日本盤にはボーナストラックとして中島みゆきがパトリシアのために書き下ろした〝かもめの歌〟を収録。（松元）



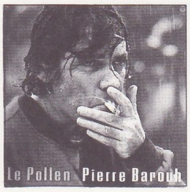
PHILIPPE CHATEL
Maquillages
LP/RCA PL 37488 '81年

フィリップ・シャテルはジャズの香りもするフォーク系の音楽で繊細な感性を歌うシンガー・ソングライターで、無愛想さの裏の優しさが味わい深い。ベルナール・パガノッティとジャン・ルイ・ビュッキが参加した本作「メーキャップ」は彼の代表作の1枚。過去を振り切れない気持ちを歌う1曲目〝すべてを捨ててもすべてを背負って〞、曲作りの過程をユーモラスに歌った〝鈴の妖精〞、堕胎でこの世に生まれてこなかった子どもに歌いかける〝天使を生む人〞、ジャズ・ミュージシャンへのオマージュ〝ガレスピーと他の人たちも〞など、地味ながら良い歌が並び、自分の本当の姿について歌う最後のアルバム・タイトル曲では1曲目のリフレインが繰り返され、聴き終わった後にしみじみとした感情が残る。（松元）



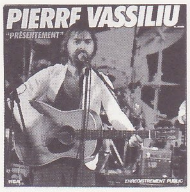
PIERRE BAROUH
Ça Va, Ça Vient
LP/Saravah SH 10021 ' 年
CD/ポリスター PSCY 1002

自らの優れた感性によってジャズ、ボサノヴァを吸収し尽した余りに粋なバルー流シャンソン・アルバム「Vivre」は衝撃的なデビューだった。今ではオリジナル盤は幻の名作として名高くもあるその「Vivre」(ジャケ違いで国内盤も出ていた。現在CDで入手可)に次いで発表されたのが2nd「Ca Va Ca Vient」だ。ここではバンジョーやグラス等を使いノスタルジックなグッドタイム・ミュージックとシャンソンの融合を試み、囁くようなヴォーカルとの調合がしんみりと響いて見事な作品に仕上っている。続く3rd以降の作品に、前2作程のこだわりが見られないような気がするのが実に残念だ。映画「男と女」の全編囁くようなムーディーな音世界もバルーならではの一流の手腕に依るものだろう。そこでは彼の音楽的背景も垣間見ることが出来、興味深い。（平野）



PIERRE BAROUH
Le Pollen
CD/日本コロムビア COCA-11148 '82年

ピエール・バルー'82年のアルバム。立川直樹のプロデュースの下、高橋幸宏、坂本竜一を始め、大村憲司、清水信之、清水靖晃らのマライア勢といった日本の一流セッション・ミュージシャンが参加し、作曲には加藤和彦、フランシス・レイ、そしてクレジットにはデイヴィッド・シルヴィアンの名も見える。このメンバーから大貫妙子を想起する人もいるだろうが、高橋、加藤、大貫らの創り出したあの擬似ヨーロッパの粋に本物のフランス人が乗って、例えば、大貫の可憐さの代わりにいささかの毒気を持って歌う様を想像してほしい。毒を秘めた透明感。そしてこれは実にはまって聴こえる。彼等のフランス憧憬の一つの結晶か。コクトー、マーラー、サティらの名が会話の中で交わされるタイトル曲も面白い。（高山）



PIERRE VASSILIU
Présentement
LP/RCA PL 37600 '82年

ピエール・ヴァシリウは1937年生まれのルーマニア系フランス人。1950年代半ばから音楽活動を始め、1965年に初めてのレコードを出す。1970年代になってから定期的にアルバムを発表するようになる。彼の歌は、前衛的な遊び心と力みのないポップ性の奇妙な同居が特色で、ジャック・イジュランとの共通項がある。現に、このアルバムに参加しているギターとチェロのドゥニ・ヴァン・エック、キーボードのフランク・ワッツ（アクサク・マブール）、ベースのジャック・トマ（リパイユ）はイジュランとの共演経験がある。その他に、サックスのジェフ・リーもいて、前衛プログレ経験者大集合である。その一方で、アフリカン・パーカッション担当の人もいる。どんな音楽かはこれらの情報から想像してほしい。（松元）



RENAUD
Le Retour De Gérard Lambert
LP/Polydor 2393303 '81年
CD/Polydor 823059-2

ルノー、本名ルノー・セシャンは1952年パリ生まれ。(プログレ系のミュージシャン、アラン・ルノーとは別人。）フランスの伝統的シャンソンの精神を現代的状況に甦らせ、不良青年ぽい革ジャン姿で俗語、隠語混じりの反骨精神旺盛な歌を歌う、現代フランスを代表する歌手である。本作「ジェラール・ランベールのお帰り」は1975年にデビューした彼の初期を総括する作品。失恋した革ジャン仲間を慰める、アコーディオン入りバラードの〝マニュ〞、フランスの平均的な男の低俗さをおちょくる〝俺の義兄〞、麻薬の売人を強く憎むワルツの〝白い粉〞、フランス北部の炭坑労働者だった母方の祖父への愛情を歌う〝オスカー〞、体制寄りの学生への強い非難のロックン・ロール〝歯に毛の生えた学生〞などを収録。（松元）



RENAUD
Putain De Camion
LP/Virgin 70600 '88年
CD/Virgin 30178

ルノーの1970年代の作品はフランスの伝統的なシャンソンの雰囲気が濃かったが、1980年代にはロック色を徐々に強めていく。本作は、彼の友人でもあった漫談家で、1986年にオートバイ事故で急死したコリューシュを悼む曲〝トラックの馬鹿野郎〞を含み、それがアルバム・タイトルになっている。反骨精神、仲間や家族への愛情、社会的不正への怒り、ナンセンスなユーモアなどが彼らしい調子で歌われる。ピアノとアコーディオンだけの3拍子の伴奏で彼の故郷のパリへの愛情と横暴な都市開発への怒りを静かに歌う〝駒鳥〞、音楽業界の商業政策をおちょくった〝波の上に寝そべって〞など、彼らしい歌が満載されている。ギターには全編にジャン・ピエール・アラルセンが参加、あの音色が数箇所で聴ける。（松元）



RENAUD
Visage Pâle Rencontrer Public
Renaud Tour 89
L P/Virgin 60091 '89年
CD/Virgin 30254

ルノーの1980年代の総決算となるライヴ・アルバム。楽器編成はロック的だがアコーディオンを生かしたシャンソンの雰囲気は健在である。自分の娘への愛情の中に彼の社会観が垣間見られる〝お前に恋して〟や〝当たり籤付きのミストラル・キャンディー〟、社会活動家たちを弾圧する国家権力への糾弾という内容に呼応してジャン・ピエール・アラルセンもスタジオ盤にはない素晴らしいソロを聴かせる〝平凡な訴訟〟、南アフリカの歌手でルノーの友人でもあるジョニー・クレッグへのオマージュの〝ジョナサン〟、仲間への友情、不正への怒り、反骨精神、アコーディオン、3拍子という彼のトレード・マークをすべて含む名バラード〝小さな娘〟など。初心者にはこのライヴ・アルバムがとっつき易いかもしれない。（松元）



RENAUD
Marchand De Cailloux
CD/'Virgin 30891 '91年

ルノーは1990年代に入ってルーツに回帰する。ロンドン録音の本作「小石売り」はアイリッシュ・トラッドやフォーク色濃いアルバムとなった。マンドリン、ヴァイオリン、ビオラ、ウクレレ、フルート、ギター、コーラスのジェフリー・リチャードソン（キャラバン）やボブ・ゲルドフの参加が驚き。妻や娘へのラヴ・ソングの他、アイルランドを吹きわたる風のようなイントロを経てこの世の圧政や貧困の原因に素朴な疑問を呈する〝小石売り〟、いつの間にか政治家にしてやられる有権者の怒り〝当選者のタンゴ〟、地元民には庭にも等しいアフリカで自動車ラリーをやる西洋人の傲慢さへの糾弾〝スタートラインに500人の馬鹿者〟、政界を去りゆくミッテラン大統領へのそこはかとない愛情を歌う〝おじさん〟など。（松元）



RICHARD GOTAINER
Chants Zazous
L P/Virgin 201931 '83年

1948年、パリ生まれのリシャール・ゴテネールは広告業界出身で、コマーシャル・ソングも多数歌ったことがある作詞家兼歌手。コミカルな自作の歌詞を嗄れ声で歌い、ステージでは演劇的なショーを展開する。1977年のデビュー・アルバム以来、彼の曲作りのパートナーはクロード・アンジェルで、作曲、ギター、ベース、キーボードを担当し、歌を仕上げるのに一役も二役も買っている。また、クロードの弟のセルマー・アンジェルのシンセサイザー・プログラミングでの協力も見逃せない。本作は〝写し絵のマンボ〟、〝性倒錯者のバラード〟、〝キャプテン・ハード・ロック〟などタイトルを見ただけで笑いがこみあげてくる楽しい曲が多く、アルバム後半は〝四季〟という組曲でコミカルな恋物語の顛末を歌っている。（松元）



ROBERT
Cine
CD/Columbia CDL 473612 2 '93年
エピック ESCA 5763

'93年に突如登場したフレンチ・ロリータ・ポップスの新星シンガー、Robertのデビュー作。キラキラした打ち込み系のシーケンスを基調にキュートなヴォイスが無表情にささやきかけるそのやり口は唱法や声質、曲調に至るあらゆる面でMylene Farmerとの類似性が見い出せる。大部分の曲は彼女とプロデューサーのMathieu Saldinの共同作業によるもので、この両名がFarmer-Boutonnatの最強タッグに匹敵する才能を持ち合わせているかどうか、その判断は次作以降に委ねたい(今回は取りあえずカワイイから、許す)。ベースにBernard Paganottiが参加しており、数曲でいかにもというプレイをしている。KRAFTWERKの〝The Model〟をカヴァーしているが、歌い方もキマっていて良い良い。（内田）



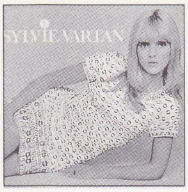
SALIF KEÏTA
Soro
CD/日本フォノグラムPHCR-1728 '87年

所謂ワールド・ミュージック・シーンの重鎮中の重鎮、サリフ・ケイタは西アフリカのマリのミュージシャンだ。ケイタの音楽の素晴らしさはなかなか表現しにくいのだが、まず彼本人のカリズマティックな存在感がある。マリの王家の出身でありながら、アルビノという運命を背負ったグリオ。彼の張り詰めた歌声は本当に心を打つ。ケイタを迎え入れたヨーロッパ、特にパリの音楽シーンと化合して、「Soro」の音楽は不思議な情景を現出する。プレイヤー／アレンジャーとして参画しているフランソワ・ブレアンとジャン＝フィリップ・リキエルの存在が非常に大きい。アントワーヌ・エルヴェ人脈を中心にOFFERINGのメンバーもバッキングに参加しており、フランスの音楽シーンの面白さを垣間みせる。（坂本）



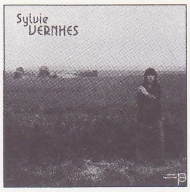
SILVIA MALAGUGINI
L'antro Magico
L P/Cesar 810 615-1 '83年

彼女の名前もそれ風だし、タイトルと歌詞はイタリア語なので、イタリアのアーティストとするべきかも知れませんが、録音もレーベルもバックの人達の名前もフランスなので、どうかひとつ。「魔法の洞窟」と題された本作は、収録曲のほとんどはイタリアのトラッド曲なので、明るいメロディーの曲もあるのですが、演奏は民謡調ではなくシリアスで、ジャケットの印象ほどではありませんが、暗めです。そして、曲間には、かなり抑揚のある「台詞」が入っています。そのためか、アルバムのトータル性が感じられます。少しキツイ声質ですが、高めの太い声質で、歌はうまいです。「クラシックの、女声独唱の入った古楽合奏団の演奏に、強烈なメリハリをつけて、シンセも入れた」という感じです。（斉藤）



SYLVIE VARTAN
Sylvie Vartan
CD/BGMビクター BVCP-1063

'60年代前半のフランスを覆い尽くしたイエ・イエ旋風。その中心で常にムーヴメントをリードした最大のスターといえば、ジョニー・アリデイとシルヴィ・ヴァルタンである。特に彼女の当時の人気たるや凄まじく、ビートルズでさえも初めてのフランス公演の際はヴァルタン様の前座だったのだ。'61年にデビューし、初期はアメリカン・ポップスのカヴァーがメインだったが、イエ・イエ・フィーヴァーの沈静化と共に次第にオリジナル曲に重心を移し、大人のシンガーとしてのイメージを確立していった。交通事故で重傷を負った後の復帰第1弾であるこの8枚目のアルバムは、音楽的には現在に至るまでの彼女の全作品中でも最もポップでイキのいい傑作である。躍動感溢れる〝あなたのとりこ〟など、いつ聴いても最高。（松山）



SYLVIE VERNHES
Sylvie Vernhes
LP/Perides 13 NP 635

空にもやがかかっていて、遠くに家並みの見える原っぱに、女性が一人佇んでいる、そのくすんだ色あいに惹かれて買ったレコードです。全曲とも、作詞・作曲は彼女自身が手掛けており、その曲調は、とても穏やかでキレイキレイしたフォークです。OUEST-OMNIBUSという4人組がバックを担当していて、曲によって、ピアノ、アコーディオン、ヴァイオリン、チェロにプサルテリオンの各奏者まで加わっています。とは言っても、同時に鳴っている楽器の数は少ないので、音は厚くはありません。でも、その使い方が効果的なので、曲がとても「良く」聞こえるのです。彼女の歌声も、柔らか目でカワイイので、もしも安く見つけたら是非。なお、発表年の表記はないのですが、'70年代前半くらいの音です。（斉藤）



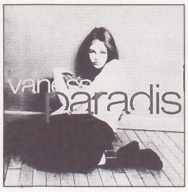
VALÉRIE LAGRANGE
Faut Plus Me La Faire
LP/Virgin 202199-320　'80年

ヴァレリー・ラグランジュは映画界からキャリアを始め、1980年に本アルバムで音楽界への本格的デビューを果たし、成功を収めた。彼女の音楽的パートナーのイアン・ジェルフスと書いたポップ、ロック、レゲエ・ナンバーを歌ったこのアルバムは、アスワド、マトゥンビといった英国のレゲエ・グループが参加し、マイク・ハウレットがプロデュースしている。さらには、スティーヴ・ヒレッジが1曲でギターを弾いている。この世に対する嫌悪と絶望と不安、そして、そこから抜け出そうともがく彼女の姿が色濃く表れているアルバムである。また、ボブ・ディランのカヴァー〝アイ・ウォント・ユー〟も収録。1981年のアルバムでは〝戦争の親玉〟も歌っている。現在までに編集盤2枚を含めて7枚のアルバムがある。（松元）



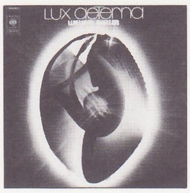
VANESSA PARADIS
Variation Sur Le Même T'aime
CD/ポリドール POCP 2240　'90年

1972年12月22日生まれ。15歳の時デビュー。アイドル産業が伝統ですらあるフレンチ業界は彼女を普流にデビュー作「マリリン＆ジョン」に仕上げた。そして故ゲンズブールと出会いこのアルバムと同時に〝ヴァネッサ・パラディ〟が生まれる。デビュー作とこの2作目のギャップこそゲンズブールの手腕がいかに大きいかを示すものだ。パラディはこのアルバムでフランス国内に知れわたったが、それは収録曲〝Tandem〟のビデオ・クリップに象徴される1作目の子供とは似ても似つかない姿、イメージとともにだった。ゲンズブールの眼の光らせ所その鋭さがあったからこそ今のパラディはある。その強大な支援があって彼女は〝小悪魔〟を生かした。曲の質が格段に上がり雰囲気を漂わす。今の彼女は男の子よりも多分女の子に人気がある。（松本）



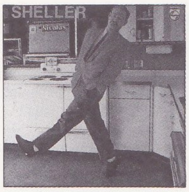
VANESSA PARADIS
Vanessa Paradis
CD/ポリドール POCP-1253　'92年

フランスをアメリカに売った尻軽娘、と実際にツバを吐かれたこともある程の人気アイドル。〝バルドーの再来〟などセンセーショナルなギョーカイ路線の上昇カーブを描き、一気に登ぼり詰めた大ヒット作。邦題「ビー・マイ・ベイビー」。レニー・クラヴィッツが故ゲンズブールに代わって手とり足とり、この時二十歳の彼女は夢中である。NYをヴェルヴェッツを知った彼女の歌う〝ビー・マイ・ベイビー〟は、ここ東京でも一時はどこへ行ってもかかっていた程。ヴァネッサ・パラディはシャネルのCFモデル以上に、'60'sリヴァイヴァルのアイドルになっていた。フレンチ・ロリータの'90年代とは彼女のことである。そのものブームのポップス。'93年来日時にはどんな事になるかと思ったが、直前で中止になっている。（松本）



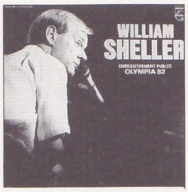
WILLIAM SHELLER
Lux Aeterna
LP/CBS 65030　'75年

エマニュエル・ブーズのアレンジャーとして知られるウィリアム・シェラー。ブーズの作品が派手に騒がれる一方で、本作は地味なカヴァーも災いしてかそれ程評判にはならなかった様だ。しかし、ブーズの作品群にも比肩すべきその驚くべき完成度の高さは耳にした者なら誰もが認めるはずである。彼自身が指揮するオーケストラと壮大な混声合唱団を大胆にフィーチャーして一種独特の陰を宿したシンフォニーが繰り広げられる。その狭間を縫ってシンセ類がうなりを上げ、束の間のギター・ソロも展開される他、幻想的な演奏をバックにしての虚ろな女性ヴォイスも印象的だ。アルフレッド・カリオンあたりのファンにはたまらない内容であるが、〝プログレッシヴ・ロック〟の一言で片付けてしまうには余りにも重みのある演奏である。（江田）



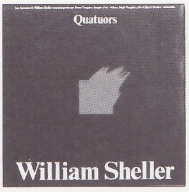
WILLIAM SHELLER
Nicolas
LP/Philips 9101291 '80年

このアルバムに含まれるいくつかのポップなヒット曲が私は好きだ。独立独歩の精神を高らかに宣言する〝Oh! Je cours tout seul(私は一人ぼっちで走る)〞、ユーモラスなテクノツイストレゲエの〝Billy nottoie son saxophone（ビリーはサクソフォンを掃除する）〞、堅苦しい大人たちの集まりに連れられて来て居心地の悪さを感じている子どもの歌〝ニコラ〞など。その一方で〝小さなシューベルトは病気〞のようなクラシック調のインストゥルメンタル曲もある。どうしても「Lux Aeterna」でないといやだという人に本作を好きになってもらうのは無理かもしれないが、彼はあらゆる音楽をお手玉のように巧みに操るユーモラスかつシリアスな音楽職人なのであり、それを否定しては始まらない。（松元）



WILLIAM SHELLER
Enregistrement Public Olympia 1982
LP/Philips 6622035 '82年

1982年のライヴ・アルバムで、それまでのキャリアを一望して総括する多彩で充実した内容だ。シンセサイザーを全く使わず、ギター、ベース、ドラムス、管、弦に彼自身のピアノという粋な編成で、ロック、ジャズ、クラシック、レゲエ、バラードなどを彼らしく親しみ易い形にアレンジしたポップスを歌っており、インストゥルメンタル曲もある。彼はポップ・ミュージシャンだが、どんなタイプの曲であれ緻密で丁寧に作るし、商業主義に魂を売っているわけでもないことがこのアルバムで証明されている。ポップ性と芸術性のバランスをとるのが巧みな彼をプログレの枠に押し込めるのはやはり無理がある。このアルバム以降、1980年代は「Univers」、「Ailleurs」までクラシック的な作品が続く。（松元）



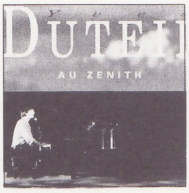
WILLIAM SHELLER
Quatuors
LP/Side 8415 '87年

ポップス界の大御所、突然の変節？いや、Another Sideというあまりにも確信犯的なリリース元の名前を併せ考えるに、彼自身の趣味的欲求の充足、または従来の活動とは完全に一線を画して進められたプロジェクトの成果とみる方が自然か。タイトルが示す通り、B・Pasquier(1st-vln)、J・Prat(2nd-vln)、R・Pasquier(vla)、H・Derrien(cello)によるストリング・カルテットの小品集。全曲彼のペンによるその曲想は(近代以前の)クラシカルなものとは言え、従来の形式には必ずしも拘わらない展開はかなり自由なものを感じさせ、作曲者の意を汲んだ起伏や情感に豊んだ演奏、醸成されたシリアスなイメージと相まっての、Shellerの懐の深さを感じさせるプログレ・ファンには喜ばしい一枚。（山田）



WILLIAM SHELLER
Albion
CD/Philips 518963-2 '94年

タイトル通り、イギリス録音の最新作。クラシック色濃い作品を作り続けた1980年代の彼が一転して、ハードなギターが支配するロック・アルバムを作った。ロックだといっても安易な売れ線は狙っていないのが良い。逆に、彼の音楽のファン層が想像しにくいだけに、売れるのかどうか心配になるくらいに商業的妥協はない。彼の優しい声にはハード・ロックよりもクラシック的な音楽の方が合っているような気もするが、本作は音楽的な探求心と冒険心に溢れている。シャンソンのヴォーカリストというよりも、ロックのサウンド・クリエーターとしての手腕を聴くべきアルバムだ。なお、本アルバムからのファースト・シングル「Maintenant tout le temps（今、いつも）」にはアルバム未収録曲がカップリングされている。（松元）



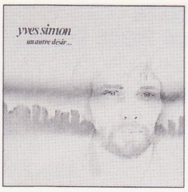
YVES DUTEIL
Au Zénith
CD/EMI 7977492 '91年
Columbia COL 474656-2

1949年生まれ。美しい童画や風景画のような歌詞を、平易だが気品があり新鮮なメロディに乗せて生ギターやピアノで聴かせるイヴ・デュテイユの歌は子どもから老人まであらゆる世代の人に微笑みを与えている。1977年の「Prendre un enfant（子どもを抱いて）」は、「(妻の連れ子である）子どもと何年も共に生き、突然子どもの手を取り、この子を我が子だと思う」と歌う、自分が選んだ子どもに、作った子どもと同じ愛を注ぐ歌で、1988年にはフランス著作権協会のアンケートで「フランス人が最も愛好する20曲」の1位に選ばれた。このライヴ・アルバムでは、初期の優しい歌に加えて、人生が人間に課す心の傷に真正面から立ち向かい、世界情勢に対しても発言する逞しさも見せる。来日経験も4回ある。（松元）



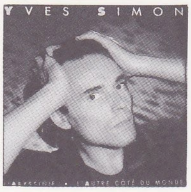
YVES MONTAND
Olympia "81"
LP/日本フォノグラム 25PP-40〜41 '81年
CD/Philips 822 508-2

歌手としてだけでなく、45本以上の映画にも出演した俳優としても有名なイヴ・モンタンは1921年イタリア生まれ。貧しい移民としてフランスに渡り、陽気で人を笑わせるのが得意な彼は肉体労働をしながら芸能界入りへのチャンスを徐々に摑む。〝枯葉〞、〝パリで〞、〝セ・シ・ボン〞などは彼のレパートリーとしてあまりにも有名。本盤は、1981年に彼が13年ぶりに開いたコンサートを収録した、シャンソンの歴史に残るライヴ・アルバムである。歌を完璧に演じる60歳の芸人の円熟したプロフェッショナリズムが凄い。終盤に歌われる〝枯葉〞はやはり名曲である。1982年にはこのプログラムによる来日公演も実現。1991年1月、映画の撮影中に倒れ、誠に残念ながら、そのまま不帰の人となった。（松元）



YVES SIMON
Un Autre Désir...
L P/RCA PL 37097　'77年
CD/RCA BMG Ariola ND 74910
L P/RVC RVP 6278

トランジット・エクスプレスとの活動でプログレ・ファンにも知られるイヴ・シモン。社会的・文化的意味を持つ多くの固有名詞に間接的メッセージを隠すという手法、必要以上には饒舌にならないがさまざまなスタイルにアレンジされたシンプルな曲、彼自身の軽い声。あらゆる点で決して押し付けがましくない彼の音楽は無意識のうちに人に影響を与える。本作は彼の全作品の中で、音楽的に最も多彩だと思う。ロック、ピアノとサックスによるシンプルなバラード、アフリカ的なパーカッションなどなど。他人との一瞬の心の接点が孤独を和らげることを歌う〝パリ23局長殿〟、警察国家フランスへの批判を歌う〝ポリス恐怖症ブルース〟、パリという街の文化的厚みを感じさせる〝パリの亡霊〟などに特にひかれる。　(松元)



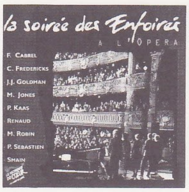
YVES SIMON
L'autre Côté Du Monde
L P/Exo, Exo, WXL-109-2　'85年
CD/BMG RCA ND 75145

原題は「世界の反対側」。1曲め〝L'Abyssinie〟を取って「アビニシア夢浪漫」という邦題で国内盤も出ていた。詩人ランボーが詩を捨て旅立ったアフリカの地。エスニックなリズムとシンセサイザーの強調が彼のエクゾティシズムを浮彫にする。作家でもあるシモン(TRANSIT EXPRESSは彼の著作のタイトルでもある)が、'88年の小説「すばらしい旅人」で、空へと向かう人間の垂直的な意志と夢、生命を巡る男女のずれを、主人公のアフリカ、アメリカ、広島という歴史上の転回点を辿る旅を通して凝視したように、ここで彼は混血の素晴らしさ、日本女性との情事、男女間の戦争、「新しい世界の中心」アジアやアフリカへの思いを謳う。ジャケットを飾る鳥獣戯画。すべての彼の知的愉悦を求める心から成せる業か。　(高山)



ZABU
My Coffin's Ready
L P/Theleme 6332 750　'72年
CD/Musea FGBG 4088

元ユニベリア・ゼクトのヴォーカリスト、ザブのソロ・アルバムである。収録された7曲はクリスチャアン・ヴァンデ、ヨシコ・ジョフ・セファー、テディー・ラスリー、フランシス・モーズらマグマ・ファミリーが参加したものとほとんど無名のミュージシャンがバックを勧めたものの2種類に大別されるが、両者ともザブの個性を強く打ち出したブルース色の強い内容となっている。そうした中で、B③に収められた〝Silent Angel〟におけるセファーのテナー・ソロは出色の出来と言える。このアルバムを発表した後レーベルをソノプレスに変え、バック・ミュージシャンも一新して(リシャール・ローがゲスト参加)、よりブルース色を強めた「Zabu & Co」(Sono-Presse Spot ST69.643)を'76年にリリースしている。　(賀川)



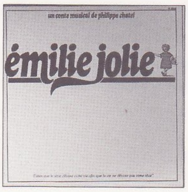
V. A.
La Soirée Des Enfoirés À L'Opéra
CD/Columbia COL 472424-2　'92年

人気漫談家のコリューシュの発案で1985年に始まった、フランス国内の貧しい人々に給食を無料で提供する。「心のレストラン」という助け合い運動がある。政財界の協力を取り付け、学生や年金生活者など多数のボランティアが参加し、フランス社会に定着した社会運動だ。その支援のためのチャリティ公演(の一部)を収録したライヴ・アルバムがこれ。テーマ・ソング作曲など当初から尽力を惜しまないジャン・ジャック・ゴールドマンを始め、パトリシア・カース、ルノー、フランシス・カブレルらの大物歌手が参加し、持ち歌を中心に歌う。歌唱や聴衆の反応に取ってつけたようなことろが皆無なのが驚きで、社会参加、相互扶助の精神がかの国に定着している証でもある。フランス的なチャリティ・レコードの名盤。(松元)



V. A.
Starmania
L P/WEA 66086 Studio Version
'79年
WEA 66089 Live Version
CD/WEA 9031-73975-2 Live Version

カナダの作詞家、リュック・プラモンドンの詞にミッシェル・ベルジェが曲を付けて制作されたロック・オペラ、「スターマニア」。現代社会に生きる人間の夢、野望、孤独を描いた作品で、1979年の初演以来、現在に至るまでキャストを変えて何度も上演され続けている。これは初演版で、ダニエル・バラヴォワーヌ、フランス・ギャル、カナダはケベックの女性歌手、ディアーヌ・デュフレーヌ、ファビエンヌ・ティボーらが出演。ミュージシャンは、アンドレ・セカレッリ、ジャニック・トップ、クロード・アンジェルらである。個々の歌で言うと、自動ウェイトレス役のファビエンヌ・ティボーが歌う〝自動ウェイトレスの嘆き〟、〝他の人と違う彼〟、〝世界はストーン〟が現代の孤独を描いた名曲だと思う。　(松元)



V. A.
Émilie Jolie
L P/RCA PL 37338　'79年
CD/RCA PD 37338

フィリップ・シャテル作の音楽劇「エミリー・ジョリー」。両親が夜出掛けた後、一人で家で留守番している少女エミリーが、絵本の中の世界を旅して、魔女に姿を変えられてしまった王女さまを元の姿に戻してやるという筋。登場人物(動物)に起用された人気スターの配役が見事にはまっていて、フランソワーズ・アルディ(魔女)、ジョルジュ・ブラッサンス(針鼠)、アラン・スーション(雄鶏)、ルイ・シェディッド(アライグマ)、イヴ・シモン(小石)、シルヴィ・ヴァルタン(ダチョウ)、アンリ・サルヴァドール(語り手)などという具合。愛らしいバックの音楽を演奏するのはベルナール・パガノッティ、ジャン・ルイ・ビュキ、フランソワ・オジェなどの面々。童心溢れる曲の美しさには涙まで出るほど。　(松元)

TRAD ▸

ALAN STIVELL

□高山直之

ケルト・ミュージック、エスニック/ワールド・ミュージックがブームになる遥か以前から、トラディショナルとポピュラー・ミュージックの間で活動を続けてきたミュージシャンがいる。ブルターニュというフランスにあってケルトの色彩を色濃く残す特異な文化を有す辺境の地、そこに生まれ彼は父親の造ったハープを手に、ブルターニュからアイルランド、スコットランド、ウェールズというケルト文化圏、そして世界に向けてポピュラー音楽におけるケルト、トラディショナル・ミュージックの復権を進めて行くことになる。彼—宮廷よりも野が似合う戦士兼詩人の面影を持つアラン・スティヴェルの軌跡はそのままケルト・ミュージック、ワールド・ミュージックの先駆とも言えよう。

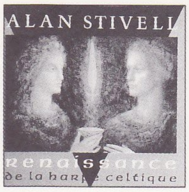
そもそもケルト民族とは何か。そしてスティヴェルの生まれ育ったブル



ターニュはそれとどう繋がりがあるのだろうか。ケルト民族の起源は紀元前二千年を遡る。前八世紀頃にライン、ドナウ河流域、現オーストリアのハルシュタットを中心に鉄器文化を築き、前五世紀に歴史の表舞台に記述された形で登場した彼等は当時、およそ全ヨーロッパに勢力を広げつつあったが、やがてローマやゲルマン人に敗れ、崩壊、吸収あるいは辺境への退出を余儀なくされてしまう。こうしてケルトの民が行き着き、現在も息づいているのはアイルランド、スコットランド北部、イギリスのコーンウォール地方等の僅かな島地と、大陸ではウェールズやコーンウォールから大量の住民が渡り(つまり再び大陸に還ったこととなる)、嘗は自治を保っていたフランスの西端ブルターニュ半島とスペインの極く一部に過ぎない。ケルトが地理的にも文化的にも≪周縁≫に追いやられ、ヨーロッパの歴史がギリシァ、ローマの南方中心史観に染められたのは周知の通り。つまりケルトは紀元後常に現実的には敗者の側にあった。大英帝国の落日どころの話ではない。しかしその文化と心性、霊妙な北の想像力と装飾精神の翼は決してもがれなかった。文化面でのケルト復興には幾つかの波があり、スコットランドのJ.マクファーソンが「オシアン」を世に問い、ヨーロッパにセンセイションを巻き起こしてロマン主義を誘発した18世紀後半、19世紀末から今世紀始めのアイルランドのイェイツらを中心とする〈ケルト復興〉運動、そして今日のケルト・ブームに繋がり、BEATLESからZEPを含む英国ポピュラー音楽に影響を与えた第2次大戦後のフォーク/トラッドの再発見等が挙げられよう。そうした中、1953年にケルティック・ハープを復元したブルターニュの楽器職人がアランの父親だった。5才からピアノを学んだアランは、8才の時に父親よりハープを手渡され、それを学んでアイルランドやブルターニュ —— ケルトのトラッドに道を見出す。

活動のスタートが'65年と言うから、CHIEFTAINS並、因みにこれはCLANNADがアマでスタートする4年前、筆者と同世代のCAPERCAILLIEに至ってはまだ生まれて間もないか、幼児の頃だ。'71年のサード・アルバムを「Renaissance Of The Celtic Harp」と名付けた彼は、音楽におけるケルト復興を伝承の場だけではなく、よりポピュラーなフィールドに持ち込み、国際的な舞台でのケルトをルーツとし、それを現代的なテクノロジーと融合させたモダン・エスニック・ミュージックの創造を宣言する。それは民族意識の発露であると共に、ブルターニュという枠を超えた汎ケルト文化への呼びかけでもあった。翌'72年の佳品「Olympia Concert」ではロック的なビートと乗りを強調し、"ケルティック・ロック"の端緒を開いたと言っても良い。当時彼のバンドに居たフランス人ギタリスト、ガブリエル・ヤクブが「これはブルターニュの音楽であって、フランスの音楽ではない」としてMALICORNEを結成。アランは間接的にユーロ・トラッド興隆のきっかけも作ったことになる。尚、「Olympia Concert」はヨーロッパで好セールスを記録。各地にフォロワーも生んだ。ライヴ・アルバムとしては'75年に「Live In Dublin」も出しており、エレクトリック・ギターのダン・アル・ブラを含め半数のミュージシャンが重複。曲自体はやはり「Olympia〜」の方が印象に残るが、こちらもトラッド、ケルトの本拠地とも言えるアイルランドでのライヴだけに、興の乗った演奏が聴ける。'77年にはMAGMAのメンバーも参加し、プログレッシヴ・サイドでの評価の高い「Before Landing」を発表、音楽の幅を更に広げて行く。そして、彼の野望を結実させた一大大作と言えるのが'79年の「Symphonie Celtique」。「Tir Na N'Og(常若の国)」という副題が示すように、敗者ケルトの栄光と黄昏の歴史と、抗し続け守り通した誇り高い精神を熱情と幻視で再現、音楽化している。その後もトラッド、ロック、更にニュー・エイジに亘る着実な活動を続け、'91年には女性の視点で見たアーサー王伝説というマリオン・ジマー・ブラッドリーの小説「アヴァロンの霧」(邦訳は早川文庫FT)にインスパイアされた「The Mist Of Avalon」を発表。小説自体はル・グィン以降の女流SF/ファンタジィに多いフェミニズム色の濃いものだが、アーサー王伝説という格好の舞台で雅量溢れる音楽を披露。それに続く17枚めの新作が'70年代に収めた曲を再演した'93年の「Again」である。ここでは嘗ての仲間の他に、K.ブッシュやBRAND X〜SIMPLE MINDSのJ.ギブリン等英国のミュージシャンも名を連ね、ケルティック・ロックを自らの手で余裕を持って、力強く今日に甦えらせている。

ハープと言うと繊細な野を渡る風のイメージがあるが、彼の音楽はケルトと言っても例えば女性シンガーを擁したアイルランドやスコットランドのグループのようなたゆたう夢幻性は幾分希薄だ。だがこの強固な意志と情熱に貫かれた音楽もまたケルトの大幹なのである。その豊かな歩みが生んだ果実を何か一つでも手にしてみて欲しい。



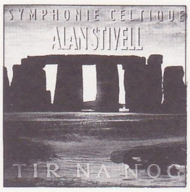
ALAN STIVELL
Renaissance Of The Celtic Harp
LP/Fontana 6325 302 '72年
CD/Dreyfus FDM 36190-2

A・スティヴェルのサード・アルバム。ケルティック・ハープ、ひいてはケルト音楽(音楽におけるケルト)復興を高らかに宣言した意味でも貴重な作品と言えよう。1曲めの〝YS〟はブルターニュの伝説にある海中に沈んだ都イスをテーマにしたもの(ドビュッシーの〝沈める寺〟も同じ伝説をモチーフとしている)。ウェールズの手稿本に依る吟唱詩人のハープ曲を再現した3曲めを除けば、アナログA面はブルターニュに取材した作品。そしてB面全体を占める〝Gael Tacht〟は、〝A journey across the Gaelic Countries〟とコメントされたアイルランド、スコットランド、マン島のトラッドのメドレー。父の甦えらせたハープを手にブルターニュより起ち、汎ケルトを目指す若きスティヴェルの姿が浮かぶ。 (高山)



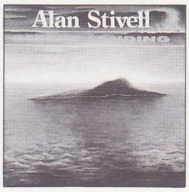
ALAN STIVELL
Olympia Concert
LP/Fontana 6399 005 '72年
CD/Dreyfus 834 289-2

〝ケルティック・ロック〟と言ったとき、人は何を思い浮かべるだろうか。多くはアイルランドやスコットランドのバンド、ミュージシャンではないだろうか。CLANNADやCAPERCAILLIEに代表される夢要感と表裏を成すケルトの熱い血を、トラッドの旋律とロックの音圧で織り上げたという意味では、A・スティヴェルの、特にこの作品は記念碑的な端緒と言って良い。学究的な姿勢はWURTENBERGのA・カルボナールの方により感じるが、彼には強く訴えかける力がある。スティヴェル(Vo, Harp他)の他にダン・アル・ブラ(g)始め9人のミュージシャンが土の香りと、現代的な乗りの中で、各々トラッド楽器、ロック楽器を演奏している。曲もトラッドながら彼を代表するものが多く、入門篇として格好だと思う。 (高山)



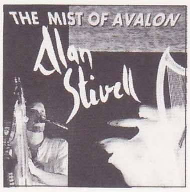
ALAN STIVELL
Symphonie Celtique
LP/CBS 88487 '79年
CD/Dreyfus 833 125-2

副題に付けられた〝Tir Na N'Og〟とは、〝常若の地〟を意味する。ケルトの民が西方の海の先にあると信じた異界。死者はそこでは年を取らず、豊かな恵みの中、永遠の生を生きると。A・スティヴェルが総勢70名を超えるミュージシャンを起用して創り上げたこの大作は、ハープやバグパイプ、ボーラン等といったトラッド楽器や通常のロック楽器の他に、オーケストラ、合唱団までも加え、民族の歴史的ヴィジョンに貫かれたタイトル通り壮大な〝ケルティック・シンフォニー〟である。M・オールドフィールドの「Ommadawn」にも匹敵するケルト的感性の迸り。トラッドのみならず広義のクラシック、ニュー・エイジ、シンフォニック・ファンに聴いて欲しい。副題が示すのは民族の視線が向かう永遠の憧憬だろうか。 (高山)



ALAN STIVELL
Before Landing
CD/Dreyfus 191 068-2 '77年

ブルターニュのトラッドを核にありとあらゆる音楽要素を取り込み、変幻自在に変容し続けるStivellの作品群の中でも最もロック色の強いもののひとつ。番頭格のDan Ar BrazをはじめFAIRPORTのDave Swarbrick、元MAGMAのAlain Hatotらの多彩なミュージシャンを加えてクリエイティヴなプログレッシヴ・トラッドを奏でる。彼にしては珍しくエッジの立ったロック・サウンドがフィーチュアされており、特にヘヴィなベース・リフに支配される前半部は圧倒的だ。本作の参加ミュージシャンのうち数名が後にMAGMAの「Attahk」ツアーのメンバーに抜擢される。また本作での共演をきっかけにSwarbrickがDanをFAIRPORTへ引き抜くなど、人脈的にも複雑怪奇をきわめる問題作。 (内田)



ALAN STIVELL
The Mist Of Avaron
CD/Dreyfus 191 010-2 '91年

WHIPPERSNAPPERのKevin Dempsy, Chris Leslie, 更にはPolly Boltonといったイギリスのトラッド系ミュージシャンを参加させて制作されたもの。持ち前のブリターニュ・トラッドにブリティッシュのもつ大らかさが絶妙のバランスで溶け合い、適度のロック色も加味されて非常に耳あたりの良い好作品となっている。トラッドトラッドしたアクの強さも少ないので、これまで彼を敬遠していたリスナーへの入門編としても最適だろう。Leslieの伸びのあるフィドルは曲に強い張りを与えているし、数曲でハモリを効かせるPollyのヴォーカルもまたいい感じだ。ティン・ホイッスルの情緒豊かな旋べに身をまかせて聴くと、とてもリラックスした気分に浸ることができる。心洗われる一枚。 (内田)

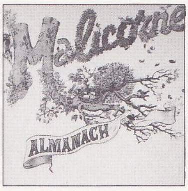


ALAN STIVELL
Again
CD/Dreyfus 518 393-2 '93年

'70年代初期の楽曲をリアレンジした作品集であるが、どの曲も時代を踏まえた彼のフィルターを通して新たな生命力を吹き込まれており、ニュー・アルバムと考えても差し仕えあるまい。サポート・メンバーがまた凄く、久々再登場のDan Ar Braz, 元MAGMAのJean Luc Chevalier, そしてアイルランドきっての重鎮パイプ奏者Davy Spillane等々、相変わらず意外かつ多彩だ。全曲トラッドがベースになっているということもあって曲に重味があり、新しいアレンジの中にもその深さを十二分に味わうことができる。⑩の後半部でエキゾチックなコーラスを聴かせるのはKate Bush。多少感情を押し殺してはいるがやはり強烈な個性は隠せない。しかし最近すっかりこの手の音が似合うシンガーになったな。 (内田)

MARICORNE





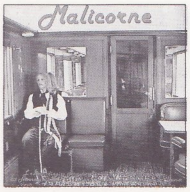
MALICORNE
Almanach
LP/Hexagone 883 007 '76年
CD/Hexagone 193682/DI/760

アラン・スティヴェルと共にフレンチ・トラッドを代表するバンド、マリコルヌ。これは3枚目に当る。〝Almanach〞とは暦のこと。よく使われるモチーフだが、1年12カ月に曲を当てはめてこのアルバムも出来上がっている。デビュー作ではまだ堅苦しさが感じられたマリコルヌも前作「Malicorne」(Hexagone 883 004, '75年)では既に独特の滑めらかさとアレンジカの素晴らしさで、「どれも傑作」の域に達していたが、このアルバムも例にもれない。マリー・ヤクブとガブリエル・ヤクブのヴォーカル、プレイ、そしてローラン・ヴェルカンプルと各方面で多彩な腕を見せるユーグ・ドゥ・クールソンの演奏力、表現力の4者かみ合いは、トラッドでありながら、そこにおさめるにはあまりに惜しい程のものだ。 (松本)



MALICORNE
Malicorne
LP/Hexagone 883 015 '77年
CD/Hexagone 193、712

「Almanach」に続く4作目。ベース奏者Olivier Zdrzalikがこのアルバムから参加する。アルバム全体としてはヴォーカル・パートの占める割合が多いだろうか。自作曲が3曲程あるがトラッド・ナンバーとの区別はつかない。マリコルヌの音楽はトラッドの焼き直しには違いないのだが、独自にアレンジして改変したとしてもトラッドのエッセンスがしっかりと宿っている。そしてアレンジは数多くのミュージシャンから頭一つ抜け出るの程オリジナリティなのだ。つまり土臭いのに洗練されている、ということになる。それは型のコピーではなくエッセンスをとり出すようなことだと思う。ヴェルカンプルとクールソンがLA CONFRÉRIE DES FOUSなどをやってのけるのも大きくうなづけることだ。 (松本)



MALICORNE
L'extraordinaire Tour De France D'Adélard Rousseau, Dit Nivernais La Clef Des Coeurs, Compagnon Charpentier Du Devoir
LP/Ballon Noir BAL 13006 '78年

マリコルヌはガブリエルとマリーのヤクブ夫妻に、ユーグ・ドゥ・クールソン、ローラン・ヴェルカンプル、オリヴィエ・ズドルザリク等から成るエレクトリック・トラッド・グループである。フランス古謡を現代的なアレンジで演奏すること、新しいトラディショナル・ミュージックを創造すること、がこのグループの目標である。アルバムはエクサゴンから5枚、バロン・ノワールから3枚、エレクトラから1枚、そして1枚が出ている。バロン・ノワール盤はのちにエレクトラから再発された。このアルバムはバロン・ノワールに移籍後の初アルバムで通算6枚目に当る。アデラール・ルソーという架空の人物を創造し、彼のフランス遍歴を題材にしてフランス各地の風物をとり入れた歌物語という形成でアルバム化している。
(宇田川)



MALICORNE
Le Bestiaire
L P/Ballon Noir BAL 13012 '79年

「獣類を扱った中世の寓話」という意味のタイトルの、マリコルヌの８枚目のアルバム（ベストは除く）。フランスには多い、硬く引き締まったサウンドのエレクトリック・トラッドを奏で続けて来た彼等は、本作で、行きつく所まで行ったと言えるでしょう。シンギング特にコーラス・ワーク、各種楽器のアンサンブル等、何から何まで、「ピシッ」としたサウンドです。よっぽど好きな人でないとキツイ音ですが、逆に、「叙情派シンフォニック」以外のプログレ（イヤな言い方ですね）が好きな人には、気に入ってもらえるかも知れません。こういう音楽としては完璧なアルバムを作ってしまった彼等は、次作「火中のブランコ」では、ドラエモンふりかけを使うことになります。でも、その本質は、何も変わっていません。　（斉藤）



MALICORNE
Balançoire En Feu
L P/Elektra 52280 '81年

'81年にもなると、世界はニュー・ウェイヴ一色に染まっていて、頑固一徹のどトラッド・バンド、マリコルヌまでもが、その影響を受けるようになりました。１曲目のリズムは、まるでダムドかマッドネスです。２曲目に至っては、イントロは自動演奏です。でも、「じゃあ駄作か？」と言われたら、傑作です！例えば１曲目は、サビに入ると、リズム・チェンジがあり、音も厚くなります。そこまで派手ではありませんが、シンプル・マインズや、中期エコバニのような「きらびやかな厚さ」です。全体的には、あのトラッド然としたメロディーの部分は、ちゃんと半分以上あり、サウンドの方の土臭さが減って洗練され、かつ厚くなったのです。こういうサウンドの方が、数曲あるマリーのVoが、可愛らしく聞こえます。　（斉藤）



GABRIEL YACOUB
Bel
CD/Keltia Musique KMCD15 '90年

MALICORNEの中心人物であったGabriel Yacoubが'90年に発表した久々のソロ・アルバム。もう一人のブレーンであったCoursonが様々な音楽要素を持ち込んでトラッドの「枠」から徐々にはみ出していたのに対し、彼は土着的なトラッド・フォーク性をかたくなに守ってきた人であり、それがこの作品にも強く反映されている。ほのかな土の香りとフランス語の独特の語感が心地良いフォーク・サウンド。MALICORNEはモダン過ぎて訓染みにくいという人にもこれならしっくりくるのではないだろうか。彼の甘美なシンギングは申し分のないものだし、これに女性シンガーによるハーモニーがかぶさるとついうっとりと聴き惚れてしまう。フィドルやバグパイプの入れ方も絶妙だ。地味ながらも味がある。　（内田）



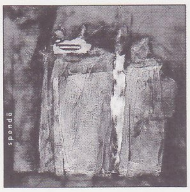
PATRICK MODIANO, HUGHES DE COURSON
Fonds De Tiroir 1967
L P/Ballon Noir BAL 13011

パトリック・モディアーノの詩にマリコルヌのユーグ・ドゥ・クールソンが曲をつけて歌った、連名ではあるが実質上、ユーグ・ドゥ・クールソンのリーダー・アルバム。ほぼ半分の曲には、グリフォンを経たマリコルヌのブライアン・ガーランドが参加している。マイナーなシャンソンだが、マルコルヌのようなトラッド臭さはなく、素直なメロディーである。そこここに入るガーランドのバスーンの絡みが素晴らしく、聴く者をハッとさせる。「引き出しの中の宝物——1967年の思い出」とでも訳すのだろうか。ユーグ・ドゥ・クールソンの才能としたたかな音楽性がマリコルヌの大きな助けになっていたのが、このアルバムでわかる。　（中藤）



LA CONFRÉRIE DES FOUS
La Confrèrie Des Fous
L P/Ballon Noir BAL 13008 '78年

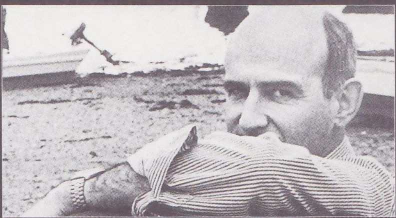
道化師一座という名のグループである。中心人物はマリコルヌのユーグ・ドゥ・クールソンとローラン・ヴェルカンブルであり、エマニュエル・パールナンの姿も見える。中世の人々の生活のすみずみまでを支配した神や悪魔、近代以前の社会で独自の地位を有していた道化＝狂人、そういったトリックスターたちをモチーフにしたアイロニカルで時に卑俗な笑いに満ちた世界がこのアルバムにはパッケージされている。歌詩や曲は時にはオリジナルであり、時には古謡の現代的解釈である。歌詩の持つ知的な魅力もさることながら、Ｂ②③でみられるような自由自在なアンサンブルの妙こそプログレッシヴの名にふさわしいのではないだろうか。　（宇田川）



SPONDŌ
Spondō
CD/Griffe GRI 19025 2 '92年

MALICORNEのもう片方の頭、Hugues De CoursonがKate Bushの実兄Paddyや元KOLINDAのIvan Lantosらと結成した謎のプロジェクト・ユニット。MALICORNEの中でもトラッドの枠をはみ出ようとしていた人だけに（PENTANGLEのDanny Thompson的存在と言えるかも）、本作でも様々な民族音楽の要素を最先端の手法で料理してもはやトラッドともワールド・ミュージックとも呼べぬ程の特異な「ネオ・エスニック・ミュージック」が創造されている。Ivanの影響なのか東ヨーロッパの伝承音楽（イスラム圏）の影響が強く感じられるが、勿論それだけでもない。紅一点のシンガー、Valérie Jolyは呪術的なものからシャンソン風のポップなナンバーまでを抜群の歌唱力と表現力で見事に歌い分けている。　（内田）

DAN AR BRAZ





MOR
Stations
L P/Thélème 6332 751 '73年
CD/Spalax Music 14222

'70年代初頭のごくわずかな間のみ活動していたブルターニュのフォーク・ロック・ユニットの唯一のフル・アルバムで、当地を代表するギタリスト、Dan Ar Brazの最初期のレコーディング・マテリアルとして知られる。一部のオルガン・ロック風の曲に多少の古めかしさを感じさせはするものの、透明感に富んだ独特のアコースティック・ギターの響きはやはり鮮烈な印象を残し、後の活動で一気に開花するDanの才能の片鱗を垣間見ることができる。シャープなフレーズを連発するピアノやフルート、フランス語によるコーラスを心地良い。本作の他にThelemeレーベルより出されたオムニバス・アルバム「Puissance 13+2」で2曲のライヴ・テイクが収録されており、これも本編に劣らぬ佳曲である。 (内田)



DAN AR BRAZ
Douar Nevez
L P/Hexagone 883009 '77年
CD/Hexagone 193・692

長くAlan Stivellのパートナーをつとめた後、FAIRPORT CONVENTIONへの加入を経て'77年に発表された初のソロ・アルバム。ナイーヴなセンス(ケルト魂由来か)がそのまま音になったようなピュアリティの高い作品で、刃物の切先のような鋭角的なギターをメインに(エレクトリックとアコースティックの使い分けが見事)、リズム・セクションやウーリアン・パイプが一体となり、極限ともいうべき高いテンションを最後まで持続させてしまう。Stivellのバンドで共に活動していたMichel Santangelli、Benoît Widemannに加え、FAIRRORT以来親交の深まったDave Pegg、更にはEmmanuelle Parreninといった名うての人達がその実力に恥じぬプレイでアルバムの質を向上に大きく貢献している。 (内田)



DAN AR BRAZ
Allez Dire À La Ville
L P/Hexagone 883021 '78年
CD/Hexagone 193・742

前作に続きHexagoneレーベルより出されたソロ第2弾。Santangeli, Widemannそしてパイプ奏者のPatrig Molardが継続参加している他、ベーシストとしてMAGMA組のFrancis Moze, Guy Delacroix(この直後に「Attahk」に参加)の2名が加入、当時のStivellとMAGMAの周辺の関係を裏付けるパーソネルとなっている。ヴォーカル曲が半数を占め、かなりロック色も強まって前作で見せたナイーヴさは後退している。確かにテンションでは前作には及ばないが、いわゆる「普通のロック」とは大きくかけ離れた特異なものであることには変わりがなく、その意味では「プログレッシヴ」な作品と呼んでも何ら差し仕えはないと思う。インスト曲の⑦やMozeの参加した⑥などはやはり抜き出ている。 (内田)



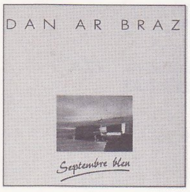
DAN AR BRAZ
The Earth's Lament
LP/Hexagone 883034 '79年
CD/Hexagone 193.792

前作の「風変わりケルティック・ロック路線」を一歩押し進めた3作目。ロック色はより一層強まってストレートになり、パワフルなギター・リフを盛り込んだ曲が多くなった。オープニングではいきなりビートルズの〝Rain〟をカヴァーしているが、これが仲々の好アレンジ。要所で切り込むウーリアン・パイプが最高にカッコ良い。ロック調のナンバーはオヤジのシャウトするヴォーカル・パートが多少うっとうしいものの、ギターやWidemannのキーボード・パートが光るインスト部ではプログレッシヴな仕上がりを見せている。一方「静」の色が濃い②④⑧は1stのナイーヴさを引き継ぐもので、特に今回は全面参加のMozeのメロディアスなフレットレス・ベースのフレージングが素晴しい。　(内田)



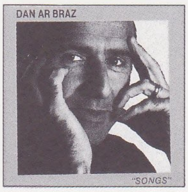
DAN AR BRAZ
Musique Pour Les Silences À Venir
LP/Rs 3063 '85年
CD/Keltia Musique KMCD02

質の高い3作品を残してHexagoneを離れた彼は'82年にオール・アコースティックのインスト・アルバム、「Acostic」(そのままだ) を発表した後、再びエレクトリックに立ち戻った本作を'85年にリリースした。リズムレスの楽曲がほとんどのためか、当時はニュー・エイジ系の作品群とひとくくりに扱われてあまり高く評価されなかったが (「いかにも」というジャケットも一因だったかも知れない)、曲作りの上手さや個性的なギター・ワークのもたらすテンションは一定のレベルを有しており、この手の通り一遍の作品とは明らかに一線を画す (まあ1stほどではないけどね)。今思えばアンソニー・フィリップスのPP&Pシリーズ後期作に通ずる部分も多い。一部の曲のミックスをLaulent Thibaultが担当。　(内田)



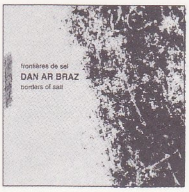
DAN AR BRAZ
Septembre Bleu
CD/Hello! REF600 37 '88年

前作から約3年のブランクを経て発表されており、この間に何らかの作品をリリースしている可能性がないわけではないが、基本的にはややニュー・エイジがかったインスト路線をそのまま受け継いでいる。ケルティックな冷ややかさは薄れ、ブリティッシュのそれに通底するのどかなムードが漂い始めるようになってきた。専任のドラマーが参加しているためか曲に起伏がつき (前作では一部の曲でWidemannがリン・ドラムをプログラムしてリズムを刻んでいた)、幾分聴き易くなっているかも知れない。これまでの彼の実績を考えればこの時期の作風は確かに印象が薄いが、決してイージーには流れず力を入れて作られており、高いクオリティを保持していることは強調しておきたい。再評価されて然るべきだ。　(内田)



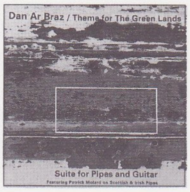
DAN AR BRAZ
Songs
CD/Keltia Musique KMCD 14 '90年

ここ数作続いたニュー・エイジ=インスト路線から一転、何を思ったか全編自身のヴォーカルをフィーチュアしたSSW系アルバムに挑戦しているのが本作である。彼のヴォーカルはMORや初期のソロ作でも聞くことができるが、ややアクが強くドロ臭い印象は拭えなかった。しかしここではブリティッシュ風ののどかさにケルティックなフレーヴァーを混じえたシンプルなバッキングに乗って、スコットランドのDougie Mcleanあたりを思わせる味わい深いシンギングを披露している。Cropredyへの参加を通じて親交の深まったFAIRPORTからDave PeggとMartin Allcockがいかにもというサポートをしており、その関係からかSandy Dennyの〝Rising For The Moon〟がカヴァーされているのが楽しい。　(内田)



DAN AR BRAZ
Borders Of Salt
CD/Keltia Musique KMCD 23 '91年

前作同様のヴォーカル曲集で、継続参加のMartin Allcockに加え(以後彼はDanの重要なパートナー的存在となる)、Haxagone以来久々のパイプ奏者、Patrig Molardが復帰参加している。全編歌物であるが、イギリス風ののどかさに取って替わってケルティック色が強まっており、とりわけ間奏部での鋭角的なギターやウーリアン・パイプの響きは1st以来のテンションを取り戻しているとすら言えるほどだ。デビュー以来のケルティック・スピリットに近年になって身につけたSSWの素養が極めてバランス良くブレンドされた快作。派手さはないがヴォルティジはHexagone時代のそれに互すると断言できる。彼の中心とした上記3名でツアー活動を行い、イギリス、フランスを精力的にサーキットしていたようである。　(内田)



DAN AR BRAZ
Theme For The Green Lands
CD/Keltia Musique KMCD 48 '94年

傑作。再びオール・インスト・アルバムとなっているが、「Borders Of Salt」で甦りつつあった彼の「ケルト魂」が一気に爆発し、あの1stソロに勝るとも劣らぬ恐ろしくポテンシャルの高い作品となっている。レギュラー・メンバーのAllcockとMolardに加え、ドラムスにGerry Conwayが参加、極限とも言うべきピュアリティにロックのパワーが加味されて筆舌に尽くし難い音絵巻が織りなされている。トラッドの粋を超過した「芸術昇華」的な色合いが濃く、近年ではAndrew Cronshawの諸作、Dougie Mcleanの「Marching Mystery」、Ric Sandersの「Neither Time Or Distance」と並び称されるべき力作といえよう。1st収録曲を2曲ほどリアレンジして演奏しているが、仲々の好アレンジで焼き直しという感じはしない。　(内田)

TRAD Others



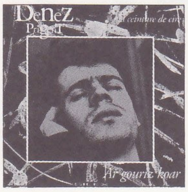
ARNAUD MAISONNEUVE
Eur Zon Hervez Ma Zantimant
CD/Ocora C559 082 '89年

ブルターニュ西部の歌。「中部」を唄うエリック・マルシャンに比べ、地域差か個人差かは定かでないが、張り詰めた硬さが薄らぎ、代わりにより深い哀愁をたたえている。やはり本来無伴奏で唄われていたであろう歌は、ここで曲により、スライド・ギター（曲の落ち込んだブルージーな雰囲気と見事に調和している）、バクパイプ、クラリネット、ヴァイオリン等に伴われており、またコーラスとの掛け合いをも含む。声の調子は感情の高まりを抑え、明らかに平坦さを目指しており、その平坦さが鏡となって様々な悲劇（難破や沈没等）を淡々と映し出していく。なお、ブルターニュ伝承歌の入門編としては、このメゾヌーヴも参加している「Voix De Bretagne」(Le Quartz Brest RSCD 205)をお薦めしたい。 （福島）



COMPAGNIE CHEZ BOUSCA
Chants De Quête De La Période De Pâques
CD/Ocora C 559 085 '89年

オーベルニュやリムーザン等の中部フランスの伝承音楽を演ずるvielles à roue, bagpipe, acc, cl, vlnの5人組。北仏ブルターニュの張り詰めた硬さや、南仏オクシタニーのおおらかなうねりに比肩し得る発声・唱法上の個性こそ目立たぬものの、このグループは構成／展開に優れ、本作ではいずれもイースターに題材を得た長尺の組曲を、滑らかな場面転換により弛緩なく演じ切っている。冒頭ブルローラーの無気味な唸りの中にうつむいたデュエットが現れ、次いで朗々たる声が立ち上がり、鋭利なvlnに伴われ次第に声部を増す。柔和な木管のソロはaccの満ち潮に沈み、再び現れた声をよそに、vielles à roue, vlnが加わって、潮の揺らめきは深さを増していく…。他には「Ethnograffiti」(SILEX Y225009 '91年)等。 （福島）



DENEZ PRIGENT
Ar Gouriz Koar
CD/Silex Y225022 '93年

ブルターニュの歌の中で、彼が歌うのはKan Ha Diskanと呼ばれる踊るための歌（歌詞は風刺的）と、GWERZ（同名のグループあり。別項参照）と呼ばれる無伴奏で唄われる詩である。後者は悲劇的事件すなわち戦争や殺人、破船等を題材としており、死が頻繁に描き出される。実際彼の歌は重苦しく張り詰めた悲壮さに満ちており、それは曲調からばかりでなく、喉声の多用／ノン・ヴィブラートという唱法そのものから来ている。空気の重さに小刻みに震えながら、痛々しい程の強度に満ちた持続が、緩やかに頭をもたげ、哀しげに辺りを眺め渡す。とりわけ冒頭曲において、背後に薄く薄く広がるドローンや一瞬きらめくケルティック・ハープの爪弾きは、ぞっとするような冷気を部屋へともたらす。 （福島）



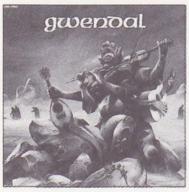
ERIK MARCHAND & THIERRY ROBIN
An Heñchoú Treuz
CD/Ocora C559 084 '90年

副題の通り「ブルターニュ中部の歌」。本来無伴奏で歌われるのだが（器楽曲は別途演奏される）、マルシャン（ジャケット写真左手前）は、ギター、リュート、ウード、ブズーキ奏者ロビン（同右奥。ソロ名義の「Gitans」SILEX Y225034あり）とのデュオのほか、さらにタブラ奏者を加えたトリオ（「An Tri Breur」SILEX Y225008）やGWERZ（別項参照）でも活動している。唱法は例の鼻にかかった甲高いもので、デュエットなど回転数が違うのではと思うくらいヴィブラートが速い。本作のリュート伴奏は音色、フレーズともアラブの風を色濃く感じさせ、他にタブラ、ヴァイオリン、クラリネット（マルシャン自身と共にクインテット・クラリネッツを組んでいるミシェル・オーモン）等が参加。 （福島）



GWENDAL
Gwendal
LP/Pathé Marconi 2C06412725
'74年
CD/EMI 2519752

フランスとアフリカの関係を考えれば、フランスがワールド・ミュージックの中継地の一つとなっていること、それ以前にも民族音楽的な手法を取り入れた作品が目についたことは充分納得がいく。この素朴ながら愛らしいジャケットに包まれたGWENDALのファースト・アルバムに関して言えば、女性的な線の細さが先に立ち、土着性や民族性はさほど感じさせない。全曲インストで、アイルランドや英国のトラッドを取り上げ、一聴アイリッシュでも通りそうだ。fiddle、g、fl/bombarde（ブルターニュの小型管楽器）/sax、perc & mand、bの5人組で、トラッドには珍しいサックスがふとジャズや中近東の面影を微かに垣間見せる。やはり微かな夢見を伴いながら流れるように奏されるジグやエアーが心地好い。 （高山）



GWENDAL
Gwendal
LP/Pathé Marconi 2C064 13075
'75年
CD/EMI 2519752

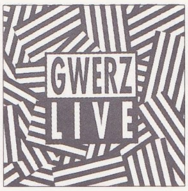
卓越したセンスとテクニックを誇るフレンチ・トラッド・グループの代表格で、創造性に溢れた作品を次々と発表しつつ現在も活動中である。本作は彼らの2作目にあたり、1stと同じくアイルランドのジグやリールといったダンス・チューンを漸新なアレンジで演奏している。初期の彼らは典型的なエレクトリック・トラッドの形態を取っており、キーボード等の装飾楽器は基本的に用いていないが、フルートやフィドルによる攻撃的なアンサンブルやヘヴィなエレクトリック・ベース、ジャズ風の節回しなどは極めて新鮮なインパクトに満ちている。PENTANGLEにも通ずるケルティック・トラッドの「殻破り」を実感しようとしているのだろうか。本作から自作曲も演奏するようになり、独創性も増した。 （内田）

GWENDAL
Glen River
L P/Tempo Maker 34500-1 '90年
CD/Tempo Maker 34500-2



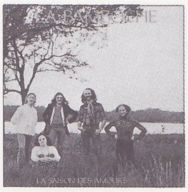
ユーロ・ロック屈指の一枚。トラッドというと、メリハリがなく単調で、メロディ・ラインに引かれるものがなければ聴いていられない、そんな先入観をお持ちの方も実は多いだろう。ところが本作は、ロックのダイナミズム、疾走感、叙情性と攻撃性を見事に消化し、そしてなおトラッドなのである。メタル・バンドがギターとバグパイプでツイン・リードをやったような７曲目、フュージョン・バンドがトラッドを演奏したかの10曲目、走り回りたくなってしまうような楽しさの９曲目、しっとりとして落涙を迫るかのごとき４曲目……。本作の中に１曲として愛聴曲が生まれないリスナーというのは、筆者には想像し難い。なお、本バンドはEMI系のPathé Marconiレーベルにも相当数のマテリアルを残している。 （ミワ）

GWERZ
Live !
CD/Gmerz Pladenn GWP 001 '93年



エリック・マルシャンがヴォーカリストを努めるブルターニュ音楽演奏グループ。vo, g, vln, bagpipe, uillean pipeから成る本来の５人組（当然持替えあり）に、おそらくライヴ要員としてb & percが加わって、重心が下がったうえに音の厚みを増し、より疾走感にみなぎっている。息の長い入り組んだラインのリフが高速ユニゾンで駆け巡り（例えばヴァイオリンとバグパイプ）、ヴォーカルの超高速ヴィブラートと絡んだかと思うと、超絶技巧のソロに突入し、またヴォーカルが戻ってくると、今度は対位法的に自由自在に動き回る。作編曲を見るとジャッキー・モラール（vln）がリーダー格のようだ。これ以前には「Au Delà…」（ESCALIBUR CD821）があるが、繊細な分やや神経質に感じられるかもしれない。 （福島）

LA BAMBOCHE
La Saison Des Amours
L P/Ballon Noir BAL 13007 '78年



LA BAMBOCHEには５枚のアルバムがある。Hexagon時代の初期３枚は相当土臭いトラッドだったが、この４枚目になると女性ヴォーカリストを加え、ロック・アレンジが強まり、聴きやすく整理された印象がある。よりマリコルヌに近づいたと言えば、乱暴な言い方だとは思うが、印象が伝わるだろう。しかし、ロック・ドラムにギターまでリフで合わせてしまった部分よりも、アコースティック楽器を響かせパイプが鳴り、そして女性ヴォーカルが歌う時のメロディー漂う部分こそが、このアルバムの好ポイントである。LA BAMBOCHEはこの後「Née De La Lune」を'80年にリリースした。こちらは一拠にコンテンポラリーになってしまったが、出来は４作目よりもいいかもしれない。 （松本）

MACHIN
Moi, Je Suis Un Folkeux
L P/Festival FLD 668



IRISのメンバーであったCarbonare兄弟は、グループ解散後Alan Stivellとの活動をきっかけにProgressive Folkに傾倒しMACHIN（マシャン）を結成、３枚のオリジナル・アルバムとベスト・アルバム１枚を残している。内容的にはどのアルバムも大差は無く、MALICORNEタイプのナンバー（約半数はTradナンバー）と古楽器（特にプサルテリオン）が印象的なルネサンス調フォーク・ナンバーに大別される。特に本作では後者のナンバーにロック色が加わり、後のWURTEMBERGサウンドの原形と言える音作りになっている。グループ解散後、Alain CarbonareはWURTEMBERGを結成し、本作を発展させた素晴らしいアルバムを１枚残している。 （中島洋一）

MONT JOIA
Cançons Dei Festas Provençalas
L P/Le Chant Du Monde LDX 74668 '78年

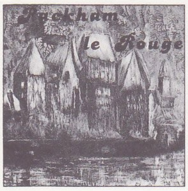


'93年にSilexからソロ作品「Pachiqueli Ven De Nuech」（Y225034）を発表したJan-Maria Carlotti（vo, g）を中心とするトリオ。彼の演奏するサズ、カーヌーン、ギター、プサルテリーに加え、ヴァイオリン、レベック、マンドリン、各種打楽器等による多彩な音色と躍動感溢れるサウンドが、感情の高まりのまま自在にテンポを揺れ動かしながら、タイトル通りにプロヴァンス地方の祭り風景を描き出していく（街頭のざわめきが、時折曲間に挿入され効果を上げている）。音色・リズムに顕著なトルコ風味は、彼らの意匠ではなく、南仏音楽が属する地中海文化自体が、トルコ文化の多大な影響を受けている現れである。この後にBachas Mont Joia名義で「Littorales」（ARION）を発表している。 （福島）

PIERRE BENSUSAN
Solilaï
L P/Claddagh CCF 8 '81年



プログレ有名人多数参加の「２」や、ウィンダム・ヒルがブームとなった際の同類扱い（本作と「Musique」からの編集盤が「郷愁のラヴ・ソング」（笑）のタイトルで国内発売された）のせいもあって、なかなか全体像が定まらない彼だが、フレンチ・トラッドに根差しながら（彼はアルジェリア生まれ）、よりワールド・ワイドなエスニック・ミュージックを探求するギタリスト／シンガーと言ってよいだろう。ここではディディエ・マレルブ（ss, fl, recorder）を一部ゲストに迎えて、トラッド～エスニック指向と、エレクトリック・ギターを含めた演奏のモダンな洗練とをうまくバランスさせている。イヴァン・ラントシュがハンガリアン・バグパイプで参加（１曲のみ）した表題曲が本作のハイライト。 （福島）



RACKHAM LE ROUGE
Rackham Le Rouge
LP/R8201　'82年

Angers出身のグループRackham Le Rougeは、1982年5月に唯一の作品と思われる本作をリリースしている。基本的にはフォーク・ロック・グループと思われるが、シャンソンからの影響も強い。ただ、Progressive Folkと呼ばれるグループ達とは異なり、トラッドの影響は希薄である。アコースティック・ギターを中心とした哀愁を感じさせる音作りは、いかにもフランスと言った趣があり、個人的には気に入っているが、ロック色の強い部分でのアンサンブルに多少難があり、そこが好き嫌いを分けてしまうかも知れない。グループは1982年10月26日にデビュー・ライヴを行い、その後の活躍が期待されたが、現在に至るまで2ndアルバムの噂は聴かれていない。（中島洋一）



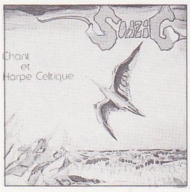
RENAT JURIE
Entre La Rivieira Et La Mer
CD/Silex Y225025　'93年

しなやかな勁さを秘めた野太い声が、雄大な地中海のうねりをゆっくりと渡っていく。南仏ガスコーニュ地方やアヴェロン県の伝承歌、特に婚礼歌、糸紡ぎや作物の刈り入れをしながら唄う作業歌等の生活に密着した歌を採り挙げており、アレンジも声が自在に動けるスペースを残しながら、ヴィエル・ア・ルーとバグパイプが編み上げるドローンの豊かな内声のざわめき、撥弦楽器のさわりを活かした陰影濃い音色、声とその背後に寄り添うバグパイプのつくりだす空間の奥行き、空間を鋭く切り裂き、あるいは立ちのぼる霧で満たす横笛、⑨に現れるブルローラーによる風切り音（超低音の唸り）…と、全く素晴らしい限り。充実作揃いのSilexだが、歌物では北のDenez Prigentと南の本作を第一に推したい。（福島）



ROSINA DE PEIRA E MARTINA
Ie
LP/Revolum REV 039　80年代中期

南仏のプロヴァンス地方で活躍するこの女性デュオは'80年代に数枚の作品を発表している。現地の非公用語オック語のトラッド・ソングを、非アカデミックな立場から過激で斬新なアレンジを施して聞かせるというのが基本スタイルである。作を追うごとにラジカルさを増し、4作目の「Trobadors」はヒステリックさが頂点を極めるが、聞き易さでいったら3作目の本作だろう。アレンジの凝り具合と楽曲の素晴らしさ、志の気高さのバランスが良い。そしてご両人の歌声、鋼のようにパワフルなMartina、海より深いRosina、共に超A級の歌い手だ。その存在の意味は'80年代でもっとも重要な一つであったと断言したい。特に現在の世界情勢を見ると。こんな字数じゃ語り尽くせんわい。（川辺）



SOAZIG
Chant Et Harpe Celtique
LP/Carrere CA 641 67569　'80年
CD/キング 280E 52062

「歌とケルティック・ハープ」というシンプルなタイトル。邦題は「ブルターニュの調べ」と付けられていた。それらから分かる通り、ブルターニュの女性シンガー/ハーピスト、ソアジグによるケルティック・ハープの弾き語り。英語2曲、フランス語1曲、そしてインストを除けば、他はゲール語で歌われている。やはりキングやMSIより国内盤の出たスコットランドのハープ・デュオSILEAS辺りと比べると、洗練度は幾分薄く、土地の素朴さが匂い立ち、詩も革命歌等、ケルト民族の意織高揚や誇りを直截に歌ったものが多い。しかし透明感のある歌声とハープの響きは、本来のメッセージ性は別としても、充分に今日のケルト音楽愛好家の耳を魅きつけるだろう。ハープの飛翔する翼に乗って心は彼方の地へと。（高山）



TRI YANN
Urba
LP/Marzelle 9199 917　'78年

鳥の声、遠くで鳴り響く教会の鐘、通り過ぎる馬車、そこにクルムホルンによる中世音楽がかぶさって描き上げた古き佳き幻想を、自ら打ち破るように、轟くベース・リフを軸としたロック・サウンドが飛び出す。いわゆるトラッド・ロック（ブルターニュ系？）だが、バグパイプやダルシマー、プサルテリオンの活用、ストリングスの導入、硬めのコーラスと奥まったオルガンによる空間の提示などの工夫は買える。既に活動してたマリコルヌに比べ格調でやや劣るが、プログレ的な凝り性と節操のなさが、逆に彼らのパワーを表してもいよう。終曲は冒頭曲がロック化されて再出し、それを交通騒音が掻き消す（教会の鐘の音のみ変わらない）という、これまたプログレ的演出で、表題通り都市化を告発して見せる。（福島）



VERI FLORIS
La Folie De Malataverne
LP/Parsifal 4000/561　？年

トラッドというより生気みなぎる中世民衆音楽そのものであり、むしろ慧眼にも「ジャーマン集成」で採り挙げられていたベーレン・ゲスリンあたりに近い。6人編成の内訳はギター、ブズーキ等撥弦楽器2名、ヴァイオリン2名、フルート、リコーダー、シャルメイ、クルムホルン等管楽器1名、ダルシマー、ヴィエル・ア・ルー、クルムホルン1名で、うち3名がヴォーカルを取る。なお本作はフランドル地方の音楽を題材にしているが、彼の地は現在のフランスとベルギーにまたがる文化先進地域であり、冒頭曲の作曲者ギョーム・ド・マショーもルクセンブルグ大公の秘書をふりだしにフランスを含む各地を遍歴している。実際聴いてみれば「これは確かマリコルヌの◯枚目に…」となること請合い。掛け値無しの大傑作！（福島）

BACKNUMBER

●掲載以外の号は売切れです。
●送料は一冊のみの場合310円、2・3冊は380円、4冊は450円、5・6冊は520円、7冊は590円、8冊は660円です。
●お近くの書店・レコード店でお求めになれない場合は、定期購読をお勧めします。
一年分(6冊)の購読料9,060円(送料込)を現金書留、郵便為替、郵便振替(00170-7-27224：マーキームーン社)にて御送金ください。
●送金後2週間以内に本が届かない場合は御連絡ください。(Tel.03-3954-2055)

マーキーの別冊　発売中！



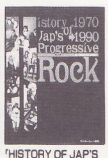
ユーロ・ロック集成②「ジャーマン・ロック集成」
税込定価￥3.600
送料￥380



ユーロ・ロック集成①「イタリアン・ロック集成」
税込定価￥4000
送料￥380



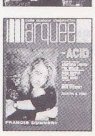
「ブリティッシュ・ロック集成」
＊遂に増刷出来！
税込定価￥3600
送料￥380



「HISTORY OF JAP'S PROGRESSIVE ROCK 1970-1990」
ヌメロ・ウエノ著
税込定価￥3600　送料￥380



037 ￥1,200
特集：'91アーティスト・カタログ/オール・アバウト・イヴ/デイヴ・スチュワート/キャラヴァン/ソーニャ・クリスティナ/アニー・ハズラム/バーバラ・ガスキン/アーバン・サックス/アフター・ディナー/ジョン・ゾーン



038 ￥1,200
特集：アシッド[ヨーロピアン&アメリカン・アシッド・カタログ、サイバー・パンク他]/フランシス・ダナリー/アンビシャス・ラヴァーズ/フィル・ミラー/ヒュー・ホッパー/アンディ・ワード/アース&ファイアー



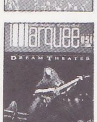
047 ￥1,200
特集：シンフォニック・ロック最前線[後編：日本、アメリカ大陸/センス・オヴ・ワンダー/ページェント他]/アングラガルド/イシルドゥルス・バーネ/アモン・デュール/パスカル・コムラード/ペンタングル



048 ￥1,200
特集：マグマ[インタビュー、レビュー多数]/インタビュー[イアン・アンダーソン、ファウスト、マーク・ナウシーフ、ラルフ・ヒューベルト]/マジカル・パワー・マコ/カンタベリー・ファイルズ：クリス・カトラー/ザ・バダック他



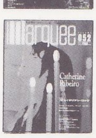
049 ￥1,200
PROGRESSION：音楽の行動[金子飛鳥、大友良英、GHOST、TIPOGRAPHICA、BONDAGE FRUITS]/ユーロピアン・ロック・コレクション・アンコール/ヴォイスプリント・レーベル/フォーカス/ベルナール・パガノッティ



050 ￥1,200
ライヴ・リポート[マドレデウス/ドリーム・シアター/ヴィエナ]/インタビュー[ドリーム・シアター]/チャールズ・ヘイワード/マフィンズ/美狂乱/サムラ・ママス・マンナ/カルメン/シルヴィアン&フリップ



051 ￥1,200
特集：STEP ACROSS THE BORDER[Cuneiformレーベルの概要と主要アーティスト]/ロバート・フリップ・インタビュー/ライヴ・リート[ザバダック、ジェスロ・タル、フレアーク、リシャール・ピナス]/バンコ/エニッド/エニワンズ・ドーター



052 ￥1,200
特集：70'sイタリアン・ロック[イタリアン・ロック集成補追/インタビュー：A・ソレンティ、A・ラディウス]/ラッシュ/ペンドラゴン/カトリーヌ・リベロ/CMP/BACKGROUNDレーベル/古舘徹夫/山塚アイ



053 ￥1,200
特集：STEP ACROSS THE BORDER[ニューヨーク、ニッティング・ファクトリー周辺]/サグラド/ヴィジブル・ウィンド/マリリオン/アンジュ/ギリシャの音楽/金子飛鳥/佐藤通弘/デヴィッド・トーン



054 ￥1,200
特集：PINK FLOYD/ピーター・ガブリエル/平沢進/センス・オヴ・ワンダー/ゴールデン・アヴァンギャルド/POU FOU/ジョン・ローズ/ジョン・エスリッジ/スティーヴ・ハケット/GOLDEN BOUGH他



055 ￥1,200
PICNIC SPECIAL/ピンク・フロイド/シェラザード/ジョン・エスリッジ②/カヤック/プロビデンス/AUSIA/吉田達也/アルタード・ステイツ/ブリティッシュ・フォーク女性ヴォーカル/ケンソー/メコン・デルタ



056 ￥1,200
キング・クリムゾン[R.フリップ・インタビュー]/マリリオン/フィッシュ/新月/ステップ・アクロス・ザ・ボーダー5[コンヴェンタムとその周辺]/デヴィッド・クロス・インタビュー/クリス・カトラー/ベッカ・ボーヨラ/他

BELLE ANTIQUE
404, SY Bld
3-15-18 Shimo-Ochiai
Shinjuku-ku Tokyo 161
JAPAN 03-954-2055

NEW RELEASES IN NOVEMBER / DECEMBER

TO FOREIGN MUSICIANS & DISTRIBUTORS.
WE ARE SPECIALISTS OF PROGRESSIVE ROCK. PLEASE SEND US YOUR UNKNOWN MATERIALS. WE MAY INTRODUCE THEM IN JAPAN. WE ARE LOOKING FORWARD TO YOUR CONTACT. THANKS.

ダダ DADA
城壁 ースペシャル・イシューVol.1ー Castle Wall



BELLE ANTIQUE 9481
¥2,910(税抜価格)
12月5日発売

時は'70年代。潜伏した闇のエナジーがはじけ飛ぶかの地に於いて、カリスマの泉と飢餓同盟の小西の2人によって結成されたダダは2人のインスピレーションの呼応により自由なセッションを通してカリスマティックな音空間を演出して話題となっていました。この作品は彼等の全盛期のスタジオ・テイク(全て未発表)からセレクトされた正に幻の、そして真のダダのサウンドを今に伝えることのできる作品としてここにアルバム化されました。「城壁」は'79年、ダダが精力的にライヴ活動を行なっていた時期に制作され、当時カセット作品としてライヴで販売されていた幻の作品。その他の曲もこの時期からキングよりのデビュウ作の時期に制作された作品。エルドン/リシャール・ピナスにも通じる手法とさらには日本のアンダーグラウンド・シーンの持つエネルギー感。あの伝説のダダのサウンドが時を越え、今、ここに甦ります。

新月 SHINGETSU
科学の夜 Kagaku No Yoru



BELLE ANTIQUE 9482
¥2,910(税抜価格)
12月15日発売

「赤い目の鏡」が大好評だった新月。新たなる探索の結果、さらにクォリティーの高いライヴ音源を発見。その中には「赤い目〜」にも収録されなかった曲も混じっています。そして前回時間の関係で収録されなかった名曲「せめて今宵は」。加えてスタジオ・テイクの未発表音源等も調査中。というわけで、アトラクティヴな新月ファミリーの未発表音源をセレクトした本作品はファンには素晴らしいクリスマス・プレゼントとなることでしょう。日本的な感性と緻密な曲構成が調和した新月は、古典でありながら、尚、孤高の存在としてファンの意識の中に君臨しています。本作品のセールス如何によっては再結成もありえる?という説もあります。御期待下さい//(尚、55号の広告中、ジャケットがこのアルバムと同じになっておりますが、「赤い目の鏡」のほうはジャケットが変更されていますので御買い求めの際は御注意下さい)

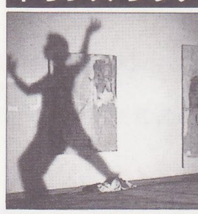
イル・ベルリオーネ IL BERLIONE
453分間料理地獄 In 453 Minutes Infernal Cooking



BELLE ANTIQUE 9483
¥2,910(税抜価格)
12月15日発売

'92年にファースト・アルバムをリリースした日本のチェンバー・タイプのプログレッシヴ・ロック・グループ、イル・ベルリオーネ。センセイショナルなあのデビュウ作は日本国内ばかりでなくアメリカやヨーロッパでも大きな話題となりました。あれから2年。彼等はさらにスケール・アップし、約半年に渡るレコーディングを行いこのセカンド・アルバムを完成させました。この種をやらせたら日本で右に出るものはいないと評判のベルリオーネが恐ろしい程に進化してしまった姿がここに収められています。緻密な構成力。変拍子の乱舞。そんなスタジオ・ワークをはみ出してしまうライヴ時のパフォーマンスに於けるダイナミズムをも含有してしまったような躍動感。ユーロ・ロック・ファンのみならず、今、日本のアンダーグラウンドで進行している熱き地下水脈の数々をお好みのあなたにも、このベルリオーネのセカンド・アルバムは強くアピールすることでしょう。

マジカル・パワー・マコ MAGICAL POWER MAKO
トランス・レゾナンス Trance Resonance



BELLE ANTIQUE 9484
¥2,910(税抜価格)
12月15日発売

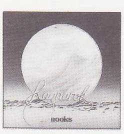
長い沈黙を破り、最近精力的な活動を展開しているマジカル・パワー・マコですが、旧音源のCD化ばかりでなく、新しい活動にも御注目下さい。これは今年6月に東京大学の学食跡にて行なったユニークなライヴ演奏を収録した作品です。フリー・フォームな演奏やプログレッシヴ・ロック的なアプローチが散在するパフォーマンスで、実験的でありながらもどこか心の奥にストレートでまぎれ込んでいくような同化作用があるマジカル・パワー・マコの音楽は、彼の心の奥に流れるロックの血と、本能からほとばしる才能の流れが一体となって唯一無比のアイデンティティーを誇示しています。マジカル・パワー・マコは八幡書店が設立した新レーベルのプロデューサーとして自分の作品を含む20タイトル程を続々と世に送り出す為に現在活動を行なっています。マコの音楽は一体どこへ行こうとしているのか? 今後の動向にも御注目下さい。

速報 ラグラロク/神々の戦い ¥2,920 12月15日完全限定発売
長らく廃盤だったニュージーランドのラグナロクが今回500枚限定で再プレスします。
セバスチャン・ハーディーに肉迫するようなメローで熱いシンフォニック・サウンドです//

好評発売中



イトイス
アルコレア
BELLE ANTIQUE 9485
¥2,350(税抜価格)
※1st/2ndも発売中です。



ラグナロク
神々の戦い
BELLE ANTIQUE 9004
¥2,920(税抜価格)



ミア
魔法の壺
BELLE ANTIQUE 9478
¥2,910(税抜価格)



イル・トロノ・デイ・リコルディ
ウィリアム・ブレイクの幻影
MARQUEE 9480
¥2,500(税抜価格)



ジョセ・シッド
10,000光年の果て
LPサイズ・カヴァーCD
MARQUEE 9452-S
¥3,500(税抜価格)
MARQUEE 9452-N(ノーマル)
¥2,800(税抜価格)



カヤック
マーリン
MARQUEE 9479
¥2,500(税抜価格)

マーキー/ベル・アンティーク・レーベル 好評発売中
＊一部ストック切れのものもあります。御了承下さい。

カタログ・ナンバー	アーティスト/タイトル	税抜価格
1003	ビブリア/天地創造	2,920
8906C	ダイス/北欧の夢	2,920
9010	バナナ/影法師	2,920
9012	スピリット・オヴ・クリスマス/荒野で呼ばわる者の声	2,920
9013	リフト/思考の洞窟	3,200
9115	ナイトウィンズ/ナイトウィンズ	3,200
9016	タウラス/夜明けの歌	3,200
9117	アトランティス・フィルハーモニック/幻の大陸を求めて	2,920
9118	コト・エン・ベル/ホロコースト	3,200
9120	アイン・ソフ/駱駝に乗って(ライヴVol.1)	2,920
9121	ロード/プレイズ・ザ・ロード	2,920
9122	イースター・アイランド/イースター・アイランド	2,920
9223	サラマンダー/組曲"モーゼの十戒"	2,920
9224	スプリング/早春の幻	2,920
9225	ダイス/黙示録の四人の御使い達	2,428
9226	G.A.F.パトリック/北欧組曲	2,920
9227	G.A.F.パトリック/孤独なサーカス	2,920
9228	ロイネ・ストルト/ファンタジア	2,920
9229	イル・ベルリオーネ/イル・ベルリオーネ	2,920
9329	アングラガルド/ザ・シンフォニック組曲	3,200
9330	タウラス/シー・ユー・アゲイン	2,920
9333	スフィンクス/組曲"ザルモクセ"	2,920
9334	SFF/ザ・シンフォニック・スペクタクルズ(2CDs)	4,860
9335	ツィンガーレ/平和への希求	3,800
9336A	アイン・ソフ/過去への扉(ライブ Vol.2)	2,920
9336B	グレイシャス/ディス・イズ	2,920
9337	レコルダンド・オ・ヴァーレ・ダス・マサス/幻想の彼方へ	3,200
9339	美狂乱/風魔(ライヴ Vol.2)	2,920
9340	ダイス/ライヴ	2,920
9341	ツァムラ・マンマス・マンナ/初老の新来者の為に〜(2CDs)	4,854
9342	ツァムラ・マンマス・マンナ/家庭のひび割れ	2,920
9343	美狂乱/乱(ライヴ Vol.3)	2,920
9345	カイパ/セカンド・アルバム	2,800
9449	クェーサー/アウト・フロム・クェーサー	2,920
9450	フィンチ/グローリー・オヴ・ジ・インナー・フォース	2,920
9451	ヴィジターズ/ヴィジターズ	2,800
9452-S	ジョセ・シッド/10,000光年の果て(LPサイズカヴァー)	3,500
9452-N	ジョセ・シッド/10,000光年の果て(ノーマルCD)	2,800
9453	ラ・セコンダ・ジェネシ/終焉の時	3,200
9455	フォン・ツァムラ/ツァムララナンマ	2,920
9456	マンティコア/タイム・トゥ・フライ	2,920
9457	ヘレティック/1984-88	2,920
9458	フロマージュ/オンディーヌ	2,920
9459	フロマージュ/オフェーリア	2,920
9460	マジカル・パワー・マコ/ミュージック・フロム・ヘヴン	2,920
9461	70's ウェスト・ジャパニーズ・ロック・シーン	2,920
9462	オリジナル・アウター・リミッツ/アウターマニア	2,920
9463	ゴールデン・アヴァンギャルド/ゴールデン・アヴァンギャルド	2,910
9464	伝説の彼方〜東京シンフォニック・シンドローム	2,910
9465	ケンソー/空に光る(ライヴ vol.1)	2,910
9466	まどろみ(美狂乱)/ライヴ vol.4)	2,910
9467	ポーレン/極彩色の宇宙	2,200
9468	ボンファイアー/ボンファイアー	2,500
9469	フィンチ/ビヨンド・イクスプレッション	2,500
9472	アイン・ソフ/クイック・サンド	2,910
9473	新月/赤い目の鏡(ライヴ)	2,910
9474	新月/新月	2,910
9475	フィンチ/ガレオンズ・オヴ・パッション	2,500
9476	ミア/クリスタルの海	2,910
9477	ミア/不思議な時の炎	2,910
9478	ミア/魔法の壺	2,910
9479	カヤック/マーリン	2,500
9480	イル・トロノ・デイ・リコルディ/ウィリアム・ブレイクの幻影	2,500

ベル・アンティーク 商品販売店大募集//

マーキー/ベル・アンティークではできるだけ多くのファンの方に素晴らしい作品をお届けできるよう、販売店を募集しています。輸入盤店/国内盤店を問わず、御連絡下さい。月、2〜3度卸売りのリストを発行しています。この中には、上記のアイテム以外にも、直輸入盤等も扱っております。

〒161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
マーキー/ベル・アンティーク
TEL.03-3954-2055 FAX.03-3954-9563

主要販売店リスト
＊マーキー/ベル・アンティークの商品は以下の主要販売店で入手できます。通販の場合はTELにて在庫確認の上、代金＋送料(1枚なら370円)をマーキー内ベル・アンティーク係までお送り下さい。

〈東京〉
- 新宿レコード 03-3363-3669
- ディスク・ユニオン各店(新宿店) 03-3352-2691
- ピースアイ・レコード 03-3380-7332
- プログレッシヴ・アーティストリー 03-5696-3281
- マザーズ・レコード 03-3461-1134
- ガーデン・シェッド 03-5389-6721
- 山野楽器本店(銀座) 03-5250-1067
- オン・ステージ・ヤマノ 03-3981-4763

〈関東〉
- 足利市 ヴィンテージ・レコーズ 0284-42-7736
- 上尾市 サウンド トラヴェル 048-775-1737
- 千葉市 山野楽器千葉店 043-225-3861
- 川崎市 新星堂

〈東北・北海道〉
- 仙台市 ディスク・ノート 022-222-2837
- 盛岡市 ディスク・ノート 0196-54-1153
- 仙台市 レコード・ギャラリー 022-221-5308
- 札幌市 グルグル 011-271-0166
- 仙台市 グレートミュージック宮町店 022-222-1912

〈関西〉
- 大阪市 ザ・ディスク 06-647-0721
- 大阪市 ディスクイン・なんば店 06-644-2822
- 京都市 パララックス・レコード 075-344-0075
- 神戸市 ハックルベリー 078-332-0766
- 京都市 タワー・レコード京都店 075-212-7058
- 大阪市 バックトリップ・レコード 06-634-1757
- 京都市 コンフォート 075-701-8434
- 大阪市 フォーエヴァー(3) 06-312-1663
- 京都市 ジョーズ・ガレージ 075-722-8530

〈東海・中部・甲信越〉
- 名古屋市 エイト 052-735-0988
- 沼津市 シーザー 0559-62-9070
- 新潟市 ディスク・ガレージ 025-228-5460
- 名古屋市 ディスク・ヘヴン 052-853-3571
- 名古屋市 マスタング・レコード 052-265-0452
- 津市 マザーグース・レコード 0592-25-5884
- 浜松市 ハマラジ 053-448-1133
- 松阪市 村林楽器店 0598-21-1030

〈その他〉
- 岡山市 LPコーナー岡山 0862-31-1145
- 倉敷市 グリーンハウス 0864-21-3108
- 広島市 バックステージ・レコード 082-242-0069
- 徳島市 メロディー 0886-53-5576
- 金沢市 レコード・ジャングル 0762-64-3672
- 那覇市 高良レコード店 098-863-3061

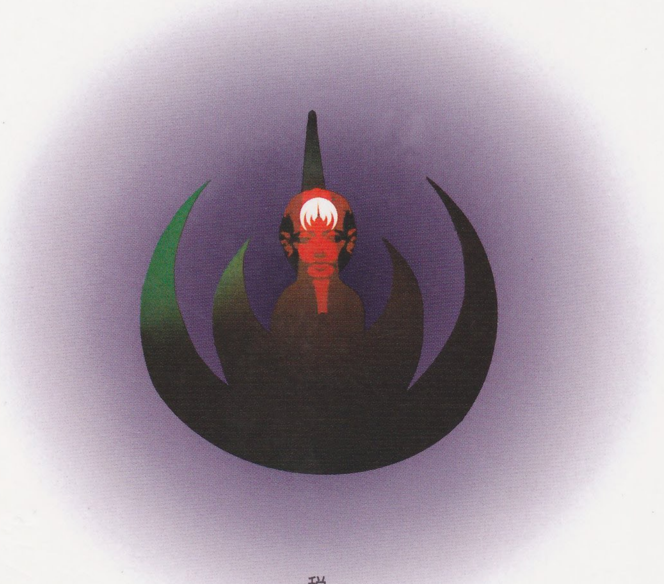
FRENCH



税込定価3600円［本体3495円］

ROCK

FRENCH



税込定価3600円［本体3495円］

ROCK